文學博士井上哲次郎著

訂正增補

日本古學派之哲學　全

東京

合資會社冨山房發兌

日本古學派之哲學序

余明治三十年以來日本從來の哲學を歷史的に敍述し、以て之れを今後の哲學と系統的連絡あらしめんと欲し、先づ「日本陽明學派之哲學」を著はし、明治三十三年を以て之れを世に公にせり、其後直に山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠等の古學派の系統を攻究し、二星霜を經て、略、稿を脫するに至れり、因りて之れを印刷に付し、以て同好の士に頒たんと欲す、余の此書を作る、聊、微力を盡くせりと思推すと雖も、尙ほ缺點の豫想せざる所に存せんことを恐る、識者若し書を寄せて敎ふる所あらば、必ず他日之れを補正するの勞を辭せざるべし、果して然らば、豈に惟、余が幸といふのみならんや

此書古學派の哲學を叙述するを主とするが故に、肖像を挿入するが如きは、固より其志にあらず、然れども偶然にも素行、仁齋、東涯及び徂徠の肖像を得たり、然るに皆先哲像傳に載する所と同じからず、故に之れを挿入するに至れり、就中素行の肖像は外崎覺氏の寄贈に係り、仁齋と東涯との肖像は伯爵松平直亮氏の贈與に係り、徂徠の肖像は大槻文彦氏所藏の畵による、仁齋と東涯との肖像は、蓋し堀川門人の描寫する所にして、徂徠の肖像は平世胤(即ち鏑木梅溪)の手に成るものなり、今外崎松平二氏の好意を謝し、又大槻氏の其所藏の畵によることを聽許せられたるを謝す、

印刷已に成るに及んで、尙ほ増訂すべきもの、少からざ

るを覺ゆ、然れども自己の滿足を得るまでに、之れを修正せんことは、一朝一夕の業にあらず、故に姑く稿本のまゝ、之れを發行し、僅に學界の缺陷を充たすを以て自ら慰藉する所あらんとす、若し夫れ落葉と一般なる魯魚の誤の如きは、從つて掃へば從つて存す、未だ掃ひ得ざる者あらば、そは他日を竢ちて一掃するを期せんのみ、

明治三十五年八月十九日

井上哲次郎識

顏之推曰、人生難得、勿空過、斯言有旨哉、蓋羣生之中、爲人爲難、且不能再生、豈可空過此生乎、可惜醉生夢死、枉過一生也、苟爲人而不能聞人道、雖長生不死、爲空過、然則爲人則須要聞道、聞道之工夫、又唯在于能學而已矣、

貝原益軒

日本古學派之哲學三版序

儒教は應仁天皇十六年即ち紀元二百八十五年を以て我邦に輸入せられ、平安朝時代に至りて頗る旺盛となり、菅江二氏の如きは儒教を以て家を成し、其門下濟々たる多士を出だせり、然れども當時强大なる勢力を以て人心を支配せしものは、寧ろ佛教にして、儒教は無精神沒趣味の訓詁學を繼承せるに過ぎざるを以て、未だ何等の活氣をも有すること能はざりき、降りて戰國時代に至りて、朱子學始めて僧侶によりて輸入せられ、德川時代の初めに至りて、頓に勃興の徵を現はせり、既にして陽明學亦其源泉を江西に發し、朱子學と相對して一種異樣の光彩を放てり、是に至りて儒教は復た平安

朝時代のそれの如くに無精神沒趣味のものにあらずして、隱然一大勢力となり、人心を竦動し、風氣を刷新し、眞に六十餘州を席卷して起るの概なしとせざるなり、儒教は如何にして此の如き活氣を帶び來れるか、儒教は曾て一たび大に隋唐の間に鬱屈せるも、亦遂に其反動として宋に至りて盛況を呈せり、宋の儒教は佛教の壓迫を排し、積極的に其主義を構成せんと欲し、爲めに炎々たる活氣を生じ來たれり、其餘勢の延ひて我邦に及べるもの、是れを當時の朱子學及び陽明學となす、然りと雖も宋の儒教は佛教の壓迫を排しながら、尚ほ竊に之れに資する所多く、復た洙泗の眞面目を存すといふを得ず、是を以て山鹿素行、伊藤仁齋及び物徂徠の徒、

洙泗の眞面目、反りて宋儒の爲めに蔽はれ、古聖人の道、復た世に明かならざるを慨し、奮然筆を呵して呼號し、其壓迫を排し、洙泗の眞面目を發揮せんと欲せり、是を以て其活氣炎々たるものありき、是れを我邦の古學派となす、古學派は平安朝の儒學と同じく洙泗の淵源に溯るを期するものなりと雖も、然れども宋儒壓迫の後に出でたるを以て自ら之れと其面目を異にし、宋儒の理論と頡頏する底の主張を要せり、是れ古學派が平安朝の儒學の無精神沒趣味なるに反し、實に目醒ましき態度を取り、各ゝ其學問の本領を明かにし、能く一代を振撼するの勢力を有せし所以なり、朱子學派は朱子を尊崇し、陽明學派は陽明を尊崇せし時代に於て古學派

は是等支那後世の儒者を尊崇せず、更に其理想を高尚にして、直に蹤を孔子其人に接せんことを期せり、其事たるシャンカラーチャーリアが佛教を斥攘して婆羅門教を再興し、新カント學派がヘーゲル以後に於てカントに復歸せんとし、ハッチ及びハルナック諸氏が後世の神學を排抵して原始基督教に溯回せんとするとき差〻相似たり、之れを要するに、古學派の史的研究は種々なる方面に於て趣味多き結果を生ずること少しとせざるなり、苟も精神上の學に志あるもの、豈に之れを度外視して可ならんや、余昨年九月を以て此書を發行せしに、初版已に盡き、再版又盡き、今又更に三版を發行せんとす、因りて卷末に補正を付し、以て初版の缺漏を補

充し、又卷端に其所感を述べて以てこれが序となす、

明治三十六年八月三日

井上哲次郎識

若し余がそれを余が言語によりて說明し能はずとせば、余が動作はそれを十分に發表す、汝は言語よりも寧ろ動作の信ずべき價値あるを思はざるか。

ソクラーテス

日本古學派之哲學

目次

日本古學派之哲學

文學博士　井上哲次郎　著

叙論

鎌倉時代より海內漸く戰爭多く、殊に元弘建武の頃より全く亂世となり、滔々たる天下唯〻武事あるを知りて、復た文事あるを知らず、一世文學の權を擧げて悉く之れを五山僧徒の手に委するに至れり、今其狀を想見するに、西洋の暗黑時代と彷彿たるものなしとせざるなり、然るに德川氏に至りて積年の兵亂、全く靜謐に歸し、機運一轉、忽ち文學の復興卽ち「ルネッサンス」を催進せり、是に於てか儒敎を講ずるもの、陸續輩出し、朱子學と陽明學とは、各〻一派を成すに至れり、斯時に當りて別に旗幟を飜して、新に一派を開き俄然一異彩を放つもの起れり、是れ他なし、古學派

是れなり、文學復興は久しく荒廢せられたる文學の趣味が再び喚起せられたるものなれども、其趨勢は單に繼承的に止まるものにあらず、文學の趣味が再び喚起せられたる以上は是れより一轉して更に進歩せる生面を開くべきは、蓋し必然の結果ならん、所謂古學派は即ち此の如き必然の結果として起りしものなること疑なし、何故なれば、古學は古代の學に復歸することを企圖するが故に、少しも生面を開くべき創見にあらざるが如きも、其實は決して然らず、若し古代の學の是正なるに引き換へ、後世の學の甚しき謬見に陷れることあらば、後世の學の謬見を看破して直に蹤を古代の學に接するの要を唱道することも是れ新に生面を開くものにあらずして何ぞや、古學は如字的に古代の學なりと雖も、亦一方より之れを見れば新學ともいふを得べし、宋學以來世の學者、朱子を奉ぜざれば陽明を奉じ、二氏の見解の外に出づるものなきの秋に當り、大膽にも其謬見を喝破して起れるものは支那人にあらずして日本人なりき、先づ朱子學の圏套を脱して超然として古學に歸せし

は山鹿素行と伊藤仁齋となり、二氏の見解、期せずして暗合し、殆んど同時に洙泗の淵源に溯るの要を看破せり、然れども素行先づ其學說を發表し、仁齋之れに次ぐ、故に歷史上の順序も亦之れに由らざるを得ざるなり、但素行の出版せる著書は幕府の爲めに滅版せらる、故に多く世に傳はらず、隨つて又殆んど素行の古學派たるを知る者なきに至れり、之れに反して仁齋の著書は其死後に及んで、大抵皆上木せられ、廣く世に傳播せり、故に其影響する所も亦淺少なりとせず、是を以て世の古學派を論ずるもの、復た素行を言はず、獨り仁齋を以て其鼻祖となせり、物徂徠の如きも、言素行の古學に及ばず、苟も古學を論ずれば、仁齋を云爲す、是れ仁齋の著書によりて刺激せられ、遂に古學に轉じたればなり、要するに、素行と仁齋と徂徠と、此三人は古學派の代表者として最も卓絕せるものなり、然れども自ら三人三樣の趣あり、是れ其均しく古學を標榜しながら、合して一とならざる所以なり、三人三樣の趣とは、素行は兵學者にして儒學を攻究し、儒學と兵學とを打ちて一丸となすの趣あり、仁

齋は君子の態度を取り專ら個人的道徳の實行を期するの趣あり而して徂徠は主として功利主義を主張し文學者と政治家の資格を具有するの趣あり是故に此三人は古學派中にありて又自ら三派を成せり獨り素行は其古學に關する學說を祖述するもの少きを以て未だ仁齋徂徠の如く强大なる古學派を成すに至らざるのみ古學派は素行といはず仁齋といはず徂徠といはず皆均しく活動主義を主張して宋儒の寂靜主義に反抗せり是れ蓋し日本民族特有の精神にして此點に於ては今日と雖も寸毫も異なる所あるにあらざるなり今日の學理に照して之れを考ふれば古學派の學說の如き非議すべきの點固より少しとせずと雖も亦後人を警醒するに足るもの往々之れあり殊に日本民族特有の精神の存する所に至りては古今を隔つるに拘はらず靈犀一點相通じ默識心契の際肉躍り血飛ぶの快なしとせざるなり

第一篇　山鹿素行

第一　事蹟

我邦に於て始めて古學を唱道したるものを、山鹿素行とす、素行名は高(イ)祐、初の名は義以、中の名は高興、字は子敬、因山と號し、又堂を曳尾と號し、軒を素行と號す、素行の號、遂に獨り行はる、通稱は甚五左衛門、陸奥會津の人、其先は筑前州(ロ)山鹿(遠賀郡)の人なり、慶長の頃、山鹿六右衛門高道といふものあり、之れを素行の父となす、高道伊勢の龜山城主關長門守一政に仕へ、祿二百石を食む、高道いかなる仔細ありてか同僚の士某を殺し、潜に龜山を出て、奔りて奥州に赴き、會津侯蒲生忠郷に寄寓す、後大夫町田左近と善し、左近邑三萬石を食み、家頗る富饒なり、因りて高道に田祿

(イ)先哲叢談後編には名は高祐、一の名は義矩とあり、高興の名は門人撰ぶ所の語類の序に見ゆ、因山も、近世叢語に隱山に作る、未だ其是非いかんを知らず、―(ロ)近世叢語に東肥の山鹿とするは誤はり、東肥に山鹿と稱する處あれども、筑前にも亦之れあり、語類の序に筑前州山鹿とある以上は其東肥の山鹿にあらざること明かなり、

二百五十石を與へ、其邸に賓たらしめ、且つ侍女を贈りて、其妾たらしむ、是れを素行の母となす、素行は元和八年八月二十六日を以て生まる、即ち木下順庵に後るゝこと一年、熊澤蕃山に後るゝこと三年、山崎闇齋に後るゝこと四年にして恰も藤原惺窩卒後三年に當る、其後幾もなく忠鄕罪ありて國除かれたるを以て左近更に轉じて、幕府に仕へ、百人組の長となる、是に於てか高道を薦めて騎士となさんとせしに、高道之れを辭し、長子の惣左衛門(即ち素行が異母兄)を以て之れに代はらしめ、自ら薙髮して玄庵と號し、醫を江戸に業とせり、是れ實に素行が三歳の時の事なりき、

素行は幼名を佐太郎といひ、江戸榎町濟松寺の祖心尼の許に養はれ、六歳にして始めて塾師に從つて書計を學び、八歳の頃までに四書五經七書詩文の書を大方讀み覺えたり、九歳にして始めて林羅山の門に入る、時に文三郎と稱す、羅山無點の唐本なる論語の序を讀ましめ、次いで又山谷を讀ましむ、素行之れを讀み能はずといふことなし、但訓點は未だ

盡さゝる所あり、十一歳の春始めて歳旦の詩を作る、羅山之れを見て僅に一字を改め、其才を稱揚せり、十四歳の頃は（八）詩文共に成熟し、貴紳の前に於て即座に詩文を作ることあり、其早熟の尋常ならざる、推して知るべきなり、十五歳にして始めて大學を講じ、聽衆頗る多し、十六歳にして、始めて論語を講ぜり、然れども素行は啻に一局部に跼蹐たるを甘んずるが如きものにあらず、當時の學術は悉く之れを修了するにあらざれば、已まざるの概あり、故に其研究は自ら多方面に渉たらざるを得ず、彼れは幼少の時より武藝をも學び、十五歳の時尾畑景憲北條氏長に就いて兵學を修む、從學五年にして諸弟子、其上に出づるものなし、廿一歳の時尾畑氏印可を傳授す、其時印可狀をも與へたり、印可の書は尾畑氏其高弟北條氏長をして書せしむる所なり、印可添狀といふものは、尾畑氏曾て他の印可を傳授せしものに與へしことなかりしといふ、以て素行がいかに尾畑氏に重んぜられたるかを知るべし、右添狀の文に云く、

（八）語類の序には「十歳而詩文殆熟矣」とあり、然れども今配所殘筆による、

於文而感其能勤、於武而歎其能修、噫有文章者、必有武備、古人云、我亦云、

素行又神道を究む、十七歳の冬、高野按察院光宥法印に就いて神道の秘訣を悉く傳授し、其後壯年の頃忌部氏の嫡流たる廣田坦齋に就いて忌部神道の口訣悉く傳授せり、語類の序に「控忌部卜部之奧儀矣」とあり、果して然らば其博く神道の教義に通曉せること、復た疑なきなり、彼れ又十七歳の時より歌學を修め、二十歳の頃までに源氏物語、枕草紙、萬葉集、百人一首、三部三代集等を攻究し了はれり、歌學は彼れ主として廣田坦齋より傳授せるものゝ如し、其他老莊以下諸子百家の學より佛氏の教義に至るまで、大凡そ究明せずといふことなし、簡單に之れを言へば、彼れは當時の學問といふ學問のあらゆる範圍を窺ふことを務めたり、

素行十七歳の時紀伊大納言賴宣卿の招きによりて彼れも七十人扶持にて紀藩に仕へんことを約せり、然るに同時に阿部豐後守忠秋、素行の名聲世に高きを以て、尾幡景憲、北條氏長に託して(二)彼れを聘せんとす、事偶ゝ兩家に係るを以て兩つ

(二)當時幕府の老中たりしもの、老中は即ち執政

ながら果すことを得ず、其翌年加州家より町野長門守によりて祿七百石を以て素行を聘す、素行の父千石ならざる以上は不可なりといひて之れを謝絶す、

正保の頃に至り、素行兵法の名聲愈々高く、諸侯大夫より以下、彼れが門に就いて學ぶもの、極めて多し、就中貴紳を擧ぐれは、北條安房守、松平越中守、(奥州白河城主)淺野因幡守、丹羽左京大夫、(奥州二本松城主)阿部伊勢守、板倉内膳正、松浦紀伊守、(肥前松浦城主)本多備前守等は其高足弟にして彼れを尊信すること實に尋常ならざるものありしといふ、

承應元年素行播州赤穗の城主淺野内匠頭に仕ふ、是れより先き、幕府の近習番駒井左京、同小姓阿部伊勢守、素行に懇請して其門に入り、兵法を學びしが、是れ本と大猷公素行の事を傳聞し、時もあらば、彼れを近臣の列に加へんと思惟し、先づ試に其近臣をして其道を學ばしめんとの意に出でたるなり、素行竊に此内意を知り、諸侯仕官の念を絶ち居りしに、大猷公慶安四年を以て薨ぜられしかば幕府に於ける仕進の望は之れ

が爲めに消滅せり、斯時に當りて淺野内匠頭祿千石を以て素行を聘し、何等の職務もなく唯﹅賓師として之れを優遇し、敢て名いはざりしといふ、承應三年播州赤穗に赴き、八年間此に滯在せり、

萬治三年素行三十九歲、大島雲八によりて秩祿を斷りたき旨申上げゝるに、内匠頭是れを聞き、今まで給する所の祿の少きが爲めにもあらんかと思惟し、秩祿加增のことと其好みに任すべしとて切に致仕の念を飜さんとせしも、素行祿米多少の爲めにあらず、別に思惟する所ありて致仕を願ふ由を述べ、終に其祿を辭せり、其後は全く仕官の念を絕ち、江戶にありて專ら文學兵法の敎授をなせり、

其頃津輕越中守、山口出羽守によりて素行を聘す、且つ傳へしめて曰く「津輕の藩たる、秩祿少しと雖も、土地新に廣田多し、故に秩祿は汝が望に任すべし」と、素行以爲く「越州公倘ほ若年にして、其聘する所、他人の勸に出でたるを以て高祿を貪らんことと我本意にあらず」と、乃ち之れを辭す、素行名聲益﹅高く、殆んど一代を風靡するの槪あり、彼れが門に入りて弟

子の禮を取るもの、實に二千人を超過せり、其身の榮華、想見するに餘りありといふべきなり、然れども老聃がいへる如く、眞に「福兮禍之所伏」にて素行が譽望の揚がるに從つて危難は隱然其身に近づきつゝありしなり、寛文六年十月三日北條安房守より突然左の書束を送り來たれり、云く、

可相尋御用之事候間、早々私宅迄可被參候、以上、

十月三日　　　　北條安房守

山鹿甚五左衞門殿

之れを一讀したる素行の胸中には、忽ち前途に横はれる暗雲の往來せしは言ふまでもなく、此出來事は彼れに取りて眞に「寢耳に水」の感ありしや疑なきなり、然れども一刻も猶豫すべきにあらざれば、彼れ乃ち返書を認めて送れり、其文に云く、

御手紙被成下、謹而奉拜見候、御尋可被成御用之儀御座候間、早々貴宅迄參上可仕之旨、畏奉存候、追付參上可仕候、以上、

十月三日　　　山鹿甚五左衛門判

房州様

素行も竊に事或は聖教要錄に關するあらんと思惟せしも、固より未だ確には之れを知らず、兎に角尋常の事にあらざるべきを豫測し、大に決心する所ありしならん、彼れ自ら詳に其顛末を配所殘筆中に記載せり、今左に其文を擧げん、云く、

食事快く認め候て、行水仕り、定めて只事に有之間敷存じ、乍立遺書相調へ、殘置候、尤も死罪被仰付候はゞ、公儀へ一通差上げ可相果、是れ又た相認め令懷中候、此外五六ヶ所へ小翰相調へ、態と老母方へ不申遣、宗三寺へ參詣仕り、下人成程はぶき、若黨兩人召連れ、馬上にて房州公へ參候、云云門前に人馬多く相見え候、只今何方へか打立候樣子に御座候、此體拙者若し不參候はゞ則ち拙宅へ押寄せ御蹈みつぶし可有之樣子と相見え申候、私事は刀を下人へ渡し、座敷へ上り申候て笑ながら申候は如何の事候哉、御門前殊の外人多く御座候由申候て、奥へ

通り候、暫く候て北條殿被出候て逢申候、北條殿被申候は、不入書物作り候故、淺野内匠頭所へ御預被成候、是れより直に彼地へ可參候間、何にても宿へ用向にても候はゞ可申遣と、別して念頃に被申候、福島傳兵衛硯を持ち候て拙者傍へ參り、申遣度事は、傳兵衛可申候由申候間、私北條殿へ向ひ申候は、忝く奉存候、乍然常々家を出候より跡に心に殘候事は無之樣に、勤罷在候間、書置可申候事も無御座由申候、其内に島田藤十郎殿御出候間、北條殿も座敷へ御列坐候て、私被召出候間、脇指をぬき罷出候へば、北條殿島田殿互に御色代候て、北條殿被仰渡候は、其方事不屆なる書物仕候間、淺野内匠頭へ御預被成候旨、御老中被仰渡候由に候、私申上候は、先以御意の趣畏く奉存候、乍然御公儀樣に對し、不屆なる儀は、右の書物の內何の處にて御座候哉、承度儀に奉存候と、申上候へば、房州御事藤十郎殿も御むかひにて、甚五左衛門申譯も可有之候得共、如斯被仰付候上は、不及申譯候御事と御申候、私申上候は御意の上はとかくを可申樣無之由申罷立候、御步行目付衆兩人

被居申候て、內匠頭家來御呼被仰渡候、御步行日付衆さわがしく被申候故、私笑申候て一禮仕罷出候、此時分作法、殘所無之由、右內匠頭の者共、其晚噂申聞け候、

此の如く素行は直に北條安房守の邸に赴きしに、安房守、目付の島田藤十郎と共に幕府の命を傳へ、不屆なる書物を作りたりとの理由を以て淺野內匠頭に御預になれる事を宣告せり、素行豈に意外の感なからざらんや、彼れ本と羅山に就て學を修めたるが故に初め朱子學を崇奉せしと雖も、年四十の後に至り始めて理氣心性の說に疑あり、乃ち是れより先きに著はす所の經解の書數種を擧げて悉く之れを燒き、寬文六年の春に及んで聖教要錄三卷を著はして、世に刊行す、此書固より瑣々たる小冊子に過ぎずと雖も、漢唐宋明の學を排斥せずといふことなし、殊に宋儒の理學を排斥すること甚しく、遂に「道統之傳、至宋竟泯沒」と絕叫し、直に蹤を孔子に接せんとせり、門人等の撰に係る小序頗る見るべし、其中左の言あり、云く、

聖人沓遠、微言漸く隱る、漢唐宋明の學者、世を誣ひ、惑を累ぬ、中華既に然り、況や本朝をや、先生二千歳の後に勃興し、迹を本朝に垂れ、周公孔子の道を崇び、初めて聖學の綱領を擧ぐ、云云、門人等其說を輯めて篇となし、先生に謁し、請ふて曰く、此書以て秘すべく、以て崇ぶべく、廣く人に示すべからず、且つ漢唐宋明の諸儒を排斥す、是れ天下の學者と違ふ、見るもの、嘲を獻ぜん、先生の曰く噫、小子謀るに足らず、夫れ道は、天下の道なり、懷いて之れを藏むべからず、天下に充て、萬世に行はしむべし、一夫も亦此書によりて、其志を起さば、則ち化育を賛するなり、君子は身を殺して仁を成すあり、何ぞ吾言を秘せんや、且つ道を說いて人を謬るもの、天下の罪人なり、漢唐の訓詁、宋明の理學、各利口饒舌にして惑を辯ぜんと欲す、惑愈深く、聖人をして塗炭に坐せしむ、最も畏るべきなり、聖經世に燦然たり、多言を勞すべからず、云云、後世畏るべし、吾れ何ぞ敢て過なからんや、吾言一たび出でゝ、天下の人、以て告ぐべく、以て毀るべく、以て辯ずべし、其告ぐる、其毀る、其辯ずるを得て

其過を改む、道の大幸なり、云云、予は周公孔子を師として、漢唐宋明の諸儒を師とせず、學は聖教に志して異端に志さず、行は日用を專にして酒落を事とせず、云云、聖人の道は一人の私する所にあらざるなり、如し一人に施すべくして天下に擴むべからざれば、道にあらず、必ず之れを天下に示し後の君子を待つは惟吾志なり、

此れに由りて之れを觀れば、素行が抱負の如何に大なるかを知るべきなり、彼れ漢唐といはず、宋明といはず、總べて後世の儒者が主張する所を以て聖人の正脈を得たるものにあらずして、反りて名教を蠧毒するものなりとし、一切是等を掃蕩し去りて、自ら洙泗の淵源に溯らんとせり、其志や眞に壯なりといふべし、是故に聖教要錄の書たる、當時の人の當に歡迎すべきものなり、然るに何等の癡漢ぞ、是れを稱して不屆なる書物といへり、眞に不屆なる奴輩とこそいふべけれ、然れども事の此に至りし所以のもの、決して二三俗吏の胸中に胚胎せるにあらず、抑〻又潜伏せる原因のあるありて、此の如き事變を生ずるに至りしこと、復た疑

なきなり、

今其原因を尋ぬるに是れ全く學派の衝突にあり、彼れが刊行せる聖教要錄は片々たる小冊子なりと雖も、朱子學派の壘壁に向つて發せられたる恐るべき砲丸なりき、彼れ是れを以て不時の災禍を買へり、思ふに藤原惺窩が一たび朱子學を鼓吹してより紫陽の餘流を汲むもの多く殊に林羅山の如きは幕府に用ひられ、其奉ずる所の朱子學は幕府の教育主義となれり素行本と羅山の門に出づるもの、故に其朱子學を攻擊するは、即ち師說を攻擊するなり、此時羅山已に逝くと雖も、春齋あり、鳳岡あり、羅山の子孫、鬱として學閥を成せり、之れに向つて反抗を敢てす、反對者より之れを見れば、光秀の所爲の如かりしならん、豈に危からずとせんや、且つ夫れ推して之れを論ずれば、羅山に反抗するは、幕府の教育主義に反抗するなり、否、幕府の教育主義を根柢より破壞せんとするものなり、更に眼を轉じて民間を顧れば、當時已に陽明學派ありと雖も、海內の學者、十の八九迄は朱子學派に屬せり、此間に於て素行獨り古學

を鼓吹せんとす、所謂文王を待たずして興るものといふと雖も其狀殆んど一州の兵を懸けて天下に抗するの觀あり其同意者を得ずして一旦否塞に陷るもの、良に故ありといふべし、

然れども尙ほ別に彼れを陷れたる直接の原因あり、是れ他なし、保科正之との軋轢是れなり、正之は二代將軍秀忠の實子にして實に家康の孫なり、彼れ故ありて肥後守保科正光の嗣となり、後、封を會津に移す、三代將軍家光の薨ずるや、其遺託を受け、幼主の家綱を輔佐し、恰も攝政の地位にあり、然るに正之は性剛正にして和淳、幼より書を讀み、曾て老佛の書に耽りしも、不惑の年に及んで、始めて小學を讀んで大學の基を知り、悉く向きに讀む所の老佛の書を焚き、專ら朱子の學を修め、又山崎闇齋を聘して深く其學を信奉す、此の如き人にして當時大權を一手に握り、官府の中樞を占む、是を以て素行と衝突せざらんとするも能はざるなり、殿中日記に云く、

十月三日、山鹿甚五左衞門と申浪人軍法者にて、聖教要錄と號す作書

籍出之、雖說□道、其行跡奇在之て、不屆有之候に付、今日北條安房守宅所へ、右之浪人招之、先主淺野內匠頭へ御預之旨、被仰渡之、御目付島田藤十郎出座也、

然るに此事たる、全く保科正之より出でたること「千とせのまつ」にて明かなり、其文に云く、

寛文六年冬、江戸に罷在候會津先封之浪人、山鹿甚五左衛門と申者、言を巧みにし、人の迷と相成候者に付、嚴敷押込致置可然由、御老中迄中將樣被仰述候に付、播州赤穗城主淺野內匠頭殿へ御預被仰付候、云云、

此文に中將とあるは、即ち保科正之の事なり、此れに由りて之れを觀れば、素行の迫害は全く正之の方寸に出でたること疑なきなり、又鳩巢小說に脇田九兵衛齋藤中務の二人より前田對馬等に宛て、素行謫遷の事情を報じたる書柬を揭ぐ、其文に云く、

肥後守樣幷御老中へ被仰付候は、此度聖教要錄とやらん甚五左衛門作の書物板行仕、弟子中へ遣候、其書に曾子朱子迄誹謗仕、三千歲不傳

の道は我有と書申候其上殊の外なる勝手辭御座候弟子二百人計り不斷出入仕候右の躰のものに候へば如何様なる儀可仕も知れざる曲者に付御預けのよしに御座候、

此書柬の末に素行を以て「如何様なる儀可仕も知れざる曲者」とすることと頗る吾人の注意を惹く所なり何んとなれば此れによりて幕府の素行を斥くるもの獨り其學説の異なるが爲めのみならざるを知るべければなり因りて之れを考ふるに慶安四年由井正雪幕府に向つて不軌を企て事發覺して自殺すと雖も一時幕府の恐慌を惹起したるや疑なし素行正雪の後に蹶起し兵法を言ふも正雪に優れり名望を言ふも正雪に優れり學識を言ふも正雪に優れり殆んどあらゆる點に於て正雪に優らずといふことなし已に正雪の陰謀を經驗したるの幕府豈に素行を疑はざらんや况んや數多の人士其門に出入するをや古語に云く「沸羹に懲るものは冷齏を吹き弓に傷くの鳥は曲木に驚く」と幕府當時の狀况略ぼ想見するを得べきなり之れを要するに素行は單に其主張の

爲めに厄難に遭遇せしにあらず、其人物としての影響、眞に恐るべきもののありしが爲めなり、幕府が兼ねて素行の人物を恐れ居る矢先きに聖教要錄出づ、竊に以爲く、此の如き大膽の主張をなすもの其將來の所行、亦計り知るべからずと、乃ち斷然遷謫の命を出だすに至れり

素行遷謫の命を受けてより內匠頭の所に居りて謹愼し、人にも逢はず、九日の未明に江戶を出發して赤穗へ赴き、廿四日に配所に着せり、自ら其時の狀況を叙述して曰く

九日の未明に御當地罷立候、御公儀より被仰聞候は、此者大勢弟子門人有之候、徒黨の輩可有之候間、道中は不及申江戶罷立候時分、芝品川等にて奪取候事など可有之候間、油斷不仕候樣に被申渡候由に候間、付候て參り候者共も氣遣仕候故、朝より晝時、晝休より泊り迄は、大小用をも不辨候樣に心得申候て、同廿四日の晩に赤穗へ着仕候、我等匹夫の者に候所、一人の采配にて大勢をもしたがへ申候樣に諸人存候事は不仕合なる內に少は武士の覺悟の所有之にも可罷成候哉、此段

皆虚說風聞次第罷成候て、赤穗に於ては、心易く罷在候、

素行が出發の際、何か途中事變のあるべきを豫想せるを以てこれを觀れば、幕府が彼れに於て學說以外に深く恐るゝ所ありしこと復た疑を容れざるなり、

初め素行安房守の書束に接するや、彼れ未だ死罪に處せらるゝや、將た又配所へ謫せらるゝやを知らず、故に若し死罪にも處せらるゝことあらば、一篇辭世の書を差出さんと思惟し、立ちながら草し了はりて之れを懷にし置けり、其文に云く、

蒙當二千歲之今、大明周公孔子之道、猶欲糺吾誤於天下、開板聖敎要錄之處、當時俗學腐儒、不修身、不勤忠孝、況天下國家之用、聊不知之、故於吾書、無一句之可論、無一言之可糺、或借權而貪利、或構讒而追蹤、世皆不知之、專任人口、而傳虛不正實否、不詳其書、不究其理、强嘲書罪我、於茲我始安我言之大道無疑、天下無辨之。夫罪我者、罪周公孔子之道也、我可罪而道不可罪、罪聖人之道者、時世之誤也、古今天下之公論不可遁、凡知道之

輩必逢天災、其先蹤尤多、乾坤倒覆、日月失光、只怨生今世而殘時世之誤於末代、是臣之罪也、誠惶頓首、

十月三日　　　　　　　　　　　　　　　　山鹿甚五左衛門

北條安房守殿

素行が事變の咄嗟に出づるに拘はらず、寸毫も狼狽の態度を露はさず、冷靜沈毅にして其豫後の計をなすや、殆んど遺憾あるなし、彼れ自ら曰く「此節は人間の一大事相究め、五十年の事、夢の覺め候樣に有之時分に候得ば、聊心底に取亂候事無之候」と、彼れが事變に處するの擧動、天晴武士の振舞とこそいふべけれ、然れども尙ほ是れより一層注意を惹くに足るものあり、彼れ不惑の年を踰えて幾もなく、一旦豁然として大道に悟入する所ありて內に常住不滅のものを執へ得たり、豈に外界に於ける騷擾の爲めに攪亂せらるゝことあらんや、是れ彼れが風濤の中に投ぜられて始終泰然たるを得る所以なり、思ふに三十歲は思想發展の時機にして四十歲は思想確立の時機なり、マホメツトが四十歲にして忽

然一變して宗教家となりしが如き、ワルドハマートナが四十二歳にして一切種智を得たるが如き、其例少しとせず、孔子が志を立てしは、三十歳の時なれども、能く惑はざるに至りしは、四十歳の時なり、「三十而立、四十而不惑」といふもの是れなり、孟子も亦「我四十不動心」といへり、即ち知る、彼れ亦孔子の如く、四十歳にして始めて寂然不動の地位を得たるを、顧りて我邦の先輩を考ふるに、四十歳前後は、往々一轉の時機をなせり、最澄は三十九歳にして天台宗を開き、法然は四十三歳にして淨土宗を開き、親鸞は二十九歳にして志を立つと雖も、其眞宗の基を開きたるは、四十歳の時なり、中江藤樹は三十七歳にして其學を一變し、伊藤仁齋も亦三十七八歳にして古學に一變し、殆んど四十歳になん〳〵として始めて主張の確定するあるを見る、即ち素行の如きも、四十歳の頃より其學一變し、四十五歳の時は、世界及び人生に關する一家の見解已に備はれり、其「人間の一大事相究め、五十年の夢の覺め候樣に有之」といふもの、之れが爲めなるを知るべきなり、

素行配所に於て反りて優待せられ、衣服飲食家宅等に至るまで、悉く支給せられ、何等の不自由をも感ぜざる程なりき、殊に大石頼母助良重（卽ち良雄の祖父の弟）は毎日二回素行に朝夕の野菜を送れり、素行之れを辭すれども、是れ内匠頭の命によるといひて頼母助可かず、素行自らは深く謹愼せるも意外の待遇には稍不安の念を生ぜしが如し、然れども素行が内匠頭に對する感謝の情は從つて又深からざるを得ざるなり、素行配所にあること凡そ十年、彼れ自ら其間の消息を洩して曰く「病中之外、雖二一日一朝寢不レ仕、不作法なる體を不レ仕候」と、其一室の内に謹愼して絶えて惰容なかりしこと推して知るべきなり、先哲叢談に左の注意すべき記事あり、云く、

素行常辱二赤穗侯長友知一己、辭レ祿之後、猶屢與レ之交、竊謂レ侯曰、自二干戈止一殆五十年、天下無事、欲レ爲死以有レ報二舊德一、而時不レ可レ爲也、則無レ可二授命以達一宿志、又欲レ有レ致而酬二非常之遇一、而非二啻謭劣無能爲一、皆係二於時勢一、然私心所レ安、不レ爲レ無レ所レ期、臣以二經義一與二韜略一、敎二侯之諸臣一、臣精力所レ蘊、皆在二於此一、故能達二

臣旨、若處倫理之變、萬一無服勤有所償乎哉、侯大喜、爾後殆五十年、至元祿年間、其子赤穗侯長矩時、賜死而國除、其遺臣四十七人、果有襲殺吉良氏、殉故君志之事、世稱之赤穗義士之復讐焉、

素行の教育ありて始めて義士の擧あり、其間の連絡、否定するを得ざるものあり、然るに先哲叢談にいふ所は、素行が謫居の時の事にあらず、曾て承應元年より萬治三年まで凡そ九年間赤穗侯に仕へし事あり、是れ其時の事をいふものなり、然れども素行が謫居中は全く無爲に經過せしとは思惟するを得ず、彼れ謫居童問〔三卷〕の著あり、是れ彼れが謫居中諸生に講述せし所なり、此れに由りて之れを觀れば、彼れが曾て扶殖したる教育を謫居中更に又鞏固にし、苟も事變の起るあらば、必ず其結果を露はすべき丈の素養を成せしや疑なきなり、今語類を見るに、卷十四に死節を論じて曰く、

身を委ぬるは臣の道なれば、急に臨み節に中りては、身を棄て死を輕んずること、是れ則ち臣の義なり、常に死を守ることを務むるは、家を

忘れ私を顧ざるを以て本とす、云云、死は至りて人の重き所なれば、是れ又究理することを詳にして而して死を全くすべし、是れを死して全きを守るの道といふなり、然れば節に死することを守らんの務めは、常に家を忘れ、內外に就いて、非常の戒を固くし、閨門の內に入ると雖も、勇氣を撓ましめず、門を出でゝより已に家事をすてゝ、朝廷に出て、位に坐し席に□て、禮を守りて、容貌言語に無禮をなさず、急を愼み難を計りて變に置いて取りみださゞる如く勤むべきなり、變は鬪□、喧呼、狂亂、仇打、火雷、地震、時の變、或は他の國の變事、或は廓外の變事告來たるの類、各是れなり、此時に中りて常の恪勤練らすくば、必ず顏色を損じ、容貌をみだし、言語たがふべし、顏色、容貌、言語、常に至らざるは、日比練り學ぶ處、厚からずして心正しからざればなり、心正しからざるは、知の暗ければなり、其知暗きときは、其言行共に違つて己れが平生の十分一も調ばざるものなり、故に死節を以て守る所とするなり

又卷十七に仇を報ゆるの道を論じて曰く、

凡そ仇ある處を知らば、速に其地に至り身をひそかにし事をたばかつて仇の居所を詳にし、仇の平生の躰、其交る友、其なす業、其往來の道、用心の致しやうを詳にさぐり時分を考へて押入り仇を報ずるか、又途中に待居て、是れを撃つべきなり其用法を細に知らざれば仇なりときくにまかせて或は仇を見ちがへ、或は仇を遁れしめて、一生の謀を一時に空しくすることあり能くねらひ、能く謀りて其全く打つべきの術を盡くし、而して後に無二の闘爭を決すべきなり、其謀此の如くして打ち得ず、或は仇遁れ、或は我身戰死せんをば、誠に身を捨てゝ報ゆとも云ふべし、然らずして只血氣の勇にまかせ、謀を詳にせずして、運を天にまかせ事成らずば捨身の報なりと云はん事、未だ究理せざるの薄きと云ふべきなり、

素行赤穗にあること前後合せて十有九年、其間力を教育に盡くし、君臣の道を說くこと頗る詳密にして、殆んど遺憾あるなし、獨り内匠頭(即ち長矩)自ら弟子の禮を取りて素行に學びしのみならず、大石良雄の如きも、親

しく彼れが薫陶を受けたるが如し、先哲叢談に云く、

大石良雄嘗素行被幽於赤穗時、親炙之學兵、後遊京師、從學伊藤仁齋云、方其枕于竄隙之間、潛行如避、惰遊示廢、曠日持久、乃能使讐不動不驚、夷然居之而至忘爲之戒心矣、而後一皷得遂其志、且使其四十六人衆率之以義、各見死如歸、固非從事於暴卒之間、而不顧成敗者之所能及也、其處人倫之變、遭非常之事、一伸一屈、雖出於天授、素行遺澤之所存者、亦可謂不鮮矣、

素行の赤穗に謫遷せられたるは、寛文六年にして、良雄は其時八歳なりき、素行の赦されたるは延寶三年にして、良雄は其時十七歳なりき、故に良雄が多少素行の指敎を受けたることを推して知るべきなり、良雄を始めとし、四十六人の義士、臥薪嘗膽、義によりて死を誓ひ、一擧して其敵たる吉良上野介を攻めて之れを殺し、尋いで皆從容として自刄す、其事蹟を追想するに、眞に秋霜烈日の如きものあり、世界廣しと雖も、未だ東西の歷史に此の如き類例あるを見ず、此の如き非常の行爲、豈に偶然に出

づるものならんや、素行が十有九年間の教育赤穂の人心を鎔鑄陶冶して遂に此奇異なる結果を生ぜることと復た疑ふべからず、果して然らば素行が教育の功決して鮮少なりと謂ふを得ざるなり、

素行配所にあること十年の久しきに及ぶに至り、竊に以爲く、最早終焉の時期に近づきしならんと、其境遇實に悲むべきものあり、配所殘筆に其眞情を述べて云く、

我等覺悟の所有之候間、能々心付候て讀可被申候、近年者、配所へ參り十年に成候、凡そ物必ず十年に變ずるものなり、然れば今年我等於配所打果候時節到來と令覺悟候、云云、

素行此の如く終焉を豫測したるが故に、配所殘筆を作りて山鹿三郎右衛門及び岡八郎左衛門の二氏に送れり其殘筆といふは死後に遺さんとの意なり、即ち死して後、己れが經歷せし事蹟の萬一不明に歸し、或は誤解もせられんことを恐れて之れを作れるなり、是故に配所殘筆は本と自傳 autobiography の類なれども、其實、末期の遺言ともいふべきもの

なり、

然るに素行不思議にも其年(即ち延寶三年)の六月十五日を以て赦さる、其何故に赦されたるやは詳にし難し、然れども幕府も遂に彼れが格別の罪なきことを了知せしならん、素行赦されてより、江戸に歸り、淺草田原町三丁目に屋敷を求めて此に住居せり、然るに偶然にも其屋敷に額あり、積德堂と題し、恰も素行の書院に適せり、因りて以て堂號となす、素行從前の如く浪人等を集むることを禁ぜられたるを以て自然離群索居の狀をなし、三四年を經るに及んで、病者となり、步行さへも不自由となり、辱知の貴紳を訪問することも殆んど稀なるに至れり、素行母あり、子あり、謫遷中は皆江戸にありしが故に、彼れが之れを見ざること十年にして幸に再會するを得たり、母は素行が歸養後三年にして歿せり、是れより素行益老衰し、逼塞殊に甚だしく、貞享二年九月二十六日を以て歿す、享年六十有四、早稻田榎町の宗參寺(禪宗の寺)に葬る、素行の葬に望んで、諸侯大夫の使者、其葬を送るもの多く、市街の往來之れが爲めに絕すとい

ふ、其盛なることを以て想見すべきなり、素行が法諡を月海院殿瑚光浄珊居士といふ、墓碑の裏に左の如き文字あり云く

先考、名高祐、藤姓山鹿氏、別號素行子、生ニ元和壬戌歳八月庚戌、歿ニ貞享乙丑歳九月癸未、

孤子　政實
　　　高基　泣血稽顙立

素行二女二男あり、長女は津輕信政の養女となり、弘前の津輕將監に嫁し、次女は津輕平十郎に嫁す、長男は政實、八郎左衛門と稱す、實は素行の姪兼松氏の次男なるを素行養子として家督相續せしむ、後、津輕家に仕へ、家老となり、津輕大學と稱す、次男は高基、通稱は藤助、箕裘を繼いで起り、兵法を以て世に顯はれ、元文三年を以て歿せり、盈筐錄に云く、

高基の門前、諸侯大夫の僕從、日々に充塞せしとなん、高基出門の節は、いつも轎輿に乘じ、江戸士人の子弟等、從者の如く、其轎の左右に從つて、其行伍の嚴なること、諸侯大夫に減ぜざりしと語りき、天如何なる

幸を降して、山鹿父子をしてかくまでに天下に尊崇なさしめしにや、怪むべきの一事とこそは覺ゆれ、

素行五世の孫を高美といふ、高美、字は宇善、八郎左衛門と稱す、兵法を以て弘前藩に仕へ、居る常に甲陽の兵法を講じ、頗る力を國防に用ひたり、著はす所美言殘滴二卷(寫本)あり、高美の孫を高補といふ、高補、字は子修、素水と號し、又梅園と號し、又積德堂主人と號せり、文政年間に生榮し、弘前藩に仕ふ、彼れ祖父の高美を繼いで兵法を講じ、家學を教授せり、彼れ素行七世の孫なれども、祖父を繼ぎたるの故を以て自ら六世の孫と稱せり、武教小學及び武教全書は彼れによりて上梓せられ、美言殘滴も亦彼れによりて編次せらる、彼れ自ら著はす所、海備全策四卷、海備芻言一卷あり、皆寫本、芻言の卷末に齋藤拙堂記して曰く「素水山鹿翁、素行先生之裔也、承修家學、名於海內、屬者來講兵於我國校」と、其當時に重んぜられたることを以て知るべし、但し儒教に就いては、彼れ何等の功績も之れなきなり、今現に山鹿旗之進といふものあり、橫濱に於て基督教の牧師たり、

聞く美以美教會に屬すと、是れ即ち素行の苗裔なりといふ、

山鹿氏畧系

山鹿高道—┬素行—┬政實（素行養子仕二津輕家一爲二老臣一子孫今尚存）—高豐
　　　　　│　　　├女子（素行長女津輕信政養女嫁二津輕藩老臣一（即津輕監物）喜多村政廣一後雍髪稱二珠光院一）
　　　　　│　　　├高基（稱二藤助一號二山井堂一仕二淺野侯一）—高道
　　　　　│　　　│妻（津輕政朝女）
　　　　　│　　　└女子（嫁二津輕平十郎一）
　　　　　└義昌（素行弟）

素行の門人として磯貝十介、布施源兵衛、高橋十郎左衛門等あれども、皆未だ學術を以て一家を成すに足らず、唯、彼れが兵法のみは山鹿流として傳授せられしなり、多少素行の學問を主張したるものは、津輕耕道なり、耕道名は政方、一花翁とも號す、本と武陽の人、少小にして素行の喪に遭ひ、深く感ずる所ありしと見え、彼れに後るゝこと三十年にして起り、聖學問答二卷を著はして、素行の學を祖述し、主として道徳及び政治を

論じ、又武治提要一卷を著はし、武士道を論せり、其他聖學入門抄、大學解義及び綱目提要の著あり、曾て春朧見梅の詩を作る、云く、

大道從來在近卑、世人誤向異方索、
幾年踏破隴頭雲、咲嗅梅花思戴笠、

蓋し其自得の意を抒ぶるものなり、彼れ素行を祖述すと雖も畢竟微弱なる反響に過ぎざるなり、

故に素行は儒者としてよりは、寧ろ兵學家として世に知られたり、要するに、素行は儒者としては未だ强大なる學派を成すに至らずといふべし、然れども彼れは死後歳月を隔てゝ、一つの有力なる繼續者を得たり、是れ他ならず、吉田松陰是れなり、松陰の家代々素行の兵學を講せしと見え、其著武教講錄の初めに、說破して曰く「余家學を襲し、幼より山鹿先師の書を讀み、今日に至る」云々と、松陰常に素行を以て先師とし、兵學に於ては之れを崇とせり、啻に兵學のみならず、人物に於ても、性行に於ても又識見に於ても、深く素行に推服せし所あるが如し、松陰乃ち開講の主

意を述べて曰く、

道を知らんとならば、能々先師の教誡を服膺し給へ、書物も古今に多き者なるに、何故余が殊更に先師の書を信仰するかなれば、吾が先師の教は此書を見れば、具に知ることゝなれども、其一端を云はゞ、先師曾て北條安房守の宅へ召出だされ、赤穗謫居の命を承けられたる時の事を見ても、先師平日の覺悟筋を知るべし、又赤穗の遺臣亡君の執を復したる始末の處置を見ても大石良雄が先師に學び得たる所知るべし、國恩の事に至りては、先師滿世の俗儒、外國を貴み、我邦を賤むる中に生れ、獨り卓然として異說を排し、上古神聖の道を窮め、中朝事實を撰ばれたる深意を考へて知るべし、云云、余は罪囚の餘にて他人に接すべき身にあらざれども、其獨り自ら志す所は皇國の大恩に報い、武門武士の職分を勤むるにあり、此志は死すと雖も、吾れ敢て變ぜず、今諸君親戚の緣故を以て惠然として來會す、吾れ願くば闔族相謀り、志を勵まし、先師の行實に負くことなからんことを欲す、昔し先師斯

道を以て己れの任となす、世の是非毀譽を顧みず、其極赤穂に謫居するに至りて已む、然れば吾輩寧ろ志を斯道を衛るに勵まざるべけんや、

松陰の事蹟を考ふるに、其人倫の變に處して、斷乎として、其節を屈せざりしが如き、亦必ずしも素行の所爲に學ぶ所なしとせざるなり、

素行英邁の才ありて、己れを修むる謹嚴、其平素の行、頗る見るべきものあり、故に素行の號あり、朱舜水嘗て子敬箴を作る、云く、

問學如何、徽乎素行、素行如何、希賢希聖、匪敢僭踰、勉承來命、堯舜可爲人皆此性、儒道非難、養至德盛、懿美內涵、闇望外令、文武張弛、維人無競、溫恭誠允、端莊靜正、不在他求、是在子敬、

推奬至れりと謂ふべし、因りて又素行の性格、一世に拔く所ありしを知るに足るなり、

先哲叢談に云く、

素行資性英邁、卓絕古今、加旃以洽聞强識、達練時態、其爲人謀也、敷陳利

害、論定得失、設事果斷、疑嫌立決、一執贊者、試揚風儀、依賴於是、不啻聞道請教、雖機密事、吐露情實、受其截斷矣、故自王侯至士庶人、出入於門者、日數十百人矣、家頗富饒、妻妾之奉、奴僕之仕、雖五六千石者、不能與之抗、其儲藏費用云、

素行の人物、性行、名望、權勢、以て想見すべきなり、素行が萬治三年祿を辭したる時、赤穗侯、素行に謂つて曰く「今より以後、諸侯聘問するものあるも、一萬石たらざれば、其聘に應ずることなかれ、夫れ百石千石は、士の常祿なり、士祿萬石を食まざれば、出でゝ以て軍國の用を行ひ、戎器の具を備ふるに足らず、入りては以て祖先を祭祀し、父母を養ひ、臣民を撫するに足らず」と、民間の學者にして其名望の高き、殆んど比なしと謂ふべきなり、

先哲叢談に又云く、

素行與人語、不合道義、厲辭大言、然人々推愛氣宇、皆喜直諫、退無後言、云云、有一貴紳憚其筆謗者、謂以若斯之輩、不可謀其包藏不軌、至於妒忌之

而沮裁行、

茲に一貴紳といふは未だ果して其何人を指したるやを知らず、然れども素行が如何なる貴紳に對しても憚る所なく、其所信を貫かんとせしは、事實なるが如し、素行が自ら幕府の老中板倉内膳公との問答の次第を記せる中に左の一節あり、云く、

次ぎに世間如何樣に風聞候やと御尋被成候間、私申上候は世上の風聞一圓不承候、風聞は指して益も無御座御事かと申上候得ば、被仰候は、世上能者多く可有之候間、其者共の風聞を聞候事能候由、被仰候故私申上候は、御歷々樣方にさへ、賢人君子は少く御座候、然れば下々には能者は大方無御座候、若し能者御座候へば、風聞など申候事は、御座有間敷候、風聞は大方御大名衆へ御出入仕候輕き町人風情、世上に賢き者の申候事に御座候と、申上候へば、其世上に賢き者申候事にて能候由、被仰候間、私申上候は、乍恐左樣には不奉存候、世間に賢き者は、御時代の勢を能く務め申候間、上々樣の能く被思召候者を能く申、御に

くみ被成候者をば惡しく申候、少も秀候者をば、さゝへ候て、我身の立候樣に取廻し候、人の事もよき樣に申候て、實はそしり惡しく申候、斯の如き者の申候御事、御許容被遊候御事、大事の儀に奉存候由、申上候へば、古より堯舜も賤き者に事を尋ねられしと有之と被仰候故、私申上候は夫は賤しき者の可存候事は賤しき者に御尋候と申事に御座候と申上候、此問答再三御座候て、少し御意に入らざる御挨拶に御座候へ共、私存寄申上候樣に被仰候故、少しも顧みず申上候、定めて御無禮の樣に相見え可申候、

素行が貴紳の前をも憚らず、斷々乎として其所信を貫いて、毫も畏縮逡巡の態度を露はさゞる所、以て人の儀表となすに足る、然れども彼れ之れが爲めに板倉內膳公に對し、無禮の所行ありしとの風評を受くるに至れり、

世人從來德川時代の學者を擧ぐれば、必ず先づ指を伊藤仁齋と物徂徠とに屈し、此二氏に先ちて素行あるを知らず、素行は所謂文王を待たず

して與るものにて二氏に優るとも劣ることなき一代の偉人なることとを記せざるべからず、永富獨嘯菴曰く「偃武以來、豪傑之士四人、山鹿素行、熊澤了介、伊藤仁齋、物徂徠」と、洵に當れりといふべきなり。



第二　著書

聖教要錄三卷

上卷は八章、中卷は十三章、下卷は七章、凡そ二十八章、素行が學の要領を記載せるものなり、此書一旦は上梓せしも、幕府の忌む所となり、已に其版を毀たれ、傳本極めて少く、高等師範學校の如きは、尙ほ元の版本を藏すと雖も、多くは寫本として世に傳はれり、近時に至りて之れを日本倫理彙編卷之四及び弘行會叢書第一集に收載せり、

山鹿語類四十三卷

卷一より卷十二までは君道、卷十三より卷十六までは臣道、卷十六より卷十八までは父子道、卷十九は兄弟之序、夫婦之別、朋友之信、卷二十は三倫談、卷廿一は士道、卷廿二より卷三十二までは士談卷三十三より卷四十三まで聖學を論ぜり、最後の聖學を論ずる處、凡そ十卷、是れを聖學篇といふ、唯〻此部のみは、全く漢文にして、儒敎のあらゆる問題

を執へ來たりて縱橫に論談せり、素行の學力識見、此部に於て見るべきなり、聖學篇以外は皆假名交り文を以て記載せり、序に云く、

癸卯先生之學日新、而眞以聖人爲證、故漢唐宋明之諸儒、其訓詁事論、各可執用、而至其聖學之的意、悉乖戾先生之志、冬十一月、門人等輯錄先生之語類、其書皆因先儒之言、以糾其道、乙巳書成、云云、

此れに由りて之れを觀れば、語類の成るは、寛文五年にして素行四十四歲の時なりき、聖敎要錄は語類の要を擧げたるものなり、序に又云く、

先生垂迹於本邦、崇周孔之道、嗣不傳之統、所謂君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友、修身、聖學之要道、二千歲の後、唯在先生之學、其綱領也在要錄、其條目也在語類、

以て語類と要錄との關係いかんを知るべきなり、語類の書は章每に師曰の二字を冒し、門人の手に成るものゝ如し、文字の複雜して未だ整はざるもの、往々之れあるを以て之れを觀れば、蓋し然らん、德川時

代の儒者にして語類の類なきにあらざるも素行の語類の如く浩瀚にして整備せるものはあらず、此の如き大著ある處を考ふれば、素行は殆んど仁齋徂徠をして後に瞠若たらしむるの感なしとせざるなり、語類の中士道と聖學篇とは日本倫理彙編卷之四に收載せり

武教小學一卷 版本

此書は武士の當に守るべき道德を教ふるものにて、決して兵書として度外視すべきものにあらず、凡そ男子たるものゝ平生心得居べきことを說示すること懇切なり、全篇凡そ十章、第一章は夙起夜寐、第二章は燕居、第三章は言語應對、第四章は行住坐臥、第五章は衣食居、第六章は財寶器物、第七章は飲食色欲、第八章は放鷹狩獵、第九章は與受、第十章は子孫教戒、皆漢文なり、先哲叢談によれば、此書も聖教要錄と同じく其版を毀たれたるが如し、然れども天保年間上木の武教全書の首に附載しあり、然るに其次ぎに武教全書總目錄を揭ぐ、吉田松陰は是れを小學の終篇となす、其論に云く、

此一篇は小學の終篇とすべし、別に一卷と思ふことなかれ、其證は自序に門人等所輯錄武教小學、始著其敎戒、終次其序品と云ふにて知るべし、敎戒は即ち上の十篇なり、(夙起夜寐より子孫敎戒まで)序品は即ち此篇なり、素水の刻本に子孫敎戒の末に武敎小學終とあるは非なり、吾家の藏本に此五字なきを善しとす、云云、

松陰の説、是なるに似たり、松陰著はす所の武敎講錄は武敎全書の講義といふと雖も、其實、武敎小學の講義なり、素行の微旨を發揮して縱橫論談、眞に痛快なるものあるなり、倘ほ近時に至りて武敎小學は、日本倫理彙編卷之四、及び武士時代第一卷第二號に收載せり、文政年間高林政明てふ人、武敎小學を和譯し、武家小學と題して、童蒙の講習に便にせり、

武敎全書八卷 版本

是れ全く兵法の書なり、後序に曰く、「文を崇ぶもの武を輕んじ、武を專にするもの文を輕んず、夫れ文武は偏廢する所あるべからず、唯其人

の量によりて、先後するのみ、文に於て、武を示し、武を敎ふるに文を以てす、是れ王者の師とする所なり、武敎の全うする所なり」と、此書久しく寫本の儘、傳へ來たりしを、天保十五年に至り、山鹿高補之れを上梓して世に公にせり、此書を解釋せしものには武敎全書解（寫本十卷）及び武敎全書詳解（寫本廿六卷）あり、前者は著書未だ詳ならず、後者は窪田清音の著なり、

辨論八卷

武敎全書問答五卷

廿騎卅騎備

士談

神道書

武敎總要七卷

武敎要錄五卷

此書と後に擧ぐる兵法或問とは素行三十歳以前の著なり、

武教續集一卷

武教別集一卷

武教餘錄廿卷

武教三等錄三卷

明曆三年江戸大火あり、素行乃ち居を高田山下にトし、此書を著はせり、其事語類の序に見ゆ、大學の圖書館に缺本一卷を存せり、因りて之れを檢するに、自引に云く「兵法者不ㇾ出二三品一、所ㇾ謂主、將、官長、平士也、主者、性心也、將者、忠氣也、官長者、五官四支也、平士者、皮肉骨節也」云云と、是れ其三等錄と稱する所以なり、然れども四品を擧げて三品となす、以て其名實の相適せざるものあるを知るべきなり、

武家事記五十卷

此書は假名交り文を以て編述せる日本の歷史なり、全篇分ちて前集後集續集別集の四部となし、前集には皇統要略と武統要略とを載せ、後集には武朝年譜と君臣正統とを載せ、續集には譜傳、小傳、戰略、古案、

式目、地理驛路、國圖を載せ、別集には武家式、年中行事、國郡制、職掌、臣禮、故實、武藝、將禮、武德を載せたり、序に云く、

記誦の俗學、文墨の腐儒、或は屠龍の手を學び、或は遺契の富を待ち、遠く外國の虛文を誦んじ、近く本朝の事實を知らず、力を作して異域の俗を受負し、更に吾中朝の靈妙、萬邦に超過するを審にせず、舌を鳴らして空しく湯武の兵を談じ、聊か吾武德の要談、天地に脊參するに通せず、所謂白面書生、事終に濟らざるなり、是れ予が慨然として深嘆長思する所以なり、云云、

此れに由りて之れを觀れば、此書は素行が世の儒者、多く外國の虛文を崇び、近く本邦の事實を知らざるを憤慨して作れる所なり、序文の日附には「延寶元年癸丑春三月□日」とあり、故に其赤穗謫居中の作に係るを知るべきなり、此書或は略して武事記とも云ふ、

手鏡要錄四卷

此書は近代名家著述目錄に四卷とあれども、今傳ふる所の書は二卷

なり、全部漢文にして、專ら兵法を論ずるものなり語類の序によりてこれを考ふるに、此書は明曆二年に成れり即ち素行が赤穗仕官中の作なり、

備教要錄十卷

治教要錄三十一卷

此書は素行が未だ一變して古學とならざる前に作る所なり、語類の序に云く

先生聖學の志、愈〻進む、詩文詠歌の詞章、老莊釋氏の異說、衆技小術、皆以て聖人の學にあらずとなす、退いて治敎要錄三十一卷、修敎要錄十卷を述ぶ、此書專ら周程張朱の學を以て宗となす、

乃ち其宋學の立脚點より叙述せるものなるを知る、此に修敎要錄といふは前に擧げたる備敎要錄と同一の書なるが如し、但〻未だ其孰れか是なるやを知らず、此二書は萬治三年より寬文二年までの間に成れり、

治平要錄廿卷

備要錄十卷

此書は備教要錄の略稱にあらざるかの疑あり、然れども近代名家著述目錄には兩者共に之れを擧ぐるが故に姑く之れに從ふ、

四書句讀大全廿卷

七書諺解三十八卷

孫子句讀

孫子口義

兵法神武雄備集五十二卷

此書は素行廿一歲の時の作なり、語類の序に「中ごろ兵書を以て世に鳴る、壬午の年、兵法雄備集五十卷を述ぶ、杏庵正意序を爲りて之れに冠す、先生の名聲、世間に充つ」とあるを以て知るべきなり

古戰折本

城取稽古口决一卷

武類全書四卷
武教全書傳解五卷
武教類集三卷
本論一卷
近代名家著述目錄に單に本論とあれども、詳に之れを言へば、武教本論なり、語類の序に「丙申手鏡要錄及武教本論成」とあり、乃ち其明曆二年に成るを知るべきなり、語類の序に云く「其神武也博涉」雄備、約究」本論」と、乃ち知る、兵法神武雄備集は語類の如く、本論は要錄の如く、詳畧相待つものなるを、素行の用意、極めて周到なるを見るなり、
神武雄畧
雄備與儀抄五卷
戰畧考三卷
古今戰畧考十二卷
兵法或問二卷

師弟問答三卷
足輕左右五卷
百結字類百廿卷
自得奥儀三卷
中朝事實二卷

此書は專ら神道の事を論ぜる書にて漢文を以て記せり、天地、中國、皇統、神器、神教、神治、神知の七章を上卷とし、聖政、禮儀、賞罰、武德、祭祀、化功の六章を下卷とす、凡そ十三章あり、序に云く、

愚生中華文明之土、未知其美、專嗜外朝之經典、嘐々慕其人物、何其放心乎、何其喪志乎、抑好奇乎、將尚異乎、夫中國之水土、卓爾於萬邦、而人物精秀于八紘、故聖明之洋々、聖治之緜々、煥乎文物、赫乎武德、可以比天壤也、

其中華文明の土といひ、中國といふもの、皆本邦を指して言ふものなり、武家事記の序に「往年竊輯中朝實錄、將竢餘年以覃武家之事」とあり、

中朝事實は武家事記と同じく赤穂謫居中の作に係り、中朝事實先づ成り、次いで武家事記成れり、中朝事實の序に龍集己酉とあり、即ち其寛文九年の作なるを知るべきなり、

原源發機二卷

原源發機諺解二卷

此書は素行が罪を赦されて後、作れる所にて、實に彼れが晩年の思想を述ぶるものなり、其躰裁畧〻通書の如く、正蒙の如く、又時ありては太玄の如く、頗る易に類する所あり、本文に「不識者必言、吾此象準擬易」とあれども、其易に似たるものあるは否定すべからず、諺解とは前に擧げたる原源發機と稱する書を解釋せしが故に云ふ、解釋は漢文なり、之れを諺解といふことと當らざるに似たり、本文は素行が延寳六年を以て津輕越中守信政公の爲めに著はして授けし所なり、諺解は貞享元年の作に係る、實に素行卒去の前年なり、信政公は素行の高足にして、軍學の秘奥を究めたる人なりといふ、

四書諺解五十餘卷

是れ青年の作にして大概林道春を宗とするものなり、

四書或問十卷

配所殘筆一卷版本

此書は素行が赤穗謫居中に作る所なり、彼れ配所にあること十年にして以爲く、凡そ物十年にして變ずるものなり、故に己れ此歳を以て配所に終るべしと、乃ち一生の履歴を敍述し、以て殘筆となせしなり今素行の事蹟を徵せんには此書によるに若くはなし、此書久しく寫本にて傳はりしも、近年に至り近藤瓶城氏之れを存採叢書中に收採せり、今は日本倫理彙編卷之四にも編入せり、大學所藏の書は二卷なり、然れども本と是れ卷を分ちて著はせるものにあらざるなり、

結要品七卷

辨惑論一卷

當用集一卷

大星大事目錄一卷
一騎武者受用一卷
三重極意傳授一卷
八箇條一子相傳之極秘一卷
子孫傳錄一卷
修身受用抄一卷
職分記三卷
謫居童問三卷
　此書素行が謫居中の作にて假名交り文なり、卷末に跋あり、曰く「戊子三冬之遙夜、童子在傍、問之難之、或再之或三之、以續秋蟀之餘吟、慰謫居之寥々、終草焉、如脫稿、竢來日之潤色云、寛文第八臘天日、山鹿子隱叟」と戊子は蓋し戊申の誤ならん、
謫居問答三卷
　此書も亦謫居中の作なるを知るべし、

武具短歌一卷

總計六十部大約六百卷

世に山鹿流十八部の書と云ひ傳へ來たれり、其目左の如し、

(一)兵法神武雄備集―(二)武教要錄―(三)手鏡要錄―(四)備教要錄―(五)山鹿語類―(六)兵法或問―(七)武教全書―(八)自得奧儀―(九)治平要錄―(十)武事記―(十一)武教餘錄―(十二)百結字類―(十三)謫居童問―(十四)七書諺解―(十五)古今戰略考―(十六)武類全書―(十七)中朝事實―(十八)神道書

諸家人物志に聖教要錄を加へて十九部の書目を擧げ、是れを山鹿流十八部の書となし、一言の辯解もなし、杜撰も亦甚だしと謂ふべし、蓋し聖教要錄は絕版せられし書なるが故に算入せざりしものならん、



第三　學説

第一　總論

德川時代に於ける學者は宋明の間に於て其宗とする所あらざるはなし、朱子學派の紫陽を宗とし、陽明學派の姚江を宗とするが如きは、言ふまでもなく、創見あるが如き者と雖も、亦其宗とする所なしとせず、獨り素行は然らず、素行始め程朱を尊信せしも四十二歳にして一變し、一切漢唐宋明の學を斥け、直に蹤を孔子に接せんとせり、是に於てか彼れ古學派の源流を成せり、溯りて之れを考ふるに、菅公已に王朝時代に於て孔子を願學せんことを企圖せられたり、句あり云く「尼丘千萬仭、高仰欲揚名」と、又云く「此間鑽仰事、遙望魯尼丘」と、以て證すべきなり、然れども是れ翅詩中に述べられたるに過ぎず、此れを外にして別に敎を立つることとを務められたるにあらず、且つ素行に比すれば其境遇大に異なるものあり菅公の時にありては儒敎といへば漢唐の註疏によりて經書を

講說する位に止まれり、素行の時にありては、朱子陽明の學爭ひ起りて一世の學者滔々として此れに與みし、彼れに趣き、派を分ち黨を異にして、各頗る高妙精微の理論を唱道せり、素行此間に立ちて獨り古學を鼓吹し、忽然として天下を驚倒せり、彼れが所爲眞に破天荒と謂はざるべけんや、松宮觀山の學論(卷上)に云く、

有甚五左衞門山鹿子者、出自我先師之門、而成一家、著聖教要錄、梓行于世、非陸也、非朱也、此方破宋學者、素行子其嚆矢也、世人皆以原佐伊藤子爲破理學之魁、不知素行子在其前也、

又澁井太室が讀書會意(卷中)に云く

伊藤氏之徒、動輙曰、仁齋之首破宋儒、在徂徠之前、予聞山鹿高以先伊藤不善宋儒云云、

又先哲叢談(後編卷之二)に云く、

世人稱素行者、皆視以兵家者流、徒知長於韜鈐、未知精於經術、余嘗讀其所著聖教要錄、武教要錄、四書句讀等、持論立說、雖盡不醇、能抒其所獨得、

未嘗剽竊先修之說、專門經義、既在當時、別構一格矣、伊藤、堀河、物、赤城輩、以一家學、風靡海內、素雖氣運之使、然其嚆矢之任、不得不讓諸素行矣、

今之れを考ふるに、素行の古學に一變せるは、仁齋と大抵其時を同うす、語類の序に云く、

癸卯先生之學日新、而眞以聖人爲證、故漢唐宋明之諸儒、其訓詁事論、不可執用、而至其聖學之的意、悉乖戾先生之志、

癸卯は寛文三年にして、素行四十二歳の時なり、然るに古學先生行狀によれば、仁齋が古學に一變せしは、三十六歳の時にて寛文二年に當る、果して然らば仁齋は素行に先つこと一年にして已に古學を唱道せるが如し、然れども仁齋が讀予舊稿の文によれば、其學說の一變せしは、三十七八歳以後の事なり、（仁齋が事蹟の處を參看せよ）又之れを考ふるに、素行が學問萬治三年に致仕してより大に面目を改むるものありしや疑なし、語類の序に云く、

庚子致仕、淺野氏甚厚遇、先生猶存君臣之禮不怠、先生聖學之志、愈進、

素行が學問の漸く一變せんとするの徴ありしを知るべし、然れども未だ必ずしも古學に歸せしと謂ふを得ず、語類の序に尙ほ其事を叙述して云く、

詩文詠歌之詞章、老莊釋氏之異說、衆技小術、皆以爲非聖人之學、退述治教要錄三十一卷、修教要錄十卷、此書專以周程張朱之學爲宗、

此れに由りて之れを觀れば、未だ周程張朱の圏套を脫せず、彼の「先生聖學之志、愈進」とは、詞章の學、異端の說等を斥けて、一轉して宋儒性理の學に歸せしを謂ふなり、然れども素行自ら其時の事情を叙述せり、請ふ姑く彼れ自身の言を聽かん、配所殘筆に云く、

知行斷申候て以後、聞御座候て淺野因州公本多備前守殿など私宅へ御出被成候時分、因州公仰られ候は、云云、聖學之筋目發明仕候事、異朝にさへ無之候間、古今其方一人に候、

因州公が聖學發明といひ、古今一人とするは、素行が古學に歸したる所を稱するや疑なし、然るに「聞御座候」とありて時日は頗る漠然たり、然れ

ども致仕後其久しからざるを想見すべし、配所殘筆に又云く、

數年此不審不分明候所、寛文之初、我等存候は漢唐宋明の學者の書を見候故、合點不參候哉、直に周公孔子の書を見候て是れを手本に仕候て學問の筋を正し可申と存、夫より不通に後世の書物をば不用、聖人の書迄を晝夜勘候て、初めて聖學の道筋分明に得心仕候て聖學の理を定め候、

此にも素行唯寛文の初といひて、明瞭に其時日を言はず、恐くは寛文の初年已に古學に一變するの徴候を露はしゝならん、然れども其事固より確定し難し、故に素行果して仁齋に先ちて古學を唱道したりといふこと、何人も斷言すること能はざるなり、但彼れが仁齋と殆んど同時代に古學に一變せしことは毫も疑なきなり、然れども日本の哲學史上に於ては素行を以て仁齋に先つものとせざるを得ず、何んとなれば素行先づ其學說を發表したればなり、仁齋が始めて古學の旨意によりて著はしたる論孟古義及び中庸發揮は寛文二年に成りたれども、行狀に「辨

定」とある如く、直に剞劂氏に付したるにあらず、論孟古義は正德二年に至り、中庸發揮は正德四年に至り、即ち仁齋死後に至り、東涯始めて之れを公にせり、然るに素行の聖敎要錄は寛文六年を以て發行せらる、即ち其論孟古義及び中庸發揮に先つこと殆んど五十年、是れ吾人が素行を以て古學の鼻祖とする所以なり、

第二　古學の主張

素行は漢唐宋明の學を斥けて直に洙泗の淵源に溯り、孔子の聖を願學せんことを期せり、是故に其學を古學と稱す、聖敎要錄に道統を論じて云く、

伏羲神農、黃帝、堯舜、禹湯、文武、周公の十聖人は、其德其知、天下に施して萬世其澤を被る、周衰ふるに及んで、天、仲尼を生ず、生民ありてより以來、未だ孔子より盛なるあらざるなり、孔子沒して聖人の統殆んど盡く、曾子、子思、孟子、亦企望すべからず、漢唐の間、其任に當らんと欲するの徒あり、又曾子子思孟子に於て日を同うして之れを談ずべからず、

宋に及んで周程張邵相續いで起る、聖人の學此に至りて大に變じ、學者儒を陽とし、異端を陰とするなり、道統の傳、宋に至りて竟に泯沒す、況や陸王の徒、算ふるに足らず、唯朱元晦大に聖經に功あり、然れども餘流に超出するを得ず、噫、道の人に託し世に行はるゝ、皆天にあり、其れ孰れか强ひて此に與らんや

語類の聖學篇を見るに、猶ほ一層詳に此旨意を叙述せり、之れを要するに、素行は孔子沒してより聖人の學脈殆んど絶え、宋明の學の如きは、異端の見に陷るものとするなり、故に曾子、子思、孟子の如きも、多く侚ばず、語類に「曾子、子思、孟子雖因循來於夫子不可企望」と云へり、宋儒に至りては、素行悉く之れを排斥し、痛擊酷評、至らざるなし、彼れ周濂溪を論じて「聖人之罪人、後學の異端」といひ、「唯一箇硜々乎小人哉」といひて氣燄大に揚れり、張橫渠を論じて「其所學雜駁、而其所本在老子」といひ、「其要論皆相違、不可費眼力」といひて輕侮すること甚だし、程明道を論じて「有釋老之隱」とし、其學を師とするものは「竟到放蕩風流」といひ、程伊川を論じて「惜

乎不窮聖學之要」といひて二程子を眼下に見下だせり、邵子を論じて「其害多太」といひ「後學之惑」といひ、又「其學雜於數、竟未得聖人之道」といひて道統に與らざるものゝ如くに論じ去り、李延平の如きも邵子と同じく「未通聖人之道」と斷言せり、唯朱子のみは、彼れ頗る之れを推尊せり、論じて曰く、

其聖門に功ある、孟軻の後、唯朱元晦なり、聖學の傳、宋に到りて每に過高の病あり、故に學者近きを舍てゝ遠きを求め、下に處りて高きを窺ひ、心を空妙の域に馳す、陸子の徒、專ら世に鳴り、周程張楊羅李多く儒を表して其標的、高尙にあり、朱子なかつせば、悉く左袵なり、

又曰く、

聖人之道、夫子沒して後明かならずと雖も、子思孟軻少しく其傳あり、漢唐の間、人皆聖人の貴ぶべきを知ると雖も、其學雜博にして純ならず宋の周程張子に至りて、皆曾點の風流を嗣ぎ、聖人の微旨殆んど絕ゆ、朱子日用の間に近く、其學を詳にす、是れ孟軻の後、唯朱子一人の功

なり、

素行此の如く朱子を推尊すと雖も、亦餘流の弊を免れざるものとせり、其言に云く、

唯朱元晦の學、先儒を壓す、然れども起ちて餘流に出づるを得ず、若し元晦をして周子の地に生れ、餘流の染なからしめば、必ず不傳の統を承くべし、云云、

陸象山、王陽明の徒を論じて「亂聖人之道、儒之異端也」といひ、痛く之れを貶黜せり、之れを要するに、漢唐宋明の學は悉く孔子の學脈を傳へざるものと論斷し、己れ獨り二千歲不傳の統を得たりと唱道せり、語類の序に云く

先生迹を本邦に垂れ、周孔の道を崇び、不傳の統を嗣ぐ、所謂君臣、父子、兄弟、夫婦、朋友、修身、聖學の要道、二千載の後、唯先生の學にあり、云云、

是れ門人の記する所といふと雖も、恐くは素行彼れ自身の胸中ならん、素行は聖人を以て日常行爲の標準とし、聖人を學ぶを以て學問の道と

せり、彼れ自ら精細に其工夫を配所殘筆中に敍述せり、云く、

初めて聖學の道筋分明得心仕候て聖學の理を定め候、たとへば紙を直にたつに如何樣細工能く候ても、定規無之手にまかせ候て立候へば、不殘ろくには立候ても、人々左樣に立せ候は不成候所に、定規をあてゝ、裁候へば大方幼若之者迄、先其筋目の如くには裁之候、其間に上手下手有之候へ共、其筋目は一通りに參候、然ば聖人の道筋と云を能く得心仕候ては右の定規を知候故、何事にても其人の學問程には、其道を合點可仕候、此故に聖學の筋には、文字も學問も不入、今日承候得ば、今日の用事得心參候、工夫も持敬も靜坐も入不申事に候、されば、たとへ言行正しく身を修め、千言萬句をそらんじ候者にても、是は雜學にて聖學の筋にては無之候と分明に知れ候、又一言半句申候ても、聖學の筋目を知候人と知れ候、是れ定規を以て正敷勘候故に候、

尙ほ其實際に應用するに當りて確に効驗あるべきことを論じて云く、

只今終に不見不聞候事物の上にても、右の學筋にて尋候得ば十ヶ條

に五七ヶ條はしれ申候、俗學雜學の輩は十ヶ條の内三ヶ條共合點參間敷候、其段は我等慥に覺候、依之世上の無學なる者に、博學なる者おとり候て人に笑はれ候事出來候樣に覺候、然ばいかたなくして鐵砲の玉をけづり、定規なく候て紙を直に裁んと仕候故、勞して功なく、常々苦み候て益更に無之、學を致候へば彌愚に成候樣に我等は覺候、

又云く、

聖學の定規いかたを能く知り、規矩準繩に入時、見る事能く通じ、聞く事明になりていかやうの業來りと云共、其品々勘やう明白に知るいが故、事物に逢て屈する事無之候、是大丈夫の意地たり、誠に心廣く體ゆるやか成とも云べきなり、此學相續ときは智惠日に新にして德自高く、仁自厚く、勇自立て、終には功もなく名もなく、無爲無妙の地に可至、されば功名より入て、功名もなく、只入たるの道を盡すのみなり、

素行は此の如く聖人を以て行爲の標準とし、此れに由りて遂に得道の妙境に達し得べしと思惟せり、故に師道を論じて「學必在師於聖人」と云

へり、其理想の高尙なる、以て知るべきなり、朱子學派は朱子を理想とし、陽明學派は陽明を理想とし、區々として相爭ふ時に當りて一切是等宋明の學者を排斥して、獨り超然として儒學の大本源たる孔子のみを己れが理想とせんとするの氣象、壁立千仞の概ありて殆んど當時の群儒を睥睨するに足るといふべきなり、

第三　宋儒と素行との差異點

素行一朝自ら獨創の見を立て、悉く宋儒を排斥して起てること上來論述せる所の如し、果して然らば彼れの主張する所は宋儒と如何なる點に於て異なりや、彼れが想考は、未だ一箇儼然たる組織を成すに至らず、然れども其宋儒と異なる點を擧げて對照せば、其立脚點の果して那邊にあるかを知るを得ん、

(一)仁……素行思へらく、仁は五常を兼ねて之れを言ふものにて、聖人の教は之れを以て極度となすと、然るに漢儒は愛を以て仁となす、故に卑きに過ぎて及ばざるものあり、宋儒は文仁を以て性となす、故に

更に高妙となりて實行に遠し、故に素行論じて曰く「共に聖人の仁を知らず、漢唐の蔽は少く、宋明の蔽は甚だし、仁の解聖人之れを詳にす」と、以て其差異の存する所を知るべし、

(二)理……素行理を論じて曰く「條理あり、之れを理といふ、事物の間、必ず條理あり、條理亂るれば、則ち先後本末正しからず、云云、凡そ天地人物の間、自然の條理あり、是れ禮なり」と、乃ち知る彼れは倫理秩序moral orderの如きものあるを認めて之れを理となせるを、然るに宋儒は性及び天を以て理となせり、故に彼れ宋儒の見解を斥けて差謬なりと斷言せり、

(三)中庸……素行は中庸を解して單に過不及なきの意となす、即ち兩極端に偏せざるの意となす、宋儒も亦不偏不倚の意となせり、然れども或は未發の中を性となし、是れに深遠幽窅の旨趣を附するものあり、素行之れを非とし、中庸にあらずとなす、或は中と庸とを分ちて相對立するものとなし、庸を以て別に工夫を立つるものあり、素行之れ

を非とし、聖人の本旨にあらずとなす、且つ彼れ宋儒の其未發に當りては當に敬以て之れを存すべしとの說を論破して曰く、

唯敬をいふて格物致知を謂はざれば、其存養省察、共に寂靜無事に陷らん、是れ宋儒切に靜坐を好み主一を謂ひ、全く聰明を蔽ひ、思慮を厭ひ、竟に異端を惡んで異端に入る所以なり、故に宋儒を宗とするの徒、其學者、一箇沈默謹厚の小人にして其成るに至りても亦硜々乎として是れ大本達道の中和に通ぜず、唯其文義を弄ぶのみ、

素行は宋儒の禪氣を帶ぶるを惡んで、聖人の正脈にあらずとなし、此痛擊を敢てするものなり、

(四)敬……素行は禮と敬と倂行すべきものとし、論じて曰く「聖人の敎、禮にあり禮行はるれば、乃ち敬存す、敬を專にすれば、乃ち禮、全からず」と、然るに宋儒は敬を以て學問の本となし、主一靜坐を說く、素行乃ち其弊を擧げて、謹厚沈默、迫塞狹淺なりと斷定せり、

(五)性……素行思へらく、理氣妙合して性あり、性は天の命ずる所にし

て善惡を以て言ふべきものにあらず、孟子の所謂性善の說は聖門の學にあらずと、然るに宋明の學者、孟子の性善說を嗜み、心學理學の說を立て、本然氣質の性を說き、本然の性を認むるを以て學的となせり、素行之れを破して「本然の性を認めんと欲す、是れ異端の敎なり」といへり、

(六)太極……素行宋儒太極の說を以て大に謬れりとなす、始めて太極圖を作れる周子を打擊して「甚だし聖人の罪人、後學の異端なり」といひ、又其所見を述べて「周子無極而の三字を以て太極の字の上に冠す」云云「太極の外、別に無極なければ、其言贅なり、太極の前、無極ありとするは、異端の說なり、聖人の敎は、唯、日月のみ、太極乃ち先後本末を含蓄じ、至れり盡くせり」といへり、

以上擧ぐる所によりて素行が學の大要を察知すべし、抑〻宋學は儒佛二敎の衝突混和して胚胎せるものなるが故に、之れを純粹なる原始的儒敎に比すれば、異種の分子を發見すること少からざるべきは、何人も豫想

し得べき所なり、素行固より原始的儒教に溯らんと欲するもの、其宋儒と相背馳するに至れること、亦必然の結果といふを得べきなり、

第四　宇宙論

素行が宇宙論に就いて二三の注意すべきものあり、彼れ宇宙を以て無躰無形にして始終なきものとせり、此說は全く邵子の說に反して、甚だ痛快なり、邵子嘗て天地を論じて「旣に消長あり、豈に始終なからんや、天地大なりと雖も、是れ亦形氣の二物なり」といひ、且つ奇怪なる計算をなし、十二萬九千六百年を以て一元となし、天地の消長已まざるを論じ、殆んど佛家成住壞空の說に類する事を主張せり、其事たる、固より荒誕無稽の甚しきものなりと雖も、宋學を奉ずるもの久しく相沿襲して其非を悟らざりき、然るに素行之れを喝破して曰く、

天地本と甲子の建つべきなし、何ぞ十二萬九千六百の數あらんや、天地人物一般に出來たる、其始の求むべきなく、其終の知るべきなし、旣に出來たるを言ふ、乃ち始あるに似たり、始あれば乃ち終あり、天地常

にして古今なし古今唯一般人以て古今ありとなすなり天地始終あれば無窮と言ふべからず(語類卷四十)

是れ以て邵子の妄說を破壞するに足るといふべし素行が宇宙を無躰無形とするの意を考ふるに有形の萬象を包圍する宇宙は唯茫々たるのみ何等の定形もなし凡そ定形あるものは消長を免れず夫の定形なきものに至りては消長のあるべき謂はれなし是を以て彼れ宇宙を以て無始無終とするなり乃ち論じて曰く

天地何ぞ開闢の說あらん旣に開闢なし故に未判の論なし天地は本と天地萬世以前又天地萬世以後又天地更に消長增減なきなり(同上)

乃ち知るべし彼れ天地創造の說を取らざるものなるを且つ彼れが天地の畢竟長在不滅にして些の消長なきを論斷するが如き殆んど今日の科學的思想に豫想するが如し彼が未だ現象と實在とを抽象して消長する方面と消長せざる方面とを指示するに至らざるは遺憾なりとなす彼れ又論じて曰く

人物又天地と長久なり萬古より今日に至るまで人物相生々す斯民や上世の後昆なり斯物や上世の遺種なり日月出沒盈虧あり人物の死生榮枯怪むべきなきなり（同上）

此れに由りて之れを觀れば素行は外形の消長以外に消長せざる內容の本體を否破せるに似たり個々の物體と個々の人類とは時々刻々變更して已まず然れども物質其れ自身は寸毫も增減するものにあらず

又生命其れ自身は生滅するものにあらず素行又論じて曰く、

起滅は人以て此說をなす故に滅を以てすれば乃ち滅し滅せざるを以てすれば乃ち滅せざるなり天地人物更に起滅の名づくべきなきなり（同上）

是れ立說の如何に拘はらず天地人物は元來起滅なきものなるを謂ふなり素行此の如く宇宙及び人物に消長なしとすれども假現的の消長は否定せず論じて曰く

天地の間に盈ち造化の功をなす所以のものは陰陽なり天地人物の

全体なり、互に消長往來屈伸、生々息むなきなり（要録）

彼れ乃ち陰陽の消長を否定せず、乃ち以て生々息まざるの徴となす、又曰く、

> 天地生々息むなく、唯自ら彊めて已まざるなり、之れを復して天地の心を見る、終りて復た始まる、始終なきなり、其徳至大至公、正大にして天地の情見るべきなり（同上）

其「終りて復た始まる」といふもの、頗る解し難しと雖も、兎に角宇宙の無始無終なるを看破し、且つ其生々存續して已まざるを認容するものなり、

第五　道德論

素行が道德に關する言論少しとせざるも、殊に吾人の注意を惹くものは、義利の辨なり、彼れ君子小人の分るゝ所、唯義と利とにありとし、論じて曰く、

> 人、知多し、故に欲も亦多し、欲亦充たすべからず、君子は義を以て利となし、小人は利を知りて義を知らず、君子の利は能く亨る、小人の利は

至からず、義利支離せず、利は義の和なり、義のある所利之れに隨ふ、(要錄)

彼れ又聖學と異端との別も義と利とにありとして曰く、

人皆聖を希ふ志あり、其和至らざれば、動もすれば、異端に陷る、異端の敎や人情を矯め、直情徑行、戎狄の道なり、聖敎異端、聖學俗學の辨、唯義利の間にあり、(同上)

是等の論、未だ必ずしも肯綮を得たりと謂ふを得ず、老佛の如き異端とする所のものも、決して利を目的とするものにあらざればなり、然れども君子は義を知り、小人は利を知りて義を知らずとするが如き、又聖學の主とする所義にありて利にあらずとするが如き、何人も認容するを躊躇せざる所なり、然れども彼れは又不思議にも、唯利の重んずべきことを論じて、殆んど今日の功利論者の如き口吻をなせり、其言に云く、

利は易の四德の一つ、書の三事の一つにして是れを嫌ふべきにあらず、人の心皆好利惡害の二つあり、是れを好惡の心といふ、此心にたよ

りて教を立て遂に聖人の極を述べ玉ふ、云云、此利害の心あらざれば死灰槁木にして人にあらず、人情は古今異ならず、四海共に同じ故に孟子性の事を論じて以レ利爲レ本といへり、唯其利を私して利に惑ふが故に、之れを戒め、人必ず利に過ぐるを以て聖人罕にの玉ふなり、當時の學者、動もすれば利害の心なりとて此心を絶せんとすること尤も誤れり、皆其知を究めざる故の惑なり、(謫居童問卷上)

又云く、

今天下の人情を以てはかるに、人の性、利を以て本とせざるはなし、利を本とするが故に、此道立ちて行はれ、君々たり、臣々たり、若此利心を失却せば、君臣上下の道立たず、善惡邪正辨ふる人なく、天地忽に覆へり、日月忽に地に落つべし、四夷は利の小を事とし、中國は利の極を事とし、悉く此利によつて萬物立ち、萬事行はるゝなり、學者只其實を知らず、其知を究めざる故に、此惑ありと知るべきなり、(同上)

是れ全く利を主とする論にして前に擧げたる義利の辨と相容れざる

ものあり、彼れが資財に富めりしを以て之れを考ふるに、或は眞に利を以て目的とせるにあらざるかの疑を生ぜざるを得ず、然れども其實、决して然らず、語類卷廿一の末に自警あり、其中言へるあり、云く、

吾れ生質元と太だ簡にして禮容に乏し、衣服居宅飲食皆儉に過ぐ、是れ簡に居りて簡を行ふ、云云、

又子弟の警戒中に左の條目あり、云く、

凡そ君子小人の機を明にすべし、君子は天地の大道に因りて少しも己れが利害を喩らず、小人は成敗利鈍を以てして其方を衒ひ其知を賣る、才知の及ぶ所同じと雖も、其根す所天壤の如し、毫釐の差、千里の謬、唯義利の辨にあり、玆誠を愼み思へば、知其れ判然たらん、

是れに由りて之れを觀れば、素行義(ホ)を捨てゝ利を取るものにあらざること論を待たざるなり、彼れが利の本たるを言ふもの、唯私利以外に別に公利の存することを認定するに因るのみ、殊に財寶に就いては素行一種卓

(ホ)尙ほ後に出だせる武士道論中の辨義利の條を參看せよ、

抜の見解を有せり、武教小學の財寶器物章に云く、

天下の財寶は天下の財寶にして能く交易利潤して萬物を通用す、故に是れを財寶といふ、財ある人皆費を厭ふことを言ふて費を知らず、金玉堂に盈ち、財器府にありて施し用ふることを知らざれば、天下の財、一所に滯りて天下の用をなさず、費蔽何事か之れに如かんや、人財を好めば、大概之れを吝嗇す、故に聖人金玉を以て財となさず、得がたきの財を貴ばず、況や土器書軸銅鐵の器を藏して之れを財とし、千金を以て之れに易ふ、其惑甚いかな、

是れ殆んど今日の經濟學を學び來たりて立論するものゝ如し、固定資本多きは決して國の利福にあらず、財寶は流通して活用をなすを要するものなり、此論によりて之れを考ふるに、素行は決して利の爲めに誤られたるものにあらず、況や吝嗇を戒むるをや、

第六　國躰論

當時の儒者が滔々として支那を崇拜し、之れを中國若くは中華と稱し、

殆んど東夷を以て自ら甘んずるが如き狀あるに反して、素行は自然時流に拔き、日本を以て支那に優れりとなし、之れを中國といひ、中朝といひ、又中華文明の土といへり、其中朝事實を著はし、又武家事記を著はすもの、皆祖國の起原に注意を惹かんとの意に出づるなり、武教小學の序に云く、

有宋の晦菴、小學を述作して、人生れて八歲より十四歲に迨ぶまで敎ふるに、灑掃應對進退の節、親を愛し長を敬し友に親しむの倫を以てし、且つ嘉言善行を以て終篇となす、其功偉なるかな、盛なるかな、然れども俗殊に時變じ、倭俗の士用ふる所、尤も泥着して、闔國に居て異域の俗を慕ひ、或は禮義を學ぶに異風を用ひ、或は祭禮を爲すに異樣を用ふ、皆是れ理を究めざるの誤りなり、學は物に格り知を致さんが爲めにして異國の俗に效はんが爲めにあらざるなり、況や士たるの道、其俗殆んど異俗を用ふるに足らんや、

此れに由り之れを觀れば、素行の見解反りて正し、我邦は自ら我邦の國

躰あり異域は自ら異域の國躰あり、異域の國躰に心醉して我邦の國躰を侮蔑するが如きは倒逆の甚しきものなり況や日本と支那とを比較すれば日本逈に支那に優るものあるに於てをや、素行自ら其國躰を尊重するに至りたる次第を配所殘筆中に述べて曰く、

我等事以前より異朝の書物を好み、日夜勤候て近年新渡の書物は不存候、十ヶ年以前迄異朝より渡り候書物大方不殘令一覽候、依之不覺異朝の事を諸事宜く存候、本朝は小國故異朝には何事も不及、聖人も異朝にこそ出來候へと存候、此段は我等許に不限、古今の學者皆左樣に心得候て、異朝をしたひ學び候、近頃初めて此存入甚誤なりと知候、信耳而不信目、棄近而取遠候事、不及是非、誠に學者の通病に候、詳に中朝事實に記之候得共、大概を爰に記置候、

と、此の如く其見解の一轉せし由來を述べて更に其旨意を辨明して曰く、

本朝は天照大神の御苗裔として、神代より今日まで其正統一代も違

候事無之、云云、民やすく國平に萬代の規模立て、上下の道明かなるは、是れ聰明聖知の天德を奉ぜるにあらずや、況や勇武の道を以ていはゞ三韓を平げて本朝へ貢物をあげしめ、高麗をせめて其王城をおとし入れ、日本の府を異朝に設けて武威を四海にかゞやす事、上代より近代まで然り、本朝の武勇は異朝までも恐れ候得共、終に外國より本朝を攻取候事はさて置き、一ヶ所も彼處へ奪はるゝ事なし、されば武具馬具劍戟の類、兵法軍法戰畧の品々、彼國の非所及、是れ武勇の四海にまされるにあらずや、然れば智仁勇の三は聖人の三德なり、此三德一もかけては聖人の道にあらず、今此三德を以て本朝と異朝とを一々其しるしを立て校量せしむるに本朝はるかに優れり、誠にまさしく中國といふべき所分明なり、是れ更に私に云ふにあらず、天下の公論なり、云云、

若し素行をして今日に再生せしめば、益、其言の日淸戰爭及び聯合軍等によりて證明せられたるに驚かん、我邦の皇統連緜として數千歲を經

るが如き、世界萬國、固より一の類例だもあるなし、又如何なる強國も、曾て他國の侵害を受けざるもの之れなきに、獨り我邦の萬國の間に超然として金甌無缺の國體を持續するが如き、我邦特長の顯著なるものに相違なし、果して然らば素行の論ずる所架空の誇大心に出でたりと謂ふを得ず、但し兵器の如きは、未だ必ずしも精良ならざりしこと今日にありては、餘りに明瞭となれり、然れども素行の所謂彼國は支那朝鮮等を指したるが故に、是れ亦一概に虛妄なりと斷言するを得ざるなり、

第七　異端論

素行は曾て老莊の學を修め、又佛教を喜び、五山の僧徒と會見し、隱元禪(一)師にも接し、佛法の大意を質したることありたり、然れども彼れ遂に以て異端となし、學は孔子の聖に溯るを以て目的となし、道は我邦に立するを以て主眼となし、大に破邪顯正の利劍を揮へり、彼れ配所殘筆の中に異端に對する態度を述べて曰く、

(一)我邦黃檗宗の祖師なり、彼れ萬治元年江戸に至る、因りて素行往いて之れを訪ふ、

學問の筋、古今共に其品多し、是れによつて儒佛神道共に各其一理有之事に候、我等事幼少より壯年迄專ら程子朱子の學筋を勤む、依之其頃我等述作の書は、皆程朱の學筋迄に候、中頃老子莊子を好み、玄々虛無の沙汰を本と存候、此時分は別して佛法を貴び候て、諸五山の名知識に逢ひ、參學悟道を樂み、隱元禪師へ迄令相看候、然れども我等不器用故に候哉、程朱の學を仕候ては持敬靜坐の工夫に陷り候て、人品沈默に罷成候樣に覺え候、朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性心の作用、天地一扱の妙用、高妙なる樣に被存候て、何事も本心自性の用所を以て仕候故、滯處無之、乾坤打破仕候ても、萬代不變の一理は惺々洒落たる所無疑存候、然れども今日の日用事物の上に於ては更に合點不參候故、是れは我等不器用故に可有之候、今少しく合點候て可參と存候て、彌此道を勤め候、或は日用事物の上の事は、甚輕儀、如何樣に仕候ても不苦儀とも存候へども、五倫の道に身を置き、日用事物の間に應接仕候へば左樣には不罷成候てつかへ申候、然れども樹

下石上の住居、閑居獨身となり、世上の功名をすて候へば、無欲清淨なる事、言語を絶し、妙用自由なる所、可有之樣に覺え候に、天下國家四民の事物に渡りては、大なる事は不及言之、細事にても、世上の無學なるものの程にも合點不參候、或は仁を躰認せしむれば萬の間に天下の事相濟候と存候、或は慈悲を本に仕候へば過去遠々の功德になり候と迄申候て、實は世間と學問とは、別の事になり候、他人は不存、我等は此の如く存候故、是れにては學問とも至極と不被存候云云、

此れに由りて之れを觀れば、素行宋儒の學より老莊乃至禪の學に至るまで次第に攻究し、其利害得失の存する所を看破せり、程朱の學の動もすれば、人をして活潑の態度を失はしむることあるは素行の言の如し、老莊及び禪によりて出世間上の觀念を得、圓融無礙の妙境に達すべけれども、世間に疏く、事實に遠ざかるを免れざること、亦素行の論の如し、素行此の如く宋學の弊を知り、尋いで又老莊及び禪の弊を知りたるが故に、遂に古學といふ一の血路を開いて自家の堡壘を固うするに至れ

り、

素行又語類〔卷三十三〕及び謫居童問〔卷中〕に異端を論ずること頗る詳密なり、宋學に就いては彼れ語類の中に鐵案を下だして曰く、

周程張李の大儒、亦其論說する所、大概禪佛にあり、只朱子其門に傑出し、雜學を明辨して之れを闢く、其功尤も大なり、然れども猶ほ周程張李を宗として以て本原を立つ、故に其論ずる所、本原に到れば、便ち又禪佛に入る、此れに由りて之れを思へば、聖學の世に明かならざる、亦命なり、

素行は此の如く宋學を以て異端を混入するものとせり、又陸象山が自他の辨、王陽明が致良知の工夫の如きも、皆釋氏に異ならずとなし、謫居童問中に論じて曰く、

元明の學者悉く程朱の學を宗として、聖人の教殆ど廢す、其故は程朱の解を本とするが故に、聖人の言行を悉く程朱の私見に落在す、是れ乃ち聖をして塗炭に坐せしむると云ふなり、

乃ち知るべし、宋學は勿論、元明の學と雖も、素行に取りては異端同樣なるを、是れ其佛敎臭味を有せざるものなきが爲めなり、素行種々なる點より佛敎を非議すと雖も、歸する所は總べて超絕的觀念を拒絕して、單に日常彝倫の道を講ぜんとするにあり、彼れ本と實際的世間的の人にして、深く哲理を究明するを好まず、是を以て孔子を以て唯一の理想的人物とするに至れるなり、

第八　武士道論

敍論

上來略〻素行の學說を敍述し了はれりと雖も、尙ほ其武士道に關する見解を紹介せざれば、猶ほ龍を畫いて睛を點せざるが如し、抑〻武士道は鎌倉時代より發達し來たれる一種の精神的訓鍊 mental discipline にして、德川時代に至るまで武士たるもの、此れに由りて身を立てざるはなし、若し其性質を言へば、是れ全く神儒佛三敎の融合調和して胚胎せるものにて、我邦に一種特異なる產物なりといふべし、希臘の「ストア」主義 Stoi-

cisms の如き、中世の「ナイトフード」Knighthood の如き、今の「ゼントルマンシップ」Gentlemanship の如き、差々武士道に似たる所なしとせざるも、未だ必ず武士道と同一視すべからざるものあり、武士道は人倫の變に臨んでは氷雪より厲しき節操を露はすべき極峻極烈の志氣を與ふるものにて、「ストア」主義若くは「ナイトフード」若くは「ゼントルマンシップ」の及ぶ所にあらず、殊に切腹の如き、獨り武士道に於て之れを見るのみ、然るに素行彼れ自身は武士道の實現なりき、即ち武士道の權化 Verkörpering なりき、何を以て然か云ふかなれば、武士道は鎌倉時代より發達し來たれり、といふと雖も、未だ曾て素行の如く、武士道を理會し、實行し、且つ論述せしものあらず、素行以後亦素行に及ぶものあらず、試に武藝小傳を繙閱せば、兵法家の少からざりしを知ると雖も、未だ曾て兵法家にして素行ほど學識あるものあるを聞かず、素行は啻に學識ありといふべきのみならず、實に武士道を胚胎せし神儒佛の三敎に通曉せり、然り深く之れに通曉せり、兵法家中に於て此の如き人を見出ださんことを思ひも

寄らざるなり、又鎌倉時代より以來碩學鴻儒、其人に乏しからずと雖も、未だ曾て素行ほど兼ねて兵法に精はしきものあるを聞かず、要するに、素行は第一流の學者と第一流の兵法家とを一身に合一せしものにて、我邦に於ては、殆んど未だ曾て有らざる所の人格なりき、若し素行が特色の存する所を擧ぐれば、是れ其最も顯著なるものに相違なし、若し又武士道を論ぜば、素行が學問、性行、敎育、感化等を看過するを得ず、假りに之れを看過すとせんか、是れ武士道の核子Kernを看過するなり、素行が武士道の敎育を施したる結果として、復た之れを實現し來たれるものは四十七の義士なり、義士の行爲、實に秋霜烈日の如く、千古磨滅すべからざるものあり、是れ豈に武士道の煥發して其痕迹を遺せるものにあらずして何ぞや、然るに其淵源を問へば、素行其人の學問にあり、是れ素行が學問の群儒の間に於て一異彩を放つ所以なり、素行が武士道の精神は武敎小學にあり、然れども該書は簡約にして細目に渉らず、故に吉田松陰の武敎講錄と併せ講じて始めて全きを得べきなり、然れども素

行自ら精細に武士道を語類の中に說く、語類の卷廿一分ちて上下二卷となす、是れ全く武士道を論ぜるものなり、試に之れを一讀すれば、痛快の文字、雄壯の氣象、紙上に躍如たり、學者の最も意を用ひて翫味すべき所なり、頃ろ新渡戶稻造氏 Bushido. The Soul of Japan を著はし、聊か武士道の趣意を海外に紹介せんことを企圖せり、今其書を見るに、惜いかな、一言も素行の見解に及ばず、故に尙ほ武士道の精髓ともいふべき重要なる點を遺漏せること、推して知るべきなり、今左に素行が士道論の大意を紹介せん、

素行は士道論を第一立本、第二明心術、第三練德全才、第四自省、第五詳威儀、第六愼日用の六篇に分ち、最後に附錄として自警、子弟警戒、及び御奴警戒を揭載せり、

第一、立本……　此篇分ちて(一)知己職分、(二)志於道、(三)在勤行其所志の三章となす、

(一)知己職分

農工商已むを得ずして相起れり、而して士は耕さずして食ひ、造らずして用ひ、賣買せずして利す、其故何ぞや、我れ今日此身を顧るに、父祖代々弓馬の家に生れ、朝廷奉公の身たり、是を以て耕さず、造らず、沽らずして士たり、士として其職分なくんばあるべからず、職分あらずして食用足らしめんことは遊民と云ふべし、是れ能く心を付けて我身に就いて省み考ふべき所なり、士若し勤めずして一生を全く終はるべくんば、大の賊民といふべし、然れば士何ぞ職業なからんと自ら勵んで士の職分を究明いたさんには、士の職業始めて顯るべきなり、凡そ士の職といふは、其身を顧み、主人を得て奉公の忠を盡くし、朋輩に交りて信を厚くし、身の獨りを愼んで義を專とするにあり、然るに身に父子兄弟夫婦の交あるは、天下萬民なくんばあるべからざる人倫なりと雖も、農工商は其職業に暇あらざるを以て其道を盡くすを得ず、士は農工商の業をさし置き、此道を專として、三民の間苟も人倫をみだらん輩をば速に罰して、以て天下に人倫の正しきを待つ、是れ士に文武の德知備はらずんばある

べからざる所以なり、此勤めあらざらんには、父母の惠みの盜、主君の祿を貪りて、一生の間、唯盜賊の命を全くするに同じ、甚だ以て歎息するに堪へたり、故に士の本とするは職分を知るにありとは云ふなり、

（二）志於道

人既に我職分を究明するに及んでは其職分を勤むるに道なくんばあるべからざれば、道に志出來るべき事なり、而して道に志出來ば、我れより先ちて志ありて能く行ひ得たらん人を求め、是れに案内を賴んで其引導に任すべし、其師たる人の行跡違ふ所あるか、言は似て其事物に應ずる處明かならざらんには、速に去りて從ふこと勿れ、邪師の教に久しく染まるときは、覺えず其人に荷擔ありて、誠の道に彌遠ざかるべし、若し外に師とすべき人なくんば、自ら立ち歸りて内に省み、聖人の垂れ玉へる格言を勤めんには、聖人の大道、是に於て得べきなり、假令ひ士の職分を知るも、道に志す所あらざれば、知ありて行なく、全きこと能はざるなり、

（三）在勤行其所志

曾子曰く、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎と、士は其器尤も廣く能く忍ぶ處あらずしては重きに耐へ、遠きを致すこと叶ふべからざるなり、職分を知り其道に志すといふとも勤めて其志す所を行ふにあらずしては言ばかりにして其實あらざるなり行ふといふとも一生是れを勤めて死して而して後已むにあらざれば中道にして廢す、道の遂ぐべき處なし、故に勤行を以て士の勇とするなり、然れども利害の間、色欲の妄動、名根の萠す所、因循久しきを以て我れに大力量あらずしては必ず引きおとされて其誠を盡くすこと叶ふべからず、我れに大力量を出ださしむるは志の深淺によることなり、志す處淺くしては勤むる處深かるべからざるなり、凡そ大丈夫といふは是れ士の道に志して其志す所をたしかに行ひ勤むるものゝ事なり、其厚く正しき所を此の如く勤めずしては士の本の立つといふべからざるなり、

第二、明心術」……此篇分ちて(一)養氣在」心、論養氣、(二)度量、(三)志氣、(四)溫藉、(五)風度、(六)辨義利、(七)安」命、(八)清廉、(九)正直、(十)剛操の十章となす、

(一)養氣在」心、論養氣

浩然の氣といふものは、孟子も難」言と述べられたるが故に、今以て此の如しと云ふに處なし、唯心は氣に因つて或は動搖し、或は悶苦するものなれば、此處を能く心得て、常に道義を以て之れを養ふて氣の餒えざるが如くならしむるにありと知るべし、此氣を養ひ得るときは、至大至剛にして能く萬物の上に伸びて、物に屈する處あるべからざるなり、心は氣に因るが故に、氣能く靜なる時は、心則ち靜なり、氣動く時は、心之に動く、是れ心氣兩樣ならざるを以て更に隔たる處なし、心は內にして氣は外に動くものなれば、先づ氣を養ひ得るを修身存心の本とすべきなり、養といふは我天質の氣の過不及を考へはかりて、其過ぎたるを損し、其及ばざるを補ひ、事物の間に於て動靜宜しきに相叶ふが如くすべし、是れ日用の工夫なり、人の氣必ず揚り易く、動き易し、此處を了簡して氣

を養ふて其環る處を順和せしめ其動く處を妄りならしめざれば動靜處を得て氣に虛妄なきを以て心是れが爲めに妄動することあらざるなり、

(二) 度量

士は其至れる天下の大事を受けて其大任を自由に致す心あらざれば、度量寬ならずしてせは〳〵しきになりぬべし、されば長江大河の更に其限りを知るべからざるが如く泰山喬嶽の草木鳥獸を隱すが如くにして其胸中には天下の萬事を容れて自由ならしむべし是れを度量といふ天空任鳥飛海濶委魚躍大丈夫不可有無此度量と云ふは此心を云へるにや力量は從容として萬物を整へ談笑して四海を從へ地の重きを負ひ海の廣きを涵すにあり天の大にして外なく日月の光の通ぜざる所なきは是れ自然の力量なり我れに氣を養ふ所薄くして大丈夫の本意立たざる時は利害好惡に就いて心斯に動き氣斯に妄作して眞を失ふべし人皆物に當りてせく處出來たるは氣妄動して處を失ふを以

てなり、更に寛廣の處なし、大丈夫生死一大事の地に臨み、白刃を踏み、劍戟を遶らしめて、剛操の節を現はし、始めて天下を泰山の安きに置くを得べきなり、

（三）志氣

志氣とは、大丈夫志す處の氣節を云ふ、大丈夫たらんもの、少しき處に志を置く時は、其爲す所、其學ぶ所、皆至りて微にして、大なる器にあらざるなり、後漢の趙温は、大丈夫當雄飛安能雌伏せんと云へり、大丈夫の氣節此の如くならざれば、必ず小事に屈して一大事をなすこと能はず、古の臣たる人は、君を堯舜に致さんことを現はし、一夫も其所を得ざるを以て己れが恥とし、父に事へては曾子の如くにして可なりと、未だ飽き足らざるの志を置く、是れ皆志氣の高尚にして、小成小利を事とせざるが故なり、

（四）温藉

温藉と云ふは、含蓄包容の意あるなり、内に德を含み光を包みて、外に圭

角あらはれざるの事なり小智短才なる輩は器せばきを以て我知を立て人に誇り世に衒ふ度量氣象よく萬物の上に卓爾たるものは更に功を立て名に誇る處あらず而して更に惡厲の氣あらず溫和自ら顏色に發し仁人君子の姿あらはれ物に交り人に伴ふ時は陽春のうらゝかにして能く物を利するが如し是れ溫藉の致す所なり碧藏澤自媚玉收山輝光大丈夫不可有無此溫藉とは此心なるべし

(五) 風度

大丈夫は一向剛操を立て其風俗いやしかるべきに似たり是れ大丈夫の本意にあらず月至梧桐上風來楊柳邊大丈夫不可有無此風流と云へるは風度の世俗にあらず明珠の側にありて自然に人を照すが如き風情をいへり少しも拙く鄙き質あらず水晶の瓶に秋水を蓄へ白玉の盃に氷を載せたらんが如く聊も缺けたる處なき風情是れを大丈夫の風度といふべきなり是れ內に諂ふ處なく外に屈すべき物なく何くに行くと雖も其氣常に萬物の上に伸て鳶飛んで天にいたり魚躍りて淵に

入、月の梧桐に來たり風の楊柳をさゝふに異ならず、此の如きの風度を養ひ得ずしては、一塵にも染らざるが如くならんや、尤も愼むべき也、

(六)辨義利

大丈夫存心の工夫、唯義利の間を辨ずるにあるのみ、君子小人の差別、王道覇者の異論、總べて義と利との間に之れあり、いかなるをか義といはんとならば、内に省みて羞ぢ畏るゝ所あり、事を處して後自ら謙す、是れを義と云ふべし、いかなるをか利と云はんとならば、内欲を縱にして外、其安逸に從ふ、是れを利と云ふべし、古今の間、學者道に入るの始末、唯義利の辨を詳にするにあるべきなり、聖人君子の教、生を嫌ふて死に就き、害に走りて利を避け、勞して逸せざれと云ふにはあらず、聖人君子の好み惡む處も、亦凡人に異なるべからずして、其間惑を辨ずるにあるのみ、いかなるをか惑と云ふべきとならば、唯自らの身を利して外を顧みず、是れを惑と云ふなり、自らの身を利することを好むは、是れ又天下同情にして、聖人君子は能く其輕重を辨ず、輕重と云ふは、君父兄師夫は、我が

ために重し、臣子弟幼婦は我がために輕し、天下國家は身よりも重し、視聽言動は、心より輕し、此輕重を詳にする時は、或斯に止むべし、其故は生死の塲、此一刹那にありと云ふ時、君の爲め又は人の爲め其外我重きものゝ爲めに害あらんに於ては、速に死して顧みるべからず、我重きものの爲めに害なきに於ては、能く保ち能く養ふて命を全くするにありぬべし、

(七)安命

人の苦しむ所は、死亡禍難貧賤孤獨なり、人の樂む所は、此うらなり、苦しむ時は、是れが爲めに心安からず、樂む時は是れが爲めに心變ず、故に憂喜に當りて其志す所變じ、心斯に存せざるは、尋常の情なり、大丈夫は此時に於て心を存し命に安んず、是れ富貴貧賤に拘はらざるが爲めなり。凡そ命と指す處は、人の造爲して叶はず、天自然に其形をなし、其理其事あらしむるをいふ、されば養生を盡くして命こゝに縮まり、義當に死すべきの塲至る、是れ則ち命なり、時至り地こゝにはさまり、勢遂に衰へて、

知者賢者ありと雖も是れを與ふるに益なくして滅亡に及ぶ、是れ命なり、凡そ人の世に立つことは、第一に時を得るにあるべし、第二に其秀づべき家に生るゝにあり、第三に其人其時に相應の氣質あるものなり、此三者相叶ふて初めて時を得るなり、此三者の一も我作爲すべき所にあらず、唯天然自然のことわりなり、その間少しの才覺を以て少しの富を得ることありと雖も、五十歩百歩の違ひばかりにして、貧富處を變ふるに至るべからず、勤めても叶はざるものとならば、天の命のあることとなれば、唯我好む所の義理に安んずべきなり、されば松は同じく松にして高砂の松、住の江の松と高下山河遙に隔りたる地に生ず、而して或は高きによりて賞せられ、或は卑きに隱れて人に知られず、其定まる所天の命にして、人のわざにあらず、大丈夫常に此天命に安んじて、富貴と雖も、誇るべからず、貧賤と雖も、惡むべからず、是れ天の命にして、己れが已むを得ざる所なればなり、然るときは、貧富貴賤は共に心の付く所にあらず、歳寒して初めて青松の凋落に獨りひさしき時、其存心する處の剛操

も現れつべきなり、命に安んぜずして、強ひて妄動し妄作せん事、大丈夫の尤も愼むべき所なり。

（八）清廉

大丈夫内清廉を守らざれば、公に事へ、父兄に從つて、利害此に萠して、天性の心を放ち失ふべし、清廉とは、外の賄賂、内の貨財、更に心に付かずして、世人の行ひ難き所に卓爾と立ちて更に屈せざるをいふ、内に清廉なる處あらざれば、外少しの利害に奪はれて、其守りを失ひ、心こゝに放失すべし。

（九）正直

大丈夫の世に立つ、正直ならずんばあるべからざるなり、其義ある處は、守りて更に變ぜざるの謂なり、其親疎貴賤によらず、其改むべき所を改め糾すべき事を糾して、人に諛はず、世に從はざるの謂なり、松到天而不屈、蘭無人而亦香、是則大丈夫正直の立ち處といふべし、直方大は易の重んずることなれば、君父に事へて世に立つことは、夙に夜に唯正大直方

を本とし、世俗の名譽に拘らず、仁義にあらずしては、君の前に陳せず、大節に臨んで凛然として四海にまたがる、是れ正直にして心を存する所以なり、

(十) 剛操

大丈夫の世に在る、剛操の志あらざれば、心を存すること能はざるなり、剛は能く剛毅にして物に屈せざるをいふ、操は我義とする志を守りて、聊か變ぜざるの心なり、大丈夫此志あらざる時は、利に屈し酒に溺れ色に惑ひて、遂に義を忘れ、生死の大事を違へ、大節に臨んで約を變ずべし、豈に是れを大丈夫の志を立つる所といふべけんや、士として大丈夫のきたいなければ、碌々たる小書生の志のみ、何ぞ天下の大器たらんや、

第三、練德全才……此篇分ちて(一)勵忠孝(二)據仁義(三)詳事物(四)博學文の四章となす、

(一) 勵忠孝

大丈夫世に在り、出ては君に仕へ、朝廷に交り、入りては父兄に仕へ、家を

齊ふ、故に天下の政事を助け、萬民の憂を救ふ、不順の逆臣ある時は、自ら將として閫外の任を受け、籌を帷幄の裏に廻らして、功を萬代の上に立て、或は使を奉じて大事を決し、君命を辱しめず、或は死を致し命を輕くして、百年の壽を一刄の下に棄つ、是れ君に事へて忠を勵ますなり、而して父母に於て力を竭し、色養永く慕ふて、死を致して顧みざるは、是れ内に於て盡す所の孝にあらずや、大丈夫の責、甚だ以て重し、是を以て常に氣を養ふて安靜ならしめ、心を存して義理を味ひ、是を君父に移して忠孝の實を詳ならしむる、是れ士の勤なり、出て君に仕ふるに、德を以てせず、入りて父兄に仕へて其孝弟に誠あらざらんには、養氣存心の用、更にあらはれず、抑〻德と云ふは內に養ひ存する處を用ひて、其誠を盡して究理せざるなし、是れを名づけて德とす、德を練る事は、先づ忠孝を勵まして其誠を盡し、君父に事ふる間、天性に從ひ、更に違はざるを以て本とすべきなり、君父は人倫の大綱にして、我事ふる處、誠を盡さゞれば、君臣父子の道、明かならず、誠を盡さんとならば、德を練らずしては、其實必ず薄

うして或は害に當りて變じ死に臨んで變ず凡その事大節に臨み大變に逢ひ大事を決するに至らずしては其德發見する事あらず非常の變こゝに來て臣とし子として明白に其誠を盡さんことは德以て正しからずしては叶ふべからざる事なり。

(二) 據仁義

仁は天地生々の心にして惻隱の情發して節に中たる愛の用なり義は事に處して羞惡の情ありて內に恥づる處あるを推して節に中たるの名なり然れば仁の心あらざれば寬容大度のかたちあらはれずして其好惡に陷溺す是れ仁を以て聖人の源とする所以なり義の心あらざれば物に處するに節あらざるを以て截斷果敢することなし仁を務むる時は禮こゝに立ち義を務むる時は智こゝに明かなり聖人の人に教ふる處仁義の二つに出でず仁を以て德の本とし義を以て事を致すの用とす大丈夫の志す道仁義を據として內の德を練らずんば何を以てか其實を得べけんや。

（三）詳事物

君子仰いで天を視、伏して地を觀、中にして人物を察すと云ふ、是れ天地人物の事を詳に究明して而して後、聖人の才こゝに逞しく衆理備りて萬物に應ずべし、德は本と天德、仁義は人の道なれば、誰れか是れに由らざるものあらん、德を練り仁義に據ると云ふとも、事物の品々にして千差萬別たる處を盡さゞれば、事に處するの道自由ならずして、其才能く三才に通ぜざるなり、君父に事へ、自ら修むるの間、皆此の如し、大丈夫一世の民を救ひ、功を萬代に立て、天地の德を翼け、聖人の誠を盡す處、唯此德を立て才を全くするに在りぬべし、

（四）博學文

古今の人物甚だかはり、異域のことわざ尤も異なり、德天地に等しきあり、才萬物に及ぶあり、其用捨は我れにありて、其事跡は書にのこれり、故に博く古今の書を閲して、事物の用を詳に辨ずべし、學者或は記誦して古今の事を覺えそらんじ、是れを以て世に誇らんことをなし、或は詩文

を弄んで詞章を必とし、是れを以て學とするあり、皆大丈夫の學にあらず、一箇の老博士三尺の書生が筆硯を事として舌耕傭書して、人の脚下にうづくまることは、大丈夫の本意と云ふべからざれば、如何なるをか學文と云ふ、古の聖人の道を以て本と仕り、賢人君子の行跡を助けとし、古今時代の變化、人物の理を辨へ、其見聞を博くして、其才を增し智を磨くこと是れを學文となす、

第四、自省……此篇は唯自戒の一章のみ、

（一）自戒

大丈夫常に自ら省みて其氣質の後れたる處を考へ、我好惡の癖する處を計りて、其後るゝに鞭うつべきなり、凡そ天下の事、其成る處堅く、其起る處詳なりと雖も、改め正さず、省みること明かならざる時は、必ず弊ありて之れを頼む時は失乃ち生じ、時を經て破るゝことあり、故に其事物を致し初むるの節、詳に究理して、其事物を全からしむと雖も、時を考へ節をつもりて、屢是れを省み察して其弊を改め、其時に合はざることを

繕ひ變ぜしむるが如くに仕らずしては、終を全くすることあるべからざるなり、

第五、詳威儀……此篇は分ちて(一)毋不敬(二)愼視聽(三)愼言語(四)愼容貌之動(五)節飮食之用(六)明衣服之制(七)嚴居宅之制(八)詳器物之用(九)惣論禮用之威儀の九章となす、

(一)毋不敬

格致を明かにし、天地の大德に比し、聖學の源流を正さんとならば、身を敬せざる時は何を以て其要を得べき、身を敬するの術、先づ威儀の則を正しくするにありぬべし、爰に威儀の則、何をか先にせんとならば、身に於て視聽言動を非禮の爲めに感動せしめざる、是れを威儀の要と謂ふべきなり、而して威儀いかんして正しきとならば曲禮に毋不敬と云へる此三字を能く工夫するにあるべきなり、禮節の本、毋不敬の三字に極まれり、敬と云ふは默して言はず、形を縮めて動かざるをいふにあらず、事々に於て疎にせず、輕んぜず、能く其理を究め計るの謂なり、疎にし輕

んずる時は怠出來て心こゝに放失し唯情欲にまかするのみなり敬と怠とは相敵して敬ある時は怠滅し怠ある時は敬滅す總べて心性は內にして身體の動靜視聽の物に交るは是れ外なり內外一致にして別ならず外其威儀正しき時は內其德正し外に亂るゝ處あれば內必ず之れに應ず威儀は禮の形なり禮は毋不敬を以て本とす威儀に志あらん輩平生毋不敬の工夫あらんには道更に遠かるべからざるなり威は其容貌より言語に至るまで輕々しからず甚だおごそかにして人以て畏るべきの形なり儀は容貌の物に交り言語の事に及ぶまで詳に究明するを以て其姿人々皆法り手本に仕るべきに宜しき是れを儀と云ふ是れ內に敬を思ふて常に容貌言語を究理するが故に此に及ぶなり身を修むるの要は威儀を詳にするにあり威儀は毋不敬に止まれり

(二)愼視聽

孔子顏淵に謂ふて曰く非禮勿視非禮勿聽と如何なるをか非禮と云ふべきならば事物見聞するの形威儀を失ふて己れが私にまかする是れ

を非禮と云ふ、彼の邪色を見、邪聲を聽くのみ非禮と云ふにはあらず邪色邪聲は、外より來たるもの、我れ是れを欲せずと雖も、已むを得ずして見聞せば、是れを非禮の視聽と云ふべからず、正色正聲は非禮の色聲にあらずと雖も、見聞するに威儀を失ふて、唯情欲にまかせば、是れ非禮の視聽なり、視聽すべきもの、各禮あり、一つも其節に達へば、是れ禮にあらず、大丈夫の世に立ちて身を正しくし、萬人の法るべきに規範たること、先づ視聽の威儀を愼むにあり、

(三)愼言語

言語は内を通ずるの用あり、戲言なれども思より出づといへり、言語は内に動いて外に發するが故に、妄動すれば、必ず妄言あり、動もすれば騷がしく、輕忽にして節を過ぎて言を發し、多く語りて、或は當座の僞言をなし、或は過言して人を怒らしむ、凡そ口は開いて言ふに易しと雖も、言に節を以てせざる時は、多言饒舌にして更に益なし、行其言を踐むこと能はざるを以て、多くは虛言食言に及ぶ、甚だ恥づべきなり、故に言必ず

節わりと云ふて、此方より言ひ出ださんには時宜を詳に計り、其節を考へて言ふべし、若し輕忽にして口にまかせば、多言にして言に失多く、我れ大に勞役して、威儀こゝに正しからず、人聽いて益なし、我れ言はんと思ふ時は、氣を下して、氣を落ち付け、輕く疎草ならしめず、聲を卑うして調子をちがへず、其言を靜に落し付けて言ふべきなり、疾言する時は、威儀かけて傍人聽きつけず、聲高き時は、事なくして人を驚かす、其上辭の詳に說くことの多きは、聲初めより高くしては終りに至り難し、禮に曰く、口容止、聲容靜、氣容肅と、此の如くなるべし、而して人の問ふ事、尋ぬる事、應諾の節、尤も其時宜を詳にして安定ならしむべし、若し其言ふ事、答ふる事に知慮の入るべき儀、詳論講談、或は公私の用事、或は世上人生の噂に及ぶ時は、必ず左右に色退辭讓して、已むを得ざる時は、其言を詳にすべし、己れさかしらして、疾言卒爾として答ふるは、禮讓のかく處、威儀の整はざるなり、總べて人の言ふ所を詳に聞屆けずして我がものがほに受け答へを致せば、輕忽の失あるを以て應諾必ず違ふ、知らざる事を知

りたりと云ひ、覺えざる事を覺えたりと云ふてあとには首尾合はず一言出でゝは駟馬も追ひ難しと云ふ、古のためし茲にあり、故に然諾は必ず重く應ずと云へることあり、言語は內の發見する處なれば、聊以て忽にせば、威儀則ち亂れつべし、君子非禮の言を愼むこと、尤も翫味すべきなり、

（四）愼₂容貌之動₁

容貌は天命の性心を入るゝ處の器なり、內の思、正しからざる時は、容貌こゝに傾いて其表外に著し、容貌を正さんとならば、內に思ふ處を糾明すべきなり、思內にありて色表にあらはれず、內外表裏本末一貫の天然なれば、更に差別を存すべからざるなり、無事にしては靜坐して其氣象を養ひ、傲惰の形を見はさず、人と接しては、爰に恭敬して和氣を以てす、是れ大丈夫の坐法なり、坐して箕のひろがるが如く、手足の容を收めず怠慢の姿あらはれ、坐するかとすれば立ち、立つときは又坐して躁妄ならんには、心こゝに一定せざるなり、豈に大丈夫の道ならんや、然らば坐

をゝ立たんと欲せば、手足をくつろげ、前後左右を顧み、其立つべきの節を考へて爰に立つべし、立たざる前に立つべきの心得をなす、是れ立つの威儀なり、立ちて座席を歩むには、必ず前を具に見て、人物を踏躐すべからず、常に歩行を愼み、其容を亂らず、敬を存すべし、假令ひ急事ありと云ふとも、あはて物せんは、大丈夫の心にあらず、かりそめの手すさみと雖も、傾曲して正しからざらんには、其内の養ふ所知るべし、故に字畫を習はすにも、放心を以て戒とす、況や讀書の法に於てをや、其讀む處の威儀放埓にして、或は枕を高うして書をひらき、或は寢臥して之れを讀む時は、心こゝに正しからざるを以て、内に記識する處あらず、殊に古今の聖賢天子高貴の人の行跡名氏、其内にのれり、聊之れを忽にせんこと、大丈夫の意にあらず、動靜所を失ひ、威儀こゝに紛亂する時は、自然に内の志放埓にして、其德正しからず、容貌の威儀、悉く内の德にかゝる、其重きこと知るべきなり、

〔以下節飲食之用等の五章は適切ならざるを以て之れを省く〕

第六、愼二日用一……此篇は分ちて(一)惣論二日用之事一、(二)正二一日之用一、(三)辨二財寶受與之節一、(四)愼二游會之節一の四章となす、

(一)惣論二日用之事一

人の世にある、日々の用ふる處、悉く道の存する處なり、治亂盛衰の大より、一事一物の變動に至るまで、天地の法則を離るゝこと更になし、君子大丈夫能く此心を體認して、初めて道を語るべし、されば身を顧るに形に耳目鼻口四支百體あり、此身を奉ずるに、衣服居宅用器用物あり、飲食情欲の分ちあり、相まじはる處に君臣父子夫婦長幼朋友の交際あり、身に貴賤貧福の差別ありと雖も、右の品々一つとして缺くることあるべからざるなり、此身を持ち、此事を去りなんと云ふは、死して後ちに已みぬべし、此間其理を詳に辨へて事をなし、一物を制し、一人と交り、獨坐すと雖も、皆天地の準則を守りて、離るべからざるの道に相叶ひ、天地を仁の體として、萬物を制せんこと、是れ君子日用の工夫と云ふべし、我說く所の理、更に遠からず、離るべからず、人に因らず、人々皆日に用ふるの間

にして、其心に快きを號して道と云ふ其內に歉しきを人欲と云ふ、唯此兩般のみ、日用の事、豈に忽にすべけんや、

(二)正二一日之用一

人壽百歲に至るを以て上壽とす、大丈夫唯今日一日の用を以て極とすべきなり、一日を積んで一月に至り、一月を積んで一年に至り、一年を積んで十年とす、十年相集りて百年たり、一日猶ほ遠し、一時にあり、一時猶ほ長し、一刻にあり、一刻猶ほ餘れり、一分にあり、是を以て云ふ時は、千萬歲の務め、皆一分より出でゝ、一日に究まれり、一分の間を忽にすれば、遂に一日に到り、終りには一生の懈怠ともなれり、天地の生々、一分の間も滯らず、人間の血氣、一分も痞ふることなし、此の如くにして其天長地久を得、此の如くにして壽命の永昌をなす、德知の流行、此の如くにして聖人たり、

(三)辨二財用受與之節一

財ありて用を得ざれば、財皆財にあらず、用ありて財を量らざれば、用皆

用にあらず、財は用を以て財となす、用は財を以て用となす、財用の間、更に兩ならずして、財、量あり、用、得るあるなり、夫れ貨財は、用、得るあれば、寶たり、用、得ざれば、鄙吝の情日に萠して、過奢の禍時に起る、共に君子の道にあらず、大丈夫存する所、唯〻義のみ、若し財寶を吝み、器物を翫べば、武義自ら闕く、如し大節に臨んで、殆んど家を忘るべからず、家を思ふの切なる、義を棄てゝ、死を遁れ、謗を指頭に受け、父祖を汚すに及ぶ、人面獸心のこと、何の樂みかあらん、金銀財器有餘の輩、或は國を失ひ、家を滅ぼし、或は身に易へ財を積む、古今枚擧すべからざるなり、天下の財寶は、天下の財寶にして一人の財寶にあらず、能く交易利潤して、萬物を通用す、故に是れを財寶といふ、財あるの人皆費を厭ふて費を知らず、金玉堂に盈ち、財器時にあり、而して施し用ふるを知らず天下の財、各〻其府庫に滯り、天下の用に通ぜず、費蔽何事か之れに加かんや、人、財を好めば、大概之れを吝嗇す、故に聖人貨財を以て寶となさず、得がたきの財を貴びず、況や土器書墨銅鐵の器を藏し、之れを寶とし、千金を以て之れに易ふ、其惑甚い

かな、

凡そ施し受くるの道、君臣上下の義、朋友相接るの禮、士の愼み守るべき所なり、物、輕重大小なく、其間皆義ありて、或は與へ、或は受く、故に與へ施すに道義を以てせざれば、人喜ばず、士來たらず、傳に曰く、義士を使ふに、財を以てすべからず、爾來の食乞食の賤も之れを受けず、と、豈に愼まざるべけんや、受くるの道、其義あれば、物の輕重に依らず、之れを受くる可なり、一義を闕き一道を去れば、千鍾の祿、天下の重と雖も受くべからず、其道を得ざれば、與へて感ぜず、受けて喜ばず、施すと受くるとの間、專ら愼むべきなり、

〔愼游會之節の一章は、適切ならざるを以て之れを省き、之れに易ふるに武敎小學の子孫敎戒章を以てす〕

(四)子孫敎戒

子孫の恩情は、天道の自然、血脈相續の成る所なり、人倫の厚き、何事か之れに及ばんや、我身既に沒して、嗣子放僻なるときは、家絕え身滅ぶ、何ぞ

恩愛の甚しきを以て敎戒の事を垂れざらんや、士は大丈夫を以て勇となす、愛悳の切なるに於て信勇を以て之れを戒めざれば、志士仁人にあらず、凡そ幼稚の間、氣の稟くる所、唯天然にして心知未だ主とする所あらず、其習日に長じ月に益して善惡の機ざす所甚だ愼むべし、士の子孫を敎戒すること、其知を正しくし、其機を勇にし其事に信あらしむ、故に知の發するに於て邪正を考へ、邪を戒め正を揚げ、勇を養ふて之れを恐れ威ろかしめず、少年と雖も詐僞を以てせず、戯遊必ず弓矢竹馬の禮を以てし、言語皆武義禮讓の節を以てして、其精氣をして全からしめ情欲をして寡からしめ、敎ふるに文學を以てす、然れども或は記誦に陷り、或は詞章を玩ぶときは、倭俗を忘れて漢様を欲す、人に氣稟の異あり、故に其輕重淸濁を考へ、習ひ馴はさしめ、言語已に通ずるときは、師を選み友を考へて、人品の下に到らしむること勿れ、師弟の相接する、尤も敬恭すべし、兵書武冊、汚れたる席に置くべからず、盥ひ漱いで之れを披き、師を貴ぶこと父兄の如し、凡そ女子の敎戒甚だ以て愼むべし、其法多く懦弱

を以て敎となす大なる誤なり、士の妻室たるもの、士常に朝にありて內を知らず、故に夫に代りて家業を戒めしむ、豈に懦弱を以てせんや、闔國武將の妻室、盛衰を以て節を改めず、存亡を以て心を易へず、或は賊に當り、或は敵に死す、斯の如きの禮節、此の如きの立操、豈に懦弱の敎を以てせんや、云云、



第四　批判

素行率先して古學を唱道し、仁齋徂徠の先驅をなせりと雖も、其學說は未だ積極的に成立せりと謂ふを得ず、彼れの卓見、聖學篇に於て窺ふべしと雖も、多くは宋明諸儒の說を破して直に洙泗の淵源に溯るべきを主張するに過ぎずして、彼れ一家の學說として殊に紹介すべきものを發見すること能はず、此點より之れを言へば、未だ仁齋徂徠に及ばざるものあるなり、且つ之れを考ふるに、素行が直に跡を孔子の聖に接せんとする抱負の大は稱揚すべしと雖も、其宋明諸儒を攻擊すること頗る酷に失するものあり、宋明の儒學は孔孟の儒學よりは迥に發達し、一層深遠なる旨趣を有するに至れり、其此の如くなるに至れるは、全く佛教の影響を受けたるが爲めなり、佛教後漢の明帝の時支那に入りてより次第に勢力を扶殖し、隋唐の世に至りて思想界の中心を席捲せり、千萬群儒の中、唯一の韓退之あり、原道を作りて佛教を排すと雖も、赤手黃河

を支ふるが如し、豈に其効を望むべけんや、此の如くなれば、佛教的思潮の反動、早晩起り來たらざるべからず、然るに事實は果して之れを證せり、趙宋に至りて形勢一變し、儒學大に興る、然れども純然たる孔孟の儒學にあらざるなり、宋儒多くは佛教を攻究し、殆んど佛教を以て鄒魯の學を解釋するが如き痕迹あり、畢竟彼等は儒佛二教を一洪鑪中に鎔鑄し來たりて從來のよりは一層發達せる儒教を主張せり、其陽儒陰佛の訾を免るゝ能はざるもの此にありて存するなり、素行乃ち宋學の佛教的臭味を帶びて、往々孔孟と同じからざるものあるを發見し、是等宋學を盡く排斥して、超然として獨り洙泗の淵源に溯らんことを企圖し、二千歳不傳の統を得たりと主張せり、其志や壯なりと雖も、學に於て眼光の未だ透徹せざるものあるを見る、何ぞや、宋學が佛教的臭味を帶ぶればとて、何故に非なるか、素行固より佛教の出世間的なるを非とす、故に其佛教的臭味を帶ぶるを非とするなり、佛教が出世間的に偏するは、不可なりとするも、是れ亦世間的の元素を以て補充すべからざるにあら

ず、且つ又其出世間的なることを外にせんか、蓋し佛教の教義に於て取るべきものなきにあらず、換言すれば佛教があらゆる點に於て誤れりと謂ふを得ざるなり、抑も學者の當に目的とすべきは眞理に歸するにあり、苟も眞理の佛教中に存するあらば、何ぞ佛教に拘はりて之れを捨つべけんや、苟も非眞理の儒教中に存するあらば、何ぞ儒教に拘はりて之れを取るべけんや、要するに眞理を主眼とする以上は其佛教たると儒教たるとを問ふべきにあらざるなり、

假令ひ儒教を崇奉するにしても、專ら孔孟に限らんとすることは、必ずしも其當を得たるものと謂ふを得ず、固より孔子の如き偉大なる人物は、後世に求むべからずと雖も、學としては後世の學反りて孔子のに優れり、孔子の說く所洵に單純にして適切、其躬行に益あるは疑なしと雖も、學としては、唯、平坦明白なる名言佳句あるのみ、深遠幽窅といふ點に於ては未だ老子にだも及ばずといふべきなり、ヘーゲル氏孔子の事を論じて曰く、

吾人は孔子と其徒弟との問答書（蓋し論語ならん）を有す、其中に通俗的道德あり此の如きは吾人が如何なる國民中にも發見せざるはなく、猶ほ是れに優れるものあり是れ特に卓絕せるものにあらず、孔子は實踐的の世界的聖人なり、理論的哲學は吾人彼れに就いて毫も發見すること能はず、云云（Hegel, Geschichte der philosophie, S. 139–140.）

ヘーゲル氏固より深く儒教を究明せず、粗末なる飜譯書により此斷案を下だすに過ぎずと雖も、亦恰も肯綮に中れる處あるなり、孔子の學は光明正大なり、然れども深遠幽窅は未だし、然るに宋儒は佛教より得來たる所ある丈其れ丈儒教の旨趣を深遠幽窅にせり、是れ宋儒の儒教に功ある所以なり、素行此の如き儒教の發達を蔑如して單純なる孔子の學に反らんとするもの、抑〻又人類思想の進化に對して逆行するものと謂ふべきなり、蓋し孔子の學に反れば、固より直に單純なる原本的の思想に接すべけれども、是れ餘りに孔子の人物に拘泥するものなり、孔子は儒教の祖師なり孔子によりて基礎を置かれたる儒教は一代のもの

にあらず二千有餘年の久しきを經て發達せり、獨り原本の思想をのみ眞の儒敎と謂ふべきにあらず、發達し來たれるものも亦儒敎なり、有形の孔子は當時已に死せり、然れども無形の孔子は儒敎といふ名稱を以て存續せり、宋儒は無形の孔子が當に爲すべき所を實行せしものに過ぎざるなり、素行が識見の卓拔なる尙ほ思ふて此に至らざりしは、惜むべしとなす、

素行は國躰論に於て見るべきが如き日本主義を主張せり、思ふに當時の群儒滔々として時流を逐ひ、自家の立脚點を忘れて、拜外を事とせり、此時に當り素行獨り我國躰の宗とすべきを論破せり、其狀眞に孤鶴の雞群中に立つが如し、吉田松陰武敎講錄〔卷上〕の中に論じて曰く、

國恩の事に至りては、先師滿世の俗儒、外國を貴み、我邦を賤むる中に生れ、獨り卓然として異說を排し、上古神聖の道を窮め、中朝事實を撰ばれたる深意を考へて知るべし、

又曰く、

國体と云ふは、神州は神州の体あり、異國は異國の体あり、異國の書を讀めば、兎角異國の事のみを善と思ひ、我國をば却て賤みて異國を羨む樣に成行くこと、學者の通患にて、是れ神州の体は、異國の体と異なる譯を知らぬ故なり、

是れ全く素行の旨意を敷衍するものなり、因りて又之れを考ふるに、德川時代の初めと明治の今日とは頗る相似たるものあり、今日の學者、拜外の流風を免れ難きが如く、當時にありて獨立の思想を懷いて、軒昂凌厲、中流砥柱の擧に出でんこと、豈に容易なりとせんや、果して然らば素行の識見、決して尋凡ならざるものあるを知るべきなり、

然れども吾人が素行の功績として最も稱揚すべきは、其武士道の鼓吹にあり、近來氣節の心漸く消磨するを慨し、往々武士道を說くものありと雖も、其言曾て素行に及ばざるは何ぞや、新渡戸氏のBushidoを見るに、陽明學の武士道に關係あるを說き、素行に就いては一言の辨もなし、陽明學は德川時代の初めに輸入せられたるものにて、武士道の發達には

何等の關係もなし、初めて陽明學を主張したる藤樹の如きは、特に武士道に貢獻したる所あるを見ず、之れに反して素行は武士道の權化なり、然るに其學は陽明にあらず、啻に陽明にあらずといふ而已ならず、痛く陽明を攻擊せり、武士道が王學より得來たる所ありとするもの全く臆測にして、史的事實の徵すべきものあるにあらざるなり、然れども實行の決心に至りては、甚だ王學に類す、例へば、語類卷十二治談の下に顧命を論じて云く、

凡そ人の今日爲す所の言行、悉く後の敎戒たれば、假令ひ命終に臨むの時といふと雖も、別に何事をか云ひ置き、何事を戒とすべしや、云云、平生の云ふ所行ふ所爲す所に戒むる所、是れ各遺命なり、遺言なり、

又云く、

されば平生戒むる所敎ふる所おろそかにして、死後に敎戒あらんことを言へばとて、立つべき所聊もなし、云云なからん跡の敎戒は生前のならはしにあるべし、況や天下の大なる、人情の變、豫め計るべから

ず、義を以て正し、道を以て立たば、萬代以前、萬代以後に於ても、不易の遺命たるべし、云云、

此れに由りて之れを觀れば、其實行に篤き、王學者に優るとも、劣ることなし若し能く其精神の存する所を執ふれば、平生の一言一行、悉く後人の法則たるを期すべしとするものにて、カント氏の純實踐的理性の法則に Handle so, dass die Maxime deines Willens jederzeit zugleich als Princip einer allgemeinen Gesetzgebung gelten könne と云へると其歸を同うす、蓋し武士道も王學も其決心を固くして、之れが實行に敏なるものを主として禪より得來たるが如し、王學が武士道の餘蘖にあらざるが如く、武士道も亦王學の後裔にあらざるなり、武士道の永く後人を裨益すべき點は、死生の間に於て其決心を促すにあり、武士道の形骸は、千八百六十九年封建制度の廢せられたると共に壞滅せしと雖も、其精神は尚ほ衆多の頭腦中に存續せり、然れども武士道を學ぶべき方法に至りては、最早之れあらざるが故に其精神も漸次に衰退するの傾向なしとせざるなり、世人が

滔々として浮靡輕佻に流れ、薄志弱行の徒となれる、其原因一ならずとするも、武士道の衰退亦其重大なるものなること疑なし、此時に當りて素行が武教小學及び語類は起死回生の靈藥とも謂ふべきか、新渡戶氏は武士道には何等の憲法もなしとして曰く、

Bushido, then, is the code of moral principles which the knights were required or instructed to observe. It is not a written code; at best it consists of a few maxims handed down from mouth to mouth or coming from the pen of some well-known warrior or savant.

鎌倉時代より素行に至るまでの武士道は、新渡戶氏の言ふ所の如し、然れども武教小學及び語類の一たび成りてより、武士道は經書を得たるなり、吉田松陰の如きは曾て武教小學を論じて「先師の誡教、具に存して此書にあり」と云ひて、深く此書を尙び、此書によりて得る所多きが如し、又松陰は武教小學の終篇たる總目錄を論じて曰く、

全部の歸宿する所を約說して篇首に置く者なり、孫子始計篇と全く

相表裏して古今數ある大文字なり、余を以て是れを窺へば、一篇の大學に比するに更に着實該備を覺ゆ、云云、

松陰の推奬過當なるが如しと雖も、素行の著書は蓋し此れに價するものなり、是故に苟も武士道を論ぜんとするもの、素行の著書を度外視するを得ず、素行の著書は武士道の憲法と稱するも不可なかるべき程に重要なるものなればなり、若し武士道の精神が日本將來の道德を構成すべき一要素たるを思はゞ、素行の著書の今後益〻聲價を揚ぐべきものなること、復た論を竢たざるなり、



第五　素行關係書類

山鹿子由來記　稻葉則通著
素行先生實傳　齋藤時亘著
山鹿誌一卷　津輕政方著
武敎講錄二卷　吉田松陰著
史料原稿一卷
山鹿素行一卷　長田偶得著
　此書は裳華房發兌の偉人史叢中に收載せり。
先哲叢談後編〔卷二〕東條琴臺著
近世叢語〔卷四〕角田九華著
千載の松　大河原長八著
鳩巢小說
武藝小傳〔卷之一〕日夏繁高著

武術流祖錄
盈筐錄
明良洪範（卷之十一）眞田增譽編
津輕舊記
安齋隨筆前編（卷之十一）
諸家人物志
近代名家著述目錄
日本名家人名詳傳（卷之下）
事實文編
江戸文學志畧　内藤耻叟著
日本倫理史稿　湯本武比古、石川岩吉共編
日本哲學要論　有馬祐政著
大日本人名辭書
日本哲學思想之發達（獨文）井上哲次郎著

〇其他諸雜誌に出でたるものは左の如し

山鹿素行　日下寬

東亞學會雜誌第一編第九號乃至第十一號及び第二編第一號乃至第四號にあり、

山鹿素行と赤穗四十七士　長田偶得

太陽第三卷第十三號乃至第十四號にあり、

同　紅於生

教育學術界第四卷第五號にあり、

山鹿素行に就いて　外崎覺

武士時代第一卷第三號にあり

〇武士道に關する書類は

藤樹先生文武問答一卷

武訓二卷　貝原益軒著

武道初心集三卷　大導寺友山

士道要論一卷齋藤拙堂

兵要錄廿二卷長沼澹齋

尙武論一卷中村元恒著

武士道（英文）新渡戶稻造著

江戶時代之武士瓜生寅著

禪と武士道足立栗園○禪宗第六十二號以下にあり、

武士道松本愛重○東洋哲學第四編第二號及び第三號にあり、

武士の用意内藤耻叟○皇典講究所講演第百六十三號にあり、

武士道對快樂說六合雜誌第百七十一號

武士道松本愛重○皇典講究所講演第八十八號、第九十號及び第百三號にあり、

尙武の風目黑和三郎○皇典講究所講演第百八號以下にあり、

武術の源流小宮山綏介○皇典講究所講演第百十三號及び第百十六號にあり、

武士道細川潤次郎○學士會院雜誌第十八編の五にあり、

武士道に就て宮田脩○丁酉倫理會講演集第四輯にあり、

武士道と將來の道德 井上哲次郎○教育公報第二百四十八號にあり、

巽軒論文二集

武士道 北澤定吉○日本濟美會雜誌第一號以下にあり、

武士道 戸川殘花○警世第十七號

武士道發達史 足立栗園著

武士道一卷 井上哲次郎講話○兵事雜誌社發行

武士道一卷 山岡鐵舟著

武士道之女性一卷 川崎安民著

文明之武士一卷 リギヨル著

武士時代 雜誌○戸川殘花發行

日本武士道一卷 三上禮治著



吾儕蟲蟻の微と雖も、武道を講究して其時を待たんには天地神明などか其心を照覧し給はざらめや、子孫の教戒は云ふ迄もなきことなり、推して宗族郷里の子弟に至るまで吾丹心精血を瀝いで其肺腑に徹し、其天性の真智を感發せしめ、爾次ぎに継ぎ継ぎて千萬世絶ゆることなくせざるべけんや、

吉田松陰

伊藤仁齋之肖像



第二編　伊藤仁齋及び仁齋學派

第一章　伊藤仁齋

第一　事蹟

古學派は山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠の三氏によりて代表せらる、素行は武士道を以て秀で、仁齋は道德を以て勝れ、徂徠は文章を以て顯はれ、三人三樣の特色あり、素行の事蹟、學問等は已に之れを叙述せり、是れより仁齋を以て研究の題目とせん、因りて先づ其事蹟いかんを明かにせん、

仁齋姓は伊藤氏、(下)名は維楨、字は源佐、仁齋と號し、又古義堂と號す、居る所の堂の前に海棠一株あるによりて又棠隱とも號す、書を讀むの室を名づけて誠脩といふ、門人私に謚して古學先生と稱す、京都の人なり、其先世、泉州堺に住す、祖父の了慶長澤氏てふもの、攝州尼崎に住す、曾祖父了雪の家に養はれて改めて伊藤氏を冒す、尤

(下)東涯の古學先生行狀に初の名は維貞、字は源吉、幼名源七とあり、仁齋が維貞を維楨に改めたるは、當時兵部大輔貞維朝臣なる人ありしに因りて其名を避けたりといふ、事は閑散餘錄卷之下に見ゆ、仁齋は其字を以て通稱とせり、是れを堀川の家風となす、

龜天正の間、攝泉二州の間、大に亂れ、閭里靖からざるを以て、遂に京師に遷り、近衛の南、堀河の東街（今の東堀川下立賣上る）に住す、父名は長勝、材木を鬻ぐを以て業となし、長澤屋七右衛門と稱す、母は里村氏、男三人あり、仁齋は即ち其長男なり、仁齋、寛永四年七月二十日を以て堀河の宅に生まる、幼にして深沈競はず、尋常兒子に異なるものあり、十一歳にして初めて師に就いて大學を讀み、治國平天下の章に至りて曰く、「今の世亦此の如き事を知るものあらんや」と、既にして又詩を作るに、往々凡ならず、人をして驚嘆せしむ、十九歳の時父に從ひて琵琶湖に遊び、詩を賦す、云く、

古來云此水、一夜作平湖、俗說尤難信、世傳詎亦迂、百川流不已、萬谷湝相扶、天下滔々者、應憐異數邁、

又園城寺の絕頂に登り賦して云く、

山行六七里、往到杳冥中、豁遠間々去、天長漢々空、嶺環郡落北、湖際寺門東、男子莫空死、請看神禹功、

是等の作皆長老の爲めに記誦せらると云ふ、彼れ青年にして已に此の

如き文字あり、其才の美なる、推して知るべきなり、又其句に「男子莫空死、請看神禹功」と云へるを以て之れを觀れば、其志の大なる、亦以て想見するに足る、時に彼れ又延平答問を讀み、反覆講究、紙爲めに爛敗するに至る、敬齋記（文集卷之一）に云く、

幸に嘗て延平先生の書、文公小學の書を讀んで、始めて大に感悟す、是に於て平生の志、沛然として能く禦くことなし、遂に定まりて之れを信ずること益篤く、之れを積むこと益久しく、一旦融然として、利祿の念、功名の志、盡く懷に忘るゝことを得たり、且つ自ら以爲く、世を遯れて知られずして悔いざるもの固より學者の常分なり、聖人豈に遠からんや、是に於て益自ら量らず、斯道を以て已れが任となす、

彼れ是れより心を伊洛の學に用ひ、專ら性理大全、朱子語類等の書を讀み、日夕研磨、其精奧に至る、乃ち無極吟を作りて云く、

本來曾生豈又死、悠々蓋壤共吾身、有人若問斯心妙、無極一圖是箇眞、

時に心學原論、太極論、及び性善論の三篇を作る、皆一代の大文字なり、載

せて古學先生文集(卷之二)にあり、仁齋が是等の文を作りしは、實に其二十八九歳の時なりき、彼れ又其居る所の室を誠脩と名づけて以て自ら警む、然るに俄にして羸疾に罹り、驚悸寧からざるもの、殆んど十年に及ぶ、其間唯首を俯し几に凭るのみにて、曾て門庭を出でざるを以て、里人多くは彼れが面を識らず、其共に語る所のものは井上養白(十)一人のみ、初め仁齋が句讀を習ふ時已に儒を以て一世に傑出せんと欲するの志あり、稍長ずるに及んで堅苦自勵み、而立の歳に近づくに從ひ、造詣する所漸く深からんとするに當りて羸疾に罹れること、彼れに取りて實に一大災厄たりしに相違なし、然るに尚ほ他に彼れが進路を妨げんとするものありき、彼れが家本と商賈にして親族亦道學の貴きを知らず、彼れが志を以て利を得るに迂なりとなして皆之れを沮んで曰く、「學問は是れ彼邦の事なり、此邦にありては、固より無用に屬す、假令ひ之れを能くするも、售れ易からず、醫をなして生産をなさんには若か

(十)養白は丹州保津の人、醫を以て業となす、天資滑稽にして機辯あり、事蹟は先游傳に見ゆ、

ず」と、督促甚だ苛なり、仁齋從はず、是時に當りて家日に衰微して底止する所なからんとす、是を以て其志を沮むもの愈止まず、然るに仁齋の志確乎として變せず、千辛萬苦を經て始めて其志の如くするを得たり、送片岡宗純還柳川序に當時の狀況を述べて云く、

今の俗、皆醫を貴ぶことを知りて、儒を貴ぶことを知らず、其學をなすことを知るもの亦皆醫の計の爲めのみ、吾れ嘗て十五六歲の時學を好み、始めて古先聖賢の道に志あり、然り而して親戚朋友儒の售れざるを以て、皆曰く、醫をなすこと利あり、然れども吾耳聞かざるが若くにして應ぜず、之れを諫むるもの止まず、之れを攻むるもの衰へず、親老い家貧しく、年長じ計違ふに至りて、義を引き禮に據り、益其養を顧みざるを責む、理屈し詞窮して佯り應ずるもの亦しば〱、時に我從祖播州より來たる、往いて之れを見るに、拒んで納れず、蓋し吾業を改めざるを怒るなり、親戚傍より之れを解して後、始めて見ることを得たり、我れを愛することの愈深きものは、我れを攻むること愈力む、其

苦楚の狀、猶ほ囚徒の訊に就くがごときなり、籃楚前にあり、吏卒傍にあり、迫促訊問應ぜざること能はず、然り而して吾學を好むの篤き、志を守るの堅きを以てして而して後今に到ることを得たり、云云、

仁齋の門人並河天民嘗て謂へるあり、曰く、「我邦にありては儒者の恒祿なきもの、宜しく醫者を兼ぬべし、偏に儒者を以て居れば、家產支へ難く或は終に其志を固うすること能はざるなり」と、是れに因りて天民の門人中往々儒者にして醫者を兼ぬるものありと云ふ、蓋し當時にありては、單に儒者を以て家を成さんこと頗る困難なりしならん、然れども仁齋は(1)儒醫辨を作り、大に儒者にして醫者を兼ぬることとの非を論じ、「醫にして儒に志すは可なり、儒を援いて醫に入らんと欲するは不可なり」と、喝破し、氣燄當るべからざるものあり、彼れ此の如き抱負あり、故に百難を排して所志を貫くの擧に出でたり、彼れ乃ち宅を仲弟に附して自ら松下巷に別居して專ら書を讀み、間〻之れを佛老の敎に求む、嘗て白骨觀の法を修するに、之れを久うして

(1)古學先生文集卷之三の初めに見ゆ、

山川城郭、悉く空想を現するを覺ゆ、既にして其是にあらざるを悟りて全く之れを廢せり、

寛文二年京師地震あるに及んで遂に復た己れが家に還る、是れより先き彼れ宋儒性理の說、孔孟の學に乖くに疑あり、參伍出入、沈吟年あり、是に至りて恍然として自得し、略〻所信を確定するを得たり、乃ち謂へらく、大學の書は、孔氏の遺書にあらず、又明鏡止水、沖漠無朕、體用理氣等の說は皆佛老の緒餘にして聖人の旨にあらざるなりと、是に於てか始めて門戶を開いて生徒を敎授し、其塾を古義堂と稱す、來たりて學ぶもの少しとせず、信ずるものは、以て間世の偉人となし、疑ふものは、以て陸王の餘說となし、毀譽褒貶、紛々として起ると雖も、彼れ恬として顧みず、專ら往を繼ぎ來を開くを以て自ら任ず、時に年三十七八、東涯の古學行狀には、三十六とあれども、仁齋が「讀予舊稿」(文集卷之六)の文によれば、三十七八にして始めて其學を一變せることと疑なし、先哲叢談(卷之四)に「及年三十七八、始出己見」といふもの、蓋し當れり、仁齋年三十七八を經て始めて

論孟古義及び中庸發揮を草定す、古學の鼓吹、是に於てか其端緒を開く。彼れ又同志會(ヌ)を設け、孔子の像を北壁に掛け、鞠躬して拜を致し、退いて經書を講じ、互に過失を規し、人物を品評し、以て名節を砥勵するの一端となし、或は、私に策問を設けて諸生を試み、又論題を與へて文を課し、毎月以て例となす、其誘掖指導する所の法、至らざるなし、此時後徳大寺藤公、學を好み、時々京都の諸儒を集め、其れをして相討論せしめて、其定説いかんを聽く、仁齋も亦召されて列にあり、諸儒皆初め低聲氣を下だして辨説すれども、其各、相容れられざるに及んでは互に相觝排して喧囂已まず、仁齋獨り坦夷温恭、終始一の如し、是を以て衆皆竟に其徳に歸すと云ふ、

延寶元年五月京師大火ありて、仁齋亦其災に遭ひ、百物蕩燼す、彼れ他物を顧みず、唯、古義一部を携へて逃れ、京極方恩寺に僑居す、是れより先き、母膈噎を憂ふ、仁齋奉養至らざるなし、引いて三年に至る、時に肥後侯(細

(ヌ)同志會籍申約、同志會式同志會品題式の三篇、文集卷之六に見え、私擬策問三十篇幷に同志會筆記四十七則文集卷之五に見ゆ、皆參考すべし、

川越中守)祿千石を以て之れを招く、然れども侍養人なきを以て之れを辭す、又文會雜記卷之一上に云く、

仁齋を紀州より千石にて召されける時辭してゆかず、中々外へ奉公は仕らじ、但し祿多少によらず、少しのこととなりとも國政を御相談成され候はゞ參るべしと紀州侯へ辭せられしとなり、大志觀るべきなり、

是れ彼れが何歲の頃の事なりやを知らずと雖も、兎に角彼れが一生何人にも仕へず、民間の一儒者を以て終りしが如き、亦當時に一異彩を放つの看なしとせざるなり、

是歲母遂に僑居に瞑す、瞑するに臨んで合掌禮をなして彼れに其孝養の厚きを謝(せりと云ふ、此れに由りて之れを觀れば、仁齋の人となり、推して以て知るべきなり、明年九月父長勝亦卒す、僅々二年の間に怙恃共に失ふ、仁齋乃ち喪に服すること前後通じて凡そ四年なりといふ、除服の日よめる歌に云く、

三年とて、定めしほどの、限りあれば、けふぬぎすつる、ふぢ衣かな、

內藤恥叟の江戶文學志畧に云く、

按ずるに、我邦父の爲めに三年の喪を服する者、紀の夏井を以て始めとし、吏部王(重明親王)之れに次ぐ、天子には後村上天皇、父皇の爲めに諒闇三年にして、當時右大將長親、君父の爲めに三年の喪を服す、厚しと云ふべし、爾後降りて戰國となり、海內離亂、東照公の起るに及んで、大に倫理の敎を明かにし、野中傳右衛門、土佐の國老を以て、三年の喪を服す、其士人亦正禮を行ふ者多し、京師に川井正直なる者あり、亦三年の喪を行ふ、事孝子傳に見ゆ、慶安中の事なり、是に至りて伊藤維楨、又三年の喪を執る、人其孝を稱す、

延寶四年服除く、十月始めて論語を開講し、是れより每月三八日を定めて、論孟中庸の三書を講述し、反覆輪環、終りて復た始まり、傍ら易、大學、近思錄等の書に及ぶ、此の如くにして敎授倦まざるもの、四十餘年、講ずれば必ず直に主意を明かにし、間〻己れが所見を述べて、務めて學者受用の

地をなさんことを期し、末義の如きは之れを研究せず、其聖賢の言を述ぶることと恰も己れが言を述ぶるが如く、熟達至らずといふこととなし、而して其聲調は自然其儘にして些の裝飾を加へず、故に聽くもの、反りて警發する所多し、仁齋會て論じて曰く、

儒者の學、最も闇昧を忌む、其道を論じ經を解す、須く是れ明白端的にして、十字街頭にありて、白日事をなすが若くなるべし、一毫も人を瞞し得ずして方に可なり、切に傅會すべからず、穿鑿すべからず、假借すべからず、遷就すべからず、尤も回護して其短を掩ふを忌む、又粧點して人をして悅ばしむるを戒む、云云(仁齋日札)

仁齋の名望日に高く、遠邇に達し、來たり學ぶもの愈、多く、其數凡そ三千餘人の多きに及べり、東涯の盍簪錄卷之二に云く、

先人生徒を致授する、四十餘年、諸州の人、國として至らざるなし、唯、飛彈佐渡壹岐等二三州の人、僻遠にして著錄せず、及門執謁の士殆んど千を以て數ふ、

門人の中最も著名なりしは、東涯蘭嵎の外並河天民、中江岷山、北村篤所、小河立所等の諸氏なりき、仁齋寶永二年痾を病み、三月十二日を以て家に卒す、享年七十有九、洛西小倉山二尊院に葬る、彼れ初め緒方氏を娶り、後、瀬崎氏を娶り、五男三女あり、長胤、長英、長衡、長準、長堅是れを其五男となす、(以上叙述する所主として東涯の古學先生行狀による、)仁齋嘗て堀川の邸内に祠堂を立てゝ祖先を祭る、今尚ほ仁齋の子孫あり、堀川に住し、元との祠堂と同一の祠堂を立てゝ、仁齋東涯等を併せて之れを祭る、其式皆文公家禮によるといふ、

仁齋風格清貴にして、容止觀るべし、所司代之れに路に遇へば、以て王公となし、乃ち馬より下りて歩す、近衛關白常に稱して曰く、「仁齋先生は大納言以上の人品なり」と、仁齋の性行又稱揚すべきもの少しとせず、東涯其性行を述べて云く、

性資寬厚和緩、人其疾言遽色を見ず、城府を設けず、邊幅を修めず、未だ嘗て古怪迂僻矯激の行をなして、以て駭異を取らず、人少長となく之

れに接するに、誠を以てし、厭怠の色なし、其大義の關する所に及んでは、之れを誘ふに萬鍾を以てすと雖も、奪ふべからざるなり、

蓋し是れ事實にして、決して父德を誇張するものにあらず、先哲叢談卷之四に云く、

大高坂清介適從錄を著はし、以て仁齋を駁す、弟子持ち來たりて之れを眎して曰く、先生之れが辨を作れと、仁齋笑ふて言はず、弟子曰く、人書を著はして以て恣まゝに己れを議す、苟くも辭塞がらずんば、豈に默して止むべけんや、先生にして答へずんば、請ふ余れ代りて之を折かんと、仁齋曰く、君子は爭ふ所なし、如し彼れ果じて是に我れ果して非ならば、彼れ我れに於て益友たり、如し我れ果して是に彼れ果して非ならば、他日彼れ其學長進せば、當に自ら之れを知るべし、小子宜しく深く戒むべし、學をなすの要は、惟〻虛心平氣、己れが爲めにするを以て先となす、何ぞ彼れを毀り我れを立て、徒らに茲の多口を增さん、

唯〻此一事によりて彼れが襟度の宏量を知るべし、カント氏の如き、ダー

ウヰン氏の如き、皆駁撃せらるゝこと尋常ならざりしも、泰然として自ら守り、敢て自ら紛々擾々たる辨難の旋渦中に投ぜざりき、殊にダーウヰン氏は自白して曰く「余は自ら論難を避けたることを喜ぶ、是れライエル氏が多年前余が地質學上の書に就いて決して論難中に捲込まるべからざることを痛く忠告せしによる、論難は善をなすこと殆んど稀にして、時間と性氣を費やすこと甚だしければなり」(Life and Letters of Charles Darwin, V. I. P. 89.)と、自家の學説を辨護せんが爲めに一々駁者と論難せんは、餘りに細心小膽なり、獨逸語に所謂 kleinlich なり、是れ小人の所爲にして、大人君子の志にあらず、然れども君子は爭ふ所なしと云ふべきにあらず、君子は爭ふ所あるべく、又爭ふ所なかるべきものなり、學術に關し、道義に關し、爭はざるべからざるものある時は、整々堂々と爭ふを要するなり、仁齋の如きも、宋學を排斥して古學を主張す、是れ爭ふ所あるものなり、然れども妄りに爭ふべからず、妄りに爭はゞ徒らに玆の多口を増さんこと、仁齋の言ふ所の如し、湯淺常山の文會雜記卷之

一上に云く

君修の同家中の人仁齋にあひたりし人の云ひしは、仁齋は何となく一所に居りたき人なり、されども太山の如くにて中々動かし難き人と思はるゝなり、

又卷之二下に云く、

春臺云く、東涯は至りて溫厚なる人なり、仁齋もしかなり、但仁齋の眊子の明かなることと所謂眼光射人なり、學問にねりつめて德をなしたる人と覺ゆ、定めて圭角ありたる人ならめ、隨分やはらかなる人なれども極めて英氣ある人なりと語られたるとなり、春臺も深く仁齋には心服なり、

太宰春臺が仁齋に心服せしは文會雜記に言ふ所の如し、春臺本と徂徠門下にありて矯々たるもの、彼れが如何に徂徠と仁齋とを對照せしかを見ん紫芝園漫筆卷之四に云く、

伊仁齋は豪傑の士なり、所謂文王を待たずして作るものなり、物先生

も亦豪傑の士なり、然れども伊氏に後れて出づ、故に其學伊氏に本づかずと雖も伊氏を以て嚆矢となさゞる能はざるなり、

又云く、

仁齋及ぶべからざるもの三あり、學師傳に由らざる一なり、仕へざる二なり、子東涯ある三なり、物先生此に一あらず、

徂徠に東涯の如き子なきは、春臺が言ふ所の如し、然れども師傳あるにあらざるは、獨り仁齋のみならず、徂徠も亦然り、又仕ふると仕へざるとは以て優劣をなすに足らず、道德を實行することが主眼とならば、仕ふるも可なり仕へざるも可なり、孔孟も仕ふることを求めたるにあらずや、春臺が是れを思はずして徂徠を論ぜしは、未だ的確なりと謂ふべからず、又卷之六に云く、

或る人問ふ、仁齋と徂徠と孰れか愈れりと、曰く、仁齋の學徂徠の學に及ばず、徂徠の才尤も仁齋の企て及ぶ所にあらざるなり、識の若きは仁齋實に之れが嚆矢たり、徂徠超乘して上ると雖も所謂靑藍に出づ

るものなり其人を敎ふる所以に至りては仁齋は君子を以て人に望み徂徠は豪傑を以て人に望む是れ二先生の風同じからず猶ほ馬援稱する所伯高季良の異なるがごときなり二先生を學ぶもの其得失亦猶ほ是のごときなり

又卷之八に云く

徂徠先生謂く仁齋先生奇を好むと余より之れを觀れば徂徠の奇を好むこと仁齋より甚だし古人の所謂尤めて之れに效ふもの夫子あり

近世叢語卷四に云く

或る人太宰春臺に問ふ曰く伊藤仁齋は如何なる人ぞ春臺曰く其貌を觀るや恭其言を聽くや從君子人なり

又云く

太宰春臺曰く伊藤仁齋の書を讀むや慧眼了々紙上に洞徹す所謂眼光一人なり

春臺は徂徠門下にあり、而して徂徠と仁齋とは各々學派を成して相對立し、殆んど天下を二分にせんとするの狀あり、然るに此れに拘はらず、春臺反りて仁齋の人物性行を欽慕すること洵に深からずとせず、乃ち知る仁齋の德行は、反對派と雖も之れを認容せざるを得ざるまでに勢力を及ぼせるを、是を以て徂徠彼れ自身の如きも、百方仁齋を攻擊するに拘はらず、竊に仁齋の道德の高きを認容せり、彼れ常に自ら曰く、

　熊澤の知、伊藤の行、之れに加ふるに我れの學を以てせば、東海始めて一の聖人を出ださん、

獨り道德のみならず、學問に於ても亦仁齋は、徂徠の推尊する所なりき、徂徠嘗て當時の人物を論じて曰く、

　人才は熊澤了介、學問は伊藤仁齋、餘子は碌々數ふるに足らざるなり、

乃ち知る、徂徠の眼中には、唯蕃山仁齋の二人ありしのみなるを、祇南海は木門の高足にして、固より仁齋と其派を異にす、然れども其送高生序（南海先生集卷之五）に云く、

世に語孟字義の書あるを聞き、索めて之れを讀む、是に於て始めて京師に伊藤君なるものあるを知る、予固より玆に拘はりて一たび接見することを能はずと雖も、苟も其書を觀れば、則ち其人となりを知るべきなり、夫の至言要言を觀、聖賢を左右にし、以て邪說を鞭箠し、奮然麈を把りて世の爲めに先登するもの、昭々として筆端に見はれ、人をして驚見せしむ、猶ほ景星卿雲の仰ぐべくして企つべからざるがごときなり、嗚呼是れ豈に今の人ならんや、抑古の所謂超然獨立する者なるか、

湯淺常山も亦仁齋を論じて曰く、

古學先生は、宋後數百年理學滔々たりし中より出で、獨得の識を發せられしは、日本文運啓行の嚆矢を射られしと稱すべし、

朱舜水の如きは、仁齋を稱揚して「學問文章、日本翹楚」と云ひ、永富獨嘯菴の如きは、仁齋を以て偃武以來四豪傑の一人となせり、島田博士又曰く、

仁齋の學說には、大に得るものあり、大に失ふものあり、瑕瑜互に出で

醇駁同じからずと雖も要するに超邁の才識を抱き加ふるに多年研鑽の功を以てし遂に當時の學者簡に就き陋に安ずるの弊習を破り學術上進歩の路を開きしは眞に豪傑の士と云ふべし（哲學雜誌）

諸家の推尊至れりと謂ふべし然れども貝原益軒の如きは未だ仁齋に慊焉たらざるものあり其五井持軒に與ふる書（出雲松江三島佐次右衛門所藏）に京都の學術を論じて云く、

京都學術如何存候やと被仰越候總て京都學者の風俗不好候各比黨候上一己の見を立て候て相與に商量仕歸一の工夫無御座我を立てたる迄と見え申候山崎氏傲滿驕夸の人にて候を其徒其尤に傚ひ候て夸高妄議古人且遍非今世只我而已自好自夸申候去とては凶徳の至不可過之候伊藤氏門人亦阿其所好妄議先正方不知其量と聞え申候又別に一派朱學の徒は是れ亦自ら是とし好名擧背風俗候て人の耳目を驚かし申過當の事色々有之候左候ては儒術と申物は一向人情に遠く時俗に背き候てからの樣に日本を仕替候樣世俗存候ては、

却て道の害にも成り可申候、古人の語に士大夫欲務道學之實不欲務道學之名と有之、尤の事にて御座候、折角學を務め候ても、爲名仕候は無用の事にて御座候、凡そ爲學は非別之事候、爲知道に候、右の學風惡きも皆無知道之工夫、只聖經の訓詁のみにて止み申候、山崎伊藤(其外當時の朱學者)などの學も皆訓詁の學好名の徒にて非爲知道候、是れ皆明の一字不足故と存候、知明候へば、か樣の蔽惑も有之間敷候、爲道に仕候學には、人我に私己と有御座間敷候道理と申物は、無偏無黨にて平正公共の事にて候云云、

益軒は闇齋仁齋等の各門戸を張りて、學派の別を成し、黨同伐異の弊を生ずるを非とするなり、敢て學派を成すことを試みざる益軒にして此の如きの論あり、是れ其有力なる打擊たる所以なり、然れども彼れ闇齋仁齋等の學を訓詁の學とし、又彼等を名を好むの徒とし、其學をなすは道を知るが爲めにあらずとするは、決して事實にあらず、是れ全く益軒の失言、惜みても餘りありと謂ふべし、近世叢語卷之五に、「貝原益軒與五井

持軒書言、伊藤仁齋執拗偏見、似郝京山矣と、蓋し前に擧けたる書柬の旨意を傳へたるならん、思ふに、執拗偏見の四字、未だ全く仁齋に適切ならずと謂ふを得ず、例へば大學定本の如き、應る執拗偏見に類する所あるが如し、板倉勝明が益軒の言を以て確論とするもの、故なきにあらざるなり、(甘雨亭叢書伊藤仁齋先生傳)尾藤二洲が素餐錄にも亦云く、

余仁齋の言を看て、義理の明かにし難きを知る、渠れ程朱の書に於て讀まざるにあらざるなり、唯其れ偏執自ら信ず、乃ち後の悖謬を致すこと是の如し、學者此に於て察せざれば、仁齋たらざるもの、幾んど希なり、

是れ固より仁齋に對をる側面觀なりと雖も、亦當れる所なきにあらざるなり、或は又學派の異なるが爲めに痛く仁齋を訾るものもありたり、常山樓筆餘に云く、

室師禮が駿臺雜話を見るに、仁齋を誹らるゝ事甚し、但仁齋の書を秋毫の末も見たるにあらず、唯理學を論ずといふを聞て、目を瞋らして、

惡聲を出ださゞるゝなり、淺ましき人物なり、云云、

仁齋が比隣義井を浚ふるに當り、衆と共に綆を執りて其勞を分つを辭せざるが如き、節分の夜、炒豆を散じて福は內、鬼は外と呼び、世俗の風習に違はざるが如き、又梵刹を過ぎりて佛を見れば即ち拜し敢て之れを侮蔑せざるが如き、皆其特更に奇僻の行をなさず、反りて平生衆と調和して行くの心あるを知るべきなり、東涯が其性行を述べて「未だ曾て古怪迂僻矯激の行をなして、以て駭異を取らず」と云へるは、蓋し是等の點に就いて徵すべきならん、

(ル)是等の事皆先哲叢談卷之四、日本儒林譚卷上、閑散餘錄卷之下等に見ゆ、

仁齋は詩を作り、歌を作り、常に字を書することを好み、每旦蚤に起き、先づ几に憑り、數紙を亂書せり、若し天氣明媚の候に遇へば、子弟輩數人を拉へ、逍遙吟詠して歸る、仁齋酒量多からず、新年の作に

平生不善飲、一盞即醺然、

と云ひ、又遊鷹峰蕉窓主人別業の詩に

酒不能多嚥、三蕉聊醺然、

と云へり、以て其平素を推知すべし、仁齋赤貧洗ふが如し、然れども毫も意に介せず、孜々として勤むる所唯講學の一事あるのみ、彼れ自ら曰く、「於好學一事、雖聖人亦不敢讓焉」（送浮居道香師序）と、蓋し誇言にあらざるなり、先哲叢談に左の一節あり、云く、

仁齋家故と赤貧、歳暮糯資を買ふこと能はず、亦嘖然として以て意とせず、妻踸づき進んで曰く、家道育鞠、妾未だ嘗て堪へずとなさず、而して獨り其忍ぶべからざるものは、孺子原藏、未だ貧の何の物たるを解せず、人家に餈あるを羨み、連求して已まず、妾、口能く之れを譙呵すと雖も、腸爲めに斷絶す、言ひ訖りて泣下る、仁齋几に隱り、書を閱し、一言之れが答をなさず、直に其著くる所の外套を卸して以て妻に授く、

仁齋の交遊する所井上養白の外數多の人あり、皆先游傳に見ゆ、彼れ安東省菴と書信を往復し、又宇都宮遯菴と知友たり、物徂徠嘗て仁齋に書を送れるも、彼れ何故か報せず、書を以て二人の間嘗て交誼あるなし、仁

齋又嘗て一たび貝原益軒と相會せしも、意見相合はざるを以て遂に締交するに至らず、東涯曰く、

前時海の西、二巨儒あり、曰く、省菴先生、曰く、損軒先生(益軒の事)先人の省菴子に於けるや、未だ面を識らずと雖も、竿牘往來、毎に相推重す、損軒子に於けるや、嘗て一搢紳家に相會して而して道契せず、(紹述先生文集卷之十五)

仁齋古人に於ては最も范文正公、程明道、許魯齋の三人を景慕せり、刻魯齋心法序に云く、

予古今の人物に於て三大賢を得たり、宋の明道程先生なり、范文正公なり、元の魯齋許先生なり、夫の賢者の世に表々たるものを觀るに、博學文章、才節行義、固より其人に乏しからず、惟實德を難しとす、蓋し實學ありて而して後實德あり、實德あれば實材隨ふ、云云、

蓋し其實學あり實德ありて、後世に赫奕たる所を取るものなり、

仁齋多く旅行せず、曾て大坂に遊び「遊攝州記」を作れり、又近江の水口に

至り「出洛十餘里」云云の詩あり、其他僅に奈良及び丹波の保津に赴きたることとあるのみ、彼れはキヨニヒスベルヒ府の大哲者の如く、一生郷里以外に出でざりしと云ふにあらざれども、亦殆んど郷里の生活より外は知らざりき、

仁齋の一生を瞥見するに、一世の師範を以て自ら任じ、卓として群儒の表に抜くの態度、整々堂々、眞に曠世の偉人と稱するに足る、仁齋は句讀の師はありしと雖も、學説に於ては何等の師傳もなし、答安東省菴書に「若僕者學無眞師」と云ふは、之れが爲めにて、全く素行と同じく、然かも彼れと殆んど同時に古學を主張せしは、其獨創の見に出づるなり、仁齋は北村可昌が碣銘に「先生高尙、不近利名」と云へるが如く、心念極めて高潔にして殆んど迂濶なるまでに當時の汚俗に接せざりき、彼れは蚤に其負擔すべき自然の任務あることを了知し、此任務を果さんとの志を立て、如何なる周圍の困難をも意とせざりき、彼れは甚しき窮乏の爲めに絶えて動搖するが如きことなかりき、彼れの志を沮礙するもののあるに

拘はらず、毫も其所信を曲げざりき、彼れ十年の羸疾の爲めに屈することなく、歳を經るに從ひ、愈研鑽の功を積みたりき、然るに是等の困難を外にして尙ほ彼れが操行を試みるに足るものありき、何ぞや、是れ他なし、彼れが聲譽を蠧毒せんとする惡言なり、名聲の揚る處、必ず惡言の起るあり、是れ古今の常なり、彼れも亦此災を免るゝと能はざりき、年山紀聞卷五に云く、

爲章（安藤年山の名）は弟子の數にはあらざりしかども、過し年その講說を聞き人品をも知りたり、物やはらかに愛相よく謙退ふかくまことに君子とはかやうの人なるべしとおぼえ侍り、されど程朱の學風をきらひて、みづからの見識を立てたれは、世の人にくきものにおもひける、

例へば新蘆面命に左の如き記事あり云く、

太田藤九郎殿物語被申候は、近年伊藤源助（仁齋の事）紀州樣へ書簡をさし上候、天無二日と申候、日本にては二の日あり、是れによりて號令一ならず、宜しく帝位を將軍御踐みなされ、天子を大和公に封じなさるゝ

様にと申上候、紀州様殊の外御怒りなされ、猶様なる妄言、江戸へ申上候はゞ、死刑にも可被仰付候、然れども御慈悲を以て禁止なされ候間、以來かやうの事筆は申すに及ばす、口にも吐き申すまじき旨御制戒なされ候、

是れ全く誣妄なり、仁齋詩あり、云く、神皇正統億萬歲、一姓相傳日月光、市井小臣嘗竊祝、願教文教勝虞唐と、又寄道祝の歌あり、云く、

我國の、人のこゝろを、種とせる、この道のみぞ、よゝにたえせじ、

又論語古義卷之五(註)に云く、吾太祖開國元年實丁周惠王十七年、到今君臣相傳、綿々不絶、尊之如天、敬之如神、實中國之所不及、夫子之欲去華而居夷、亦有由也と、此れに由りて仁齋が毫も皇室に對して不敬の念ありしにあらざるを知るべきなり、仁齋が新年作に「近歲增多口、是非嫉聖賢」と云ふも、譏謗の四方に起るを歌ふなり、然れども如何なる波旬も彼れが志を奪ふこと能はざりき、嘗て壁に題して云く、

天空海濶小茅堂、四序悠々春色長、笑殺淵明無卓識、北窗何必慕羲皇、

又云く、

有井無田貧亦極、纔支伏臘意悠々、平生不作顰眉事、直以百年當一遊、

乃ち彼れが胸中優に閑日月あるを知るべきなり、彼れの學説は姑く之れを置き、彼れの行爲に就いて後世學者の自ら資すべきもの多々之れあるを疑はざるなり、

伊藤氏系圖

道慶—了雪—了慶（名長之）—了室（名長勝、字七右衞門）
- 仁齋
  - 長胤（字原藏、號東涯）
    - 善韶（字忠藏、號東所）
      - 弘美（字延藏、號東里）
      - 弘濟（字壽賀藏、號東峯）
        - 重光（字□□、號輶齋）
  - 長英（字重藏、仕福山）
  - 長衡（字正藏、仕高槻）
  - 長準（字平藏、仕久留米）
  - 長堅（字才藏、號蘭嵎、仕紀藩）
- 男某
- 男某

第二　著書

論語古義十卷

此書は正德二年の刊行に係る、東涯の序に云く「改竄補緝、向五十霜稿凡五易、白首紛如」と、仁齋が如何に心を校讐に用ひしかを知るべきなり。

孟子古義七卷

此書は仁齋が論語古義に次いで作る所にして享保五年の刊行に係る、文會雜記卷之三下に云く「元獻云く、仁齋の孟子古義、殊の外よく出來たり、仁齋孟子一部にて何れをも押したると云へり、禎が見と符同す」と、禎は湯淺常山彼れ自身の事なり、元獻は未だ考へ得ず、高養浩が時學鍼焫卷之下に云く「論孟古義、坏樸略具、而成說未完、先生(東涯の事)與門人校讐討論、予亦忝在末席、以今思之、論語一書、章々句々、說修爲者多故仁齋之旨符合矣、抑至孟子論心性、則窒礙不通者過半矣、故今所刊行孟

子古義、其實成于東涯削鍊之手者也」と、果して然らば孟子古義の論語古義に優るもの、豈に東涯苦心の結果に出づるなしとせんや、

大學定本一卷

仁齋大學を以て孔子の遺書にあらずとして、一家の見を立て、且つ痛く朱子を排斥せり、此書正德三年の刊行に係る、

中庸發揮一卷

仁齋叙由に論じて曰く「中庸又演繹孔子之言、其書雖未的知子思之所作與否、然以其言合於論語、故取之、今傚趙岐孟子集解、分爲上下篇」云」と、朱子の中庸は篇を分たざるに仁齋は分ちて上下の二篇となし、上篇を以て中庸の本書となし、下篇を以て中庸の原文にあらずとなす、下篇は「鬼神之爲德」云云以下の文なり、此書正德四年の刊行に係る、

語孟字義二卷

此書は門人林景范(字は文進)が寶永二年を以て刊行する所に係る、卷末に「大學非孔氏之遺書辨」及び「論堯舜既沒邪説暴行又作」の二篇を附

載せり、東所の古義堂遺書總目敍釋に云く、「此書有紹述先生校本、今收予家、以俟他日之改刻」と、又注して云く、「定本發揮、及字義、共有坊間贋刻本」と、林景范の刻本を以て贋本となすに似たり、姑く疑を存す、

童子問三卷

此書上卷は五十九章、中卷は七十七章、下卷は五十三章より成り、凡そ百八十九章あり、林景范が跋に「至于素所講明人倫日用之工夫、則畢備于此書」と、眞に堀河派の教科本といふべし、童子問と語孟字義とは仁齋が學說を知らんと欲するものには最も缺くべからざるなり、文會雜記卷之一下に此二書を論じて「一生の學問見ゆるなり」と云へり、洵に然り、此書の堀河派に於けるは、辨道辨名の蘐園派に於けると異ならざるなり、香川修德が孟子古義の跋に云く、

去歲韓人來聘し、歸舟を備後州鞆津に維ぐ、先生の次子長英、時に福山の記室たり、接伴の事に與る、書記成夢良なるものあり、長英に簡して曰く「久しく承はる、尊考仁齋先生鬱として日東の儒宗たり、道

德文章、世の爲めに尙ばる、冀くば遺文を覽ることを賜はゞ、大に此行の希獲たらん」と、遂に童子問を請ひ得て珍重して歸る、

乃ち知る、童子問の爰に海外に傳はることを、此書享保五年の刊行に係る、

古學先生文集六卷

此書は東涯の編輯する所にして、仁齋が未だ古學に歸せざる時代の文章をも收載し、其作爲せる歲月の確定し得らるゝものは、悉く之れを記入し、以て仁齋が學說を知るに便にせり、此書享保元年を以て刊行する所に係る、卷首に東涯撰ぶ所の古學先生行狀を載す、文會雜記卷之二下に云く「古學行狀、東涯の作にてきはめてよく出來たり」と、行狀の末に「孝子長胤」とあり、東涯の志、以て知るべきなり、

古學先生詩集二卷

此書も亦東涯の編輯する所にして、享保二年の刊行に係る、上下二卷あり、下卷又分ちて本末の二卷となす、載する所、五言律詩五十五首、五

言古詩四首、七言律詩八十三首、五言絶句六首、七言絶句二百五十三首、凡そ四百一首あり、最後に東涯の跋あり云く、「文集舊三卷、詩一卷、今分爲八卷」云云と、乃ち知る全集本と四卷なりしを、後東涯之れを分ちて八卷とせるを、

古學先生和歌集一卷

此書は甘雨亭叢書中に編入せり、載する所悉く短歌にて凡そ二百八十六首あり、卷末に仁齋の跋あり、其中に自作に點を加へたることを辨解せり、最後に「元祿癸未のとし二月中旬、洛下老布衣維楨題」とあり

仁齋日札一卷

此書は語錄躰の書にして、凡そ七十四章より成る、其中名言佳句少しとせず、是れ本と未定稿なるを甘雨亭叢書中に收載せり、仁齋が學説を知らんと欲するもの、決して此書を度外視すべからざるなり、

周易乾坤古義附大象解一卷

東涯曰く吾祖考晩年、將に易を注せんとし、已に乾坤及び大象を解し、

名づくるに古義を以てす、先考夙歳より深く易を好み、傳義の異同を考へ、之れを上幀に題し、苦心盡力剖別甚た精し」と、又曰く「先子遺經を抱いて墜緒を尋ぎ、聖猷を闡明して、以て其身を終ふ、鄒魯の二書を研覃し、兼ねて周易を治む、然れども易は唯〻乾坤二卦を解し、務めて大義を明かにし、瑣究を要せず、二書を治むるの專にして且つ精なるに如かざるなり」と、乃ち此書の未定稿なるを知るべきなり、

春秋經傳通解二卷 寫本

此書は春秋の畧傳畧注なり、首めに載する所の論例一讀の價値あり、其中謂へるあり、云く、

春秋を知るものは、孟子に若くはなし、而して左氏の說、實に孟子と相表裏す、公穀の說に至りては、則ち孟子の言はざる所、其聖人の旨にあらざること知るべし、故に此書、專ら左氏によりて說をなして其經義に切なるものを取り、各〻經文の下に附し、合して之れが解をなす、云云、

以て此書の内容いかんを知るべきなり、卷末に「門生平希淳謹書」とあり、

極論寫本

此書は未定稿にして未だ卷を成さず、其内容は僅に「夫子賢於堯舜」の文と湯武の放伐を論ずる一章あるのみ「夫子賢於堯舜」の文中孔子を論じて曰く、

夫子の道高く萬古に出で群聖に超跨す、猶ほ日月の天に懸りて萬物自ら明かなるがごとし、是に於て天地の道明かに、人倫の法定まり、民惑ふ所なし、夫子以前は猶ほ柁なきの舟のごとく、其至る所に至れり、夫子以後、舟の柁あるが若く、嚮方する所ありて、自ら迷ふ所なし、所謂萬世永く賴るもの獨り夫子の謂ひか、

先哲像傳に此書を太極論とするは太だ非なり、太極論は文集卷之二の初めに出づ、此書と其内容を同うせず、東涯の古學先生行狀に極論を以て「未成書」とせり、是れ此書の未だ卷を成さゞるに當れり、之れに

反して太極論は一篇の文として、巳に成れるものなり、

讀近思錄鈔 寫本

此書も亦未定稿にして僅々八葉に止まる、首めに仁齋が自序あり、其末に「元祿辛未之歳春三月」とあり、此れに由りて之れを觀れば、此書は彼れが六十五歳の時に草せし所に係る、

其他先哲像傳には、「大學非孔子之遺書辨」を一部の書として算ふれども、是れ唯一篇の文にして、語孟字義の卷末に附載せり、其外尚ほ送水野侯國字序一篇、文式二卷あり、東所の古義堂遺書總目叙釋に出づ、文式序は文集卷之一に見ゆ、其中に言へるあり、云く、「詮次韓柳以後、近儒者之文者、三十四篇、名曰文式」と、以て文式の如何なる書なるかを知るべきなり、先哲像傳には又性善論、及び心學原論を擧ぐ、然れども性善論と心學原論とは、何れも一篇の文にして文集卷之二に見ゆ、

仁齋の著書は、一も其生存中に出版せられず、其出版せられしものは、悉く其逝去の後にあるなり、

第三　文藻

仁齋一生の學問は、道德の鼓吹にあり、詞章の如きは、蓋し其主とする所にあらざるなり、然れども文は道を傳ふるの具なるが故に「若文必不可不作、非言無以述志、非文無以傳道、學而無文、猶有口而不能言」といひ、以て文を作るの要を示せり、乃ち彼れが文を作るに多少苦心せし所あるを知るべし、彼れの文章大抵正大にして氣魄光燄あり、語孟字義と童子問と、最も觀るべし、文集載する所の太極論、性善論、心學原論等の如き、壯年の作と雖も、皆一代の大文字たるを失はず、故に文章家として之れを見るも、仁齋は徂徠の下にあるものにあらず、徂徠の如く、奇僻の文字を用ひず、其單純にして自然なる處、反りて彼れに優れりと謂ふべし、日札の中に文を論じて云く、

文章は簡にして意盡きんことを欲し、冗にして理闇からんことを欲せず、

又云く、

文章は理を以て主となし、氣を以て輔となす、而して之れを飾るに詞を以てす、其要は平正穩當にあり、

又云く、

文章は意深く義高く、平正通達を以て上となし、詞多く理少く、組織粉澤するを以て劣となす、

是れ蓋し仁齋が實現せし所なり、齋藤拙堂が文話(卷一)中仁齋の文を論じて云く、

貝原益軒、伊藤仁齋、並元祿以上人、當時文章之道未開、然其集中往々有可觀者、不可不謂豪傑之士、

又云く、

仁齋之文多不成語、然有氣魄光焔、使讀者不倦、東厓之文少疵、然氣焔不及、讀之思臥、古人謂文以氣爲主、信然、

以て確論となすべし、仁齋は又詩を作ると雖も、是れ固より緖餘のみ、曾

て論じて曰く「詩吟詠性情、作之固好、不作亦無害」(童子問卷之下)と、以て其志を見るべし、然れども彼れが詩時に佳なるものなきにあらず、江邨北海が日本詩史(卷之三)に云く、

概其爲人、宜不屑聲律也、而詩間有有旨趣者、殊可嘉稱、

是れ亦泛論にあらず、當時京師に邨冬嶺藤坦菴二氏あり皆詩を能くす仁齋之れと鼎立の狀をなせり、東涯の譚叢(卷之下)に「近來文化盛行、人懷鉛槧、就中邨冬嶺藤坦菴及家君以耆宿居洛下、其片章隻字、皆傳播人間」と云へるを以て知るべし、今左に仁齋が詩數首を抄錄して、其技倆いかんを示さん、

梅

蕭散風情似洛宮、古梅寂寞夕陽紅、一枝斜入茅檐角、疎影淺移池水東、羅洞參橫夢初斷、孤山月落興何空、早知開到十分處、自有五更狼藉風、

學問須從今日始

學問須從今日始、算前顧後莫悠々、寸苗遂作蒼々樹、原水還爲滾々流、知

識開時八荒濶、工夫熟處一毛輕、六經元自儂家物、何必區々向外求、

菫菜

菫菜開敷小紫花、芳莖裛露亂參差、纖々玉手羞人見、傾筐獨歸阿母家、

飲蕉窓主人宅

向來歲月似奔流、事々相催歸白頭、老去自知入佳境、一年勝似一年秋、

即事

青山簇々對柴門、藍水溶々遠發源、數盡歸鴉人獨立、一川風月自黃昏、

此最後の詩は名儒傳及び日本詩選に選出せり、其他佳句の誦すべきもの少しとせず、例へば、

深樹寺遙見、落花徑亘通 遊東山

盃酒三更後、清談一夜情 中秋月

河排城闕入、天向海門開 難波橋上

功名白雲飛、時月紫電掣 緒方宗哲席上

一身閑處乾坤濶、萬事休時日月長 即興

貪夫曰ㇾ樂豈誠樂、俗士所ㇾ榮不二是榮一、和二近藤立賢韻一

の類皆詩的の趣味に乏しからず、東涯の譚叢には名聯凡そ十四を抄錄せり、閑散餘錄〔卷之下〕に云く、

仁齋と東涯と、性質に違あり、仁齋は一篇の文一首の詩を作りて、人に示さるゝに、その人賞嘆をなせども、あながちにその喜の色を見ず、他人いか樣に嘆美をなすと雖も、自ら心に滿たざれば、其顏色自若たり、東涯は然らず、或は文、或は詩、人見て賞すれば、自らも喜びて其色、面にあふれたりとぞ、これ仁齋は大量にして、人の毀譽に拘らず、東涯は篤實にして、人を信ずればなり、二先生共に是なり、

仁齋又和歌を作れり、別に師傳あるにあらず、唯、折に觸れ、口にまかせて作れるに過ぎず、閑散餘錄〔卷之下〕に仁齋が歌集を論じて云く「其中に二點の歌七首あり、總計二百八十餘首にて閨怨の歌は一首もなし」と、四季の景物を歌へるもの多く、戀歌の類一もなし、仁齋にありては、さもありぬべし、時に又志を述ぶるものあり、是等は歌人の月旦いかんに拘はら

す、道義の點より學者の一顧を價するに足る、今左に三首を擧げんに、

寄月述懷

世の中は、たゞ一さかり、はてはうし、惜まれてこそ、月もいるらめ、

思往事

數へてぞ、おどろかれぬる、我れながら、きのふと見るも、昔しなりけり、

中庸戒愼恐懼の心をよみ侍りける

思ひとれば、この身の外に道もなし、身を守るこそ、道を知るなれ、

其他尙ほ左の歌あり、云く、

題しらず

上の上、かぎりもあらじ、我よりも、下の下なる、人を見るべし、（此歌年山紀聞卷五に見ゆ、）

歲旦

君が世の、長閑さを今朝、おもふかな、學の窻の、春のはつ風、（此歌稿本正人所藏古文書に見ゆ、）

是等の歌、皆誦し來たりて自ら味あるを覺ゆ、今之れを考ふるに、藤原惺窩、熊澤蕃山、服部南郭、三輪執齋等皆和歌を能くせり、仁齋も亦是等と雁行するに足るものなり、



第四　學風

仁齋は訓詁を事とせず、詞章を事とせず、專ら道義を講明するを以て其任とせり、彼れ四書を註せりと雖も、其目的は此れによりて道義を明かにするにあり、徒に本文の義理を解すと云ふにあらざるなり、彼れ詩歌を作れりと雖も、雕蟲を喜んで然るにあらず、偶〻此れによりて思を述べ、興を遣るに過ぎざるなり、古學先生行狀の中に左の一節あり、云く、

其生徒を敎導するや、未だ嘗て科條を設け、督察を嚴にせず、而して其侯國に友敎し、邑里を訓化するもの、各〻其材を成し、皆人の爲めに知らる、平日學者に勸むるに、道術を明かにし治躰に達し、有用の實材たるを以てして、空文に鶩せ記誦に流るゝことを戒む、一も字を識らざる人と雖も、之れに告ぐること諄々反覆、唯〻其意を傷はんことを恐る、其言を聽いて各〻得る所あり、

此れに由りて之れを觀れば、仁齋は道德を明にするを務めて迂僻に陷

らず、意義を取るを務めて字句に拘はらず、是を以て子弟を薫陶するの功を奏するを得たり、同志會筆記の中に左の一節あり、云く、

學問の品德行を上となし、識見之れに次ぎ、材力又之れに次ぎ、文章を下となす、博洽は其餘事なり、苟し其序を知らざれば、則ち上下顛倒、本末乖離、學問成すあること能はざるや必せり、況や其餘事を以て學問の全となさば、卑陋亦甚し、云云、

仁齋此の如く道德を以て學問の正鵠とすれども、敢て知識を輕侮するにあらず、但、眞實の知識は眞實の道德あるによりて之れありとせり、中庸發揮に此意を述べて云く、

知を先んじて行を後にす、此れ固より學問の常法、易ふべからず、然れども究竟じて之れを論ずれば實德ありて後實智あり、聖人の智の若き、是れなり、故に曰く、苟も至德ならざれば、至道凝らずと、先儒或は德性を尊ぶを事にして問學を後となす、或は問學に道くを先んじて德性を後となす、俱に一偏に失して、君子の道と謂ふべからざるなり、

仁齋此に至りて殆んど朱王二派を合一して知徳一致を言はんとするに似たり、然れども其道徳を主とし、實行を重んずるの一事は、彼れが學問の骨髓と謂ふも不可なきなり、贈巖崎元質序に云く、

子、學を好むか、吾れ子に學を語らん書を讀む時も亦學、書を讀まざる時も亦學にして後、學進む、夫れ書を讀むの學たるは、人皆之れを知る、而して書を讀まざるの學たるに至りては、則ち人未だ之れを知らざるなり、苟も篤く信じ深く志し、念々學にあり、他事の爲めに勝たれざれば、則ち起居動息、應事接物、遊戲閒談、目擊跬歩、みな學に進むの地にあらざるなし、故に曰く、書を讀まざる時も亦學なり、夫れ學は人倫を明かにする所以にして己れに反求するを以て要となす所謂欛柄手に入る是れなり、

仁齋は子夏が實行さへ擧がれば「雖曰未學、吾必謂之學矣」とするが如く、實行を目的とせり、故に獨り讀書のみが學と云ふにあらず、讀書は唯行爲に資する所あらんが爲めなり、行爲は讀書によりて得たる者の實現

に外ならず、換言すれば、行爲は理論の應用なり、是を以て如何なる行爲も彼れにありては學にあらずといふことなし、仁齋此の如く實行を目的とするが故に深く爭論を戒めたり、云く、

德は感化の本、言は爭辨の基、故に道を識るものは、德を務めて言を務めず、若し夫れ其德を務めずして、徒に言を以て人を服せんと欲するものは、惑の甚しきものなり、(同志會筆記)

又云く、

多言多動は、學者の深害、故に吾れ屢〻言ふて屢〻戒む、(同上)

彼れが芝山の痛擊に對し、毫も辨駁を試みざりしもの、蓋し之れが爲めなり、要するに、彼れは言に訥にして行に敏ならんと欲するものなり、即ち道德を實行して聖哲の蹤を追はんとするの外、復た望む所なきものなり、是故に平生の動作云爲、悉く聖哲に法らんとせり、其言に云く、

聖哲の書にあらざれば讀まず、聖哲の事にあらざれば爲さず、聖哲の訓にあらざれば道はず、聖哲の法にあらざれば、行はず、學をなすの法

此の若きのみ、(同上)

彼れ嘗て同志會を設けて諸生と相會し、攻究切磨、共に聖哲の域に躋(のぼ)らんことを期せり、時に諸生を警むる文、凡そ五則あり、云く、

(一)學者の患、最も己れを有とするにあり、己れを有とすれば、則ち毎に人の不善を見て、己れの不善を見ず、己れを忘るれば、則ち毎に人の善を見て己れの善を見ず、毎に人の不善を見れば、則ち己れに矜るの心あり、毎に人の善を見れば、則ち必ず之れを身に得んことを欲す、己れを忘るゝは、則ち聖に入るの要路、己れを有とするは、則ち邪に陷るの深坑、愼まざるべけんや、凡そ吾同盟の人、講習の間務めて相謙下し、優柔引接、畛域を存すること勿れ、門戶を爭ふこと勿れ、若し人の不善あるものを見ば、己れ之れあるが若くにして、哀矜惻怛、諷導詳款して、厭惡非笑の心を生ずること勿れ、直に人に益あるにあらず、實に己れが德亦此れに由りて成熟す、

(二)學は日新を貴ぶ、若し今日にして昨日の苦く、今年にして去年の若

くならば、則ち惟其身の羞のみにあらず、實に同盟の羞なり、若し學進まざるものあらば、衆人會議して、務めて之れが力をなさんことを要す、且つ其身に於て、感謝愉悦、當に深く同盟の規誨を佩服すべし、恚怒を生ずる勿れ、

(三)羣居終日、言、義に及ばず、尤も聖師の戒むる所、凡そ同盟の人、學問躬行を語るを除くの外、寒暄を談し、詩筆を論ず、固より禁せざる所、富貴利達、服章財器、雜藝機巧の語、皆當に禁遏すべし、若し此數を犯すものは所謂道義の交にあらず、

(四)聖門の學は、大事なり、其志を立つること大なるを欲す、道を信ずる篤きを欲す、而して之れを守るに死を以てす、他事の爲めに勝たるゝこと勿れ、俗情の爲めに纒はるゝこと勿れ、勇往向前、一日は一日より新ならんことを欲す、若し其志、功名利達にありて、聖門德業の實にあらず、詞章記誦を以て足れりとなして、道德仁義の奥にあらざるものは、此座に預ること勿れ、

（五）人の道に於ける、最も忠信を要す、諸公進見質問の間を觀るに、其孝悌忠信、仁義廉恥の說、皆其肺腑に出づるが如し、然れども未だ親に孝し、長を敬し、及び朋に交はり、人に接するの間、果して皆平日言ふ所と異ならざるや否やを知らず、若し一も此れと相違ふときは、則ち所謂忠信にあらざるなり、予の此言を發する所以のもの、實に諸公亦此れを以て某に相規切せんことを欲するなり、幸に盡言を吝むこと勿れ

此れに由りて之れを觀れば、仁齋は敢て賢を挾んで人に上たらんとするが如きものにあらず、門下の諸生を以て同志朋友となし、之れを呼ぶに爾汝を以てせず、稱して諸公と云ひ、愛敬の情、至らざるなし、殊に彼れが第五則の末に「此れを以て某に相規切せんことを欲するなり」と云へるは、朋友切々偲々の意を述ぶるものなり、同志會筆記の中に言へるあり、云く、

朋友講習は、己れを忘れ、意を消し、氣を降だし、言を溫にし、誘掖獎勸、相與に道に進むを務となすにあり、今時朋友、大抵道義を講ずるを以て

名となすと雖も、實に己れを持し、賢を挾み、務めて人に上たらんと欲す、何の道義を講ずることか之れあらん、戒めざるべけんや、

仁齋が教育家として成功したるの秘訣、實に此中に存すと謂ふべきなり、



第五　經書評論

仁齋は經書に就いて一家の見解を有し、間〻奇拔なる說を發表せり、其事たる、固より彼れが學說と密着不離の關係あるが故に今左に其要點を紹介せん、

仁齋は經書の中に於て論語を以て最上となし、孟子を以てこれに次ぐとなし、嘗て其古義を著はすや、論語每卷の首に「最上至極宇宙第一」の八字を書し、以て崇重の意を表す、門生或は其甚だ聽聞を駭かすことを言ふを以て後、之れを削去せり、古義の敍由に論語を論じて云く、

論語の一書は萬世道學の規矩準則なり、其言至正至當、徹上徹下、一字を增すときは餘りあり、一字を減ずるときは足らず、道此に至りて盡き、學此に至りて極まる、猶ほ天地の窮まりなく、人其中にありて其大なるを知らざるがごとし、萬世に通じて變ぜず、四海に準じて違はず、あゝ大なるかな、

又云く、

夫子以前敎法路備はると雖も、然れども學問未だ開けず、道德未だ明かならず、直に夫子に至りて、然して後、道德學問、初めて發揮し得て盡くし、萬世の學者をして專ら仁義に由りて行くことを知らしむ、而して種々の鬼神卜筮の說、皆義理を以て之れを斷じて、道德と相混せず故に學問夫子より始まりて、嶄新開闢すと謂ふて可なり、孟子、宰我子貢有若三子の語を引いて曰く、堯舜に賢れること遠しと、又曰く、生民ありてより以來、未だ孔子より盛なるはあらずと、蓋し諸子嘗て夫子に親炙することを得て、其實に群聖人に卓越することを知り、而して後詞を措くこと此の如し、愚斷じて論語を以て最上至極宇宙第一の書とするは、此れが爲めの故なり、而して漢唐以來、人皆六經の尊しとすることを知りて、論語の最も尊うして高く六經の上に出づるとすることを知らず、或は易範を以て祖となし、或は學庸を以て先となし論語の一書、其道を明かにし、敎を立て、徹上徹下、復た餘蘊なく、他經の

比すべきにあらざることを知らざるなり、夫子の道終に大に天下に明かならざる所以のもの職として此れに之れ由る、云云、

仁齋は孟子の學を以て「孔門之大宗嫡派」となし、其書を論じて曰く、

孟子の書は萬世の爲めに孔門の關鑰を啓くものなり、孔子の言は平正明白、淺きに似て實は深く、易きに似て實は難く、渾々淪々、天に蟠り地に根ざし、其底極する所を知るなし、孟子に至りて諄々然として其嚮方を指し、其標的を示し、學者をして源委の窮まる所を知らしむ、故に性命道德、仁義禮智等の説、皆當に孟子の言を以て之れが註脚となして其義を解すべし、切に論語の字面に從つて其意趣を求むべからず、蓋し孔子の時は、猶ほ白日天に中して目あるもの能く行くがごとし、故に其人を敎ふる、只之れに告ぐるに修爲の方を以てして、復た詳に其義を解くことを待たず、孟子の時は、猶ほ暗夜に道を行き、必ず明燭を待つがごとし、故に明に其義を解し、嚮方する所を示さゞるを得ず、若し夫れ孔子の道を觀んと欲して、孟子に由らざるものは、猶ほ水を

渡るに舟楫なきがごとし、豈に能く濟るを得んや、嗚呼孟子の書は實に後世に指南夜燭なり、

尙ほ仁齋は論語と孟子と相互に表裏をなす所以を論破して左の言をなせり云く、

孔孟の道を學ばんと欲するものは、當に二書の同じき所を知り、又其異なる所を知るべきなり、則ち孔孟の本旨に於て自ら瞭然たらん、蓋し天下尊ぶ所のもの二つ、曰く道、曰く敎、道とは何ぞ、仁義是れなり、敎とは何ぞ、學問是れなり、論語は專ら敎を言ふて、道其中にあり、孟子は專ら道を言ふて、敎其中にあり、其故何ぞや、曰く、道は宇宙に充滿し、古今を貫徹し、處として在らざるなく、時として然らざるなく、至れり、然れども人をして自ら能く善に遷かしむること能はず、故に聖人之れが爲めに彝倫を明かにし、仁義を倡へ、之れに詩書禮樂を敎へて、以て人をして聖たり賢たるを得せしめて、能く萬世の太平を開くは、皆敎の功なり、故に夫子は專ら敎を言ふて、而して道自ら其中にあり、孟子の

時に至りては、聖遠く道湮み、異端蜂起し、各其道を道とし、能く統一することとなし、故に孟子之れが爲めに、明かに仁義の兩者を揭示して、これを後世に詔ぐ、猶ほ晝夜の互に行はれ、寒暑の相代はるがごとし、偏もなく倚もなく、煥たること日星の如く、人をして迷惑する所なからしむ、七篇の內、橫說竪說、其言異なるが若くにして、一として仁義の旨にあらざるはなし、而して其所謂存養擴充、仁に居り義に由るの說、皆敎を以てして言ふ、故に孟子は專ら道を言ふて、敎其中にあり、二書の言、異なる所あるが如くにして實に用を相爲す、此れ其同じき所なり、此二書の要領、學問の標的、若し此に於て理會を缺かば、卒に孔孟の門庭を得ることを得はざらん、云云、

仁齋此の如き見解を有するが故に論語と孟子とを以て本經となし、詩書易春秋を正經となす、其餘三禮三傳等を雜經となし、總べて之れを名づけて群經といひ、爲めに總序を作らんことを企圖せり、然れども總序は遂に成らざりき、大學は程子以來孔子の遺書とせるに、仁齋以て孔子

の遺書にあらずとせり、其事たる、啻に大學定本の中に詳悉せるのみならず、又別に「大學非孔子之遺書辨」を著はして、自家獨得の創見を發表せり、論じて曰く、

大學の一書、本と戴記の中にありて、撰人の姓名を詳にせず、蓋し齊魯の諸儒詩書の二經に熟して、未だ孔孟の血脈を知らざる者の撰する所なり、

彼れ尙ほ種々なる不整合の點を擧げて之れを論證し、大學の撰者を以て告子の流となせり、且つ其言の朱子と相背馳するに及んで絕叫して曰く、「孔孟の血脈を識るに於ては、敢て自ら讓らず」と、實に氣焰萬丈當るべからざるの概あり、其朱子學派より、往々痛擊を受けたるもの、故なきにあらざるなり、室鳩巢曾て高木氏の僞學論に題して曰く、

古より邪說の道を害すること多し、然れども其誕妄醜惡忌憚することなきこと、未だ今日の甚しきが若きものあらず、或は古學と稱するものあり、曰く、大學は孔子の遺書にあらずと、云云（後編鳩巢先生文集

卷之十六)

淺見絅齋の如きは又「辨大學非孔氏之遺書辨」一卷を著はして、仁齋が說を辨駁し、甚しきは「深く考へざるを以て朱子を議す、朱門の奴婢と雖も、亦將に口を掩ふて笑はんとす、其れ亦深く考へざるの甚しきなり」と、然れども絅齋は自然辯護的態度を取り、考證に於て仁齋に匹敵するに足らず、故に其區々の議論も多くは顧みるに足らざるなり、山崎泉亦大學辨斷一卷を著はし、仁齋が說を駁す、然れども絅齋は此れを以て私見を主張し、本意に悖違するもの多しとなし、自ら之れを批評し、批大學辨斷を作れり、此の如くにして同士打の奇觀を呈せるが如き、實に識者の一笑にだも價するに足らざるなり、

朱子は大學の經一章は孔子の言にして曾子之れを述ぶとし、其傳十章は曾子の意にして門人之れを記すとす、然るに仁齋は之れに反し、大學は曾子の傳ふる所にあらずとせり、其主要なる理由を擧ぐれば、傳の六章に「曾子曰、十目所ㇾ視十手所ㇾ指、其嚴乎」とあり、彼れ思へらく、若し此篇を

して果して曾子の意に出でしめば、傳十章は皆曾子の言なり、奚ぞ獨り此に於て「曾子曰」と稱せんや、此れに由りて之れを觀れば、大學を以て曾子門人の記する所とすること信ずべからず、况んや禮記の諸篇「曾子曰」と稱するもの亦多し、豈に皆曾子門人の記する所ならんやと、其論證する所未だ必ずしも正確なりと謂ふを得ずと雖も、亦其識見の頗る卓越なるものなしとせざるなり、

中庸に就いては仁齋左の如く言へり、云く

中庸又孔子の言を演繹す、其書未だ的に子思の作る所と否とを知らずと雖も、然れども其言、論語に合するを以ての故に之れを取る、

又云く、

中庸の書は、卽ち論語の衍義なり、專ら孔門の心法とするものは、非なり、

中庸は古來子思の作とせるに、仁齋之れを疑へり、然れども其孔子の言に本づくものなるは之れを認容せり、彼れ又中庸を分ちて上下二篇と

なし、「鬼神之爲德」以下を下篇とせり、上篇にありては喜怒愛樂等の四十七字を以て古樂經の脱簡にして中庸の本文にあらずとし、而して下篇は悉く中庸の原文にあらずとせり、就中第二十章は本と一篇の書なるに、誤りて中庸に入れり、第二十六章鬼神を論じ及び第二十四章禎祥妖孽を論ずる處、皆孔子の言にあらず、中庸の一書、漢儒の爲めに誤まらるゝもの多しとせり、然れども其他は彼れ必ずしも捨てず、論じて曰く、

鬼神妖孽を論ずるを除くの外、其言皆鑿々として論語孟子と相表裏す、蓋し洙泗の遺言なり、之れを語孟に列して大に世敎に補あり、

此れに由りて之れを觀れば、仁齋は大學よりは、中庸を重んずる傾向あるものなるを知るべきなり、其他六經に就いても仁齋は一々自家の見解を叙述せり、例へば書の如きは今文を取り、朱子呉臨川、梅鷟の徒が古文の眞にあらざるを疑ふを評し、其言鑿々乎として據ることありと云へり、易の如きは、歐陽子、趙南塘と同じく、十翼を以て孔子の作る所にあらずとし「今以論語證之非夫子之語彰々矣」と云へり、仁齋是等經書に關

する見解を朱子學全盛の時代に發表せり、其學者としての勇氣洵に好すべしとなす、然れども此れが爲めに彼れが區々たる後世の非難を免れざるは亦已むを得ざる結果と謂ふきなり、



第六　學統

仁齋は當時學界の一般に信憑せる宋明儒學の證典(authority)を打破して起り、一家獨得の見解を立てたるものなり、春臺が「所謂文王を待たずして作れるもの」とすること誠に當れり、然れども古來仁齋が學、明の吳蘇原に本づくとするの説あり、春臺が聖學問答(卷之下)に云く、

明の末に吳廷翰(吳蘇原の事)といふ者、吉齋漫錄、甕記、櫝記などいふ書を著して、程朱の道を闢きしは、豪傑なり、日本の伊藤仁齋も、吳廷翰が書を讀みて悟を開きたりと聞けり、

玆には未だ仁齋が學、吳蘇原に本づけりとは言はざれども、殆んど學脈系統を指し示す者の如し、多田義俊が秋齋間語卷之一には分明に仁齋が學の吳蘇原及び郝京山に出づることを道破せり、云く、

古學先生語孟の考は、全く吳氏吉齋漫錄、さては郝京山の時習新智によりたるものなり、何とて此二書に本づく由はしるさず、自己の發明

の樣にかゝれ候や、

又那波魯堂の學問源流に云く、

仁齋父子の學は、明の吳廷翰の見識に本づき、却て吳廷翰の學を人には說かず、吳廷翰甕記あり、櫝記あり、隨筆あり、思ひ出たることを、時々書きしるし、甕に盛り集めたるが甕記、櫝に盛り集めたるが櫝記なりと云ふ意の標題なり、其自序に見えたり、丹鉛總錄、宛委餘編の富博にもあらず、却て更に吉齋漫錄上下の卷あり、全篇經義語錄に就いて、識見を發明す、仁齋東涯の學の淵源なり、

又尾藤二洲の正學指掌に仁齋が學を論じて云く、

彼れが說は吳蘇原によれりと聞く、今吉齋漫錄等の書を看るに左もあるべし、かの蘇原が輩は、みな王陽明に迷はされ、時風に溺らされて、種々の說をなし出だせるにて、本來眞の見處あるにはあらず、云云、

此說は單に春臺等の傳ふる所を蹈襲せしに過ぎず、且つ其旨意は仁齋を非笑せんとするにあり、又其吳蘇原を以て陽明學派の人とするもの、

何等の根據あるにあらず、粗漏も亦甚しと謂ふべし、太田錦城の如きも九經談（卷之一）に仁齋が學を論じて、

唯其學は半吳廷翰が吉齋漫錄に出づ、

と云へり、此の如くにして仁齋が學の吳蘇原に出づること殆んど學者間の輿論となれり、然るに近來に至り島田重禮氏は頗る從來の傳說と異れる見解を立てられたり、其事は哲學雜誌第八十八號に掲載せる「伊物二氏の學案」に詳なり、今其趣意を敍述すれば左の如し、

（一）蘇原は本然氣質の說に於ては程朱と合はざれども、其學悉く程朱に反對せしにあらず、即ち其性を說くや、往々程明道を推尊し、「論性之旨、惟明道爲至」と云へり、故に仁齋が古學を奉じて一切宋儒の說を排斥せしとは大に其趣を異にせり、

（二）蘇原は「性只是仁義禮智」といひて程朱と同じく四德を以て性に屬すとする者なり、然るに仁齋は「仁義禮智四者、皆道德之名、而非性之名、道德者徧達於天下、非一人之所私也、性者專有於己、非天下所同也、此性

與道德之辨也」といひ、又「宋儒以仁爲性、予深以爲害于道」といへり、仁義禮智の事は、儒學の第一義なるに、原頭已に同じからざる者あるなり、

(三)蘇原は大學中庸は金科玉條として之れを信奉せしも、仁齋は大學は孔氏の遺言にあらず、中庸には竄入多しといへり、古文尚書の如きも、蘇原少しく疑を容れたれども、全く後世の僞書とは斷定せず、然るに仁齋は古文を取らざるなり、

島田氏は右の差異點を擧げ、終りに論斷して「此等を參考して見ると仁齋は全く異說を襲ひしと云ふは苛酷の論と思はるゝなり」と云へり、

島田氏の言、從來の傳說を破して甚だ力あり、並河天民仁齋に學ぶと雖も、後、一家言を立て、仁齋の說を駁擊し、往々其本づく所を論ずれども、其學の吳蘇原に出づるを言はず、亦以て一證となすべきなり、又周南文集〔卷之九〕に「書吉齋漫錄後」の文あり、其中に仁齋を辯護して云く、

向きに東都にあり、或は言ふものあり、仁齋先生學を倡ふ、本と帳中の

書あり、諸弟子輩與り見ることを得ず、曰く、吉齋漫錄、曰く、甕記、曰く、櫝記と、余甚だ信せず、既にして漫錄を見ることを得たり、其言鑿々として味あり、所謂理氣性命、宋學の謬誤、みな既に發揮す、實に先づ我口の嗜む所を得たるものなり、夫れ述べて作らざるは、君子の道、仁齋何ぞ珠を竊み、櫝を還すの陋あらん、苟も是れを述ぶれば、いづくんぞ其書一言も相援及せずして自ら古處するものあらんや、顧ふに、其書既に成りて後、たま〳〵これを見るか、或は不幸にして見ることを得ざるものあらん、皆知るべからざるなり、是れを以て仁齋をそしるは誣なり、云云、

是れ亦仁齋の爲めに辨じ得て力ありとなす、吳蘇原の事蹟未だ詳ならず、然れども其著書等によりて之れを考ふるに、吳廷翰字は崇伯、蘇原と號す、（島田氏が蘇原を以て吳氏の字とするは誤なり）正德年間の進士なり、著書として傳はれるものは吉齋漫錄二卷、櫝記一卷、甕記一卷、是れなり、尙ほ別に湖山小稿ありと云ふ、吉齋漫錄は主として一家の學說を述ぶるもの、櫝記は易詩書

春秋等の經書を論議せるもの、雜記は史的人物を評隲せるものなり、吉齋漫錄の首に「萬曆丁亥進士男吳國寅刊」とあり、即ち其萬曆年間の刊行本なるを知る、果して然らば仁齋が古學に一變せしよりは少くも五六十年前に公にせられたる書なり、故に仁齋決して此書を手にせざりしと言ふを得ず、又其學說固より蘇原と同一ならざるも、亦甚だ相似たる處あり、例へば、

(一)蘇原は劈頭第一に「天地之初、一元氣而已矣」と喝破し、此れによりて世界解釋をなせり、然るに仁齋も亦劈頭第一に「天地之間、一元氣而已」といひ、一元氣說を主張せり、此點に於ては二氏の見解全く同じくして、共に朱の二元論に反せり、

(二)蘇原は「聖人之道、仁義中正而已矣」といひ、又「太極一也、在天爲陰陽、在人爲仁義」といひ、仁義を以て道とせり、然るに仁齋も亦仁義を以て道德となし、韓昌黎が「吾所謂道德云者、合仁與義言」といへるに同意し、「道者何、仁義是也」といひ、仁義を以て道とせり、仁義を性に屬すると爲せ

ざるとの相違はあるも、其仁義を以て道とするの點に於ては、全く同一なりと謂ふべきなり、

(三)蘇原は「道者、以此氣之爲天地人物所由以出而言也、非有二者也、然又以其變易則謂之易、生々謂易、是也」といひ、一氣の生々する作用を道となせり、然るに仁齋も亦生々して已まざるを以て天地の道となし、得意に生々主義を說き來たれり、

(四)蘇原は「理也者、氣得其理之名」といひ「非氣之外別有理也」といひ、理を以て氣に屬せり、即ち氣の發展して萬象を生ずるに當り、秩序井然として條理あり、是れを理となせり、然るに仁齋も亦「非有理而後生斯氣、所謂理者、反是氣中之條理而已」といひ、蘇原と同じく朱子の理先氣後の說に反對せり、

(五)蘇原は「夫論道之書、以易爲宗、而言以孔子爲准友而求之、以吾心自信者爲實」といひ、多く宋儒の說を駁して直に洙泗の淵源に溯り、超然として古學に歸するの傾向あり、然るに仁齋も亦宋儒を排斥して、古學

を唱道せり、蘇原は宋儒に於て尙ほ未だ全く捨てざるものありと雖も、其大體の方針に於ては仁齋の先驅をなせること疑なきなり

凡そ是等の點によりて之れを考ふれば、仁齋が蘇原に本づきたりと云ふこと必ずしも否定すべからざるに似たり、且つ傳說も仁齋が學說、悉く蘇原に出づとするにあらず、但〻之れに本づくとするものにて、其意は唯〻蘇原によりて觸發せられたり、卽ち suggest せられたりとするのみ、之れに反して仁齋が曾て吉齋漫錄を手にせざりしといふこと、何によりて之れを證明するを得ん、仁齋が門人中江岷山資永中理氣辨論を著はして師說を紹述す、其中具蘇原の一元氣說を引用せり、此れに由りて之れを觀れば、仁齋は吉齋漫錄を見しに相違なきが如し、之れを要するに、反證を擧げて、仁齋が蘇原に本づかざりしと云ふことを確定すること亦難し、然れども仁齋が曾て蘇原の學說を引用せず、又絕えて吉齋漫錄の事を言はざることは是れ實に反證に代はるべき價値を有す、何故なれば仁齋の人物性行を想見するに、他人の學說を敷衍しながら之れを隱

蔽して言はざるが如き卑劣の心術ありしと思惟するを得ざればなり。仁齋は素行の如く自ら宋儒の短處を看破して起り、從ひて又獨創の見解を發表せしものならん、其蘐原と相似たるものあるは蓋し亦暗合のみ、仁齋自ら其古學に一轉せし來由を述べて曰く、

余十六七歳の時、朱子の四書を讀み、竊に自ら以爲く、是れ訓詁の學、聖門德行の學にあらずと、然れども家に他書なし、語錄、或問、近思錄、性理大全等の書、尊信珍重、熟思體翫、積むに歳月を以てし、漸く其肎綮を得たり、二十七歳の時、太極論を著はし、二十八九歳の時、性善論を著はし、後又心學原論を著はし、備に危微精一の旨を述べ、自ら以爲く、深く其底蘊を得て、宋儒の未だ發せざる所を發すと、然れども心竊に安んせず、又之れを陽明近溪等の書に求むるに、心に合することありと雖も、益安んずること能はず、或は合し、或は離れ、或は從ひ、或は違ふこと、其幾回なるを知らず、是に於て悉く語錄註脚を廢して、直に之れを語孟二書に求め、寤寐以て求め、跬步以て思ひ、從容體驗、以て自ら定むるこ

とありて醇如たり、是に於て余が前きに著はす所の諸論、皆孔孟と背馳して、反りて、佛老と相鄰ることを知る（同志會筆記）

此れに由りて之れを觀れば、彼れが語孟の二書によりて自得する所ありしこと疑なし、論語古義の綱領に、

恐、天の靈によりて千歳不傳の學を語孟二書に發明するを得たり、

と云ふも、亦此意を述べて、更に昂々焉たるものなり、又童子問（卷之中）に云く、

予や固より漢宋の舊說と異なるものあり、然れども皆積疑の至り、融釋開明、自然に之れを得て、一も思慮安排、强探力索して得るものなし、我れより之れを開發することを嫌ふてなり、

乃ち悟門自ら開けて彼れ古學に一變せしを知るべきなり、湯淺常山曰く、

仁齋は深く宋氏家の書を反覆見て悟をひらきたるものと覺ゆ、徂徠は然らず、（文會雜記卷之二下）、

是れ亦仁齋が那邊より自得するに至りしかを言ふものなり、林義端亦曰く、

　其學師傳によらず、直に遺經に求めて得、是故に經典を疏釋し、理氣を講論するは、皆肺腑より出づ、必ずしも先儒の說を蹈襲せず、蓋し其神會自得、聖に契する所以のものは則ち親炙せる門人と雖も傳ふることと能はざるなり、(古學先生碣銘行狀跋)

林景範が童子問の跋にも

　先師古學先生不レ由二師傳一、深造二鄒魯之閫奧一、

と云へり、

此れによりて愈〻仁齋が學說の蘇原に出づるにあらざるを知るべきなり、余も亦曾て傳說を信じ居たるも、今は其非なるを信ずるものなり、閑散餘錄に已に傳說の妄謬を論じて云く、

　仁齋の學脈は、甕記、積記、吉齋漫錄の說を竊みて、吾發明とし、一家を建てたるものなりといふ說あり、是れ妬者の言にて、大なる僞りなり、天

地一元氣の說は少し似たるやうの事あれども、全體別なることとなり。かの三書は、皆理學者流の言にて仁齋の說と大に同じからず、長門の周南が文集にその事を論ずれども、全く竊めるものとせず、瑣々たる末義にも、人の非を辨駁することを專務とせるもの、近時甚だ多し、嘆すべし、憐むべし、仁齋の胸襟、人の說を竊み取れる氣象にあらず、若し萬一暗に符合することあらば、千載の子雲といふべし、
誠に然り、彼の傳說は蓋し仁齋と學派を異にせる者の揑造に外ならざらん、賢者を傷けんとするの心情、惡みても餘ありと謂ふべし、然るに始めて彼の傳說を信じて之れを書に筆したるは春臺なり、春臺の粗漏、恕すべからざるものあるなり、されば、こそ服天游も痛く春臺の粗漏を尤めたれ、其言に云く、
未だ嘗て見ざる所の書を、纔に外題學問の分際にて、其作者を豪傑と評するは、何としたる妄說ぞや、又仁齋これに由りて開悟せりとは、何を證として云へるや、たとひ其說の似たることありとも、見ずんばい

かて之れを知らん、若し傳聞のまゝならば、かろ〳〵しく書には筆すまじきことなり、其實は何かな仁齋を毀らんとてかゝる誣説を構へ出だせるなり(燃犀錄)

春臺が學派を異にせるに拘はらず、平生仁齋を推尊せる所より推して之れを考ふるに、彼れ自ら彼の傳説を揑造せしにはあらざるべし、但、彼れが何等の批評をも加へずして當時の傳説を書きしるしたることは幾重にも彼れが過失として尤めざるを得ざるなり、

因りて又蘇原と仁齋との學說を考ふるに、島田氏の列擧せる事項の外重要の點に於て正反對をなせるものあり、蘇原は頻りに主靜無欲の說を立てゝ、道家者流の口吻をなせり、其言に云く、

聖人定之、以中正仁義而主靜、云云、

又云く、

主靜之靜、只以無欲言之爲當、蓋五性感動而善惡分、萬事出者、以有欲故也、有欲則爲動、聖人定之、以中正仁義而主靜、無欲故也、無欲則爲靜、蓋有

欲則雖靜亦動、無欲則雖動亦靜、

甚しきは、

蓋無欲而靜、則仁義之全體在焉、

といひ、仁義を實現するの法、唯無欲なるにありとし、遂に

仁者、天理渾然、蓋此時已到無欲境界矣、

といへり、此に至りて仁齋と緇素の相違をなせり、仁齋は欲を滅して性に復るを敎ふる復性復初の説を駁し、積極的の道德主義を立てんとすればなり、乃ち仁齋が學の蘇原に出でざることを、愈疑なきを知るべきなり、

三島中洲は又仁齋が學を以て陽明の氣學に淵源すとせり(學士會院雜誌第十八編之八)然れども是れ唯、臆測のみ、仁齋は固より陽明近溪等の書を涉獵せりと雖も、其學を崇奉せしにあらず、當時已に仁齋を以て陽明學派とせしものありと見え、答安東省菴書に云く、「退而謂僕爲從新建之學者、甚可笑」と、又同志會筆記の中に陽明の學を非として云く、

王陽明亦以見聞學知爲意見、以良知良能爲眞知、其以眞知爲眞知似矣、然以見聞學知爲意見者、亦猶佛氏之見也、

又語孟字義(卷之上)にも陽明學の孟子の旨に戻ることを論ぜり、乃ち仁齋が學の姚江に出でざるを知るべし、仁齋一元氣を言ふも、元氣は前漢以來學者の往々言ふ所なれば、此れに由りて彼れが學統を陽明に接するは、其當を得たるものにあらざるなり、例へば、漢の律曆志に、

太極元氣、函三爲一、

といひ、又

黃鐘紀元氣之謂律、

といひ、又

太極中央元氣、故爲黃鐘、

といへり、又董仲舒の春秋繁露卷四に云く、

王正則元氣和順、風雨時、景星見、黃龍下、

又(卷十七)に云く、

布恩施惠、若元氣之流皮毛腠理也、

又白虎通（卷上四）に云く、

地者、元氣之所生、萬物之祖也、

後漢明帝紀に云く、

事畢升靈臺、望元氣、吹時律、觀物變、

其他枚擧に遑あらず、仁齋自ら漢儒の太極を以て一元氣とするを論じて「此れは是れ千古不傳の秘、大易の天機を露洩するものなり」といへり、（童子問卷之中）徂徠蘐園隨筆を著はして仁齋が學を論ずるに當りても亦「渾淪を以て是となし、精微を非となす、故に漢儒の說に循つて以て之れを一元氣といはざるを得ざるなり」（卷之一）といへり、此れに由りて之れを觀れば、仁齋が陽明と同じく氣の一元を主張すといふ唯一の理由を以て之れを姚江に淵源すといふことの不當なるを知るべきなり、又仁齋は「仁義之良心」といふことをいへども此れを以て陽明の良知と同じからずとなし、論じて曰く、「近世陽明王氏專ら良知を致すの旨を講ず、然

り而して徒に良知を致すことを知りて之れを仁義に本づくることを知らず」云云と、乃ち陽明と其歸を異にするを知るべきなり之れを要するに、仁齋は別に學統の指名すべきものあるにあらず、其主張せる所は、其獨得の見に外ならざるなり。



第七　學說

第一　叙論

仁齋は何等の師傳もなく、獨り自ら古學を創唱し、直に洙泗の淵源に溯り、跡を孔孟に接するを以て期せり、乃ち「仲尼吾師也」といひ、直ちに孔子を以て其師となせり、又「仲尼即天地也」といひ、孔子を以て天地に比し、又孔子を「最上至極宇宙第一聖人」と稱し、論語を「最上至極宇宙第一書」となせり、其詩に「道以唐虞準、學從鄒魯傳」の句あるは、蓋し其志を述ぶるものなり、仁齋の學、固より道德を以て主眼とすれども、亦宇宙論に關して奇拔なる一家の新說を立てたり、是れ其學の特色の存する所と謂ふも不可なかるべし、然れども彼れの宇宙論は道德と關係なきものにあらず、反りて道德の根柢たるべきものなり、是故に彼れが宇宙論に關する新規の見解は道德上更に生面を開くの端緒となれり、一言以て之れを蔽へば、死道德を化して活道德となせり、而して其歸する所は孟子にあり、

孟子によりて孔子に合するにあり、其「孟子之書、論語之義疏也」といひ「孟子之書、又亞論語而發明孔子之旨者也」といひ、又「學者不熟讀孟子、必不能達於論語之義、蓋論語之津筏也」といふは即ち孔子を學ばんと欲せば當に孟子を階梯とすべきを意味するものなり、

第二　宇宙論

(一)一元氣論

仁齋は宇宙を以て一元氣とし、此一元氣を以て一大活物とし、純然たる一元論 Monismus を唱道し、宋儒(特に朱子)と根本的に其見解を異にせり、乃ち論じて曰く、

蓋し天地の間は一元氣のみ、或は陰たり或は陽たり、兩者ひたすらに兩間に盈虛消長、往來感應して、未だ嘗て止息せず、此れ即ち天道の全體、自然の氣機、萬化此れよりして出で、品彙此れに由りて生ず、聖人の天を論ずる所以のもの、此に至りて極まる、知るべし此れより以上更に道理なく、更に去處なきことを、(語孟字義卷之上)

彼れは此の如く、一元氣を以て世界の根本主義とし、一切自然現象の解釋を試みたり、所謂太極の如きも亦此一元氣を指して言ふものとせり、(童子問卷之下)然るに彼れは一元氣を動勢的に考察して、左の如く言へり、云く、

蓋し天の活動たる所以のものは、其一元の氣あるを以てなり、一元の氣は猶ほ人の元陽あるがごとし、飮食言語視聽動作、身を終ふるまで息むことなし、正に其元陽あるが爲めなり、若し元陽一たび絕ゆれば、忽ち異物となりて、木石と異なることなし、唯天地は一大活物、物を生じて、物に生せられず、悠久窮りなく、人物の生死あるに比せざるなり、夫れ太虛なきときは、則ち已む、太虛あるときは、則ち斯氣なきこと能はず、斯氣や既に生ずる所もなく、亦生せざる所もなし、萬古獨り立ちて顚撲破れず、豈に虛無を以て之れを目くべけんや(童子問卷之中)

乃ち其見解の大に宋儒及び老佛に異なるものあるを知るべきなり、朱子は理氣の二元を立てゝ世界を解釋し、寧ろ靜止的の理を以て原本的

のものとせり、仁齋は世界を靜止的に考察するを非とし、靜止的に考察するを以て異端の學とせり、其言に云く、

聖人は天地を以て活物となし、異端は天地を以て死物となす、此處一たび差へば、千里の繆あり、（同上）

彼れが此の如く天地を活物とするの見解を聖人に出づとするは、蓋し易に本づくならん、易といふことも變易の義にして、已に天地の變化窮りなき事を意味し、ヘラクライトス氏の所謂「永遠の流行」eternal flux と異ならず、然るに殊に繫辭の中には「生々之謂易」とありて、世界を一大活物の一往一來一信一屈して永遠に發展するものゝ如くに敍述しあり然るに宋儒は靜止的の理を以て根本主義とし、寂靜に流れ易き敎を開けり、換言すれば、本來の動勢的態度を一變して寂靜主義 Quietism となせり、是れ宋儒が老佛の觀念を引き入れて儒敎に嫁せしめたるの結果たるや疑なし、是を以て仁齋痛く理を說くことの非なるを喝破せり、曰く、

若し理を萬物の本原とせば、自ら流れて老佛の學に入る、聖人の旨と實に天淵なり、謹まざるべけんや（同上）

又曰く、

聖人每に道の字を以て言をなして、理の字に及ぶもの、甚だ罕なり、云云、理を以て主となせば必ず禪莊に歸す、蓋し道は行ふ所を以て言ふ、活字なり、理は存する所を以て言ふ、死字なり、聖人は道を見るや實、故に其理を說くや活、老氏は道を見るや虛、故に其理を說くや死（語孟字義卷之上）

仁齋は尙ほ理を說くことは老莊より來たれることを論じ、其結果、鄒魯の本旨と相背馳せることを辨ぜり、而して彼れ自ら「有動而無靜」と唱道し、得意に活動主義を鼓吹し、意氣軒昂、宋儒をして後に瞠若たらしむるの概なしとせざるなり、

(二)氣先理後說

先づ宋儒の說を擧げて仁齋の之れと異なる所以を明かにせん、宋儒は

理を以て氣よりも高尙なるものとし、且つ氣に先ちて存すとせり、朱子曰く、

未だ天地あらざるの先き、畢竟是れ先づ此理あり、(語類卷一)

又曰く、

此理あり、便ち此天地あり、若し此理なければ、便ち亦天地なく、人なく物なく、都て該載なく了はる、理あり便ち氣あり、流行して萬物を發育す、(同上)

此れによりて之れを觀れば、朱子はプラトンの觀念のごときものを理とし、理は氣に先ちてあるものとせり、即ち彼れにありては、理は先驗的(transscendental)なり、彼れ時ありては「理與氣本無先後之可言」などいひて、頗る此點に就いて疑惑せるが如き痕迹あるも、畢竟理先氣後の說を懷抱せるものなること、復た疑なきなり、然るに仁齋は理を說かざるにあらざるも、是れを以て單に氣中の條理に過ぎずとなし、氣先理後の說を主張せり、乃ち論じて曰く、

理ありて而して後斯氣を生ずるにあらず、所謂理とは、反りて是れ氣中の條理のみ、云云、大凡そ宋儒の所謂理ありて而して後、氣あり、及び未だ天地あらざるの先き、畢竟先づ此理あり等の說は、皆臆度の見にして、蛇を畫いて足を添へ、頭上に頭を安す、實に見得るものにあらざるなり（語孟字義卷之上）

又曰く、

理は木と死字、物にありて物を宰ること能はず、生物にありては、生物の理あり、死物には死物の理あり、人には人の理あり、物には物の理あり、然れども一元の氣、之れが本となりて理は氣の後にあり、故に理は以て萬化の樞紐となすに足らざるなり（童子問卷之中）

其朱子と正反對にあることと、以て知るべし、仁齋が所謂理は物質の變化するに當りて其中自ら一定の秩序あるを言ふ、故に理法の如きものを意味するなり、理法は物質を離れて存するにあらず、物質の變化する所に、於て認識すべきものなれば、仁齋が理は殆んど之れに當れり、理法の

外尙ほ世界の實在として寫象すべきものあり、朱子の所謂理は即ち實在の如きものなり、但し彼れは實在を活動的に寫象せずして、靜止的に寫象せり、故に老佛の觀念と一致せるものあるなり、其靜止的に論ずることの是非いかんは姑く之れを置くも、其物質以上の實在を說くは哲理として必ず然るべき所なるが故に、仁齋之れを破すること能はず、何等の反證をも擧げず、單に其非なるを言へり、彼れ曰く、

萬物は五行に本づき、五行は陰陽に本づく、再び推して陰陽の然る所以に至るときは、則ち之れを理に歸せざること能はず、既に理に歸するときは、則ち自ら虛無に陷らざること能はず、所謂萬法は一に歸す一何れの所にか歸すといふ、是れなり、此れ常識の必ず此に至りて聖人と自ら相違ふ所以なり、云云（童子問卷之中）

是れ唯〻聖人と相違ふといふの理由を以て排するものにて、毫も其眞理にあらざる所以を明かにするものにあらず、然れども仁齋は孔子を以て終局の理想となすものなるが故に此種の議論あるも、亦怪むに足ら

ざるなり、

（三）萬古無窮論

支那の哲學者は古來往々天地の始めを論ぜり、朱子の如きも、屢天地の如何にして開闢せしかを說き、又六合の形、內外あるべきことをも言へり、仁齋は總べて天地の始めを論ずるものを不經の甚しきものとなして之れを排斥し、自らは萬古無窮なることを唱道せり、曰く、

夫れ四方上下を宇といひ、古往今來を宙といふ、六合の窮りなきを知るときは、則ち古今の窮りなきを知る、今日の天地は即ち萬古の天地、萬古の天地は即ち今日の天地、何ぞ始終あらん、何ぞ開闢あらん、此論以て千古の惑を破るべし（語孟字義卷之上）

仁齋の說く所は畢竟無始無終論なり、但〻佛說の如く成住壞空を認容するものにあらず、然れども又强ひて之れを辨ずることを欲せず、乃ち「其窮際に於ては、聖人と雖も、之れを知ること能はず、況んや學者をや、故に存して之れを議せざるを妙となす」といひて、闕疑の旨意を明かにせり、

荀子曰く、「天地始まるもの、今日是れなり」と、仁齋が「今日の天地は即ち萬古の天地」といふもの、此れと其旨意を同うし、天地其物にありては、本と古今の差別あるにあらずとするものなり、

(四)生々主義

仁齋は天地を以て一大活動とし、唯「生々化々の發展あるをのみ認容し、之れに反する死々滅々の事實あるを是定せず、即ち老佛の寂靜主義と正反對をなせり、今日の語を以て之れを言へば、彼れの說く所は積極主義にして、又頗る樂天主義に類似するの痕迹あり、兎に角消極主義若くは厭世主義と立脚點を倒逆せるものなること疑なきなり、乃ち論じて曰く、

易に曰く、「天地之大德曰」生」と言ふは、生々して已まざるは、即ち天地の道なり、故に天地の道は、生ありて死なく、聚ありて散なし、死は即ち生の終り、散は即ち聚の盡くるなり、天地の道性に一なるが故なり、父祖、身沒すと雖も、其精神は之れを子孫に傳へ、子孫又之れを其子孫に傳

へ生々斷えず無窮に至るときは、則ち之れを死せずと謂ふて可なり、萬物皆然り、豈に天地の道生ありて死なきにあらずや、故に生ずるものは必ず死し、聚まるものは必ず散すと謂ふときは可なり、生あれば必ず死あり、聚あれば必ず散ありと謂ふときは不可なり、生と死と相對するが故なり、（語孟字義卷之上）

仁齋が論ずる所、未だ必ずしも正確ならず、生は積極的にあり、死は然らず、唯〻生の澌盡するを謂ふのみ、死てふものが、生の如く存續せるにあらず、故に生と死と積極的に相對して言ふべきものにあらざるなり、然れども生の終りが死にして聚の盡くるが散ならば、死も散もあることはあり、生ありて死なく、聚ありて散なしと謂ふを得ざるなり、又生ずるものは必ず死し、聚まるものは必ず散ずと謂ふと生あれば、必ず死あり、聚あれば、必ず散ありと謂ふと、其義に於て異同あるにあらず、然るに彼れ後者を非として前者を是とするもの、亦糊塗の甚しきものと謂ふべし、但〻彼れが父祖の精神、子孫に傳はりて絕えずとする所より之れを考ふ

老子ノ所謂
久動乎、

れば、特殊のものは、死を免れざるも、全體より之れを言へば、畢竟死てふものなくして、唯、永遠に生々發展するものなり、即ち天地を以て悠久窮りなしとし、元氣を以て攧撲破れずとするもの、蓋し此れが爲めなり、仁齋老佛の謬見に陷り、生々主義に反せるを排じて曰く、

佛氏は空を以て道となし、老子は虛を以て道となす、佛氏以爲く、山川大地は盡く是れ幻妄と、老子は以爲く、萬物皆無に生ずと、然れども天地は萬古常に覆載し、日月は萬古常に照臨し、四時は萬古常に推遷し、山川は萬古常に峙流し、羽あるもの、毛あるもの、鱗あるもの、裸なるもの、植るもの、蔓べるもの、萬古常に此の若し、形を以て化するものは、萬古常に形を以て化し、氣を以て化するものは、萬古常に氣を以て化し、相傳へ相蒸し、生々窮りなし、何ぞ夫の所謂空虛なるものを見る所あらんや(同上)、

仁齋は又天地の間は唯一動ありて靜なく、善ありて惡なしとせり、是れ當時の學界に唱へ出だされたる一新說と見做すを得べし、其言に云く、

凡そ天地の間は皆一理のみ、動ありて靜なく、善ありて惡なし、蓋し靜とは動の止、惡とは善の變、善とは生の類、惡とは死の類、兩者相對して並び生ずるにあらず、皆生に一なるが故なり（童子問卷之中）

彼れが靜は動の止といふもの、當れり、如何なる物體と雖も、其靜なるは之れに抵抗する障碍物あるが爲めなり、若し其障碍物を除かんか、永遠に動いて已まざるべきなり、惡は善の變といふも、面白し、惡は必ずしも積極的に見るを要せず、善の間違として消極的に見るを得べし、例へば己れを利すといふ事、必ずしも非なるにあらず、但己れを利せんが爲めに、其方法を誤まり、害を他人に及ぼすことあれば、是れを惡となすを得べし、故に動ありて靜なく、善ありて惡なしの說、未だ遽に輕侮すべからざるなり、彼れ又曰く、

蓋し天地の間、四方上下、渾々淪々、充塞通徹、內なく、外なく、斯善にあらずといふことなし、故に善なるときは順、惡なるときは逆、苟も不善を以て天地の間にあるものは、猶ほ山草を以て之れを水澤の中に植え、

水族を以て之れを山岡の上に留むるがごとし、則ち一日も其性を遂ぐること能はざるや必せり、夫れ人一日も不善を以て天地の間に立つあること能はざること、亦猶ほ是の如し、(語孟字義卷之上)

是れ殆んど樂天主義を道破するものゝ如く、眞にショーペンハウエル氏の萬物皆惡の觀念と黑白の相違を成せり、之れを要するに、仁齋の世界觀は健全なるものにて、又學者の顧慮すべきもの、少しとせざるなり、

第三　道德論

（一）道は卽ち仁義

儒教の範圍いかに廣大なりと雖も、道の一字を以て之れを貫穿するを得べし、道は實に儒教の主義本領とも謂ふべきものなり、然れども何を道と云ふやは、甚だ明瞭ならず、殊に宋儒起りて「道卽性、性卽道」といひ、「性卽理也」といひ、道性理の三者を混一してより道の意義反りて分曉を缺くの感なしとせず、此時に當りて仁齋は、道は卽ち仁義なりと喝破し、以て群儒の迷夢を攪醒せり、其言に云く、

道とは何ぞ、仁義是れなり。（童子問卷之上）

又云く、

人道の仁義あるは、猶ほ天道の陰陽あるがごとし、仁義を外にして豈に復た道あらんや、而して仁の義を包ぬるは、猶ほ陽の陰を統ぶるがごとし、故に孔門仁を以て宗となして、義を以て輔となす。（同上卷之中）

又孔門學問の宗旨を論じて云く、

千言萬語、至りて多端なりと雖も、仁義の二字に總括せずと云ふことなし、親を親とするより之れを充てゝ朋友郷黨所識疎薄の人に至るまで、慈愛の心、周邊浹洽、底らざる所なうして、一毫殘忍忮害の念なきもの之を仁といふ、一取舍の間より之れを充てゝ、辨別分明、苟も其義にあらざれば、之れを祿するに天下をもつてすれども、顧みざるもの、之れを義といふ、他の卓行偉績、取るべきことありと雖も、然れども少しも仁に於て闕くることあれば則ち德とするに足らず、義に於て闕くることあれば、亦之れを稱するに足らず、智とは斯二者を知りて去

ちざる是れなり、禮とは斯二者を節文する是れなり、皆仁の推なり、仁義の孔孟學問の宗旨たる所以のものは、此れを以てなり(同上)

又云く、

聖人の道は仁より大なるはなく、義より要なるはなし、云云、仁義は固より道の本體(語孟字義卷之下)

其他「仁義は道の全體」等の語も見え、仁齋が主張甚だ明瞭にして、徂徠が禮樂を以て道とするの説と大に立脚點を異にせり、仁齋、仁義を以て道とすれども、仁を以て主となし、義は其中に包含せらるとせり、即ち其仁の義を包ぬるは、猶ほ陽の陰を統ぶるがごとし」といひ、又「孔門仁を以て宗となして、義を以て輔となす」といふが如き、皆此意を述ぶるものなり、

彼れ又曰く、

仁とは人道の大本、衆善の總要、人道の仁義あるは、猶ほ天道の陰陽あるがごときなり(童子問卷之上)

又曰く、

仁とは德の長、學、仁に至れば、衆德合湊す、云云、蓋し仁とは聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふものなし(同上)

此の如く仁は義をも含蓄し得べきものなるが故に、道は仁なりと謂ふも不可なきなり、然るに仁齋は道を以て活字となし、生々化々の妙を形容する所以なりといへり、即ち彼れにありては道は靜止的のものにあらずして活動的のものなり、且つ彼れの所謂道は奇異なるものにもあらず、又幽玄なるものにもあらずして、各自の平生行爲する所にあり、彼れが「道は猶ほ路のごときなり、人の往來する所以なり」と云へるによりて、已に道てふものは、人の常に經由せざるべからざるものを謂ふこと明かなり、倘ほ又道の人を離れて存せざるを論じて曰く、

人の外に道なく、道の外に人なし、人を以て人の道を行ふ、何の知り難く行ひ難きことか之れあらん、云云、若し夫れ人倫を外にして、而して道を求めんと欲するものは、猶ほ風を捕り影を捉るがごとく、必ず得べからざるなり、故に道を知るものは必ず之れを邇きに求む、其道を

以て高しとなし、遠しとなし、企て及ぶべからずとするものは、皆道の本然にあらず、自ら惑ふの致す所なり（童子問卷之上）

又曰く、

常道は即ち是れ至道、豈に天地の間、常道を外にして而して別に所謂至道なるものあらんや、常道即ち至道なるを知らば、是れ聖學常道の外別に所謂至道ありといふは、是れ異端、何んとなれば、天地の道、至親至切、歸宿する所の處を論ずるとき、子臣弟友、日用常行の間に過ぎずして、而して若し夫れ至言妙道と稱し、渺茫恍惚、高きを極め遠きを窮むるものは、都て空言に歸す、何んとなれば、口言ふべくして身行ふこと能はず、心思ふべくして之れを物に施すことを得ず、高うして本なく、文にして實なくんば、何の至言妙道か之れあらん（同志會筆記）

凡そ是等道に關するの說は、皆老佛に對して立する所にして、畢竟儒敎の道は人類社交の外に出でずとするものなり、然れども又時ありては道は人を離れて存するものゝ如くに論ぜり、其言に云く、

道は人あると人なきとを待たず、本來自らあるの物、天地に滿ち、人倫に徹し、時として然らざるなく、處として在らざるなし、豈に人物各、其性の自然に循ふて而して後、之れありといふべけんや、(童子問卷之上)

然れども是れ唯、道てふもの丶性よりも原本的なるを示さんが爲めに言へるに過ぎず、仁齋が眞意は決して人類社交以外に別に道ありて存すとするにあらざるなり、彼れが「外人倫而無道、外仁義而無教」(童子問卷之下)といへるを以て知るべし、彼れ又曰く、

大凡そ耳目に接り、日用に施すもの、總べて是れ道にあらずといふことなし、俗の外道なく、道の外俗なし、而して一點の俗氣と雖も、亦著け得ず、此れ是れ上達の光景、(童子問卷之中)

乃ち彼れの得道は世俗の中に於てなさる丶ものにて、毫も世俗の外に出でざること明かなり、彼れ此れに由りて其道の老佛と異なることを示さんとすれども、反りて柱下氏の和光同塵、瞿曇氏の煩惱即菩提と歸趣を同うするものあるは、亦一奇ならずとせんや、

仁齋は仁義を以て道とし「道とは何ぞ、仁義是れなり」といへり、然れども

(二) 道德の意義

又時ありては、「道とは何ぞ、仁なり義なり禮なり智なり」（童子問卷之上）といひ、仁義禮智を以て道とし、乃ち是れを仁義禮智の總名」とせり、然るに彼れ又德を解して「德は、仁義禮智の總名」といへり、此の如くなれば、道と德といかんして之れを區別するを得べきか、彼れ乃ち論じて曰く、

道德の二字、亦甚だ相近し、道は流行を以て言ひ、德は存する所を以て言ふ、道は自ら導く所あり、德は物を濟す所あり（語孟字義卷之上）

此れに由りて之れを觀れば、德は內容の資質にして道は發動する作用なり、仁齋は躰用といふことを好まざれども、殆んど躰用を言ふものゝ如し、道も德も、皆仁義なり、仁義の社交上行はるゝは道にして其本來人に具はるは德なり、仁齋道と德とを仁義禮智の總名とすれども、總括すれば、仁義の二者に歸せざるを得ず、彼れ之れを辯じて曰く、

仁義の二者は實に道德の大端、萬善の總腦、智禮の二者は皆此れより

して出づ(同上)

之れを要するに、仁齋にありては、仁義は即ち道德にして、道德は即ち仁義なり、彼れが韓昌黎の「吾所謂道德云者、合仁與義言」の語を引いて己れが說に合するを以て知るべきなり、仁齋德を論じて曰く、

聖人は德を言ふて心を言はず、後儒は心を言ふて德を言はず、蓋し德は天下の至美萬善の總括(語孟字義卷之上)

宋儒が多く德を言はざること、仁齋が言ふ所の如し、試に朱子の語類を見るに、理氣心性等を說くこと最も詳にして、德に至りては之れを說くこと割合に少し、且つ德其物いかんに就いて仁齋は朱子と見解を異にするものあるが如し、朱子は德を解して「德は得なり、道を行ふて心に得るあるなり」と云へり、然るに仁齋は之れを非として論じて曰く、

若し德を以て得るの義となすときは、德は是れ脩爲を待ちて而して後あり、豈に本然の德を盡くすに足らんや(同上)

仁齋の意は若し朱子の如く德を解せば、德は本來人に存するものにあ

らずして、脩爲によりて獲得する所となる、是れ事實にあらず、德は本來人に存するものなりと謂ふにあり、然れども朱子も「德是得于天者」(語類卷六)と云へるを以て之れを觀れば、先天の德を認容するものなること疑なし、仁齋己れが說を立つるに急なるが爲め、多少公平を缺く所なしとせざるなり、

(三) 仁義禮智

仁齋が學によれば、道は即ち仁義にして、德も亦仁義なり、是故に道德は即ち仁義、仁義は即ち道德なること自ら明かなり、然るに仁義は總括して之れを言ふものなり、委しく之れを言へば、仁義禮智なり、仁齋之れを論じて曰く、

慈愛の德、遠近內外、充實通徹、至らざる所なき、之れを仁といふ、其當になすべき所をなして、其當になすべからざる所をなさず、之れを義といふ、尊卑上下、等威分明、少しも踰越せざる、之れを禮といふ、天下の理、曉然洞徹、疑惑する所なき、之れを智といふ、天下の善、衆しと雖も、天下

の理、多しと雖も然れども仁義禮智之れが綱領たり、而して萬善自ら其中に總括せずといふことなし、故に聖人此四者を以て道德の本體となし、學者をして此れに由りて之れを脩めしむるなり、（語孟字義卷之上）

仁齋孟子に從つて仁義禮智の義を解釋せり、即ち人といふ人には皆惻隱、羞惡、辭讓、是非の四端あり、是れ本と其性の有する所にして、之れを具足せざるものあるなし、苟も擴めて之れを充大にするときは、能く仁義禮智の德をなすものとせり、換言すれば、如何なる人も、先天的に四端てふものを具有す、此本來具有せる四端をさへ發展すれば、其結果は仁義禮智となるとするものなり、然れども宋儒の如く仁義禮智を以て性とすることに就いては斷々乎として反對せり、其論に云く、

仁義禮智の四者は皆道德の名にして性の名に非ず、道德とは偏く天下に達するを以てして言ふ、一人の有する所にあらざるなり、性とは專ら己れに有するを以てして言ふ、天下の該ぬる所にあらざるなり、

此れ性と道德との辨なり(同上)

又云く、

仁義の道德の名たること彰々たり漢唐の諸儒より宋の濂溪先生に至るまで皆仁義禮智を以て德となして未だ嘗て異議あらず伊川に至りて始めて仁義禮智を以て性の名となして性を以て理となす此れよりして學者皆仁義禮智を以て理となし性となして而して徒に其義を理會し復た力を仁義禮智の德に用ひず(同上)

此の如く仁義禮智を以て道德の名とし性の名とせざるは仁齋が主張として最も特色の存する所なり宋儒は仁義禮智を以て性の名とし性を以て理となせり然るに仁齋は之れを非とし仁義禮智を以て道德の名とせり其差別言語の上に於ては不明瞭といふにはあらざれども性と德と實際然く異なるものなりや否やに就きて疑なきこと能はず蓋し仁齋は性を以て個人的のものとし人々殊別なる性を具すとし之れに反して德は萬人共通にして普遍的價値を有すとするものなり德は

固より一人の主觀的に是定するのみにては未だ公共的に認容せられたるものと一致することを保せず、唯〻其公共的に認容せられたるものと一致するに及んで始めて其眞に德たるを疑はざるべきなり、此點よりこれを言へば德は普遍的價値を有するに相違なし、仁齋が道德を以て徧く天下に達すとするもの、蓋し此旨意を述ぶるものなり、然れども仁齋が性を以て個人的とするは、未だ當たらず、若し性を以て氣質 Charakter とせば個人的ならん、然れども宋儒の所謂性は寧ろ理性 Vernunft なり、個人的のものにあらず、矢張萬人共通のものとして認容せらるゝ所なり、仁齋が宋儒の說と峻別せんとする所、未だ十分に透徹せりと謂ふを得ざるなり、且つ又仁齋が仁義禮智に關するの說、甚だ誤解し易きものあり、何ぞや、若し仁義禮智が性の名にあらざれば、是れ人の本性に根柢するものにあらずして、客觀的に實在するものならざるべからず、即ち人を離れて自存する宇宙的のものならざるべからず、然るに彼れ曰く、

道は人あると人なきとを待たず、本來自らあるの物、天地に滿ち、人倫に徹し、時として然らざるなく、處として在らざるなし、豈に人物各〻其性の自然に循ふて、而して後之れありといふべけんや（童子問卷之上）

此の如くなれば、道德は人を離れて存立すべきものなり、然るに四端は人の本來具有するものなり、是に於て奇異なる結論を生ずるなり、何ぞや是れ他なし、四端と仁義禮智とは別物なり、四端は人の本性にあり、仁義禮智は然らず、客觀的に實在するなり、斯く解釋し得るが故に並河天民は仁齋が仁義と四端とを分ちて二物となし、孟子の旨意に背くことを論ぜり（復二誠所先生一書を參看せよ）仁齋果して四端と仁義とを分ちて二物とせば天民の駁する所鑿々竅に中れり、島田篁村曰く、

いかにも仁齋は道德の名にして性の名にあらずと云ふに至りては、語孟の說く所と全く背戾せり云云、仁義禮智を以て性分に屬することと、獨り宋儒の創說にあらず、子思孟子の傳ふる所、古來の定說と云ふべきなり、然るに仁齋孟子四端の說を誤解して牽强附會、自己の說を

主張するは、大なる謬見にて天民などが論駁する所頗る其當を得たりと云ふべし（哲學雜誌第八十八號）

仁齋が四端と仁義禮智とを分ち、仁義禮智を以て性にあらずとするは天民篁村諸氏の言へる如く謬見たるに相違なし、然れども仁齋は決して仁義禮智を以て人性より發展するものにあらずとせず、童子問（卷之中）に本然の德を論じて云く

仁義禮智是れのみ、此れ天下の同じく然る所にして人心に根さし、風俗に存して、萬世磨滅するを得ず、此れを之れ本然の德といふ、

仁義禮智が人心に根ざすものなる以上は、假令ひ是れを性といはざるも、亦性ならずとせんや、又孟子古義（卷之二）に云く、

四端は吾心の固有にして、仁義禮智は、天下の大德なり、四端の心、微なりと雖も、然れども擴めて之れを充つれば、則ち能く仁義禮智の德を成す、云云、

即ち知るべし、仁義禮智は四端を擴充するによりて始めて成るものな

るを、此の如くなれば仁齋必ずしも孟子を誤解せしにあらず、然れども四端を擴充して始めて成る所の仁義禮智は天下公共の德にして普遍的價値を有するもの、故に彼れ是れを一己の私有とせざるなり、然れども彼れ本と宋儒の性即理の說と其轍を異にせんことを欲す、（中江岷山が理氣辨論を參看せよ）故に仁義禮智を性とせず、是に於てか孟子の「仁義禮智、非ㇾ由ㇾ外鑠ㇾ我也、我固有ㇾ之也」を解釋するに當りて牽合附屬、遂に其何の謂なるを知らざるなり、乃ち論じて曰く、

孟子の意、以爲く、人必ず惻隱羞惡辭讓是非の心あり、是の四つのものは、人の性◎にして善なるものなり、而して仁義禮智は、天下の德◎にして、善の至極なるものなり、苟も性の善を以てして天下の德を行ふときは、則ち其易きや、猶ほ地を以て樹を種ゑ、薪を以て火を燃やすがごとし、自ら窒礙する所なし、故に惻隱羞惡辭讓是非の心を擴充すれば、則ち能く仁義禮智の德を成して、四海の廣きと雖も、自ら保ち易きものあり、蓋し人の性善ならざれば、則ち仁義禮智の德を成さんと欲すれ

ども得ず、唯其れ善なり、故に能く仁義禮智の德を成すを得、故に仁義は即ち吾性といふも可なり、吾性は即ち仁義といふも亦可なり、但仁義を以て性中の名とするときは、則ち不可なり、所謂固有といふものゝ意、蓋し此の如し、其理甚だ微なり、所謂毫釐千里の差、實に此にあり、學者反覆體察せずんばあるべからず(語孟字義卷之上)

今此文を讀むに、四端を以て性とし、仁義禮智を以て德とし、兩者を區別するの意は、明瞭なれども、兩者が如何に區別し得らるゝやは遂に明瞭ならず、最後に仁義が性なりや否やを論ずる處、曖昧模糊其何の謂なるを知らず、是れ全く仁齋が思想の混亂に出づるものなることを疑なきなり、孟子の見解は本と單純明晰にして、些の疑を容れず、即ち人てふ人は四端を有せざるなし、此四端をさへ擴充すれば、其結果必ず仁義禮智となる、是故に仁義禮智は人の心に根さすものなりと、是れ鄒叟の意なり、此の如くなれば毫も微妙不思議の點あるを見ず、然るに仁齋強ひて仁義を以て性にあらずとして、宋儒の說と峻別せんと欲す、是に於てか自

ち五里霧中に迷ひ、殆んど譫語に類する言を吐き、「其理甚だ微なり」と云へり、其理甚だ微なるにあらず、彼れ自ら朦朧として暗中に摸捉するを知らざるのみ、

四端と仁義禮智との關係に就いては仁齋思想の混亂を免れずと雖も、彼れが仁義禮智を以て道德とすることは、當時にありては眞に破天荒の主張にして、暗夜に燈を得たるの思ありしや疑なし、然るに彼れは仁義禮智の中、仁義を以て主となし、智禮の二者は此れより出づとし、更に又進んで仁の一字、一切を包容すとせり、其言に云く、

仁とは人道の大本、衆善の總要、（童子問卷之上）

又云く、

蓋し仁とは、聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふもののなし、（同上）

又云く、

王道固より仁義の兩者に出でずと雖も、然れども約して之を論ずれ」

ば、則ち一の仁の字、之れを盡くせり(同上卷之中)

畢竟仁齋が學にありては仁の一字、都て爲の道德主義を表出せり、然らば仁とは如何なる事を意味するかといふに、彼れは是れを以て愛の義とせり、其言に云く、

仁の德たる大なり、然れども一言以て之れを蔽ふ、曰く愛のみ、君臣にありては之れを義といひ、父子には之れを親といひ、夫婦には之れを別といひ、兄弟には之れを叙といひ、朋友には之れを信といふ、皆愛よりして出づ、蓋し愛は實心に出づ、故に此五のもの愛よりして出づるときは實たり、愛よりして出でざるときは僞のみ、故に君子は慈愛の德より大なるはなし、殘忍刻薄の心より戚しきはなし、孔子仁を以て德の長とするは、蓋し此れが爲めなり、此れ仁の聖門第一字たる所以なり(童子問卷之上)

又云く、

慈愛の心、渾淪通徹、内より外に及び、至らざる所なく、達せざる所なう

して一毫殘忍刻薄の心なき、正に之れを仁といふ、此に存して彼れに行はれざるは仁にあらざるなり、一人に施して十人に及ばざるは仁にあらざるなり、瞬息に存し、夢寐に通じ、心愛を離れず、愛心に全く打ちて一片となす、正に是れ仁なり、故に德は人を愛するより大なるはなく、物を伎ふより不善なるはなし、孔門仁を以て學問の宗旨とするは蓋し此れが爲めなり(同上)

其他「仁は愛を主として、德は人を愛するより大なるはなし」(童子問卷之上)といひ、又「惟愛以て仁を成すべし」(日札)といひ、仁とは愛の義なることを論じて復た餘力を遺さゞるの概あり、韓昌黎已に博愛を以て仁とせり、然るに宋儒は仁を以て性となし、愛を以て情となし、昌黎を以て情を知りて性を知らずといへり、仁齋乃ち宋儒に反對し、寧ろ昌黎に左袒せり、但昌黎は未だ鄒魯の道德主義、畢竟仁に外ならずとまでは言ざりき、然るに仁齋は仁を以て「聖學之全體、萬善之總括」となし、宋儒の如く仁を以て性となすことの非なるを痛論し、人道的博愛 Allgemeinemenschenliebe

を以て其道德主義となせり、是故に其歸着する所は今日の道德的觀念と相背馳する所あらざるなり、

(四)道德的格言

仁齋が道德に關する諸說中特に紹介すべきは、如上の事項に過ぎずと雖も、彼れが愼重なる考察の結果に出でたる格言にして、吾人の實行に適切なるもの少しとせず、今左に之れを選出せん、

一

多言は愼を取り、多動は謗を取り、多學は德を害ひ、多說は理を亂る、

二

己れを責めて人を責めざれば怨なし、此れ學問究竟の法、

三

書を讀むは、當に沙を淘して金を拾ふが若くすべし、取ることは其廣きを欲し、擇ぶことは其精はしきを欲す、

四

學問は當に勝心を以て大戒となすべし、吾れ勝心あるものを觀るに、其言多く義理を以て辯駁すと雖も、然れども皆勝心より來たりて、其害、中に潜滋暗長して、繹解すべからず、學問愈進めば、邪心愈長ず、議論愈工なれば、私心愈深し、故に學問當に勝心を以て大戒となすべし、

五

至言は泛然たるが若く、邪説は人を動かし易し、泛然たるが若し、故に得て知るべからざるなり、人を動かし易し、故に覺えず自ら其窠臼に陷る、

六

若し夫れ人倫を外にして道を求めんと欲するものは、猶ほ風を捕り影を捉ふるがごとく、必ず得べからざるなり、故に道を知るものは、必ず之れを邇きに求む、其道を以て高しとなし、遠しとなし、企て及ぶべからずとするものは、皆道の本然にあらず、自ら惑ふの致す所なり、

七

高きに居るものは卑きを見る、故に其言卑からざるを得ず、卑きに居るものは高きを視る、故に其言高からざるを得ず、自然の符なり、是故に道徳盛なれば、議論卑く、道徳衰ふれば、議論高し、猶ほ權衡の物を量るに其輕重に隨つて、互に相低昂するがごとし、道徳一分衰ふるときは議論一分高し、道徳二分衰ふるときは、議論二分高し、道徳愈々衰ふるときは、議論愈々高し、議論愈々高きに及んでや、道徳蔑如たり、

八

苟も風に向つて火を吹き、薪を添へて之れを助くるときは、一片の火寸、以て宮を爇くべく、一點の野火、以て原を燎くべし、其勢赫々烈々、蔓延廻轉、撲滅すべからず、是れ豈に一把の薪の力ならんや、人若し志を立てゝ回らず、力め學んで倦まざるときは、以て聖となるべく、以て賢となるべし、而して以て人物の性を盡くして、天地の化育を賛くべし、教の貴ぶべきこと此の如し、

九

儒者或は軒冕を錙銖にし富貴を塵芥にするを以て高しとなす、世間も亦超然遐擧、人事を蔑視するを以て至れりとす、皆道を知らざるの甚しきなり、

十

卑きときは自ら實なり、高きときは必ず虚なり、故に學問は卑近を厭ふことなし、卑近を忽にするものは道を識るものにあらざるなり、道は大地の如きか、天下地より卑きはなし、然れども人の踏む所、地にあらずといふことなし、地を離れて能く立つことなし、況んや華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩らさず、萬物載するときは、豈に其卑きに居るを以て之れを賤むべけんや、惟天も亦然り、人惟蒼々の天を知りて、目前皆是れ天なることを知らず、天は地の外を包み、地は天の內にあり、地より以上は皆天なり、左右前後も亦皆天なり、人兩間に囿して居る、豈に遠しといふべけんや、故に知る凡そ事皆當にこれを邇きに來むべし、遠きに求むべからず、遠きに求むるときは、則ち中らず、

學者必ず自ら其道の卑近なるを恥ちて、敢て高論奇行をなして以て世に高ぶり、或は異を窮めて以て神となし、天を援いて以て高きをするに至る、諸子百家異端の徒特に甚し、皆實德を知らざるが故なり、苟も卑近の二字を道ふを羞ぢざるときは、則ち道進むべく、學明かなるべくして、道に違ふの遠きに至らざるなり。

十一

聖人の道は、君臣父子夫婦昆弟朋友の間にありて、德は仁義忠信の外に出でず、古今に通じて變ずる所なく、四海に準じて違ふ所なし、人心に根さし、風俗に徹して、天子も廢すること能はず、聖人も改むること能はず、

十二

苟も德行を以て本とするときは、則ち智至り道明かにして、事の是非得失、了々分明、思索を待たずして、自ら能く其肯綮に中たる、若し此の如くならずして、專ら理を以て之れを斷ぜんと欲するときは、則ち其

說愈長うして實を去ること愈遠し、

十三

仁者は俗を嫉むの心少なし故に今の古に遠からざることを知る不仁者は世を憤るの心勝つ故に今の復た古なるべからざることを知る心を設くること同じからず趣向頓に異なり後世の君子なきこと能はざること猶ほ古の小人なきこと能はざるがごとし豈に獨り三代以後を以て盡く人欲となすべけんや、

十四

儉と嗇と其迹相似て其心實は相反す儉は善の基嗇は欲の叢儉にして施すことを好むものは眞の儉なり儉にして施すことを知らざるは亦嗇のみ古人儉を務むるものは其施さんが爲めなり儉にして施すことを知らざるは儉といふべからず世の鄙夫儉に託して夫の奢るものを誣るは一噱に附すべし儉にして施すことを好むものは誠の大德の人たり儉にして施すことを知らざるものは眞の守錢の虜

のみ、

十五

其道愈大なれば、之れを譏るもの愈衆く、其德愈邵ければ、之れに寇するもの愈深く、憂ふる心悄々として群小に慍らる、孔子だも猶ほ然り、況んや其他をや、

十六

學者當に悟門の自ら開くを竢つべし、我れより之れを開發する勿れ、眞積み力むること久うして、怡然として理順ひ、渙然として氷の如く釋く、之れを悟門自ら開くといふ、永く己れが有となりて、終身失はず蓋し實德の到る所にして、專ら智見を事とするもの丶得て及ぶ所にあらず、正に之れを實智といふ、

十七

凡そ事專ら理によりて斷決するときは、殘忍刻薄の心勝ちて、寬裕仁厚の心寡し、上德非薄にして、下必ず傷損し、人亦心服せず、須く長者の

氣象ありて方に可なるべし、惡を隱して善を揚げ、人の美を成して、人の惡を成さず、窮自ら厚うして、薄く人を責む、是れ皆長者の氣象、唯仁者のみ之れを能くす、區々たる小儒の能く及ぶ所にあらざるなり、

十八

大勇あり、大義ありて、韜晦含藏して、形跡を露はさゞるものにあらざれば、與に君子の域に入るに足らず、是れを學問の準的となす、

十九

高明は得やすく、博學は恃むべからず、唯中庸を得るを難しとす、

二十

愚者の惑は淺し、猶ほ迷の遠からざるもののごとし、賢智者の迷は深し、猶ほ千里の外に迷ふもののごとし、吾れ愚者の爲めに憂へずして、深く賢智者の爲めに懼る、

廿一

人皆聰明の貴ふべきを知りて、學を好むの功、聰明に倍することを實に

萬々なるを知らず、聰明人に如かざるを患へんよりは、自ら其學を好むの志を篤うせんには如かざるなり、

廿二

凡そ人の我れを信ぜざる我れに服せざるは皆吾誠の未だ孚あらざるなり、惟當に自ら修省すべきのみ、苟も人至當の說を以て之れを告ぐることあらんに、吾れ我說を以て之れを拒まば、是れ自ら善道に絕つなり、是れ自ら吾身を戕害するなり、

廿三

積疑の下大悟あり、大悟の下奇特なし、

廿四

仁者は人の善を見て、人の惡を見ず、不仁者は之れに反す、蓋し仁者は人の惡を見ざるにあらず、其心寬容慈憫、惓々引接、棄てざるの意あり、其深く惡んで遽に之れを絕つもの亦不仁なり、

廿五

書を讀み理を窮むれば以て知を致すべし未だ以て行を制するに足らず禮を脩め義を行へば以て行を制すべし未だ以て德を成すに足らず以て德を成すに足るものは其れ惟仁なるか

廿六

惟仁以て德を成すべく惟義以て行を制すべく惟儉以て身を保つべく惟敬以て事を執るべし

廿七

內に蘊するこれを德といふ外に形はるゝこれを行といふ內に蘊するもの外に發せざる能はず外に形はるゝもの中に存するを以てなり行を以て專ら外とするものは非なり

廿八

學を好めば雜慮生せず德を好めば外邪入らず古人惟學を好み德を好むを知るのみ

廿九

夫れ天爵なうして人爵至るは義にあらず、之れを受くべからざるなり、天爵ありて人爵之れに從ふは義なり、當に之れを受くべきなり天爵ありて人爵至らざるは命なり、之れに安んずるのみ、

三十

聖人の道優々洋々、促迫するを得ず、牽強するを得ず、

三十一

文學は過ぎ易うして、德行は及び難し、古今學者の通病、今又及び難きの德行を勸勉せずして、反りて過ぎ易きの文學を增益せんと欲す、詎ぞ火を以て火に添へ、泥を以て泥に利するに異ならん、詩に曰く猱に木に昇ることを敎ふること勿れ、塗に塗を附くるが如し、

三十二

大凡そ天下國家の治に補ひなく、人倫日用の道に裨けなきもの、皆之れを邪說暴行といふ、佛老の學、後世禪儒高遠隱微の說の若き、是れのみ、

第四　學問論

仁齋の眼中、唯道德あるのみ、道德を以て身を立て、道德を天下に主張し道德を以て一生を貫かんとせり、故に彼れにありては、學問といへば、道德より外之れなきなり、道德を攻究し、道德を領悟し、道德を實行すること是れ即ち彼れが學問なり、鄒魯の學問、本と道德を以て大頭腦となすが故に、忠實に鄒魯の學脈を紹がんと欲する彼れが學問、豈に他に出づべけんや、乃ち論じて曰く、

學問は道德を以て本となし、見聞を用となす、（語孟字義卷之下）

然るに彼れにありては、道德は他なし、仁義禮智なり、約して之れを言へば、畢竟仁のみ、愛のみ、是故に彼れ論じて曰く、

學問は當に聖人敎を立つるの本旨いかんを識るべし、是に於て一たび差へば、必らず異端に入る、怕るべし、佛氏は專ら性を貴んで道德の最も尊しとするを知らず、聖人は專ら道德を尊んで心を存し性を養ふ、皆道德を以て主となす、夫れ天地に充滿し、古今に貫徹し、自ら磨

滅せざるの至理ある、此れを仁義禮智の道となす、又此れを仁義禮智の德となす、所謂道德の最も尊しとするもの是れのみ(同上)

又曰く、

仁義禮智の四字、是れ學問の至躰、智仁勇の三字、是れ道に進むの大關鍵、文行忠信の四字、是れ孔門人を敎ふるの定法、(日札)

仁齋は此の如く仁義禮智の道德を以て學問の對象とす、尙ほ之れを省略して單に仁義といへり、曰く、

學問は仁義より貴きはなし、仁義を存するは禮より要なるはなし、(童子問卷之中)

彼れ又尙ほ之れを省略して單に仁といへり、曰く、

仁は聖門學問の宗旨にして、仁を外にして所謂學問といふものなし、(同上卷之上)

又曰く、

孔門の學は仁のみ、仁は愛のみ、蓋し仁者は愛を以て心となし、造次に

も是に於てし、顛沛にも是に於てし、内より外に及ぼし、邇きより遐きに至り、應事接物、起居動息、往として是心にあらざるなし、故に孟子の曰く、仁者は其愛する所を以てして、其愛せざる所に及ぼすと、是れなり、但、須らく義を以て輔となすべし、苟も仁ありて義なきときは、愛、其愛する所にあらずして、反りて愛せざる所あるを免れず、故に眞仁は必ず義あり、眞義は必ず仁あり、兩者自ら用を相爲して相無かるべからず、(同志會筆記)

仁齋唯、仁のみを學問の對象とすれども、其仁といふときは、義をも含蓄して之れを言ふこと此れに由りて明かなり、然れども尙ほ推して之れを論ずれば、禮智をも含蓄すといふべし、彼れ乃ち論じて曰く

聖人學問の第一字は是れ仁、義を以て配となし、智を以て輔となし、禮を以て地となす、而して進修の方は、專ら忠信にあり、(日札)

仁義禮智は學問の對象なれども、之れを實行する方法としては忠信を要す、忠信が已に中に存し、運用の基とならば、仁義禮智、始めて表面的な

らざるを得るなり、彼れが、

聖門の學は、仁義を以て宗となし、而して忠信を以て主となす。（語孟字義卷之下）

といふは之れが爲めなり、又論じて曰く、

忠信は學の根本、始を成し終を成す、皆此にあり何んとなれば學問は誠を以て本となす、誠ならざれば物なし、苟も忠信なければ、禮文中ると雖も、儀刑觀るべしと雖も、皆僞貌飾情、以て奸を滋し邪を添ふるに足る。（同上）

仁齋は學問に本体あり、修爲ありとし、仁義禮智を以て本幹とし、忠信敬恕を以て修爲とせり、本幹は實行の對象にして、修爲は對象を實行する方法なり、彼れ誠と忠信との間に微細の區別をなさんとすと雖も、亦之れを同一視せること前に引用せる文によりても知るべし、誠といひ、忠といひ、皆眞實無妄の心を指して云ふものにて、苟も之なければ僞善となる、故に彼れ之れを重んずること甚だし、乃ち誠を論じて曰く

誠は實なり、一毫の虛假なく、一毫の虛飾なし、正に是れ誠(同上)

又曰く、

誠は道の全體、故に聖人の學は、必ず誠を以て宗となす、而して其千言萬語、皆人をして夫の誠を盡くさしむる所以にあらずといふことなし、所謂仁義禮智、所謂孝弟忠信、皆誠を以て之れが本となす、誠ならざれば、仁、仁にあらず、義、義にあらず、禮、禮にあらず、智、智にあらず、孝弟忠信も、亦孝弟忠信たることを得ず、故に曰く、誠ならざれば物なしと、是故に誠の一字、實に聖學の頭腦、學者の標的、至れり大なるかな(同上)

又曰く、

聖人の道は誠のみ(同上)

此の如くなれば、道德は誠にして、誠は仁義禮智よりも重し、是故に誠は實行の方法といふよりは寧ろ實行の精神といふを當れりとなす、之を要するに、仁齋にありては、學問は道德の學問にして、道德に關せざる學問は、之れを攻究するの價値なきものなり、政治の如きも道德を以て主

とすべしとし、經濟の如きも道德に害ありとなせり、乃ち論じて曰く
古より治道を論ずるもの、或は以爲く、智巧材力を以て之れを致すべしと、或は以爲く、良法善政を以て之れを致すべしと、皆淺近の言、深く論ずるに足らず、夫れ政は德を以て本となし、識を以て補となす、要するに、材力智巧を以て之れを致すべきにあらざるなり、苟も有德の士、經術に深きものにあらざれば、識ること能はず(同志會筆記)
是れプラトン、アリストテレス等の如き希臘の哲學者と同じく、道德政治の一致を期するものなり、道德の如何なる階級の人にもなかるべからざるは、言ふまでもなけれども、唯〻道德さへあれば、政治は容易になし得べしとするは、謬見の甚しきものにて、今日にありては、固より辯論を費やすを要せざるなり、殊に古學派より一の有力なる政治家をも出ださゞりしといふことを考察せば、何人も仁齋が言の事實に副はざるを領悟せん、彼れ又曰く、
學者纔に經濟に志あらば、流れて制度文爲の學となる、纔に事功に志

あらば、流れて權謀揣摩の術となる、而して道德の本原に於て反りて迂濶を以て之れを名づく、蓋し小利を見て速ならんことを欲するが爲めの故なり(同上)

仁齋此に至りて益道德を過重せり、經濟といひ、事功といひ、亦社會の發展に必要なるものなり、道德を過重するの極、是等の事を賤視するに至るは、中正を持するの論といふべからざるなり、

詩を作り文を作ることは、仁齋必らずしも非とせず、殊に文は作らざるべからずといへり、彼れ論じて曰く、

詩は性情を吟詠す、之れを作る、固より好し、作らざるも亦害なし、云云、詩は藝中の雅翫なりと雖も、然れども甚だ嗜むときは必ず害あり(童子問卷之下)

此論當れり、彼れ又曰く、

詩は以て志を言ふ、文は以て道を明かにす、其用同じからず、詩は之れを作る、固より可なり、作らざるも亦害なし、文の若きは必ず作らずん

ばあるべからず、言にあらざれば以て志を述ぶることなし、文にあらざれば以て道を傳ふることなし、學んで文なきは、猶ほ口ありて言ふことを能はざるがごとし、然れども文の律に入る、亦難し（同上）

彼れが此の如く文の必要を認容したるは、大に好し、詩は天賦の才なければ作らざるを可とす、文に至りては然らず、美文を作るの才なしとするも、達意の文、何人にも必要なしとせず、況んや學者をや、

仁齋が學問に關する見解中殊に吾人の注目を惹くに足るものは、彼れが活法を以て活物を治むとせしことなり、其言に云く、

夫れ心は活物なり、學は活法なり、活物を以て活法を治む、宜しく草木を養ふが如く、灌漑培植を務めて、摧折屈撓して以て其生氣を劉喪遏絶すべからざるべし（同上）

又其意を敍述して云く、

學問は須らく活道理を看んことを要すべし、死道理を守着せんことを要せず、枯草陳根、金石陶瓦の器、之れを死物といふ、其一定して増減

なきを以てなり、人は然らず、進まざれは退く、退かざれば必ず進む、一息の停るなし、死物の若く然ること能はず、故に君子は過なきことを貴ばずして能く改むるを以て貴しとなす（同上）

彼れが死學問を打破して活學問を鼓吹する處、活氣炎々として人を根柢より清新にし、更に之れを鞭撻し、驅りて道に進ましむるの力あり、殊に最後に「君子は過なきことを貴ばずして、能く改むるを以て貴しとなす」といへるが如き、謹んで傾聽するに足る、若し些の過失をもなさざらんと欲せば、積極的に發展せんよりは、寧ろ退いて一己を全うするに若かず、然れども是れ自ら死物視するなり、活學問は之れに異なり、積極的に活動し、永遠に發展せんことを期す、故に殆んど今の所謂自我實現說に異ならず、固より人は必ずしも過失なきを必せず、然れども是れ意に介するに足らず、唯之れを改むべきのみ、換言すれば、己れにある弱點を除去することに汲々たらんよりは、己れにある長處を發展して進めよといふものなり、是れ宋儒の復性說と正反對をなし、甚だ痛快なる見解

なりとなす、彼れ又論じて曰く、

宋の慶元諸老の學の若きは、銖々にして量り、寸々にして挍べ、把捉矜持、一毫も人の指摘を容るゝことなからんと欲す、故に其德、緊急嚴勵にして、寛裕溫柔の氣象を見ず、此れを之れ死道理を見て、活道理を見ずといふ、云云、君子は終日乾々、夕までに惕若たり、戰々兢々、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと、然れども其心は綽々然として餘裕あり、故に聖人の言は泛然たるが如くにして、意實に到る、活道理を見るが故なり(同上)

仁齋活學問を主張する處よりして、識見の尙ふべきことを論じ、世の隨手濫讀、歸する所なきものを警むること切なり、其言に云く、

識見を要となす、書を讀んで識見なきは、猶ほ讀まざるがごときなり、苟も識見を得んことを要せば、當に其歸宿する所を尋ぬべし、徒に渉獵すること勿れ、須らく外にある者の家に歸ることを求むるが如くすべし、迷子の道路を行くが如くすべからず、外にある者の家に歸る

や迂途に由らず、外事を省みず、一歩は一歩より急に、一行は一行より速かなり、凡そ嚢橐資糧、途中かくべからざるの具を携へて、一箇も無用の長物をもたらさず、書を讀むものも、亦須らく歸計をなすが如くすべし、先づ其有用無用を辨じ、其學術政躰に關し、己れを修め人を治むるの切要なるものを取りて、其泛然切ならず、實用に益なきものは之れを闕いで可なり、古人の書、議論聞くべくして、之れを實用に施すべからざるものあり、或は古に宜しくして、今に宜しからざるものあり、或は彼れに宜しくして、此れに宜しからざるものあり、一々躰察せんことを要す、放過すべからず、此の如く工夫を用ふるときは、一巻の書を讀めば、斯一巻、便ち己れが用となり、十巻の書を讀めば、斯十巻、便ち己れが用となる、乃ち數百千巻に至りても皆然り、迷子の途にあるや、東西を識らず、南北を分たず、面に從ひ脚にまかせ、行き行いて已まず、茫然として立ち、偃然として憩ひ、卒に其家の何れの處にありといふことを知らず、今の書を讀むもの、有用無用を辨せず、多を貪り靡を

闕はし、僻書奇編、秘記奧牒に至るまで、索搜遺すことなからんとを欲す、數行倶に下だり、積むに數寸を以てするの捷ありと雖も、其成る所を顧みるに、卒に無識見の人たり云云、今の書を讀むもの、 多を以てか迷子の道路を行くに異ならん、噫、(同上)

是等の論、今日の學者の通病に適中せりといふべし、仁齋は又黨同伐異の弊を打擊し、他山の石、以て玉を攻むべしの旨意を叙述せり、其言に云く、

己れと議論同じきを悅んで、己れが意見と異なるものを樂まざるは、學者の通患なり、學問は切磋琢磨を貴ぶ、己れが意見と異なるものに從ひ己れを舍て心を平かにし、切劘講磨するに若くはなし、所謂人に取ることを樂しむといふ、是れなり(童子問卷之中)

彼れが襟度の宏量、以て知るべし、彼れ又師門の教を尊ぶは可なりとするも、師門を私するは不可なりとし、古來往々此弊あるを論じ、朝鮮の李退溪が其著書中に楊子直を朱子の叛徒とせるを陋見なりとして之れ

を非議し、「往くものは追はず、來たるものは拒まざるは、古の道なり」と論ぜり、仁齋又學問の法に血脉を辿ると意味を探るとの二様あることを論じ、頗る得意なるが如し、其言に云く、

學問の法、予岐して二となす、曰く、血脉、曰く、意味、血脉とは、聖賢道統の旨をいふ、孟子の所謂仁義の說の若き、是れなり、意味とは、即ち聖賢の書中の意味、是れなり、蓋し意味は本と血脉の中より來たる、故に學者當に先づ血脉を理會すべし、若し血脉を理會せざれば、則ち猶ほ舡の柁なく、宵の燭なきがごとく、茫乎として其底止する所を知らず、然れども先後を論ずるときは、則ち血脉を先きとなす、難易を論ずるときは、意味を難しとなす、何んとなれば、血脉は猶ほ一條路のごとし、既に其路程を得るときは、則ち千萬里の遠きも亦此れよりして至るべし、意味の若きは、則ち廣大周偏、平易從容、具眼者にあらざるよりは識ることを得ず、予嘗て謂ふ、語孟の二書を讀むに、其法自ら同じからず、孟子を讀むものは、當に先づ其意味を知るべし、而して血脉自ら其中に

ありと(語孟字義卷之下)

仁齋が血脉といふは、學問の系統的關係にして、意味といふは讀んで字の如く其人其人の學問の意味なり、一は縱的考察にして、一は橫的考察と見るを得べし、凡そ學問は縱橫に考察して眞意義を探究することゝ固より其所なりといふべきなり、

第五　敎育論

仁齋は啻に學問に熱心なりしのみならず、又敎育に力を盡くせり、彼れ自然に敎育家の態度ありしものなり、故に敎育上に於ても亦卓見の謹聽すべきもののなきにあらず、殊に吾人の注意を惹くに足るものは、人才敎育と師弟の道に關する言論なり、人才敎育に就いては、彼れ論じて曰く、

夫れ聖人の敎を設くるや、人によりて以て敎を立つ、敎を立てゝ以て人を驅らず、造作する所なく、添飾する所なし、人心の同じく然る所に出でゝ、強ふる所あるにあらざるなり、若し夫れ孝弟忠信の人は、天下

皆以て善となし皆以て美となして敢て議るものなし此れ即ち是學此れを外にして更に所謂學問といふものなし（童子問卷之上）

此れに由りて此れを觀れば仁齋は總べての生徒を同一の模型中に入れて之れを鎔鑄陶冶するが如き畫一主義を取らずして應病與藥の精神に本づき各個人を特別に敎養せんことを期せり乃ち彼れは人才敎育を主とするものなること疑なし又其造作する所なく添飾する所なしといふを以て之れを見ればルッソー氏の如く天然自然の敎育を重んぜしものなるを知るべきなり東涯の古學行狀にも其敎導生徒未嘗設科條嚴督察とあり亦以て一證となすに足る彼れは又師たるの道を論じて曰く、

師の責め甚だ重し師たるの道は務めて人材を長育するにあり一師にして君臣の道備はる謹まざるべけんや（童子問卷之中）

是れ亦人才敎育の要を述ぶるものなり仁齋尙ほ師弟の關係を論じて曰く、

古は道を崇ぶ、故に師を尊ぶ、後世は道を崇ぶことを知らず、故に師を輕し、師は道のある所、師を崇ぶは、即ち道を崇ぶ所以なり、故に師に君臣の義あり、父子の親あり、師として弟子の己れに勝ることを喜ぶものは眞の師なり、己れに勝ることを忌むものは、惡師なり、弟子も亦之れを視ること、猶ほ父のごとくにして、己れが學、其師に超ゆと雖も、終身之れを敬して衰へざるを道となす、若し少しく青藍の譽あるに及ぶときは、室に入りて戈を操るの意あるものは眞の小人なるかな（同上）

師弟の道大に衰へたる今日にありては、彼れが言一々藥石の効あるが如し、彼れは嘗て同志會てふ學會を設け、親しく諸生と共に學を講せり、文集卷之六に同志會籍の申約を載す、其中言へるあり、云く、

蓋し學を講ずるの要は、麗澤の益に若くはなし、麗澤の益は屢、相親近するに若くはなし、且つ人三不幸あり、而して貧賤患難は與からず、生れて學を知らず、一の不幸なり、學んで賢師友に遇はず、二の不幸なり、賢師友に遇ふて、其要領を得る能はず、三の不幸なり、然らば人にして

廣く交道を求めざるべけんや、

乃ち彼れが同志會を設けたるは、親切に諸生を誘掖し、其れをして十分に己れが學を了解せしめんとするにありしを知るべし、彼れ又いかなる人を師とすべしやを論じて曰く、

病を治むるには須らく良醫を求むべし、庸醫に委ぬべからず、一たび其治を誤るときは、百の良醫ありと雖も、其後を善くすること能はず、道を學ばんと欲するものは、須らく天下第一等の人を擇んで之れを師とすべく、半上落下の人を師とすること勿れ、學問の成否得失、俗師村學の能く識る所にあらざるなり、(童子問卷之中)

是れ固より實行し難きことなりと雖も、道德の事に關しては、實に彼れが言ふ所の如きものあり、師の人物を擇ばざれば誤れる學說は先入主となり易く、善からざる品性は自ら影響を生ずべきが故に、師の人物を擇ぶの一事は、敎育上最も先づ注意せざるべからざること、復た論を俟たずといふべきなり、

第六　異端論

仁齋昂然一揚、孤鶴の雞群を出づるが如き姿勢を以て起り、洙泗の學を闡明し、道義の眞相を發揮せんと欲す、是を以て老佛等の謬見を指摘し、凡そ是等異端の教を排斥すること、至らずといふとなし、其所論の要點は左の五項に總括するを得べし、

(一)仁齋思へらく、聖人は中庸を得たるものなれども、異端は之れを失し、或は之れを過ぎ、或は之れに及ばず、老佛の如きは之れを過ぎたるものにして、申韓の如きは、之れに及ばざるものなりと、彼れ此の如き三種の段階を三大抉と名づけたり、其言に云く、

古より書を著はし、教を立つるもの、紛々藉々、其衆きに堪へず、然れども三大抉に過ぎず、其高からず、卑からず、平常不易なる、此れを一大抉となす、乃ち中庸の極にして、聖人の宗旨なり、此れより高きこと一等なるときは、虛無となる、老佛の學、是れのみ、此れより卑きこと一等なるときは、功利となる、申韓商鞅の徒、是れのみ、老佛以下代異に地殊に、

交〻出で迭に起ると雖も、此二端に過ぎず、假令ひ百世の後、異端者ありて出で、舊套によらず、新說を創倡するも、亦此二端に出づること能はざらん、其他區々たる半上落下の徒、亦論ずるに足らず、趙孟靜林兆恩が若き、乃ち近時の小異端、然れども三敎を假りて名をなすに過ぎず、故に其學大に譏ぐに至らず、亦笑ふべきなり、(童子問卷之下)

(二)仁齋思へらく、聖人の道は人倫のみ、人倫を外にして、復た道といふもののあるなし、然るに老佛は虛無を尙び、人倫を省みず、此れ其聖人の道と相戾る所以なりと、其言に云く、

夫れ聖人の道は、彝倫を以て本となして、恩義を以て結となす、千言萬語、皆此れを以て敎となさゞるはなし、今夫れ佛老の敎たるや、淸淨を以て本となし、無欲を道となす、功夫旣に熟するに暨んでは、其心明鏡の空しきが若く、止水の湛たるが若く、一疵存せず、心地潔淨、此に於て恩義先づ絕えて彝倫盡く滅ぶ、君臣父子夫婦兄弟朋友の交を視ること、猶ほ辯髦綴旒のごとく然り、聖人の道と相反すること、猶ほ水火の

相入るべからざるがごとし、云云（語孟字義卷之上）

又云く、

佛老は空虛を尙び、聖人は實理を尙ぶ、故に佛老の書に鏡を以て譬をなすこと勝げて擧ぐべからず、浩々たる六籍語孟、一も鏡に及ぶものなし、其生死の差あるが爲めなり、夫れ道とは、君臣父子夫婦昆弟朋友の交にして、能く此五者を維持する所以は、亦恩義の兩者にあり、佛老の敎の若きは、專ら淸淨無欲を以て務となし、修行既に熟し、功夫既に成るときは、本心瑩然として明鏡の空しきが如く、止水の湛たるが如く、一塵染まらず、一疵存ぜず、難しといふべし、然れども恩義の心、剗爽斬絕、地を掃ふて盡き、父母を捨て、妻子を絕ち、綴旒の如く、土梗の如く、恬然として其愛を用ふる所なし、況んや君臣をや、況んや、兄弟をや、此に到るときは、聖人の道と實に天淵なり、云云（童子問卷之下）

明鏡止水の如き淨潔無欲の心を以て人間社會に處すること能はざるにあらず、然れども禪僧の徒、動もすれば輙ち人間社會の關係を輕視し、

超然自ら高うするの傾向あり、是れ仁齋が此れと峻別せんと欲する所以なり、

(三)仁齋は、聖人の道を以て活動的とし、老佛等異端の道を以て靜止的とし、兩者の決して混同すべからざることを論ぜり、其言に云く、

蓋し聖人は天地を以て活物となす、故に易に曰く、復は其れ天地の心を見るかと、老氏は虛無を以て道となし、天地を視ること死物の如く然り、故に聖人は天道といひ、老子は天理といふ、言各〻當るところあり、此れ吾道の老佛と自ら異にして混じて之れを一にすべからざる所以なり(語孟字義卷之上)

又論じて曰く、

理を以て主となすときは、必ず禪莊に歸す、蓋し道は行ふ所を以て言ふ、活字なり、理は存ずる所を以て言ふ、死字なり、聖人は道を見るや實、故に其理を說くや活、老氏は道を見るや虛、故に其理を說くや、死(同上)

又儒佛の異なる所は、唯〻用の上にあるのみならず、其理の躰に至りても

亦然ることを辨じて云く、

夫れ斯本あるときは、必ず斯末あり、斯末あるときば、必ず其本なくんばあるべからず、徒に其用處に於て相反するのみならず、其躰の相異なること、猶ほ水火黑白の相反し、生死人鬼の相隔つるがごとく遼乎として相入るべからず、云云（同上）

仁齋は天地も道も性も心も皆之れを活物視し、些の間斷もなく、活動的發展を期するものなり、故に老莊の寂靜主義（三三二）とは、自ら相背馳せざるを得ざるなり、

（四）仁齋思へらく、聖人は社交上に道を立つれども、老佛は之れに反し獨善主義に陷る、其異端たる所以のもの此にありと、乃ち論じて曰く、

聖人は天下の上より道を見る、佛老は一身の上に就いて道を求む、一身の上に就いて道を求むるが故に、天下の從ふや否やを顧みず、專ら清淨無欲、以て一己の安を成就せんと要し、卒に人倫を棄て、禮樂を廢するに至る、此れ異端たる所以なり、聖人は天下の上より道を見る、故

に天下の同じく然る所に就いて道を見る、天下を離れて獨り其身を善くするを欲せず、故に其學を經世となし、其道を達道となし、其教を仁義忠信となす（童子問卷之中）

又一層委しく其意を叙述して曰く、

聖人は天下と共に斯善を同うせんと欲し、天下を離れて、獨り其身を善くすることを欲せず、故に曰く、吾れ斯人の徒と與にするにあらずして、誰れとか與せんと、釋氏は然らず、其言に曰く、天上天下唯我獨尊と、此れ其先づ聖人と異なる所以なり、蓋し釋氏は天下を離れて獨り其身を善くせんと欲す、故に其始初功夫を用ふる處、天下に通じ、萬世に達して、須臾も離るべからざる上にあらず、專ら其一身に就いて意見を生ず、生死の爲めに念重く、愛根絶ち難く、心猿意馬、羈束を受けず、乍ち出で乍ち入り、或は眞或は妄、變幻起滅、奈何ともすべきなきが爲めに、乃ち山林に屏居し、世故を謝絶し、坐禪面壁、硬く斯心を澄清するを以て事となす、其修行既に久しく、功夫既に成るに及んで、忽ち天地

萬物悉く皆幻妄、山川城郭、總べて空相を現じて、獨り此心、孤明歷々、萬劫盡くることなきを見て自ら三界を超脱すといふ、遂に人事を廢して修めず、天下を蔑しで顧みず、顏を抗げ眉を揚げ、肆然として道を談ず、殊に知らず、其孤明歷々、萬劫盡くることなきものは、乃ち虛見にして、實理にあらず、彼れ天地を微塵にすとも、天地何ぞ曾て微塵ならん、人世を夢幻にすとも、人世何ぞ曾て夢幻ならん、天は是れ天、地は是れ地、古は是れ古、今は是れ今、晝は是れ晝、夜は是れ夜、生は是れ生、死は是れ死、夢は是れ夢、幻は是れ幻、有るものは自ら有り、無きものは自ら無し、明々白々、復た疑を容るゝ所なし、萬古の前も此の如く、萬古の後も亦此の如し、聖人は有は其有に還へし、無は其無に還へし、また一毫の智慧を其間に容れず、本と愕くべきこともなく、亦譏すべきこともなし、予を以て之れを見るに、二氏(即ち佛老の事)の教は、皆其意想造作に出でゝ自然の正道にあらず、夫れ人の當に修むべき所のものは、人倫のみ、人の當に務むべき所のものは人事のみ、天下仁にあらざれば、親まず、義

にあらざれば、行はれず、故に人倫を外にして道なく、仁義を外にして教なし、萬世の遠き、四海の廣き、一日も離るゝことを得ず、故に仁に居り義に由るときは、坐禪せず、面壁せずと雖も、然れども身自ら修まり、家自ら齊ひ、國自ら治まり、天下自ら平かにして、往くとして可ならずといふことなし、苟も仁に居り義に由らざるときは、設ひ其心、明鏡の如く、止水の如く、一毫人欲の私なくとも益なし、此れ聖人の道、諸子百家を度越して、宇宙の間、獨り尊しとする所以なり、（同上卷之下）

仁齋が論、整々堂々、殆んど老佛の壘を摩するの概あり、彼れが言ふが如く、老佛が一己の全きを求め、山中獨善の趣あるは、到底蔽ふべからざる事實なり、然れども老子は三寶中に慈を算へ、佛氏は一切衆生を救ふの慈悲心あり、果して然らば、是れ亦仁と同一視すべきものにあらざるか、此れ彼れが辯解なかるべからざる所なり、

（五）仁齋思へらく、老佛の儒教と異なる所は其義を知らざるにありと、乃ち佛氏を論じて曰く、

其慈悲濟度を主とするは、仁に似たり、然れども義を知らざるは一なり、殊に知らず、義は天下の大路、一日も離るべからざるを、老氏も亦然り、(同上)

又後世の儒者(即ち宋儒)をも併せ論じて曰く、

佛老の吾儒と異なる所以のものは、專ら義にあり、而して後儒の聖人と相差ふ所以のものは專ら仁にあり、其故何ぞや、佛氏は慈悲を以て心となし、平等を道となす、故に義を以て小道となして之れを慢棄す、殊に知らず、義は天下の大路、苟も義を捨つるときは、猶ほ正路を棄てゝ、荊棘に由るがごとし、其行ふべからざるや必せり、後儒者の如きは、其德量淺狹、差別甚だ過ぎて、包容含弘の氣象なし、故に仁を視ること泛然として緊要なきものゝ若し、而して其刻薄の流に陷ることを知らず、是れ聖人と相差ふ所以なり(語孟字義卷之上)

仁齋が老佛の教の平等觀に偏して、差別相を蔑視するを非議するは當れり、今日にありては此論、基督教にも適中せり、今日の學者が基督教に

對する態度と相似たるものあるは以なきにあらざるなり、

上來敍述するが如く仁齋痛く老佛を排斥すと雖も、亦時ありて差異相を超絶し、彼此共通の點を執へて、圓融無礙の境界を示すことあり、例へば、送浮屠道香師序に云く、

夫れ學者より之れを見れば、固より儒あり佛あり、天地より之れを見れば本と儒なし佛なし、唯其れ一道のみ、所謂道といふもの即ち天地の公道にして、一人の得て私する所にあらず、聖人と雖も能く之れを損益することなきなり、

是れ後世學者の往々議する所となりたれども、反りて其見解の公平にして豁大なるを見るべし、又道統の圖を以て聖人の意にあらずとし、論じて曰く、

禪宗的傳の若き、是れ天下の道を私して、一家の物とするものなり、夫れ道の人にある猶ほ日月の天に繫るがごとし、目あるものは皆能く

視る、豈に己れが物となして、私に相付授することを得んや、(童子問卷之下)

仁齋が此論亦甚だ好し、儒者の中には或は己れ獨り聖人の道を傳ふるが如く思惟し、行動し、主張するものあり、是れ聖人の道を專斷せんと擬するもの、其見解の陋劣なる、根柢より勦絶せざるべからざるものなり、

第七　宋學論

仁齋が古學を主張するは、宋學を以て洙泗の眞相を執らへ得たるものにあらずとするに本づく、何故に宋學を以て洙泗の眞相を執らへ得たるものにあらずとするかなれば、宋儒は老佛の說を參酌し、標榜して儒敎といふと雖も、其實孔老佛三敎の融合調和に成るものなり、今仁齋が宋學と異なる重要の點を擧ぐれば左の如し、

(一)宋儒は氣質の性を變化して本然の性に復へるべしとして復性復初の說を立てたり、然るに仁齋は復性復初の說を取らず、唯己れに具有する善良の元素を發展することをのみ期せり、乃ち論じて曰く、

先儒復性復初等の語を用ふ、亦皆莊子に出づ、蓋し老子の意おもへらく、萬物皆無に生ず、故に人の性や、其初め眞にして靜なり、形既に生じて而して欲動き情勝ち、衆惡交々攻む、故に其道專ら欲を滅して以て性に復へるを主とす、此れ復性復初等の語の由りて起る所なり、儒者の學は然らず、人の四端あるや、猶ほ其四體あるが如し、苟も之れを養ふことあるときは、猶ほ火燃へ泉達し、自ら已むこと能はざるがごとし以て仁義禮智の德を成して、四海を保つに足れり、故に曰く、苟も其養を得れば、物として長ぜずといふことなし、苟も其養を失へば、物として消せずといふことなし、初めより欲を滅して以て性に復へるの說なし、老莊の學と儒者の學と固より生死水火の別あり、其源實に此に判る(語孟字義卷之上)

是れ宋儒の主張する復性復初の說は老莊に淵源するを論證するものにて、其靜止的の態度は彼れが活動的の態度と正反對をなせりと謂ふべきなり、

（二）宋儒は性に二種ありとし（之れを名づけて本然の性、氣質の性と稱せり）、然るに仁齋は唯〻氣質の性あるのみ、本然の性てふもの、曾て有るなしとせり、乃ち論じて曰く、

後儒、孔子の言を以て氣質の性を論ずとなし孟子の言を本然の性を論ずとなす、信に其言の如くなるときは、是れ孔子は本然の性あるを知らず、孟子は氣質の性あるを知らざるものにあらずや、惟〻一性をして二名あらしむるのみならず、且つ孔孟同一血脈の學をして、殆んど涇渭の相合し、薰蕕の相混ずるが若く、一清一濁、適從すべからざらしむ、其言支離決裂、殆んど相入らざること此の如し、夫れ天下の性參差齊からず、剛柔相錯はる、所謂性相近しと、是れなり、而して孟子思へらく、人の氣稟剛柔同じからずと雖も、然れども其善に趨くは一なり、猶ほ水に清濁甘苦の殊ありと雖も、然れども其下に就くは一なるがごとし、蓋し相近きの中に就いて其善を擧げて之れを示すなり、氣質を離れて言ふにあらず、故に曰く、人の性の善なるや、猶ほ水の下に就く

がごとしと、蓋し孟子の學、本と未發已發の說なし、云云(同上)

仁齋尙ほ又宋儒の所謂性善は畢竟善なく不善なきの說に落つとし、論じて曰く、

夫れ跡の見るべきありて而して後之れを善といふ、若し未だ跡の見るべきあらざるときは、將た何ものを指して善とせん、旣に惡の見るべきあらざるときは、又善の見るべきなし、故に渾然たる至善といふと雖も然れども實は空名のみ(同上)

乃ち彼れは絕對善の如きものを認容せざるを知るべきなり、

(三)宋儒は大極といひ、天といひ、性といひ、仁といひ、皆理となして解釋せり、然るに仁齋は活動的に一切を考察し、痛く理の靜止的なるを排斥せり、乃ち太極を論じて曰く、

所謂太極といふものは、亦便ち此一元氣を指して言ふときは、則ち之れを物なしと謂ふべからざるなり、(童子問卷之下)

又天を論じて曰く、

宋儒謂ふ、天專ら言ふときは、則ち之れを理といふと、又曰く、天は即ち理なりと、其說、虛無に落ちて、聖人天道を論ずる本旨にあらず、蓋し有心を以て天を見るときは、災異に流る、漢儒災異の學の若き、是れなり、無心を以て天を見るときは、虛無に陷る、宋儒の天は即ち理なりの說の若き、是れなり(語孟字義卷之上)

其他宋儒が性は即ち理なりの說を駁し、(同上)又仁を以て理となすの說を非とせり、(同上)又宋儒が仁を以て性となすに至りては深く以て道に害ありとなせり、性は宋學にありては靜止的のものなればなり、

(四)仁齋は宋儒の用語が多く老佛に出て、聖人の本旨に背戾せるを論ぜり、即ち虛靈不昧の如きは、禪書に出て、明鏡止水の如きは、莊子に出て、躰用一源、顯微無間の如きは、清涼國師華嚴の疏に出て、沖漠無朕は莊子に出で、萬象森羅は佛書に出づとせり、又天理の二字の如きも、本と老子に由づとし、論じて曰く、

按ずるに、天理の二字、屢〻莊子に見ゆ、而して吾聖人の書に於て之れな

し、樂記に、天理人欲の言ありと雖も、然れども本と老子に出でゝ、聖人の言にあらず、象山陸氏之れを辨ずること明かなり、(同上)

仁齋は總べて是等の老佛の用語を除去し、之れに附隨する異端の思想を一掃し、直に孔孟の眞面目に溯囘せんと欲するものなり、其他尙ほ異同の點あれども已に宇宙論道德論等の中に詳悉せるを以て復た茲に贅せざるなり、宋儒の中に於て仁齋は最も程子を稱揚せり、其言に云く、

予おもへらく、孟子の後、道を識るものは、程子に若くはなし、然れども猶ほ高遠を悅ぶの意あり、故に孔孟の旨に於て齟齬する所のもの間〻多し、(童子問卷之下)

朱陸の異同に就いては仁齋左の如く辨せり、云く、

鵞湖異同の辨、朱陸の門徒、互に相詆譏す、今に於て數百年未だ了らざるの論、云云、宋元より明に至るまで竟に一定の說なし、若し二先生の說を去りて直に之れを經に求めば、則ち聖人の旨、明白分曉、復た疑ふべきなし、中庸に曰く、苟も至德ならざれば、至道凝らず、故に君子は德

性を尊んで、而して問學を道ふ、言ふこゝろは問學を道ふを知ると雖も、然れども德性を尊ぶを知らざれば、則ち問學も其問學たるを得ず、而して道の實に於て、眞に之れを知るを得ず、故に君子は先づ德性を尊ぶを以て本となす、而して問學を道ふを以て功となす、此れ聖門眞正の學問にして、而して世俗の徒に問學を道ふを知りて、而して德性を本とするを知らざるの比にあらず、此指先づ晦翁の意に戻る所以にして、而して象山に於ては、其一を得て、其二を遺すの病を免るゝこと能はず、(日札)

又文集卷之三に慈湖異同辨一篇あり、朱陸二氏の學を對照して論ずる處、頗る其肯綮を得たるものあり、然れども、東涯以て定見にあらずとす故に今此に引證することを敢てせざるなり、



第八　批判

（一）

仁齋は宋儒の寂靜主義 Quietism に反し、活動主義を取り、世界と人生とを併せて悉く活動的に考察せり、即ち彼れにありては世界は一大活物にして生々已まざるものなり、道といひ、性といひ、心といふもの亦一として活物にあらずといふことなし、學問の如きも畢竟活物を治むる活法にして、道徳の如きも、個人の社會に對する活動的發展に外ならざるなり、此の如き活動主義を以て世界及び人生の事を攻究し來たるが故に、彼れが主張、自ら活氣を帶び、當時に於て一種の異彩を放てり、彼れ嘗て白骨觀の法を修し、其是にあらざるを悟れり、其是にあらざるを悟れりとは、其消極主義にして、人生の活氣を殄滅し、決して道の是正を得たるものにあらざるを悟れるなり、是を以て彼の消極主義に反して活動主義を取り、遂に鄒魯の學をも活動主義によりて解釋せり、鄒魯の學、固

より消極主義にあらず、然れども彼れが唱道するが如き活動主義は、從來未だ之れありしにあらず、兎に角慶元以來頗る寂靜主義に傾ける儒敎に俄然一段の活氣を添へたるは仁齋の功といふべし、仁齋が世界及び人生觀は、活動主義の上に建設せられたるを以て健全なるものなり、其生々主義といひ、樂天主義といひ、積極主義といひ、毫も佛敎の如く不健全なる傾向を含有せざるなり、此の如き健全なる世界及び人生觀が當時我邦に唱道せられたるは、豈に國民の爲めに賀すべきことならずとせんや、

（二）

當時仁齋が獨り宋儒の寂靜主義に反對せしのみならず、素行も亦殆んど同一轍に出でたり、素行は別に活動といふことを言はざれども、全躰の旨意を考ふれば、之れを活動主義といふも、亦不可なきが如し、殊に素行取る所の武士道の精神は活動主義にあらずして何ぞや、又素行と仁齋とを對照して之れを考ふるに、類似の點少しとせず、例へば（一）素行は

仁を以て五常を兼ぬとし、聖人の敎は、之れを以て極度となすと論ぜん、然るに仁齋亦仁を以て聖門學問の主義綱領とし、此れを外にして學問なしと論ぜり、(二)素行宋儒の敬を專らとし、寂靜無事に陷るの弊を論ぜり、仁齋亦一の敬の字を守れば、乃ち可なりといふは、大に聖人の意にあらずと論ぜり、(三)素行は天地に開闢なし、未判なしとして、天地創造の說を取らず、仁齋も亦萬古無窮論を唱へて、天地に始終なし、開闢なしといへり、(四)素行は天地生々息むなきことを論じ、生々主義を道破せり、仁齋も亦生々して已まざるは、即ち天地の道なりと論じ、生々主義を唱道せり、(五)素行は宋儒の學は、大槩禪佛を混入するものとして之れを排斥せり、仁齋も亦宋儒の學は老佛の說を取るものにして、孔孟の眞面目にあらずとせり、凡そ是等の點、兩々併行し、暗合とはいへ、殆んど人をして怪しましむるに足る、然れども全く暗合に外ならざるなり、日本民族の特質の顯現として起れる武士道の指示するが如く、日本人は蓋し消極主義を取らざるものにして、寧ろ先天的に活動的發展を要するものなら

ん、然らざれば素行と仁齋と、殆んど同時に起り、宋儒の寂靜主義に反對して古學を主張し、多くの點に於て暗合するもの、豈に亦奇ならずや、思ふに二人のもの偶然日本民族の思想を代表して、其先天的に要する所の活動的發展の主義を喝破せるなり、是れ日本民族の特質の顯現なりと見做すを得べきなり、

（三）

仁齋が世界を以て一大活物となし、一切萬物、生々して斷えず、無窮に至るとする處、殆んど今日の進化主義を豫想するが如し、然れども彼れが世界に關する創見は、儒教の歷史に於て一奇觀を呈するに相違なきも、其實甚だ幼穉にして又缺乏せるものなり、但侮るべからざるは、彼れが道德主義なり、彼れが言行の道德的にして、頗る理想に近かりしは、其取る所の道德主義より來たることと疑なし、彼れの道德主義は活動主義の上に建設せられたり、其旨意たる、パウルゼン一輩の活動主義と、根柢に於て暗合する所あるが如し、仁齋はパウルゼン氏の如く一切生的官能

の健全なる使用を要するの觀念を有せず、然れども其道德上に於て活動的發展を主張するはバウルゼン氏に近し、又之れを考ふるに、仁齋の道德主義は己れに具有する四端を擴充して、仁義の德を成し、以て治國平天下を企圖する者なり、此の如くなれば、グリーンミユルヘッド諸氏の自我實現說Theory of self-realizationと左右逢原、期せずして相合する者といふべし、仁齋が性と德とを峻別せんとする所は强辨の譽を免れずと雖も、能く彼れが論ずる所の旨意を考察するに、孟子四端の說に本づき、自我實現の要を唱道するに外ならざるなり、即ち四端は各自の具有する本然の善にして、未だ實現せられざる自我なり、四端が擴充せられて仁義禮智の道德となりたる以上は、是れ已に實現せられたる自我なり、此の如くなれば、是れ亦自我實現說ならずや、今や自我實現の說は、遠く之れを海外のグリーンミユルヘッド諸氏に求むと雖も、近く我邦に於て其痕迹を發見すると、亦一奇といふべし、蓋し東西洋の道德、發達の歷史を異にすと雖も、其根柢の處に至れば、必ずしも相背馳するものにあ

らざるを知るべきなり、仁齋固より陽明學派の人にあらずと雖も、亦時に之れに類することあり、語孟字義(卷之上)の末に良知良能を論じ、本然の善即ち四端の心とせり、此の如くなれば、四端の心は即ち良心（Conscience）の異名なり、其誠といふものも、恐くは之れと同一ならん、仁齋曾て陽明を評して曰く、

陽明の人となり、聰明絶倫、古今に縱まゝなり、二公(朱陸二氏をいふ)と雖も、及ばざること遠きこと甚し、然れども學問空疎、磨勵の功甚だ少し、而して其學本と禪學に得て、孔孟の宗旨に於ては、實に數塵なり、(童子問卷之下)

仁齋が陽明の人物を稱揚するもの、彼れと同じく良心を執へて立つが爲めなり、但、陽明が禪學の臭味を帶ぶるを取らざるのみ、又仁齋が良心の道德的價値を認容するはグリーン、ミュル、ツド諸氏と其揆を同ふするを忘るべからざるなり、

仁齋の議論、多くは光明正大にして、洵に鄒魯の遺響ありと雖も、亦往々思想の混亂を免れず、彼れが頭腦は雄大にして明晰なれども、必ずしも論理的ならず、否論理的なるを欲せざるが如し、彼れ嘗て論じて曰く、

學者當に悟門の自ら開くるを竢つべし我れより之れを開發することと勿れ、（童子問卷之中）

且つ彼れ思慮安排强探力索の必要なきを言へり是れ思想力を閑却するものなり、此の如くにして何等の知的探究をかなし得べき、平生深思熟慮して、解答を得ず、機に觸れて忽然として悟入することもあらん、然れども思想力を閑却すること、是れ豈に學者の取るべき方針ならんや、彼れ又嘗て論じて曰く

聖人は有は其有に還へし、無は其無に還へし、亦一毫の智慧を其間に容れず、（同上）

彼れ一毫の智慧をも用ひざる聖人を其道德的模範となす、其知的方面に發展することとの少かりしもの、亦怪むに足らざるなり、又曰く、

夫れ吾所謂實知とは固より見聞學知によらず、又坐禪入定によらず、母胎中より帶び來たる、孟子の所謂良知良能、是れなり（同志會筆記）

見聞學知は即ち今日の知的學問なり、然るに仁齋は實知は先天的に吾人の具有する所とし、唯〻此れを擴充すれば足れり、別に見聞學知を要せずとせり、是れ一切の知的學問を拒絶するなり、仁齋が往々思想の混亂を免れざるもの、蓋し其知的探究の要を認容せざるに由るなり、殊に仁義禮智は德の名なり、性の名に非ずとするの說の如き、支離決裂も亦甚しと謂ふべし、彼れが少しく知力を用ひ、井然論理を正すことを務めたりしならば、此の如き思想の混亂は免れ得しならん、彼れは道德の一方に偏せしものなり、故に政治、經濟及び其他一切社會の事に關しては迂濶の訾を免れざるなり、要するに德勝ちて智未だ及ばざるの看なしとせざるなり、智德圓滿は人の理想なりと雖も、多くの人に於ては一方に偏せり、智に深きものは德之れに副はず、德邵きものは智之れに及ばず、今仁齋の如き亦此例に洩るゝこと能はざるものなり、

(五)

仁齋の短處の一つは古人を過信するにあり、古人の說、固より信ずべきもの多く、殊に聖賢の垂訓、豈に拳々服膺するに足らずとせんや、然れども古人は決して過信すべからず、聖賢の垂訓と雖も、盲目的に信奉すべからず、若し古人を過信すれば、己れが思想の自由を失ふが故に、知的探究の發展を沮礙するを免れざるなり、仁齋論じて曰く、

學者、聖人の言語上に於て一字を增すべからず、又一字を減ずべからず、語孟二書の若きは、實に天下古今の道理を包括し盡くせり、所謂徹上徹下なるもの是れなり、宋儒動もすれば、佛老の語を引いて以て聖人の學を明かにす、吾れ深く其非を識るなり(日札)

是れ孔孟を過信するものにあらずして何ぞや、語孟の二書が毫も物理上の事を說明せざるは、言ふまでもなく、道德上の事に於ても、固より一切の道理を包括するものにあらず、例へば、認識的發展の必要を說かざるが如き、各個人相互の權利を明かにせざるが如き、共同愛國を敎へざ

るが如き、私德を詳悉して、公德を疏外するが如き、淸潔の尙ふべきを示さゞるが如き、一夫一婦の制の取るべきを論ぜざるが如き、其缺乏の點を擧げ來たらば、殆んど際限なからんとす、語孟の二書、豈に古今の道理を盡くすものならんや、仁齋又曰く、

深く古人を信ず、是れ進學の極則、天下の至善なり、所謂深く古人を信ずるもの、一毫も己れが見を執らず、己れが說を雜へず、佩服潛玩、十分信じ得るに及んで、正に之れを深く古人を信ずといふ、云云（同上）

此の如く深く古人を信ずるは、己れが知力を侮るの甚しきものにて、知的探究の發展は之れが爲めに沮礙せられざるを得ず、深く古人を信ずるよりは、寧ろ深く古人を疑ふこと反りて是れ進學の極則、天下の至善とこそ言ふべけれ、何故なれば疑惑は知的發展の端緒なればなり、仁齋自らも「積疑の下大悟あり」といふにあらずや、盲目的に古人を信ずることを勸むるもの、蓋し亦思はざるに坐するのみ、

道德と歴史とを混同するは、支那古來の通弊なり、而して孔子實に之れが先驅たり、即ち春秋の如きは、全く道德と歴史とを混同するものなり後世の學者亦道德的思想を主として歴史を編著せり、通鑑の類の如き蓋し其顯著なるものなり、然るに仁齋も亦此例に洩れず、道德と歴史とを混同し、論じて曰く、

昔より司馬遷班固を以て良史と稱す、文章は則ち之れあり、議論體製は則ち未だし、人の爲めに傳を立つるものは、其道德事業節操行義、萬世に師表たるに足りて、而して後、以て之れを傳すべし、然らざれば則ち立つべからざるなり、蘇張が姦計詐謀は、曠古の罪人なり、史遷之れが爲めに傳を立つるは、何ぞや、司馬相如が如きも、亦傳するに足らず貨殖日者龜策等の傳皆然り、若し此れに就いて當時の風俗人物を掲示せんと欲せば、須らく之れを本紀世家の間に散見すべし、別に傳を立つべからず、晉の孫恩、宋の李全等は、盜賊のみ、亦別に傳を立つるものは、何ぞや、蓋し史遷僞を作りて、而して後の史臣卓識なし、故に其例

を改むること能はず、靑史を汚穢すといふべし、班固が五行志も亦然り、其記せずんばあるべからざるものは、當に之れを本紀に附すべし、其志を設くるは不可なり、先儒范曄が方伎傳を著はすを以て深く非となす、甚だ是なり、唯歐陽公の五代史、體製議論、實に古今の冠冕たり讀まずんばあるべからず、凡そ國家の治亂成敗、風俗政體に關し、百代の鑑戒とするに足るものにして、而し後、紀すべし、其瑣々たる事跡の小說稗官に入るべきものは、書せざるを是となす、是れ史を作るの法なり、（童子問卷之下）

仁齋がいかに歷史の目的を誤解せるかは此れに由りて知るべきなり、歷史は、史的事實を忠實に叙述して之れを後世に傳ふるものにして、其教訓として人生に裨益あるは勿論なれども、直に以て道德書と見做すべきものにあらず、假令ひ德業の見るべきものなきも其事蹟にして人文の變動に關係あらんか、亦之れを史乘に載せざるべからず、若し仁齋が言ふ所に從はゞ、孔孟の外殆んど傳するに足るものなからん、此の如

くなれば歴史は一個の科學として、其特殊の範圍を有すること、抑いかんして出來得べきか、仁齋が見解の誤まれる、復た識者の辨を竢たずといふべきなり、

（七）

仁齋は其學一變してより直に洙泗の源泉に溯り、尼山鄒叟と相伍せんと欲するの氣象あり、其抱負の大、實に喜ぶべしとなす、彼れ嘗て喝破して曰く「學を好むの一事に於ては、聖人と雖も、敢て讓らず」と、佐藤直方之れを評して「自稱自許、聖人と雖も亦敢て讓らざるの云ひあるに至る、豈に孔子を學ぶ者の宜しく言ふべき所ならんや」といふと雖も、是れ蓋し其實況にして、過言にあらざるなり、然れども仁齋が自ら聖人に擬せんと欲せしは、啻に學を好むの一事に於てせしのみならず、又圓滿なる人格を實現するの目的に於てせり、乃ち論じて曰く、

仲尼は吾師なり、凡そ學者は、須らく皆聖人を以て期待するを要すべし、後世儒者の脚板より馳騁すべからず、饒使ひ區々たる議論道ひ得

て是れ當るも終に事を濟さす、(日札)

彼れが斗筲の輩を顧みずして聖人を以て其終局の理想とせしは、大に好し、此の如くならざれば、以て高尚偉大なること能はざればなり、然れども彼れ亦此れが爲めに往々想像に驅られて事實を過大にするの傾向なしとせず、論語古義の綱領に

恐、天の靈によりて千載不傳の學を語孟二書に發明するを得たり、

といふが如き、何等の大氣焔ぞ、然るに事實は果していかん、彼れは孟子四端の說すら之れを解釋するに牽强附會を免れず、其千載不傳の學を唱出することと、姑く之れを恕すべしと雖も、天の靈によりて發明せり抔と仰々しく神秘的に言ふほどの事やある、彼れ自ら其所作の「論堯舜既沒邪說暴行又作」の終りに記して曰く、

予去歳の秋間、嘗て諸生の爲めに此論を著はす、自らおもへらく、詞、凡近なりと雖も、理は實に根極す、實に有用の文章なり、董の三策、韓の原道と雖も、亦多く讓らず、然れども、人之れを識るものなし、觀て以て怪

生の常談となす、而して復た意を此に留めず、予深く以て遺憾となす。敢て誇言をなして世の識なきものを欺かざるなり、云云、

孟子の又作るといふは堯舜既に沒せし上に更に邪説暴行の起りたるをいふものなり、然るに仁齋又と復とを同一視し、又作るを再び作るの義に誤解し、得意に一家の見解を述べ、是れを董の三策、韓の原道にも讓らずとの自譜自贊をなせり、識者顰蹙せざらんと欲するも、豈に得んや、然れども仁齋が何等の師傳をも俟たず、自ら混沌を開拓して古學の一派を開きしを思へば、素行子と同じく之れを豪傑の士と稱するも毫も其不可なる所あるを見ざるなり、

（八）

仁齋が世界觀は一元氣によりて解釋を試みるものなるが故に、唯氣論なり、唯氣論は宋儒理氣の説に對して之れを言へば、唯物論なり、宋儒は理氣の二元を以て世界を解釋せり、其理といふは、形而上のものにて觀念 Idee 若くは理性 Vernunft に比すべく、其氣といふは、形而下のものにて、

現象 Erscheinungen 若くは物質 Materie に比すべきものなり、易の繋辭に云く「形而上者、謂之道、形而下者、謂之器」と、道は即ち理にして、器は即ち氣なり、彼れと此れと同一物の異名と知るべし、宋儒は此の如き理氣の二元を立てゝ世界の根本主義となせり、然るに仁齋之れを非として氣の一元を取り、唯氣論を主張せり、故に彼れが唯氣論は唯物論なりといふべし、然れども氣といへば古來必ずしも物質を意味せしにあらず、文子九守篇の中に言へるあり、云く「氣者、生之元也、神者、生之制也」と、玆に氣といふは、殆んど生命發展の根本的活動を指すものに似たり、漢儒の所謂元氣の如きも、物質よりは寧ろ「エネルギー」の類を意味するが如し、仁齋の一元氣と稱するものも、漢儒の説に本づき「エネルギー」の類を意味するにあらざるか、殊に世界を活動的に考察する所より之れを見れば、人をして愈〻其然るを想見せしむ、此の如くなれば、彼れが世界觀は靈活論 Animismus 即ち活力論 Vitalismus に近しといふべし、然れども彼れが佛教の唯心論に反して起れる所より之れを考ふれば、又唯物論者の態度な

しといふべからず、但し彼れが世界觀は唯物論に傾向せるにせよ彼れが道德主義は全く理想的なり、唯物的にあらず、即ち品位を高尚にし、人格を完成して、嵩高壯大なる理想を實現せんとする活氣は欝勃として彼れが言論中に見ゆ、彼れが道德上に於て理想派に屬すること決して否定すべからざるものあるを知るべきなり、



第九・仁齋門人

〔東涯以下仁齋の子孫を除く〕

並河亮、字は簡亮、私に諡して天民といふ、後に出だす、

中江一貫、字は平八、岷山と號す、晩年薙髮して快安と稱す、東涯其墓誌銘を作る、文集卷之十四に見ゆ、岷山が事後に出だす、

北村可昌、字は伊平、篤所と號す、北村季吟の氏族なり、近江の人、京師に講學す、盍簪錄卷之二に曰く「踰冠從先人學、不復祿仕、夙淹貫墳籍、老而不倦、甚爲縉紳所重」と、彼れ嘗て上皇に侍講し、儒服儒巾及び名硯を賜はる、享保三年歿す、年七十二、(一說に七十三) 自筆歲暮書懷の詩あり、云く、

少小涉經史、性氣耽詞章、宿儒時濟々、共是丈人行、生平所畏敬、此日皆既亡、後生何寂寞、聖學將榛荒、長安幾萬戶、無人共商量、所好與世乖、爲恐又爲狂、遭遇千古少、吾儕特何傷、幸無升斗繫、從意自徜徉、請託絕權勢、拜謁無覬望、月花屬我去、吟哦習爲常、又無沈痾患、老去猶堅強、眼精

耐誦讀、足力渉凋岡、車馬不須駕、冠蓋何假張、生理又略足、不用求皇々、寒暑給裘葛、朝晡有糟糠、回首一世裏、比屋屢低昂、吾不覺衰廢、未嘗有般昌、悲貧兒女態、豈入丈夫腸、梅蘂欺雪色、柳條洩春光、二歳此夜盡、依舊迎新陽、

著はす所、古學先生碣銘行狀一卷あり、其事蹟は先游傳、野史卷二百五十八、近世叢語卷五及び畸人傳卷之二に見ゆ、

小河成章、字は伯達、一の字は茂實、通稱は茂七郎、立所と號す、京師の人、慶安二年に生れ、元祿九年に歿す、死因は河魚の毒に中れるなり、享年四十八、嘗て學規三條を定めて之れを齋壁に揭ぐ、其一に云く、己れに反求して人に責むる勿れ、其二に云く、忠以て己れを盡し、恕以て人を待つ、其三に云く、人の詐を逆へず、己れが不信を思へ、立所書を善くし、兼ねて釋氏の書を解し、旁ら醫藥に通ず、其學の大旨誠を立つるを主とし、中庸に所謂善を明かにし、身に誠なるを以て其要旨となす、嘗て學說上下篇を著はす、彼れ思へらく、善とは惻隱羞惡恭敬是非の心、人々

固有する所の善を謂ふなり、明とは擴めて之れを充て、盛大光明ならしむるを謂ふなり、身に誠なるとは、其なす所の善、純一自然にして一毫も其間に意を著け力を容るゝことなきを謂ふなり、誠は聖人の至なり、聖人は人倫の極なり、故に人倫を明かにせんと欲するときは則ち其極を致さざるべからずと、其抱負の大、以て知るべきのみ、著はす所論語國語解十卷、伐柯篇二卷、聖敎錄、學論各〻一卷及び文集四卷あり、

盍簪錄卷之二に云く、

小河成章、北村可昌、久しく京師にあり、相從ふこと尤も久し、衆推して上足となす、成章京師の產、博綜の譽なしと雖も、務に應ずるの材あり、後、江戶に遊び、上野に寓す、常藩義公の招致する所となる、元祿丙子の歲、祿を辭して西歸し、京に終ふ、

東涯其墓誌を作る、文集卷之十四に見ゆ、又其事蹟は先游傳、先哲叢談後編卷之二及び近世叢語卷之五に見ゆ、

小河成材、字は莊吉、德所と號す、先游傳には字は茂輔、弘齋と號すとあり、

立所の弟、享保年中歿す、年七十二、

淺野文安、秋田侯に仕ふ、著はす所、論語便蒙あり、

荒川秀、字は敬元、一の字は景元、蘭室と號す、後又天散生と號す、通稱は善吾、山城の人、古義堂中に千里の駒の稱あり、其人となり、明敏豁達にして經史に精通す、十四歳の時より仁齋事ぁるに當りては、之れに代はりて經義を講說し、諸生を訓督す、先輩老生ぁりと雖も、之れと抗すること能はず、塾中推して都講となす、塾に往來するもの、敬服せざるなし、十六歳の時紀藩に聘せられて、之れに仕へ、記室となる、天散八歳より業を仁齋に受け、紀藩の聘に應ずるまで、堀河塾に寓すること此に八年なり、其師弟の間に於て信愛最も厚し、仁齋又其門に入ること尤も群弟子に先なるを以て之れを遇すること他に異なり、然りと雖も天散終身專ら師說を主とせず、思へらく、吾洙泗の道、大に唐宋の間に備はる、程朱二公之れを集成す、其大意は往聖を繼ぎ、來學を啓き、老佛の空妙を排し、管商の功利を擯くるにあり、若し世儒の道義を以て己

れが任となし、能く此意を續くるものあらば、是れ眞の儒者なり、何ぞ必ずしも字々句々其師說を守りて、而して後能く其學を奉ずるものとせんやと、仁齋語孟字義を著はすや、卷首ごとに、最上至極宇宙第一の八字を安置し、以て崇重の意を表す、當時弟子及び朋友異議あるなし、獨り天散思へらく、語孟を推尊して、特に崇重の意を表するときは、恐くは六經を睥睨し、之れを孔孟の外に置くに擬し、甚だ聽聞を驚かさんと、乃ち之れを削去せんことを請ふ、仁齋因りて之れに從ふ、天散享保二十年を以て卒す、年八十二、其事蹟は敎育史資料卷之十二及び先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

林義端字は九成、通稱は九兵衞、文會堂と號す、平安の書肆、元祿年中歿す、著はす所扶桑名賢文集七卷、扶桑名賢詩集七卷、文林良材七卷、詩林良材□卷、文法授幼抄五卷、玉箒子六卷あり、

中島義方、字は正佐、訥所（一に納所に作る）と號す、又浮山と號し、孤山と號す、京師の人、生徒を敎授する、三十餘年、享保十二年を以て歿す、年七十、著はす

所、四書通解十卷、孤山文集六卷等あり、東涯其墓表を作る、文集卷之十四に見ゆ、云く、

昔先君子の道を倡ふる、當時堂に升り室に入るもの、人自ら淬勵、言必ず古を稱し、聖賢を以て自ら期せずといふことなし、今に已に六十餘年、或は故、或は耄、或は其志を墮す、而して講習多年老いて倦まざるものは、吾れ浮山子を見る、

又其事蹟は近世叢語卷八に見ゆ、

瀨尾維賢、字は俊夫、通稱は源兵衛、用拙齋と號す、京師の人、著はす所、熙朝文苑七卷、本朝忠義雜說三卷、八居題詠二卷等あり、

山口勝隆、大内義隆七世の裔、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

片岡宗純、柳川の人、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

釋道香、豐州中津の人、貞享年中京師に來たりて、仁齋に從學し、深く其學行を信ず、謂ふ學者佛氏の說に通せざれば、先儒の說の佛氏より出づるを識ることを能はずと、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送

序を作る、文集卷之一に見ゆ、

村上生、名字詳ならず、肥州の人、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

木村立、字は信甫、羽州秋田の人、聾者なり、羽人古學に嚮ふもの、皆彼れが影響による、享保十四年を以て歿す、年七十餘、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、東涯亦送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

吉田元發、仁齋が送序あり、文集卷之一に見ゆ、

嚴崎元質、仁齋が贈序あり、文集卷之一に見ゆ、

香川修德、字は太冲、修庵と號す、播州姫路の人、京師に住す、著はす所、一本堂藥選あり、其事蹟は皇國名醫傳卷之中に見ゆ、

大町質、字は正淳、敎素と號す、諡して敬簡先生といふ、京師の人、享保十四年を以て家に卒す、壽七十一、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡邊榮、字は元安、通貞子と號す、日向延岡の人、等輩中にありて勤篤を以

て稱せらる、京師に住して醫を業とす、小河成章と友とし善し、後、癱瘓の疾に罹りて家に廢し、享保七年を以て卒す、年五十九、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡邊希憲、日向の人、東涯其送序を作る、文集卷之一に見ゆ、

磯野員政、字は竹嚴、彥兵衛と稱す、醫を業とす、江州の人、後、名護屋に住す承應三年に生れ、寶永五年に卒す、享年五十五、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

鳥山守道、見庵と號す、越の府中の人、小河成章と友とし善し、醫を業とす見庵天資朴直にして苟も詭隨せず、孝義自ら將(おこな)ふ、廉にして且つ儉、毀譽、懷に嬰らず、謗訕、言に形はさず、正德元年を以て歿す、年四十八、著はす所三世經驗方等醫書數種あり、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

伊藤貞亮、字は廣宅、木庵と號す、醫を業とす、□州角鹿の人、寬文三年を以て生れ、享保十四年を以て卒す、年六十七、東涯其墓碑銘を作る、文集卷

之十三に見ゆ、

田中親長、字は源內、東泉と號す、諡して文進先生といふ、京都の人、强記洽覽、人の爲めに稱せらる、享保十七年疾を以て家に歿す、壽六十八、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

渡會末茂、鶴溪子と號し、造酒と稱す、伊勢の人、延寶三年に生れ、享保十八年に歿す、享年五十九、著はす所、杜律評叢、鶴溪雜記、芬韵詩選等あり、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、云く、勢州は邑里殷富、人物亦盛なり、學を嗜むの人を問へば、必ず若を以て稱首となすと、彼れが當時の名聲、推して知るべきなり、又日本詩選の作者姓名を參考せよ、

平井德健、字は春益、東川と號す、諡して安節先生といふ、濃州の人、紀藩に仕へて醫官たり、正德五年に卒す、年七十四、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

緒方維文、字は宗哲、諡して謙光先生といふ、京師の人、享保七年家に病歿す、享年七十八、東涯其碣銘を作る、文集卷之十四に見ゆ、

湯河丙治、初めの名は要、字は丁甫、一の字は元綱、東軒と號す、京師の人、久留米侯に仕ふ、寶曆八年を以て歿す、壽八十一、

伊東儀、字は邦達、好義齋と號す、長門の人、初め京師に遊んで仁齋に從學す、後、其說を疑ひ、程朱の說に歸す、享保十二年江戶に歿す、年七十一、私に謚して恭節先生といふ、鳩巢好義齋を稱して獨行の君子といへり、

笠原龍鱗、字は魯子、通稱は玄蕃、雲溪と號す、城州西岡の人、詩を能くす、著はす所、桐葉編あり、其事蹟は近世叢語卷八に見ゆ、

松崎祐之、字は子慶、蘭谷と號す、一の號は甘白、通稱は多助、丹後の人、少きより京師にあるを以て贄を仁齋の門に執り、後、東涯と友とし善し、專はら其師說を信じ、終身遵奉して變せず、中年の後、臨池の枝を好み、尤も草隷に長ず、享保二十年を以て歿す、年六十二、著はす所本朝歷史徵二百七十二卷以外數種あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之五に見ゆ、

並河永、字は祟永、後尙永と改む、誠所と號し、又五一居士と號す、天民の兄なり、五畿內志を著はす、後、伊豆三島に仕す、東涯の贈序あり、文集卷之

二に見ゆ、又其事蹟は野史卷二百五十八及び事實文編卷□に見ゆ、鑒定便覽名家全書、日本諸家人物誌等には誠所と五一居士とを別人とし、又名字を誤讀し、其傳ふる所甚しく事實に違へり、

並河尙義、初の名は宗孝、吉八と稱す、天民の弟なり、鳥居氏に仕ふ、

鶴田重定、字は閑適、長崎の人、自稱して長溪子といふ、其事蹟は先民傳卷之下及び鑒定便覽卷二に見ゆ、

陰山元質、字淳夫、小字は源七、東門と號す、南紀の人、享保十七年歿す、年六十四、其事蹟は教育史資料卷十二に見ゆ、

荒木田氏筠、字は春生、霽寰（大日本人名辭書に齋寰に作るは誤なり、）と號す、渡會末茂の二子、林氏を嗣ぐ、通稱は丹下、詩名あり、日本詩選の作者姓名を參考せよ、

桂川貞輔（さだすけ）、浚泉と號す、原東岳の筆疇卷之六に浚泉を論じて「至性俊齋狷介清潔の德ある人」といへり、以て其爲人を知るべし、

林景範、字は文進、語孟字義及び童子問の跋を作る、

三重貞亮、字は新七、松庵と號す、延寶二年を以て生れ、享保十九年を以て

歿す、享年六十一、東涯其墓誌を作る、文集卷之十四に見ゆ、

宇都宮三的、字は文甫、圭齋と號し、一角と稱す、遯菴の子なり、享保九年を以て京師の僑舍に卒す、年四十八、東涯其墓碑銘を作る、文集卷之十三に見ゆ、

松岡玄達、字は成章、怡顏齋と號じ、恕菴と稱す、京師の人、本草家なり、家大に富む、然れども自ら奉ずる甚だ儉素にして華飾を喜ばず、其子典絹帛を穿たず、常に布袴を服す、門人乃ち絹袴を遺る、恕菴曰く、昔予仁齋の坐に侍するとき、東涯年尙ほ少、常に素綿衣を着く、今豚兒は染衣裳を着く、之れを東涯に比すれば、亦奢ならずや、而して又何ぞ此華飾物を以てせん、遂に服するを許さず、嘗て南天燭を切りて女子の笄となす、其儉素率ね此の如し、然れども唯〻書籍を購ふには金錢を惜まず、兩大庫を設け、一は國書を藏し、一は漢籍を藏し、以て參考に供ふ、文會雜記卷之三に云く、

松岡玄達は初め闇齋門人なり、後、仁齋東涯に十四年つきて居られ

たれども、始終朱學にしてすましたると國讞語れり、

其事蹟は近世叢語卷五、續畸人傳卷之二及び皇國名醫傳卷之中に詳なり、有名なる本草家小野蘭山、恕菴が門に出づ、

荒木重篤、原泉と號す、天資豪宕、生産を事とせず、晩年醫を業とす、延寶元年京師火災あるに當りて仁齋古義一部を携へて迯る、原泉諸人に率先し、眉尖刀を挾み、護衞して行く、

辻達、晩菴と號す、因州の人、

大石良雄、赤穗四十七士の一人なり、彼れ嘗て贄を仁齋に取り、一日來たりて其書を講ずるに侍ず、時々睡りて聽かず、衆皆笑を匿くす、彼れ退いて後、衆皆罵りて曰く、惰懶彼れが如き學ばざるに如かずと、仁齋曰く、小子妄に謗ること勿れ、予を以て彼れを觀るに庸器にあらず、必ず能く大事に堪へん、

小野寺秀和、字は重內、亦赤穗四十七士の一人なり、

中島源造、名は正辰、もと松平紀伊守の醫者の子なり、後、大津にありて仁

齋學を講ず、文會雜記卷之三上に見ゆ、
稻生宜義、字は彰信、若水と號す、姓は稻生氏自ら修めて稻となし、稻若水と稱せり、博物の名あり、著はす所、庶物類纂一千卷あり、加州侯に仕へて終はる、事は皇國名醫傳卷之中に見ゆ、
江田謙齋、東涯其贈序を作る、文集卷之一に見ゆ、
長澤粹庵、同上、
以上仁齋門人中殊に注意すべき者のみを擧ぐ、其他先游傳に載する所少しとせず、又紹述先生文集卷之二十一に謝諸友壽家君七袠の詩あり、其序に仁齋が門人三十九名を擧ぐ、併せ考ふべし、



第十　仁齋關係書類

先府君古學先生行狀伊藤長胤撰

古學先生伊藤君碣銘北村可昌撰

右二篇共に古學先生文集の初めに掲載せり、

仁齋伊藤先生傳板倉勝明撰〇甘雨亭叢書仁齋日札の首に附す、

古義堂遺書總目敍釋一卷寫本〇伊藤善韶著

此書は仁齋東涯の著書を悉く列記し、最後に東涯の年譜を附載するものにて、卷首には、東所の序あり、明和六年の撰に係る、

古學先生碣銘行狀一卷

此書は仁齋の門人林義端が寶永四年を以て刊行する所に係る、北村可昌の古學碣銘、東涯の古學行狀及び其他寄贈祭輓の詩文數篇を收載せり、

先游傳一卷寫本〇伊藤東涯著

先哲叢談〔卷之四〕原念齋著
日本儒林譚〔卷上〕同上
先哲像傳〔卷二〕原德齋著
先達遺事稻葉正信著
近世叢語〔卷四〕角田九華著
閑散餘錄〔卷之下〕南川維遷著
近世大儒列傳〔上卷〕內藤燦聚著
古今諸家人物志釋萬菴著
日本諸家人物誌南山道人纂述
斯文源流河口靜齋著
學問源流那波魯堂著
文會雜記湯淺常山著
年山紀聞〔卷五〕安藤年山著
一本堂藥選〔跋〕香川修庵著

二連異稱一卷 藤田一正著

大日本史料原稿一卷

藝苑叢話（上卷）山縣篤藏編著

名儒傳寫本（著者未詳）

名家全書（卷一）

鑒定便覽（卷二）

近世名家著述目錄（卷之一）

慶長以來諸家著述目錄（卷上）

日本名家人名詳傳（卷之上）

伊藤仁齋一卷（偉人史叢卷三）竹內松治著

伊物二氏の學案 島田重禮〇哲學雜誌第八十八號及び第九十三號にあり。

近世德育史傳 足立栗園著

日本哲學思想之發達（獨文）井上哲次郎著

適從錄 大高坂芝山著

古學辨疑二卷富永滄浪著
蘐園隨筆三卷物徂徠著
梧窓客談二卷山内退齋著
本朝異學問答一卷撰人名闕
大學定本釋義二卷伊藤東涯著
中庸發揮標注同上
童子問標釋二卷同上
語孟字義標注二卷同上
辨伊藤仁齋送浮屠道香師序一卷佐藤直方著
日本詩史（卷之三）江邨北海著
野史（卷二百五十七）飯田忠彦著
問合早學問（卷之上）
大日本人名辭書
文學偉人傳服部喜太郎編輯

非凡人物列傳　渡邊修二郎撰

日本哲學要論　有馬祐政著

仁齋徂徠學術の同異　内藤耻叟〇東洋哲學第三編第二號にあり、

伊藤仁齋と吳蘇原　安井小太郎〇東亞學會雜誌第一編第五號にあり、

仁齋學の話　三島毅〇學士會院雜誌第十八編の八にあり、

日本倫理史稿　湯本武比古、石川岩吉共編



第十一　仁齋學派即ち堀川學派

仁齋一たび一家の學を主張してより其徒翕然として起り、遂に一學派を成せり、是れを仁齋學派となす、或は之れを古義學派といひ、徂徠の復古學派と區別せり、或は又仁齋が京師の堀河に住せしを以て堀河學派ともいふ、伊藤氏系圖に示し置けるが如く、仁齋に五男あり、曰く、長胤、字は原藏、曰く、長英、字は重藏、曰く、長衡、字は正藏、曰く、長準、字は平藏、曰く、長堅、字は才藏、是れなり、是れを伊藤の五藏といふ、就中原藏と才藏、即ち東涯と蘭嵎、最も著名なり、是れを伊藤の首尾藏といふ、然れども仁齋の學を大成したるは、東涯其人なり、東涯蚤に教を家庭に受け、博學洽聞、仁齋死後愈〻家學を主張して起り、著書身に等しく、門生亦乏しからず、其勢力の盛なる、優に蘐園學派と頡頏するに足れり、東涯の功、豈に沒すべけんや、其詳細なることは後に改めて論ずべし、東涯以外の子孫は左に之れを列擧せん、

長英字は重藏、梅宇と號す、仁齋の第二子、東涯の異母弟なり、母は瀨崎氏天和三年を以て生る、仁齋先きに緒方氏を娶る、緒方氏東涯を生んで蚤く沒す、故に仁齋瀨崎氏を娶れり、瀨崎氏頗る婦行あり、四男一女を生む、梅宇は其長子なり、寶永年中梅宇德山侯(周防)に筮仕す、侯深く仁齋の學を信じ、東涯を聘せんと欲す、東涯應ぜず、侯尙ほ懇請して已まざるを以て東涯乃ち梅宇をして己れに代はらしむ、梅宇其餼廩を受くと雖も、尙ほ堀河にありて時々德山に往來するのみ、正德元年韓使來聘す、德山侯時に館伴使なり、乃ち梅宇をして專ら文翰の事を掌らしむ、是れより先き德山の地、文學の士、未だ多く輩出せず、梅宇此に仕ふるに及んで、經史の業に從事するもの漸く起るといふ、享保二年の春、德山の祿を辭し、專ら生徒を敎授す、翌年に及んで、福山(備後)に筮仕し、一家を携へて此に移る、蓋し福山の地、從來皆闇齋學派のみにして、詞翰に長ぜるものなし、梅宇此に到りてより、闔國、風に向ひ、曩時の陋習を一變せりといふ、梅宇避遠の地に住する實に二十八年の久しきに及ぶ、故に其學術操行を識る

もの少し、惜むべしといふべし、梅宇延享二年を以て福山に沒す、時に年六十三、私に謚して紹孝(一に康獻に作る、)先生といふ、梅宇人となり、魁梧健談、寛厚人に接す、文、韓歐に淵し、詩、李杜に原す、常に陸務觀集を愛し、講習倦まず、經史自ら娛む、鑽研考訂、老いて彌〻篤し、齋を號して相遺窩といふ、著はす所、志林二卷、談叢七卷、講學日記十二卷、相遺窩詩稿三卷、梅宇文稿五卷あり、(先哲叢談續編卷之六)

長衡、字は正藏、介亭と號す、仁齋の第三子、梅宇の同母弟なり、貞享二年を以て生まる、介亭少きより好んで字を書し、尤も行草に巧に經義の外、筆札を以て稱せられ、又繪畫を善くし、能く花卉を作る、介亭性質樸にして、粉飾を事とせず、聲譽を好まず、惟〻家學を研究し之れを繼述するを以て專務となす、東涯沒するの後、其壽特に世に存するを以て、之れを推尊するもの極めて多く、洛攝の間、人ごとに之れを欽重す、彼れ此れによりて、一時聲價を荷へりといふ、享保十一年介亭四十二歲、高槻侯の聘に應じ、猶ほ京師に居る、屢〻高槻(攝津)に之き、經義を講授す、侯家賓禮を以て之れ

を待し、恩遇甚だ優なり、彼れ安永元年を以て沒す、時に年八十八、私に諡して謙節先生といふ、介亭孝友の心厚し、母氏雷を怖るゝこと人に過ぐ、故に講義の半と雖も雷鳴あれば、堀河の本家に走れり、兄東涯に仕ふるも、猶ほ父に仕ふるがごとし、著はす所謀野危言二卷、救荒小言二卷、經濟小言四卷、謙節遺稿十二卷あり(先哲叢談續編卷之六及び畸人傳卷之一)

長準字は平藏竹里と號す、仁齋の第四子、梅宇の同母弟なり、歲十四にして父を喪ひ、伯兄に撫育せられ、長ずるに及んで群書を博覽し、最も史學に長ず、享保年間父の門人湯河東軒の薦擧により禍を久留米の文學に解き、尙ほ平安に居る、後、世子の侍讀に擢んでられ、江戸に移り、赤羽邸に居る時に年三十有五、彼れ江戸に到るの後、名父の子なるを以て、其學術を信じて從遊するもの頗る多し、江戸にありて堀河學を奉崇するもの、篠崎東海之れを首唱し、湯河東軒及び竹里之れを和す、是れより先き東涯將に江戸に遊び、關東の光を觀んとするもの數次、竹里此に至るに及んで、詳かに風俗習氣の畿內に異なるを識る、故に絕意して到らず、竹里

の赤羽邸にある、服南郭が居と僅に一小流を隔つ、南郭嘗て彼れを一見して、稱して溫厚の長者となす、竹里常に謂ふ、心平に氣和すれば、溫柔と雖も、而も强毅奪ふべからざるの力あり、公を秉り正を持すれば、迂遠と雖も、而も透徹拘すべからざるの權あり、以て人物を語るべく、以て世務を言ふべし、彼れ寶曆六年を以て赤羽邸に沒す、時に年六十有五、著はす所赤羽漫筆四卷、枕干小錄二卷等あり、(同上)竹里の門人內田頑石あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之十一に見ゆ、

長堅、名は才藏、蘭嵎と號す、仁齋の第五子、梅宇の同母弟なり、彼れ嘗て人に謂ひて曰く、

吾家兄弟八人、先人(仁齋の事)死するの日、坐食して家にあり、人或は其出贅して人の後たることを勸むれども、亡兄(東涯の事)一も省みず、與に倶に苦を啖ひ、淡を攻め、日に學行を勵み、以て似續を要す、昏頑の質、稍〻成す所あり、皆出で丶仕に就く、女は嫁して室あり、我れを生むものは父母にして而して我れを長じ我れを育するものは皆亡兄なり、

其幼時の狀況以て知るべきなり、蘭嵎博學能文、父兄に類す、而して擧止端重なり、其紀州侯に仕へ、始めて君侯の前に講ずるや、書に對して講ぜず、講座掌に汗しておもへらく、この人寒素に生長し、未だ大人に說くに慣はず、則ち其巍々然たるを視て然るなりと、之れを促すも應せず、侯亦之れを許る、既にして蘭嵎徐ろに曰く、公侍に座す、聖人の書を講すべからざるなりと、侯之れを聞き、遽に褥を去る、是に於てか彼れはじめて講說す、音吐朗暢、辨論明備、皆歎賞して曰く、眞の儒者なりと、(先哲叢談卷之四)蘭嵎旁ら書を能くし、好んで墨蘭を作る、後、書を求むるもの多きによりて之れを斷つ、安永七年紀州に歿す、享年八十有五、著はす所詩古言十八卷、書反正十卷、(木刻一)周易本旨十二卷、易疑二卷、左傳獨斷八卷、經說叢話十卷、明詩大觀二十卷、蘭嵎雜記六卷、蘭臭篇二卷、紹衣稿四卷、紹明先生全集十二卷あり、子孫世々業を繼いで、今に至りて尚ほ紀州に存するものありといふ、蘭嵎の門人に立松東蒙あり、狂歌の祖にして著書亦頗る多し、終身娶らず、其事蹟は先哲叢談續編卷之十一に見ゆ、

東涯の子三人あり、長男を世俊といひ、二男を世倫といひ、三男を善韶といふ、世俊と世倫とは夭折す、是を以て善韶家學を繼紹せり、善韶、字は忠藏、東所と號す、文化元年を以て卒す、年七十五、諡して脩成先生といふ、著はす所古學十論一卷、本實雜論一卷等あり、東所の門人川田東岡あり、東岡、名は季成、字は子行、小字は八助、東岡は其號なり、因州鳥取侯の世臣、晩に易説を研究して一家の言をなす、文化年中に歿す、年六十餘、

樋口豐撰ぶ所の脩成先生伊藤君碣銘に云く

先生諱善韶、字忠藏、號東所、伊藤氏、古學先生之孫、紹述先生之子也、妣加藤氏、先生幼而孤、敎育于季父紹明先生、既長、孜々勵學、常以校訂遺書、成就先業爲務、至晩年全畢其功、用心精密、工夫甚勤、嗟微先生、其誰能之、蓋天助云、性正直謹畏、寡言敦行、質而文、和而威、有問者諄々善誘、其講經、言簡旨明、旁善書、寸紙世寶、搢紳之禮遇、藩國之欵待、士人之景仰、皆無愧先人、娶井口氏、繼娶新庄氏、後娶大同氏、子男七人、長弘美、繼家、次弘茂、弘義、倶夭、次弘明、次弘充、次弘光、次弘濟、女五人、所著有論孟古義抄翼、中庸發

揮抄翼詩解、古學十論、本實雜論、文集等、享保庚戌八月二十日生、文化甲子七月二十九日終于家、七十五、葬于小倉山先塋之次、私諡曰脩成先生、遺命屬門人豐謀碣銘、豐不敏、謹敍行誼萬一、係之銘、曰、似續父祖、不隕厥聲、述事卒業、集而大成、遺書永傳、斯道益明、奕世之學、千古之榮、

東所の長子を弘美といふ、弘美、字は延藏、東里と號す、文化十四年を以て歿す、時に年六十一、私に諡して恭敬先生といふ、著はす所恭敬先生文集あり、伊藤弘享撰ぶ所の恭敬先生碣銘に云く、

君諱弘美、字延藏、號東里、姓伊藤氏、古學先生之重孫、脩成先生之長子、母靜懿孺人、井口氏也、寶曆七年丁丑三月二十三日生、娶吉益氏、不諧、終身不復娶、故無子、以季弟弘濟爲嗣、君天資溫恭、廉而且儉、不尙華侈、不好嬉弄、夙承家庭之訓、常懷倡導之志、研磨遺書、亹々不已、立誠居業、遂不墜家聲、有詩文集三卷、文化十四年丁丑五月二十四日終焉、年六十有一、葬于小倉山先塋之次、私諡曰恭敬先生、弘濟屬予誌其幽堂、因銘云、緜々瓜瓞、世々溫淳、簡重寡言、明善誠身、德不孤兮、千載有隣、

東里の男、弘濟、字は壽賀藏、古義堂を嗣いで家學を唱へ、東峯と號す、人となり溫厚謹愼、沈默寡言、天保戊寅(天保に戊寅なし姑く疑を存す、)の冬幕府命じて曰く、弘濟父祖五世、敎諭を以て任となす、有政の施、想ふに當に瓜瓞の綿わるべし、世の希に覯る所、其れ永く戶役を徐き、年ごとに銀を齎らして、以て積善を表せんと、弘化二年を以て歿す、享年四十七、私に諡して靖共先生といふ(野史第二百五十七卷)藤原資善撰ぶ所の碣銘に云く、

先生諱弘濟、字壽賀藏、號東峯、姓伊藤氏、東所先生季子、母大同氏、嫡兄東里年老無子、以先生爲嗣、東里卒、先生實丁孝服、爲人溫厚謹愼、沈默寡言研磨家說、校刻遺書、生徒日進、尤貴重搢紳之間、嘗屢奉鷹司殿下下問、學習所之造也、亦竊與有聞之、天保戊寅十月大府有旨曰、弘濟乃高曾祖父五世、家居以敎諭爲任、有政之施、想當有之、瓜瓞之緜、世所希覯、其永除戶役、年賚銀十五錠、以表積善之家云、寛政已未五月十九日生、弘化乙巳八月十四日罹病卒、年四十七、葬小倉山祖先堂次、私諡曰靖共、配福井氏、六

男二女、重光嗣レ家、親故門人來乞レ誌ニ其碣一、因銘曰、繼レ志述レ事、學因レ世傳、永言孝思、宜レ申ニ之年一、奄忽就レ木、噫嘻亦天、

東峯の子、名は重光、輶齋と號し、今尙ほ家學を紹いて京師の堀川（東堀川下立賣上る）にあり、是れ本と仁齋邸宅のありし所なり、龜谷省軒歌あり云く、

堀川の清き流の末とほく今に匂へる水くきのあと、

仁齋の子孫以外殊に仁齋の學を信奉して之れを主張せしものは、中江岷山なり、岷山が事蹟學問等は後に論ぜん、仁齋が門に出でゝ反りて仁齋が學を駁せしは、並河天民なり、岷山と東涯とは忠實に仁齋の學を紹述せんことを務むるに引き換へ、天民は仁齋が學の缺點を論じて憚る所なきなり、是に於てか仁齋の學派は自然二派に分れ、一派は東涯によりて代表せられ、一派は天民によりて代表せらるゝことゝなれり、先哲叢談卷六に云く、

天民唱ニ其所ニ獨得一、以振ニ一時一、仁齋沒、其徒半從ニ東涯一、半從ニ天民一云、

此れに由りて當時の狀況を想見すべきなり、東涯、天民と其派を異にし、

正派の叛徒に於けるが如き地位を占むるに拘はらず、曾て些の惡聲を出ださゞりしが如き、其襟度の宏量を窺ふに足るなり、東涯の門下亦多く人材を出だせり、澤村琴所、青木昆陽、奥田三角、山田麟嶼、安原貞平、原雙桂、原田東岳等、是れなり、其詳細なることは、東涯の條に出ださん、東涯の門人中原雙桂の如きは、後、桂館漫筆一卷を著はし、一家の學を唱道し、痛く仁齋が學を非難せり、又高志養浩といふものあり、本と東涯の門に出づと雖も、時學鍼焫二卷を著はし、仁齋が學を攻擊し、室に入り戈を操るの概あり、此の如く往々背いて起るものあるに拘はらず、仁齋學派が德川時代に於て隱然一大潮流をなしゝこと何人も否定すること能はざるべきなり、學問源流に仁齋學派を論じて云く、

元祿の中比より寶永を經て、正德の末に至るまで、其學盛んに行はれ、世界(海内のこと)を以て是れを計らば、十分の七と云ふ程に行はれ、元和寬永の風なるは、甚だ稀なり、

是れ仁齋學の最も盛んに行はれたる時代にして、其間僅々二十年に過

ぎず、然れども仁齋の學の影響に至りては決して此に止まりしにあらず、寛政文化の頃に至るまで堀河の遺風の痕迹は、未だ全く磨滅せりと云ふを得ざるなり、若し夫れ間接の感化を言はば徂徠の如きも本と仁齋に刺激せられて起れるが故に、德川時代に於ける斬新なる思想の潮流は、仁齋學派によりて代表せらるといふも、決して過言にあらざるべきなり、



第二章　中江岷山

第一　事蹟

中江岷山、名は一貫字は平八、又之れを通稱に用ふ、岷山は其號なり、晩年薙髮して快安と稱す、伊賀柘植村の人、其先は志賀の源氏より出て、世〻將種たりといふ、岷山幼にして書を讀むことを好む、父景次之れを奇愛し、京師に遊學し、業を仁齋の門に受けしむ、岷山乃ち夙夜孳々として往聖の徵言を研鑽す、當時古義堂に來たりて業を受くるもの、或は博綜を務め、或は修辭を專らにし、才雄にして名播き、身達して業廣し、岷山之れと競はず、木訥にして文少なく、人の爲めに知られず、然れども放言自適、敢て其故態を改めず、先游傳によるに、岷山が仁齋に從學すること四十餘年の久しきに及べり、寶永中一家を携へて大阪の天滿町に移住し、其學び得たる所を以て之れを諸生に敎授す、窮乏殊に甚だし、彼れ嘗て曰く、「予れ貧窶に於ては顏憲に讓らず」と、其家道のいかん、以て想ふべきなり、

岷山平生古學を唱道し、仁齋の學說を發揮するを以て己れが任となし、力を極めて宋學を攻擊し、淺見絅齋三宅尙齋の徒と互に相敵視し、旗鼓堂々門戶相擠し、掎角の勢をなす、彼れが家は世々將種なりしが彼れ自らは一變して堀河學派の驍將となり、反對派と健鬪せしもの、實に痛快なりといふべし、岷山詩を以て治道に益なしとなし、絕えて詩を作らず、總べて詞章の輩を賤視せり、嘗て曰く、

聖人の大道、全く文辭にあらずして、德行にあり、故に其道、遊夏に與へずして顏曾に傳ふ、後世屈宋李杜、造道の文ありと雖も、儒者の域に入ること能はざるもの、文辭詞章の之れを羈縻するあればなり、故に余敢て歌詩を作らず、之れが爲めなり、

岷山文章を作るごとに、皆然則の二字多し、因りて書生岷山を稱して然則先生といふ、岷山亦自ら之れを認容して曰く、

首尾を通貫し篇幅精整し、斯の若くにして而して後、快暢す、

と、蓋し然則の二字を用ふるの效用を言ふなり、岷山氣岸高亢して苟合

を欲せず、塾中扁を横へて一語を書す、其文に云く

諛詞巧說、不ㇾ會學習、卑禮諂態、不ㇾ會操演、

享保十年十月病（即ち心恙）に罹り荏苒春に至る、彼れ本と家貧にして扶持力なく、困頓殊に甚だし、六月十日に至りて遽に卒す享年七十二、城東の一心寺に葬る、東涯其墓誌銘を作る、文集巻之十四に見ゆ、銘に云く、

力扶ㇾ斯文、志存ㇾ塡ㇾ海、其書滿ㇾ屋、困窮曷悔、

岷山著はす所理氣辨論二巻、四書辨論十二巻あり、其所見を述ぶる、剖撃痛快、少しも假借せず、是れ彼れが三十年來日夕攻究して得る所なりといふ、岷山が妻、北村氏亦賢行あり、事は先哲叢談後編巻之四に詳なり、岷山が門人に野村直道あり、理氣辨論の跋を作りて曰く、

岷山先生業を古學先生に受け、卓然傑立、其正指を洞かにす、云云、是々非々、切當明白、是に於て理氣の說亦大に備はる、

是れ必ずしも門人誇張の言にあらず、岷山明晰なる辨論と壯快なる勇氣とを以て仁齋が宇宙論を繼承し、發展し、主張することを務め、唯ㇾ冀ㇾ道

「不歸一死而不休矣」と絶叫せり、其抱負の大、以て想ふべきなり、



第二　學說

岷山は仁齋が學說を崇奉せしものなるが故に、彼れ自らの創見として紹介すべきものあるなし、然れども仁齋が學說の或る部分は彼れによりて一層明晰にせられたり、就中學者の注目すべきは、左の數點にあり、

岷山、宋儒に反し、一元氣說を唱道し、喝破して曰く、

天地の道、宇宙の間、惟一元氣のみ、動靜端なく、陰陽始なく、四時行はれ、百物生る、是れ天道の全躰なり、故に人物の生、亦惟一元氣のみ、此上所謂理といふもの本と之れなし、云云、

彼れは此の如く世界の根本主義を一元氣とし、此の一元氣を活物とすること、全く仁齋の如し、其言に云く、

曰く、帝曰く、道曰く、命は皆元氣生活の意なり、

是れ帝、道、命の三者を一元に歸して同一視するものなり、彼れは又道と理との間に死活の異同あることを辨じて曰く、

道は往來を以て言ふ、其意活せり、理は條理を以て言ふ、其意死せり、故に生物には道あり、理あり、死物には理ありて道なし、

又曰く、

聖人の道、惟天道は陰陽、地道は剛柔、人道は仁義、根本根源、古往今來、生々活々、發用流行、毫髮の間斷なし、是れ迺ち道の全體、捌より未發の體なし、理とは其後萬事萬物の分別條理なり、

岷山は理は唯氣中の條理なりとし、氣以外に氣の根柢ともいふべき理あることを認容せず、其主張は畢竟理想主義に反するものなり、

仁義禮智に就いては仁齋頗る曖昧なる說をなせり、今岷山說く所によりて差其眞意を窺ふべきに似たり、彼れ曰く、

仁義禮智は、天下の達德なり、而して性理の名にあらず、四端の心は、是れ人の性なり、以て仁義禮智に至るの端本にして、生理の端緒にあらず、

宋儒は仁義禮智を以て性となし、性を以て理となし、遂に寂靜主義に陷

れり、仁齋之れと峻別せんと欲し、仁義禮智は道德の名にして性の名にあらずと主張せしも、其結論は反りて孟子の旨意と相容れざるの恐れあり、然れども岷山の如く單に性といはずして、性理といへば、宋儒の所謂性を意味し、其峻別せんと欲する所の果して那邊にあるかを知るに足るなり、即ち仁義禮智は四端を擴充して成るものにして、四端は固より人の性なり、故に仁義禮智は人の性に淵源すること、論を俟たざるなり、然れども仁義禮智を以て性理の端緒とすべきにあらず、若し性理の端緒とせば、是れ寂靜主義に向つて關門を開き、老佛と手を握りて接吻するものあり、彼れ又曰く、

道は天下の達道なり、德は天下の達德なり、性や心や一人の固有する所、道や德や、天下の通行する所、道は德の流行、德は道の功能なり、而して後に人之れを得るときは、則ち有道といひ、有德といひ、仁者といひ、智者といふなり、

仁齋一派の考にては、性と心とは、個人的にして、道と德とは、社會的なる

こと亦以て知るべきなり、岷山又朱子が四端の端を端緒の義とするを非とし、是れ端緒にあらずして、端本なりとし、遂に、孔孟と宋儒の學と從つて分るゝ所以のもの此端緒にあり、と論ぜり、此點に於ては仁齋一派と宋儒とは本末背反の異同あるを知るべきなり、岷山天下の事は理の一字によりて斷ずべからず、必ず人情を酌量せざるべからざることを論ぜり、其言に云く、

凡そ事專ら理によりて斷決するときは、殘忍刻薄の心勝ちて、寛裕仁厚の心少なし、上の德既に菲薄にして、下必ず損傷多く、人も心服せず、須らく長者の氣象ありて方に可なるべし、

又云く、

聖人の道は人情のみ、禮記凡そ三千三百、曲折詳悉、至れり盡くせり、而して後に曰く、此れ孝子の志なり、人情の實なり、禮義の經なり、天より降るにあらず、地より出づるにあらず、人情のみと是れなり、其人情を飾するものは仁義禮智なり、然れども宋儒以來仁義禮智を以て性と

なし、性を以て理となす、故に其仁義禮智の訓詁も、亦孔孟の仁義禮智にあらずして畢竟情を滅すに至るなり、

又云く、

老佛は人情を以て惡となす、聖人は人情を以て善となし、善に順つて之れを導く、此れ乃ち聖人邪説の由りて分るゝ所以なり、夫れ人倫の立つ所以のものは人情を以てなり、人生情なきこと能はず、是を以て聖人人情に順つて以て之れを敎ふるなり云云、天理を以て善となし、人情を以て惡となすもの、邪説の道なり、

岷山が此論、其肯綮を得たりといふべし、鄒魯の學は、理を以て道を立て、權利義務を爭はんとするにあらず、唯人情を以て其基礎となすのみ、故に寛宏仁愛の厚きありて、辭讓謙退の切なるあり、若し理を以て悉く斷ずとせんか、己れを持すること太だ堅しと雖も、人を責むること太だ深く、肺腑に浸淫し、骨髓に透徹して、卒に刻薄慘覈の流となり、聖人君子の盛德に及ばざること遠し、此の如きは古の申韓及び今の法律家の所爲

にして、鄒魯の學と相背馳するものなり、岷山曰く、

仁義禮智は、天下の達德なり、四端の心は、是れ人の性なり、人性情慾なきこと能はず、故に聖人は情欲を惡まず、但仁義を以て準則となす、旣に仁義なるときは、情欲即ち仁義なり、仁義に違ふときは、之れを利欲貪暴盜賊穿踰といふなり、

是れ情欲は殄滅すべきものにあらず、唯仁義に合せしむべきを論ずるものにて、老佛に對し、儒教の長處を發揮し得たりといふべし、岷山又四書辨論の序に道を論じて曰く、

夫れ道とは天下の公にして、一人の私する所にあらず、翅是を求めて是に歸するのみ、

又曰く、

萬物各主あり、吾有にあらざれば取ることとなし、惟此公道、之れを取るに禁ずることなし、故に仁に當りては師に讓らず、一たび千古の誤りを洗ひ、永く萬世の法を立つ、斯れ古人の志なり、

彼れが道を以て自ら任ずるの氣象、軒昂一番、殆んど其師に譲らざるの概あるを知るべきなり、



第三章　伊藤東涯

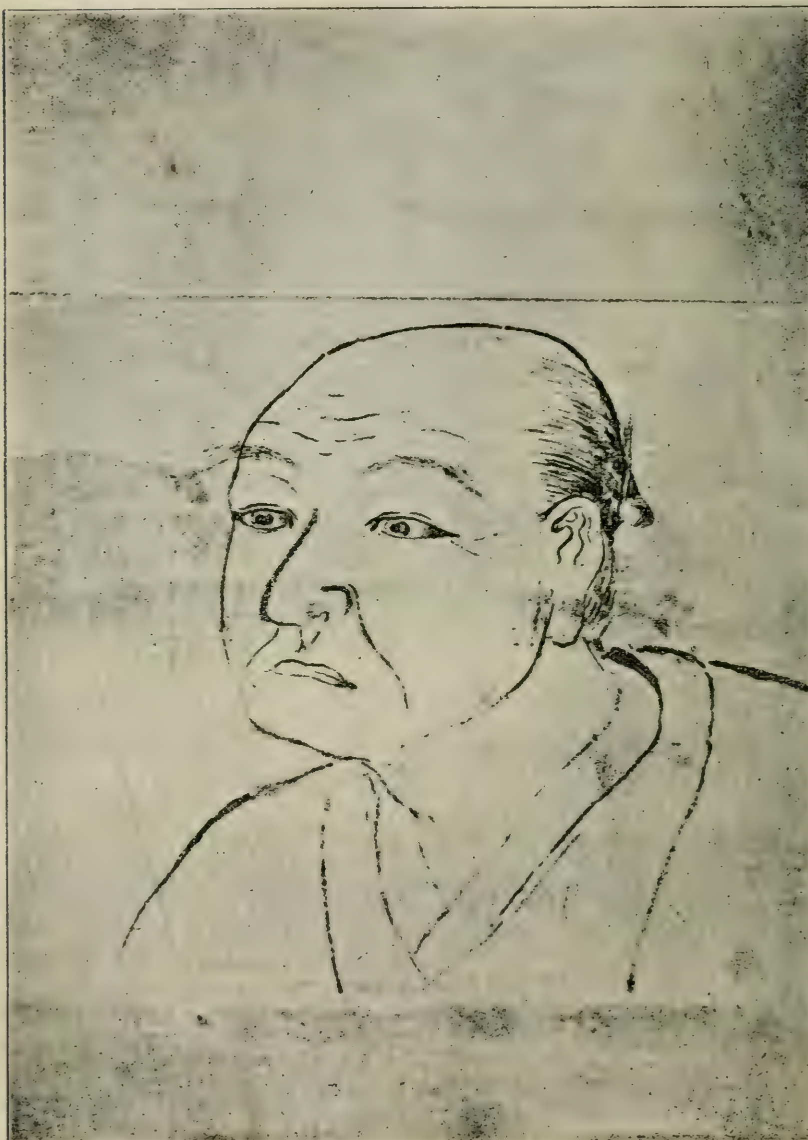
第一　事蹟

仁齋死後最も忠實に彼れが學術を繼承し、蘐園學派に對して隱然一敵國の勢を成すものを伊藤東涯(涯一に厓に作る)となす、東涯は仁齋の長子なり、名は長胤、字は元藏(元一に原に作る)東涯は其號なり、蓋し其居、堀川の東涯にあり、因りて自ら號とす、又慥々齋と號す、諡して紹述先生といふ、秦武鄕聞書に云く、

此仁齋翁妻姙娠の時、毎夜々々先生孝經幷に聖經賢傳の佳書等を讀みては、是れを講讀し聞かせ給ひしとかや、されば生れし子東涯先生、にして、博識の君子、世以て知る所なり、此胎教も、是れも人の語りしを感じて記す、

東涯幼少にして家庭の敎育を受け、長じて博覽强記、家學を主張するを以て任となし、蔚として一大家を成せり、藤原常雅公撰ぶ所の紹述先生

伊藤東涯之肖像



碣銘に云く、

沈靜寡默、恭儉謹愼、口、人の過を言はず、表襮を事とせず、防畛を設けず、終身仕へず、家に講學す、經義を剖析すること、蠶絲牛毛、然れども未だ嘗て强ひて以て人に語らず、而して就いて問ふもの、日に衆く、遠近之れを尊ぶ、他の嗜好なく、祈寒暑雨、未だ嘗て手卷を釋たず、云云、

東涯の變化なき、波瀾なき生活は殆んど此の數十言によりて寫し盡くされたりといふも不可なきが如し、殊に「沈靜寡默、恭儉謹愼」の八字、東涯の人物を形容して復た餘蘊なしといふべし、東涯曾て紀伊公より五百石を以て召されたれども、辭して仕へず、仁齋と同じく終身民間にありて講學に從事せり、曾て吾盧の作あり、云く、

孱顔壯帝居、風景似環滁、煙火十萬井、當中著吾盧、吾盧尤湫隘、閑門枕淸渠、兩岸有人家、相距九軌餘、崖下深尋許、土沃近沮洳、旋闢丈來地、爲栽數科蔬、陽鳥既歛翅、凉吹颯吾裾、時有三二友、惠來趣晏如、談中無他說、多及詩與書、少焉星彩收、氷輪走大虛、方牀逐淸光、命僕移且舁、艸間虫聲起、葉底露

華疎、談讙衣袂濕、相揖說歸歟、客去興未盡、倚筇轉躊躇、

先哲叢談卷之四に云く、

東涯の時、俊傑輩出、各旗幟を竪てゝ、以て自ら一方に振ふ、而して紹述文集二十卷、一言も之れに及ぶものあらず、識者以て難しとなす、

是れ彼れが謙讓爭はざるの性、然らしむる所なり、彼れ貝原益軒の仁齋と意見の合はざるを知ると雖も、題貝原翁及妻某氏字帖てふ文に云く、

嗚呼損軒子の書、端好度あり、老いて衰えず、某氏孟光の賢を躬にして、衛氏の筆を兼ぬ、云云、

毫も反情の痕迹を發見すること能はず、又並河天民は仁齋の門に出てゝ、痛く仁齋が說を攻擊せし人なり、然れども嘗て其病餘の作を次して云く、

夜來一雨洗塵寰、蕉葛凄其毛骨寒、行藥君今有奇策、乖涼放杖問青山、

圓顱方趾滿區寰、唯解附炎與棄寒、才器如君須自惜、前程事業重丘山、

其襟度宏量、以て知るべきにあらずや、殊に當時物徂徠の如きは旗鼓堂

々門戸を張り、仁齋を打擊して以て己れが見地を立つるに急なり、然れども、東涯之れを知りて殆んど知らざる者の如し、先哲叢談卷四に云く、

東涯、徂徠と時を同うし、各東西に鳴る、而して徂徠每に東涯を譏否して置かず、或は西より至る者に遇へば、即ち首めに叩くに東涯の所業を以てす、東涯は此れに異なり、嘗鱗嶼至りし日、徂徠己れを贈るの序を出だして以て之れを見す、鱗嶼出づ、東涯曰く、物氏の文は、譬へば猶ほ鬼瞼を蒙りて孩兒を恐喝する者の如しと、奧田三角多年東涯に親炙するも、其徂徠を評隲するを聞くは、唯此一言のみ、(此事又閑散餘錄卷之下に出づ)

又云く、

弟子嘗つて徂徠の天狗說を持し來りて東涯に眎す、時に北村可昌、松岡玄達坐にあり、同じく觀て口を極めて之れを刺譏す、而して東涯喑として一言を容れず、二生曰く「此文啻に語を成さゞるのみにあらず、而して說も亦通せずといふべし、先生以て如何となす」と、東涯曰く「いな、人各見るあり、何ぞ輕しく之を駁せん、況や其天狗の狀を形容する

もの盡くせり今の筆を取るもの恐くは及ばざらん」と、一生大に愧づ、（此事又文會雜記卷之三下に出づ）

東涯未だ必ずしも徂徠を尊崇せずと雖も亦必ずしも之れを輕侮せず、冷々淡々彼れが爲めに動搖せられざること猶ほ岩石の狂瀾怒濤中に崛起するがごとし、是れ本と自家の主義本領ありて、內に堅固なる信念を抱くにあらざるよりは能はざる所なり、若し東涯を以て仁齋に比すれば、頗る其相違あるを知るべし、仁齋は識見超邁にして自ら創業の才たり、東涯は識見適に仁齋に及ばずして博學の點に於ては確に仁齋を駕して上ぼれり、東涯は仁齋の學說を紹述すべき地位に居りて恰も之れに適せること、殆んど先天的に規畫せられたる者の如し、文會雜記卷之一上に云く、

東涯は學問は仁齋に倍せり、名物六帖など只ぬき書とのみ心得べからず、譯をつけたる處、殊の外に心を用ひたる物なり、中々及びがたき篤き學問なり、制度通など隨分文獻通考、杜氏通典、明會典などを能く

よみてとくと呑込んで仕立てたる物なり、大抵に書を精密に見たるばかりにてならぬ事なりと、南郭語りたまひき、

服部南郭は殊に深く東涯の篤學に感服したりと見え、「東涯の學問の如きあつきは、決して此已後もあるべからず」と云へり、是れ固より彼れが過言の甚しきものなれども、亦以て東涯がいかに當時の學術界に重きをなしたるかを察知すべきなり、萩原善韶、東涯の事を記して曰く、

或る人、伊藤東涯が所に往き、史記を五遍反復して讀みしなれども、未だ解せざること多しといへり、東涯對へて、吾子の解し得ざるは、其管のことなり、余は二十一遍讀みしなれども、未だ解せぬことありといはれたり、紹述先生の勉強精密、實に驚歎すべきことなり、云云、

此れに由りて之れを觀れば、東涯は中々に精讀を勉めたる人なり、此點に於ては何人も敬意を表するに躊躇せざるべし、然れども彼れが謙讓と篤學との爲めに、餘りに彼れが人物を過大にするを休よ、彼れは才識に乏しくして、是れといふべき創見もなく、寧ろ一意退嬰、家學を紹述せ

る一大儒に過ぎざるなり、決して天空海濶の氣象ありて震天動地の業を經營する豪傑の徒にあらざるなり、故に彼れの著書を讀めば、直に睡魔に襲はるゝの感あり、是れ毫も愉絕快絕、覺えず案を拍つが如き情的の聲貌に接すること能はざるが爲めなり、拙堂文話卷一に云く、

東涯之文少疵、然氣餒不及、讀之思臥、古人謂、文以氣爲主、信然、

拙堂が此評、其肯綮を得たりといふべし、東涯の議論も亦其文章と同じく平穩にして疵瑕少なしと雖も、氣餒沈滯して毫も揚らず、故に讀者をして忽ち倦厭せしむ、文會雜記卷之二上に云く、

東涯の文とかくはきとしたる文なし、經史博論もひとつも面白しきことなしと云へり、

東涯本と人目を醒すべき壯快なる思想なし、故に其文多しと雖も、はきとしたるものとては殆んど見出だすこと能はざるなり、詩も多くは平凡にして朗吟に耐へず、然れども時に佳作なきにあらず、今左に數首を擧げんに、

秋郊閑望

一村桑柘暗、千畝稻粱肥、藍水流紅日、白雲住翠微、世途榮願薄、今古賞音稀、尙愧機心在、山禽驚却飛、

月下聞砧

寒杵丁當響、擣殘月滿天、只聞來枕上、不識自何邊、

贈塾中諸子

離鄕迢遞滯京城、萍水相逢皆弟兄、喜子前程期遠到、螢窓殘夜聽書聲、

勗童生

誰甘草木與同腐、莫使鳳麟爲獨奇、聞說分陰重尺璧、朱顏幾日鬢絲々、

送大村景尹東遊

六經千里志、一劍十年光、天外波濤白、愁邊艸木黃、古來有窮達、男子愼行藏、吾道要扶起、差令人意强、

江都北海が日本詩史卷之三に東涯の詩を論じて云く、

其經義文章の如きは、姑く是れを舍く、詩も亦一時の鉅匠なり、近人動

もすれば擽ち曰く、東涯の詩、冗にして法なく、率にして格なしと、噫、誤何ぞ容易なる、東涯篇章最も饒し、余其集を閲するに、清麗なるものあり、素朴なるものあり、精嚴工整なるものあり、平易淺近なるものあり、體段齊くし難し、余生れて時に後ると雖も、猶ほ東涯を知るに及ぶ、其人溫厚謙抑、口訥々として言ふ能はざるものに似たり、今時の學者自ら龍門に託し、倨傲名を養ひ、懶惰禮を失ふものと同じからざるなり人詩を乞ふものあれば、則ち貴賤長少を論ずるなく、黽勉之れに應ず、大名の下、乞ふものの日に衆し、所謂卷軸の積むこと束筍の如きものなり、是を以て其作る所鍛錬を經るあり、率意に出づるあり、畢竟大家たるを害するなし、

北海此の如く東涯の詩を稱揚すれども、一首だも擧げず、蓋し深く其德に服するの極、此言をなすに至るものならん、那波魯堂が學問源流に東涯を論じて「詩は力なく、味少なし」といふもの反りて當れりといふべし、然れども東涯は規模廣大にして造詣亦淺からず、詩文の作家としても、

決して侮るべきにあらず、板倉勝明曰く、
先生篤學實行を以て自ら任ず、詩文は則ち其緒餘のみ、余を以て之れを觀るに其詩文、專門名家と雖も、殆んど及ぶ能はざるものあり、蓋し內に蘊して外に溢す、所謂德あるもの、必ず言あるものか云云、

又近世叢語卷之四に云く、

東涯名敎を以て自ら任ず、詩文は其餘事なり、而して亦一時の鉅匠たり、文は唐宋大家を學び縝密精整、浮躁の態なし、猶ほ其人のごときなり、詩は門戸を堅持せず、其多きを以て應ずる所、其躰一ならず、夫の當時李王を尸祝するものに視ふれば、一種の滋味ありといふ、

是れ亦一說なり、但ゞ氣魄光燄の足らざるを見るのみ、東涯は講義も亦低聲にして門人之れを聞取するに苦みしといふ、

東涯著述極めて多く、貝原益軒、新井白石等と伯仲の間にあり、閑散餘錄には「近世諸儒の中著述の多きは東涯に若くはなかるべし」と云へり、是れ固より過言なり、然れども著書等身とは東涯の如き人をこそ言ふべ

けれ、閑散餘錄には「凡そ既に刊せると未だ刊せざると合せて四十餘部百六十四餘卷あり」と云へるも、其實之れより多く、著書總計五十三部二百四十二卷及び圖三舖あり、此れに由りて之を觀れば、其蔚として一大家を成せるを知るべきなり、平維章が東海談上編に云く、

或る國君當世の名人を問ふ、答へて曰く、儒者は伊藤源藏、荻生惣右衞門、暦算は中根丈右衞門、久留島喜内、殊に丈右衞門は暦算のみにあらず、多藝の人なり、笙道は細井次郎大夫、官位裝束は壺井安右衞門、神道は賀茂の梨木氏、俳諧は松本次郎右衞門、くだりて戲臺狂言は市川團十郎、

思ふに仁齋死後、江戸に徂徠あり、京都に東涯あり、何れも學界の重鎭として東峰西嶽、遙に相對立して、當時一奇觀を呈せり、太田錦城が九經談卷之一に云く、

東涯先生博雅多識、當時比なし、其著作する所、皆有用の書なり、經義は宋學を辨駁し、十に七八を得たり、唯其家學を推衍するもの、多くは醇

正ならず然れども之れを要するに學問の博著述の富我邦儒先の第一たり、

猪飼敬所又之れを評して曰く、

東涯の人となり温厚にして物と競はず博學多識其見亦固陋ならず、但宋儒を攻め家學を張るに意あり故に區々として堅白を爭ひ往々小辨の義を破るものあり是れ其醇正ならざるの謗を受くる所以なり、

東涯は自ら孝子と稱する程仁齋に對して深く敬愛の意を表せるが故に寸毫も仁齋の學說に違ふこと能はず終身唯孜々として仁齋の學說を敷衍するのみ是を以て仁齋の偏する處に於ては共に一方に偏し爲めに醇正ならざる所あり然れども東涯は本と君子人の資性ありて自然に教育家の態度を具し世の名教に裨補する所鮮少にあらざるなり、

先哲叢談卷之四に、

東涯經術湛深行誼方正粹然たる古の君子なり、

といふもの、洵に當れり、東涯平素孜々として力を講學に用ふれども、文臨池の技に長ぜり、名家手簡初集に東涯の手蹟を載す、以て其一般を推知すべきなり、東涯の門人に高養浩といふものあり、曾て時學鍼焫二卷を著はし、卷末に東涯の人物を論じて曰く、

溫厚の長者なり、博學治聞、徂徠に減ぜず、惜いかな、性謙讓に過ぎて、曾施設に乏しく、學衆美を包ねて、才教誨に短なり、是を以て問ふことあれば、之に答ふ、答も亦精詳ならず、問はざれば、之れを示さず、示さゞるも、亦吝むるにあらず、然して其父師の說に於けるや、罅漏を補苴し、幽渺を張皇し、筆削改竄、大勳勞ありといふべし、童子問語孟字義の二書既に已に刊行す、論孟古義は坏樸略具はりて、而して成說未だ完からず、先生門人と談議討論、予も亦末席にあるを忝うす、今を以て之れを思ふに、論語の一書は章々句々、修爲を說くもの多し、故に仁齋の旨符合せり、抑孟子心性を論ずるに至りては、窒礙通せざるもの過半なり、故に今刊行する所の孟子古義は、其實東涯削鎌の手に成るものなり、

此れに由りて之れを言ふときは、東涯の學識、未だ必ずしも其家說に異議なくんばあらず、而して孝子仁人、豈に夢寐にだも發するに忍びんや、是を以て當に知るべし、先生の篤志實に他人の敢て及ぶ所にあらざるを、

東涯寛文十年四月廿八日に生まれ、元文元年七月十七日に卒す、中風の爲めなり、享年六十有七、加藤氏を娶り、男子三人あり、其中二人は夭死し獨り末子の善韶、家學を繼承して起り、堀河の流派をして綿々として絕えざらしむ、東涯座右の銘あり、以て其平生を見るべし云く、

跬歩、爾の所生を忘るべからず、一日爾の所職を曠うすべからず、所生は恩、天の如し、天を忘るれば、身斯に覆る、所職は惟れ身の本、本を忽にすれば、命必ず極まる、惟れ吾言にあらず、寔に帝の則、此れを以て君に事ふるときは、忠臣たり、此れを以て人に交はるときは德を失はず、

原東岳、自著「經說拾遺」の序に云く

昔人言へるあり、文武の後、仲尼を生ぜざるを得ず、仲尼の後、孟軻を生

せざるを得ず、直是に於て亦云ふ、兩夫子の後、仁齋東涯二先生を生ぜざるを得ず、夫れ孔聖沒して後、孟夫子あり、孟夫子沒して後、天下道なく、貿々焉たり、數千歲にして二先生出で、毅然として道を以て自ら任じ、不傳を遺經に續いで獨り之れを發明し、上は堯舜禹湯文武より以て孔孟に至るまでの精微を極め、下は陰陽事物神仙怪誕の如き、一としてこれを正に歸せざるはなし、以て千歲の惑を破るあり、設し二先生なかつせば、則ち道卒に喪びて言卒に湮せん、而して數千百歲の間、華既に其人なうして、而して孔孟の適派、邈として吾日東に傳はる、則ち昭代文獻の隆なる、茲に於て徵すべし、

此れに由りて之れを觀れば、當時堀川派の仁齋東涯を尊崇すること、殆んど孔孟に讓らざるが如きものありしを想見すべきなり、



第二　著書

辨疑錄四卷

此書は東涯が三十九歲の時に編著せるものにて、其後二十餘年を經て、享保十八年に至り、始めて上梓する所なり、首めに東涯の題辭あり、云く、

學、爲さゞれば、則ち已む、爲さば、則ち當に聖賢の學を爲すべし、聖賢の學を爲さば、則ち當に聖賢の書を讀むべし、聖賢已に往いて、言岐に旨隱る、過高過緊、學復た古ならず、先君子沈潛の識を躰し、獨得の見を奮ひ、一片の婆心、和盤托出、微言精義、餘なしと雖も、而も初學晚進、尙ほ或は問を煩はす、因りて舊聞を敍で、參るに新得を以てし、纂して辨疑錄四卷となし、以て答問の資となす、

卷末に小貫徽典の跋あり、先哲叢談卷之四に、

或は曰く、東涯の辨疑錄、貝原益軒が大疑錄に答へて之れを作ると、

此言然らず一に仁齋の遺漏を拾ふて、以て家説を主張するのみ、云云、

徂徠の大疑錄は仁齋を駁せしものにあらず、故に東涯之れに答ふべき謂はれなし、且つ大疑錄は正德四年に成りしものにて辨疑錄より後れたり、以て兩者の間、毫も關係なきを知るべきなり、

古學指要二卷

此書は仁齋死後十年にして成るもの、辨疑錄と同じく家學を敷衍せるものなり、

學問關健一卷

此書は國字を以て家學の大意を叙述せるものにて、東涯の死せる翌年即ち元文二年を以て發行せり、其中論じて云く、

畢竟道と云ふものは、卽事卽道、人々行事の上にありて、吾身を離れて、一物の見るべきものあらんや、

又云く、

又之れを將來に試みるに、却後千百年にして、假令ひ聖人ありて出現し玉ふといふとも、此孝弟の道をおしいとせざること、決焉として知るべし、

首めに菅原家長の序あり、云く、

其存日嘗て此書を梓するを命ず、未だ成らずして沒す、

終りに奥田士亨が跋あり、云く、

嗚呼此書最も晩出に系る、寔に忽にすべからず、苟も其門を得て入らんと欲するもの、關鍵に由らずして可ならんや、

此書蓋し享保十五年の著作に係る、故に士亨以て最も晩出とするなり、

天命或問一卷寫本

此書は寶永三年の著作に係る、序跋なし、

復性辨一卷

此書復性說を駁せる三篇の文章を輯めて、一卷となせるものにて、卷

末に平維章の跋あり、享保十五年の上木に係る、

古今學變三卷

此書は古今學問の變遷を論ぜるものにて、奥田士亨が蘭嵎と共に相謀りて校刻する所、卷末に「寛延三庚午新刊」とあり、首めに東涯の序あり、云く、

三代聖人の道、變じて今日の學となる、其由來する所のもの漸なり、豈に唯「一朝一夕の故ならんや、漢に一變し、宋に再變し千有餘歳の間に潜移默奪して、以て今日に至る、而して今日の學、復た古の學と同じからず、云云、

是れ亦東涯が家學の歷史的地位を明かにせんが爲めに著はす所にして、享保七年を以て脱稿せり、

經史論苑一卷

此書初めに善韶の序あり、終りに奥田士彦の跋あり、古義堂遺書總目叙釋に云く、

治經八論品士四科等の雜文を輯めて、以て閒居筆錄の後に載す、甲寅の歲、選んで集中に散載す、後、舊に復し、又分ちて以て一部となし、未だ號を立てず、只篇首の文を題し、名づけて治經八論といふ、亟今改めて經史論苑と名づく、云云、
以て此書の由來を知るべきなり、

經學文衡三卷

此書宋元明諸儒の經義に關する文十八篇を收載せるものにて、享保十九年の刊行に係る、首めに伊藤介亭の序あり、

經史博論四卷

此書は東涯が經史に關する文章六十餘篇を收載せるものにて、寶永七年を以て脫稿せり、卷末に原田邦直の跋あり、蓋し元文二年の刊行に係る、

訓幼字義八卷

此書は國字の書にして、東涯が享保二年を以て作爲する所に係る、首

めに自序あり、云く、

筆を丁酉の夏初に起して、稿を臘月の上澣に脱す、類を爲すこと、凡そ三百三十六、云云、

卷末に樋口公英の跋あり、始めて此書を刊行せしは、寶曆九年なり、

閒居筆錄三卷寫本

此書は東涯の語錄中最も趣味多きものなり、惜くは未だ版本なきを、首めに善韶が序あり、云く、

享保庚戌の歲（即ち享保十五年）先君子閒居筆錄を草し、其書未だ全書たらずと雖も、然れども、晚年の著はす所、最も玩味すべし、其議論純粹、文章平穩、乍ち讀めば、尋常の話說の如しと雖も、而も意實に精到、所謂言近うして旨遠きもの、豈に其れ是れか、其原本門を分つ、曰く、雜記上中下、曰く、字義後錄上中下、曰く、讀史五論、品士四科、曰く、經臆上中下、曰く、拾遺上下、凡そ十二卷といふ、已に稿を屬するの後二三年にして、辨疑錄を梓刻す、此稿屬する所の經說最も闡明なるもの數十

條を採りて補入す、題辭に所謂代ふるに新得を以てするもの是れなり、又五論四科を分ち、八論を附し、別に一部となす、(蓋し經史論苑ならん)故に此書條欵次第、遂に不完の稿たり、善韶幼齡より深く此書の全璧たらざるを恨む、秘珍すること數年所、前年爲めに門生數輩に託し、新に一本を繕寫し、原本に就いて校訂し、辨疑錄中佚に載するものは、之れを去り、文章斷截、完からざるもの、亦之れを除く、故に稿本の條目次序、混淆釐めず、今新に次第を編定し、分ちて上中下三卷拾遺一卷となす、云云、

今傳ふる所の閒居筆錄には拾遺なし、善韶が序は明和五年の作に係る、

讀易私說一卷寫本

此書の卷末に「十翼非夫子所著辨」を附載し、十三種の理由を擧げて十翼の孔子の手に成らざることを論證せり、

讀易圖例一卷寫本

周易經翼通解十八卷

此書は東所が明和八年に上木を企圖し、安永三年に工を竣へし所なり、

周易義例卦變考一卷 寫本

東涯漫筆二卷

古義堂遺書總目叙釋に云く、「此れ晩年筆記する所、文辭に意深し、恨くは未だ全書ならざるを」と、板倉勝明此書を採りて甘雨亭叢書中に收載せり、

已丑筆記一卷 寫本

卷末に「予客歲修₂理舊稿₁、繕寫成₂冊₁、作₂辨疑錄四卷₁、其後亦稍有₂剳記₁、凡二十七則、名曰₂已丑筆記₁、寶永六年臈月日、伊藤長胤誌」とあり、

聖語述一卷

古義堂遺書總目叙釋に云く、「原編集中にあり、今は別行す」と、此書載する所凡そ四十三章、章毎に首めに聖賢の敎の大意を述べ、末に聖語を

引いてこれを結ぶ、故に聖語述といふ、今に木の活字本ありて世に行はる、

紹述先生詩文集三十卷

此書首めに右大臣藤原常雅公の序あり、終りに善韶の跋あり、蓋し善韶自ら校訂して上木する所にして、寶曆十一年を以て竣工せり、此書の由來は古義堂遺書總目叙釋に詳かなり、

紹述遺稿四十五卷 寫本

此書は東所の編定する所にして、東涯の遺著三十餘種を收載せり、其目次左の如し、

(一)先游傳(二)詩經要領(三)佔畢漫鈔(四)集語鈔(五)古官(六)宮殿門考(七)宮室名號(八)閱史隨鈔(九)國事雜語(十)考古雜編(十一)倭漢通信雜誌(十二)朝鮮雜誌(十三)雞林軍記五卷(十四)朝鮮諺文字母(十五)文章辨略(十六)雜雋手錄(十七)肆言類雋(十八)東牘套語(十九)左氏熟語(二十)須記詩選(廿一)明詩絕奇(廿二)東涯詩話(廿三)東涯譚叢二卷(廿四)姓林全書(廿五)五音五位口

訣十例(廿六)避諱書(廿七)異名考

附

(一)朝野通載三卷(二)朝野通載續集三卷(三)朝野通載新集(四)當世詩林(五)當世詩林續編(六)當世詩林新編(七)時英文雋三卷(八)時英文雋二卷

遺稿中東涯譚叢の如きは單行本あり、神陵津騂之れが序を作れり、

刊謬正俗二卷

此書は門人安原貞平寛延元年を以て東都に刋行せしと雖も、後數年にして書肆災に罹り、版も亦燒失せり、因りて京師の書肆文泉堂明和九年を以て再刻して發行せり、

盍簪錄四卷寫本

盍簪餘錄二卷寫本

制度通十三卷

是れ東所が寛政八年を以て刊行する所に係る、

鄒魯大旨二卷

是れ奥田三角が享保十五年を以て上梓する所に係る、

秉燭譚五卷

是れ東所が寶暦十三年を以て刊行する所に係る、

童子問標釋三卷

語孟字義標注二卷寫本

中庸發揮標釋二卷

論孟古義標注四卷寫本

大學定本釋義一卷

東岳の筆疇卷之六に云く「東涯先生大學釋義、眞に是れ古書を註するの純式とすべし、簡にして疏ならず、明かにして意長せり、此上音註を加へて、之れを華の措大に示さば、必ず此れ嘆嗟嘉尙して今世中夏の儒輩の却て及ばざる所のものありと稱すべし」と、門人の此書を讃美すること此の如く深し、

四書集註大全標釋六卷寫本

輶軒小錄一卷寫本

此書は百家說林卷門に收載せり、

勢遊志一卷

三奇一覽一卷寫本

周易傳義考異四卷寫本

通書管見一卷

太極圖說管見一卷寫本

此書の末に東涯自ら記して曰く「甲申の秋、今の刑部尙書藤公、先君子に請ふて、太極圖說を講ぜしむ、予時に其說を受け、論十篇を作り、以て其旨を演す、今茲豫州の學生義準、予に就いて講を求む、爲めに予が舊庭に得る所のものを告ぐ、既にして其說を輯着し、名づけて管見といふ」と、是れ此書の來由として見るべし、此書は彼れが寶永四年の春を以て草する行に係る、

太極圖說十論寫本

十論は第一に「無極而太極」第二に「無聲無臭」第三に「繼善、成性」第四に「五行一陰陽」第五に「無極之眞」第六に「五性感動」第七に「陽善陰惡」第八に「定之以中正仁義」第九に「無欲故靜」第十に「躰立而後用行」是れなり、

用字格四卷

此書の初稿、未だ改修を經ざるに、嘗て坊間に竊刻せられ、誤謬少からざりき、因りて奥田三角享保十九年悉く誤謬を正して上木せり、後、寬政四年に至りて東所更に之れを再刻せり、

助字考二卷

名物六帖三十二卷

此書の解題は委しく番外雜書解題卷之十一に見ゆ

帝王譜略五卷 寫本

甘雨亭叢書中に帝王譜畧國朝記一卷を收載す、卷數同じからざるも蓋し同一の書ならん

和漢官制一卷 寫本

本朝官制沿革圖考六卷寫本
三朝紀畧二卷寫本
朝鮮官職考一卷
釋親考二卷
唐官鈔三卷
古今敎法沿革圖一舖
唐官品圖一舖
明官制圖一舖
歷代官制沿革圖考一卷
春秋胡傳辨疑二卷寫本

此書隱桓二公に止り完備せず、東所の序文あり、

右總計五十三部二百四十二卷及び圖三舖、

東涯の著書中學說に關するものは、辨疑錄、古學指要、古今學變、學問關鍵、經史博論、經史論苑、天命或問、復性辨、訓幼字義、閒居筆錄、東涯漫筆、及

び紹述先生詩文集、紹述遺稿等なり、其他は唯〻參考に供すべきのみ、語錄としては閒居筆錄最も好し、學者幸に之れを輕忽にすること勿れ、



第三　學説

東涯は父師仁齋の爲めに思想を桎梏せられ、毫も自家の創見を立つることを能はず、道學に關する著書、十有餘種ありと雖も、仁齋の學説以外に異彩を放つもの一もあるなし、眞理は父師よりも貴し、父師の爲めに眞理を犧牲にすべきにあらず、然れども東涯の溫厚にして謙讓なる、父師の學説に逆ふこと能はず、終身諄々として唯〻父師の學説を紹述するのみ、ジョン、スチュアルト、ミルのゼームス、ミルに於けるが如く、父説を批評するの勇氣を有せざるなり、要するに、東涯は徹頭徹尾仁齋の學説を尊崇するものなり、辨疑錄卷之四の末に云く、

先子、寛永の丁卯に生まれて、寶永の乙酉に終はる、初め河南考亭の微旨を窮め、兼ねて靑田新建の奧義に參す、直に洙泗に泝り、恍然獨得、未だ强ならずして敎導し、靑衿麕至す、論孟を註するは、古義あり、中庸を解するは、發揮あり、其義解を總ぶるは、語孟字義あり、其受用を詳にす

るは、童子問あり顯を微にし幽を闡にし、大義粲然たり長胤日に親聞に侍し、其提誨に飫き、千聞一得、僅に大義を了す、趙括の父の書を讀むに倣ふと雖も、竟に揚烏の玄文に與るに愧づ、今音容日に邈かに、微言淪り易し、尙くば遺旨を奉承して敢て失墜せざらんことを、

東涯が父師の學說を崇奉する所以の情、敍し得て甚だ明瞭なりといふべし、東涯學規あり云く、

言、忠信、行、篤敬、善を爲すは人に取り、過を改むるは吝ならず、信せざるを億せず、人の詐を逆へず、名の爲めに勤めず、利の爲めに謀らず、譽を聞いて妄に喜ぶこと勿れ、毀を聞いて妄に怒ること勿れ、人の已れを欺くを咎むること勿れ、人の己れを慢るを怨むこと勿れ、己れの人に恩あるを記せざれ、人の己れに德あるを忘れざれ、入りては孝、出でゝは弟、弟子の職備はる、仁に居り義に由る、大人の事全し、

是れ東涯が古人の言句を集めて作る所なり、又自警あり云く、

天地の間、至りて得がたきものは人なり、而して既に人たるを得、至り

て遇ひがたきものは明師良友なり、而して亦之れに遇ふを得、二大幸を厥身に得たり、此時にして居諸を荏苒し、耽樂之れ從ふときは、則ち自ら天を絕ちて禽獸瓦礫たることを甘んずるものなり、此に人あらんに、之れに告げて汝は禽獸なり瓦礫なりといはゞ怫然として怒り、悍然として罵りて以て妄人となさゞるはなきなり、然るに今の學をなすものを觀るに、耳目口鼻、心知百骸、固に人の如きなり、飲食嗜欲儀貌言譚、亦人の如きなり、一旦灰消露盡するときは、骨肉未だ土中に化せずして、姓名先づ世間に沒す、此に至りて之れを禽獸なり瓦礫なりといふも、其れ誰れか信ぜざらん、噫、天地の貴きを得て、萬物の靈となり、一念の差謬つて此に至る、吾れ此等の人の爲めに其人たるを悼む、又或は其名の後に傳はらざるを恐れて、務めて書を著はし、文を作りて以て自ら表見す、亦謬まらずや、顏子陋巷に居り、未だ嘗て一辭を著はさずして、其名百世の下に彰はる、揚王韓歐、古を擬し、言を立つ、其書、屋に滿ちて正論亦與らざる所、名の傳ふると否とは、其れ豈に特に言

を立つるに係らんや、名を揚げんと欲して文を作る、吾れ其文を悲む、善いかな、周子の曰く、聖人の道、耳に入りて心に存し、之れを蘊へて德行となし、之れを行ふて事業となす、彼の文辭のみを以てするものは陋し、是れ乃ち不言の言、不文の文、萬世に楷して悠久を天地に同うするものなり、冀くは身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて以て父母を顯はし、天地の貴きを貴しとし、萬物の靈を靈として、死禽獸たることを免れん、此れ吾平生の志なり、諸れを座側に書して以て紘章に代ふ、

東涯又十箴を作りて自ら律することを務む、即ち左の如し、

(一)朋を擇ぶこと必ず精うして、少しも惡を習ふこと勿れ、

(二)學術必ず實にして少しも浮靡なること勿れ、

(三)莊敬必ず肅み、少しも愉惰なること勿れ、

(四)言語必ず愼み、少しも暴慢なること勿れ、

(五)孝慈必ず勤め、少しも忽略すること勿れ、

(六)競惕(競は兢の誤ならんか)必ず勵み、少しも晷を費やすこと勿れ、
(七)疾病必ず謹み、少しも體を傷ふこと勿れ、
(八)義を見て必ず遷り、少しも猶豫すること勿れ、
(九)富貴必ず輕んじて、少しも慕羨すること勿れ、
(十)貧賤必ず安んじて、少しも憂戚すること勿れ、

是れ彼れが實行せし所にして、如何なる學者にも適切なる訓戒なり、以て十善となすべく、又以て十戒となすべし、東涯又筆記あり云く、

一時の毀譽は信ずべからざるなり、萬世の褒貶は欺くべからざるなり、衆人の好惡は恃むべからざるなり、君子の是非は罔ふべからざるなり、故に事之れを久遠に驗して違はず、之れを君子に質して謬らず、而して後以て其實を知るべきのみ、是を以て一時以て是となさずと雖も萬世以て是となすものは、隱德の君子なり、一時以て非となさずと雖も萬世以て非となすものは、名を衒ふの小人なり、小人は一時に伸びて、萬世に屈す、君子は一時に屈して萬世に信ぶ、是れ名の初め恃

むべからずして實の遂に滅すべからざるなり、此の如きの君子、身を修め、道を行ひ、操を勵み、節を高うす、豈に一時の毀譽と衆人の好惡とを顧みんや、唯、君子の是非と萬世の褒貶とを恃むのみ、

凡そ東涯の言にして傾聽すべきは多く是等實行に關する訓戒のみ、一家獨得の學說としては一も紹介すべきものなし、然れども東涯本と品性高き人にして、訓戒を實行の餘に發せり、故に世の學者を啓發するに足るもの少しとせず、今左に最も適切なる格言を列擧せん、

一

道を學ぶものは、要、其本を知るにあり、本とは何ぞ、當人職分の當に屬すべき所の事なり、

二

一善微なりと雖も、日に養ふて害せざれば、遂に其德を成す、一惡小なりと雖も、日に長じて除かざれば、遂に其身を喪ふ、

三

苟も善あれば當に謙讓して以て之れを晦うすべし豈に之れを誇揚すべけんや其之れを誇揚するは乃ち其善を喪ふ所以なり

四

所謂善とは顯然事に著はれて後之れを善といふにあらざるなり一言一行の微と雖も亦善あらずといふことなし故に聖人必ず勉を此に加ふ人其顯然たるものに於ては猶ほ或は能く之れを勉めて言行の微に至りては却て忽にして察せず此れ善の卒に進まざる所以なり所謂惡とは亦的然として行に發して後之れを惡といふにあらざるなり一動一作の末と雖も亦惡あらずといふことなし故に聖人必ず愼を此に致す人其的然たるものに於ては猶ほ或は能く之れを愼み動作の末に至りては却て輕んじて省みず此れ惡の卒に除かざる所以なり

五

利苟も就くべからず害苟も避くべからず故に其道を以てせざれば

千駟の富も受けざる所あらん苟も其道を以てすれば斧鑕の慘も辭せざる所あらん、

六

無益の事をなさゞるときは學進む無用の事を談ぜざるときは德成る今の人終日爲す所言ふ所總べて禮義に及ばず其有益の事を爲し有用の事を談ずるもの亦鮮し學の進まざる德の成らざる職として此れに由る愼むべきかな、

七

人の是非は知り易うして己れの短長は見がたし人の常情なり然れども吾れ平生自家身上の事を熟察するに其是非得失瞭然として見やすし而して人の邪正美惡に至りては或は辨じ難きものあり故に吾れ以爲く己れの是非長短を知るは易し但其己れが短を知ると雖も之れを革むること能はず己れが長を知ると雖も之れを成すこと能はず是なるもの或は厭ふて之れを棄て非なるもの或は忍んで之

れに從ふ是れ其良心の少しく發して之れを擴むること能はざるものにして學者の當に警省すべき所なり、

八

譽望を求め聞達を務むるは聖人の戒むる所然れども君子は終身名の稱せられざるを惡む故に名を好むの弊之れを中人以上に責むべし之れを中人以下に責むべからず中人以下は名聞を以て之れを勵まして可なり、

九

學を爲すの要三あり志なり勤めなり好みなり徒に之れを勤むと雖も好むにあらざれば以て進むことなし徒に之れを好むと雖も志にあらざれば以て遂ぐることなし徒に志ありと雖も苟も其正路を得ざるときは以て成すことなし或は志ありて學進まざるものは其志小なるのみ然らざれば未だ其正路を得ざるのみ苟も志す所大にして且つ其正路を得るときは至らざる所なきなり、

十

凡そ書を讀むに、流覽十過は熟覽一過に如かず、十書を流覽するは、一書を熟覽するに如かず、

十一

才美なるときは能を恃むの疾、防がざるべからず、學博きときは、外馳の患、備へざるべからず

十二

人身を離れて道を求む、道にあらざるなり、道固より人を離れず、己れが心を師として道を求む、亦道あらざるなり、心或は道に違ふ、己れが心を以て道を求め、躬ら之れを實踐す、其れ庶からんか、

十三

法に詳にして情に惜み、名を貴んで實を遺る、義勝ちて仁薄し、此れ學の末失なり、後世の弊專ら此にあり、

十四

天下の是非、掩ふべからざるなり、強辨以て之れを執し、偏執以て之れを禦ぐ、徒に以て衆口を塞ぐべし、而して以て衆心を服すべからず、衆心既に服すべからざれば、衆口亦何ぞ以て塞ぐべけん、曷ぞ天下の是非を定むるに足らん、

十五

天下名に徇ふるの弊あり而して是非淆る、名未だ必ずしも實に副はず、天下實を務むるの効あり而して是非定まる、實あれば名傳ふ、人其れ實を尚ばざるべけんや、

十六

學其方を得れば、事に應じ物に接し、各其當を得、自ら益し人を益すること、以て尚ふるなし、苟も少しく其方に乖けば、則ち唯益なきのみならず、往々害を貽す、或は智を衒ひ才を負ふの具となり、或は偏狭忌克の弊を長ず、學ばざるの愈れりとなすに如かざるなり、人其れ學ばざるべけんや、學其れ謬ふ所を知らざるべけんや、

十七

人の惡を知るは易く、人の善を知るは難し、人の惡を知るは、譬へば高きに據りて以て深きに臨むが如く、纖悉辨ずべし、人の善を知るは、譬へば下きに居りて以て上を仰ぐが如く、眼力及び難し、唯道德、事業、然り、となすのみならず、人の詩、文、字、畫を見るも、亦然り、地位高うして眼力明かなるにあらざれば、古人の及ぶべからざるを識ること能はず、矮人觀場、誰れか眞知を會せん、

以上列擧する格言の外東涯の見解として、多少顧慮すべきものなきにあらず、東涯漫筆卷之下に云く、

人、行義を修め、生產を治め、身體を保つ、此三者は人道の立つ所以にして、最も先づ講究せざるべからざる所のものなり、云云、

蓋し其行義を修むるは、道德なり、生產を治むるは、經濟なり、身躰を保つは衛生なり、道德と經濟と衛生と、此三者は如何なる人も萬事に先ちて之れを了解するの必要あること、東涯の言の如し、東涯又閒居筆錄卷之

下の末に心身の關係を論じて曰く、

心血肉と相待ちて以て生あり、猶ほ匏竹相闘んで聲出づるがごとし、之れを破れば啞、石火相戛して火發す、之れを離るれば已む、人の一身、四肢百骸完具缺くるなく、飲食其養を失はず、血氣其平を失はず、陰陽其和を失はず而して後、心靈能く明なり、苟も躰飢ゑ氣乏しければ、心之れが爲めに病む、況や肢躰變滅し、骨肉消散す、心何の寓する所あらんや、且つ初生の小兒能く活動し難く、未だ知識あらず、膚革日に光ありて、而して精神日に靈なり、其壯長なるに及んでや形軀壯實なれば、智慮隨つて長ず、其老ゆるや鬚眉皓白なり、筋力枯瘁すれば、精爽亦荒廢す、斯身變滅の後、斯心亦從つて變滅することを知るべきのみ、故に心血肉と相待ちて以て生ず、血肉ありて而して後、心あり、心ありて而して後血肉あるにあらざるなり、

東涯の此論は唯物論者の主張する所と全く同一轍に出づ、ビユヒテル氏の如きは、其著「勢力と物質」Kraft und Stoff の中に心身の關係を論じて曰

く、

悟性が歳と共に始めて生じ、又歳と共に滅ずといふことは何人にも等しく適中せり、是れ衆の知る所なり、云云、若し幾多の人が思惟する如く精神が身躰を離れて獨立せるものならば、精神力は、身躰が溶解せんとするに從つて全く其れと反對に愈〻增大せざるべからざるなり、

其他ベイン、カルペンター、ラッド等の心理學者は皆心身の關係を論じ、其相互に離るべからざるものあるを論證せり、東涯の論旨、未だ精細ならずと雖も、其心身の關係、必然的にして且つ肉躰の健康即ち心靈の根柢なりとする處、Mens sana in corpore sano（健全なる精神は健全なる身躰に宿る）の意を道破するものにて、頗る趣味ありといふべきなり、

東涯曾て天命或問を著はして宋儒の説に反對せり、宋儒、天命中に就いて理氣の兩者を分ち、理の命と氣の命とありとせり、理の命とは天地の天地たる所以、人の人たる所以、物の物たる所以にして、或は無極の眞と

いひ、本然の性といひ、處に從つて名を異にす、皆理の命なり、其所謂氣の命とは、亦二種あり、一は吉凶禍福貧富壽夭値ふ所の同じからざるもの、一は是れ智愚賢不肖、稟くる所の同じからざるもの、猶ほ本然氣質あるがごとし、然るに東涯以爲く、凡そ聖人命をいふもの、唯氣の命にして、理の命にあらずと、尙ほ又其氣の命も、宋儒の所謂氣の命と同じからざるを辨じて曰く、

宋儒の云ふ所の氣命は兩般あり、一は是れ吉凶禍福、智愚賢不肖、然れども聖人云ふ所の命は氣の中に就いて亦專ら吉凶禍福上に就いて言をなす、而して未だ嘗て智愚賢不肖上に就いて說かず、何んとなれば、聖人云ふ所の命は、皆是れ今日相値ふ上に就いて言を立つ、而して未だ嘗て最初稟受する處に溯りて之を言はざるなり、

東涯の此論、仁齋に本づくと雖も、亦更に一步を進めたりといふべし、彼れ又復性辨三篇を著はして、大に復性說の非なるを論破せり、其言に云く、

聖人の人を敎ふる其方固より一端にあらず然れども皆漸次積累して以て其大を成すにあらざるはなきなり云云唯佛老氏の學其說一端にあらず然れども其初めに反るを以て說をなさゞるなし故に老氏仁義を絕ち禮樂を廢して以て其無に反らんと欲し佛氏欲を絕ち妄を息め輪廻を超脫し其所謂本覺眞如といふものを證して以て佛地に到らんと欲す還滅と說き歸眞と說く所以なり後世儒者の道とする所に至りては倫理綱常に居るを重しとなし禮樂刑政を大なりとなし固より已に彼の二氏の以て道とするに足らざるを斥く然れども其工夫物欲を去り氣質を變じ以て其初めに復らんと欲す則ち其道とする所異なりと雖も而も其手段未だ嘗て同じからずんばあらざるなり然れども凡そ天下有生の物皆必ず其本ありて小を積み大に至り微を充て顯に至る未だ嘗て其初めに復りて以て成す者はあらざるなり唯一定の物明鏡の如く止水の如きは其蔽を去り以て其初めに復るにあり故に活物の漸く長ずるや唯流水萠蘖を然りと

するのみならず、凡そ人の事をなすも亦然らずといふことなし、唯人の事をなすを然りとするのみならず、人の道に進むを然りとなす、聖人の德亦然らずといふことなし、夫子十有五にして學に志し、七十に至りて、然して後始めて曰く「心の欲する所に從へども矩を踰えず」と、聖人の資固より常人に異なりと雖も、而も年愈高く德愈邵く、人知之に及ばずして、而して己れ獨り之れを知るものあり、若し其性の初めに復らんか、則ち七十矩を踰えざるの盛既に嬉戲俎豆の時に全し、生知安行の資、其れ將た何の拘蔽する所ありて、七十に至りて、然して後始めて矩を踰えずといはんや、聖人の德と雖も必ず漸積して以て其盛を極むるを見るべきなり、古より偉人傑士德を成し材を達し、萬世の爲めに道を稱する所以のもの、亦皆工夫積累して、以て其成るに底る、其初生の辰を原ぬれば、則ち其蘊蓄する所、曾て許多の事業なし、而して之れを天下の事に試みるに、凡そ技術藝業、其神と稱し、妙と稱し、能く其極に造るものも、亦工夫を積累して、然して後能く其道を成すこ

とを得、其生の初めを問へば、則ち許多の知識なし、故に人の恒に言ふにも亦學進むといふて、未だ甞て學復るといふものあらざるなり、

又云く、

聖人の性を言ふ、充養の方ありて、復初の説なし、復を以て性を說くは、宋より以下なり、漢唐の諸儒、其説明ならずと雖も、悉く古義に遵依して、甚だ失あらざるなり、唐の中葉、李翺、字は習之、復性書三篇を著はす儒者の復性を言ふ、此れよりして始まる、宋の程朱氏に至るに及んで、專ら復性を說く、其意に以爲く、人性は即ち理、理は本と善、生來具足し敎法を待たずして虧缺する所なし、堯舜より塗人に至るまで一なり、但中間氣禀の爲めに前に拘はれ、物欲に後に蔽はれて、而して原始受くる所の理、爲めに蔽蝕せられて、聖人と大に異なるに至る、故に今日學問受用、專ら其中間蝕する所の物欲を決し去りて、以て其本初の躰に反ることを要す、猶ほ鑑の明や、塵垢の爲めに掩はれて、其明を失ふ、其塵垢を磨けば、則ち舊によりて瑩徹、月の光や、雲霧の爲めに掩はれ

て、其光を失ふ、其雲霧を撥ぐれば、則ち舊によりて清朗なるがごとし、此れ復性說の興る所以なり、今其義を審にするに、凡そ復といふは、物其本を失して初めに反るの謂なり、故に日月の蝕、明に復るを復といひ、疾の愈るも、亦復といふ、若し天下の人をして、其初め皆其聖人の德を全うして、後來始めて之れを失せしめば、固より其性の初めに復りて可なり、然れども其胎より地に墮つるの時を原ぬるに、呱々として啼き、蠢々として動き、是非を知らず、好惡を辨せず、父母兄長を識らざるに及ぶ、若し其性の初めに復らんと欲せんが、固より惡の除くべきなく、亦善の長すべきなし、惟其蠢々の中、以て善となすべきの本具はる、故に其稍長ずるや、是非を分ち、好惡を辨じ、父母を見れば之れに親むを知り、兄長を見れば、之れを敬するを知る、此れ人性の善となりて、物の能く及ぶ所にあらざる所以なり、聖賢となるべきの本、此に胚胎す、所謂良知良能是れなり、苟も以て之れを養ふあれば、則ち以て仁義禮智を成すべし、然らざれば仁義禮智の德を成すべきの本ありと雖

も仁義禮智の德を成すこと能はず故に聖人人をして其四端の本心に就き擴めて之れを充て其忍ばざる所を以て之れを其忍ぶ所に推し其爲さゞる所を以て之れを其爲す所に推し以て其德を成すことを得せしむ云云譬へば一顆の松子あり發生の時に方りて之れを腴壤に蒔けば不日にして孚甲折き莖葉抽く日月以て之を烜し雨露以て之れを潤し日に長じ年に茂して以て千尋の喬木となすべし今夫れ萌蘗の生を觀て千尋の喬木たるべしといはゞ可なり之れを即ち千尋の喬木といふは可ならんや四端の心は萌蘗の生なり仁義の德は千尋の喬木なり將に四端の心を以て性の發となして仁義を其初めに求めんとす則ち何を以てか千尋の形を未だ芽ざゞるの先きに求むるに異ならんや

東涯の此論大に好し修德の工夫として本來の性に復るより寧ろ現在有する所の善なるものを發展し進んで理想を實現するを期するに若くはなし本來の性に復るは即ち退步的の工夫にして寂靜主義に陷る

を免れず、進んで理想を實現するを期するは、即ち進歩的の工夫にして、活氣倏々として、天地不斷の進運と合するを得る所以なり、東涯經史論苑の中に品士の四款を擧ぐ、蓋し品性ある人物の具有する四種の狀件なり、四款は第一に才料、第二に行義、第三に學識、第四に心術、是れなり、又續大學辨一篇あり、是れ彼れが仁齋の大學は孔氏の遺書にあらずといふ說を助成せるものなり、其論の要點は仁義禮樂の四者は治具の大なるものにして、先王の道を總括するに足るものなるに、大學は之れを說かずして、反りて格致正誠を說く、是れ蓋し孔氏を學んで其統を得ず、自ら其見る所を叙して、之れを萬乘の君に進めんと欲するものなりといふにあり、東涯鬼神に就いて其宋儒と異なるを辨明せり、彼れ必ずしも鬼神を否定せずと雖も、深く之れを究明するの要を認容せず、蓋し鬼神を敬して之れを遠ざくとの意に出づるか、經史博論卷四に鬼神論上下二篇あり、其論旨を考ふるに、古の所謂鬼神は天地、祖宗の靈を指して言ふものにして、今の人の所謂鬼神と異ならず、獨り宋儒別に萬物の鬼神

を説き出だす、是に於て鬼神に三あり、即ち天地山川の鬼神、祖宗の鬼神、萬物の鬼神、是れなり、其萬物の鬼神の如きは、聖人の所謂鬼神にあらざるなりと、最後に、

鬼神を有無に窮めざるは、此れ善く鬼神を窮むるものなり、

といひて、鬼神の事は、唯傳說に從ふのみにて、強ひて抽象的の探究を試みざるなり、又閑居筆錄の卷末に

鬼能く人を惑はすにあらざるなり、人自ら鬼に惑はざる、邪說能く人を移すにあらざるなり、人自ら邪說に移さる、云云、幽明の故、死生の際に於て、枉げて工夫を費やし、必ず之れを識らんことを求む、是に於て鬼に惑はされ、邪說に移されて、自ら知らず、

と云へり、是れ亦同一の旨意を述ぶるものにて、其平生考察する所の日常彝倫の外に出でざるを知るべきなり、

第四　門人

奥田三角、名は士亨、字は嘉甫、小字は宗四郎、三角亭と號す、因りて畧して三角といふ、又蘭汀と號し、南山と號す、伊勢櫛田の人、三角幼時柴田蘋洲に就いて學ぶ、蘋洲嘗て謂ふて曰く、

書を讀まば宜しく天下第一の人を師とすべし、今の世に當りて京師の伊藤原藏即ち其人なり、汝往いて學ぶべし、

と、是に於て三角笈を負ふて東涯の門に遊び、從學すること十年、殆んど其室に入る、乃ち擢んでられて津侯に仕ふ、三角性剛直、物に屈すること能はず、而して孝友純至、享保二十年三角三十三にして父を喪ひ、翌年東涯に訣る、乃ち爲めに酒肉を絶ち、心喪を服するもの、合せて四年、三角年七十七にして身後人の誄墓の文を撰ばんことを恐れ、乃ち壽碣を建て、自ら履歴を紀す、其銘に云く、

起于田間、升中廳直、何以得之、稽古之力、

三角年八十一にして卒す、著はす所三角集五卷あり、其自ら三角と號するは、盈を虧くの戒を存するの意に出づ、三角亭記に「竊思、三角之爲物、則方之半矣、缺盈之戒、無以加焉」と云へるを以て知るべし、後偏に物の三角を好み、文房諸具より、百の雜器に至るまで、多く制するに三角を以てすといふ、三角の事蹟は先哲叢談卷之八、近世叢語卷之一及び續近世畸人傳卷之二に見ゆ、

青木昆陽、名は敦書、字は厚甫、小字は文藏、昆陽と號す、武藏の人、幕府に仕ふ、昆陽本と東涯の門に出づと雖も、其學一に有用に志し、經義に於ては必ずしも究思せず、故に堀川の徒に類せざる者の如し、然れども始めより他師あるに非ず、昆陽は嘗て蕃薯（卽ち甘藷）を本土に傳播したるもの、故に甘諸先生の名を博せり、彼れは亦始めて蘭學を講ぜり、昆陽の時に當り、未だ蘭學を講ずるものあらず、昆陽獨り以爲く、其說に於て必ず收用すべきもののあらんと、乃ち長崎に之いて譯者に質し、或は博く其書に考へ、遂に粗〻了解するを得たり、明和六年を以て歿す、年七

十二、昆陽の事蹟は先哲叢談卷之八、蘭學事始上之卷、名人忌辰錄下卷等に見ゆ、

澤村琴所、名は維顯、字は伯陽、近江の人、年十四にして彥根侯に仕へ、侯に從つて江戶にあること三年、會〻心疾に罹る、乃ち仕を致して歸る、時に藩制あり、凡そ心疾あるもの、籍を削られて、再び仕ふるを得ず、是に於て思を官途に絕ち、京師に遊學し、宋學を硏究して歸り、門を閉ち客を謝して、力學すること凡そ七八年、旣にして復た京師に赴き遂に東涯に從つて學び、業を受くること一年にして歸り、此れより宋學を捨て、古學に左袒す、後、物徂徠の書を得て、之れを讀むに及び、更に又一變して其說を崇奉せり、琴所平生淨潔を好み、內行修淸、其妻を喪ふてより、遂に淫欲を絕し、居室の淸肅なること、僧廬の如し、又慈善を好み、凡そ貧困のものあるに遇へば、家の有無をも顧みずして之れに施與せり、嘗て自ら曰く「吾れ固より一の善狀もなし、唯〻貨色の二者にありては、未だ人に對して言ひ難きもののあらざるなり」と、琴所容貌孱弱にし

て婦人の如かりしと雖も、內剛にして膽畧ありしといふ、彼れ元文四年を以て歿す、年五十四、琴所の事蹟は先哲叢談後編巻之四、近世叢語巻之四、近世畸人傳巻之四、事實文編巻□及び鑑定便覽巻下に見ゆ、

山田麟嶼、名は正朝、一の名は弘嗣、字は大佐、麟嶼は其號なり、又尙古堂と號す、姓は菅氏、菅公の苗裔なりといふ、幕府の侍醫正芳の子なり、麟嶼生れて警悟、嬉戲を好まず、僅に六歲にして能く國字の書冊を讀み、又和歌を賦す、七歲にして四書五經の句讀を父に受け、是れよりして後、復た課督を煩はすを須ひず、日夜自ら誦讀して經史を研究す、彼れが「賜出身上牋」の中に言へるあり云く、

臣が父亦其性とする所を聽し、責むるに本業を以てせず、藏する所の外、歲に幾箱の巻帙を致し、以て之れを給す、臣因りて力を讀誦に專にするを得たり、

麟嶼此の如くにして早熟の徵を露はせり、父の正芳彼れをして物徂徠に就いて業を受けしむ、彼れ乃ち古文辭を學び、又華音を學び、旁ら

業律に及ぶ、其才學の卓絶せる、優に人目を眩するに足る、是に於てか神童の名、藉々として起る、彼れは水足博泉と共に當時の怪異兒Wunderkindにして、今の奇童田村巖の類なり、物徂徠が彼れを千里の駒と稱し、室鳩巢が彼れを天下第一の才子と稱せるもの以なきにあらざるなり、鱗嶼年十四にして暇を請ひ、京師に遊び、東涯に學ぶ、徂徠之れを送るの詩二首あり、云く、

五十三驛莫言難、處々山川秋好看、明日先從函嶺望、如絲大道達長安、
揮鞭意氣愜秋涼、才子奉恩遊洛陽、但到西山紅葉好、錦衣相映早歸鄕、

太宰春臺は鱗嶼が堀川に趣くを快しとせず、乃ち七古一篇を賦して之れを送る、云く、

田郎妙齡好遠遊、一旦辭師西入周、天邊月落函關曉、雲際星流渤海秋、
周道如砥任奔走、那知古人骨已朽、到日試問桂下官、往時老聃今在否、

東涯如上の詩を一見し且つ笑ふて曰く、「物先生襟度郭如、可想見、太宰子亦慷慨有氣節」と、鱗嶼京師にある、閱歲、俄にして父の病を聞いて歸

る、然れども猶ほ東涯と書牘を往來し、疑義を質問す、東涯彼れが進修の怠らざるを視て屢〻許すに李賀王勃の流を以てせりといふ、然れども麟嶼素より多病にして、痛く雷を畏れ、又霜雪を畏る、殊に家に還りてより更に末疾を得て門を出づること能はず、却掃して古を誦するもの十年所、享保二十年痘を病んで歿す、享年二十四、東涯其墓碣銘を作る、又其事蹟は先哲叢談後編巻之四及び近世叢語巻之五に見ゆ、春臺文集巻十三に麟嶼に與ふる書二篇あり、亦併せて見るべし、

安原霖寰、名は貞平、字は伯亭、信州の人、

垣内熊岳、名は文徽、字は鼎輔、紀州の人、寶暦年中に歿す、年四十一、

原雙桂、名は瑜、字は公瑤、平安の人、後に出だす、

朝枝玖珂、名は世美、字は德濟、小字は善四郎、玖珂は其號なり、姓は朝枝氏、自ら修して晁氏とす、防州吉川侯の儒臣たり、能く華音に通じ、小説を解す、

谷麋山、名は鸞、字は子祥、小字は左仲、阿波の人、

穗積能改齋、名は以貫、字は以助、播州の人、大阪に教授す、著はす所、經學要字箋三卷あり、

陶山南濤、名は晃、尙善と稱す、姓は陶山氏、自ら修して陶となす、土佐の人、初め宮津侯に仕へ、後、京師又は浪華に隱る、

廣瀨一峯、名は麟、字は士瑞、通稱は才一郎、其何處の人なるやを知らず、後、專ら老莊の學を唱ふ、一峯家極めて貧にして糧絕え油竭くることあるも、毫も意に介せず、生涯潔居して妻妾を畜へず、客あり來り訪ふて、談話時を移せども、彼れ午餐を喫せず、乃ち怪んで之を問へば、彼れ笑つて掌を撫で「米なきが故に食はず」と答ふ、客驚いて曰く、「然らば余米を餽らん、幸に宮崎筠圃が書を得て之れを賜はれ」と、乃ち歸りて米を餽る、一峯筠圃が墨竹の書を貰ひ、此れに由りて二年の糧を得たりといふ、彼れ又嘗て梅道人の書を見て頻りに之れを渴望し、漸くにして買ひ得て之れを東涯に示す、東涯之れを見て大に歎美す、乃ち之れを東涯に與ふ、或は其意を問ふ、曰く、「夫れ得んと欲するの心は人我一な

り。」と、其事蹟は續畸人傳卷之三に見ゆ、

松波酊齋、名は光興、字は發、(?)通稱は播磨守、平安の人、

三谷南川、名は良朴、字は宗鎭、通稱は丹下、茶方を千宗易に學んで、其名一時に高し、藝州侯に仕ふ、寛保元年を以て歿す、年七十七、

原東岳、名は直、字は溫夫、豐後の人、後に出だす、

宮崎筠圃、名は奇、字は子常、通稱は常之進、尾州海西郡の人、京師に住す、初め東涯に學び、東涯歿して後、蘭嵎に從ふ、元文四年父を喪ふてより菜粥僅に給して、貧益〻甚し、其母之れを戒めて曰く「窮しては當に益〻堅かるべし、遺命誤るゝ勿れ」と、筠圃是に於て益〻力を經史に用ひ、詩及び書畫を善くし、最も畫竹を以て名あり、人となり篤厚、親に仕へて孝なり、安永三年を以て歿す、年五十八、其事蹟は近世畸人傳卷之一及び近世叢語卷之一に見ゆ、

木村鳳梧、名は之漸、字は源進、鳳梧は其號なり、又兼山と號す、近江の人、紀州侯の文學たり、明和九年を以て歿す、年七十六、其事蹟は續近世叢語

卷之三に見ゆ、

安藤仕學齋、名は守經安藤省菴の孫、著はす所仕學齋文集十卷あり、

高養浩、名は志、養浩は其字なり、號は未だ詳ならず、泉州堺の人、初め東涯に學び、後、一家言を成す、著はす所時學鍼焫二卷あり、

松崎白圭、名は堯臣、字は子允、通稱は左吉、江戸の人、少うして中野撝謙に從ひ、宋學を修め、後、京師に之いて東涯に師事し、又江戸にありては、屢〻物徂徠に接し、既にして陽明學を喜び、後其非を悟り、「正言」を著はして、一家言を成せり、寶曆三年江戸に歿す、年七十二、其事蹟は先哲叢談續編卷之七及び近世叢語卷之五に見ゆ、

儒學源流には倉成龍渚を以て東涯門人とすれども、是れ大なる誤見なり、龍渚は東涯死後二十五年にして始めて京師に遊び、伊藤氏に學びたるものなるが故に其師事せしは東所なること疑なし、日本儒學派略系(東洋哲學第九號乃至第十一號)反りて信憑すべきもの多きを知るべきなり、

第五　東涯關係書類

閑散餘錄（卷之下）南川維遷著
學問源流　那波魯堂著
文會雜記　湯淺常山著
先哲叢談（卷之四）原　念齋著
近世叢語（卷之四）角田九華著
先哲像傳（卷二）原　德齋著
鑑定便覽（卷下）
名家全書（卷一）
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄（上）
衆香公記
秦武卿聞書

授業編〔卷之十〕江邨北海著

儒學源流

名家手簡〔初集〕

番外雜書解題〔卷之十一〕

日本詩史〔卷之三〕江邨北海著

東海談上編 平 維章著

九經談〔卷之一〕太田錦城著

時學鍼焫〔下〕高 養浩著

東涯伊藤先生傳 板倉勝明撰

　甘雨亭叢書に收載せる帝王譜略國朝記の首めにあり。

紹述先生伊藤君碣銘 藤原常雅撰

　紹述先生文集の首めにあり、

日本名家人名詳傳〔上之卷〕

近世大儒列傳〔上卷〕內藤燦聚著

日本諸家人物誌

古今諸家人物誌

伊藤東涯（一卷）竹内水哉著

野史（卷二百五十七）

名儒傳寫本〇著者未詳

藝苑叢話（卷上）山縣篤藏著

日本史料原稿（櫻町天皇記）

大日本人名辭書

古義堂遺書總目敍釋（一卷）伊藤東所著

近世德育史傳足立栗園著

日本倫理史稿湯本武比古、石川岩吉共編



第四章　並河天民

第一　事蹟

仁齋門人中最も特色あるものを天民となす、天民名は亮、字は簡亮、諡して天民といふ、京師の人、其先、丹波の桑田に出づ、儉齋の子にして兄弟あり、兄を永といひ、（仁齋門人の條に詳なり）弟を古八といふ、天民は其中子なり、東涯曰く、

並河氏三子皆吾父の門に及ぶ、其伯氏既に官して東武にあり、仲氏亦材あり、動もすれば古の人を稱す、季年今冠に踰ゆ、材敏にして、實に家計に迫る、將に伯氏に東に就かんとす、其好みにあらざるなり（送並河古八序）

天民少壯にして兄誠所と倶に仁齋に學び、盡く其説を究む、然れども其仁義性情の説に於て疑ふ所なきこと能はず、是に於て奮然憤を發し、日夜研究して、孔孟の正旨を自得せんと欲し、之れを應事接物の際に察し、

之れを起居語默の時に觀、身を以て之れを躰し、心を以て之れを驗し、實に就いて商量して始めて一家の見を立て、仁齋が學說の誤謬を指摘し、更に之れが補正をなすを得たり、天民曾て叔父信齋と共に仁齋を訪ひ、談、性理に及ぶ、天民乃ち質すに其見る所の心情性三名唯一の旨を以てす、問答數回にして、仁齋默然たり、稍々久うして歎じて曰く、

豪傑の士の待つ所なうして興起するものにあらずんば、此に與ることと能はず、吾子は誠の間出の才なり、吾れ當に字義を改むべきのみ、

天民遂に其獨り得る所を唱へて一時に振ふ、仁齋歿後、堀川の徒、分れて二派となり、一半は東涯に從ひ、一半は天民に從へりといふ、天民享保三年疾を以て歿す、年僅に四十(一說に三十九)早逝といふべし、彼れ、年壯なるに及んで父儉齋母永田氏の憂に丁る、喪を服すること通じて六年、故に遂に仕官の機なく、貧困を以て終はれり、彼れ曾て門人に謂つて曰く、

凡そ天下の事、皆名を以て實を責む、故に名、愼まずんばあるべからず、吾れ經典を講ずと雖も、村夫子の稱を得ることを欲せず、若し名榜を

揭げば、吾れは天民といふものならんか、

是を以て門人諡して天民といへり、天民天資聰明、志氣豪邁にして果決才を負ふ、東涯曾て天民を評して曰く、

簡亮誠に才あり、然れども以て六尺の孤を託すべからず、

他日天民之れを聞いて曰く、

東涯實に吾れを知る、吾之れを人に奪ふ、未だ自ら知るべからざるなり、人の爲めに奪はるゝに至りては決して之れなし、東涯は之れに反す、

此れに由りて之れを觀れば、天民は中々に迂濶ならざる所ありしなり、

畸人傳卷之五に天民が事を記して云く、

或る時門人集まりて先生もし志を得たまはゞ、吾れは何にかつかひ給はんなどとり〴〵いへる時に、一人吾れごときものは物の用に立つべからず、唯倉廩を守るに於ては、一粒米をも掠むべからずといふ、天民、子が如き人にいかで倉廩を守らすべきといひければ、其人色を

かへて、こは情なき仰や、盗むべきものとや思召といへれば、先生笑ひて、否、自ら盗む才ある人には托すべし、子は人に盜まるべき人なりといへり、

愈、以て彼れが世事人情に通ぜしものなるを知るべし、天民が文、義理明快にして論旨透徹せり、彼れ又國文の心得もありき、曾て「かたそきの記」てふ一篇の國文（畸人傳に見ゆ）を作れり、然るに多田南嶺取りて以て己れが說となし、秋齋閒話に載す、伴蒿蹊其天民の作たるを辨ぜり、洵に痛快の擧なりといふべし、

天民曾て官に上書し、松前に續ける蝦夷の地を、我日本に屬せしめんとの志ありしも、早逝して果たさゞりしは遺憾なりとす、彼れが尋常の儒者と同じからざりしものあるは、此一事以て證すべきなり、又畸人傳卷之五に云く、

天民の說に儒は醫を兼ぬべし、しからざれば、貧にして、學、卑陋に落つといへりとぞ、

其見る所、仁齋に異なり、仁齋は儒醫辨を作りて儒にして醫を兼ぬことの非なるを論ずればなり、皇國名醫傳に天民が事蹟を叙して「旁治醫術」と云へり、果して然らば彼れ自ら儒にして醫を兼ねたり、天民の門人中往々儒にして醫を兼ぬるものあるは、其師說を奉ずるに因りて然るなりといふ、天民著はす所天民遺言三卷あり、初めの二卷は門人渡邊毅の編次する所に係る、終りの一卷は半は平嚴善（字は存貞）半は並河永（字は崇永、天民の兄）の著はす所なりと雖も、亦天民の遺意に出づといふ。



第二　學說

天民一生の事業は積極的に一家の學說を建設するにあらずして、寧ろ仁齋の學說を批評し、其缺漏を補充するにあり、天民が如何なる點に於て仁齋と其見解を異にするか、左に之れを列擧せん、

第一、仁齋は經濟を賤視し、天民は經濟を尊重す、……仁齋嘗て論じて曰く、

學者纔に經濟に志あらば、流れて制度文爲の學となる、纔に事功に志あらば、流れて權謀揣摩の術となる、而して道德の本原に於て反りて迂濶を以て之れを名づく、蓋し小利を見て速ならんことを欲するが爲めの故なり、(同志會筆記)

彼れ道德を重んずるの心切なるが爲め經濟を輕んぜり、然れども孔子の學本と經濟を輕んぜず、國を治め民を濟ふは其究竟の目的たるなり、是を以て天民經濟の必要を絕叫せり、曰く、

後の學者、學問事業を以て判然として二となす、故に高く虛玄を談じ、性理を研精して、以て儒雅となし、以て道を得たりとなし、經濟の業、富強の策の如きは、反りて以て卑野となして、之れを事爲の末に附す、自ら陽儒陰佛なるを知らず、實に歎すべきかな(世事讀書)

是れ殆んど仁齋の爲人を論ずるに似たり、彼れ又曰く、

後儒、私欲なきの仁たるを知りて、民を濟ひ物を利するの仁たることを知らず其學枯寂を樂むの弊なり(操存擴充)

此れに由りて之れを觀れば、彼れは利用厚生を主眼とするものにて、差、功利主義に傾くものに似たり、彼れ自ら蝦夷不毛の地を我版圖に屬せしめんとせしは、偶、以て其志の存する所を示すに足るものならん、彼れ又曰く、

蓋し聖人の學、本と經濟を主とす、尙書は其實を記し、語孟は其道を述ぶ、相表裏するものといふべきなり(書經)

當時の經濟といふは、政治の事にて獨り理財をのみいふにあらず、是故

に天民が尙書及び語孟を政治の書と見、隨つて又聖人の學を政治と見たるを知るべし、彼れが此の如く徂徠に接近し來たるものあるは亦一奇といふべきなり、

第二、仁齋は心性情を區別す、天民之れを區別せず……宋儒已に心性情の三者を分別して之れを論ぜり、仁齋、宋儒と其見解を異にすと雖も、其心性情の三者を分別するの一事に至りては、宋儒と異なることなきなり、天民乃ち之れを非として論じて曰く、

性や情や心や本と一物、豈に二三あるべけんや、然らば其名を異にする所以のものは何ぞや、是れ其指す所の處によりて、少しく同じからざるのみ、性は生なり、四端の心、生と倶に生ずるなり、情は實なり、心は躰中の名なり、凡そ皆心なり、其人爲を假らざるよりして之れを性といふ、其情實無僞よりして之れを情といふ、其思ふを以て職とするよりして之れを心といふ、其實は一なり、學者必ず其孰れか心たり、孰れか性たり情たることを指さんと欲す、何ぞ思はざるの甚しきや(性情

心解)

天民は心性情の三者を以て心てふ一物の異なれる方面に過ぎずとす、然れども異なれる方面なる以上は亦分別して三者となし得べきものなり、但、根本的に異なれるものとせば、固より非ならん、然れども是れ恐くは仁齋の思惟する所にあらざらん、

第三、仁齋は仁義禮智と四端とを別物とし、天民は之れを同一視す……

天民は仁齋が仁義禮智の四者は道徳の名にして、性の名にあらずとするを以て告子の説を蹈襲するものとし、其孔孟の眞意にあらざるを論破せり、其言に云く、

仁齋復た告子の舊窠を尋ね、仁義は性にあらざるの説を唱へて、自ら以て至珍至寶となし、以て鄒魯の正脈となし、高く自ら標榜す、夫の告子、尚ほ仁を以て内となし、特り義を以て外とするのみ、然れども孟子以て邪説となして、以て仁義を害すとなし、深く辯じ、痛く拒んで、其力を餘さゞるなり、後世程朱の説、其實は孟子に異なりと雖も、仁義を以

て性の名とすることは未だ改むることあらざるなり、仁齋孟子を尊ぶことを知りて、反りて仁義禮智は性にあらざるなりといふ、何ぞ其言の異なるや、惜むべく、歎ずべく、怪むべく、駭くべし、吾れ其何の由なるを知らざるなり、孟子の曰く、惻隱の心は仁なり、羞惡の心は義なり、仁義禮智、我れ固より之れを有すと、則ち仁義禮智、性にあらずして何ぞ、內にあらずして何ぞ、蓋し四端は即ち是れ仁義禮智、仁義禮智は即ち是れ四端、四端仁義只是れ一物、優劣の等すべきなく、分別の容るべきなし、仁齋却て謂く、人生の有する所は、只是れ惻隱羞惡辭讓是非の善なるものなり、仁義禮智は天地自ら有るの物、善の至極なるものにして、人の性にあらざるなりと、一は善といひ、一は善の至極といひ、强ひて優劣を立て、妄に分別を生じ、四端を以て小なりとなし、以て是れ仁義禮智ならずとなして、別に所謂仁義禮智を天地の間に求めんと欲す、驢に騎りて驢を覓むといふべきなり(復誠所先生書)

天民尙ほ仁齋と宋儒と自家との立脚點を比較して左の如く論ぜり、曰

く、

四端は人性の有する所にして仁義禮智にあらず、仁義禮智は天下の德にして、天地自ら有するの物、人性の有する所にあらざるなりと、四端仁義を以て判然たる二物となして、仁義を人身の外に求むるものは、是れ仁齋の說なり、(一)仁義禮智は性たり、惻隱羞惡は情たり、惻隱羞惡は卽ち仁義ならず、仁義は卽ち惻隱羞惡ならざるなりと、四端仁義を人心の中に就いて析ちて二とするものは、是れ宋儒の說なり、(二)一は仁義を人身の外に求め、一は仁義四端を人心の中に析つ、其說大に異なりと雖も、其四端は卽ち仁義なるを知らざるに至りては則ち一なり、四端は人性の有する所、卽ち是れ仁義四端の外、更に仁義なしとは是れ弟(卽ち天民)の見にして(三)斷々然として深く自ら信じて、以て孔孟の正旨となすものなり、(同上)

天民の仁齋を駁して最も有力なるもの、此點にあり、蓋し仁齋が强ひて四端と仁義禮智とを區別せんとせしは、孟子の意を得たるものにあら

ざりき、島田篁村も亦嘗て此事を辨ぜり、（哲學雜誌第八十八號）

天民仁齋一生の學を論破して曰く、

大抵以爲く仁義禮智は天地自ら有るの物、人性の有する所にあらざるなりと、仁齋一生の學、悉く此數語に備はれり、其鄒魯の正派を得たりとする所以のもの、只此數語を自負す、宋儒の說を以て孔孟の說に悖るとなして、呶々辯說するものも、亦只此數語を主張す、字義童子問等の書、若干萬言、此數語を敷衍するもの、半に居れり云云、夫れ仁義禮智を以て外物となし、性にあらずとなし、內にあらずとなすものは、是れ告子の說なり（同上）

其得意想ふべし、之れを要するに、四端と仁義禮智とに就き、仁齋は內外に別を立て、宋儒は心內に別を立て、天民は心內に合一せり、仁齋が說、天民の駁擊を受けたりと雖も、彼れが學術上の功は之れが爲めに烏有に歸すべきものにあらず、例へば、其活動的發展主義を鼓吹したるが如き、歷史上磨滅すべからざるの功といふべし、偶〻天民が補正を得て、其學反

りて光輝を增すの看なしとせざるなり、
天民仁齋の學說を批評し、横說竪說、其矛盾を擧げ、其錯誤を示し、殆んど師をして、顏色なからしめんとするの槪ありと雖も、亦時ありて師說の其當を得たるものあるを稱せり、例へば中庸發揮に喜怒哀樂より萬物育焉に至るまでの四十七字を攙入とするを評して「可レ謂二卓見一矣」といへり、又天民の遺意に出づと稱する疑語孟字義中に間ゝ師の卓見を是定し、「碌々の徒に視ふれば、豪傑の士といふべし」といへり、此れに由り之れを觀れば、天民固より些の私心あるにあらず、唯ゝ其所信を吐露して、道義の眞相を發揮せんとするあるのみ、



第三　天民關係書類

天民先生並河君墓表　渡邊毅撰

天民遺言卷上の末に附載せり、

先哲叢談〔卷之六〕

近世叢語〔卷之二〕

北窓叢談

近世畸人傳〔卷之五〕

皇國名醫傳〔卷二〕淺田栗園著

野史〔卷二百五十八〕

日本名家人名詳傳〔卷之下〕

日本諸家人物志〔上〕

藝苑叢話〔上卷〕山縣篤藏著

近代名家著述目錄〔卷之三〕

慶長以來諸家著述目錄（下）

大日本人名辭書

鑒定便覽（二）

名家全書（一）

名人忌辰錄（上卷）關根只誠編



第五章 原 雙桂

原雙桂、名は瑜、字は公瑤、小字は三右衛門、雙桂は其號なり、又倚菴と號す、京師の人、先哲叢談の著者原念齋の祖父なり、享保三年を以て生れ、幼にして、機敏穎悟、群兒に異なり、因りて神童の稱あり、甫めて十歳にして句讀を東涯に受け、稍〻長じて學を嗜み、勵精刻苦、堀川塾中嶄然頭角を露はす、東涯歿し後進の領袖と稱す、然れども雙桂蚤に醫術に志あり、南、浪華に赴き、東、江戸に遊ぶ、是を以て久しく東涯に師事すること能はざりき、彼れ京師に歸り醫を以て業となす、是に於て良醫の名、四方に震ふ、延享二年唐津侯(肥前)に徴されて侍醫となり、唐津に赴く、寶暦十三年、侯、下總の古河に移封せらる、因りて雙桂も亦從つて移る、明和四年疫疾に嬰り、江戸蠣殼町の寓居に歿す、享年五十、子恭胤、字は敬仲、即ち念齋が父なり、芥煥(字は彦章)が撰ぶ所の雙桂原先生碣銘に雙桂を形容して云く、

君、人となり、隆準細眼、面、重棗の如く、音吐鐘の如し、少壯にして豪邁、不、

羈、節俠を好む、旣にして官途に就き、節を折りて恭謙篤實、晩年德行醇粹、一藩の模楷たり。

雙桂本と東涯に學ぶと雖も、後、一家言を成し、宋物伊三氏を併せて皆之れを排斥せり、彼れ嘗て洙泗微響、非朱、詰物、疑藤等の書を著はさんことを企圖せしも、未だ脫稿するに至らずして歿せり、然れども念齋其稍〻見るべきものを集め、一卷となして之れを世に公にせり、桂館漫筆是れなり、其他雙桂著はす所、桂館野乘一卷、雙桂集六卷及び過庭紀談（五卷）あり雙桂の事蹟は、先哲叢談卷之八、近世叢語卷之四、及び桂館漫筆等に見ゆ、雙桂一家言を成すといふと雖も、其實仁齋徂徠等の學說を批評せる瑣々たる思想の斷片を傳ふるに過ぎず、一家言として見るべき程の價値ある思想を發見すること能はず、蓋し仁齋徂徠等の外一旗幟を立つるの野心ありて、全く失敗に了はれるものなるか、彼れが一家言として主張する所は「復增彥敬書」に見ゆ、其言に云く、

凡そ人の生ある、仁義禮智其他百德、皆性の具ふる所なり、則ち具ふる

所と雖も、猶ほ是れ微なり、亦猶ほ物の種子のごときか、苟も其養を得て之れを長ずるにあらざれば、以て其大を成し、以て其性を盡すことあること能はず、而して或は却て之れを梏亡消滅するに至る、此れ教の無かるべからずして、存養擴充の務めざるべからざる所以なり、

是れ其堀川派の學と異なる所なり、然れども其旨意は孟子の旨意にして、天民は一層明晰に一層端的に之れを叙述せり、雙桂の論、毫も珍とするに足らず、又其言に云く、

如し夫れ情は生の欲なり、欲は好惡の謂、荀子曰く、好惡喜怒哀樂、是れを天情といふ是れなり、但其物に感じて動くや、其天或は移る、移れば必ず蔽はる、蔽はるれば人物に化せらる、物之れをして然らしむるなり、故に情は節せざるべからざるものなり、理めざるべからざるものなり、苟も能く制して之れを節し、反して之れを理め、之れをして能く德性と偕にして背馳する所なからしめば、則ち情、其正を得て、好惡の發も、亦皆天性條理の節に中る、之れを性情の和といふ、性情の和は

則ち條理の正なり、條理の正は、則ち天下の達道なり是れ亦毫も新奇の見解にあらず、大學に所謂「誠意」の如き、中庸に所謂「中和」の如き、皆性欲を節し、其れをして中正を得しむるの要を指示するものなり、又其言に云く、

心は治せざるべからざるものなり、正うせざるべからざるものなり操らざるべからざるものなり、存せざるべからざるものなり身を修むるの要、他なし、唯性を養ふて之れを長じ、情を制して之れを節し、心を操りて之れを有するにあるのみ、

雙桂が主張する所畢竟此數言に歸するのみ、彼れが一家言ともいふべき特色は遂に發見することを能はざるなり、彼れ天民と同じく仁齋に服せずと雖も、孰れも古學の立脚點を去らざりき、雙桂又論じて曰く、

性は須く養ふて長ずべきの物、豈に徒に初に復るのみなるべけんや、性は一性のみ、豈に本然氣質の二名あるべけんや、

是れ全く仁齋が主張する所に係る、彼れ仁齋が室に入りて戈を執ると

雖も、何等獨創の見もなく、遂に多く仁齋の圈套を脫すること能はざるを知るべきなり、



第六章　原　東岳

原東岳、名は直、字は温夫、通稱は吉右衛門、姓は原田氏、自ら修めて原となす、豐後の人、東岳少うして日出侯に仕へ、其近侍となる、侯東岳が異材あるを愛し、命じて京師に之き、業を東涯に受けしむ、彼れ堀川の家塾に寓すること四年にして歸る、侯又命じて服部南郭に就いて古文辭を學ばしむ、彼れ江戸にあること三年、是を以て堀川蘐園兩派の學統を受け、經學文章を以て一家を成すに至れり、寶曆年中東岳士大夫と事を議して合はず、乃ち臣たるを致して日出を去り、京師に至り、講說して業をなすこと五年、從遊頗る衆し、又去りて關西諸州に遊び、後、豐前中津に至り、學を此に講ず、中津侯之れを優遇す、彼れ乃ち侯家に賓客たり、遂に天明三年を以て中津に歿す、年五十五、東岳著はす所、筆疇六卷、學的二卷、經說拾遺二卷等あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之七に見ゆ、

東岳人となり、狷介孤峭、動もすれば輙ち人と忤ふ、其不可とする所に至

りては、貴紳豪族と雖も、情を矯め意を屈し、以て迎合することを敢てせず、故に到る處人と調和すること能はざりき、因りて謂ふ、

人の己れを毀る、當にこれを躬に求むべし、若し己れ毀るべきの行あらば、彼れが言是なり、是なれば但彼れに怨なきのみならず、反りて改むべきの行あり、若し己れ毀るべきの行なければ、彼れが言妄なり、妄なれば、只躬に害なきのみならず、反りて進修の益あり、爰に知る、誹るものの必ずしも吾れを損せずして、譽むるものの必ずしも吾れを益せざるを、學者須く毀譽を以て遽に擧動をなすべからずして、自ら其實を繹ぬべし、

其言ふ所、蓋し經驗の結果に出づるものにして、自ら趣味ありといふべし、

東岳は堀川蘐園の兩派に關係あるものにて、仁齋徂徠を尊崇すること太だ深し、彼れ仁齋を論じて曰く、

伊藤仁齋先生孟子古義七卷を著はせり、後世洛閩の學、禪氏者流と眞

に相符同して三代聖人の學と殊に異なることあるを看出だせり、是に於て原刻を取りて盡く改め換へて註解を創述して人間に刊布せしより吾邦の性理の學一洗して古義粲然として世に明かなり、大東洪荒の世より應仁の比までは、風尚麤醜、人物固陋にして、文學絶えてこれなし、僅に只緇林の徒、少々文字を會するもの世用に供へ置きしこと誠に哀むべきことなり、此時に當りて仁齋先生勃興して、天下の先鞭をなし、奮然として獨得の見を振ふて千載地に墜つるの古學を興隆せり、從來邪説暴行の徒、路に塞がりしに、先生肇めてこれを闢いて廓然たるときは、則ち今世中夏の儒輩企て及ばざる所のものあり、誠に吾邦の榮、無疆の譽、孟子以來の人傑なりといふべし、先生著述數十種あり、就中孟子古義、造工最も佳し、文章發明、事理秀雋、古今諸儒及ぶことなし、(孟子億下)

又曰く、

論語古義、東涯先生補矱の功加はらざるによりて、造工稍〻劣れる所あ

りて紕繆亦尠からず、孟子古義と並べ稱しがたし、(同上)

又曰く、

仁齋先生博覽の力、自ら能く文を作る、論說躰備はりて古作者を追ふべし、千載不傳の古學を捌めて倡ふるの發明によりて猶ほ且つ文章も亦一家の機杼をなせり、本朝古昔より曾てこれあらざる作者にて、眞の人傑といふべし、然れども專ら只理學家宋文の格に從ふて、韓歐を精熟せざるに由るが故に、句法不雅頗る多く、和習亦猶ほ融化せざることあり、最も惜むべし、徂徠物先生相繼ぎ出でゝ、其弊を矯揉せり、文章博物、百氏の倫魁、蓋代の一人にして、天才といふべし、李王古文辭家を學んで、古文辭の首倡をなすにより、天下文華肇めて闡けり、本朝の學者、方嚮する所あるを知りて、且つ古文辭の學あることを初めて知ることは、全く是れ先生の力なり、其績、本朝に於ては最も偉にして曠代より曾てこれあらざることなり、此れに繇りて天下儁邁彥士、勃爾として興起するもの甚だ多し、云云、(折疑億下)

東岳尙ほ徂徠を稱揚して、

> 卓識文章、吾國曠古以來の一人なり、(論語億上)

といひ、又

> 眞に是れ詞壇の豪傑、命世の宏器なり、(孟子億下)

といへり、其尊崇景慕、至れりといふべし、彼れ又東涯を論じて曰く、

> 伊藤東涯先生の文、其躰全く具はりて轉移することなく、平昔好むところは、專ら只歐蘇にあり、故に歐蘇二公を以て躰として、其躰定まり立てり、本邦人名の如き、和俗の稱謂に從ふて改めずといへども、却て雅馴にして、斧鑿の跡なし、其精妙は、歐陽公に似て、其神明は蘇長公に似たり、(折疑億下)

彼れ又更に當時の學者を比較して論じて曰く、

> 徂徠東涯二先生匹なり、而して徂徠は堂にあり、東涯は室にあり、是れ其別なり、南郭春臺二子匹なり、而して南郭は戸にあり、春臺は門にあり、蘭嵎周南二子匹なり、而して皆廊廡の下にあり、金華宇士新二子匹

なり、而して皆門牆を望んで其中に入ること能はず、宇氏最も劣等なり。（同上）

此に由りて之れを觀れば、彼れ東涯を以て徂徠よりも造詣深しとするものなり、彼れ自身の學說として紹介するに足るものなし、但門人奥平重該（字は伯堅）が筆疇の序に

徒に經濟の事を置いて、道を他に求むるものは、眞に能く經を治むるの工といふべからず、

といへり、是れ蓋し東岳が平生敎へし所ならん、然れども彼れ決して一身の修德を輕忽にせしにあらず、乃ち論じて曰く、

夫れ聖人の道は身を修め人を治むるの事より外、又別法なし、意ふに吾身先づ修まらざれば、凡百の事、成ることなきこと、猶ほ家をつくりて基址なきが如し、（論語億上）

又曰く、

行は即ち行事なり、總じて人の行事危殆にして過擧あることは一身

の規矩立たざるが故なり、夫れ仁禮は人の規矩なり、此二の者を以てゑつとつがゐて放たずして、日夕惕厲、躬行懈らざれば、德行相修まりて有用の才をなすべし、然れども身を修むるのこと、人々のよくいふことなれども、此れ至りて難き事にて容易からざる事なり、(同上)

乃ち文章と經濟とは、彼れ蘐園派より學び來たりしも、其修德の一點に於ては、堀川派の感化を免れざりしを知るべきなり、



第三篇　物徂徠及び徂徠學派

第一章　物徂徠

第一　事蹟

徳川時代に豪儒の偉器を抱いて起り、鄒魯の學脈に一生面を開き、一世の文學を宣揚し、後世に影響を及ぼしゝことの多大なるは、物徂徠に若くはなし、徂徠、名は雙松、(イ)字は茂卿、幼名を傳二郎といふ、通稱は總右衛門、蓋し曾祖父の名を襲へるなり、姓は物部、荻生氏なり、徂徠(一に徂來に作る)と號し、其社を蘐園といふ、寛文六年二月を以て江戸の二番町に生まる、其先は三河の荻生の人、物部守屋の後なり、故に荻生を氏とし、又物部を姓とす、後、徂徠自ら修めて物氏となす、答屈景山書に云く、

　昔し源濃州(源義綱ならん)甲賀の役、諸子皆殲し、孽孫あり、物季任といふもの、之れを匿す、遂に其姓を冒す、是れを荻生の始祖となす、建武の時、南朝

(イ)雙松の名は忌む所ありて之れを避け、字を以て行はる、蓋し常憲公の世子徳松君の諱を避けたるならん、事は閑散餘錄卷之二及び先哲叢談卷之六等に見ゆ、

に從役するものあり、頗る物部を以て錄せらる、故に子孫、源と稱するもの、物部と稱するものあり、而して荻生城は三河にあり、國家の興る、迫りて勢に奔り、北氏に依る、南朝の㬋なるを以て、其城、宗室の有する所となり、亦荻生と稱するものあり、今閣老に之れあり、不佞其或は混ぜんことを惡む、故に物部と稱す、云云（文集卷之二十七）

徂徠の祖先に荻生少目と云へるものあり、初めて參州より勢州に之き、北畠家に寄りて卒す、其子を總右衞門といふ、即ち徂徠が曾祖父なり、祖父を玄甫といふ、初めて江戶に來たり、醫を以て業とせり、父方庵名は篤、（一說に名は景明）字は宗甫、常憲公（德川綱吉の事）の侍醫なり、母は兒島氏、三子を生む、其長子を理菴といひ、其末子を北溪といふ、（北溪、名は觀、字は叔達、惣七郎と稱す、）徂徠は其中子なり、兒たりしとき天然痘に罹り、其症險惡なりしも、幸にして癒ゆるを得たり、然れども多病なりき、但、其人となり岐嶷、五歲にして已に字を識り、九歲にして始めて詩を作りて菅廟に捧ぐ、云く、

龍蛇指下走、珠玉手中生、松樹萬年翠、梅花千歲芳、

十餘歳にして能く文章を作り、喜んで長老と談論すること殆んど成人の如し、彼れ自ら譯文筌蹄題言に云く、

記す予先大夫に侍す七八歳の時、先大夫予に命じて其日間の行事を錄せしむ、或は府に朝し、或は客來たる、何事を說き何事を作す、及び風雨陰晴、家人瑣細の事まで皆錄す、夜臥に臨む每に、必ず口づから授けて筆受せしむ、予十一二の時、既に能く自ら書を讀み、未だ嘗て句讀を受けざるは、蓋し此れに由るが故なり、

此れに由りて之れを觀れば、彼れが蚤に家庭敎育を受けたること以て知るべきなり、然れども彼れ亦其師とする所なきにあらず、延寶五年より同七年に至るまで林春齋及び林鳳岡に就いて學べり、延寶七年四月父方庵事に坐して上總長良郡の二宮庄本能村に竄す、徂徠乃ち父に從つて共に移り、田舍の間に居る、彼れ蚤に大志を抱き、心を講學に用ひ、貧賤の爲めに毫も挫折せず、志を執ること愈〻固く、學をなすこと愈〻勤む、祁寒盛暑と雖も、篝燈炯々として未だ嘗て倦むことを知らず、居ること幾

もなく、文章大に進む、二老畧傳に云く、

徂徠先生の父は荻生蓬庵（方庵の誤ならん）と云ひて館林侯（常憲公の事）の侍醫なり、一旦命に背き、館林を逭はれたり、去りて上總の國に田地を求め、父子三人隱居せり、長子は雙松（徂徠、俗稱總右衛門）次子は雙竹（號不知、後總七）三人同室に居て讀書の外他事なし、東都に出で書を求め、家に歸り、父子三人書を讀む事數年、（實は十有二年）故に學術つのりたり、雙松殊に勝れたり、

此記事少しく事實に相違あるも、又上總にありし時の狀況を盡くせり其間十有二年、全く讀書に從事し、復た餘念なかりしを以て、徂徠が學問の素養を作る爲めには、是れ實に最好時機たりしこと、毫も疑を容れざるなり、譯文筌蹄題言に云く、

予十四にして南總に流落し、二十五にして赦に値ふて東都に還る、中間十有三年（實は十有二年）日に田父野老と偶處し、尚ほ何ぞ師友の有無を問はん、獨り先大夫篋中大學諺解一本を藏有するによる、實に先大父仲山府君の手澤なり、予此れを獲て研究し、力を用ふるの久しき、遂に講

說によらず、遍く羣書に通ずることを得るなり、

此れに由りて之れを觀れば、徂徠は多少、家庭の敎訓を受け、又幼少の時林家に就いて學びたることあるも、別に師承ありといふにあらず、全く獨力獨學によりて斷然一家を成すに至れるなり、其常師なかりしは、譯文筌蹄題言に「予獨在南總無師友」の句を以て證すべきなり、殊に彼れが大學諺解一本によりて講學の端緒を開き得しこと、永く文壇の一奇話として傳ふるに足るなり、大學諺解は抑〻何人の著作なるべきか、山鹿素行嘗て四書諺解を著はしゝも、唯〻寫本として傳はれるのみにて、廣く世に行はれざれば恐くは是れにあらざらん、林鵞峯(羅山の第三子)嘗て大學諺解(一卷)の著あり、思ふに、徂徠が上總にありて熟讀せしもの、此書ならんか、與都三近書に云く、

始め不佞茂卿幼にして書を海上に讀みしより、蛩戶鼪丁の錯はる處、疑義ありと雖も、其れ孰れに從つて問決せん、先生つくる所の諸標註を得て、以て之れを讀むに迨んで迺ち曰く、吁是れ惠人なるかなと、(文

集巻之二十七）

都三近は宇都宮遯菴をいふ、遯菴四書近思錄等の標註を作る、徂徠是等の書を涉獵せしものと見ゆ、上總にありし時、大學諺解の外讀む所なかりしといふにはあらざるなり、徂徠二十五歳にして江戸に還り、芝増上寺の門前に居り、程朱の學を講ず、山中の僧侶及び其外儒生にして彼れに從つて學ぶもの數百人の多きに及ぶ、然れども徂徠の困苦、此時より甚しきはなし、文會雜記巻之二上に云く、

徂徠は芝に舌耕して居られたる時、至極貧にて豆腐屋にかり宅して居られたるゆゑ、豆腐のかすばかりくらはれたるとなり、大に豆腐屋の主人世話やきたるゆゑ、徂徠祿得られたる後、二人扶持やられたるとなり、

増上寺の山主學を好むを以て徂徠之れと相識る、時の將軍常憲公亦學を好む、是を以て山主徂徠が事を公に言上し、公の庇廕により徂徠兵學を以て柳澤侯に仕ふるを得たり、二老略傳に云く、

雙松二十三歲(實は二十五歲)の時東都增上寺片門前に寓居し、書を讀む、山中の增徒、是れに隨ひ讀書する者、數百人增上寺の方丈學を好む、雙松常に方丈とよし、時に憲廟學を好み給ふ、山主御前に於て雙松が事を言上して曰く、雙松と云ふもの、我門前に在り、弱冠といへども學文長せり、名は荻生雙松と云ふ、荻生蓬庵(方庵の誤)が子なりと申す、憲廟曰く、蓬庵存命憐むべし、と、即ち柳澤に命じて、學術を試しむ、柳澤に至るの日、廣澤先生(即ち細井廣澤)先輩なる故に柳澤の第に於て及第刻を行ひ、詩文の題を書きたり、詩文成つて後に、柳澤に扶持す、故に先生徂徠先生と通家なり、徂徠先生の元配は、先生の媒酌なり、蓬庵二百俵の祿を辱うす、次男雙竹を以て儒官とす、即ち蓬庵の家をつがしむ、今の總右衛門は總七の子徂徠の甥なり、

柳澤侯乃ち徂徠をして書記を掌らしめ、俸十五人口を授く其祿尙ほ甚だ微なりといふべし、後侯の封累りに益すに從つて徂徠も亦累りに其秩を益し、恩遇殊に渥く、遂に五百石に至る、時に年三十五、寛永元年柳澤

侯封を甲斐に移さる、其翌年徂徠田省吾と共に君命を奉じて甲州に赴く、此時峡中紀行を作る、峡とは甲州の事なり、春臺が與子遷書に云く、

先生(徂徠の事)の未だ仕へざるや、嘗て芝浦に教授す、人の知る所なり、後、柳澤氏の勃興して侯に封ぜらるゝに遇ふ、先生を召して書記を掌らしむ、先生是に於てか始めて褐を侯の門に釋く、然れども其祿尚ほ微なり、尋いで柳澤侯累りに封を益す、先生亦公の寵靈を以て累りに秩を益し、五百石に至る、命世の才を以てして侯家に勤勞ありと雖も柳澤公の知遇にあらざるよりは、先生の窮達未だ知るべからざるなり(春臺文集後稿卷十二)

徂徠の柳澤侯に於けるは、猶ほ熊澤蕃山の芳烈公に於けるが如く、眞に風雲に際會するものといふべし、又武門諸説拾遺卷之十九に云く、

其後雙松事は江戸へ出で、增上寺門前にて講釋す、增上寺の所化に限らず、其近邊の寺院の僧等、其外儒生の者師とす、その節の增上寺大僧正は了也和尚なりしが、雙松を招き、物語等數度にて其學力を褒めて、

甚だ尊信せられ、夫より松平美濃守吉保（即ち柳澤侯）へ物語して荻生芳庵（方庵の誤ならん）が子の由、被申、美濃守にも兼て聞及ばれし芳庵學才の者の子なれば承諾せられ、或時了也和尚同時に將軍家の御前にて雙松が事を被申出、此者事當時御勘當の者の子なれば、召抱候儀も遠慮仕由申上げる所に、上意には親こそ一旦勘氣なれども、敢て罪科のものにあらず、殊に其子は格別なれば、苦しからず、召抱可申由、御免ありしかば、是れより美濃守殿手前の儒者細井次郎太夫（廣澤の事）を差遣し、被召寄、大法を以て講釋申付らるゝ上は、三十人扶持にて抱へられける、雙松還俗（元服の誤ならん）して荻生惣右衛門と改號す、是れより美濃守殿にも尊敬せられ、段々加祿賜はりける、かゝりし仕合の上なれば、父が御勘氣御免の事をも相願ひける、其後將軍家の御講釋拜聽をも仰付けられ御前へも罷出づるを以て父芳庵事も御免にて召出だされ、貳百俵くだされける、是れによりて惣領理庵をば、上總にのこし、其跡を讓りて芳庵は江戸へ出づる、然れば、父芳庵家督は惣右衛門が相續すべき所

に、前に美濃守殿へ召出だされ候て、今は五百石になりたる身分なれば、望なしとて、父が名跡は、弟を以て相立て、其上名跡は儒者をねがひける、此願も御免にて、御儒者仰付けらる、父が領ともに下し置かれ、七も師匠は兄惣右衛門と仰出だされ、これらみな惣右衛門手柄なり、弟を荻生惣七と言ふて、今に御儒者にて相續しける、

是時に當りて常憲公學を好み、世子德松君と共に屢〻柳澤侯の邸に臨み、侯の家臣をして經書を進講せしめ、其都度必ず賞與あり、而して徂徠之れが魁たり、侯、編修を好む、徂徠常に之れが總裁たり、侯の館舍を捐つるに及んで嗣君の郡山侯亦彼れを優待せりといふ、

是より先き伊藤仁齋、京師にありて古學を唱ふ、徂徠蘐園隨筆三卷を著はし、大に之を駁して、宋學を廻護し、甚しきは仁齋が用語句法の誤謬までも、擧げて之れを論ぜり、此れより徂徠の名聲大に揚れり、時に年四十九、既にして古學に一變し、一家の見を立て、痛く性理の說を斥け、併せて仁齋を攻む、又明の李王(ヲ)に傚ひ、古文辭を修め、

(ヲ)李王は李攀龍王元美をい

其成るに及んで、益其舊と作る所の文の是にあらざるを知る、因りて嘆じて曰く、豈に惟我れのみ是の若くならんや、滔々たるもの、天下皆是れなり、豈に惟今日のみならんや、千古以來皆是れなり」と、古文辭を以て古經の階梯となし、遂に復た目を東漢以後の書に屬せず、自ら其主張を稱して復古學といひ、先儒作る所の如きは、一切之れを排して侏儒鴃舌を免れずとなす、其豪邁卓識、雄文宏詞、一世を籠蓋す、門人服部南郭、太宰春臺、山縣周南、安藤東野、平野金華の徒、從つて又之れを鼓盪し、弟子大に進み、聲譽藉甚、一世を振撼す、是に於てか一時貴紳公子及び藩國の名士より、以て閭巷の處士及び緇徒に至るまで奔趨走謁を求め、唯人に後れんことをのみ恐れ、甚しきは一字の褒貶を得て以て其毀譽となすに至る、此の如くにして海内翕然として風靡影從し、文藝之れが爲めに一新するに至れり、茅窓漫錄に云く、

江府に物部氏徂徠先生起る、初め程朱の書をよみ、壯年の頃、蘐園隨筆

ふ、攀龍字は于鱗、滄溟と號す、歴城の人、世貞、字は元美、鳳洲と號し、又弇州と號す、太倉の人、

を著し、尚ほ濂洛の風ありしが、中年後より翻然として學を變じ、大に宋儒の非をさとり、性理議論は言ふまでもなく、瑣々たる注解は、目も觸れず、挺然特立、一家の學を創立す、辨道一卷を著し、孔子の道は先王の道なる事を辨じ、一家の學要を示し、次ぎに辨名二卷を著し、仁義道德より以下名目の訛を正し、論語徵、大學、中庸解を著し、合はせて經學發揮の書と定め、詩文の如きは特得の見を以て、古文辭を唱へ、四家雋を著して、韓愈、子厚、于鱗、元美を作文の規則となし、唐後詩、絕句解、拾遺等を著して、皇明詩選、明詩正聲の純粹をとり、李王の詩に注解を加へ、是を藝苑の規則と定め、大に復古の學を唱ふ、もとより材氣豪邁、特絕大器、其量千古に卓越するを以て、雅樂、象胥、軍旅、法律、及諸子百家の道を究め、各注解國字を施し、多く生徒を誘ふ、實に東方一偉人なり、其門に出づる者、數百人、入室の弟子みな英材なり、春臺、周南、南郭、東野、金華、灊水の徒、靡然として其學風に偃し、雷同震撼して天下の學を一新せり、自レ是以來、東方の學分れて兩岐となる、不レ歸レ宋則歸レ明、不レ之レ明則之レ宋

事に成りぬ、

享保六年有德公徂徠に命じて清帝の六諭衍義を句讀せしむ、成るに及んて召し入れて衣服を賜ふ、其後徂徠屢ゝ公の敎を需むるに應ず、十二年特命あり再び入りて有德公に謁見す、翌十三年正月十九日疾を以て沒す、疾は浮腫なりといふ、時に年六十三、元と三宅氏を娶り、後、佐々氏を娶る、佐々氏亦先ちて沒す、徂徠男なし、唯ゝ一女あり、三宅氏の子なり、然れども夭折す、因りて兄の子道濟を養ふて嗣となす、道濟字は太寧、金谷と號す其子孫亦業を繼いで學職をなす、今東京四谷大番町に荻生傳といふもの住せり、是れ徂徠の遠裔なりといふ、然れども學業に於て復た言ふに足るものなし、仁齋の子孫の綿々業を繼いで名聲あるに比すれば、雲泥の差ありといふべし、

荻生氏系圖

荻生少目――總右衛門――玄甫

方庵―┬―理庵
　　　├―徂徠―金谷―鳳鳴
　　　└―北溪―青山

太宰春臺は徂徠の疾に罹れるは思慮過度の致す所とせり、其の言に云く、

徂徠先生甚だ生を重んず、飲食居處より以て出入動止、賓客應接の事に至るまで、苟も以て生を傷ふべきもの、斷じて爲さゞるなり、然れども其病死する所以のもの、乃ち思慮度に過ぎるを以てなり、蓋し先生功名に志あり、少きより著述を以て事となす、年六十を過ぎて、舊痾數〻發す、而して猶ほ心を清うして靜養すること能はず、遂に篤疾を致して死す、謝在杭云く、思慮の人を害する酒色より甚だしと、誠なり、(紫芝園漫筆卷之八)

徂徠が一生功名心に驅られて、靜養の暇なかりしは事實ならん、然れども六十三歳にして沒せるが故に必ずしも早逝とはいふべからざるが

如し、但ゞ彼れ終焉の際、奇怪なる事を言ひしと傳ふるものあり、先哲叢談卷之六に云く、

徂徠の沒する、享保戊申正月十九日となす、是日天大に雪ふる、終りに臨んで人に謂つて曰く、海內第一流の人物茂卿將に命を隕さんとす、天爲めに此世界をして銀ならしむ、と、

若し是れをして事實ならしめば、徂徠の人格の寧ろ甚だ低卑なるを思はしむ、然るに尙ほ此れより甚しきものあり、中井竹山が非徴卷之二に云く、

余嘗て之れを聞く、徂徠の疾むや、日々侍者に宣言して曰く、宇宙俊人の死する、必ず靈怪あり今當に紫雲の舍を覆ふあるべし、若等出て、之れを視、病革なるに及んで輾轉呼號し、紫雲口に絕たず、家人及び高足弟子輩深く之れを耻ぢ、絕えて外人を通せず、故に一時或は繆り傳へ、以て良死にあらずとなすといふ、蓋し生平倨敖自負の衷、悉く病瞶に乘じて發し、以て此醜を致す、實に憫嘆すべきかな、

徂徠は多く反對者を有せしが故に、其死に臨んで紫雲口に絶たずといふが如き、恐くば他人嫉妬の餘に出でたる揑造說に過ぎざらん、然れども先哲叢談にいふ所の如きは或は事實ならん、徂徠平生跌蕩豪宕、海內を風靡し、一世を睥睨し、眼中殆んど人なし、故に其終焉の際、是等自負の言あるも、亦必ずしも否定するを得ざるなり、

徂徠の墓は今に芝三田長松寺にあり、表面には「徂徠物先生之墓」とあり、太宰春臺墓誌銘（春臺文集卷之十一に出づ）を作り、本多忠統墓碣（猗蘭臺集卷二に出づ）を作れり、長松寺舊と壽命山と稱せしも、一たび徂徠を葬りしより徂徠山と稱することゝなれり、徂徠が法諡を「淸淨院根與知專居士」といふ、別に儒者としての諡は無かりしと見え、門人唯、徂徠先生と呼べるのみ、徂徠の號の來由に就いては先哲叢談卷之六に說あり、云く、

徂徠の號、之れを詩の魯頌徂徠の松に取る、一說に其少時雷を好む、故に自ら蘇雷と號す、而して上總に往來（ゆきき）の里といふ處あり、因りて改め書して徂徠の字となすと、

徂徠の社號を蘐園といふは、彼れ嘗て萱葉町に住居せしを以て萱園といふべきを萱一に蘐に作るを以て蘐園といへり、正字通に「萱同蘐、別作諼」といへるを以て之れを知るべきなり、又時ありて徂徠を赤城先生といふことあるは、彼れが嘗て牛込赤城下組屋敷に借地せしことあるに由るなり、事は一言一話巻廿五に見ゆ、

徂徠は道學者といふよりは寧ろ文學者にして多少政治家の氣質を帶ぶるものなり、晩年道學に就いても、一家の見を立てしと雖も、恐くば是れ其本色にあらず、文學者として一世の文運を發揚するもの、實に彼れが自然の任務なりしが如し、然れども彼れ本と非常の英才なりしが故に、獨り詩文を能くせしのみならず、又兼ねて、音樂、語學、兵學、政治、經濟等に通ぜり、音樂に就いては彼れ樂律考及び大樂發揮の著あり、文會雜記巻之一下に云く、

徂徠は無器用の人、拍子きかず、勉强精力を盡して樂を學ばれたるとなり、

彼れが如何に苦心せしかは推して以て知るべきなり、又彼れ長崎の人岡島冠山に賴みて同志二三人と會を設け每月六七回支那語を學習せり徂徠集卷之十八に譯社約の一篇あり、是れ即ち其時の規則なり、以て其事實なるを證すべきなり、先哲叢談後編卷之三に云く、

物徂徠も亦冠山と友とし善し、象胥を冠山に受く、稗史を讀み、未だ覺了せざる每に必ず之れを冠山に問へり、

是れ亦徂徠が冠山に支那語を學びたる消息を洩らすものなり、彼れは支那語を學んで漢文を棒讀みするにあらざれば、其妙味を曉得することと能はずと思惟し、乃ち支那語を學び、讀書の方法に關しては、支那人と何等の異同もなからんことを期せり、譯文筌蹄題言に云く、

予嘗て蒙生の爲めに學問の法を定む、先つ崎陽の學を爲し、敎ふるに俗語を以てし、誦するに華音を以てし、譯するに此方の俚語を以てし、絕えて和訓廻環の讀みをなさず、始めは零細なるものを以てし、二字三字、句をなす、後、書を成すものを讀ましむ、崎陽の學既に成りて、乃ち

始めて中華人たることを得、而して後に稍々經子史集四部の書を讀まば、勢、破竹の如けん、是れ最上乘なり、然れども崎陽の學、世未だ甚だ流布せず、故に又寒郷縁なき者の爲めに、定めて第二等の法を爲す、云云、

漢籍を讀むもの、古來倒讀するを常とせり、倒讀は固より變則にして、決して其法を得たるものにあらず、徂徠が率先して此習慣を一變して、正則の研究法を開かんとしたるは、卓見といふべし、徂徠は十七歳の時兵學を外祖父鳥井忠重に學び、後又書籍によりて自ら兵學を研究し、孫子解、呉子解及び鈐錄等を著はせり、松宮觀山が學論卷上に云く、

近日儒士の武を談ずる、徂徠物子一人のみ、亦唯、博覽の餘力、臆斷自負す、不世豪傑の資を以てすと雖も、然れども未だ明師に遇はず、牢く法制を執して軍畧を問はず、孔子謀を好むの言と乖戻す、其著はす所の孫子解及び鈐錄、涉獵殆んと盡せりと雖も、未だ事實練磨の功を見ず遂に七書を以て空理となし、後世の戚南塘鄭芝龍を崇んで備はれる

となすなり、區々たる小技に拘はりて、未だ鎮國の規模を建て、戰勢の地形を書し、所謂帷中、千里の勝を決し、草廬、三分の謀を定むるの術あることを知らざるなり、亦惜しからずや、

何れにせよ當時の兵學は、今日より之れを言へば、何等の價値もなし、然れども鈐錄の如きは二十三卷もあるものにて、徂徠が如何に當時の兵學に力を盡したるかを知るに足るなり、其他徂徠は又政治に關する事を考察し、政談を著はし、法律にも心を用ひ、明律解を著はせり、彼れは又書に巧なり、北窓瑣談(乾)に云く、

徂徠の書、其超凡の趣、近世他の書家の及ぶ所にあらず、其頃雪山、惇信廣澤など世に鳴り明代の書風、時運に叶ひて、行はれし折節にも、徂徠獨り時運にも引かれずして、一家を成す、天狗杯の墨帖はよく出來たりといふものにはあらざれど、書士の墨帖の中に交へて耻づることなし、其本質は甚だ拙筆にして、かゝることは只韻致の勝れる故なり、

但、徂徠は草書に長じ、楷書に短なり、故に常に草書のみを書けり、彼れ草

書韻會（金の張天錫が著はす所二卷あり）を机上に置いて字躰を學びしといふ、算術は徂徠深くも學ばざりしとはいへ、又頗る苦心して度量考の一書を著はせり、先哲像傳卷三に云く、

算用は八さんを覺えられたるのみなるに、度量考を作らるゝ時は紙の端に筆にて數とりを書付けて殊の外骨を折られ、其後中根丈右衛門に見せて正し、猶ほ又春臺は極めて算の上手にて改めて字をも直せりとぞ、古人の苦學、常儒の及ぶ所にあらぬを見るべし、

徂徠又一家の象棋を發明し、是れを廣象棋と名づけ、兵機を寓せりといふ、此れに由りて之れを觀れば、徂徠が學問の多方面に渉れる、中々他人の及び易からざるものあるを知るべきなり、

徂徠がいかに苦學せしかは其嘗て上總にありし時、又芝増上寺門前にありし時の情狀に徵して明かなり、閑散餘錄卷之下に云く、

徂徠讀書を好むこと天性に出づ、常に黄昏に至りて齋中既に闇ければ縁側に出で、書を讀む、やゝありて燈至れば、書を兩手に持ち立ちて

讀みながら內に入りしとなり、

此の如く讀書を好むにあらざれば、彼れが如き博識いかんして期するを得ん、彼れは又非常の記憶力を有せしと見え、文會雜記卷之三上に云く、

徂徠書物を引出して見てものかゝることなし、皆そら覺なり、云云、

彼れは又頗る藏書に富みし者の如し、嘗て庫一つ書類を販賣せんとするものあり、彼れ乃ち家財を賣却して之れを買求めたりといふ、

徂徠資性豪邁にして小節に屑々たらざる所あり、其子弟に對しても、寬宏の氣象ありて、毫も局促するが如き態度あるなし、文會雜記卷之一下に云く、

徂徠を東都にて大御所御目見仰付られし時、美濃守殿の留守居御城にてそなたは高聲に物いひたまふ、御城は格別の處なり物いひ高からぬやうにと云ひし時、徠翁から〳〵と笑つて、六十まで高聲に云ひつけたる物ゆゑ、俄に低くなることにあらずと高聲にひゞきわたり

て云はれたり、云云、
彼れ王侯大人に對してすら猶ほ且つ此の如し、其尋常の儒者にあらざること推して知るべし、當時江戸には室鳩巢あり、京師には伊藤東涯あり、此二人は徂徠の勍敵なりき、然れども鳩巢は醇儒にして多く爭はず、東涯は猶ほ更に爭はず、東涯は仁齋の學を皇張して嶄として關西の重鎭たり、是故に徂徠の眼に映ずる東涯は隱として一敵國を成せり、閑散餘錄卷之下に云く、

徂徠と東涯と時を同うして互に半面の識もなし、然れども徂徠は京より至るもの或は京に之いて歸るものあれば、東涯はいかん、東涯は何の言をなすやと問へりとぞ、東涯は江戸より至る人ありても、終に徂徠を問ふとなし、その門人のもとより京にありて尤も親炙せる人に對して夜話の次でにも徂徠を評せざりしとなり、吾師致齋翁曾て書を以て徂徠の學風を問ふ、東涯の復書に明末の學風と見えたりとばかりいへり、二家の優劣、これらにても知るべし、學問の造詣、見識の

大小は姑く置く、人となりの實なると德の厚きは東涯に如くはなかるべし、云云、

東涯の篤學にして愼重なる徂徠の斷々乎として及ばざる所、其竊に畏敬するもの以なきにあらざるなり、當時又華嚴の鳳潭あり、僧侶中碩學を以て聞ゆるもの、德川時代に於ては鳳潭と普寂とに若くはなし、鳳潭の緇林に於ける、稍徂徠の世間に重鎭たりしが如し、彼れにして嘗て徂徠を訪ふ、誰れか其會見の狀況に耳を聳てざらんや、其事原東岳の筆疇卷之二に出づ、然れども其文冗長なるが故に先哲叢談の譯文を擧ぐ、云く、

僧鳳潭謁を通じて曰く、質さんと欲するものあり、請ふ一見せん、徂徠即ち延接す、鳳潭曰く、祢嘗て伊藤仁齋に見ゆ、仁齋言く、佛の道たる空のみと、吾釋の敎深遠にして、空の一字の得て盡くす所にあらざるなり、仁齋の妄誕豈に甚しからずや、先生以て如何となすと、徂徠節を擊ちて曰く、凡そ仁齋の言一々妄誕ならざるものなし、然れども獨り其

佛教を指して空となすは妄ならずといふべし、鳳潭憮然として曰く、縁なき衆生は度し難しと、即ち袂を揮つて出づ、

又澁井太室が讀書會意卷之下に云く、

鳳潭、徂徠に造る、諸弟子以爲く、魂褫はれ魄悸るゝものあらんと、屏後に立ちて窺ふ、徂徠、茶酒を設け、和歡んで終日忤ふことなし、將に出てんとす、言つて曰く、今人名物を知らず、文字紕繆あるを致す、是れ意を目前に用ひざればなりと、徂徠之れを然りとし、廣く當時の文字を斥け、且つ笑ひ、且つ語る、其竟に同じく南軒の下に立つとき、手を擧げて一樹を指す、徂徠未だ答へず、鳳潭微笑して去る、徂徠、屏後の人を顧みて曰く彼胡人を魅すと、

鳳潭いかに碩學なりと雖も、儒者にあらざるが故に、徂徠の畏るべき謂はれなし、故に彼れが最も畏れしは、恐くば、東涯其人なりしならん、然れども徂徠の才氣は優に東涯を壓するに足る、是を以て自ら海內第一の人物を以て居り、群儒を視ること螻蟻の如く、古人を評騭して罵倒至ら

ざるなし、彼れ自ら曰く、

我學術の若きもの、神武天皇よりこのかた其れ幾人かある、

是れ自ら日本開闢以來第一の學者と公言すると同じ、其抱負いかんぞや、又曰く、

伊藤仁齋の道德、熊澤了介の英才、余の學術と合して一となさば、則ち聖人といふべし、

又曰く、

人才は熊澤了介、學問は伊藤仁齋、餘子碌々數ふるに足らざるなり、

其眼、一世を空うするの氣象、是等の言論によりて徵すべきなり、或人嘗て徂徠に問ふて曰く、先生講學の外何を好むと、彼れ乃ち答へて曰く、余他の嗜玩なし、唯、炒豆を嚼んで宇宙間の人物を詆毀するのみ、其大言壯語、動もすれば輒ち常軌を脫し、人の師たるの態度を失すと雖も、又青年書生の如く無邪氣なる處ありて、其大膽なる口氣は以て群儒をして驚嘆せしむるに足る、徂徠此の如く驕慢凌厲なりと雖も、閭門の

内は、反りて嚴正なりきといふ事は閑散餘錄卷之下に見ゆ、徂徠の學問、性行、固より議すべきもの多しと雖も、彼れが德川時代に於ける一大巨儒たりしや疑なし、山縣周南曰く、

夫れ道は堯舜創して、仲尼述ぶ、孟荀以下、能く述べて其歸を晰にせず、聖學の旨荒む、獨り我徂徠先生、百世の後、禹跡の表に生れて、乃ち能く孔子の旨を得て、先王の道を明かにす、云云（送三浦生之京師序）

其徂徠を推尊する、至れりといふべし、安藤東野の如きは徂徠を以て芙蓉の白雪に比し、以て天下の偉人となし、獨り我東方に限らざるをいへり、（護園隨筆序）徂徠に私淑せる龜井昭陽の如きは、

嗚呼東海物先生、經學文章天下轟、豈料徂徠山上石、莓苔不掃鳥空鳴、

の詩を作りて之れを稱揚し、藤澤東畡の如きは、「徂徠物先生贊」を作りて云く、

聖人之道、降爲儒乎、先生而道始道矣、儒者之敎、變爲禪乎、先生出而敎始敎矣、宇猶宙也、萬里㚆兮、先生合而罩之、宙猶宇也、千歲邈兮、先生貫而操

之、譏焉者、背焉者、皆浴厥膏、學焉者、毀焉者、孰窺厥奥（東陵文集卷之九）

是れ亦深く徂徠の人物に敬服するものなり近時島田篁村の如きも徂徠を論じて曰く、

尤も氣力といひ學問といひ特に文章の如きは其立派なることは到底日本人中にこんな人はなからうと思はれます其くせ別段骨を折つて書いた樣にも見えぬ兎に角徂徠といふ人は非常な人物であつたことは疑もない次第であります（哲學雜誌第八十八號）

徂徠の門人中にても獨り春臺のみは往々徂徠に慊焉たらざるものあり彼れ論じて曰く、

仁齋の學徂徠に及ばず徂徠の才尤も仁齋の企及する所にあらざるなり識の若きは仁齋實に之れが嚆矢たり徂徠超乘して上ると雖も所謂青藍に出づるものなり其人を教ふる所以に至りては仁齋は君子を以て人に望み徂徠は豪傑を以て人に望む是れ二先生の同じからざる猶ほ馬援稱する所の伯高季良の異なるがごときなり二先生

を學ぶもの其得失も亦猶ほ是のごときなり(紫芝園漫筆卷之六)

仁齋と徂徠の長短對照し來たりて、其肯綮を得たる者の如し、彼れ又曰く、

徠翁海量能く容るゝを以て自ら許す、人亦此れを以て之れを稱す、余謂ふ、徠翁固より能く容る、然れども能く學者を容れて常人を容るゝこと能はず、能く文才の士を容れて禮法の士を容るゝこと能はず、能く其人を容れて、其言を容るゝこと能はず、是れ未だ能く容るゝとなさゞるなり(同卷之六)

又曰く、

徠翁、風流を以て自ら許す、人も亦之れを思ふ、予謂ふ、徠翁風流ならざるもの三あり、善く飲んで酒を惡む、一なり、夜坐を好まず、二なり、舟に乘るを喜ばず、三なり(同卷之二)

其他春臺は徂徠の人物性行等に就いて往々無遠慮なる批評を下だせり、蓋し春臺の嚴正峭刻なる、徂徠の磊落疎放なると正反對を成せり、故

に徂徠が春臺に慊焉たらざりしが如く、春臺も亦徂徠に慊焉たらざりしなり、是れ春臺が徂徠の短處を論斷して憚からざる所以なり、若し一たび徂徠の人物、性行及び學問を考察せば、其得失の如きは分明に呈出するを見ん、彼れが抱負の過大なる、彼れが覇氣の滿々たる、已に人の反情を招くに足るものあり、然るに彼れは德育を重んぜずして、獨り文章を尙ぶ、其弊流れて浮薄とならざるを得ず、又其文章の如きは擬古文なるが故に、其弊流れて奇僻とならざるを得ず、是を以て彼れに反抗するもの、囂々然として起れり、即ち宇士新が論語考、石川麟洲が辨道解蔽、蟠養齋が非徂徠學及び辨復古、平瑜が非物氏、森東郭が非辨道非辨名、五井蘭洲が非物、中井竹山が非徵及び閑距餘筆、服蘇門が燃犀錄、富永滄浪が古學辨疑石香山が讀書正誤等は皆徂徠の學を剖擊し、併せて人物性行に論及せるものなり、

其他徂徠の言行に就いて論ずるもの多し、偶〻近世叢語〔卷之五〕を見るに云く、

或るひと伊藤東涯に問ふて曰く、物徂徠の學風いかん、東涯曰く、蓋し明末なり、

又云く、

並河誠所謂く、物徂徠は一世の偉人然れども人の皆知る所己れ獨り知るとなす、是れ其一癖、

又太田錦城の如きは論じて曰く、

百年前までは、學者質實以て、皆有用の學を爲したり、近時物茂卿の徒より學問、皆空詩浮文に流れて、經義道學など講ずる人少し、此二十年以來は學問益々浮薄にして書畫文墨にのみ走り、風流を以て學問となす、恐るべきの甚しきなり、有志の人は嚴戒せずんばあるべからず、

(梧窓漫筆卷上)

萩原善韶も亦論じて曰く、

物徂徠は不世出の大才を以て、宋儒は勿論、古今の群儒を叱咤し、五百年膠固の學を廢す、其功莫大に、其才古今に比まれなりと稱すべし然

れども、其宋儒を排するは是なれども、經を解するに至りては、妄見謬說あげて數ふべからず、論語徵の如きは說の疏謬、半に過ぎたり、然れども其天下を風靡せしは鬼の假面を蒙りて、人を恐喝するに譬ふ、一旦人の逐服を取るのみなり、(內藤燦聚が大儒列傳に引用する所を擧ぐ)

又曰く、

元祿享保の際物徂徠出でゝ、舊習を一洗せしより以來碩儒鴻匠次いで出で、古學盛に行はれ、文章經術共に嶄新開闢に改まりしなれども、儒風の崩れしも、亦これより始まれり、其以前の儒は、中江惟命を始めとして、有用德義の學を專ら主とせり、當時に在りても木下順菴の徒は古の儒風に近きあり、物氏は古學を起すを急にせし故、才を取りて行義を主とせず、こゝを以て物門には磊落豪邁を以て任となす者多し、其風一轉して一に今世儒者の風となれり、誠に名敎を害し、惜むべき事なり、雨森芳洲は其子顯允を物氏の塾に託せしなれども、行義を敎へざるとて、數月ならずして家に歸れりと、それ儒は人をして孝悌

忠信ならしむべきに、已れが行篠落にして、子弟孝弟忠信なるをきかず、此れ全く物氏の宋儒を毀りて、道學先生と稱せしの弊、これに至れりすべて宋儒の弊は拘愚にながれ、物門の弊は豪邁にながる、人々弊ある所を知りて、戒愼すべきことなり（同上）

是等の評論大抵當れり、思ふに名教上に於ては徂徠の功罪相償はずといふべきものなり、徂徠の門人及び徂徠に私淑せるもの、其人に乏しからずと雖も、僅に春臺一人を除かば、道義節操を以て自ら任ずるもの、殆んどあるなし、多くは文墨風流の士にして、輕佻浮薄放蕩無頼の徒、少しとせず、稀に經義を講ずるものありと雖も疎放暴慢にして禮節に拘はらず、動もすれば法度の外に逸するものあり、是れ皆徂徠の責任を遁るゝこと能はざる所なり、後の名教に志あるもの徂徠の事蹟に於て世に鑒みる所なかるべけんや、

第二　著書

辨道一卷
辨名二卷

右二部の書は徂徠が學說を知るに最も重要なるものなり、肥後の藪震菴嘗て徂徠に書を寄せて譯文筌蹄の後生に益あるを稱せり、徂徠悅びず、乃ち答へて曰く、

譯文筌蹄は上苴なり、若し夫れ二辨の書は、僕自ら謂ふ、開闢以來聖門の大功と、吾子此れを舍てゝ、彼れを取る、何ぞ僕を知らざるの甚しき、

と、其得意、以て知るべきなり、蓋し辨道辨名の徂徠に於けるは、猶ほ語孟字義童子問の仁齋に於けるが如く、一家の見解を發表して、以て其取る所の位置を明かにせしものなり、此二書は春臺と南郭と立ちあひて校正せしこと文會雜記卷之一下に見ゆ、此二書は支那にて夙に

飜刻し、小傳を附せり、小傳は梅溪錢泳の撰に係る、全文載せて先哲像傳卷三にあり、宇濃水此二書を解釋し、辨道考辨名考の二書を著はし、齋藤高壽、辨名補義(寫本)十卷を著はし、加藤昭卿辨名辨道辨義(寫本)三卷を著はし、龜井昭陽は讀辨道一卷を著はせり、

論語徵十卷

宇濃水此書を解釋して論語徵考六卷を著はし、中根鳳河又論語徵渙二卷を著はし、菅沼東郭論語徵疏□卷を著はし、宇都宮遯菴又論語徵考(寫本)二卷を著はせり、源賴寛、何晏の集解、朱子の集註、仁齋の古義及び徂徠の論語徵を合刻して、論語徵集覽二十卷を著はせり、西岡天津亦漢儒宋儒の注と徂徠春臺の注とを合刻して論語徵訓約覽十卷を著はし、文化元年を以て上梓せり、

大學解一卷

中庸解一卷

學則一卷

學則七篇共に文集卷之十七に收載すれども、又別に單行本として行はる、卷末に人に與ふるの書五篇を附載せり、享保十二年の刊行に係る、東[illegible]年之れが標註二卷を作り、天明元年を以て刊行せり、又谷元淡が徂徠と往復して學則の旨意を論難せるもの一卷あり、「徂徠學則問答」と題す、首に柳里恭が序あり、享保十三年の刊行に係る、

徂徠集三十一卷

是れ即ち徂徠が文集なり、合して三十卷あり、服部南郭が「物夫子著述書目記」に三十一卷とあり、蓋し卷首に附載せる補遺を一卷として算入せるものならん、徂徠集を解釋せしもの讀徂徠集五卷あり、寫本にて撰人名闕く、平九峯が徂徠集筆解卅二卷合六冊亦寫本の儘世に傳ふ、龜井昭陽の徂徠集を解釋せるもの、徂徠集考證二十卷あり、

蘐園隨筆五卷

此書は徂徠中年の作にして、專ら仁齋が學說を駁撃せるものなり、首めに安藤東野が序あり、正德四年の刊行に係る、服部南郭も、至于晩歲、

亦毀廢不用」といへるが如く、徂徠の學說、一變せしが爲め、全く廢物となり了はれるなり、徂徠嘗て蘐園隨筆の二編乃至三編をも出だすべき心算ありしも、是れ亦學說の一變せしがため、沙汰止みとなれりといふ、文會雜記卷之二上に云く、

蘐園隨筆には、議すべき字なしと宇士新いへり、辨名辨道には、大に穩ならぬ文字ありといへり、

未だ其果して然りや否やを知らずと雖も、姑く一說として之れを擧ぐ、

徂徠答問書三卷

此書は徂徠が人の問に答ふる國字の書類を收載するもの、門人根遜志の編錄にして、服南郭の校刻する所に係る、首めに本多忠統及び南郭の序あり、閑散餘錄卷之下に云く、

「嘗て徂徠答問書を見て思へるは、是れ設けて著述したるものなるべし、實に人に答へたるにあらじと、その後、江州に客遊して一卷

の寫本を見る、是れ答問書の出版より以前に寫し得たるものにて、への答問書に比すれば、僅に三が一には足らざりき、その寫本には一々に問へる人の國と姓氏とをしるせり、今の刊行の本に蘐病後に書きたりといへるなどは、莊內の水野氏に答ふとしるせり、水野氏は名は元朗、字は明卿、俗名を大膳と稱す、羽州莊內酒井侯の大夫なり、後には、春臺を尊信したる人なり、南郭文集に碑の銘あり、これを以て考ふれば、答問書は、一々人に答へたる書なり、設けて作れるには、あらず、

乃ち此書の來由を知るべきなり、日本文庫第五編に此書を收載し、且つ論じて云く、

徂徠答問書三種あり、一は詩文の評論にかゝり、一は兵法の論說に屬す、此答問書は即ち聖人の道術學問の要旨を提ぐる者にして、尤も其家學のある所を見るべし、是れ本と俗牘にして、彼辨道辨名などの如き文字精正なる者にあらざれども、先生意氣の磊落たるこ

とは、此書に顯はるゝこと他の及ぶ所にあらず、洵に其人の才量器識を見るに足れり、之れを熊澤の集義二書と竝べて殆んど軒輊なきが如し、

徂徠の學說を知るには、此書亦度外視すべからざるに似たり、

政談四卷寫本

首めに序あり、國恩を報ぜんが爲めに著はすとの旨意を叙述せり、享保十二年の撰文に係る、徂徠自ら卷末に書して云く

機事密ならざるときは、害生ずと云ふことありて御政務の上の事は、白地に人に語る事にあらざる故、此物語は弟子にも書かせず、自身老眼悪筆にて認め上覽に入れ侍るなり、

又文會雜記卷之一上に云く、

徂徠の政談は稿を焚れたるなり、有廟へ獻ぜられたる書なり、春臺も見られざる由なり、云云、

此れに由りて之れを觀れば、政談は徂徠が政治上の意見を開陳して、

幕府(即ち有徳公)に上りしものにて、蘐園の秘書たりしなり、故に春臺の如き門人すら見るの機會を得ざりしなり、

太平策一卷寫本

此書も政治上の意見を開陳せるもの、番外雜書解題に、疑らくは其主君に奉りしものなるべし、とある如く當路者の爲めに著はしゝ者の如し、

蘐園談餘五卷寫本

此書は政治道德等に關する隨筆躰の書なり、日本文庫第四編に此書の標注あるものを收載し、且つ論じて云く、

徂徠先生經濟の學に長じ兵略に達す、其著はす所政談、太平策、鈐錄、孫子國字解等、皆世に行はれ、學者之れを讀まざる者なし、獨り此書に至りては、世に傳本すくなく、人たま〳〵之れを讀むも、或は先生の作にあらざるかを疑ふ、今之れを讀むに、其論鋒の鋭、果識見の超邁、決して餘子碌々者の及ぶ所にあらず、果して知る是れ實に先生

の作にして、疑ふべきものなきことを、而して之れを前の數書と併讀せば、却て其光彩氣力あるを覺ゆ、

此說信憑するに足らず、蘐園談餘は山縣周南の爲學初問と其內容を同うす、爲學初問の周南の手に成ること否定するを得ざればなり、

徂徠逸一卷寫本

此書は「唯」「與德夫書」一篇を收載するのみなり、此一篇の文は徂徠集中に見えず、

徂徠尺牘一卷寫本

此書は「答崎陽田邊生」の書一篇及び「與江若水」の書五篇、合して六篇の文を收載するものなり、前者は文集卷二十五に收載し、後者は文集卷二十六に收載せり、未だ其單行本となせる所以を知らざるなり、

詩文國字牘二卷

此書は鍋島傳藏が享保二十年を以て梓行する所に係る、首めに林東溟が序あり、詳に此書の來由を述ぶ、日本文庫第三編に此書を收載せ

り、

孟子識一卷

孝經識一卷

尚書學一卷

右三種の書は甘雨亭叢書中に收載せり、寫本尚書識の卷末に左の如き奥書あり、云く、

右徂徠先生遺書三篇、曰尚書學者二紙、曰孝經識者三紙、曰孟子識者三十許紙、服氏子遷作物夫子著述書目、亦所不錄、蓋晩歳擱藁弗繼、如尚書孝經、纔起其端、如孟子、未及半而止者、故不見于目、三篇義例大抵如論語徵、天明乙巳之夏、獲之平士觀海、士觀(?)獲之鹽子顯貞云、中略

資坦識、

乃ち右三書の全く未完の原稿なるを知るべきなり、又物氏秘稿と題して傳ふる寫本あり、是れ即ち右三書を收載せるものゝ卷末に大冢孝威の跋文あり、

讀荀子四卷

此書は宇灊水の校刻する所にして、寳曆十四年の發兌に係る、

讀韓非子三卷

蒲坂圓此書を增補して二十卷となし、增讀韓非子と題し、享和二年を以て刊行せり、先哲叢談によるに、弟子嘗て韓非子を會讀し、論議鋒出す、徂徠座にあれども、口を箝して言はず、春臺悅びずして曰く「說の一ならざる、先生何ぞ折衷せざる、將た或は解紛を得ざるか」と、徂徠氣を屛けて曰く「此書余嘗て成說あり、將に明日を待ちて出だして之れを示さんとす」と、其夜始めて筆を下し、全篇之れが說を作る、此書即ち是れなり、

讀呂氏春秋二卷寫本

服部南郭の「物夫子著述書目記」には四卷とあれども、今傳ふる所の書は上下二卷なり、宇灊水が讀荀子の序に云く、

曩きに余の蘐塾に遊ぶや、夏月徂徠先生の藏書を曬すに與り、因り

て讀荀子、讀韓非子、讀呂氏春秋の題を合して徂徠外集といふものを見るを得たり、廼ち先生手澤の書なり、高第弟子太宰德夫、服子遷、縣次公、平子彬、猪、皆未だ此書あるを知らず、故に言、此に及ぶなし、後余之れを告げて始めて之れあるを知る、蓋し先生嘗て遍く諸子を解せんと欲して中止し、著はす所を以て土苴となして、篋中に捐てゝ、人に示さゝるなり、

右三種の書は徂徠山人外集十巻として世に傳ふるものなり、

鈐錄二十卷

此書久しく寫本にて傳はりしを、安政四年に至り郡山藩主之れを上梓せしむ、首めに服元濟及び宇佐美先の序を載せ、終りに物部昌（徂徠の玄孫）及び服元彰の跋を掲ぐ、文會雜記卷之三下に云く、

徂來曰く日本に節制の軍法なし、皆武士のはたらきなり、これに因りて鈐錄を著はせり、和流の軍になきことを著はせると、春臺かたれり、

徂徠は此書の序文中に節制の要を論せり、其言甚だ我邦今後の軍略にも切要なるものあるが如し、

軍法不審書一卷寫本

番外雜書解題によるに、此書は徂徠が其門人岡田宜汎の問に答ふる往復の書にして凡そ十條あり、

度量考二卷

絕句解三卷

絕句解拾遺一卷

服部南郭が「物夫子著述書目記」によるに、徂徠初め絕句解を撰ぶとき稿中より删り去るものあり、徂徠沒後、門人其遺落を惜んで拾收し刊行せるもの、卽ち此書なり、

孫子國字解十三卷

吳子國字解五卷

古文矩一卷

南留別志五卷

此書は宇濤水が校訂して寶曆十二年を以て刊行する所に係る、題して南留別志といふは書中臆斷して「なるべし」といふこと多きによるなり、溫和叢書中に「南留別志の辨」一卷あり、是れ何人の著なるやを詳かにせず、兎に角徂徠の誤謬を辨せしものなり、

駁朱度考一卷

此書は徂徠が公命を奉じて著はす所にして、專ら明人朱載堉の律學新說を駁せるものなり、日本文庫第十編に此書を收載せり、

譯文筌蹄九卷

初編六卷、後編三卷合せて九卷なり、初編は徂徠の口授にして僧聖默、吉有鄰二氏の筆受する所、正德五年の刊行に係る、後編は竹里山人の補譯にして岡好問の校訂する所、寬政八年の刊行に係る、

經子史要覽二卷

此書は今の所謂書史にして經子十八部の總論と解題なり、森直文化

元年を以て之れを上木せり、其序に云く、

經子史要覽は、徂徠先生の口授する所にして、門人平子彬の筆受する所なり、先生論著する所の論語徵、學庸解、學則、二辨、文集諸書、寰區に布く、人々之れを知る、但其言、諸處に散見するを以てや、未だ其要を撮み易からず、此書は則ち各書に就て一々提撕し、諄々として舍かず、人をして卷を披いて一目瞭然、皆其旨趣を得せしむ、眞に讀書の要訣なるかな、其後學を惠むや深し、此れ其緖言と雖も豈に貴からずや、

卷末に徂徠の書牘一篇を附す、是れ徂徠集の脫する所に係る、近頃、佐村八郎氏此書を取りて漢書解題中に收載せり、

琉球聘使記一卷寫本

文罫一卷

此書は徂徠初年の作にして、彼れ自ら疾くに焚毀せりといふ、

明十三省考定圖一帖

唐後詩七卷

四家雋六卷

周易解六卷

此書は白重行が徂徠の遺訓によりて著はす所なりといふ、然れども未だ其果して徂徠の遺訓に出でたるものなりや否やを知らず、

明律國字解三十七卷

服部南郭が「書目記」に云く、

右晩年の作、唯〻律語多く讀み難きが爲めにして、解を作り、以て家に藏するのみ、云云、乃ち盟者八人と特に睹るを得るのみ、餘は同社と雖も、輙ち視るを許さず、

此れに由りて之れを觀れば、此書亦蘐園の秘書なりき、文會雜記卷之三に云く、

徂徠明律を解せられたる時、弟叔達ひとり御城へ召して律のこと御尋ありたる故、横帳にして懐中せられたるがあり、少しづゝ叔達

のこじつけもあり、それを何者かこしらへてにせ物して外へ出したるなり、それゆゑにせものは少部なりとなト、即ち此書の僞物、多少行はれたるを知るべきなり、

樂制篇一巻寫本

樂律考一巻寫本

此書は又題して大樂發揮といふ、

幽蘭譜抄一巻

琴學大意抄一巻寫本

琴の起り、琴の名義等總べて琴に關する事を論述せるものなり、

文變一巻

韻概一巻

滿文考一巻

葬禮考一巻

此書は藝州廣島平田屋町栢屋擣藻堂村田平七が明和五年八月を以

て刊行する所に係る、

詩題苑三卷

廣象棊譜一卷

其他先哲像傳、近代名家著述目錄、慶長以來諸家著述目錄等に徂徠の著述として列擧するもの多々之れあれども、其書の眞贋存否等未だ詳かならざるが故に姑く之れを闕如す、



第三 文藻

徂徠は德川時代に於ける第一の文豪ならん、輭文學に於ては馬琴の如き巨人ありと雖も、硬文學に於ては恐くば徂徠の右に出づるものなからん徂徠は詩文の兩者に長じ、經學之れが根柢を成し、等身の著書に富み、從來の各學派を壓して、蔚然として別に一派を開き、門下よりは濟々たる多士を出だし、昭代の風雅を掄揚したるの功は決して沒すべからざるなり、後、頼山陽の如き文豪ありて出でたりと雖も、啻に其學殖の徂徠に及ばざるのみならず、其學派としての勢力、亦殆んど認容するに足らざるなり、徂徠の文は大率、規模正大にして、氣魄光燄あり、例へば、辨道辨名の如き、學則の如き、與藪震菴書の如き、皆大家の文たるに耻ぢざるものなり、詩も亦格調多くは高古にして專門詩人と雖も、或は及び難きものあり、要するに、徂徠の大手腕は何人も否定すること能はざる所なり、惜いかな、徂徠李王の擬古文を好んで邪路に迷ひ、大に害毒を文學界

に流せり、李王は李攀龍王元美の二氏をいふ、攀龍字は于鱗、滄溟と号す、元美名は世貞、鳳洲と號し、又弇州と號す、元美は其字なり、何れも嘉靖年間の進士にして古文辭を修め、文名一代に高し、當時李于鱗、王元美、宗子相、呉明卿、徐子與、梁公實、謝茂秦の七氏を七才子と稱せり、就中李王の二氏最も卓絶せり、徂徠何故か韓柳を取らずして反りて李王を喜び、古文辭を修め、專ら擬古文を作れり、故に字句多く艱澁にして讀み難く、陳々相依るの趣あり、極言すれば、古人の片言隻句を拾ひ集めて、補綴せるが如きの看あり、徂徠自らは大識見を懷ける大手腕なるが故に、其文章如何に險怪なるも、尚ほ大に見るべきものありと雖も、彼れが門下の末派に至りて其弊愈々甚しとなす、徂徠一時古文辭を以て一代を壓せしと雖も、若し彼れが古文辭を取らざりしならば、其功更に倍蓰せしものあらん、然るに彼れが古文辭を取りし爲めに、其文章殆んど今日に用なきものとなれり、若し事實いかんを主とせば、古文辭よりは言文一致の方、反りて勝れりといふべきなり、然るに彼れがむつかしき字句を排列して、

務めて古雅を示さんとしたるは、寧ろ笑ふべきの誇衒 vanity に過ぎざりしなり、彼れ以爲く、聖人の道を窮めんと欲せば、古書に通ぜざるべからず、古書に通ぜんと欲せば、古文辭を能くせざるべからず、然れども古書に通ぜんが爲めに、是非とも古文辭を能くせざるべからざる必要は毫も之れなきなり、然るに强ひて之れを主張するは、何等か主張する所あらんと欲して主張するもの丶如し、拙堂文話卷一に云く、

徂徠村夫に學博く、王弇州と東西に屹對し、並に曠世の偉人たり、恨らくば二人の由る所皆正しからず、其作後人をして厭惡せしむ、余常に謂く學識にありて才にあらず、若し二人をして識見醇正ならしめば、古人と雖も亦必ず襟を斂めて之れを避けん、

其言當れり、又云く、

弇州徂徠の學滄溟より博きこと、固より言を待たず、二人の才、滄溟より大なること又江と海との別あるなり、而して二人滄溟に心醉し、其一生を誤る、理の解すべからざるものなり、徂徠自ら言ふ、天の寵靈に

よりて于鱗氏の教を奉ずと、余謂らく、徂徠をして于鱗を奉ぜざらしめば、本邦の文章、誰れか其右に出づるものあらん、豈に其不幸にあらずや、

吾人も亦然か思ふ、徂徠が曠世の偉才を抱きながら李攀龍の如きものを崇拜して、邪路に陷りしといふことは、惜みても又餘ありといふべし、彼れが門下にありては、春臺獨り古文辭を喜ばず、乃ち之れを糞雜衣と名づけ、大に其非なるを論せり、事は文論に詳なり、中井竹山、非徵を著はし、論じて曰く、

徂徠王李の文を以て古學の津梁となし、嘖々口に容れず、其崇奉も亦至れり、然るに王李は齷齪たる竪子、其作爲する所、割裂纂組の巧、摹擬剽竊の務、何の古文か之れあらん、特に謂ふ所の鷄鳴狗吠の雄のみ、其詿誘となり謬り信じ、古文此にありといひ、遂に其巧を牛鼎にし、之れを古經に移し、以て聖門の眞を得たりとなす、齟齬も亦甚し、是れ猶ほ市井の細民、雜劇本子を讀み、以て實際となし、因りて以て古今治亂の

逆を論じ、源平藤橘の事を譚じ、以て廣坐に噪らするなり、讀者傍にありて捧腹す、

其他後世徂徠の古文辭を誚るもの、擧げて數ふべからず、殊に山本北山の如きは、袁中郎を尊崇して起り、徂徠の古文辭に大打撃を加へたり、兎に角古文辭を主張したるは、徂徠一生の過失にて、幾もなく、識者は其非なるを斷言し、寛政以後に至りては、獨り韓柳の文のみ、行はるゝことゝになり、復た一人の古文辭を主張するものなきなり、

徂徠は詩に於ても李王に倣ひ、唯擬古をのみ務め、殊に唐詩選を喜びしが故に、彼れ及び彼れが學派の詩は悉く唐詩の摸擬なり、然れども徂徠はさすがに才氣逈に餘人に勝れたれば、自然に格調高古の作をも吟じ出だせり、今左に數首を擧げんに、

春日上樓

落日高樓俯碧霄、關中春霽望愈遙、把杯意氣千秋色、獨看芙蓉白雪驕、

還館作

甲陽美酒綠葡萄、霜露三更濕客袍、須識良宵天下少、芙蓉峰上一輪高、

秋江送別

白露青楓兩岸秋、無窮別恨滿中流、何堪明月潮生早、望斷蓬萊仙子舟、

東都四時樂 節一

秋滿品川十二欄、東方千騎簇銀鞍、清歌一闋人如月、笑指滄波洗玉盤、

東奥人覓詩

聞說仙臺十二樓、金華山色映波浮、題詩我欲隨青鳥、看盡扶桑欲盡頭、

寄題豐王舊宅

絕海樓船震大明、寧知此地長柴荊、千山風雨時々惡、只作當年叱咤聲、

送縣次公

錦帆西盡青疑州、赤馬關高大海流、料識愁心秋不極、回頭東望月如鈎、

觀潮

八月秋濤大廣陵、壯觀哉、勢疑呑地盡、色似盪天來、百萬雷聲合、須臾龍界開、何人璞徑寸、拾得此中回、

浪淘沙詞

靑樓十二是儂家、下瞰大江浪淘沙、淘去郎恩海還淺、淘來郎恩山更加、淘去淘來無定處、誰知儂意亂如麻、

是等の作によりて畧、徂徠が技倆を窺ふを得ん、又徂徠一生一首の作として傳ふる歌あり、先哲像傳卷三に見ゆ、云く、

吾門の五もと柳枝たれて長き日あかぬ鶯の聲、



第四　仁齋と徂徠との關係

伊藤仁齋は徂徠の誕生に先つこと二三年前にして已に古學を京師に主張し、多く子弟を教授せり、然れども其著書は語孟字義童子問を始めとし、皆仁齋死後に至りて之れを上木して、廣く世間に傳播せり、即ち仁齋が著書の出版せられたるは、彼れが古學を主張し始めてより四十餘年の久しきを經過せり、然れども寫本は疾くに學者間に流布せしに相違なし、徂徠は初め朱子學を信奉し、三十九歲に至るまで何等の變化をも見ず、然れども彼れ蚤に李王の古文辭を喜べるが如し、答安澹泊書に中年李王が集を讀むことをいひ、又譯文筌蹄の題言中に李王等七才子の詩を論じて「此自唐詩正脉」といふを以て知るべきなり、然れども未だ古學を唱道するに至らず、然るに彼れ偶〻仁齋が大學定本語孟字義の寫本を見るを得て、深く仁齋が卓見に敬服し、乃ち書を裁して仁齋に送り、其景慕の情を陳述せり、其書に云く、

鄕馮子固。通殷勤于左右。辱蒙弗外。允致寒暄于左右。幸甚曷加。始不佞少在南總。則已聆洛下諸先生。以踰先生者也。心誠鄕焉。後値赦東歸。則會一友生新自洛來。語先生長者狀。娓娓弗置也。而益慕焉。適見先生大學定本語孟字義二書。則擊節而與。以謂先生眞踰時流萬萬。居一二歲。入仕本衙。乃獲與子固友也。則觀其爲人。忠信可愛。歲壬午來。同局共事最熟。而益想先生敎誨之有在焉。子固亦時時與不佞討論上下語孟諸書。則驚歎以謂何與吾先生之言背也。而一二有所聞於子固者。不佞斯未能全信焉。雖然不佞豈敢自信。亦思所以質於先生者耳。嗚虖茫茫海內。豪杰幾何。一亡當於心。而獨鄕於先生。否則求諸古人中已。亦曰不佞不自揣之甚也。先生或態思其情。豈不大哀憫乎。此不佞所以神飛左右之久也。山川千里。所賴斯文。氣脉流通。惟先生恕其狂妄而待以子固之友人。幸更甚。伏惟冰鑒。時下漸寒。千萬自重。不宣。

眼、一世を空うする徂徠其人にして、此言をなすを以て之を觀れば、彼れが胸中如何に仁齋を推尊せしかを察知すべきなり、然るに此時に當り

て仁齋齡已に桑楡に迫り、老病蓐にありしもの丶如し、故に遂に答へず徂徠自ら其時の事情を述べて曰く、

予仁齋が門人邊子固と同寮相善し、處る所の舍亦相接す、暇あれば、則ち相往來して、與に共に語孟の諸書を論說し、其說を上下す、子固廼ち言つて曰く、先生の言、何ぞ、吾仁齋先生と相似たるや、朱子の說の若きは、則ち初めより先生と類せず、知らず、先生何づくより之れを得たると、是れ蓋し其師說を信じて爾かいふ、又子固に從つて其々師に聞く所のものを叩くに及んで、則ち予が心に慊はざるものあり、遂に子固を介紹として、以て書を仁齋に寄す、其意は則ち謂らく、交を定むるの後、庶くば以て吾が未だ信ぜざる所のものを質し、其過を裁して其正に就くことあらんことを、是れ彼れに益あらずんば、則ち必ず我れに益あらん、子固又旁より其謙虛無我を稱して已まず、予も亦旦夕其報の至るを竢つもの、一年に垂んとす、仁齋死して報至らず、是に於て予稍、之れを疑ふ、其後其徒、其行狀碑碣を梓して以て世に行ふ、則ち卷後

附するに、安省菴及び予が寄せたる書を以てす、是に於て予又愈〻益〻之れを疑ふなり、其著はす所の語孟字義童子問大學辨といふものを閲して、其宋の諸老先生を謂ふて禪儒となし、朱子を不仁の人となすに及んで、則ち其人となりを薄しとするに足れり、蓋し其意專ら門戸を立つるを以て務めとなし、我書牘百たび往くと雖も其れ何ぞ能く人の言を容れんや、子固が忠信なる亦其れに詐されたり、併せて其學庸繫辭を擯して用ひず、先王と孔子との教を判して之れを二にするを觀れば則ち一に何ぞ彼の浮居中の日蓮と相似たるや、噫、

徂徠が語孟字義を讀みたるは、書を仁齋に送る前の事なり、然るに仁齋が答ざるによりて始めて語孟字義を讀みたるが如く言ふもの、偶〻以て其眞にあらざるを見るに足る、徂徠仁齋が答へざるを以て故意に然るものとなして、大に憤激し、蘐園隨筆を著はして痛く仁齋を攻擊し、程朱を辯護せり、例へば、仁齋が萬古無窮論の如き、一元氣論の如き、仁義禮智論の如き、皆徂徠が力を極めて其非を論ずる所なり、其他種々特殊の點

を執へて論難し、甚しきは、字句の誤謬をも指摘せり、然れども徂徠は如何なる點に至るまでも悉く反對せんとするにはあらず、間〻仁齋が言を擧げ、或は「此爲名言」といひ、或は「此語誠佳」といひ、或は「此論亦佳」といひて同意を表せり、殊に仁齋が天地を以て一大活物となして、生々活動の主義を主張するが如きに至りては、徂徠大に之れを賛成せり、其言に云く、

仁齋の學、其骨髓、天地一大活物といふにあり、此れ其時流に踰ゆる萬々なる所以なり、

然れども徂徠は程朱の意亦此れに外ならずとして論じて曰く、

此れ自ら程朱の意、初めより程朱と殊なるにあらざるなり、所謂動の端乃ち天地の心、及び用は天地の先きに行はる、及び動靜端なく、陰陽始なし、道を知るものにあらざれば、孰れか能く之れを識らんといふ者のゝ如き、皆此意なり、而して此れを學問大綱領の處となす、故に程朱諸先生の一言一句、此處より流出せざるものあるなし、予十七八の時、斯に見るありて、中夜便ち起き、手の舞ひ、足の蹈むことを覺えず、此

れより後、愈益程朱諸先生の德を戴いて衰へず、以て今に至るまで三十年一日なり、而るに仁齋なるもの、此れによりて遂に程朱を詬ること仇讎の若くすることを致す、世の怪むべきもの、豈に此れに過ぐるあらんや。

然れども程朱の學が自ら寂靜主義に陷りて、生々發展の活氣に乏しきこと決して否定すべからず、徂徠が活動の意味ありとして引用する所の如き、皆未だ十分適切なるものにあらず、然るに仁齋が獨り自ら思惟して、大に活動主義を主張したるが如き、其功決して沒すべからざるものあるなり、徂徠竊に仁齋の長處を認容しながら、尚ほ之れを曖昧の裏に葬り、偏に勝を制せんとするが如きは、反りて丈夫の取らざる怯懦なる態度といふべきなり、徂徠痛く仁齋が學者としての擧動を非として、曰く、

仁齋が註を觀るに、其佳なるものは、皆先儒の說、剿ちて以て己れが有となし、不らざるものは、多く其意見に牽かれ、硬語强辨、一に先儒を排

擊し、己れが門戶を立つるを以て事となす、假使ひ其言一々理に當るも、門戶一たび立ちて、後學蒙生、其窠臼の中に墮つ、これを驥足を縛するに譬ふ、何によりて能く千里ならん、况んや排擊一たび行はれて、輕薄風を成し、其弊の流るゝ所、必ず勝げて言ふべからざるものあらん、

是れ仁齋が一家の創見あるを蔽ふの言にして、固より瞎評に過ぎず、若し其門戶を立つるの弊を言ふに至りては、仁齋よりは寧ろ徂徠彼れ自身に適切なり、少くも徂徠は尤めて之れに倣ふものといふべきなり、之れを要するに、蘐園隨筆は學問識見に於て未だ仁齋に當るに足らざるの概あり、但し仁齋が字句の誤謬を指摘するに至りては、徂徠が文章の技に於て仁齋に優れるものあるを知るべきなり、然れども或は他を責むるに急にして、反りて自ら間隙を生ずる所なきにあらず、例へば仁齋が「爲誠大德之人」と云へるを正して「誠當作眞、否則移在爲字上可」といへり、然れども孟子に「不誠大丈夫哉」とあり、此れに由りて之れを觀れば、仁齋が文、必ずしも誤れりといふを得ず、文會雜記卷之二下に云く、

蘐園隨筆に難ぜられたる孟子不誠大丈夫哉と云ふことあり、徂徠忘れられたるかと春臺も評判なりとなり、

此文少しく語を成さゞれども、徂徠が孟子の句を忘れたるを春臺竊に非難せるをいふに似たり、和氣行藏亦論じて曰く、

余十四五の時、蘐園隨筆を讀んで、英雄の事初めより大に人に異なるものあるを歎ず、仁齋先生の文を改むるに至りては、則ち服せざる所あり、文戒中に云く、儉にして施を好むものは、誠の大德の人たり、誠は當に實につくるべし、否らざれば、移して爲の上にありて可なりと、董[illegible]仁齋先生の文蓋し孟子の公孫衍張儀は豈に誠の大丈夫たらずやより來る、物先生何故に改正すと、後董子問を讀むに云く、儉にして施を好むもの云云、儉にして施すことを知らざるものは、眞の守錢虜のみと、因りて知る、先生知らざるにあらず、文變化あらんと欲するなり、隨筆の中此類一にして止まらず、蓋し物先生亦知らざるにあらざるなり其心謂らく、業の立つは名にあり名を收むるは人を

驚かすにあり、人を驚かすは、知名を破るにあり、夫れ業立ち名遂げて、而して往事說くべしと、其膽量蓋し此の如し、(柳齋筆記卷一)

其言鑿々猴に中れるが如し、徂徠固より仁齋を擊倒して己れが名聲を揚げんと欲す、故に枉れるを矯めて直きに過ぐるの呰を免れざるなり、文會雜記卷之一上に云く、

徂徠は初め名は世上にさのみ聞えず、蘐園隨筆刊行已後世上に名を廣く稱せられたりとなり、

乃ち知るべし、彼れ當時學界の泰斗仁齋を攻擊し、此れに由りて名を博するを得たるを、文會雜記に又云く、

蘐園隨筆は二筆三筆も段々かくつもりなりしが、出でずしてやみぬと南郭の語られける、

是れ徂徠が學說の幾もなく一變せしが爲めなり、徂徠本と功名心に富める者の、熱心に仁齋を攻擊しつゝある間に深く其說に動かされたりと見え疾くに宋學を抛ちて古學に一變すべき急轉直下の時機に際會せ

り、然れども首を垂れて仁齋の籬下に立つことは、彼れが性の傲岸なる、到底耐ふる能はざる所なり、是を以て遂に一家の古學を主張して、宋儒と仁齋とを併せて之れを攻撃するに至れり、然れども彼れが忽然古學に一變せしは、全く仁齋の刺激を受けたるに起因すること毫も疑を容るべからざるに似たり。



第五　學風

蘐園の學風は堀川の學風と正反對を成せり、後者は道德を主とし、前者は道德を主とせずして、寧ろ文章を主とす、徂徠は學則の七の末に「學寧ろ諸子百家曲藝の士たるも、道學先生たることを願はず」といへるが如く、宋儒若くは仁齋に倣ひ、專ら身を修め行を正うするの一事に心を傾くることを欲せず、故に其門人後世に對するの態度、甚だ寬大にして、淸濁併せ呑むの概あり、是れ其衆望を繫ぎ、隨つて人物の大を成しゝ所以なり、學則の六に云く、

君子は輕しく人を絕たず、亦輕しく物を絕たず、其大を成す所以なり云云、是非淑慝、適もなく、莫もなし、大抵物其養を得ざれば惡なり、其所を得ざれば惡なり、養ふて之れを成し、其所を得しむれば、皆善なり、人を虎狼に媲べ稗荑を穀に糅ふれば、惡なるのみ、然りと雖も、天地虎狼を厭はず雨露稗荑を擇ばず、聖人の道亦猶ほ是の若きか、其已むを得

ずして之れを去り、之れを遠け、之れを扶ち、之れを殺すは、其仁に害あるを悪んでなり、其悪を悪むにあらざるなり、故に不仁を悪むの甚しきは、仁を好むの至らざるなり、

是れ實に「太山は土壤を讓らず、河海は細流を擇ばず」の旨意にて、襟度宏量、洵に欽すべしとなす、若し之れを夫の愛憎に急にして、餘裕なく、局促として感情に馳するものに比すれば、固より同日の談にあらざるなり、然れども徂徠が道德を疎外したるは甚しき過失にて、其弊害亦決して少しとせず、數多の門人後生彼れを仰いで其模範とするに當りて、彼毫も道德を重んぜず、豪傑を以て自ら居り、又子弟を竢つに其豪傑たらんことを期せり、是故に門人後世多くは其行を修むることを務めず、甚しきは放蕩無賴となれり、獨り春臺は例外に屬すれども、南郭、周南、東野、金華の徒、皆文墨の士に過ぎず、殊に東野、金華の輩に至りては、學者として何等の尊敬すべきものあるを見ず、先哲叢談巻之六に云く、

嘗て東壁を過ぎる時に東壁方に妓を携へ來たりて媟狎す、徂徠の入

るに會し、倉皇として爲す所を知らず、遂に謝りて曰く、家妹幼にして某侯に宦す、近ろ暇を賜ひ、歸りて家に居ると、徂徠既に之れを覺る、明日使を遣はして鮮魚を致し、以て才子佳人に配するを賀す

東壁は東野の字なり徂徠の雅量、喜ぶべしと雖も、其教育の餘りに放任に失するを惜む、金華の如きは、其行爲放縱不羈、殆んど市井無賴に類するものあり、春臺曰く、

徂徠先生、見識卓絶、道を知ること甚だ明かなり周南以て鄒魯以後是人なしとするもの、過論にあらざるなり、惟其行、其知る所に及ばず、殆んど所謂行、掩はざるものか、蓋し先生の志、進取にあり、故に其人を取るに、才を以てして、德行を以てせず、二三の門生、亦其說を習ひ聞き、德行を屑しとせず、唯、文學を是れ講ず、是を以て徂徠の門跅弛の士多く、其才を成すに及んでや、特に文人たるに過ぎざるのみ、其敎然るなり、外人既に是れを以て先生を譏る、純亦嘗て竊に先生に滿たず、此れ先生の純を雞肋視する所以なり、書に云く「之れを知る、難きにあらず、之

れを行ふ惟れ難し、先生あり(紫芝園漫筆之卷六)

蘐園の徒に板倉璜溪といふものあり、亦放蕩不軌、春臺嘗て之れを稱人中に面質せり、彼れ又云く、

徂徠先生、平日小子輩を敎へず、是を以て其門、長幼の序なし、(同上)

是れ徂徠が敎育法の缺點を無遠慮に道破するものなり、徂徠彼れ自身の行爲は、固より驕傲に失するものありと雖も、閨門の内に於ては反りて嚴肅なりしといふ、是故に私德の點より之れを言へば、彼れ必ずしも深く咎むるに足らざるなり、然れども敎育家としては寧ろ人の子を傷ふことなきを保せざるなり、雨森芳洲は徂徠と同時代の學者なり、彼れ其子顯允をして徂徠に就いて學ばしむ、然れども徂徠、門人後生に敎ふるに德行を以てせざるを以て少年を託すべからずとなして、其關係を絕たしむ、芳洲口授の首めに板倉勝明、芳洲が傳を載す、其中言へるあり、云く、

物徂徠復古學を倡ふ、先生相見て甚だ之れを悅ぶ、徂徠亦其篤學を稱

す、先生乃ち其子顯允をして就學せしむ、既にして先生歎じて曰く、茂卿は一代の豪傑、然れども其人を教ふるや、浮華を尙んで、德行に原づかず、久しく少年輩を託すべからざるなり、と、遂に辭せしむ、

徂徠の門人中にても東野は年僅に三十七にして咯血の疾を得て早逝し、金華は年四十五にして歿し、高蘭亭は年十七にして全く明を失ひ、其他夭折せしもの、往々にして之れあり、其原因、固より推究し難しと雖も、亦其徒に元氣を消耗せしに由るにあらざるか、是れ一の疑問に屬するなり、

宋儒及び仁齋の徒は皆聖人を以て理想的人格となし、直に之れを我身に實現せんことを期せり、故に常に崇高なる觀念を以て充たされ、其進修の功、大に觀るべきものあるなり、然るに徂徠は聖人は到底企及すべからざるものと斷念し、唯其敎の事實と文辭とを研究するを以て學者の事業となし、論じて曰く、

聖人の心は唯聖人にして後之れを知る、亦今人の能く知る所にあら

ざるなり、故に其得て推すべきものは、事と辭とのみ、事と辭とは、卑々焉たりと雖も、儒者の業、唯章句を守りてこれを後世に傳へ、力を陳べて列に就くは、唯其分なり、其道の若きは、則ち以て後の聖人を竢つ、是れ不佞が志なり、（答安澹泊書）

又曰く、

宋儒の傳注、唯理を其心に求めて、以て之れを言ふ、夫れ理は定準なきものなり、聖人の心は、得て測るべからず、唯聖々を識る、宋儒のなす所、豈に倨らざらんや、不佞は則ち敢てせず、夫れ道は高し美なり、觕劣の資、企て及ぶべからず、故に卑々焉として、これを事と辭とに求む、其心謂へらく、儒者の業、唯古聖人の書を守りて以て後人に詔けば、其れ斯れ可なり、後賢の説、妙なりと雖も、其事辭に於て合はざることあるや、何を以て聖人の心と道とに於て必ず合ふことを知らんや、君子は其知らざる所に於て蓋し闕如す、云云、陽明仁齋が如きも、亦宋儒を排するものなり、然れども唯其心を以て之れを言ふて、これを事と辭とに

求むることを知らず、亦宋人の類のみ（答屈景山書）

徂徠は此の如く己れが知力を頼んで倫理を推究するが如きは、是れ到底無益の事なりとして之れを拒絶し専ら學者をして事實と文辭との研究に從事せしめたり、是故に儒者は單に聖人の教を傳ふる器械となり、學問は口を糊する一種の營業となれり、徂徠又論じて曰く、

詩書は辭なり、禮樂は事なり、義は辭に存し、禮は事にあり、故に學問の要卑くこれを辭と事とに求めて、高くこれを性命の微、議論の精に求めざれば、憑據する所ありて後世紕繆のある所を識るべし、爾らずして徒に己れが心と理とを以て之れを言はゞ、泛然として底止することあるなきのみ（對西肥水秀才問）

是れ宋儒性理の學の煩瑣を避けて、事業の考證と文辭の解釋とによらんとするものにて、其志必ずしも非なるにあらず、然れども初めより哲學的考察を拒絶するが故に、思想の源泉てふものは得られずして其結果、寧ろ古文辭學、今の所謂古語學的研究 philological study となれり、徂徠

が一生得意に主張する所は、其古文辭學にあるなり、彼れ曰く、

中年李于鱗王元美が集を得て以て之れを讀むに、率ね古語多く、得て之れを讀むべからず、是に於て憤を發して以て古書を讀む、其誓つて目、東漢(即ち後漢)以下に渉らざること亦于鱗氏が敎の如くするもの、蓋し年あり、六經より始めて、西漢(即ち前漢)に終へ、終はりて復た始まる、循環端なし、久うして之れに熟すれば、啻に其口より出だすが若くなるのみならず、其文意互に相發して、復た注解を須ひず、然して後二家の集、甘うして蔗を噉ふが如し、是に於て首を回らして以て後儒の解を觀れば、紕繆悉く見ゆ、たゞ李王心良史にありて、六經に及ぶに遑あらず、不佞は乃ちこれを六經に用ふ、異ありとなすのみ(答安澹泊書)

又曰く、

不佞幼より宋儒の傳注を守り、崇奉年あり、積習の錮する所、亦自ら其非を覺ゑず、天の寵靈によりて、中年に暨んで、二公(即ち李王)の業を得て以て之れを讀む、其初め亦入り難きに苦む、蓋し二公の文は、これを古文

辭に資る、故に古書に熟せざるものは、以て之れを讀むこと能はず、古書の辭、傳注の解すること能はざるもの、二公これを行文の際に發して渙如たり復た訓詁を須ひず、蓋し古文辭の學、豈に徒に讀むのみならんや、亦必ずこれを其手指より出ださんことを求む、能くこれを其手指より出だして而して古書猶ほ吾口より出だすがごとし、夫れ然して後、直に古人と一堂の上に相揖して紹介を用ひず、豈に郷きに門墻の外に徘徊し、人の鼻息を仰いで以て進退するものゝ如くならんや、豈に愉快ならざらんや云云、夫れ六經は皆事なり、皆辭なり、苟も辭と事とに嫺はゞ、古今夫れこれを掌に眎るが如きか、是に於て首を回らして後世の書を讀まば、萬卷夥しと雖も、破竹の如く然り、これを良工は必ず先づ堅木を攻むるに辟ふ、吾が乃これを盤根錯節に試みて、其餘の脆材柔木は易々たるのみ(答屈景山書)

徂徠の古文辭を修むるに至りしは、李王の先容あるによりて然るなり、然れども其李王と異なる所は、李王は單に古文辭を修むるに止まりし

も、徂徠は更に之れを經學に應用し、先づ古文辭に熟達して、此れを以て己れが唯一の文辭となすにあらざれば、經義も亦能く解釋することを難しとなすにあり、徂徠是に於て一家の主張を得たり、其天の寵靈によりて之れを得たりとするもの、亦宜ならずや、徂徠、仁齋と同じく古學を唱道すと雖も、其仁齋と異なるは其古文辭の必要を認容するにあるなり、仁齋は寧ろ唐宋の文躰に倣ひ、其叙述する所達意を主とするに似たり、徂徠、仁齋に後れて起り、仁齋に反し、唐宋の文躰を取らずして古文辭を取り、此れを以て經學研究上斷つべからざる關係あるものとせり、是を以て徂徠、必ずしも仁齋に雷同するものにあらざるを得たり、啻に然るのみならず、又古文辭の必要を主張して仁齋を攻擊するの餘地を得たり、況んや宋儒をや、是れ徂徠が跅弛豪宕、一世を睥睨して最も得意なる所以なり、徂徠の學は固より古學に相違なしと雖も、亦古文辭學として仁齋のと區別すべき所あるなり、仁齋、古文辭に力を用ひざりしが故に、經義に於ては往々徂徠に及ばざるものありと雖も、又專ら思ひを修德

の工夫に凝らし、聖人の人格を以て實行の理想とせしが故に德化の功に於ては、遙に徂徠の上にあり、徂徠は古文辭の必要を主張して、門人後生をして主として力を修辭に用ひしめ、宋儒及び仁齋の徒を道學先生と稱して嘲罵の口調をなせり、其之れが爲めに名敎を害せしこと、蓋し鮮少にあらざるなり、尾藤二洲論じて曰く、

古文辭學は、物徂徠より起る、余初年學びたる故に、能くその意を知れり、其學の主とする所は、功利にありて、聖人を假るは緣飾までなり、道は先王の作り玉へる者にて、自然の理にあらず、安天下の具にて、當行の路に非らずといふこと、其綱要の所にて、皆功利に本づきたり、畢竟は道といふも、聖人の天下を理め玉へる法を今に傳へたることにて、今時の掟の如き者なり、六經といふも、御成敗式目の如き者なりといへるなり、この起りは、かの老平生功利をのみ心懸けしより、何を見ても、その姿に思ひなし居る處に、仁齋が說を聞き、略其意にあたる所あるを悅びて、又面を換へ頭を改めて、即ち建立し出だせるなり、荀卿奇を好

んで思孟諸賢を謗り、其門人李斯遂に聖人の書を焚けるが如し、異を好むの弊、懼るべきことにあらずや、その禮樂を專ら說けるも、亦かの式目の意なり、今又彼れが大意を取りていはん、先王と申すも、開國の君をいへるにて、實は漢祖唐宗も同じことなり、たゞ其智勝りたるゆゑ、式目を立てられし處が、後の帝王に越えて好きなり、其式目に禮樂といふ者を作り、それにて政をせしゆゑ、其世の風俗、秦漢以後の及ばぬことあるなり、今政を爲る者、かの古き蹤を追はゞ、是れ聖人の道を行ふといふ者なり、政に與らぬ者は、たゞ先王の道を明かにするのみなり、先王の道を明かにするとは、かの禮樂の說に通ずるをいふもし禮樂なければ、先王の道もなしと、大意是程の事なり、左れば其學たゞ理民の術のみにて、自己の身心は置いて問はざるなり、故に身に非法の事を爲れども、恥とせず、其徒みな先王の禮、先王の義などいふことを口實とすれども、其志は蘇張に過ぎず、或は嵆阮が放蕩にならひて一世を傲睨せんとす、もしそれに向ひて義理を說く者あれば、耳を掩

ひて腐儒の陋見と嘲り笑ふ、かゝる輩、世に多くなりて、淫縱奇怪の行をする者往々に蔓れりが、それを餘りの事と思ひしにや彼れが門人太宰某は、脩身の事をも説きて、其身をも堅く持てり、されども偏執なること愈〻甚しく、徂徠が敢て言はざることをも、説き出だせり、固より擧げ論ずるに足らずさて禮樂の事は今己に亡びて、且つ此方に行ひ難きことなれば、姑くこの説をなして、緣飾せるまでにて、實は唯功利の事のみを心懸くることなるを、吠聲の徒、辨へ知らずして、禮樂禮樂といひて、一生を送り過すこと、返す〳〵も怪むべきことなり、是れは彼れが徒たる者、たゞ詩文のみを一生の事業として、年月を暮すゆゑ、心つかずと見ゆ、もし道といふ者に心つきなば、道は禮樂のみ、禮樂は今亡びぬ、ではいかに先生は何をか道とせられしと、始めて驚き思ふべきか、誠に淺丈夫といふべし（正學指掌附錄）

二洲の言、少しく過激に失する所あるが如しと雖も、大躰蘐園派の病弊を論破して頗る痛快なるものあるを覺ゆ、

其他尙ほ蘐園派の特殊の病弊は、一向專念、支那を崇拜し、一切文墨上の事物を支那風にせんとするにあり、徂徠の著書を見るに、其製本の体裁より表紙の色彩に至るまで、皆唐本の摸擬なり、又其文章に至りては、唯句讀を附するのみにて、反點もなく、傍訓もなし、是れ唐本を摸擬するの甚しきものにあらずして何ぞや、先哲叢談巻之六に曰く、

徂徠著はす所の書、字傍、訓譯を施さず、僧大典が萍遇錄に載す、朝鮮の成龍淵曰く、「貴邦の書冊、行傍皆譯音あり、此れ只一國に行ふべし、萬國通行の法にあらざるなり、惟、物茂卿の文集譯音なし」と即ち此一事、茂卿の豪傑の士たるを知るべきなり

假令ひ反點と傍訓とを附したればとて、支那朝鮮に行はるべき價値あれば、行はれざることなし、反點と傍訓とを附せざることが毫も豪傑の士たるの證にあらざるなり、表紙は唐本風のものよりは日本風のもの、適に丈夫にして文章は又反點と傍訓とを附する方、適に理解し易し、然るに事、此に出でずして、殊更に支那風にせんとするもの今の所謂「ハイ

カラ」と一般、詩衒を好む輕浮心に出づること推して知るべきなり、又徂徠を始め蘐園一派の姓名のいかに支那人に似たるかを見よ、例へば服南郭、藤東野、縣周南、平金華、宇灊水、高蘭亭等の如き、皆其複姓を修めて單姓となし、支那人に摸擬せり、獨り春臺のみ除外例となす、試みに徂徠集中に見ゆる人名を列擧せんに、

(1) 朽土州
(2) 非可觀
(3) 石叔潭
(4) 佐子巖
(5) 島謙叔
(6) 江若水
(7) 松霞沼
(8) 屈景山
(9) 木蘭皐
(10) 佐元錫
(11) 芳幼仙
(12) 左汐眞
(13) 縣雲洞
(14) 都三近
(15) 晁玄洲
(16) 墨倉徽

の類、いかに支那人の名字に酷似せるか、一見或は日本人の名字と思は

れざる程なり、今日より之れを考ふれば、眞に滑稽の所爲に似たり、然れども當時にありては、少しにても支那風にすることが、文明進歩の徵候の如くに思はれしならん、其事たる、今日浮躁の徒が、輕しく洗禮を受け、ヘンリー、エドワード、ゼームス等の基督敎的の名字を得て、竊に喜ぶと甚だ相似たるものあるなり、又徂徠が日本の地名を支那風にしたること實に豫想の外に出づ、例へば、江戸を武昌といひ、又武陵といひ、京都を洛陽といひ、又長安といひ、長崎を瓊浦といひ、廣島を廣陵といひ、箱根を函關といふが如く、一も二も支那の地名を摸擬せり、是に於てか蘐園一派の地名、次第に增加し、文學上典雅は典雅なりと雖も、後世の學者は頗る之れを了解するに苦しむ、因りて孔平珉文といふもの特殊の地名字書を著はし、是れを東藻會彙と目づけ世に公にするに至れり、蓋し其收載する所蘐園一派に限るにあらざるも、亦之れを主とすること疑なきなり、徂徠集卷之十四に孔子の贊あり、云く、

是謂克肖、吾豈敢、是謂不克肖、吾豈敢、亦惟唐帝之贈、袞冕十二章、儼然王

者服、萬世之下、萬里之外、伏惟聖德遠矣哉、

其孔子を推尊すること、神明も啻ならざるの槪あり、是れ固より當に其然るべき所なり、然れども其末に自ら書して云く、

歲庚子夏五月、日本國夷人物茂卿拜手稽首敬題、

己れを卑下して夷人といふに至りては、抑々自ら侮るの甚しきものといふべきなり、此の如き醜態を呈して、曾て其醜態なるを知らざるは、蓋し拜外の餘に出づるものにて、其弊の已に極度に達せるを知るべきなり、

蘐園一派の弊害、算へ來たれば、種々之れありと雖も、亦稱揚すべき點之れなしとせず、殊に徂徠が人才を愛せしは、卽ち天才敎育の旨意に合する所爲にて、固より非議すべき所にあらず、文會雜記卷之一上に云く、

徂徠は才を愛すること甚しき人なり、水足平之進が十六歲にて書牘を徠翁におくれる時、それを見て悅べること甚し、竹溪がゆきければ水足のことを云ひ出して、さても珍しきものなり、大事の物なればと

て、其文を取り出し見せられたるに、文字にも顚倒ありと云ひしかば、徂徠色を變じて、左樣なることを云ふぞ、顚倒などは、年のゆかぬゆゑあるはずのことなり、それが何の妨になるべき、此見識の勝れたる、誰れか立ち及ぶべきとて、くりかへし〲ほめられたりとなり、

又云く、

徂徠は殊の外に人の才をほめたつる人なり、春臺南郭は、中々人をほめず、それゆゑ弟子をとりたつること、徂徠の如くにはなきなり、又春臺は人の才ありて學問するをほむるは、人を害するなりとて一向にほめられざりしと君修(松崎觀海)の話なり、

思ふに後進の學生は多くは餘々たる名譽心を有するものなり、若し名望ある先輩にして其才を稱揚するあらば、必ず之れが爲めに奬勵せられて一層進步の途に就くを得ん、徂徠は一代の文豪なり、彼れにして後進の才を愛する以上は、後進の學生、豈に彼れが門下に集まり來たらざらんや、徂徠が遂に一代の領袖となり、當時學界の泰斗を以て自ら居る

に至りしもの、一は其天才教育に由ることと復た疑を容るべからざるなり、



第六　學說

第一　叙論

徂徠幼少にして林鵞峯及び林鳳岡に就いて學び、後、上總にあるとき、鵞峯の大學諺解を讀んで獨り自ら曉る所ありしといふが故に、本と林家の敎育を受けたるものにて、其崇奉する所は、朱子學なりき、然れども中年に及んで竊に李王の古文辭を喜び、天の寵靈によりて之れを得たりと思惟せり、唯〻未だ之れを經學に應用するを知らざるのみ、三十九歲に及んで始めて仁齋が著はせる大學定本、語孟字義の二書を讀んで、大に感ずる所ありしも、尙ほ朱子學の立脚地より之れを駁擊することを務めたり、然れども幾もなく古學に一變し、全く朱子學を拋てり、徂徠の學は仁齋のと同じく、宋學を排斥して直に、蹤を洙泗の正脈に接せんとするものにて、即ち古學なり、徂徠、仁齋を排斥すと雖も、其主張の古學にあるは一なり、且つ徂徠の古學を唱導するに至りたるは、全く仁齋の爲め

に啓發せられたるに本づく、其仁齋に負ふ所、豈に鮮少なりとせんや、然れども徂徠は古學を修むるには必ず古文辭を修めざるべからざることを主張す、是故に彼れが學を稱して古文辭學とも謂ふ、又學と共に文辭をも一切古風に復歸せんとするが故に彼れが學を復古學とも稱することあり、或は又曾て創唱者の名にちなみて徂徠學と稱せしことありと雖も、此名稱は漸く今日に適切ならざるものとなれり、

徂徠が道德上の見解は荀子に淵源する所多し、仁齋が孟子を尊崇するに引き換へ、徂徠は孟子を賤視し、寧ろ荀子を稱揚せり、辨道の首めに「思孟は聖門の禦侮なり、荀子は思孟の忠臣なり」といふもの、已に荀子を推重して思孟に配するの意を表す、然るに徂徠又曾て「刻荀子跋」を作りて曰く、

孟荀は匹なり、韓愈の孟を喜ぶも、猶ほ且つ以て並べ稱せざるを得ざるもの也れを以てなり、宋儒に至りて、躋せて以て仲尼に媲べ、其書を躋せて、以て論語に媲ぶ、何ぞ肆なるや、明帝之れに因りてこれを學宮

に布き、以て功令となす、而して後、孔孟論孟、天下の公言たり、荀は則ち性惡を以て擯けらる、又李斯を援いて、之れを累はすに逮ぶ、今の學者は、遂に其書に唾して顧みず、甚しきは或は下、これを申韓諸家に比するに至る、又何ぞ冤なるや、云云、

と、大に荀子の爲めに冤を雪ぐことを務めたり、徂徠が性惡を豫想するが如き、禮樂を重んずるが如き、其功利主義を主張するが如き、道は聖人の作爲する所に係るとするが如き、多く荀子より得來たる所あり、隨つて又人をして英國の哲學者トーマス、ホッブズの學說を連想せしむること往々にして之れあり、是等の事、研究上興味少しとせざるが故に、徂徠の學說を叙述したる後に至りて比較考察する所あらん、之れを要するに、徂徠と荀子との間に學說上の關係あること、太だ明瞭にして、到底否定するを得ざるべきなり、

第二　道德論

(一)　道の觀念

徂徠は道てふ觀念に於て仁齋と大に異なり、蘐園派と堀川派と兩々對立して、相容れざるもの、實に此根本主義より來たるなり、先づ徂徠がいかに道を解釋せしか、左に逐次之れを論ぜん

(一)仁齋が仁義を以て道とせしに對して、徂徠は禮樂若しくは禮樂刑政を以て道とせり、仁齋の道てふものは、公共的にして普遍的價値を有するものなれども、又個人四端の心を擴充して達し得らるゝものなり、然るに徂徠にありては、道は全く客觀的にして人の性に根柢するものにあらず、即ち先王の制定せる禮樂に外ならざるなり、論じて曰く

道は統名なり、禮樂刑政凡そ先王建つる所のものを擧げて合せて之れに命ずるなり、禮樂刑政を離れて別に所謂道なるものあるにあらざるなり(辨道)

是れ彼れが一家の學を標榜するに當り、劈頭第一に喝破して起る所なり、若し彼れが意味する道を、今日の言葉に飜譯して之れを言へば、道は人民を治むるに必要なる制度文物を總稱するの名なり、此れを外にし

て復た道てふ者あるなしとするものなり、徂徠は孔安國が「道は禮樂を謂ふなり」と定義を下せるを引用して、漢儒尙ほ古義を失はずとして、宋儒よりは寧ろ孔安國が言に重きを置いて、此れを以て禮樂の道たるを證せんとせり、然れども徂徠が禮樂を以て道とするの見解は荀子より得來たれること疑なし、但、彼れ自ら之れを言はざるのみ、荀子學を論じて曰く、

其數は、誦經に始まり、讀禮に終はる、其義は士たるに始まり、聖人たるに終はる、眞積み力久しければ入る、學、沒するに至りて後、止むなり、（勸學篇）

又曰く、

禮なるものは、法の大分、群類の綱紀なり、故に學、禮に至りて止む、夫れ是れを道德の極といふ、（同上）

禮を以て最大の主義綱領とするは、荀子の學なり、荀子は又禮論樂論の二篇に於て禮樂の治民の要具たることを詳悉せり、乃ち禮を論じて曰

く、

人生れて欲あり、欲して得ざれば、求むること能はず、求めて度量分界なければ爭はざること能はず、爭へば亂る亂るれば窮す、先王其亂を惡む、故に禮義を制して以て之れを分ち、以て人の欲を養ひ、人の求めを給し、欲をして必ず物を窮めず、物をして必ず欲に屈せざらしむ、兩者相持して長ず、是れ禮の起る所なり、(禮論篇)

又樂を論じて曰く、

夫れ樂なるものは樂なり、人情の必ず免れざる所なり、故に人樂みなきこと能はず、樂めば必ず聲音に發し、動靜に形はる、而して人の道、聲音動靜、性術の變、是に盡く、故に人樂まざること能はず、樂めは形はるゝことなきこと能はず、形はれて導きをなさゞれば亂なきこと能はず、先王其亂を惡む、故に雅頌の聲を制して以て之れを道く、(樂論篇)

之れを要するに、荀子は禮樂を以て治具の最も重大なるものとするなり、徂徠、荀子の此論に本づいて禮樂を以て道とし、其言を張り、其文を飾

り、以て仁齋が學に對抗することを務めたり、

(二)仁齋は道を以て人あると人なきとに拘はらず、本來自らあるものとなせり、卽ち天地自然に之れありとなすの意なり、然るに、徂徠は之れに反し荀子と同じく、道てふものは、先王の作爲に出づるものにして、本來之れあるものにあらずとせり、其言に云く、

先王の道は、先王の造る所なり、天地自然の道にあらざるなり、蓋し先王、聰明睿知の德を以て天の命を受け、天下に王たり、其心一に天下を安んずるを以て務めとなす、是を以て其心力を盡くし、其知巧を極めて、是道を作爲し、天下後世の人をして是れに由りて之れを行はしむ、豈に天地自然に是れあらんや、(辨道)

又其先王とは、果して誰れたるかを論じて曰く、

伏羲神農黃帝も亦聖人なり、其作爲する所、猶ほ且つ利用厚生の道に止まる、顓頊帝嚳を歷て堯舜に至りて、而して後、禮樂始めて立つ、夏殷周よりして後、粲然として始めて備はる、是れ數千年を更へ、數聖人の

心力知巧を更へて成るものにして、又一聖人一生の力の能く辨ずる所のものにあらず、故に孔子と雖も亦學んで後に知る、而るを天地自然に之れありといふて可ならんや、(同上)

又曰く、

夫れ道やは上古聖人の時より既に已に由る所あり、堯舜に至りて後道立つ、殷周を經て、後益〻備はる、是れ數千歳數十聖人を更へ、其心力智巧を盡くして以て之れを成す、豈に一聖人一生の力の能く爲す所ならんや、(辨名上)

徂徠は此の如く道を以て先王の作爲に出づとするが故に其仁齋と異なるは勿論、之れを宋儒に比すれば、實に正反對をなせり、宋儒は道を以て人の本性に根柢すとすればなり、尙ほ溯りて之れを考ふるに、子思孟子の如きも、徂徠の如く道を說きしにあらず、即ち子思は性に率ふを以て道となし、孟子は仁義を以て性に根すとなすが如く、皆內容的に道を說明せり、是故に徂徠は思孟を取らず、論じて曰く、

中庸に性に率ふ、之れを道と謂ふといふが如きは、是時に當りて、老氏の説興り、聖人の道を貶して僞となす、故に子思、書を著はして、以て吾儒を張る、亦先王、人の性に率ふて是道を作爲するを謂ふなり、天地自然に是道ありと謂ふにあらざるなり、亦人性の自然に率ふて作爲を假らずといふにもあらざるなり(辨道)

又曰く、

孟子の性善に至りても、亦子思の流なり、杞柳の喩、告子之れを盡くせり、孟子之れを折くもの、過てり、蓋し子思の本意、亦聖人、人の性に率ふて以て道を立つるを謂ふと、云ふことと爾り、人々性に率へば、自然に皆道に合すといふにあらざるなり(同上)

子思孟子は固より道を以て人の本性に出づとするものにて、其本性とする所は情欲にあらず、寧ろ良心の如きものを謂ふなり、然るに徂徠は道を外部的に考察し、禮樂と同一視するが故に、其思孟と相背馳するに至るもの、必然の結果といふべきなり、先哲叢談卷之一に云く、

或は曰く、物徂徠亦鳳岡の門に出づと、一日鳳岡、柳澤侯を過ぐ、侯、徂徠をして侔接せしむ、鳳岡謂つて曰く、聞く女ち近ろ異説を倡へて、以て程朱を駁すと、程朱を駁す、猶ほ之れを恕す、然るに其程朱を駁するものゝ、乃ち思孟を駁するの漸なり、思孟を毀するに至りては吾れ決して少しも之れを假せずと、徂徠頓首拜謝す、

然れども徂徠、思孟を非議して毫も假借する所なし、徂徠が道を以て先王の作爲に出づとするは、荀子に本づく、荀子論じて曰く、

古は聖王、人の性、惡なるを以て、以て偏險にして正しからず、悖亂にして治まらずとなす、是を以て之れが爲めに禮義を起し、法度を制し、以て人の情性を矯飾して之れを正し、以て人の情性を擾化して之れを導き、皆治に出て道に合せしむるものなり、今の人、師法に化し、文學を積み、禮義によるものを君子となし、性情を縦にし、恣睢に安んじて、禮義に違ふものを小人となす、(性惡篇)

徂徠の意、亦此れに外ならざるなり、荀子、孟子の後に出で、孟子を駁し、

孟子を訾れり、恰も其の如く、徂徠亦仁齋の後に出でゝ、仁齋を駁し仁齋を訾れり、仁齋は孟子を尊崇し孟子より得來たる所多し之れに反して徂徠は荀子を尊崇し荀子より得來たる所多し畢竟仁齋は孟子に似て、徂徠は荀子に似たりといふべし、

(三)次ぎに徂徠は道を以て治民の方法とせり、是れ亦彼れが大に仁齋と其軌を異にする所なり、仁齋にありては、道は各個人の當に日常由りて行かざるべからざる自然の路に外ならず、然るに徂徠にありては、道は寧ろ上にありて下を御するの法なり、彼れ論じて曰く、

孔門の敎は仁を至大なりとなす、何んとなれば能く先王の道を擧げて之れを體するものは仁なればなり、先生の道は天下を安んずるの道なり、其道多端なりと雖も、要するに天下を安んずるに歸す、其本は、天命を敬するにあり、天我れに命じて天子となし、諸侯となし、大夫となすときは、臣民のあるあり、士たるときは、則ち宗族妻子のあるあり、皆我れを待ちて後に安きものなり、且つや士大夫皆其君と天職を共

にするものなり、故に君子の道は、唯仁を大なりとなす、（辨道）

是れ先王の道は、政治經濟の主義たることを謂ふものなり、又孔子の所謂仁の如きは、先王の道を實行し、其結果として得らるゝ所なり、然れども若し道といふものが、治民の要具たる以上は、唯政權を有する者のみ、道を要し、政權を有せざる各個人に至りては、復た道を要せざることゝならん、果して然らば、唯要する所は公德のみ、各個人の私德に至りては、如何なる事も口を閉ぢて看過するより外之れなきなり、文會雜記卷之二上に云く、

徂來の說に、すべて仁は民を愛することなり、身を脩むることは、下にのぞむによりてあることとなりと云ふ意、心得がたし、然らば下にのぞむ、民を治むる人になければ、身を修むることは、いらぬ物の如く聞ゆ、云云、脩身は下を信ずる爲めにすると云ふことは、聞えぬ說なりと、君修の說なり、

徂徠が各個人に均しく必要なる道を擧げて、獨り之れを有權者に與へ

たるが故に、有權者にあらざる各個人は、自然弛みを生じ、私德を修むることを怠りしは、固より其所なりといふべし、然れども徂徠亦全く各個人の道を說かざるにあらず、其言に云く、

今試に天下を觀るに、孰れか能く孤立して群せざるものぞ、士農工商、相助けて食むものなり、是の若くならざれば、卽ち存すること能はず、盜賊と雖も、必ず黨類あり、是の若くならざれば、則ち亦存すること能はず、故に能く億萬人を合するものは君なり、能く億萬人を合して、其親愛生養の性を遂げしむるものは、先王の道なり、先王の道を學んで、德を我れになすものは、仁人なり、然りと雖も、先王の道を學んで、以て德を我れになさんと欲するに、先王の道、亦多端なり、人の性も亦多類なり、苟も能く先王の道は、要、天下を安んずるに歸することを識りて、力を仁に用ふるときは、則ち人各、其性の近き所に隨つて、以て道の一端を得、由が勇、賜が達、求が藝の如きも、皆能く一材を成して、以て、仁人の徒となして、これを天下を安んずるの用に供するに足れり、(辨道)

此れに由りて之れを觀れば、有權者にあらざる各個人と雖も、道の一端を得べく又天下を安んずるの一具たるを得べきなり、然れども克己修德といふよりは寧ろ利用厚生の點より看たるなり、徂徠が見解は徹頭徹尾功利主義に歸すること復た疑を容るべからざるなり、

上來論述するが如く、徂徠は、第一、道は禮樂に外ならずとし、第二、道は先王の作爲に出づとし、第三、道は治民の方法なりとせり、其中第二第三は、禮樂を以て道とする所より起る必然の結論なりといふべし、徂徠は道の元來禮樂を意味する事に就いては、尙ほ論證する所あり、(一)彼れ以爲く、古代にありては、道を稱して文ともいふ、之れを文といふは、禮樂を謂ふに因ると、其言に云く、

文は、道を狀して之れを命ずる所以なり、蓋し天にありては、文といひ、地にありては、理といふ、道の大原、天に出づ、古先聖王、天に法りて、以て道を立つ、故に其狀たるや、禮樂粲然、是れを文といふ(辨名下)

又曰く、

古は道之れを文といふ、禮樂の謂なり、云云、文は道なり、禮樂なり、（辨道）

是れ固より根據あるの論なり、支那古代に文と稱するもの、道と同じ、孔子と雖も、文と稱して道を意味すること往々之れあり、例へば「文王既に沒すれども、文玆にあらずや」の文は、道を謂ふなり、徂徠の得意想ふべし、

(二)彼れ又以爲く、先王の道は、古代にありては、之れを道術ともいへり、此の如く術として之れを見るは、禮樂を指すが爲めなりと、其言に云く、

先王の道、古は之れを道術といふ、禮樂之れなり、後儒乃ち術の字を諱み、之れを言ふことを難る、殊に知らず、先王の治、天下の人をして、日に善に遷りて、自ら知らざらしむ、其敎も亦學者をして、日に其知を開き、月に其德を成して、自ら知らざらしむ、是れ所謂術なり、（辨道）

又云く、

蓋し先王の道は皆術なり、云云、又詩書禮樂を四術となすが如き、亦之れに由りて學び、自然に其德を成すを覺えざるを謂ふなり、後世詐術盛んに興るに及んで、而して後、道學先生皆術の字を諱む、荀子に大道

術あり、漢書に霍光が不學無術を譏るが如き、其時古に近く、猶ほ未だ術の字を諱まざるもの、見るべきなり(辨名上)

是れ亦一概に否定すべからず、然れども孔子の所謂道は、必ずしも禮樂を意味すと限らず、例へば「朝に道を聞いて、夕に死すとも可なり」といふときの道の如き、單に禮樂を謂ふものとせば、興味索然たらざるを得ざるなり、然れども徂徠の見解亦自ら一家の見解たるを失はずといふべきなり

(二)　德の意義

徂徠は道德を以て唯一の事物とせずして、二樣に之れを思惟し、道と德とを分離せり、道は禮樂にして、先王の作爲する所に係る、故に外部的のものなり、德は各個人が禮樂の效果によりて身に得る所あるを謂ふなり、身に得る所とは即ち大にして仁智、小にして一技一藝の材の以て安民の用に供するに足るものを謂ふなり、已に身に得る所あれば各個人應分の材を成さゞるはなし、凡そ德てふもの、此れに外ならずとせり、即

ち彼れが

道は先王に屬し、德は我れに屬す（辨名上）

といへるに徵して明かなり、尙ほ推して之れを考ふるに、徂徠と仁齋と大に德の解釋に於て異なる所あり、仁齋は德を以て仁義禮智の總名とせり然るに徂徠にありては、禮義は道にして外部的なるが故に、德にあらず、唯、仁智のみ德といふべきなり、其言に云く、

仁智は德なり、禮義は道なり、先王、人の性に率つて、以て道德を立つ（同上）

と、以て證すべきなり、仁齋は德と性とを分別して、性は各個人之れを異にすれども、德は天下に普遍にして、一人の私する所にあらずとせり、然るに徂徠は、之れに反して德は人々之れを殊にするものとせり、其言に云く、

德は得なり、人各、道に得る所あるを謂ふなり、或はこれを性に得、或はこれを學に得、皆性を以てこれを殊にす、性、人々殊なり、故に德も亦人

々これを殊にす、夫れ道は大なり、聖人にあらざるなりは、安ぞ能く身道の大に合せんや、故に先王徳の名を立て、學者をして、各其性の近き所を以て、據りて之れを守り、修めて之れを崇ましむ、云云、蓋し人性の殊なる、これを草木の區して以てこれを別つに譬ふ、聖人の善教と雖も、亦之れを強ふること能はず、故に各其性の近き所に隨つて養ふて以て其徳を成し、德立ちて材成る、然して後、之れを官にす、其材の成るに及んでや、聖人と雖も、亦及ぶ能はざるものあり(同上)

德は此の如く人によりて異なるものなるが故に何人も衆徳を兼ぬること能はず、聖人は大徳を備ふると雖も、亦一技一藝の材に至りては、匹夫にも及ばざる所なしとせざるなり、匹夫の徳は一技一藝の材に過ぎざれども、聖人の德は仁智等、衆美の會萃なりとせり、徂徠仁を論じて曰く、

仁は、長人安民の徳を謂ふなり、是れ聖人の大徳なり、天地の大徳を生といふ、聖人之れに則る、故に又之れを好生の徳といふ、聖人は古の天

下に君たるものなり、故に君の德これに尙ふるなし(同上)

仁は聖人の大德なりと雖も、聖人の德此に盡きたりといふべからずとし、尙ほ論じて曰く、

仁は聖人の大德なり、聖人の道衆美の會萃する所、亦何ぞ唯仁のみならん、人の聖人の道を學ぶもの、德性を以て殊なり、亦何ぞ皆仁ならん、然れども、聖人の道、要安民に歸するのみ、衆美ありと雖も、皆仁を輔けて之れを成す所以なり(同上)

又曰く、

聖人の德備はると雖も、君子の德殊なりと雖も、皆夫の仁を輔くる所以なり(同上)

此れに由りて之れを觀れば、仁は聖人唯一の德にあらずと雖も、亦其最大なるものなり、所謂禮樂刑政の如きも、仁を成す爲めに起れるものにて、畢竟仁の外、聖人の目的とする所あるなし、乃ち論じて曰く、

先王の是道を立つるや、仁を以てす、故に禮樂刑政、仁にあらざるもの

なし、是を以て苟も仁人にあらずんば、何を以てか能く先王の道に任じ、以て天下の民を安んぜんや、故に孔門の教、仁を以て至れりとなす、仁に依るを以て務となして、復た聖人たるを求めざるもの、古の道爾りとなす、(同上)

仁と同じく智も亦聖人の大徳なりとして、論じて曰く、

智も亦聖人の大徳なり、聖人の智、得て測るべからず、亦得て學ぶべからず、故に岐して之れを二にす、聖といひ、智といふ、是れなり、(同上)

其智といふは、重に人を知ることにて、即ち鑑識をいふなり乃ち論じて曰く、

智の徳たる、人を知るより大なるはなし、云云、大氐古の所謂人を知るは、其長ずる所を知るにあり、其短なる所は、必ずしも知らず、其至れるものに及んでは、必ず能く仁賢の人を知ると稱す、之れを人を知るといふ、(同上)

是れ聖人の大徳に就いて言ふものなり、若し夫れ普通の人は、學を修め

て一材を成し、以て安民の一具となり、各〻其分に應じて、夫の仁を輔くるを得ば、是れを其德となすのみ、徂徠、此意を述べて曰く、

君の斯民をして學んで以て其德を成さしむるも、將た何んか之れを用ひん、亦各〻其材に因りて、以て之れに官し、以てこれを安民の職に供せんと欲するのみ、故に聖人の德、備はると雖も、君子の德、殊なりと雖も、皆夫の仁を輔くる所以なり(同上)

是れ其宋儒と大に見解を異にする所なり、例へば、朱子の如きは、

之れを中に存するを理といふ、之れを心に得るを德となす、行事に發見するを百行となす、

といひ、又

德は是れ天に得るものなり、

といへり、是れ德てふものは人の本性中に存すとするものなり、徂徠は德を以て人の獲得する所とするが故に宋儒と正反對に立てりといふべし、且つ徂徠は、禮樂を以て德の則となし、中和を以て德の至りとなせ

り、其言に云く、

若し夫れ禮樂は德の則なり、中和は德の至りなり、精微の極、以て尙ふることなし、然れども中和は形なし、意義の能く盡くす所にあらず、故に禮は以て中を敎へ、樂は以て和を敎ふ、先王の中和に形るや、禮樂言はず、能く人の德性を養ひ、能く人の心思を易ふ、心思一たび易はれば、見る所自ら別なり、故に知を致すの道、禮樂より善なるはなし、云云、禮の守、太だ嚴なり、苟も樂以て之れに配せざれば、亦安んぞ能く樂んで以て生ぜんや、故に樂は生ずるの道なり、天下を鼓舞し、其德を養ふて、以て之れを長ずるは、樂より善なるはなし、故に禮樂の敎、天地の生成の如し、君子は以て其德を成し、小人は以て其俗を成す、天下是れに由りて平治し、國祚是れに由りて靈長なり、先王の敎の術なり、神なるかな、四術の敎を盡くすこと、(辨道)

徂徠、此の如く中和を以て德の至りとし、又他處に於ては仁智を以て德となす、中和と仁智と必ずしも撞着せずと雖も、思想の一貫せざること、

推して知るべし、論理の不整合は、當時の學者の多く免れざる所にして、徂徠も亦此例を脱するを得ざるなり、

(三) 聖人の名稱

聖人の名稱、古來種々に解釋せられ、未だ必ずしも一定せず、然れども多くは孔子の如く道德の至れるものを意味するに似たり、然るに徂徠は聖人に就いて左の如き一定の制約をなせり、

第一、聖人は制作者を稱するの名なり、即ち古代にありて禮樂を制し、後世に道を傳へしものにして即ち伏羲神農黃帝の如きも、聖人たるに相違なしと雖も、殊に堯舜禹湯文武周公の六人をいふ、孔子は集めて之れを大成せしものなり、孔子は制作者にあらずと雖も、古聖人の道、孔子によりて傳ふるを得たり、故に亦聖人を以て之れを稱する所以なり、其論に云く、

聖は作者の稱なり、樂記に曰く、「作者之れを聖といひ、述者之れを明といふ」と表記に曰く、「後世作者ありと雖も、虞帝及ぶべからざるのみ」と、

古の天子聰明睿知の德あり、天地の道に通じ、人物の性を盡くし、制作する所あり、功神明に侔しく、利用厚生の道、是に於てか立つ、而して萬世其德を被らざるはなし、所謂伏羲神農黃帝は、皆聖人なり、然れども其時に方りて正德の道、未だ立たず、禮樂未だ興らず、後世得て祖述するなし、堯舜に至りて、禮樂を制作し、正德の道、始めて成る、君子は以て德を成し、小人は以て俗を成し、刑措用ひず、天下大に治まり、王道是に肇まる、是れ其人倫の至り、造化に參賛し、以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相し、立てゝ以て萬世の極となすあり、孔子書を序するに、斷じて唐虞よりする所以のもの、是れが爲めの故なり、三代聖人、亦皆堯舜の道に遵ひ、禮樂を制作し、以て一代の極を立つ、蓋し歲月反らず、人亡び世遷り、風俗日に漓し、以て汚れ、以て衰ふ、これを川流の滔々として、得て挽くべからざるに譬ふ、三代の聖人、其是の若きを知る、乃ち前代の禮樂により、損益する所あり、以て數百年の風俗を維持し、其れをして遽に趨に衰へざらしむるもの、是に於てか存す、夫れ堯舜禹湯文

武周公の德、其廣大高深、備はらざるなきもの、豈に名狀すべけんや、祇其事業の大なる、神化の至れる、制作の上に出づるものなきを以ての故に、之を聖人といふのみ、孔子に至りては、則ち生れて時に遭はず、制作の任に當ること能はず、而して其時に方りて先王の道、廢壞已に極まる、乃ち先王の道にあらずして、命じて以て先王の道とするものあり、先王の道にして黜けて以て先王の道となさゝるものあり、是非淆亂、得て識るべからざるなり、孔子四方に訪ひ求めて蒐めて之を正うし、然して後、道大に孔子に集まる、而して六經是に於てか書あり、故に中庸に曰く、「苟も至德ならざれば、至道凝らず」と、是の謂ひなり、且つ其一二門人と禮樂を言ふ所のもの、制作の心、得て窺ふべし、故に當時高第弟子、宰我子貢有若の如き、既に稱して以て聖人となすもの、翅其德を以てするのみならず、亦制作の道存するが爲めの故なり、假りに孔子なからしめば、則ち先王の道亡びること久しからん、故に千歳の後、道これを先王に屬せずして、これを孔子に屬す、邪説異教の徒と雖も、

亦孔子聖人にあらずといふものあるなし、則ち宰我子貢有若の言、果して今日に徵あるのみ、夫れ孔子の德至れり、然れども宰我子貢有若子思の言なからしめば、則ち吾れ未だ敢て之れを聖人といはざるなり、吾れ聖人にあらずして、聖人を知る能はざるを以てなり、夫れ我れ吾見る所を以て其聖人たるを定むるは僭のみ、僭は則ち吾れ豈に敢てせんや、我れ姑く衆人の言を以て其聖人たるを定むるは、特操なき者のみ、特操なきは、吾れ豈に敢てせんや、然りと雖も、古聖人の道、孔子によりて以て傳ふ、孔子なからしめば、則ち道の亡びること久しからん、千歲の下、道、終にこれを先王に屬せずして、これを孔子に屬す、則ち我れ亦其堯舜に賢れるを見るのみ、蓋し孔子の前に孔子なく、孔子の後に孔子なし、吾れ聖人にあらず、何を以てか能く其名を定めんや、故に且くこれを古作者に比し、聖人を以て之れに命ずるのみ(辨名上)

徂徠、禮記に本づいて、禮樂の作者を聖人とせり、是に於てか孔子に至りて窮せり、孔子は禮樂の作者にあらず、聞、門人と禮樂を言ふ事ありと雖

も、毫も禮樂を制作するの意あるを見ず、孔子は斷じて作者にあらざるなり、且つ孔子自ら「述べて作らず、信じて古を好む」といへり、孔子豈に作者ならんや、然れども孔子の聖人たることは、徂徠も否定すること能はず、因りて遂に孔子に贅辭を呈して曖昧模糊の論辨をなせり、徂徠は兼ねて聖人にあらざれば、聖人を知ること能はずとす、果して然らば宰我、子貢、有若の徒は、皆聖人にあらざるが故に聖人を知ること能はず、假令ひ彼等が孔子を聖人と稱するも、固より信憑するに足らざるなり、又假令ひ千歳の下、道、孔子に屬するとするも、作者にあらざる以上は、之れを聖人と呼ぶの謂はれなきなり、是を以て徂徠がいかに辨疏に窮せるかは、推し知るべきなり、

第二、徂徠は聖人は聖人にあらざれば知ること能はずとし、此意を述べて曰く

夫れ人の人を知る、各〻其倫に於てす、唯〻聖のみ聖を知り、賢のみ賢を知る、人の才たる、相倍蓰し、相什佰千萬すれば、則ち賢者の知り難き、豈に

宜ならずや、況や我れ其賢に及ばずして、而して能く之れを知るをや、(辨名上)

又曰く、

聖人の心は、唯、聖人にして後、之れを知る、亦今人の能く知る所にあらざるなり、故に其得て推すべきもの事と辭とのみ(答安澹泊書)

愚者は、聖人の聖人たるを知ること能はざるべし、然れども身、自ら聖人にあらざれは、聖人を知ること能はざるべしとは亦己れを侮るの甚しきものなり、現に徂徠は作者にあらざる孔子を聖人と稱せり、是れ必ずしも他人に雷同して然るにあらず、自らも亦其然るを認容すればなり、然れども小人の身を以て聖賢を忖度せば、往々にして當らざることとあるべく、甚しきに至りては、殆んど了解すべからざることあらん、故に孟子も

君子のなす所、衆人固より識らざるなり、(告子上)

といへり、クセノフ、テース氏亦曰く、

σοφον ειναι δει τον επιγνωσομενον τον σοφον.

と、其意は、智者を認識せんと欲するものは智者ならざるべからずといふにあり、即ち徂徠の言ふ所と符節を合するが如きものあり、又無量義經に

唯佛與佛、乃能究了、

といひ、又法華經の方便品に

唯佛與佛、乃能究盡諸法實相、

といふの類、徂徠の旨意と全く同じといふにあらざるも、推して之れを考ふれば、亦之れと其歸を異にせざるもののあるを知るべきなり、之れを要するに、徂徠は聖人を以て不可知的とするものなり、是れ其普通の人は聖人と其類を同うせざるものと斷定するに由るなり、是を以て彼れは必然に孟子及び宋儒等と相背馳せざるを得ざるなり、

第三、徂徠は聖人は學んで至るべからずとせり、何故なれば、人の性質は種々にして、變更すべからざるもの、即ち是れ命にして、復た之れを奈何

ともすること能はず、是故に聖人の性質なきものが聖人たらんとするも、能くすべき所にあらざるなりとし、乃ち論じて曰く、

命を知らざれば、以て君子たることなし、豈に翅世に處するのみならんや、學問の道と雖も、皆然らずといふことなきのみ、天命之れを性といふ、人其性を殊にし、性其德を殊にす、財を達し器を成す、得て一にすべからず、孔門の諸子、各其性の近き所を得る者、豈に仲尼の教、足らざる所あらんや、譬へば時雨の之れを化するが如く、生ぜずといふことなきのみ、大なるものは大生し、小なるものは、小生す、豈に小なるもの大生することを欲せざらんや、實に命同じからざればなり、君子は命を知る、故に之れを强ひず、器の成るに及んでや、聖人と雖も、及ばざる所あり、故に聖人は敢て之れを强ひず、是故に人皆聖人たるべしといふものは非なり、性易ふべしといふものは非なり、云云、世俗の尙ぶ所は人なり、天にあらざるなり、故に世俗の尙ぶ所を務めて、以て人の知らんことを求むるものは命を知らざるなり、云云、命は之れを如何と

もすべからざるものなり、故に學んで其性の近き所を得るは、亦猶ほ是の若きか、其財を達し、器を成して以て天職に共す、古の道なり、（學則の七）

此の如く徂徠は斷々乎として聖人の學ぶべからざることを主張し、尙ほ論じて曰く、

夫れ聖人聰明睿智の德、これを天に受く、豈に學んで至るべけんや、其德の神明不測なる、豈に得て窺ふべけんや、故に古の學んで聖人たるもの、唯湯武孔子のみ、故に古の善く聖人を學ぶもの、必ず聖人の敎に遵ひ、禮樂以て德を成す、子思の言ふ所是れのみ、孟子、言、禮樂に及ばずと雖も、然れども其所謂人以て堯舜となるべしとするもの、亦唯堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行を行ふのみ、必ずしも聖人たるを求めざるなり、後儒乃ち二子言ふ所以の意を察せず、妄意、聖人たらんことを求む、云云（辨名上）

宋儒及び仁齋の徒が、聖人を以て理想的人格となし、之れを己れが身に

實現せんと企圖せしことと固より疑なし、而して孟子の如きも、亦聖人は學んで至るべしとせり、徂徠が之れを否定せんとするは、寧ろ詭辯に類せり、孟子が

乃ち願ふ所は則ち孔子を學ばん(公孫丑上)

といひ、又顏回が

舜何人ぞや予れ何人ぞや、なすことあるものは、亦是の若し、

といへる語を引用せるもの、亦之れに同意するに由る、殊に彼れが曹交の「人皆以て堯舜たるべしとありや」の問に答へて「然り」と肯定的にいへるを以て之れを觀れば、其聖人を以て學んで至るべしとせしことと復た何ぞ疑ふべけん、予思は明瞭に此事を道破せざるも、亦已に之れを豫想するものに似たり、例へば、中庸に

或は生れながらにして之れを知り、或は學んで之れを知り、或は困んで之れを知る、其之れを知るに及んでは一なり、或は安じて之れを行ひ、或は利して之れを行ひ、或は勉强して之れを行ふ、其功を成すに及

んでは一なり、

といへるが如き、即ち是れなり、且つ此言果して孔子の口より出づるものならば、聖人の學んで至るべきこと、孔子の已に豫想せし所ならん、徂徠が孔子を以て學んで聖人となれるものとするは、反りて當れりといふべし、孔子已に學んで聖人たるを得しならば、何故に他人は孔子の如くなること能はざるか、徂徠は之れを人々の性質の異なるに歸す、殊に宋儒及び仁齋の徒が學んで聖人たらんとするに對して一大打擊を加へたり、其言に云く、

宋儒乃ち身、聖人たることを求む、然れども程朱既に聖人たること能はず、而して孔子の後、復た聖人あることなければ、則ち是れ空言を懸けて、以て人に能はざる所を強ふるなり、(答安澹泊書)

と、是れ確論なり、宋儒以下、道學を修むるの徒にして身、聖人たることを求めしもの、果して其幾千萬人なるを知らず、而して遂に復た一人の聖人となれる者あるなし、徂徠此事實を擧げて、道學先生の頭腦を擊つ、豈に

鐵槌一樣の力なしとせんや、然れども徂徠の論未だ盡くさゞる所あるなり、何故なれば、宋儒及び仁齋の徒は、孔子の人格を理想とし、此理想を實現せんとせるなり、是故に或る程度までは確に孔子の人格に近づくを得たり、固より一人として孔子と同等の人物となること能はざりしも、孟子以後程朱陸王及び仁齋の如き小孔子は幾人も出でたり、若し孔子の人格を理想とせざりしならば、是等の小孔子も或は出づるに由なかりしならん、孔子の人格を理想として小孔子となり得たるは千里を期して百里に達したるものなり、初めより千里を期せざらんには心怠慢を生じ、百里に達することすら必ずしも保證すべからざるなり、故に理想は極めて高尚遠大なるを要す、然るに當時儒者の眼中にありて孔子其人より優れる理想的人格といふはあることなし、故に宋儒及び仁齋の徒が孔子の人格を理想として聖人とならんと企圖せしもの必ず尤むるに足らざるなり、彼等が賢人君子の地位に躋り得たるもの全く此に因由すればなり、徂徠いかに學んで聖人となることの非を言ふ

と雖も、彼れ自身一生の動作云爲を瞥見するに、畢竟、彷彿として孔子の人物を模倣せしものなること到底否定するを得ざるべきなり、

（四）　氣質不變化の説

孔孟は嘗て氣質の變化に就いて説示する所あらざるも、宋儒に至りて始めて人の性を本然と氣質とに分ち、本然の性は素より善にして、何等の變化もなさゞるも、獨り氣質の性に至りて善惡を兼有するが故に、變化して善ならしむべきものとせり、張橫渠始めて氣質の性と天地の性とを區別す、其天地の性といふは即ち本然の性なり、程子も亦橫渠の説を受け、本然氣質の二性を豫想して、性を論じ、殊に氣質の性を詳悉せり、朱子も氣質の性を論じて、

此れ張程に起る、某以爲く、極めて聖門に功あり、後學に補ありと、之れを讀めば、人をして深く張程に感ずることあらしむ、此れより前、未だ嘗て人の此に説き到ることあらず、（語類卷四）

と、朱子乃ち張程二氏に本づいて本然氣質の二性あることをいひ、氣質

變化の說を主張せり、語類卷四に云く、

或は問ふ、若し是れ氣質ならば、以て變すべきや否や、曰く須く是れ變化して之れを反すべし、人一たびすれば己れ百たびし、人十たびすれば己れ千たびするが如きは、則ち愚なりと雖も必ず明に、柔なりと雖も必ず强し、

と、即ち氣質の性を變化して、本然の性に復るべきを意味す、畢竟、復性復初の說なり、其後朱子學が廣く支那、朝鮮及び日本に行はるゝに從つて、復性復初の說がいかに勢力を得しかは、今更論を竢たざるなり、然るに仁齋に至りては本然氣質の分別をなさず、論孟に言ふ所の性は氣質を離れて言ふものにあらずとし、大に宋儒に反抗せり、然れども唯〻氣質の性の充養すべきを言ふて、未だ其不變化に論じ及ばざりき、然るに徂徠は始めて氣質不變化の說を唱道せり、例へば學則の七に

性易ふべしといふものは非なり、

といひ、答安澹泊書に

氣質は天の賦する所、豈に變ずべけんや、といふの類、皆氣質の不變化を意味す、然れども尙ほ辨道中に詳に之れを論じて云く、

氣質を變化するは、宋儒の造る所、中庸に淵源す、先王孔子の道の無き所なり、云云、氣質は天の性なり、人力を以て天に勝ちて之れに反せんと欲す、必ず能はず、人に强ふるに、人の能はざる所を以てすれば、其究り必ず天を怨み、其父母を尤むるに至る、聖人の道は必ず爾らず、孔門の弟子を敎ふる、各〻其材によりて以て之れを成す、以て見るべきのみ、

云云、

徂徠此の如く氣質の天性に出で、人力を以て勝つべからざるを言へども、亦其能く移るものなるを認容せり、辨名下に論じて曰く、

人の性萬品、剛柔輕重、遲疾動靜、得て變ずべからず、然れども皆善く移るを以て其性となす、善を習へば善、惡を習へば惡、故に聖人人の性に率つて以て敎を建て、學んで以て之れを習はしむ、其德を成すに及ん

てや、剛柔輕重、遲疾動靜、亦各ゝ其性に隨つて殊なり、唯ゝ下愚は移らず、故に曰く、民は之れに由らしむべし、之れを知らしむべからず、故に氣質は變すべからず、聖人は至るべからず、云云、先王の敎は、詩書禮樂、辟へば和風甘雨の萬物を長養するが如し、萬物の品、殊なりと雖も、其養ふて以て長ずるを得る者、皆然り、竹は之れを得て以て竹を成し、木は之れを得て以て木を成し、草は之れを得て以て草を成し、穀は之れを得て以て穀を成し、其成るに及んでや、以て宮室衣服飮食の用に供して乏しからず、猶ほ人、先王の敎を得て、以て其材を成し、以て六官九官の用に供するのみ、其所謂善を習ふて善なるは、亦其養を得て、以て材を成すをいふ、これを豐年の穀の食ふべきに辟ふ、惡を習ふて惡なるは、亦其養を失ふて以て成さゝるをいふ、これを凶歳の秕の食ふべがらざるに辟ふ、則ち何ぞ必ずしも其氣質を變じて以て聖人に至らんや、

是れより更に一轉して宋儒及び仁齋を排斥して曰く、

宋儒、聖人の敎に循はずして、妄意聖人たらんことを求む、又先王の妙

を知らず、乃ちこれを其臆に取り、持敬窮理、天理を擴め、人欲を去る、種々の工夫を造作し、遂に以て其本然氣質の說を立つるのみ、仁齋先生活物死物の說、誠に千歲の卓識なり、祇未だ先王の敎を知らず、區々として孟子爭辯の言を守り、以て學問の法となす、故に其言終に未だ明晳ならざるもの、豈に惜しからずや、

徂徠の氣質、是に至りて大に揚がれり、東洋に於て氣質不變化の說を唱へ出だしたるは、實に徂徠を以て嚆矢となす、其氣質の大に揚がれるもの亦宜ならずや、然れども彼れが言ふ所の氣質不變化は決して絕對的のものにあらず、何故なれば、彼れは人の性を以て善く移るものとせり、善く移ると變化と何等の差異かある、唯言葉の同じからざるのみ、善く移るは即ち變化なり、善を習ふて善に移り、惡を習ふて惡に移るとせば、少くも道德の點に於ては、氣質の變化を認容するものなり、然れども剛柔輕重遲疾動靜は得て變ずべからずとするが故に、宋儒とは大に其見解を異にし、氣質の改造し得られざることを意味せり、徂徠の此思想は

或は荀子より得來たりたるものならんか、荀子人の性を惡なりとし、其善なるを以て反りて僞なりとせり、故に荀子にありては、人の性の惡は變化すること能はず、唯禮義によりて、之れを制するあるのみ、性惡篇に云く、

凡そ性なるものは、天の就なり、學ぶべからず、事すべからず、

と、此れに由りて之れを觀れば、氣質不變化の說は、荀子に淵源すること疑なし、然れども荀子の主張する所、寧ろ他にありて、此にあらず、是れ徂徠が此說に關して、首唱者の榮を負ふ所以なり、西洋にありては、ショペンハウェル氏氣質不變化の說を主張し、論じて曰く、

人の氣質は持久的なり、彼れは全生命を通じて異なる所なし、云云、人は決して變化せず、彼れが一の場合に於て行動せしが如く、全く同樣の境遇に際して必ず復た然かく行動するならん、(Die Freiheit des Willens)

ニーチェ氏は氣質の不變化は絕對的のものにあらざることを論ぜり、其

言に云く、

氣質は變化せずといふことは、嚴密なる意味に於て眞誠ならず、此持て囃されたる句（即ち「不變化的氣質」を意味す）は寧ろ單に一個人の短生涯中には、働き掛くる新規の動機が大抵幾千年間鏤刻されたる特色を滅却する程十分に深透ならざる位を意味するなり、若し茲に八萬歳の人ありと假定せば、則ち彼れに絶對的に變化すべき氣質ありて存するものとせん、是に於て種々なる個人の內包が次第に彼れより發展し來たるとすべけん、人的生命の短きことが、人の性質に就いて幾多の謬見を生ぜしめたり。(Menschliches, Allzumenschliches.)

ニーチェ氏は畢竟氣質を以て變化的のものとするなり、ヴント氏の如きは、氣質を經驗的のものと可想的の者との二種に分ち、後者は不變化的にして、前者は變化的なりと斷定せり、(Ethik, S. 479.) ヴント氏の論最も是に近しといふべきなり、徂徠の氣質不變化の說、今日より之れを觀れば、毫も珍とするに足らざれども、當時にありて之れを唱道したる識見

と勇氣とは、稱揚せざらんと欲するも、能はざるなり、又其說のショペンハウエル氏と同一轍に出づるもの、眞に奇異なる暗合といふべきなり、

（五）　正邪の標準

凡そ道德を論ずるには、正邪の標準を立てざるべからず、然らざれば假令ひ千言萬語を費やすも、其據りて正うする所なきなり、然るに古來和漢の學者にして、道德を論ずるもの、多くは正邪の標準を立つるの要を知らざるが如し、獨り徂徠は分明に正邪の標準を立つ、其言に云く、

正は邪の反、先王の道に循ふ、是れを正といふ、先王の道に循はざる、是れを邪といふ、邪謀邪說の如き、以て見るべきのみ、已れを規矩準繩に辟ふ、正うするを爲す所以の器なり、規に循へば、圓なるもの正しく、矩に循へば、方なるもの正しく、準繩に循へば、平直なるもの正し、先王の道は、規矩準繩なり、故に先王の道に循つて而して後、正しとなす、（辨名上）

と、此れに由りて之れ觀れば、彼れ先王の道を以て正邪の標準とせり、凡

其正邪は先王の道に從ふと否とによりて定まる、其先王の道といふは、他なし、禮樂なり、彼れ一轉して宋儒の標準なきを攻擊して曰く、
後世理學興り、先王の禮を舍てゝ理を以て之れを言ふ、理を以て之れを言ふもの、其臆に取るのみ、其臆に取るを正しとせば是れ人自ら正しとなす、妄といふべし、（同上）

徂徠は正邪の標準を客觀的に立つ、故に宋儒の主觀的考察と相容れず、乃ち其道德に就いて斷定する所を悉く臆測に出づるとなすなり、然れども彼れが善惡に關する見解は亦差〻之れと齟齬する所あるに似たり、其言に云く、

善は惡の反、泛く之れを言ふものなり、其解、孟子に見ゆ、曰く、「欲すべき之れを善といふ」、先王の道にあらずと雖も、凡そ以て人を利し民を救ふべきもの、皆之れを善といふ、是れ衆人の欲する所なるが故なり、云云、（同上）

此れに由りて之れを觀れば、善惡の標準は即ち利益にして、必ずしも先

王の道に從ふと否とに拘はらざるなり、是れ前に先王の道を以て正邪の標準とすると其旨意遂に整合せざるなり、且つ彼れが「凡そ以て人を利し民を救ふべきもの、皆之れを善といふ」といふを以て之れを觀れば、彼れは功利主義を懷くものにて、即ち個人の德性よりは、寧ろ社會の公利公益を主とするものなり、尾藤二洲曾て徂徠を論じて曰く、

彼れは聖門の學者にあらず功利のみ事とせる者なり、孫子を好みて國字解を作れるは、其本志の注ぐ所なり、管晏を崇びて、霸は王の未だ成らぬなりといひ、孟子の王霸を辨ぜるは、先王の道を知らぬなりといへる類、みな其本意の所在を見るべし、

と眞に然り、徂徠は全く功利主義を懷くのものにて、孔孟の徒といはんよりは、反りて管商の徒に近しといふべきが如し、而して彼れが先王の道を尊崇するも、亦其利用厚生の點にあること疑なきなり、是故に彼れが仁齋に於けるは、陳龍川が朱子に於けると、其關係甚だ相似たるものあるを知るべきなり、

（六）天命の說

徂徠は天命に一任する處に安心立命の境界を得たり、其言に云く、

其人智人力のとゞき不申場にては、天命に打ち任せ候より外、更に他事無御座候是故に勇怯の根本と申候は、天命を知ると知らぬとに落着仕候事にて御座候（答問書上）

と、乃ち天命を知れば、勇氣生じ、天命を知らざれば、安心なり難しとの意なり、又云く、

天命に明かに候へば、一天下の事に心を動かし申候儀は無御座候、（同上）

唯〻天命は人力を以て之れを奈何ともすること能はず、故に之れに一任するより外なし、然れども天を敬し、天に禱り、天道の助を俟つべしとせり、其言に云く、

聖人の道は、天を敬し祖宗を敬し候事を本と致し候、（答問書中）

又云く、

天を御敬ひ候ふて過を改め徳を修むるに若くは無御座候、聖人の敎の外に別に祈禱の法は有間敷候(同上)

尙ほ徂徠は天を敬するは聖門の第一義にして、學問上最も重大なる事件なりとせり、乃ち論じて曰く、

聖人の道、六經載する所、皆天を敬するに歸せざるものなし、是れ聖門の第一義なり、學者先づ斯義を識りて、而して後、聖人の道、得て言ふべきのみ(辨名下)

是に至りて徂徠の見解は殆んど宗敎と類似するものあり、殊に彼れは天を以て知るべからざるものとせり、知るべからざるものを以て道德の根柢となすことと、宗敎と同一轍に出づといふべきなり、

第三　學問論

徂徠の學問は宋儒及び仁齋の如く、己れが知力によりて道德上の事を攻究し、以て身を修め、行を正うすることを主とせずして、獨り先王の道を學ぶことを主とせり、然るに先王の道は詩書禮樂にありとするが故

に詩書禮樂を學ぶを以て唯一の學問とせり、其言に云く、
學は先王の道を學ぶを謂ふなり、先王の道は詩書禮樂にあり、故に學の方、亦詩書禮樂を學ぶのみ、是れ之れを四敎といひ、又之れを四術といふ、詩書は義の府なり、禮樂は德の則なり、德は己れを立つる所以なり、義は政に從ふ所以なり、故に詩書禮樂は以て士を造るに足る、(辨名下)

徂徠は又先王の道を以て民を安んずる所以のものにして、其要は仁にありとし、之れを學ぶは德を我れに成す所以なりとせり、其言に云く、
先王の道は、民を安んずる所以なり、故に先王の道を學んで、而して其然る所以を知らざれば、學得て成すべからず、故に孔門の敎、必ず仁によるなり、苟も其心常に先王安民の德により、造次にも是に於てし、顚沛にも是に於てし、終食の間も敢て之れと離れざれば、德の成るや速にして、以て先王の心を達すべきなり、然りと雖も先王安民の德大なり、故に孔門の敎、又必ず中庸による、所謂孝弟忠信、是れなり、(同上)

又云く、

孔門の教、仁によるを以て德を成すの要となす、云云、故に孔門の教、又孝悌忠信を以て進德の本となす、是を以て千萬世の後と雖も、聖人の道を學ぶもの、必ず詩書禮樂を以て本業となし、以て仁と中庸とにより、其德を成さんことを求む、則ち亦先王孔子の教に畔かずとなすのみ、(同上)

此れに由りて之れを觀れば、徂徠の學問は、矢張宋儒及び仁齋と同じく、道德を對象とするものなり、唯、道德の意義異なるのみ、故に

學は、先王の道を學んで以て德を己れに成さんことを求むるのみ、故に道德の外、豈に它あらんや、(同上)

といへり、然れども宋儒及び仁齋の如く、直に反省考察して道德を內界に得んとするにあらず、

近世叢語卷之八に云く、

物徂徠曰く、世儒理に醉ひ、道德仁義、天理人欲、口を衝いて以て發す、予

之れを聞く毎に便ち嘔噦を生ず、乃ち琴を彈じ笙を吹く、否らざれば則ち關々たる雎鳩以て其穢を洗ふ、是に於て柳下惠の及ぶべからざるを愧づるのみ、

乃ち知るべし道德を談ずるは、其本色にあらざるを、彼れは寧ろ己れが知力を置き、卓々然として膝を屈し、先王の道を學び、此れに由りて身を立てんと欲するものなり、彼れ論じて曰く、

學問の道、聖人を信ずるを以て先きとなす、蓋し聖人知大に仁至る、而して其思、深遠なり、其人を教ふるの法、國を治むるの術を立つる所、皆迂遠にして人情に近からざるが若きものありて存す、乃ち後儒好んで自ら其智を用ひて、聖人の深からざるを信ず、故に其意謂く、上古の法、今世の宜に合はず、遂に別に居敬窮理主靜致良知種々の目を立つ、是れ其私智淺見のなす所のみ、殊に知らず道古今なく一なり、設使ひ聖人の教、今世の宜に合はざるも、亦聖人にあらず、故に學者苟も能く一意聖人の教に遵ひ、之れを習ふこと久しく、之れと化して、而して後、

能く聖人の教萬世に亘りて得て易ふべからざる者あるを見る（同上）

此の如くなれば徂徠の學問は殆んど宗教に類せり宗教として自由討究を許さゞる「オルソドクス」（即ち正教派）に匹似す、己れが知力は毫も頼むに足らずとして專ら聖人を盲信することを慫慂するが如き、抑々又己れが知力を侮るの甚しきものといふべし、其言に云く、

夫れ聖人の教は至れり、豈に能く勝ちて之れに上らんや、凡そ聖人の言はざる所のものは、迺ち當に言はざるべき所の者のみ、若し當に言ふべき所のものあらば則ち先王孔子既に己に之れを言ふ、豈に未だ發せざるものありて後人を待たんや、亦思はざるのみ（辨道）

徂徠が先王孔子を過信することゝ是に至りて極まれりといふべし、先王孔子が當に言ふべき所を言ひ盡くせりとせば學問の進步抔といふことは有り得べからざる事なり、徂徠は其性の豪膽なるに拘はらず、知的探究の一點に關しては甚しく卑屈に陷れり、是故に彼れは哲學的考察の開導に助力せずして寧ろ之れを沮礙し、人を驅りて文藝若くは考證

に赴かしめたり、彼れ更に斷言して曰く、

大氏後儒一物の識らざるを以て恥となす、殊に知らず古の所謂知とは、仁を知るを貴ぶなり、孔子未だ嘗て知を好むを以て敎となさず、今の學者、當に古言を識るを以て要となすべし、古言を識らんと欲せば、古文辭を學ぶにあらざれば能はざるなり(同上)

孔子は情的道德を以て人を薰化せしものにて、曾て知的探究を務めざりき、然れども其知的探究を務めざりしは、寧ろ其短處なるのみ、孔子が知的探究を務めざりしといふを以て、總べて知識を排斥するが如き無謀も亦甚しといふべし、然れども徂徠は之れを敢てし、己れを愚にし、併せて人を愚にせんとせり、

彼れ又窮理の弊を排して曰く、

理やは窮りなきものなり、天下の事理を以て之れを言はゞ、言ふべからざることあるなし、是れ諸子百家の由りて興る所なり、故に古聖人能く其必ず是の若くなるを知る、而して未だ嘗て人に敎ふるに理を

以てせざるもの、其思深遠なりといふべし、(與藪震菴書)

苟も理を論ずれば、其爭止まず、諸子百家從つて興らざるを得ず、然れども、是れ毫も憂ふべきことにあらず、何んとなれば、此の如くならざれば、智識の發展、期し得べからざればなり、ソクラーテスの孔子に比して、適に知的探究の精神に富めりしことが、やがて深遠なる哲學諸派を惹起する本源となりしを思はゞ、理を論ずることの如何に德を修むると共に人生に必要なるかは、復た辨を費やすを須ひざるなり、假令ひ彼れ、

學問の道は、思ふを貴ぶ、思ふの時に方りて、老佛の言と雖も、皆吾助とするに足る、何ぞ況や宋儒及び諸家の說をや、(同上)

といふも、彼れが學問は先王の道を學ぶを以て主とするが故に力を詩書禮樂に用ふるのみ、詩書禮樂は先王の道の存する所なればなり、詩書禮樂を攻究せんには、古書を讀まざるべからず、古書を讀んで能く之れを了解せんには、古文辭を識らざるべからず、此れ古文辭學の必然に相伴ふて起る所以なり、彼れ乃ち論じて曰く、

讀書の道、古文辭を識り古言を識るを以て先きとなす、宋の諸老先生の如き、其禀質聰敏、操志高邁、豈に漢唐諸儒の能く及ぶ所ならんや、然れども韓柳出でゝよりして後、文辭大に變ず、而して言、古今殊なり、諸先生、其後に生まれ、今文を以て古文を視、今言を以て古言を視る、故に其心を用ふる勤むと雖も、卒に未だ古の道を得ざるもの、職として此れに之れ由る、明の滄溟先生に及んで、始めて古文辭を倡ふ、而して士頗る能く古書を讀み、後世の書を讀むが如きもの亦之れあり、祇其志す所、僅に丘明子長の間にありて、而して六經に及ばず、豈に惜からずや、然れども苟も能く其敎に遵つて而して古今文辭の殊なる所以を知らば、則ち古言識るべく、古義明かにすべし、而して古聖人の道、得て言ふべし云云、(辨名下)

徂徠此の如く古文辭を識るを以て學問の階梯とするが故に其研究は必然に古語學的となり、哲學的考察とは、反對の進路を取るに至れり、經書の解釋に就いては、彼れ間〻奇拔の見解を有することありと雖も、哲學

に關する一家の創見として擧ぐべきものは、割合に少し、此點より之れを言へば、仁齋に對して頗る遜色あるものといふべきなり、然れども仁齋は道德の効夫に全力を用ひしが故に、考證は遙に徂徠に及ばざるの看あり、徂徠と仁齋と一長一短、恰も掎角の勢を成すもの丶如し、徂徠は仁齋と見解を異にし、博聞多識を以て必要の學問とせり、故に殊に歷史の攻究せざるべからざることを言へり、彼れ論じて曰く、

人才を生ずるは學問に越ゆることなし、學問は文字を知るを入路とし、歷史を學ぶを作用とすべし、(太平策)

又曰く、

見聞廣く、事實に行き涉りたるを學問と申す事に候故、學問は歷史に極まり候事に候(答問書上)

又曰く、

學問は只廣く何をもかをも取り入れ置きて、己れが知見を廣むる事にて御座候、(同上)

是れ廣く古今の事實を究明し聖人の道をも了解し、以て自ら國家の一材たるを期するの意を述ぶるものなり、然るに或る時は又獨り文章のみを以て學問とし、論じて曰く、

總べて學問の道は文章の外無之候、古人の道は、書籍に有之候、書籍は文章に候能く文章を會得して、書籍の儘、濟まし候て我意を少しも雜え不申候へば、古人の意は明に候、聖人の道は、聖人の敎法に順はずして可得樣曾て無之候、其敎法は、書籍に有之候故、つまる所是れ又文章に歸し申候、然る所文章字義も時代に隨つて致展轉候所、眼の付け所にて候に、後世儒者我物ずきを立て候故、道德は尊く、文章は卑き事なりと思ひとり、文章を輕看致し候より、右の所に心付き不申、右の所に心付き不申候故、古聖人の敎法見え分れ不申、我知見にて聖人の意を會得せんとする故、皆自己流に被成候、末學の輩は、識見益々鄙陋にて程朱陽明、吾國にて闇齋仁齋等の末師を信ずる事、孔子よりも甚敷候、たとへて申候はゞ、佛者の輩釋迦の說をば用ひずして、深く法然日蓮を

信ずるが如くに候、敎に古今なく、道にも古今なく候、聖人の道にて、今日の國天下も治り候事に候、外に仕方は無之候、聖人の敎にて、今日の人も才德を成就候事に候、是れ又外に仕方無之候、古今通貫不申候ては、古聖人の道とも敎とも不被申候、道も敎も普く天下の人に被らしむる事にて、天下の人には、愚不肖多く、賢智少く候事、是れ又古今の替りなく候、然れば古聖人の道も敎も後儒の申候樣なる理の六つかしき事は、決して無之筈なる事明かに候、理の六つかしき事は、愚なる人は會得成不申事故、古聖人の道も敎も、皆わざにもたせ置き候事にて、其わざさへ行ひ候へば、理は知らず候ても、自然と風俗移り候所より、人の心も直り候て、國天下も治まり、又一人の上にても、風儀の移る所より自然と知見各別にひらけ行きて才德を成就する事に候、是れ聖人の道、聖人の敎法の妙用に候、是故に今日の學問は、ひきくひらたく、只文章を會得する事に止まり候、文章を會得して古の詞濟み候へば、古聖人の道も敎もわざにて候故、詞の上にて直に見え分れ申す事に

候、只々異國人の古の詞を會得する事、文章を會得する事六ッかしく候、(答問書下)

徂徠が此の如く文章を尊重したる結果として文藝は考證と共に大に興れり、然れども之れが爲めに反りて道德を踈外したるが如き形迹あるは、最も惜むべしとなす、功罪相償はずとは蓋し徂徠の如きものをいふなり、

第四　敎育論

敎育に關しては徂徠は極めて寬宏なる態度を取り、小節に屑々たらずして寧ろ淸濁倂せ呑むの槪あり、乃ち知るべし、彼れが取る所の敎育主義は極端なる放任主義なるを、彼れが實際いかに子弟を敎育せしかは、已に第五學風の下に詳悉せしを以て重ねて此に之れを敍述せず左に唯彼れが懷抱せし所の敎育上の見解を擧げん、彼れ辨道の中に聖人の德を論じて曰く、

大氐聖人の德、天地と相似たり、聖人の道、含容廣大、要は養ふて之れを

成し先づ其大なるものを立てゝ小なるもの自ら至るにあり、

是れ蓋し彼れが教育主義の由りて出づる所なり、其氣象の博大にして迫らざる處、大に好し、彼れ更に委しく其胸中を吐露して曰く、

思孟以後の弊は、之れを說くこと詳かにして、聽くものをして喩り易からしめんと欲するにあり、速に其說を粥がんと欲するものなり、權彼れにあるものなり、人を教ふるの道は然らず、權我れにあるものなり、何んとなれば君師の道なり、故に善く人を教ふるものは、必ずこれを吾術中に置く、優游の久しき、其耳目を易へ、其心思を換ふ、故に吾言を待たずして、而して彼れ自然に以て之れを知るあるあり、猶ほ或は喩らざるや、一言以て之れを啓けば渙然として氷釋し、言の畢るを待たず、故に教ふるもの勞せずして、學ぶもの深く喩る、何んとなれば吾れ言はざるの前、思既に半に過ぎるが故なり、先王孔子之れを以てす、（辨道）

是れ言論を主とせずして、感化を主とする教育主義にして、議論の上よ

り之れを言へば固より間然する所なし、彼れ更に一轉して先王の教育と孟子の教育との間に甚しき相違あることを辨明して曰く、

先王の教は、禮樂言はず、行事を擧げて以て之れを示す、孔子憤せずんば、啓せず、悱せずんば發せず、豈に然らざらんや、孟子に至りては、强辯以て之れを聒(かまびし)うす、而して是れを以て人を服せんと欲す、夫れ言を以て人を服するものは未だ能く人を服せざるものなり、蓋し教は我れを信ずるものに施す、先王の民は、先王を信ずるものなり、孔子の門人は、孔子を信ずるものなり、故に其教入ることを得、孟子は、我れを信ぜざるの人をして、我言によりて我れを信ぜしめんと欲す、是れ戰國游說の事、人を教ふるの道にあらず、(同上)

言語を以て人を服せず、行爲によりて人を服するは、孔子の如く禮儀を重んずる有德の人にして始めて之れを言ふべし、徂徠の如く德性を輕侮して功利を偏重し、文藝是れ事として禮儀に拘はらざる者の言ふべき所にあらず、彼れが門人數多なりしも、春臺の外一人も德行を以て顯

はるゝものなきは彼れが教育の過失に因由すること疑なきなり、彼れ又古今教育の異同を論じて曰く、

後世迺ち思孟程朱を信ずること、先王孔子に過ぎたり、何ぞや、蓋し先王の教、物を以てして理を以てせず、教ふるに物を以てするものは、必ず事を事とすることあり、教ふるに理を以てするものは、言語詳なり、物は衆理の聚まる所なり、而して必ず從事するもの之れを久うして乃ち心實に之れを知る、何ぞ言を假らんや、言の盡くす所のものは、僅々乎たる理の一端のみ、且つ身從事せずして而して能く立談に瞭然たるは、豈に能く深く之れを知らんや(同上)

實物を以て教育をなすの適切なること、何人も否定すること能はざるべし、然れども之れと同時に道理を教へざれば、何の効驗もなし、是れ實物は何事をも語らざればなり、實物は道理を說示するに必要なり、唯、實物のみありて、毫も道理を說示せざれば、教育は全く無精神となるなり、太古草昧の時は、多く道理を說示せざりしとするも、此の如きは後世の

依準すべき所にあらず、智識を開發し、文明を增進せんには、唯〻道理を闡明することとの晩きを憂ふべきのみ、然れども徂徠、宋儒の理を說くことと煩瑣に過ぎ、其人を教ふることと嚴肅に失するを厭ひ、之れが反動として此言をなすと思へば、亦大に恕ずべき所なきにあらざるなり、彼れ又人物をして各〻其養を得せしむべきを論じて曰く、

大氏人物、其養を得れば、則ち長じ、其養を得ざれば則ち死す、啻に身のみならず、才知德行皆爾り、故に聖人の道、養ふて以て之れを成すにあり。（同上）

其旨意たる殆んど天才教育を道破せんとするものに似たり、是れ蓋し彼れが宋儒の嚴肅主義に對して、主張する所にして、其自由の精神に富めるは、甚だ喜ぶべき所なり、彼れ嘗て人に與ふる書中に論じて曰く、

言語を以て人を喩さんとする事、大方はならぬ事にて候、此方より申候程の儀は、大方は先きも合點なるものに候、只わが心よりさとると、さとらざるにて、了簡は替はる者にて候をさとらぬ人を口上にて申

すいめ候はゞいやがり候も斷に候云云、先きのおのづからにひらけ候をよしと致し候事に候、其事となしに外の事より申候へば、得道まゐる事もあるものに候、其事の是非を爭ひ候へば、先きの氣立ちて居候故、相手立ち候て、必ず爭になるものに候、爭にかち候はんは、合戰に勝つが如くに候故、怒はやみ不申候、云云、われを信せざる人に向つて道理を說き候事、何の益も無之事に候（答問書中）

是れ直接教育に就いて論じたる事にはあらざるも、亦教育上の意見として見るを得べく、彼れが平生の寬容主義は此にも十分露はれ居るなり、彼れは又行政の方法によりて社會教育を成さんとの見解を有せし者の如し、其言に云く、

聖人の道を大道術と申候、國家を治め候も、直に善惡邪正を正し、見えわたりたる上にて、さつぱりと仕候事にては無御座候、俗人の思ひがけぬ所より仕懸けを致し候て、覺えず知らず自然と直り候樣に仕事に候、人才を養ひ候も同じ事に候（同上）

是等の政策は宋儒及び仁齋等の思ひ及ばざる所にして、即ち徂徠一家の長處と見るを得べきなり、

第五　政治論

徂徠は儒教の本領は政治にありとするものにて、宋儒及び仁齋等が個人的修德の工夫に全力を盡くすとは大に徑庭あり、彼れが先王孔子の道は天下を安んずるの道なりとし、具躰的に之れを言ひ表はして、禮樂刑政に外ならずとするを以て之れを觀れば、彼れが眼に映ぜる儒教は政治を以て本領とするものなること論を竢たざるなり、先王の道といへば、帝王及び其他執政者の傳へたる政治の主義なるが故に、徂徠の解釋せる所の如し、然れども孔子は稍〻之れと異なれり、孔子も政治權を握り、其平生の抱負を實行せんとせしも、遂に十分に其志を遂ぐるの機會を得ざりき、故に退いて書を著はし、之れを後世に傳ふるに至れり、故に孔子は帝王の比にあらずして、寧ろ民間の偉人なりき、固より精神界の帝王といふべきも、執政者としての帝王にはあらざりき、故に孔子と

先王とを一樣に論斷するを得ざるものあり、孔子の道は先王の道に本いて立つる所なるに相違なきも、亦道德の敎訓を後昆に垂れたる聖人なり、故に其說く所は獨り政治に限るにあらず、個人の品性を修養するに適切なるもの、敎訓の大半を占むることと、論語を一瞥しても知るべきことなり、然れども徂徠は孔子は先王の道を傳へたるものとし、道といへば必ず先王の道を主として之れを論ぜり、故に彼れが儒敎の本領政治にありとするもの、必然の結果といふべきなり、彼れ太平策、答問書及び政談の三書に於て政治上の見解を敍述せり、然るに其政治論は畢竟二種の事件に歸す、其一を安民とし、其一を知人とす、知人は安民の爲めに必要なる條件にして、彼れが最も得意に其方法を說破する所なり、彼れ先づ政治の要訣を論じて曰く、

在安民在知人と云ふ二句は聖門の萬病圓なり、制度を立て替ふるやうなる大儀も、此二句にあらざれば、行はれず、何れの世、何れの國にても、又雜覇の小道を行ふ人も此二句にあらざれば、功を成すこと能は

ぬなり、安民は仁なり、知人は知なり（太平策）

又後世の儒者、仁を誤解せりとして、論じて曰く、

後世の儒者、仁と云ふは、至誠惻怛などゝ釋すれども、たとひ至誠惻怛の心ありとも、民を安んずること能はずんば仁にあらず、何ほど慈悲心ありとも皆徒仁なり、婦人の仁なり、母の子をかわいがる類なるべし、或は孟子に泥みて不忍人心などゝ云ふこと是れ又婦人尼御前などの心なり、云云（同上）

然らば徂徠彼れ自身の仁はいかなるものなるか、彼れ固より一家の見解あり、云く、

制度を立てかふると云ふは、風俗をなほさん爲めなり、風俗は世界一まいなるゆゑ、大海を手にて防ぐが如く、からわざにてなほし難し、是れをなほすに術あり、是れを聖人の大道術と云ふ後世理學の輩は道理を人々に說き聞かせて、人々に合點させて、其人々の心より直さんとす、米を臼へ入れて搗かして、一粒づゝしらげんとするに同じ、正眞

の小刀細工なり、又小人の術は、長久に用ひられずしかも術の迹見ゆるによりて下の奸智を引き起し、上を疑ひ、上をさけすむ心を釀成して益〻風俗をあしくす、云云、風俗は習はしなり、學問の道も習はしなり善になるゝを善人とし、惡になるゝを惡人とし、學問の道は、習はし熟してくせにしなすことなり、此外に別に工夫の仕方、修行の手段なきことなり云云、故に聖人の道は習はしを第一とし、聖人の治めは、風俗を第一とす、されば只今までの風俗を移すことは、世界の人を新にうみ直すが如くなるゆゑ、是れに過ぎたる大儀はなきなり、故に、大道術ならでは是れを直すことはならぬなり、(同上)

因りて彼れは更に其大道術の果していかなるものなるかを論ぜり、其言に云く、

其大道術と云ふは、觀念にもあらず、まじなひにもあらず、神道にもあらず、奇特にもあらず、わざなり、わざの仕かけによりて自然と移り行くことなり、今時の治めは、鼻の先きにて世話をやくを政に盡くすと

云ふ、天地の造化は、移り行くものなり、人は活物なり故に人事の變、日を逐ひて生ず、是れ生々不息の妙用なり、かの生々不息なるものを手に執へて作りなほさんとするは、強く押ゆる程、先きにてははねかへることを知らず、聖人の道は、長養の道なり、造化に隨つて養ひそだて、物のなりゆきを能く知りて、かくすれば先きにかくなると云ふ所を合點してわざの仕懸を以て直すときは、目前には、迂遠なるやうなれども、先きへゆきて、自然と心のまゝになるなり(同上)

此の如き大道術の要具は、禮樂に外ならざるなり、是故に徂徠は禮樂にあらざれば、風俗もなほらず、儉約もならぬものなり(同上)

と云ひ、禮樂の行政上最も効驗あることを主張せり、宋儒及び仁齋の徒が、道學の一方に畢生の力を盡くし、其弊、嚴肅に偏し、小心に失するの時に當り、徂徠が社會的眼孔を具し、天空海濶の政治的見解を立てたるは、大に喜ぶべき所なり、宋儒及び仁齋の徒は、德邵く學深しと雖も、往々にして迂濶の𧮾を免れざるものあり、之れに反して徂徠は能く世事に通

曉し、自ら豁達の處あるを見る、其安民の法として大道術を論じたるが如き、即ち之れを證明せりといふべし、然れども殊に彼れが知人の法を論ずるに至りては、人情の微を闡き世事の幽を顯はし殆んど行政の秘術を説破するの趣あるが如し、彼れ論じて曰く、

人君の職分只人を知るひとつに歸して、是れを人君の智の德と定め、外の智慧は入らぬことなり、この大智あれば、安民の功は、心のまゝになることとなり、故に古より聖賢の君の德を稱嘆するには、外の美事をば稱せず、賢臣を得たることをかぞへて稱することと、是れかりそめに云へるにあらす、古の人は、道をよく會得したるゆゑ、ほめどころを知りてほめたるなり、(同上)

又曰く、

愚なる人は、人を知ると云へば、遍く臣の賢愚を悉くに知らんとす、是れ道を知らざる過なり、假令ひ聖人の智なりとも、遍く知り盡くすことはならぬことなり、賢人を知りて擧げ用ひ、委任するは、其賢人が段

々に又賢者を薦達するゆゑ、のこる賢者はなき事なり、されども第一の難儀は一人なりとも賢者を知ること難きものなり、習俗の内に陥り、その眼より見ては、我眼ゆがむによりて賢者は見えぬものなり、見え難きものを能く知るゆゑ、是れを大徳とすることなり、又愚なる者の料簡には、人を知ると云ふは、人の人柄、長短得失を知り盡くして、其人を用ひんとするときは、人を用ふることとはならぬものなり、人を用ふる道は、其長處を取りて、短處はかまわぬことなり、長處に短處はつきてはなれぬものなるゆゑ、長處さへ知れば短處は知るに及ばず、唯よく長處を用ふれば、天下に棄物なし、必ず長處短處をつぶさに知らんとすれば、短處を氣遣ふ心つよき故、長處を快く用ふることならぬものなり、云云、されども其長處を知ること難し、是れ又愚なる人のあやまりなり、唯、其人をながめ居りて、其長處を知らんとするゆゑ、一生ながめても見えぬなり、人は活物なり、過ぎし昔を見て、其人を知り極むることあるべからず、用ひて見ば長處あらはるゝものなり、委任す

れば、長處ます〳〵はたらきて、今までなき才智も生ずるは、人の活物なるゆゑ、人君の用ひやうにて人才を養ひ成し、器量の人出來るなり、われと吾身にても吾才の長處を知らぬは用ひて見ぬゆゑなりまして人の才能を用ひずして知らんとするは、神道を得んと願ふに似たり、愚なるの甚しきにあらずや。(同上)

徂徠が人才を得るの法、仔細に考來たれば、甚だ實際に適切なるものあり、但「其長處さへ知れば短處は知るに及ばず」といふは、未だ必ずしも當れりといふを得ず、短處をも知りて、唯其長處のみを用ふべきなり、若し短處を知り居らざれば、其如何なる事に不適當なるかを知ること能はず、此の如くなれば其長處を用ふることも、亦甚だ困難ならざるを得ず故に人は其長處と短處とを併せて知らざるべからず、然れども之れを用ふるは、唯其長處に出るのみ、短處は過失を防ぐが爲めに兼ねて知るを要するものなり、彼れ尙ほ論じて曰く、

國土に五穀を生じ、材木萬物を生じ候事、古も今も替はる事無御座、世

界の用事にさしつかふる事は何れの世とても無之物に候、人とても其如くに候、尤も聖賢教養の内より生じ候人と、教化缺けたる代の人とは、替はり候へども、其時代の用に立ち候程の人才は、必ず有之物に候、國無人と申事有之候を御覧誤り候にても候哉、夫れば朝廷に人なきと申すにて候、朝廷に人なきは用ひざるが故に候、朝廷に人なき世は、賢才、下僚に沈み、或は民間に埋もれ候事、道理の常にて御座候を、人なきと被仰候事、孟子に有之候歳を罪するの類にて、天道に對し、勿躰もなき事と奉存候、云云、自分の才智を御用ひ候御病根、翳膜となり候て、ある人の御目に見え不申にて可有御座候、御書面の趣にて察候へば、人才と被仰候は、定めて御望の注文可有之候、其注文に合ひ不申をば、人才には不被成候と相見え申候(答問書中)

是れ人を知り人を用ふるの能力なき執權者に對しては、最も適切なる訓戒なり、若し彼等にして己れが所望に合する者のみを用ひば、阿諛奸佞の徒、周圍に集まるが如き結果を生ずるに止まらん、彼れ又曰く、

手前の御物ずきを御立て被成候と申候も、見えぬ故の事に候、畢竟は御一人の誤にても無御座、世俗の惡習にて候、世俗の惡習にて人々自分にぬりかくし申候故、滿世界霧の內の如く罷成候、云云、仕置次第に細になり、過失を咎むる事甚しくて、下をも過失なき樣に押へかゝへするを今時はよき役人と申候、是故に面々も過失なき樣にと心懸け、子供をも其樣に敎へいれ候、是れ今世の習俗にて、此心得故、人々物每に踏み込み深入りする事なく、上をぬり隱す事を第一と仕候、されば人々此の如く心懸け候故、見え兼ぬるもことわりにて候、足下も御先祖樣の時代の事、御聞可被成候、今の世より見候へば、其時分に名を申候能き人と申候は、皆疵物にて候、是れ別の子細に無御座候、其時分はぬり隱し申候事無御座候故、疵見え申候、疵見え申候へば、人才は見え申候、今時も世上の惡俗に染み不申候人は、疵多く御座候間、疵物にならでは、人才はなき物と被思召、疵物の內にて御えらび可被成候、疵もなく才も長じ候人を御尋ね候はゞ、御物ずきの注文と申物にて候、疵な

き人は、鄕原か巧言令色か、扨は庸人と可被思召候、（同上）

徂徠の論、愈出てゝ愈妙といふべし、凡そ人を用ふるに當りて完全なるものを求めば、世上一人も之れあるなし、殊に有用の材は、凡庸より拔き出てたる者なるを以て、其缺點亦必ず著しく見ゆると多し、故に如何なる缺點あるかといふことのみに注目せずして、又如何なる技倆あるかを看破せざるべからず、然れども人の技倆てふものは、實際其人を用ひて局に當らしめざれば、看破すること難し、徂徠此意を述べて曰く、

疵物と申候は、譬へばくせ馬の如くに候、彼れがくせを致し申候時の取り納めの仕樣合點不參候內は、氣遣にて被乘不申候、是れも尤には候へども、ゐながらに其取り納めの仕樣、合點參る物にて無御座候、馬屋の者、ばくらう抔に能くくせ馬を乘り候もの有之候、一々に馬術鍛錬致したるにても無御座候、又何程馬術鍛錬いたし候とも、馬も活物に候へば、くせの程位、たしかに知れ申候に極まりたる物にても無御座候、只氣遣の心つよく御座候故、とにかくに埒明き不申にて候、押し

となし乘りつけ候へば、左迄の氣遣はなき物と申候事合點參る物候、三度も五度もなげられ候心得にて無御座候ては、くせ馬には乘られ不申候、今時の人は、人の過失を咎むる心つよく候故、自分も過失なき樣にと存候、是れにより使ひそこなふまじきと思召候御心故、疵物の使ひにくき事被仰候にて御座候、馬に乘りそこなふ人ならでは、馬は乘り得ぬ事に候、人を使ひそこなふ人ならでは、人をば使ひ不得候、云云、人の使ひそこないなき樣にと思召候は、聖人に勝らんと思召候にて御座候、大なる惑と可被思召候、云云、藥は皆毒にて候へども、毒と名を付け不申候事は、長所を用ひ候故に候、云云、其實は天地の間の物、何によらず各長短得失御座候て、其長處を用ひ候時は、天下に棄物棄才は無御座候へども長處を御存知不被成候故、短處にばかり御目つき申候て、疵物と思召さるゝにて候、人を用ひ候には、其長處を取りて短處に目を付け不申候事、聖人の道にて御座候(同上)

又曰く、

人は活物に候へば、事に懸け候ふて見候へば、今迄無之才智も出る物にて御座候、兎角用ひて見不申候得へば、聖人とても御存知無之候、云云、先づ長所を知りて後に用ひ可申存候はゞ、人は用ひられ申間敷候用ひてならでは知れぬ物と可被思召候、但し用ふるに就いて又次第御座候、此方より指圖を致し候て使ひ候へば、其人必ず其事にはまり不申候故、十分の才能は出ぬ物にて候、小々の過失をゆるし不申候へば、たとひ指圖を致不申候共、はまり無之物に候故に、用ひざれば知らず候、ゆだねざれば誠に用ふるにては無之候云云(同上)

尚ほ徂徠は政談巻三の中に最も精細に人を用ふるの法を論ぜり、其言一々注意を惹くに足るものありと雖も、二篇の長文なるを以て今悉く之れを引用すること能はず、因りて左に唯々其參考に資すべき重要の部分のみを摘記せん、

一

國を治むる道は人を知ることを第一肝要なる事とすること古より

聖人の道斯の如し、

二

人を知ると云ふ物は兎角使ひて知ることゞなり左はなくて我目がねにて人を見んとせば畢竟我物好に合する人を器量ありと思ふことなり是れ愚なる事の至極なり、

三

手前の目がねを手前の才智にて人の器量を知らんとするときは必ず誤あることなりと知るべし是れによりて人の器量を知ることは其人を使ふて見て其器量を知ること古よりの道なり、

四

人を使ふ道は君の思召と何程違ひたりとも此方より指圖をせずして其人の心一盃に働かせて見て其の人の器量を知ることなり其上にて功あるを賞し功なきを退くべし但し小過をゆるすと云ふことありて小過を咎むれば其人小過もなき樣にとする故其才智縮んで

働かず、心一盃に働くことならぬなり、心一杯に働かぬ時は其器量は見えぬなり、

五

少々の有餘不足ありて少々の仕落はなくて叶はぬことなり、少しの仕落を厭ひて大なる功を立て得ざれば、咎はなけれども功なし、功なければ、何の益かあるべき、大なる所に功あらば、少しの仕落は少しの事なり、苦しからぬ事なり、

六

總じて少しの害を捨てねば、大きなる功は立て難きものなり、

七

大なる功あるならば、小過は許さで叶はざる事なり、

八

樣々の惡弊と云ふは、人に身を蹈み込ませぬ樣に仕掛くる事是れ第一の惡弊なり、

九

聖人さへ過はあるなれば仕落は誰れもあることなり、

十

治世にても上へ物申すは下たる者の身には虎口同然の事なり身の危さは同じ事なり此情は下とならねば知らぬ事なり、

十一

上より才智を出だせば下の才智は出ぬものなり和して同せずと云ふ本文聖賢の奥義なる事を知らず下と才智の爭になる故上の威光に壓れて下の才智は引込むなり上たる人下と才智を爭ふは是れ上たる人長しき心なくて若輩なる事なり上は負ふて下を育つるは上たる人の無智なるにあらず、

十二

下を使ひ込みて其役に閙らするときは其賢才の人顯はるゝ事なり、

十三

人の才智はいつも同じことなれども、其事に閙らぬときは、其人の才智の全躰にならぬ故、其才智十分に顯はれぬなり、能く此事に閙りて見れば、全躰になる故、才智の全躰出現する此妙所はわざをせぬ人は、知らぬ事なり、斯の如き道理にて人を知る道はやはり人を使ふ所にあり、毛頭我使ひ樣のよきにて其人の才智生ずるにあらず、

十四

大概癖のある人に勝れたる人多きなり、癖のある人が、皆々勝れたる人なりと云ふことにはあらず、一癖あるものに勝れたる人多きものなり、是れによりて面魂一癖あるとて名將の左樣の人を賞翫したること多きなり、聖人の書には、是れを器と云ふ、器と云ふ物は、譬へば、鎗はつく業計にて切るわざなし、刀はきる業計にて突くわざ踈し、錐は尖りてさいづちの役ならず、木椎（さいづち）は鈍くして錐の役ならず、總じて刄物は鞘に入れて置かねば怪我をする大なる癖あり、是れ器なり、されども其わざの能處は使ふて見ざれば知らぬものなり、只見れば其片

輪なる處計が目に掛る、是れ癖なり、されば癖あるものにあらざれば、器と云ふ物にあらず、器と云ふ者にあらざれば役に立たぬものなり、人も其如し、

十五

名將は一癖あるものを好むなり、

十六

中庸に舜好問、好察邇言と云ふは聖人も知らぬ處實にある故、人に問ひ了簡を云はせて是れを用ひ、人を其役儀に鬪らせ、其人の才智を一ぱいに現すべき爲めの妙術なり、下たる人の才智十分に現はれたる時、賢才は知らるゝことにて、古より國天下を治むるには、唯人を知るを智惠の至極とする故、孔子も是れを大智と云へるなり、唯人を活して使ふと殺して使ふとの差別によりて賢才の顯はるゝと現はれぬとの替りあり、されば世末になるに隨つて上たる人の器量小さくなる故、物を氣遣ふ小氣なる心强く、癖ある人の内にして才智ある人を

取り出たすことを知らず、

十七

賢才と云ふは一器量ある人を云ふ、左樣の人は一癖ある人の中に多くは有るものなりと了簡して其人を役儀に關むる樣に使ひ込むときは誠の賢才現はるべし、

十八

總じて人を疑ふべからず、唯人を取り出だし度と云ふ心なき故能き人は出でぬなり、

其他服膺すべき名言佳句少しとせず、以上摘記する所百花園中偶眼を遮るものを選出するに過ぎざるなり、徂徠が人を用ふる法に關する所論、委曲周到にして多方面に渉れりと雖も、其要點を擧ぐれば左の如し、

(一) 人の長處は始めより知らんことを求むべからず、之れを用ふれば長處始めて顯はる、

(二) 人は唯其長處のみを取れば可なり、其短處の如きは知るを要せず、

(三)能く用ふれば其時代の必要に應ずる程の人才は必ず之れあり、
(四)人は己れが嗜好に合するもの而已を採用すべからず、
(五)人才は必ず疵瑕あり、疵瑕なきは以て人才となすに足らず、
(六)人を用ふるに當りては小過は咎むるを須ひず、唯大功あれば可なり、
(七)用ふる以上は十分事を其人に委ぬべし、
(八)上たる人下と才智を爭ふべからず、
(九)人才は必ず一癖あるものなり、是れ器なるが故なり、器ならざれば用ふるに足らず、

徂徠は行政上人を用ふるを以て最も重大の事件となし、法制の如きは人の如くに重大なるものにあらずとせり、其言に云く、

法の立て様を何程に宜しくしたりとも、其法を取扱ふ人なき時は無益の物に成ることなり(政談卷四)

又云く、

法よりは人猶ほ肝要にて御座候、たとひ法は悪しく候とも、人能く候へば相應の利益は有之ものに候、法計の吟味仕候て、人悪しく候へば、何の用にも立ち不申候、又人に随つて法は違ひ候ものに候(答問書中)

是れ亦一見識なり、假令ひ法あるも之れを行用する人なければ、功を成さず、已に人あれば、法のいかんに拘はらず、功を奏すること疑なし、此れ徂徠が人を用ふるを以て重大の事件とする所以なり、彼れ又太平策の中に神道に就いて説をなして曰く、

神道と云ふことは卜部兼倶が作れることにて、上代に其沙汰なきことなり、

と、後世唱道する所の神道の古道にあらざることを斷言せり、然れども古道の存在を否定するの意にあらず、故に論じて曰く、

唯吾國の神道とも云ふべきことは、祖考を祭りて天に配し、天と祖考とを一つにして何事をも鬼神の命を以て取り行ふこと、文字傳はらざる以前よりのことなれども、是れ又唐虞三代の古道なり、

彼れ此の如く我邦の古道と支那の古道とを同一視し、其支那の古道を尙ぶが如く我邦の古道をも尙ぶの要を知れるが如し、彼れ乃ち曰く、

神道はなきことなれども、鬼神は崇ぶべし、まして吾國に生れては、吾國の神を敬ふこと、聖人の道の意なり、努々疎にすまじきことなり、

此れに由りて之れを觀れば、彼れ本と極端の拜外主義を懷くものなれども、亦國體の尊重すべきを知らざるものにあらざること、推して知るべきなり、

第六　宋學論

徂徠は仁齋と同じく宋儒を以て佛敎の敎義を取り、孔子の道に背くものとなし、痛く之れを排斥せり、辨道、辨名、文集、答問書、太平策等の書に於て屢、宋儒を非議し、以て自家の主張を標榜することを務めたり、彼れ宋儒の學の佛敎に出づるを論じて曰く、

宋儒理氣の說は、佛家の眞諦假諦に相似候、天理人欲は、眞如無明に相似候、古は聖人賢人と云ふ名目は無之候、是れ又佛菩薩に相似候、道統

の傳と申事、古は無レ之候、是れ佛家の血脈相傳に相似候、敎に知行を分つと申事、古は無レ之候、佛家には解行と申事有レ之候、豁然貫通と申事、古は無レ之候、禪家の大悟徹底に相似候、靜坐と申事、古は無レ之候、是れ又坐禪の眞似と被レ存候、(答問書下)

宋儒の說と佛說とを比較對照すれば、此の如き類似の點あること疑なし、又宋儒の佛說を假り來たれるもの、少しとせず、然れども宋儒の說の佛說と相似たるものあるを以て、悉く佛說に出づとするは非なり、世界及び人生の事、精細に攻究し來れば、期せずして自ら暗合することなしとせず、故に宋儒の說の如きも、佛說を假らずして、佛說と相似たるもののなきを保せざるなり、尙ほ徂徠が宋儒と異なる所を擧げて之れを論ぜんに、宋儒は一身の修德を主とせしに反し、徂徠は功利主義を懷き、政治的見解を有せしが故に、道を論じて曰く、

聖人の道は專ら天下國家を治むる道にて、禮樂刑政の類、皆道なり、(同上)

又曰く、

聖人の道は、至極の處、天下國家平治の爲めに建立なされたる事に候、身を修むる事の有之候も、身脩まらざれば、下尊信せずして道行はれざるゆゑ、君子は身を脩め候(同上)

乃ち徂徠は脩身を以て治國の方便となせり、之れに反して宋儒が脩身を主とするを非として曰く、

たとひ何程心を治め身を修め、無瑕の玉の如くに修行成就候とも、下をわが苦世話に致し候心無御座、國家を治むる道を知り不申候はゞ、何の益も無之事に候、依是民の父母と申所より見聞き不申候はゞ、何程の金言妙句も、孔子の御相傳被成候堯舜禹湯文武周公の道とは雲泥萬里の相違にて御座候、聖人の道と佛老の道との分れめ只此處と可被思召候(答問書上)

尙ほ又聖人の道を論じて曰く

只我身ひとつを佛にも聖人にもなすといふ樣なる物ずきなる事に

ては無之と可被思召候(答問書下)

宋儒を挪揄翫弄すること此の如し、又宋儒の學の心法理窟に陷りて、風雅文采を失ひたるを非として曰く、

聖人の道は專ら國天下を治め候道に候、道と申候は事物當行の理にても無之、天地自然の道にても無之、聖人の建立被成候道にて、道といふは國天下を治め候仕樣に候、扨聖人の敎は專ら禮樂にて風雅文采なる物に候、心法理窟の沙汰は曾て無之事に候、宋儒以來わざを捨て理窟を先きとし、風雅文采をはらひ捨て、野鄙に罷成候、天子の道なる事を忘れ候より專ら道理を說き候て人を喩し候事を第一に仕候(同上)

又一層痛快に宋儒の弊を道破して曰く、

後儒僅に能く精粗本末、一以て之れを貫くといふ、而して其意の鄕往する所を察するに、則ち亦唯內を重んじ、外を輕んじ、精を貴び、粗を賤み、簡を貴び、要を貴び、明白を貴び、齊整を貴ぶ、此れより以往、先王の道、

據りて以て衰颯枯槁し、肅殺の氣、宇宙に塞がる（辨道）

是れ固より極端の言なりと雖も、宋儒が道德的工夫の一方に偏したることは疑なし、之れに反して徂徠が風雅文采を主張したるは大に好し、孔子の如きも、決して無風流なるものにあらず、嘗に自ら磬を擊ち、瑟を鼓し、又能く歌ふのみならず、又禮を尙び樂を嗜み、詩を好むの心ありて、文雅風采饒ならずとせず、然るに宋儒が文雅風采を捨てゝ、勃窣理窟を主とせしは、一方に偏せるものなること疑なし、故に徂徠が此の如き宋儒の弊を矯正せんとしたるには同情を寄せざるを得ざるなり、徂徠は宋儒と仁齋とを併せて之れを排斥すれども、仁齋が活動主義にには少からざる贊成の意を表せり、彼れ曰く

仁齋の學、其骨髓、天地一大活物といふにあり、此れ其時流に踰ゆる、萬々なる所以なり（蘐園隨筆卷之上）

又曰く、

仁齋先生活物死物の說、誠に千歲の卓識なり（辨名下）

此の如く仁齋が活動主義を稱揚すると同時に宋儒の寂靜主義に反對せり、故に此點に關しては徂徠、仁齋と手を取りて宋儒に敵抗するが如きの看なしとせず、徂徠、宋儒の寂靜主義に反する自家の積極的見解を吐露して曰く、

彼の後世の君子、宋の諸老先生の若きものを觀るに、其學を語るや、務めて善を修めて惡を去り、天理を擴めて人欲を遏むるを言ふ、而して先王の教、唯其善を導いて惡自ら消するを知らざるなり、其治を語るや、務めて君子を賞して惡人を罰するを言ふ、而して先王の道、唯仁者を擧げて不仁者自ら遠かるに在るを知らざるなり、其人を論ずるや、務めて其長短得失を備ふ、而して先王の道、唯其長を用ひて天下棄才なきにあるを知らざるなり、(辨名上)

洵に卓見なりといふべし、宋儒は又性に本然氣質の二種ありとせり、仁齋已に之れを非として氣質の性のみを認容せり、徂徠亦之れを論じて曰く、

本然氣質の性と申儀、得と詮議をつめ御覽可被成候、畢竟氣質の性ばかりにつまり候事に候、氣質を變化すると申事、是れ又無理の至極に候、(答問書下)

徂徠は此の如く獨り氣質の性のみを認容し、更に又一歩を進めて此氣質の性を以て不變化的のものとせり、是れ又宋儒の氣質變化を說くと正反對を成せる所なり、彼れ乃ち論じて曰く、

氣質を變化すると申候事は、宋儒の妄說にて、ならぬ事を人に責め候無理の至りに候、氣質は何としても變化はならぬ物にて候、米はいつ迄も米、豆はいつまでも豆にて候、只氣質を養ひ候て、其生れ得たる通りを成就いたし候が學問にて候、たとへば米にても豆にても、その天性のまゝに實いりよく候樣にこやしを致したて候ごとくに候、しいなにては用に立ち不申候、されば世界の爲めにも、米は米にて用に立ち、豆は豆にて用に立ち申候、米は豆にはならぬ物に候、豆は米にはならぬ物に候、宋儒の說のごとく氣質を變化して渾然中和に成り候は

ゞ、米ともつかず、豆ともつかぬ物に成りたきとの事に候や、それは何の用にも立ち申間敷候や、又米にて豆にもなり、豆にて米にも用ひられ候様にと申事に候はゞ世界に左様なる事は無之事に候（答問書中）

是れ亦一種の見解なり、尙ほ此事に關しては前に擧げたる道德論の(四)氣質不變化の說と參看するを要するなり、宋儒が氣質變化といふは米を變化して豆となし、豆を變化して米となすが如き種類の變化をいふにあらず、人の氣質の不善なるを變化して善となすことなるが故に、若し之れを米若くは豆に比すれば、米若くは豆の不良なるものを變化して良となすに當るなり、若し人を變化して獸となし、獸を變化して人となすといふが如き種類の變化ならば、米と豆との交互變化を以て之れを推論すべきも、是れ宋儒の主張する所にあらず、徂徠比喩を誤れりといふべし、徂徠と宋儒との學說の異同を左に列擧せん、

徂徠	宋儒
(一)古學を主張す	古學にあらず（即ち理學を主張す）

(二)功利主義を取る	功利主義を取らず
(三)禮樂刑政を道となす	理を道となす
(四)道は作爲に出づとなす	道は本性に具はるものとなす
(五)氣質不變化をいふ	氣質變化をいふ
(六)文雅風采を尙ぶ	心法理屈を尙ぶ
(七)活動主義を賛す	寂靜主義に陷る
(八)政治を主とす	修德を主とす
(九)獨り氣質の性のみを立つ	本然氣質の兩性を立つ

(以上差異點の主要なるものを擧ぐ)



第七　仁齋と徂徠との學說の異同

已に仁齋と徂徠との學說を叙述し了はりたる以上は、一たび其學說の異同いかんを考察すること、蓋し無用の業にあらざらん、仁齋と徂徠との學說を比較對照するに共通點もあり、又差異點もあるなり、先づ左に共通點を擧げんに、

(一)仁齋も古學を主張し、徂徠も古學を主張す、……是れ確に一の共通點なり、然れども徂徠は古文辭によりて古學を修むるの要を論じ、仁齋は此に論じ及ばず、故に全く同一の古學とはいふべからず、但〻宋學を排斥して直に洙泗の淵源に接せんとするの一事に至りては、毫も異なる所なきなり、

(二)仁齋先づ活動主義を主張して、徂徠亦從つて之れに和す、……活動主義は仁齋が宋儒の寂靜主義に反して唱道する所にして、徂徠深く其卓見に服し、之れに賛同の意を表せり、

（三）仁齋唯氣質の性のみを主張し、徂徠亦然り、……仁齋も徂徠も宋儒の本然氣質の兩性を立つる二元論を非として、共に一元論を立つるものなり、

次ぎに差異點を擧げんに、

（一）仁齋は仁義を以て道となし、徂徠は禮樂を以て道となす、……仁齋と徂徠と同じく古道を復活せんとするも、道其物の解釋、大に同じからざるものあるなり、

（二）仁齋は古文辭の要を言はざれども、徂徠は古文辭を以て古學の階梯となせり、……徂徠の古學は此點より之れを言へば古文辭學なり、之れに反して仁齋の古學は古義學とはいふべきも、決して古文辭學にはあらざるなり、

（三）仁齋は功利主義を非として、徂徠は功利主義を取る、……仁齋が功利主義を取らざるは、宋儒と同じ徂徠公然と功利主義を標榜して起たず、然れども隱然功利主義を取るものなることを到底否定するを得

ざるなり、

(四)仁齋は道を以て自然に出づとし、徂徠は全く作爲に出づとせり、……仁齋は道の觀念に於て未だ徹底せざる所ありと雖も畢竟道を以て人爲を竢たず、天地自然に存するものとせり、即ち道を以て固有とするものなり、徂徠之れを否定して、道は先王の作爲を經て始めて存するものにて、自然にあらずとせり、

(五)仁齋は德性を尙び、徂徠は政治を尙ぶ……仁齋の尙ぶ所は寧ろ個人の私德なり、徂徠は私德を後にして、主として公德を尙ぶものなり、故に徂徠は仁齋の孤獨的なるに引き代へて、社會的なるの看なしとせざるなり、

(六)仁齋は窮理をなし、徂徠は窮理を取らず……窮理をなすの點より之れを言へば、仁齋も宋儒と異なる所なし、即ち天地理氣等の事に就いて自ら思索して究明せんとせり、徂徠は之に反して窮理の道を杜絕して、專ら古語學的研究に從事せり、是故に仁齋は徂徠よりは比較

的に哲學者の性質を有せるを知るべきなり、

（七）仁齋は聖人を學ばんとし、徂徠は聖人は學ぶべからずとせり……聖人を學ばんとせしは、獨り仁齋のみならず、宋儒も亦然り、徂徠獨り聖人たらんことを求むるの非を道破せり、

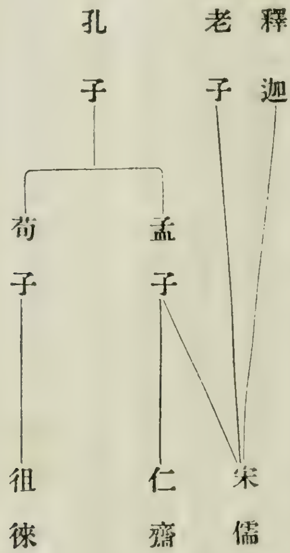
（八）仁齋は孟子を尙び、徂徠は孟子を尙ばず……仁齋は大學を斥け、中庸を疑ふと雖も、孟子は大に之れを尊信し、「孔門之大宗嫡派」となせり、徂徠は思孟を併せて之れを斥け、竊に荀子を尙ぶ者の如し、

（九）仁齋は仁義禮智を以て德の名とし、徂徠は然らず……徂徠は仁義禮智の中仁智は德にして、禮義は道なりとす、乃ち禮義は外部的にして先王の作爲に出づるもの、但だ仁智は身に得る所あるをいふなり、

以上擧ぐる所は差異點の重なるものなり、徂徠、宋儒とあらゆる點に於て正反對に立ち、殆んど何等の共通點をも有せず、然るに仁齋とは少くも三種の共通點を有す、故に仁齋は徂徠と宋儒との間に立ちて橋梁の如き地位を占む、然れども仁齋は徂徠よりは寧ろ宋儒に近し、故に仁齋

と徂徠との學說を對照すれば、其差異點は共通點より迥に數多なるを見るなり、

學系略圖



第八　批判

(一)

徂徠は本と文章家にして、經學家にあらず、然れども齡五十前後に至りて、偶々仁齋の大學定本、語孟字義等の書を讀んで深く其識見に服せり、故に其仁齋に與ふる書中「先生眞に時流に踰ゆる萬々」といひ、又「烏虖茫々たる海内、豪杰幾何ぞ、一も心に當るなし、而して獨り先生に嚮ふ」といひ、共に談ずるに足るもの、仁齋を置いて他に之れなきの意を示せり、又辨名の下に仁齋が活物死物の説を評して「誠に千歳の卓識なり」といひて、多く言を費やさざるも、其實大に仁齋を景仰するの念を表はせり、然れども徂徠の剛愎不遜なる、仁齋の門下に立ちて、弟子と稱するに堪へず、乃ち蘐園隨筆を著はして朱子を廻護し、痛く仁齋を攻擊せり、然れども尙ほ仁齋に勝つ事能はず、因りて又一家の説を立て、辨道辨名等の書を著はして宋儒と仁齋とを併せて排斥し、詭辨を弄び、讕言を舞はして至

らざる所なし、之れを要するに、徂徠は仁齋に刺激せられ、仁齋に反抗して興れるものなり、故に多くの點に於て徂徠は仁齋と反對の地位を取りて、仁齋が壘壁に迫らんとするの勢あり、殊に道德主義に關しては、兩者大に其見解を異にするものあり、仁齋道を論じて曰く、

道は人倫日用、當に行くべきの路、敎を待ちて後、有るにあらず、亦矯揉し而して能く然るにあらず、皆自然にして然り、四方八隅、遐陬の陋蠻貊の蠢たるに至るまで、自ら君臣父子夫婦昆弟朋友の倫あらずといふことなく、亦親義別敍信の道あらずといふことなし、萬世の上も此の如く、萬世の下も亦此の如し、(語孟字義卷之上)

是れ道の自然にして且つ普遍なることを道破するものなり、又曰く、

凡そ父子の相親み、夫婦の相愛し、儕輩の相隨ふ、惟人之れを有するのみにあらず、物亦之れあり云云、惟君子能く之れを存するのみにあらず、行道の乞人と雖も、亦皆之れあり、聖人之れを品節して、以て敎をなすのみ、之れを強ふることあるにあらず、(同上)

是れ道は聖人の作爲に出づるものにあらずして、人性固有のものなることを説示するものなり、尚ほ又德に就いて論じて曰く、

若し德を以て得るの義となすときは、則ち德は是れ脩爲を待ちて後あり、豈に本然の德を盡くすに足らんや、(同上)

是れ德てふものは本然のものにして、脩爲即ち經驗を待ちて始めて得る所にあらざるを明言するものなり、簡短に之れを言へば、仁齋は道德固有論者にして寧ろ動機を尙ぶもの、故に功利主義を取らずして、個人の私德を修むることを主とせり、然るに徂徠は全く之れに反し、道は先王の制作する所にして、自然に之れあるにあらずとし、功利主義を取りて獨り公共的道德のみを發揚し、個人の私德に至りては殆んど全く言ふ所なきなり、功利主義の弊は智巧方便となり、更に流れて輕佻浮薄となること是れ必然の結果にして、蘐園の學風、之れを證して餘りありといふべし、之れに反して仁齋の如く個人の私德を修むるを主とするは、各自の品性を高うする所以なるが故に之れを唱道するは、益多くして

害少し、或る人仁齋と徂徠とを對照して論じて曰く、
仁齋の見解は愼密にして卑近に近く、徂徠の論議する所は辨博にして放肆に失す、寧ろ仁齋の學は害少く益多くして徂徠の學は益なきに非ざれども、其害亦大なりと云ふべし、
誠に然り、仁齋の名敎を裨補せしは多大にして、其害に至りては、未だ何等の顯著なるものをも發見するを見ず、徂徠の名敎を裨補せしことも亦多大なり、然れども其害も亦多大にして、明瞭に其一派の傾向に於て之れを見るなり、若し徂徠の功績の大なるものを擧ぐれば其功利主義を主張して、仁齋の不足を補充したるにあるなり、個人の私德を修むること固より非なるにあらず、否々、是れ人間に取りては、最も重大なる事件なり、私德を修むることは、一切人事の基礎なりといふも不可なることなし、然れども凡そ德行は、唯〻私德さへ修まれば足れりといふべきにあらず、尙ほ進んで社會に對し、公益を圖るの要あるものなり、私德を修むることの德行たるが如く、利用厚生も亦德行なり、是故に私德と共に

公德即ち社會的道德の要を知らざるべからざるなり然るに徂徠は公德を知りて私德を知らず仁齋は私德を知りて公德を知らず各一方に偏する者なり仁齋政を論じて曰く、

夫れ政は德を以て本となし識を以て輔となす(同志會筆記)

是れ政治と道德とを合一するものにて固より古風の思想に過ぎず道德の凡ての政治家に缺くべからざるは言ふまでもなけれども政治は仁齋が云ふが如き道德(即ち私德)によりてなさるべきものにあらざるなり仁齋又經濟を論じて曰く、

學者纔に經濟に志あらば流れて制度文爲の學となる(同上)

仁齋此の如く經濟を賤視すと雖も經濟は國家に取りて一日も度外視すべからざる重大の事件にして私德と價値を爭ふに足るものなり且つ制度文爲の學も亦國家に必要なるものにて其缺乏は決して私德によりて償ふこと能はざるなり之れを要するに仁齋か學は個人の私德を主として政治經濟は勿論總べて公德を度外視せり此の如き仁齋の

不足を補充せしものは徂徠其人なり、果して然らば、徂徠の功績、豈に沒すべけんや、蓋し私德を修めて人格を高うするは、各個人の當に爲さゞるべからざる所にして、若し此事さへ能く成し遂げ得れば、廣く人類に對し、人格の模範を示すに足るなり、若し又此の如き人格にして、其實行上の經驗を基礎として敎を立つることあらば、其感化の及ぶ所、必ず偉大ならざるを得ず、是れ仁齋が學の撲滅すべからざる根柢を有する所以なり、然れども廣く社會の公利公益を增進するが如きは、亦大仁たらずとせず、殊に滊船滊車の便の如き、釋迦基督若くは孔子の仁と匹敵するに足るといふも不可なかるべし、總べて政治經濟及び其他の方法によりて利用厚生の路を圖るは、公德にして、私德と共に無かるべからざる所なり、是れ徂徠が學の仁齋のそれに對して、自ら一敵國を成す所以なり、且つ私德を修むるの一方を主とすれば、少くも二種の弊を生ずるを免かれず、

第一、私德は本と他人に對して修むるものなれども、重きを一己の私

に置き偏に一己の進修上に心を用ひ反りて利己的の傾向を來たすに至る、

第二、私德を修むるを主とすれば、其主眼とする所、一己の私にあるが故に、社會萬般の改良進歩を圖るの念に乏し、是を以て消極的退歩的となり易し、

思ふに徂徠が學は、此の如き弊を救ふに適切なるものにて、殆んど期せずして得られたる配合といふべきなり、尙ほ又之れを考ふるに、自然界は人力いかんによりて利用し得らるゝものにて、人類の自ら進んで使役するを竢つものなり、近世自然の力を使役して、社會萬般の用に供するに至れること、振古以來未だ曾て有らざるの進歩なり、此の如き進歩は、功利主義の精神に合するものにて、獨り個人の德性をのみ尙ぶ道德主義によりて期し得らる所にあらず、此れに由りて之れを觀れば、仁齋の學と徂徠の學とは車の兩輪鳥の双翼の如く並び行はれて、毫も扞格する所なきものなり、但功利主義は均しく之れを功利主義といふと雖

も、利己的 egoistisch と利他的 altruistisch との二種に大別するを得べし、利己的功利主義は利己主義の異名に過ぎざるものにて、道德主義として は、何等の價値もなし、然れども利他的功利主義は公共の幸福を目的とするが故に、其關する所は專ら公德にあるなり、私德も利他的功利主義の立脚點より說き得べしと雖も、私德を催進するの主義として、直接德性涵養を目的とする主義に及ばざること遠し、要するに、利他的功利主義は公德を催進するの點に於て大に效力のあり得べきものなり、然るに徂徠の懷抱せる功利主義は、利己的のものにあらずして、利他的のものなり、故に仁齋の學と相待ちて名敎を裨補するに足るものなり、然れども蘐園の一派、專ら功利に走りて、德性の尙ぶべきを知らず、是れ其弊の少からざる所以なり、

（二）

徂徠、宋儒と仁齋とを併せて之れを攻擊すれども、仁齋とは多少の共通點なきにあらず、但〻宋儒とは何等の共通點をも發見すること能はず、徂

徠と宋儒とは、眞に正反對に立つものといふべきなり、然るに仁齋は其中間にありて殆んど橋梁の如き地位を占む、何んとなれば、一方に於ては宋儒と共通點を有し、一方に於ては又徂徠と共通點を有すればなり、然れども仁齋は寧ろ宋儒に近し、徂徠と共通點を有せざるにあらざれども、其宋儒と共通點を有すること更に多大なり、要するに、徂徠が取る所の立脚點は一家の特色最も多きものなり、其一家の特色と見るべきは、

第一、功利主義

第二、社會主義（社會國家主義の如きもの）

第三、人爲主義

第四、放任主義（或る程度の自由主義）

第五、積極主義

の類なり、徂徠固より是等の思想を今日の學者が要求するが如くに正確に且つ明晰に分類して叙述せしにはあらず、但〻彼れが立脚點の斬新

なるもの主として是等の思想を(漠然とはいへども)含有するに本づくといふのみ、徂徠は其根本思想を荀子より得來たりたるものゝ如し、然れども又多少獨創の見解とも見るべき處なしとせず、殊に其道德を社會的に解釋するが如き、東洋哲學史上一異彩を放つものといふべきなり、若し試みに類例を求むれば、徂徠の見解は、英國の哲學者トーマス、ホッブス氏のそれと相似たり(De corpore politico 及び Leviathan 中の of Commonwealth を看せよ)徂徠は千六百六十六年より千七百二十八年まで生存せしに、ホッブス氏は千五百八十八年より千六百七十九年まで生存せり、故に此二人は殆んど同時代の人にして、十四年間は確に同時に生存せり、日本と英國と東西相隔てゝ、殆んど同時代に類似の學說を主張せること、亦奇異なる暗合ならずとせんや、今左に其類似點を擧げんに、

第一、二人共に人の本性を利己的のものと思惟し、之れを自然に放縱すれば、爭闘して已まざるものとせり、

第二、道德は法律制度を定め、國家の躰形を成すによりて始めて生ず

るものとせり、

第三、法律制度を定め、國家の體形を成すは、一に專制君主の獨裁に任すべきものとせり、

第四、正邪は、自然に存するにあらずして、唯、專制君主の制定せる法律制度に從ふと否とによりて存するものとせり、

是等の點に於て二人共に大抵一致せり、殊に正邪の標準に就いては、ホッブス氏論斷して曰く、

The civil laws are to all subjects the measures of their actions, whereby to determine, whether they be right or wrong, profitable or unprofitable, virtuous or vicious; and by them the use and definition of all names not agreed upon, and tending to controversy, shall be established. (De corpore politico, p.225.)

此の如くなれば、徂徠の思惟する所と、全く同一轍に出づといふべし、但、ホッブス氏は專政君主を說くと雖も、亦共和政體の思想あり、是れ徂徠に無き所なり、故にホッブス氏は民約を言ひ、君主の推選を言ひ、衆庶の

一致を言ひ、多く徂徠の未だ思ひ及ばざる所を説破せり、是れを其主要なる差異點となすのみ、

徂徠及びホッブス氏の見解、頗る奇抜なるものありと雖も、未だ必ずしも正確なりといふを得ず、何故なれば、第一、原人を利己的とするは、比較的の意味ならば、之れを認容すべきも、絶對的の意味にては、之れを認容するを得ず、如何に草昧なりとするも、人類が已に生存する以上は、多少の利他心なかるべからず、少くも母の子女に對する利他心の如きものを否定するを得ず、原人てふものを自然の情態に放任すれば、何等の利他心もなく、單に利己的なりとすること、本と根柢なき臆測に過ぎざるなり、第二、人類は自覺を有し、理性を有す、故に到底秩序なき情態に放任すること能はず、必ず生存上何等かの經營を成し、秩序的發展を企圖するものなり、法律制度の如き、總べて是れが爲めに起れり、是故に法律制度は固より人爲に出づと雖も、亦人類自然の必要に本づくものなり、然るに人類自然の必要は人類自ら作爲せしにあらざるなり、是故に單に

法律制度は人爲に出づとするのみにては未だ根本的の解釋とするを得ざるなり、第三、法律制度を定め國家の體形を成すことを專制君主の獨裁に一任するは或る時代に必要なりしならん、然れども其國家の理想にあらざることは今日は餘りに明瞭となれり、然り、辨解を要せざる程に明瞭となれり、第四、法律制度は絕對的に正邪の標準となるものにあらず、其時代其時代に成れる法律制度は完全無缺のものにあらず、若し完全無缺ならば、悉く既定的となりて進化發展てふことなし、然れども之れを實際に徵するに、法律制度は種々改良を要す、改良を要し、改良を遂行するが故に、進化發展して已まざるを得るなり、然らば其改良は何によりて之れを爲すか、是れ法律制度其物の改良なるが故に、此れを以て其標準とすべからざるは論を俟たず、果して然らば、法律制度以外に之れが正邪を確定すべき標準なかるべからず、是に於てか理性といひ、幸福といひ、快樂といひ、種々なる理論は從つて起らざるを得ざるなり、此の如くなれば法律制度を以て正邪の標準とすることは未だ其當を

得たるものといふを得ざるなり、此れに由りて之れを觀れば、徂徠及びホッブス氏の見解は尙ほ議すべきもの多きを知るべし、但〻人の視線をして新規の點に轉ぜしめ、更に從來學者着眼の圈套外に硏究の局面を開きたるは、其功の存する所なり、ホッブス氏は姑く之れを置き徂徠が日本哲學史上一種特異の地位を占むるもの、職として此れに之れ由るといふべきなり、

（三）

徂徠は聖人は學んで至るべからずとし、單に其道を學んで之れを行ふことを勸告せり、其聖人とは、伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公、孔子の十一人を言ふ、然れども伏羲、神農、黃帝の時、禮樂未だ大に興らざるが故に、後世之れを祖述すること能はず、故に此三帝は聖人は聖人なれども、未だ其至れるものにあらず、堯、舜、禹、湯、文、武、周公の七人に至りては、其德廣大高深にして備はらざるなく、禮樂を制作して、人道を建設せりとし、乃ち是れを聖人と稱せり、孔子は禮樂の作者にあらざるが故に、是れを聖

人と稱するは當らざるに似たり、然れども又古聖人の道、孔子によりて傳はれりとの薄弱なる理由を以て聖人の名を附せり、然れども孔子が唐虞三代以來の道德思想を集めて之れを大成し、後世萬衆の爲めに人道の基礎を置きたるは事實にして、其影響の偉大なる、豈に堯、舜、禹、湯、文、武、周公の及ぶ所ならんや、況や伏羲、神農、黃帝をや、今日より之を觀れば、眞に世界的の智者 Weltweiser ともいふべきものは支那に於て獨り孔子あるのみ、孔子は支那人中より出でたりと雖も、人間の靈妙なるものとしては、固より世界的なり、凡そ世界人類の歷史に於て此の如き靈妙なる人間の出でたりといふことは、其興味といひ、其旨趣といひ、獨り支那の範圍に限らるべきにあらざるなり、若し聖人を以て大智大德を具有せる靈妙なる人間とせば、支那に於て孔子に優るものなし、是故に支那に於て聖人と稱すべきは、獨り孔子あるのみ、若し伏羲、神農、黃帝若くは堯、舜、禹、湯、文、武、周公の如きものを求めば、東西の歷史上多々之れあるなり、此の如き普通の統治者、豈に必ずしも聖人と稱するに足らんや、徂徠

學則の首めに論じて曰く、

東海不レ出二聖人一、西海不レ出二聖人一云云、

と、然れども徂徠が意味するが如き聖人は、古來東海にもあり、西海にもあり、試に算へ來たれば、其多きに堪へざらんとす、徂徠は餘りに支那を崇拜し、彼れが眼孔は遂に支那以外に出づること能はざりき固より當時の事なるが故に歐米各國の史的事實を知らざるは、今更に之れを咎めざれども、近く日本と印度とを考察すれば、已に其主張の妄謬を自覺し得べきに、事此に出でざりしは、彼れが爲めに惜みても餘りありといふべし、假令ひ普通の統治者を外にするも、聖人は支那以外にも亦之れあるなり、釋迦、基督及びソクラーテス氏の如きは、孔子と同じく、是れを聖人といふを得べく、近世に於てもカントダーウヰン二氏の如きは或は聖人の中に列するを得べきものならん、果して然らば**支那以外聖人を出ださずとすることの如何に呆愚なる見解なるかは、舌を勞するまでもなきことなり**、然れども徂徠は後世の聖人を豫期せざるにあらず、

答安澹泊書に云く、

儒者之業、唯守章句、傳諸後世、陳力就列、唯是其分、若其道、則以俟後聖人、是不佞之志也、

是れ一種の豫言にあらずして何ぞや、後世に至りては時勢境遇等大に古代に異なるものあるが故に、聖人出づることありとするも、其如何なる態度を取るかは、豫め之れを知るべからず、然れども古代の聖人とは其態度を異にするものの多かるべきは、略、想見するを得べきなり、姑くカーントダーウヰン二氏を以て聖人とせば、其態度の孔子、釋迦、基督及びソクラーテス氏に異なること亦甚しからずや、

徂徠が聖人は統治者に限るものと思惟せしは當らず、聖人は統治者にもあり得べく、又被統治者にもあり得べし、統治者たると被統治者たるとは毫も聖人たるの資格を妨ぐるものにあらざるなり、又徂徠は氣質の不變化を説き、妄意聖人たらんことを求むるの非を言へども、凡そ人間の進化發展せんとするに當りては、必ず其實現すべき理想を要す、然

るに抽象的の理想は、餘りに空漠にして殆んど捉へ難きの弊あり、是を以て多くは具躰的の理想を實現せんとす、具躰的の理想としては聖人より高尚且つ偉大なるはなし、是を以て苟も具躰的の理想を要する以上は、豈に聖人を以て其理想となさゞるを得んや、徂徠、宋儒を難じて曰く

宋儒乃ち身聖人たらんことを求む、然れども程朱既に聖人たること能はず、而して孔子の後、復た聖人あることなければ、則ち是れ空言を懸けて以て人に能はざる所を強ふるなり、（答安澹泊書）

是れ事實なり、然れども宋儒が放蕩無頼の徒たらずして、謹厚誠實にして、能く有德の君子たることを得しもの、其聖人を理想として、之れを實現せんとせしに由る、假令ひ彼等が聖人たること能はざるも、已に有德の君子たるを得ば、是れ已に十二分の報酬なり、乃ち以て多とするに足る、且つ徂徠は聖人は學んで至るべからずとすれども、是れ亦絕對的に然く斷定すべきにあらず、聖人たらんと欲する者は、固より天才なかる

べからず、然れども聖人と雖も、學ばずして聖人たるを得しといふを得ず、徂徠自らも「古之學而爲聖人者、唯湯武孔子耳」といひて、少くも湯武孔子の三人を以て學んで聖人たるを得しものとせり、世の斗筲の輩が凡夫庸人の身を以て敢て聖人たらんことを企圖するが如き眞に滑稽に過ぎずと雖も、亦何人が果して天才を有するかは、豫め察知することを能はず、必ず多少の研磨を經て始めて天才の有無いかんを揣摩し得べきのみ、天才有無の問題を解決するは、畢竟當該者の行動いかんに出ることと多しとなす、徂徠の論、一理なきにあらざるも、未だ盡くさゞる所あるを知るべきなり、之れを要するに、徂徠が男性的道德を主張して、積極的發展の要を鼓吹せしは、後人の感謝せざるを得ざる所なれども、個人私德の修養を重んぜずして、多數の子弟をして放縱暴慢に口實を得せしめしが如き、彼れ到底其名教上の責を負はざるを得ざるなり、此の如くなれば、寧ろ聖人を理想とし、個人私德の修養を重んずるの穩健なるに若かざるなり、

第九　徂徠門人

〔徂徠の子孫を除く〕

太宰春臺、名は純、字は德夫、後に出だす、

服南郭、名は元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と號し、又芙蕖館と號す、姓は服部氏、自ら修して服氏となす、平安の人、南郭人となり、風流溫藉、藝苑の士、欽慕せざるものなし、寶曆九年江戶に沒す、年七十七、著はす所、南郭文集、大東世語、燈下書、遺契、文筌小言等あり、南郭の事蹟は先哲叢談卷之六、近世叢語卷之三、野史卷二百六十及び先哲像傳卷四等に見ゆ、南郭の義子、元雄、字は仲英、小字は多門、攝津の人、著はす所、蹈海集八卷あり、其事蹟は先哲叢談卷之六に見ゆ、南郭の門人としては、鵜殿本莊、石島筑波、莊田豐城、安達淸河、山本友石、宮瀨龍門、新井滄洲、原田東岳、齋宮靜齋、湯淺常山、熊本華山、源乘富、望月三英、村松貞吉等あり、又龍門の門人としては、淸水江東、宇野東山等あり、

安藤東野、名は煥圖、字は東壁、小字は仁右衛門、東野と號す、姓は安藤氏、修して藤氏となす、下野の人、東野、周南と諸子に先ちて疾く徂徠に歸す、就中東野最も肯綮を得たり、徂徠の終に海內に木鐸たる、東野實に之れを翼賛すといふ、惜らくは彼れ略血の疾を致し、享保四年を以て沒す、年僅に三十七、著はす所、東野遺稿三卷あり、南郭、東野の碑文を撰ぶ、又東野の事蹟は先哲叢談卷之七、近世叢語卷の三、野史卷二百六十、及び先哲像傳卷四等に見ゆ、

山縣周南、名は孝孺、字は次公、小字は少助、周南と號す、姓は山縣氏、修して縣氏となす、周防の人、幼にして穎敏、常兒に異なり、殊に父良齋、周南を家庭に敎ふること頗る嚴なり、每日周南をして樓上に登りて書を讀ましめ、梯子を去りて下ることを許さず、是を以て群籍を博涉するを得たり、長じて徂徠に師事す、是時徂徠業未だ大に振はず、而して周南東野早く其門に及び、迭に翼をなす、是を以て徂徠、大家を成すに及び、二子を待つもの、餘人に異なるものありといふ、延享二年、病を得、歲を

經て已まず、凡そ褥にあること八年、寳曆二年を以て終る、年六十六、著はす所、周南文集十卷、爲學初問五卷等あり、爲學初問一に蘐園談餘と題し、徂徠の著作とするは誤なり、南郭、周南の碑文を撰び、男泰恒、周南の行狀を撰ぶ、其他周南の事蹟は先哲叢談卷之七、近世叢語卷之一、野史卷二百六十及び先哲像傳卷四等に見ゆ、周南の門人に瀧鶴臺、増野雲門、林東溟、和智東郊、津田東陽、田坂灞山、山根華陽、三浦衞興、小田村鹿門、小倉鹿門、仲子岐陽、窪井鶴汀、田中相江等あり、就中東郊、鶴臺及び東溟の三子を周南門の三傑と稱す、

平野金華、名は玄仲、字は子和、俗稱は源右衞門、金華と號す、姓は平野氏、修して平氏となす、陸奥の人、人となり滑稽疎狂、酒を飲んで忼慨す、又猫を愛すること甚しく其飼養する所、十八頭に至るといふ、閑散餘錄卷之下に云く、

平子和初め醫を以て三浦侯に仕ふ、醫を業とすることを屑とせず、強ひて仕を致し、後、儒を以て守山侯に仕ふ、時に月俸甚だ微なり、あ

る時五月五日の前に官長の曰く、五日には新しき葛衣を著て朝せられよと、その日に至りて婦人の服を著けて出づ、官長これを咎む、子和曰く、臣が如き微祿のものは新衣を貯ふることを得ず、然りと雖も官長の令に違ひ難し、細君が藏むる所やゝ新し、故を以てこれを著たりと、侯聞いて即日に月俸を增加せられしとなん、

其所行率ぬ此の如し、享保十七年を以て江戸に沒す、年四十五、著はす所、金華文集ありといふ、南郭、金華の碑文を撰ぶ、又金華の事蹟は、先哲叢談卷之七、近世叢語卷之三、野史卷二百六十、及び先哲像傳卷四等に見ゆ、金華の門に戸崎談園あり、

高蘭亭、名は惟馨、字は子式、蘭亭と號し、又東里と號す、本姓は高野氏、裁して高氏となす、江戸の人、幼にして徂徠に從つて學び、年十七にして瞽となる、是れより專ら心を詩に潛め、遂に詩を以て家を成す、徂徠の門、詩を以て名あるもの十數人、南郭を推して盟主となす、而して蘭亭最も晩出にして、常に南郭に兄事す、幾もなく詩名之れと並び馳す、當時

詩を言ふもの二家の門牆に倚らざるはなし、蘭亭、性、善く酒を飲み、豪宕奇を好み、常に髑髏杯を擧げて飲をなす、バイロンが髑髏杯を擧げたると一對の奇話たり、寶暦七年江戸に沒す、年五十一、蘭亭六たび娶りて遂に子なし、著はす所、蘭亭遺稿十卷あり、蘭亭幼より作る所の詩、萬有餘篇、病革なるに及んで、悉く之れを火に投ず、是に於て松崎君脩、稻垣穉明、谷文卿等相謀りて各嘗て私に錄する所のものを輯めて之れを世に刊行す、是れを蘭亭遺稿となす、蘭亭が事蹟は先哲叢談卷之八、近世叢語卷之三等に見ゆ、蘭亭の門人に横谷藍水、唐橋君山あり、

宇

灊水、名は惠、字は子迪、小字は惠助、灊水と號す、本姓は宇佐美、修して宇となす、南總の人、年十七にして江戸に來たり、徂徠に師事す、然れども其塾にあること僅に三年にして徂徠沒す、故に未だ全く徂徠の旨を得るに至らず、因りて尙ほ研鑽己まず、之れを久うして學大に進む、灊水篤く徂徠を信じ、力を盡して其遺著を校刻す、例へば四家雋右文矩、文變考、絶句解、絶句解拾遺、南留別志の如き、皆灊水が校刻する所に係

る、其自ら著はす所の辨道考、辨名考、絶句解考證、絶句解拾遺考證の類亦皆徂徠の意を領會するを以て主となす、其徠門に功あること、高足の弟子と雖も及ばざる所なり、濤水、安永五年を以て卒す、年六十四、服元立、濤水が碑文を撰ぶ、又濤水が事蹟は先哲叢談卷之八、續近世叢語卷之五、先哲像傳卷四等に見ゆ、

本多猗蘭子、名は忠統、字は大乾、猗蘭子と號し、又晩年拙翁と號す、伊豫守と稱し、神戸の藩主たり、徂徠集中西臺滕侯と稱するもの是れなり、寶曆中に卒す、年六十七、著はす所、猗蘭臺集廿九卷及び其他古言錄、猗蘭子等數種あり、

餘熊耳、名は承裕、字は子綽、大内氏、小字は忠大夫、熊耳と號す、陸奥の人、彼れ自ら言ふ、其先百濟の明帝の太子餘琳より出づ、故に餘を以て本姓となすと、唐津侯に仕ふ、時人當今の于鱗と稱す、春臺南郭歿して後、經義は子迪、松崎君脩と呼び、修辭は斯人のみを稱す、安永五年四月に歿す、年八十、著はす所、熊耳文集十六卷、仝後篇十二卷、熊耳遺稿十二卷

等あり、其事蹟は先哲叢談巻之七及び續近世叢語巻之五に見ゆ、熊耳の義子蘭室又職を襲いて唐津の儒官たり、熊耳の門人に岳東海、長坂圓陵、市川鶴鳴、中根君美、滕南豐、田中江南、石金瀬濱、岡道溪、等あり、蘭室の門人に又大竹麻谷あり、

三浦竹溪、名は義質、字は子彬、初の名は良能、通稱は平大夫、竹溪と號す、江戸の人、初め甲斐侯に仕へ、後、吉田侯に仕ふ、竹溪尤も志を經濟に留め律學に精し、寶暦六年五月に沒す、年六十八、著はす所、竹溪文集三巻及び其他數種あり、其事蹟は先哲叢談後編巻之五及び近世叢語巻之三に見ゆ

鷹見爽鳩、名は正長、字は子方、通稱は三郎兵衛、爽鳩子と號す、三河の人、田原侯に仕ふ、爽鳩詩才逸宕にして、群衆に抜く、而して平生尤も故舊に厚し、又志を經濟の學に留む、貴紳嘗て徂徠に問ふて曰く、「弟子の經濟に長ずるものを誰れとかなす」と、徂徠乃ち答ふるに爽鳩と竹溪とを以てし、稱して能く時務に通曉するものとなす、爽鳩享保二十年四月

を以て歿す、年四十六、著はす所、或問珍三卷、詩筌二卷、爽鳩遺稿一卷あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、爽鳩の孫を星阜といふ、著はす所、數種の書あり、

越智雲夢、名は正珪、字は君瑞、雲夢と號し、又神門叟と號す、曲直瀨氏養安院と稱す、江戸の人、幕府に仕ふ、雲夢の先は伊豫越智の裔なり、故に越智氏を冒し、又自ら修して越となす、雲夢、祖先の業を紹ぎ、醫を以て官に食むと雖も、平生甚だ方技の說を好ばず、反りて詞藻を以て專務となせり、彼れ人となり、質實謹厚、家人に對すと雖も、未だ嘗て聲色を厲うせず、其從僕奴婢、常に謂ふ、吾主人に於て見ざるもの三あり、曰く、慍顏を見ず、曰く、詰語を見ず、曰く、鄙吝を見ず、雲夢、延享三年三月を以て歿す、年六十一、著はす所、懷仙樓文集、神門餘筆等あり、服部南郭其墓碑を作る、南郭集四編卷之八に見ゆ、又其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

秋元淡園、名は以正、字は子帥、小字は喜内、嵎夷と號し、又淡園と號す、岡崎

侯の文學たり、著はす所、淡園初稿あり。

吉田孤山、名は有隣、字は臣哉、(一に巨哉に作る)俗稱は孫兵衛、孤山と號す、森川侯の上大夫たり、蚤に徂徠に從學し、譯文筌蹄を校して之れを上木せり、

山井崑崙、名は鼎、字は君彝、崑崙と號す、通稱は善六、紀州侯の書室となる、享保十三年四月を以て歿す、著はす所、七經孟子考文三十二卷あり、此書支那に於て非常に珍重せられ、遂に阮元の飜刻を經て、我邦にも舶來するに至れり、

釋萬菴、名は原資、芙蓉と號す、幼にして詩に巧なるを以て時人之れを文珠小僧と呼ぶ、後、徂徠及び南郭に學んで詩風を變ず、江戸の芝東禪寺(臨濟宗)に住し、元文四年を以て歿す、年壽未だ詳ならず、著はす所、江陵集、古今諸家人物志等あり、萬菴が門人に僧獨麟、龜井南冥等あり、

根本武夷、名は遜志、字は伯修、俗稱は八郎右衛門、武夷と號す、根本氏、自ら修して根となす、相模の人、山井崑崙と共に七經孟子考文を著はし、且つ論語皇侃義疏を校正上木す、先哲叢談續編卷之九に云く、

武夷嘗て山井崑崙と同じく下野の足利學に遊ぶ、七經を校勘して進る、七經とは詩書易春秋禮記論語孝經を言ふなり、蓋し我土傳ふる所の舊本を以て同異を標擧し、明版注疏の誤脫を刊正するものなり、其書、御覽を經、銀錠十枚を賞賜す、而して後、又經筵を講官物北溪に命じて、其遺漏を補葺せしむ、徒すに孟子を以てす、總べて二百六卷、三十六本、題して七經孟子考文補遺といふ、蓋し徂徠の建言する所による、官之れを刻して天下に布く、享保十七年壬午の正月、長崎の尹をして之れを彼土に傳致せしむ、彼の淸の仁宗嘉慶二年之れを飜刻し、稱して以て盛擧となす、其原皆崑崙武夷の手鈔する所に出づ、眞に不朽の業といふべし、

明和元年十一月に卒す、年六十六、其事蹟は先哲叢談續編卷之九に見ゆ、

板倉璜溪、名は安世、字は美仲、璜溪と號し、又帆丘と號す、通稱は安右衛門、江戸の人、弟經世と共に徂徠に師事す、著はす所、帆丘集八卷あり、文會

雑記巻之三下に云く、
美仲文集は帆丘遺稿とて十巻ばかりもあり、美仲増上寺門前廣小路に家をかり、舌講してありけるとなり、大言のみ云ひけれども、南郭をば赤羽先生と云ひけるとなり、美仲歿後文集梓行覺束なしと仲龍云へり、

其事蹟は近世叢語巻之五に見ゆ、

石川大凡、名は之清、字は叔潭、黙齋と號し、大凡山人と號す、通稱は重次郎、江戸の人、幕府に仕ふ、著はす所、大凡山人集八巻あり、

田中蘭陵、名は良暢、字は士舒、蘭陵と號す、小字は武助、江戸の人、富春叟（即ち田省吾）の甥なり、田中氏、自ら修して田となす、蘭陵は板倉帆丘、山田麟嶼、岡井嵰州と共に蘐社妙年の四傑と稱せらる、而して蘭陵尤も其魁たり、享保十九年に卒す、年三十六、著はす所、蘭陵集あり、服部南郭其碣を作る、南郭集二編巻之八に見ゆ、

岡井嵰州、名は孝先、字は仲錫、嵰州と號す、通稱は郡大夫、讃岐侯の記室た

り、

山田麟嶼、名は正朝、後に弘嗣と改む、字は大佐、麟嶼と號す、初め徂徠に學び、後、東涯に學ぶ、事は東涯門人の處に詳なり、

柴山鳳來、名は博我、字は子文、鳳來と號す、本姓は木戸氏、武藏の人、松平伊豆侯の世臣、晩年職を辭して遺叟と號す、明和八年に歿す、年八十、其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ、鳳來が子豫章、亦徂徠の學を奉ず、明和四年、父に隨つて京師に游び、病に罹りて歿す、年三十八、鳳來の門人に室重明あり、

匹田九皐、名は進脩、字は子業、九皐と號す、羽州の人、莊内侯に仕ふ、元文三年五月を以て病歿す、年三十九、春臺其碑陰を作る、

晁玄洲、名は文淵、字は涵德、玄洲と號し、又玉壺山人と號す、通稱は甚右衛門、本姓は朝比奈氏、自ら修して晁氏となす、尾藩の世臣たり、

晁南山、名は泰亮、字は君采、南山と號す、通稱は頼母、本姓は朝比氏、自ら修して晁氏となす、河内狭山侯の大夫、致仕の後、用拙齋と稱す、南山集を

著はせり、

久津見華岳、名は義治、字は京國、小字は吉左衛門、華岳と號す、姓は源氏、三河の人、苅谷侯の世臣たり、其事蹟は近世叢語巻之六に見ゆ、

木下蘭皐、名は實聞、字は公達、一の字は希聲、蘭皐と號し、又玉壺眞人と號す、通稱は宇左衛門、姓は木下氏、自ら修して木となす、尾張の人、尾藩の世臣たり、嘗て曰く、謂ふに天下の事は、曲藝小技の最も下なるものと雖も、必ず學んで後之れに通ず、而るを況や已れを修め人を治むるの道に於てをや、今の士大夫、苟も其道を學ばず、徒に已れが智力を以て、衆庶を制御し、自ら之れを臆に斷ずるは、譬へば猶ほ有力の嘗て射御の術を學ばずして、彊強を好み、悍馬に騎るがごとし、以て射れば激發し、以て御すれば風逸す、其能く命じて正鵠に中たり、銜轡を按せんと欲するも、豈に之れを得べけんや、今の君長たるもの、此れに類するもの多し、世射御の以て學ばざるべからざるを知りて、已れを修め人を治むることの以て學ばざるべからざるを知らず、亦惑へるの甚しき

ものなり」と、寶暦二年八月を以て病歿す、年七十二、著はす所、玉壺吟草四卷、附錄一卷、客館璀粲集二卷、蘭皐遺文六卷等あり、其事蹟は、先哲叢談續編卷之七に見ゆ、

辻湖南、名は徽樹、字は稷卿、湖南と號す、江州辻村の人、故に辻を以て姓となす、本姓は源氏、丹波笹山侯に仕ふ、

伊藤南昌、名は元啓、字は進迪、南昌と號す、通稱は一甫、

木村蓬萊、名は貞貫、字は君恕、初め嶺南と號し、後、蓬萊と號す、通稱は勝吉、姓は木村氏、自ら修して木となす、尾張の人、勝山侯に仕ふ、蓬萊資性直諒にして、獨在の時と雖も、皎然として自ら欺かず、其經義を講ずるや、譬を取りて説明し、言語明爽、中江藤樹の人となりに似たり、故に至愚の人と雖も、其旨意を領悟し、師德を仰慕するに至る、蓬萊常に曰く「白鷗水にありて悠然として浮び、清閑自得し、而して其足躁擾、少しも息ふることを得ず、是れを以て其性を失はず、人の世に處するも、亦此の若きのみ」と、又嘗て曰く「己れ不善にして人之れを譽む、以て喜となす

に足らず己れ善にして人之を毀るも以て憂となすに足らず」と、彼れ又慈善に厚し、彼れ少き時家貧うして常に十日の食なし、然れども來たりて門外に立ち食を乞ふものあれば、米櫃を傾倒して之を施與せり、彼れ紀平洲と交はれり、彼れが徂徠に學びたるは幼少の時の事なれば、彼れが德行は徂徠に學べるにあらずして寧ろ友人の感化に本づくならん、彼れ明和二年十月を以て江戸に歿す、年五十一、著はす所、玉壺詩選二卷、蓬萊詩稿四卷あり、其事蹟は先哲叢談後編卷之五及び續近世叢語卷之一に見ゆ。

土屋藍洲、名は昌英、字は伯曄、藍洲と號す、豐前中津の人、詞章を以て稱せらる、延岡侯に游事し、尋いで祿を辭し去り、後又醫術を以て、小倉侯に仕ふ、其事蹟は近世叢語卷之五に見ゆ、

守屋峩眉、名は煥明、字は秀緯、峩眉山人と號す、江戸の人、大垣侯に仕ふ、初め東野に學ぶ、東野歿して後、徂徠に學ぶ、寶曆四年に歿す、年六十二、服部南郭其墓碑を作る、南郭集四編卷之八に見ゆ、又其事蹟は近世叢語

卷之四に見ゆ、

菅谷甘谷、名は晟耀、字は子旭、通稱は小膳、甘谷と號し、又南嶠と號す、初め堀氏、徂徠集に屈子旭又は南嶠秀才といへるもの是れなり、江戸の人、大坂に仕し、專ら師說を唱ふ、大坂の地、物氏の學を唱ふるもの、斯人より起るといふ、寶暦十四年に歿す、年六十餘、著はす所、南嶠園集、甘谷遺稿あり、甘谷の門人に橋本樂郊あり、

入江南溟、名は志爾、字は子園、通稱は幸八、南溟と號し、又滄浪居と稱す、武州の人、終身仕へず、南溟の門人に熊坂台州あり、

芳村夭仙子、名は恂益、字は慄夫、一の字は謙受、夭仙子と號し、又五雨亭と號す、少うして軼才あり、學問淵博、京の北山に退居し、終身著述を以て業となす、徂徠稱して「好學君子之醫也」といへり、著はす所、內經綱紀、醫學正名等數種の書あり、

大野北海、名は通明、字は子喆、北海と號す、通稱は忠右衛門、奥州の人、兵學を以て家を爲す、蓋し鈐錄の世に行はるゝ、斯人徂徠の兵學を奉ずる

に由るといふ、著はす所、北海文集あり、

小田村鄜山、名は公望、字は望之、一の字は士彥、小字は伊介周防鄜郡の人、幼にして明秀、善く詩を作る、世、稱して神童となす、十二歲にして周南の門に遊び、十七歲にして江戶に之き、徂徠に從つて學ぶ、徂徠其文を賞して雕虎の才ありといふ、明和三年を以て歿す、年六十四、其事蹟は續近世叢語卷之六に見ゆ、

板倉蘭溪、名は淳行、字は敬德、蘭溪と號す、通稱は助三郞、帆丘が兄なり、

板倉龍洲、名は經世、字は美叔、龍洲と號す、通稱は經之丞、帆丘が弟なり、

谷元淡、字は大雅、郡山侯の儒臣たり、

田中冠帶、名は喜古、冠帶老人と號す、通稱は邱愚右衞門、後に兵庫と改む、武藏の人、幕府に仕ふ、冠帶蚤に神童の名あり、彼れ弱冠の時より常に志を富國强兵の術に留め、嘗て謂ふ「財は聚むるに難からざるなり、取予能く當たれば、國富む、方は施すに難からざるなり、賞罰能く正しければ兵强し」と、享保十四年に歿す、時に年六十八、著はす所、民間省要廿

卷、治水要方二卷、冠帶筆記四卷あり、其事蹟は先哲叢談續編に見ゆ、

宇野士朗、名は鑒、字は士茹、後の字は士朗、小字は兵介、宇野氏、自ら修して宇氏となす、士新が弟、平安の人、年僅に三十一にして士新に先ちて卒す、遺稿五卷ありといふと雖も、世に傳はらず、其事蹟は先哲叢談卷之四に見ゆ、

住江滄浪、名は昭猷、字は君徽、通稱は萬之允、滄浪と號す、享保十三年を以て歿す、年三十八、其事蹟は肥後先哲事蹟卷一に見ゆ、

中根東里、名は若思、字は敬夫、東里と號す、通稱は貞右衛門、伊豆の人、嘗て徂徠に學ぶ、然れども後、陽明學に歸す、事は「日本陽明學派之哲學」に詳なり、又其事蹟は先哲叢談後編卷之五に見ゆ、

篠崎東海、名は維章、字は子文、東海と號す、篠崎氏、通稱は金五、江戸の人、徂徠、東海の人となりを愛し、屢〻其學術を稱す、故に春臺南郭等之れに眷顧せざるはなし、後、麟嶼と共に東涯に學ぶ、東海元文四年七月を以て歿す、年五十四、著はす所、三十餘種あり、其事蹟は先哲叢談續編卷之六

に見ゆ、

以上列擧せる門人の外、松崎白圭、釋大潮、成島錦江、越智平菴等、皆護園の徒にして、殆んど門人の列にあり、委しく徂徠學派の處に見ゆ、



第十　徂徠關係書類

物徂徠自記年譜
徂徠事蹟
徂徠先生墓碣及誌
南郭文集
春臺文集
紫芝園漫筆
先哲叢談（卷之六）
先哲年表
近世叢語（卷之二）
茅窓漫錄
間合早學問
正學指掌附錄

武門諸説拾遺（卷之十九）

拙堂文話（卷一）

日本詩史（卷之四）

二老畧傳　細井九皐著

儒學傳

文會雜記

閑散餘錄（卷之下）

先哲像傳（卷三）

素餐錄

斯文源流

學問源流

儒學源流

北窓瑣談

埋木花

八水隨筆

一言一話

江戸名所圖會

假名世說　大田南畝著

筆疇　原東岳著

讀書會意（卷中）　滋井太室著

野史（卷二百六十）

日本諸家人物志

古今諸家人物志

近世大儒列傳（上卷）　内藤燦聚著

藝苑叢話（上卷）　山縣篤藏著

日本名家人名詳傳（上之卷）

荻生徂徠一卷　山路彌吉著

日本儒林譚（下卷）

鑒定便覽
名家全書
近世名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
大日本人名辭書
大日本史料原稿一卷
日本德育史傳
讀史論集山路彌吉著
日本倫理史稿
日本哲學要論有馬祐政著
伊物二氏の學案島田重禮○哲學雜誌第八十八號及び第九十三號
ホッブスと徂徠加藤弘之○東洋哲學第二編第一號
仁齋徂徠學術の同異內藤耻叟○東洋哲學第三編第二號
徂徠學の話島田重禮○學士會院雜誌第十七編之十

孔子の道と徂徠　加藤弘之○學士會院雜誌第十六編之七

教育家としての荻生徂徠　杉山富槌○教育學術界第一卷第二號乃至第十號

○以下徂徠學を駁撃せるもの

論語考六卷　宇明霞著

辨道解蔽二卷　石川麟洲著

古學辨疑二卷　富永滄浪著

非物篇六卷　五井蘭洲著

非徵八卷　中井竹山著

閑距餘筆一卷　寫本○仝上

非徂徠學一卷　蟹養齋著

辨復古一卷　同上

非辨道辨名一卷　森大年著

非物氏一卷　平瑜著

燃犀錄一卷　服蘇門著

讀書正誤一卷石川香山著
桂館漫筆一卷原雙桂著
讀辨道一卷龜井昭陽著
正學指掌一卷尾藤二洲著
講學編二卷唐崎廣陵著
物學辨證二卷仝上



第十一　徂徠學派即ち蘐園學派

徂徠の徒は徳川時代に於て蔚然たる一大學派を成せり、是れを徂徠學派といふ、又是れを蘐園學派ともいひ、又古文辭學派ともいふ、此學派の影響の偉大なる、恐くば堀河學派の及ぶ所にあらざらん、假令ひ徂徠が學に短處の指摘すべきもの、少からずとするも、亦其人格の尋凡ならざりしこと、此れによりて以て推測するを得べきなり、徂徠唯一女あり、因りて兄伯達の子道濟を養ふて嗣となし、女を以て之れに妻はす、道濟、字は太寧、小字は伊三郎、後、惣右衛と改む、金谷と號す、柳澤侯に仕ふ、平生退讓以て己れを律し、人と競ふことを好ます、門に至るものあれば、經義は春臺に問ひ、文章は南郭に問ふべしといひ、敢て自ら名父の子といふを以て居らず、故に其造詣を知るもの稀なり、安永五年九月を以て歿す、年七十四、其著述として近代名家著述目録に三十三種を擧げ、續諸家人物志に三十五種を擧ぐ、此れに由りて之れを觀れば、亦以て名父の子たる

に愧ぢずといふべきなり、金谷が子を鳳鳴といふ、名は天祐、字は順卿、鳳鳴は其號なり、惣右衛と稱す、柳澤侯の記室たり、文化四年十二月を以て歿す、年五十三、著はす所、鳳鳴遺稿あり、徂徠が弟を北溪といふ、名は觀、字は叔達、小字は惣七郎、殿中侍講となる、寶暦四年を以て歿す、年八十五、著はす所、七經孟子考文補遺の外十有餘種あり、（慶長以來諸家著述目錄を見よ）北溪の子を青山といふ、名は義俊、字は彥卿、通稱は是三郎、後、惣七郎と改む、享和元年五月を以て歿す、文會雜記卷之三下に云く、

物叔達の子は才學あり、子貢詩傳の字缺を補ひ、板行すべしと云ふ中に沒すとなり、仲龍語れり、

誠に惜むべしとなす、金谷が子孫も、北溪が子孫も、名聲次第に墜ち、今は闃として聞ゆることなし、或は云ふ、荻生氏の苗裔を荻生傳と稱し、現に四谷大番町に住せりと、然れども復た言ふに足るものあるなし、徂徠が門人、果して其幾千百人なるを知らずと雖も、其著名なるは、四十有餘名に過ぎざるなり、就中春臺、南郭、周南、東野、萬庵、金華、灊水、最も卓絶せり、之

れに徂徠彼れ自身を加へて蘐園の八子といふ、徂徠直接の門人の一、當時蘐園の徒たりしもの、亦少しとせず、今其重もなるものを擧げんに、板倉復軒、名は九、字は惇叔、小字は九郎右衛門、復軒と號す、本姓は板倉氏、自ら修して板となす、江戸の人、幕府に仕ふ、復軒本と業を木門に受くと雖も、屢〻徂徠と交はり、其子をして皆徂徠に學ばしむ、享保十三年を以て歿す、年六十四、其事蹟は先哲叢談後編卷之三に見ゆ、

松崎白圭、名は堯臣、字は子允、白圭は其號なり、通稱は左吉、江戸の人、篠山侯に仕ふ、其執政たるや、白圭職に居り、衆に臨むに、專ら君恩を宣べて、臣節を勵まし、廉隅を砥し、名分を正うし、偏頗を杜ぢて、賄賂を絕つ、是に於てか士風大に振ふ、委しくは東涯門人の處に見ゆ、白圭の子に觀海あり、」

釋大潮、名は元皓、字は月枝、肥前松浦の人、龍津寺（黃檗宗）に住す、徂徠の門に於て詩名、萬庵と相齊し、蘐園能文の士、皆死して後、獨り大潮、南郭と東西に屹立し、聲名殆んど相頡頏す、明和五年を以て歿す、年九十三にして寂す、大潮著はす所、魯寮文集二卷あり、其事蹟は近世叢語卷之四に見ゆ、

大潮が門人に高陽谷、龜井南冥等あり、

成島錦江、名は鳳卿、一の名は信遍、字は歸德、一の字は子陽、姓は成島氏、自ら修して島となす、道筑と稱し、錦江又芙蓉道人と號す、陸奥の人、少うして江戸に來たり、徂徠の說を喜び、又和歌を善くす、寶曆十年九月に歿す、年七十二、其事蹟は先哲叢談卷之七に見ゆ、錦江の門人に奥貫友山あり、

越智平庵、名は正球、一の名は正珍、平庵は其號なり、又同齋と號す、其事蹟は皇國名醫傳卷之上に見ゆ、「聽定便覽卷下」に平庵を以て「徂徠門」とすれども、未だ其果して然りや否やを知らず、然れども其子雲夢をして徂徠に學ばしむるを以て之れを觀れば、其蘐園の徒たりしや疑なし、

水足屏山、名は安直、字は仲敬、肥後の人、

水足博泉、名は安方、字は斯立、平之進と稱す、幼にして敏甚、人皆神童と稱す、屏山が子なり、享保十七年十月を以て歿す、時に年僅に二十六、其事蹟は肥後先哲事蹟卷三に詳かなり、

滕鳳漱、名は俊明、字は彥達、鳳漱は其號なり、又老饕生と號す、通稱は彥八

江戸の人、尾府に仕ふ、鳳洲一たび徂徠を見るに及ばずと雖も、其說に信服し、中年の後修辭を是れ務む、故に蘐園の徒にして之れと交はるもの多く、名聲頗る著はる、明和二年十月を以て歿す、年七十、其事蹟は先哲叢談續編卷之九に見ゆ、

孔生駒、名は文雄、字は世傑、生駒山人と號す、日下氏、通稱は眞藏、河內の人、少壯にして群書を涉獵し、强記人に絕す、初め家庭に學び、專ら性理を修め、後、徂徠の學を私淑し、好んで古文辭を作り、李王の說を唱ふ、寶曆二年を以て歿す、年四十一、其事蹟は先哲叢談續編卷之八に見ゆ、

菅沼東郭、名は行、字は大簡（一說に名は大簡、字は子行、）通稱は文庵、東郭と號す、江戸の人、徂徠の學を私淑して浪華に敎授す、寶曆十三年十二月を以て歿す年七十四、著はす所、大學闡、東郭文集、鳳鳴集、論語徵疏等あり、其子西陵あり、

鈴木澶洲、名は渙、字は子煥、小字は嘉藏、澶洲と號す、姓は鈴木氏、自ら修して木となす、江戸の人、初め篠崎東海に學んで徂徠の說を私淑す、博洽を以て聞ゆ、安永五年六月に歿す、年六十二、著はす所、澶洲山人文集の外

數種あり、

赤松太庾、名は弘、又之れを通稱とす、字は毅甫、太庾山人と號す、其先播洲の人、太庾に至りて江戸に住し、徂徠の學を私淑し、教授して以て業となす、其學、經義を以て專門となす、明和四年四月に歿す、年五十九、著はす所、九經述、家語述、赤草子あり、太庾當時の芙蕖社諸子の歌詩に耽るものを厭ひ、之れと交はることを欲せず、曰く、

名譽は人の賊なり、諠傳は德の賊なり、模擬剽竊、吟哦を精思するものは、抑、亦詩の賊なり、

太庾常に名教を以て己れが任となし、其自ら信ずること甚だ厚し、王侯貴人、禮を厚うして之れを招くと雖も、敢て之れに應せず、乃ち曰く、

我れ豈に四方髦俊の士を得て之れを教育し、各々其德を成し、各々其材を達し、以て各をして其國家の用に供せしむるに若かんや、

人皆其志を高しとす、太庾人となり、敦厚にして鎭重、絶えて浮躁粗豪の氣なし、蓋し春臺以外蘐園一派中稀に見る所の德行家なり、其事蹟は先

哲叢談後編卷之五に見ゆ、

山内琴臺、名は廣邑、字は士英、長門藩貴戚の老、毛利廣規が次子なり、延享三年を以て病歿す、時に年僅に二十三、其事蹟は續近世叢語卷之三に見ゆ、鑒定便覽卷下に「徂徠門」とすれども、徂徠に親炙せしにはあらざるなり、

松村梅岡、名は延年、字は子長、梅岡と號す、通稱は多仲、姓は松村氏、自ら修して松となす、江戸の人、天明中に歿す、年五十四、著はす所、駒谷雛言、樵者述旨等數種あり、其事蹟は續諸家人物志に見ゆ、

龍草廬、名は公美、字は子明、草廬と號す、通稱は彥二郎、伏見の人、彥根侯に仕ふ、文藝を以て家を成す、然れども操持堅からざるを以て其弊少しとせず、彼れが吟社を幽蘭社といふ、人之れを指笑して遊亂社となす、又富永滄浪が古學辨疑を剽竊して、名詮典詮の二書を著はし、磨滅すべからざる醜名を流せり、彼れ寛政四年二月を以て歿す、年七十八、著はす所、草廬文集、同詩集等數種ありと雖も、世之れを稱するものあるなし、

是等は皆徂徠と同時代に生存し、其學を崇拜し、若くは其感化を受けしものなり、近世叢語卷之二に云く、

徂徠歿するに及んで其門分れて二となる、詩文は服部南郭を推し、經術は春臺を推す、

以て徂徠死後に於ける蘐園學派の景況を知るべきなり、徂徠死せりと雖も、其門人及び門人の門人等數多にして餘勢、俄に衰ふることなく一時海内を風靡せんとせり、殊に享保より天明に至るまで凡そ五六十年間最も隆盛の狀を呈せしならんか、文會雜記卷之三上に云く、

徂徠學にて世間一變すと、然れども徂徠一生間は人、半信半疑を今の世文物の開けたるを見せませば、さぞ悅ぶなるらめ、但今の時復古と云ふこと俳諧にまで出で、さて〳〵復古に聞きあきたる人々のはじめきにさはくまて、輕浮の中のことなり、

是れ天明元年を以て歿せる湯淺常山が叙述する所なり、又學問源流に徂徠學の景況を論じて云く、

徂徠學、享保の初年には江戸に專ら行はれ、其餘は江戸にて其學を習ひ、其國に歸りて其說を唱ふる人稀にあり、其中にも關東は多しと謂ふべし、京都には東涯の學盛にして、徂徠の學は新奇の說なりと云ふ人はあれども、學ぶ人は甚だ少なし、其後漸々に徂徠の說に從ふ人多くなり、遂に關西九州四國の邊まで盛にして、東涯の學をする人、次第に衰ふ、況や闇齋の流をする人は絕えて稀なり、唯、少年の時より習熟せる一二の古老、宿轍を改めざるのみにして習ふ人とてはなし、元和寛永の比の風は、言ひ出だす人もなく、云云、徂徠の說、享保の中年以後は信に一世を風靡すと云ふべし、然れども京都にて至りて盛んにありしは、徂徠歿して後、元文の初年より延享寛延の比まで十二三年の間を甚しとす、世の人其說を喜んで習ふこと信に狂するが如しと謂ふべし、

又云く、

寶曆初年の比より稍々に徂徠の學を疑ふ人多く、專ら學ぶ人少なく、

云云、

と、兎に角天明に至るまでは徂徠の學なか〳〵に勢力ありしなり、然れども天明中に至りては、蘐園の弟子、大抵皆凋落し盡きて、其遺教を維持するもの、僅に市川鶴鳴、岳東海及び東藍田あるのみ、是に於てか其勢力漸く將に地に墜ちんとす、而して其反動は已に天明に先ちて起れり、例へば片山兼山、井上金峨の徒は已に天明以前に折衷學を唱道して、大に蘐園の學を排斥せり、是に於てか其聲に應じて起れるもの、殆んど指を屈するに遑あらざらんとす、天明以後に至りては、山本北山、龜田鵬齋、太田錦城等大に李王の古文辭を掊擊し、中井竹山亦非物非徵を刊行して極力之れを觝排することを務めたり、蓋し世人の漸く古文辭を倦厭するの時に際し、徂徠に快からざるもの、一時反抗の氣燄を揚げ、遂に時勢の一轉機を促すに至れり、朱明の世に於て歸震川、袁仲郞、艾千子の輩が李王に反抗して起りしが爲め、李王の弊、全く一洗せられたるが如く、山本北山、龜田鵬齋、太田錦城等起りて、古文辭の弊を痛論せしが爲め、蘐園

の餘弊頽に懲み、學界大に面目を一新するを得たり、山本北山が袁仲郎を崇拜せしが如きは、固より反對の極端に走りしものなるが故に、是れ亦幾もなく古文辭と共に廢れ、韓柳歐蘇の文章、廣く世に行はるゝに至り、學に寛政異學の禁以來獨り朱子學のみ、教育主義として勢力を有し、復た各學派の自由競爭を見る能はざるに至れり、然れども天明以後と雖も、間、徂徠を仰慕して起れるものあるを見る、例へば、齋藤芝山、龜井南冥、岡野石城、野田石陽、龜井昭陽、及び、藤澤東畡の徒の如き、是れなり、

齋藤芝山、名は高壽、字は權佐、世、熊本侯に仕ふ、年二十四にして始めて學に志し、徂徠が答問書を讀んで、聖人の教の治國の道たることを知る、乃ち憤然として其道を學ばんと欲す、然れども僻邑に居りて師友の資なし、是を以て獨り樓上に坐して生米を食ひ、晝夜意を經書に刻し、其義を研味して敢て樓を下らず、年三十九、贄を委して業を問ふものあるに及んで、徂徠が復古學を主張せり、文化五年を以て歿す、年六十六、其事蹟は近世叢語卷之二に見ゆ、

龜井南冥、名は魯、字は道載、筑前姪濱の人、幼にして釋大潮に學び、後、浪華に游んで醫を永富獨嘯庵に學び、遂に長州に遊んで山縣周南に謁し、專ら徂徠の學を信じ、之れを筑前に唱ふ、天明以來、徂徠の學、大に衰ふと雖も、尚ほ關西に其聲價を墜さゞるもの、主として南冥の力によるといふ、文化十一年を以て歿す、年七十二、著はす所、論語々由の外、十有餘種あり、其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ、

岡野石城、名は元韶、字は叔儀、石城と號す、通稱は內藏太、松代の藩士、人となり、溫藉沈毅、洽聞多識、初め菊池南陽に從ひ、濂洛の敎を奉ず、後、蘐園の說を得て感悟する所あり、悉く舊學を棄てゝ之れを學ぶ、文政十三年を以て歿す、年八十六、著はす所、凡そ十餘部、五十餘卷あり、其事蹟は日本敎育史資料卷五に見ゆ、

野田石陽、名は孝彝、字は叔友、小字は吉右衛門、石陽と號し、又靈星閣と號す、松山藩の人、學を好み、蘐園の敎を奉ず、文政年間に歿す、年六十、其事蹟は、日本敎育史資料卷五に見ゆ、

龜井昭陽、名は昱、字は元鳳、通稱は昱太郎、昭陽と號し、又空石と號す、南冥の子なり、天保七年を以て歿す、年六十四、著はす所、蒙史、周易考、尙書考等三十有餘種あり、其事蹟は續近世叢語卷之一に見ゆ、

藤澤東畡、名は甫、字は元發、東畡と號し、塾を泊園社といふ、浪華の人、元治元年を以て歿す、年七十二、著はす所、東畡文集十卷あり、土屋鳳洲之れが序を作りて曰く、

先生幼にして學を好む、母氏敎育、法あり、學既に成り、帷を浪華に下し、大に物子の學を倡ふ、蓋し物子歿して百年、其學漸く晦く、先生興るに及んで、復た世に明かなり、

東畡又嘗て「徂徠物先生贊」を作る、云く、

聖人之道、降爲儒乎、先生出而道始道矣、儒者之敎、變爲禪乎、先生出而敎始敎矣、宇猶宙也、萬里夐兮、先生合而罩之、宙猶宇也、千歲邈兮、先生貫而操之、嚮焉者、背焉者、皆浴厥膏、譽焉者、毀焉者、孰窺厥奧、（東畡先生文集卷之九）

東陵此の如く徂徠を尊崇すと雖も、其文章の如きは、必ずしも古文辭といふにあらざるなり、子南岳あり、

土井聱牙、名は有恪、字は士恭、聱牙は其號なり、伊賀の人、伊勢津藩に仕ふ、明治十三年を以て歿す、年六十四、著はす所、聱牙遺稿十五卷、聱牙齋存稿三卷等あり、彼れ自ら蘐園派を以て標榜せずと雖も、亦頗る之れに類似するものあり故に此に附記す、楓井純、彼れが行狀を作りて曰く、

大悟宋明學者之弊、以爲背失聖人之旨、從是唾棄不講焉、其終身所崇奉、則韓文公、而喜清儒考據之說、本邦諸儒、獨取物徂徠、然亦不妄從、識解往々超駕之、蓋自是卓然創一家學矣、

此れに由りて以て其學風を知るべきなり、彼れ嘗て「謁韓祠記」を作りて曰く、

夫子の未だ生れざる、夫子より前に夫子なし、夫子方に生れて、夫子を外にして夫子なし、夫子已に逝き、夫子に紹ぐに夫子なし、夫子は聖者か、何ぞ千古の更に夫子なきや、惟是の故に、道、孔孟より高うして人知

らず、文、六經に過ぎて人信ぜず、夫子靈あらば其れ斯言を諾くに庶からん、云云、(蔡牙遺稿卷之八)

韓昌黎を以て孔孟に優れりとすること、亦奇矯の論といふべし、芝山、南冥、石城、石陽、昭陽、東畡等歿してより復た蘐園の學風を紹いて起るものなく、徂徠の系統是に於てか全く終結を告げたりといふを得べきなり、



第二章　太宰春臺

第一　事蹟

徂徠の門下、才學を以て顯はるゝもの、其人に乏しからずと雖も、道德を以て自ら任ずるもの、獨り太宰春臺あるのみ、春臺、名は純、字は德夫、小字は彌右衛門、春臺は其號なり、又紫芝園と號す、信州飯田の人、父言辰兵法を以て飯田侯に仕ふと雖も、亦好んで書を讀む、故に春臺先づ家庭に於て敎育を受くるを得たり、彼れ自ら曰く、

純が先君子嘗て中江氏の學を好み丞純等が爲めに熊澤氏の賢を稱す、純、齠齓より其語を習ひ聞く云云（復備前湯淺之祥書）

此れに由りて之れを觀れば彼れが蚤に江西派の影響を受けたること推して知るべきなり、彼れ又春臺獨語に己れが事蹟を述べて曰く、

我父母ともに和歌を好みし故に、八九年の頃より三十一字をつらぬるすべを知り、十歲より十二三歲迄に腰をれの歌、凡そ三四百首讀み

たり、師もなく、友もなければ、歌よみたればとて人に見する事もなく、書き付けて藏し置きたるのみなり、其時心に歌に讀みうべきものとのみ思へり、十四五歳の時、始めて詩といふものを學びて、稍七言絶句などを綴るすべを知り、其時愚心ひそかに思惟せしは和歌を學びて、たとへ上手に成りたりとも、公家の人々を越ゆる事なるまじければ、いつも公家の下にかゝみなんも口惜し、詩は公家の教を受くまじければ、上手にさへなれば公家をも弟子とすべし、此道に於ては天下に恐るゝ所あるまじ、いざ歌よむ事をやめて、詩を作る事を習はゞやと思ひ定めて、書き付け置きたる和歌の反故を悉く燒き捨て、一首もとゞめず、夫れより詩を好みてひたすら學習し、廿年を經て、漸く詩の道を明らめたり、

長じて中野撝謙に從つて程朱の學を修む、既にして徂徠の一家言を成すを聞き、其學を棄てゝ、蘐園の徒となる、文會雜記卷之一下に云く、

春臺初めて徠翁に對面して詩文を出して見せられたる時、足下は詩

文既に一家をなせり、經學を修したまへと云はれたり、一見して其人の長を知ること徠翁の長なりと君修かたれり、

又先哲像傳卷三に一奇話を傳ふ、云く、

春臺始めて徂徠に對面のとき、其才を窺はん爲め、扇面へ釋迦老子並び立ちて孔子半伏の貌を圖して徂徠に贊を請ひければ、筆を取りて「釋迦釋空、老子談虛、孔子伏笑」と書けり、春臺來翁の才窺ふべからざるを喜び、遂に弟子となりしとぞ、

兎に角春臺一たび徂徠に謁してより其才學に悅服し、乃ち就いて業を受け、古學を主張す、彼れ曰く、

純等少年より宋儒の書を讀んで心中に疑を生じ、其後伊藤氏の說を聞いて、又半信半疑なりしに、徂徠の說を聞いて、頗る信を起せしかども、一旦には疑網解けざりき、總して少き時より、老莊の書、又は釋氏諸家の說までをも講究し、又其後博く諸子百家の書を讀んで、取捨斟酌し、三十年の歲月を歷て、年五十に近くなりて、從來の學問、融會貫通し、

天下の道、胸中に醞釀して、堯舜禹湯文武周公孔子の道吾が眼にこれを視ること、青天に白日を懸けたるが如く、今に至りては、毫末の疑もなし、(聖學問答卷之上)

是れ其古學に歸して、見解の遂に定まれるを謂ふ、然れども彼れ又間〻徂徠に慊焉たらざるものあり、晩年に及んで、稍〻一家の見を立つるものあり、延享四年五月を以て卒す、年六十八、春臺子なし、阿武氏の子定保を養ふて嗣となす、定保字は徽猷、春臺著はす所、聖學問答二卷、辨道書一卷、春臺文集二十卷、紫芝園漫筆八卷、六經略說一卷、斥非二卷、文論一卷等二十有餘種あり、

春臺人となり、峭刻にして邊幅を修め、徂徠の如く襟度宏量なること能はず、乃ち徂徠を評隲すること一再ならざるなり、(徂徠の事蹟及び學風の處を參看せよ)其言往々師の品性を損傷するものあり、彼れが門人としては、稲垣白島、五味釜川、宮田金峰、渡邊蒙庵、栗原栖川、僧無相、大鹽鼇渚、井上東溪、原尙賢、堤有節、松崎觀海、釋曉山等あり、觀海の門人には又太田南畝、菊池衡岳、金谷

玉川あり、玉川の門人に伊東藍田あり、

春臺嘗て「自嘲」の作あり、云く、

傑然清世一遺民、浪跡江湖似隱淪、冉冉頽齡同犬馬、翩翩才調逐風塵、居恒簡傲思狂者、遲暮寒微背故人、扣角康衢夜歌罷、可憐英氣欝經綸、

亦以て其人となりを想見するに足るなり、

春臺は算術に長じ、又音樂に巧なりき、殊に笛を吹くに於ては妙を得、且つ舞樂をも能くせりといふ、文會雜記卷之三下に

春臺は甚だ算數の理を窮められたり、

と云へるに由りて彼れが徂徠の算術に通ぜざるに比して大に異なる所ありしを知るべきなり、近世叢語卷之三に云く、

太宰春臺善く笛を吹く、日光王音律を好み、之れを聞かんと欲し、人をして之れを召さしむ、春臺辭して曰く、臣は道を講ずるものなり、薄技を奏し、宴樂に供することと能はざるなり、若し我れを復びするものあらば、吾れ其れ笛を破り、復た音を操らざらん、

又彼れは琴曲の事に精はしかりしと見え、文會雜記卷之下に左の如く言へり云く、

上野君則語りけるは、春臺琴のことに付き、御尋有之度旨、井上河內守殿御指紙を以て春臺を召さる、春臺曰く、予は樂人に非ずとて出でずして、口を經て河內守殿の邸に至りて、純は樂人にて候はず、それゆゑ樂のことは、得不申上候、文學のことと御尋成され候はゞ可申上候とあり、河內守殿用人も尤なりと云ひしとぞ、

彼れが人となりも、亦此れに由りて想見すべきなり、文會雜記に又云く、

春臺は舞樂をせられたり、辻氏より免許狀をもらはれたり、諸子集の時、舞衣は沼田侯賜はりたるがありしとなり、

彼れが性質の峻嚴なるに拘はらず、此の如く美術上の嗜好ありしは、其稱揚すべき所にして、又徂徠の斷じて及ばざる所なり、又彼れが平素の行狀に就いて一顧を價するものあり、文會雜記卷之一下に云く、

春臺は至りて精力のつよき人ゆゑ明日のことを今日しまひ置かる

るものなりそれゆゑいつも從容として居られたるとなり、

又云く、

春臺は至誠を積みたる人ゆゑ、家人を化したること奇妙なり、皆聖人の如く思へりとなり、

又曰く、

春臺は元來性の急なる人なれども、學問にてねりつめて從容としてをることを習ふて久しきにたふることを得るものなり、それゆゑ會業などの日、外より來たる狀などを書くこと隨分ゆる〳〵書かれたりすべてその如くにて一生の間うろたへたることを見することなしと元鱗など語れり

此れに由りて之れを觀れば、他の蘐園の徒と違ひ、春臺は蚤に修養して自得する所ありしなり、彼れ又醫を業とせしこともあり、文會雜記卷之一下に云く、

春臺は京に浪人して居られたる時、少しの間醫になられたるゆゑ、醫

理をばよく知られたるとなり、
其他彼れは又書を能くせしを思へば、其學問技藝の多方面に渉れること決して尋常ならざるを知るなり、



第二　學説

春臺晚年に至りて稍〻一家の見を立つと雖も、其學説の大躰は徂徠のそれを敷衍せるものに過ぎず、聖學問答、辯道書及び文論の三書は春臺が其學説を叙述せし所にして、此れに由りて彼れが見解いかんを知るべきなり、徂徠が禮樂を重んじて人の心術を問はざるの旨意を春臺一層敷衍して之れを論じ、推して極端まで至れり、彼れ乃ち聖學問答の中に論じて曰く

凡そ聖人の道には、人の心底の善惡を論ずること決して無き事なり、聖人の敎は、外より入る術なり、身を行ふに、先王の禮を守り、事に處するに、先王の義を用ひ、外面に君子の容儀を具へたる者を君子とす、其人の內心は如何にと問はず（聖學問答卷之上）

又德の外面的なるを明言して曰く、

聖人の敎は、衣服を最初とす、內心は如何にもあれ、先づ君子の衣服を

着せて、さて君子の容儀を習はし、次ぎに君子の言語を敎へ、それより漸々に君子の德を成就せしむるなり、德といふは別物にあらず、衣服容儀言語の凝りかたまりたる者なり（同上）

更に又君子の定義を下だして曰く、

內心は如何にもあれ、外面に禮義を守りて犯さぬ者を君子とす（聖學問答卷之下）

是れ眞に人に僞君子たることを敎ふるものなり、心中邪惡の念を包藏し、唯外貌をのみ矯飾して禮に合する者の如きは「ヒポクリット」の標本に過ぎず、豈に此れを以て眞君子となすを得んや、春臺本と道德を以て自ら任ずるの念あるもの、若し藤樹、仁齋若くは益軒の如き眞師に就いて道の眞相を窺ふを得ば、此の如き無趣味破廉恥の言をなさゞりしならん、然れども道德上嚴肅ならざる蘐園の弊風に染まりしが故に、遂に此に至れることと、亦惜しからずや、彼れ又曰く、

天性にてなす事は、何事も表裏なく、內外洞徹して一致せる者なり、天

性とは人々の生れつきたる本性なり何事も教を待たず習に因らず、勉强を用ひず無心無念にて天然自然にてなす事は皆天性のしわざなり是れを名づけて誠といふ中庸の旨なり（聖學問答卷之下）

是れ今日の所謂本能主義と異なる所なし何んとなれば天性を以て本能を意味するものとすればなり天然自然になす所即ち本能の然らしむる所は理性の要求によりて或る程度に制限せらるべきものなり是れ天然自然を桎梏するの意に出づるにあらず反りて其れをして健全なる範圍に歸せしむる所以なり古人の所謂誠とは豈に春臺が言ふ所の如きものならんや殊に中庸には愼獨を說く是れ心中より徹底せる誠意によりて始めて成し得らるべきものにて決して天然自然のなす所に任せて期し得べき所にあらざるなり彼れ又論じて曰く

聖人の道には心中に惡念起りても能く禮法を守りて其惡念をそだてず身に不善を行はざれば君子と申候心中に惡念の起るをば罪とせず候（辯道書）

此に至りて春臺は殆んど邪道に陷れり、單に惡念を有すると、其惡念を遂行するとは、罪の輕重之れありと雖も、惡念を有すること、道德上豈に罪なしといふを得んや、假りに古人が惡念を有することを許したりとするも、今は其非を痛論して、眞君子の意義を定むるの抱負なかるべからず、然るに全く古人を誤解し、僞君子を以て唯一の君子となし、公々然と之れを主張するとは、抑〻又何たる事ぞや、馬太傳第五章第廿八節に、

惟〻我れ爾に語ぐ、凡そ婦を見て、慾を懷ふものは、則ち中心已に之れと淫す、

といへるは、心中の罪を問ふものにて、利刄を以て咽喉上に擬するが如し、凡そ道德上の觀念は此の如く嚴厲急切なる處あるにあらざれば、何等の効力もあるものにあらず、若し心中にて種々なる惡事を想像し、此れを以て其習慣とせば、早晚其行爲とならざることと、豈に難しとせざらんや、徂徠已に窮理を取らず、春臺亦窮理を非とす、其言或は徂徠より甚しきものあるが如し、彼れ乃ち論じて曰く、

窮理は聖人の所爲なり、凡の學者の及ぶ所に非らず、(聖學問答卷之下)

又曰く、

凡の學者に窮理を敎ふるは、大に非なり、(同上)

尙ほ此旨意を一層委しく叙述して曰く、

聖人すら不測とのたまひ置きたる事を、後世の學者として、これを測りて其理を知らんとするは、大に愚なる者なり、縱ひ其理を窮め得て、かくあらで叶はぬ事と言ひ出だせりとも、何を證據として、誰れかこれを信ぜんや、無益無用の事なり(同上)

是れ聖人を置いて他に眞理の標準あるにあらずとするものにて、抑、又己れが知力を侮るの甚しきものなり、春臺己れが安身立命を說いて曰く、

日本の佛者の中に、一向宗の門徒は、彌陀一佛を信ずること專らにして、他の佛神を信ぜず、如何なる事ありても、祈禱などすること無く、病苦ありても、呪術符水を用ひず、愚なる小民、婦女奴婢の類まで、皆然な

り、是れ親鸞氏の教の力なり、今純は一向宗にあらざれども、孔子を信ずることと、彼等が彌陀を信ずる如く、鬼神に遠ざかりて、祈禱祭祀せざること全く一向門徒の如し、室中に先父母の神位を設け、神牌を立て、歲時朔望に奠獻するのみにて、更に神像佛像を安置せず、宅に方寸の護符を貼せず、身に一封の護符を佩びず、厄難に遭ふといへども、神咒を誦し、佛名を念ずること無し、念誦の恃むに足らざることを知れる故なり、凡そ人は、一生に一たび死せざること無し、何事にて死するも、死するは、死するなり、生ある者の常にて、定まれる事なり、其中に、人は首領を保ちて地に歿するを上とす、古の君子の願ふ所なり、然れども義に當れる事には、首領を保つことを得ずして死するも命なり、命盡きざるほどは、必死の地に居ても死せず、命盡くれば、耆婆扁鵲が禁方にても、生身の不動觀音の加持にても活かすこと能はず、若し祈禱加持にて厄難を除き、死を免るゝ者ならば、天命は尊ぶに足らざるなり、死生の變のみにあらず、一切の禍福吉凶、榮辱升沈、貴賤貧富皆然なり、

かくの如く達觀通知して、毫髮も疑惑すること無きを、知命の君子といふ、純は知命の君子に非らず、至愚陋劣なること、只一向門徒の如し、是れ純が安身立命の一つなり、次ぎに色欲は、人情の重き者なり、財利は、人の離れがたき者なり、飲食は、人の生命を養ふ者にて、一日も無くて叶はぬものなる故に、男女と並べて、人の大欲なりと、禮運には云へれども、飢渇の時に、何にても飲食して、飢渇止みぬれば其上には太牢の滋味、醍醐の妙味にても、貪る心なし、腹に限量ある故なり、財利の欲は限なき者にて、富める上にも富を願ふは、人の常の情なり、俗諺に、長者富に饜かずといふは、虚語に非ず、されば色欲と財利とは防がなくて叶はざるものなり、聖人これを知ろしめして、禮義の教を立て、民の淫佚を防ぎたまふ、禮義を以て民を制するは、堤坊の水を防ぐが如くなる故に、禮義を坊に譬へたり、男女の欲は、人の大欲にて、是れを縱にすれば、禽獸と異なること無き故に、婚姻の禮を制し、男女の別を嚴にして、人の淫亂を防ぎたまふ、自己の妻妾に非ずして、他に淫するを非

禮とす、釋氏は一向に夫婦を絕し、男女の欲を禁じて、身に其事を行せざるのみならず、心中に其念を起すをも罪とす、聖人の道には、他の婦女を見て、心に美女なりと思ひ、其色を悅んでも、身に非禮を行はざれば、禮を守る君子とす、以禮制心とは是れをいふなり、（聖學問答卷之下）

是れ固より春臺一輩の解釋なり、以禮制心といふことはありても、心中何等の惡事を念ふても君子たるに妨なしといふことは、孔子の曾て敎へざる所なり、春臺が所謂聖人の道は、不潔を蔽ふて知らざる爲をするけしからぬ道にて、又其所謂君子は僞善者に過ぎざるのみ、彼れ尙ほ論じて曰く、

心を制すといふは、只其心の欲を、思ふまゝに遂げざるをいふ、釋氏の如く、一向に念を起さしめざるには非ず、釋氏の道は、生きたる人を死人にする道なり、至りて難き事なり、先王の道は、釋氏に比すれば、甚だ行ひ易し、財利には義不義あり、義に當れば、千金の賜、萬鍾の祿をも受く、不義に當れば、一束の芻、一臠の肉をも受けず、以義制事とは、是れを

いふなり、義といふは、先王の義なり、吾人の自己の心にて料簡する義には非ず、先王の義は、禮の中に存するなり、釋氏は人に布施の行を勸めて、施す者さへ有れば、多少に拘はらず、義不義を論せず、無緣の財を受く、是れ利欲に便なる道にて、先王の道に比すれば、甚だ行ひ易し、然れども先王の道には、義を守る者を君子とす、此道を知らざる者をば咎めず、一たび此道を聞いてより義を好み不義を惡む心生じて、おのづから釋氏の道の易きを羨まず、又釋氏の義不義を論ぜずして、人の施しを受くるは、易き樣なれども、主ある財を見て、手を出しては盜まざれども、心に其財をほしく思へば、是れを貪欲心と名づけて罪とす、貪を惡み富を欲するは人情なるに、是れを抑へて其念を起さゞるは、甚だ難き事なり、是れ却て吾道に無き事なり、吾道の敎は、以㆑義制㆑事といひて、只先王の義を以て、事の上を制して、放逸にせざるのみにて、心の内を責めざる故に、實は行ひ易きなり、然れば以㆑義制㆑事、以㆑禮制㆑心といふ、仲虺の言を受用すれば、色欲も財利も、此身を沈溺すること能はず、是

れ純が安身立命の二つなり」純が安身立命かくの如し、此外はいふに足らず、富貴は固より願なれども、求めて得べきにあらざれば心を絶して求めず、少き時は、身の不才を知らずして、名を求むる心ありしが、名も成らずして年ふりぬ、近來は虛名の無益なることを悟りて更に求めず、今は却て名の成らざるを幸とす、天性疎拙にして、權貴の人に近づく道を知らず、只今一二の諸侯貴人の召を蒙むるは、皆思ひよらざる値遇にて、我れより、求めたるに非ず、冉々として春秋を送り迎ふる內に、五十の年を過ぎて、老境に入りぬれば、壯年の時の客氣も去り、心中の風波も定まるに近し、此後又如何なる事が有りて、大なる蔽惑の出來らんも知らざれども、今に於ては孔子の道に少しも疑はしき處なく、青天白日の如くなれば、老莊楊墨より以下、諸子百家の道、釋氏の諸敎、神仙の方術、宋儒の性理、王氏の良知、西洋の天主敎、日本の三元神道、此等の種々の雜說、八面より蜂起して、惠施が辯舌、孟賁が勇力、盜跖が暴戾、西極の化人の幻術を以て、萬方曉諭すとも、吾が守る所を變

ぜしと思ふのみなり是れ又純が安身立命なり(同上)

春臺は又凡そ學者の工夫に三字の要訣あるをいひ、乃ち一に信、二に斷、三に勤を以て三字の要訣とせり、又彼れが學說の特色とも見るべきは聖學問答の中に痛く孟子を攻撃して寧ろ告子に左袒せる處にあり、彼れ橫說竪說、孟子の急處を衝く、其得意想ふべきなり、彼れ又孟子論二篇を作りて孟子を評論せり(斥非の附錄及び文集後稿卷の八を見よ)

彼れ又文論七篇を作りて古文辭の弊を通論せり、其第二篇の中に古文辭を目して襲雜衣となし、且つ論じて曰く、

苟も古人の體と法とを得て、以て辭を修せば、今言と雖も、猶ほ古言のごときなり、是れを我れより古を作すといふ、故に善く辭を屬するものは、これを古人に取りて、而してこれを己れが口より出だし、讀む者をして其古辭たることを覺らざらしむ、此れ其文理條貫、倫あり要あるを以ての故なり、

春臺が此見解、反りて徂徠のそれに優れり、又彼れ「徂徠先生遺文」の後に

書して曰く、

徂徠先生命世の才、絶倫の識を以て、古道を發明し、先王の道、仲尼の教をして千歳の下に彰明ならしむ、其功これより大なるはなし、然れども其人奇を好むの癖あり、而して又近世古文辭家の言を悅ぶ、故に其爲る所の文、法度の外に出づるを免れず、云云、

と、洵に當れり、古文辭の弊は天明以後に至りて山本北山、龜田鵬齋、太田錦城等之れを痛論せしと雖も、春臺已に先鞭を着けたりといふべきなり、



第三　春臺關係書類

春臺先生墓碑　服部南郭
春臺先生墓誌　稻垣白島
春臺先生行狀　松崎觀海
先哲叢談〔卷之六〕原　念齋著
近世叢語〔卷之二〕角田九華著
先哲像傳〔卷之四〕原　德齋著
野史〔卷二百六十〕
文會雜記　湯淺常山著
先哲年表
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
埋木花

儒學源流
古今諸家人物志
日本諸家人物誌
日本儒林譚〔卷下〕
儒林姓名錄
大日本史料原稿一卷
鑒定便覽
名家全書
日本名家人名詳傳
名家手簡
儒林傳　滋井大室著
大日本人名辭書

結論

古學は文學復興(即ちルネッサンス)の結果として起れる研究にて、畢竟直に蹤を孔子に接せんとする向上的進修に外ならず、蓋し文學復興によりて、我邦の學者が一時に後世の學問の妄謬を看破せるに本づく、是れ獨り儒教に就いて然か言ふべきのみならず、又醫學に就いても、又國學に就いても、亦復古の精神あらずといふことなし、醫學に於ては後藤良山、山脇東洋、吉益東洞の徒、復古を倡へ、國學に於ては、荷田春滿、賀茂眞淵本居宣長の徒、復古を倡ふ、恰も其の如く儒教に於ては、山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠の徒、復古を主張せり、是れ我邦思想發展の順序に於ては確に一歩を進めたるものなり、此の如き復古の學を總稱して古學といふと雖も、或る意味にては寧ろ新規の學なり、尾藤二洲が「仁齋徂徠之徒、皆自稱古學、所謂古者、不從程朱之名耳、其說皆新奇無謂、何古之有」(素餐錄)といふも、亦之れが爲めなり、少くも其宋儒以來の弊風を一掃して洙泗の淵

源に溯るの要を喝破せるが如き豈に新規ならずとせんや。

然れども古學は終局のものにあらず、其故いかん、孔子は固より聖人として認容すべく、永く後人の品性修養上に標準とする所あるべけれども智は孔子に盡き、徳は孔子に盡きたりといふを得ず、假令ひ實際智と徳とに於て孔子に優ること能はずとするも、其寫象する所は、孔子の智徳より優るものあるなり、換言すれば理想として孔子より優れる人格を構成するを得るなり、素行、仁齋、徂徠の徒が宋儒の人物と學問とを批評して更に之れより高且つ大なる理想を構成するを得しは、稱揚せざるを得ざる所なれども、何故に同一の精神を以て孔子の人物と學問とを批評せざりしか、今日よりして之れを言へば、孔子の人物と學問との如きも、宋儒のそれと同じく批評すべき點、多々之れあるなり、孔子も「後生可畏」といへり、是れ後生の進歩測るべからざるを豫想して道破する所なり、然るに果して後生畏るべかりしや否や、若し孔子を盲信して崇拜を事とする以上は何の畏るべき所かある、夫れ智と徳とは孔子の私す

る所にあらず孔子の人物及び學問の如きも容赦なく之れを批評し孔子てふ特殊の人格以外に理想的の道德とを追求すべきなり凡そ學は眞理を研究するを目的とす眞理は孔子よりも貴し故に眞理によりて孔子を批評するを是とし孔子の言によりて眞理を論定すべきにあらざるなり要するに學としては孔子に復歸するよりは寧ろ眞理を究明して之れによるべきなり若し事此に出でば必ず儒教の範圍を超脫して思想獨立の端緒を開き國民哲學の基礎を成すを得べかりしならん然るに素行仁齋徂徠の徒が比較的に批評的の精神あるに拘はらず單に孔子に復歸するに止まりて遂に其れ以上に出づること能はざりしは遺憾なり

古學派の人は徂徠一派を除くの外は皆孔子を以て理想となし品性を修養して孔子の如くならんことを希望せざるはなし徂徠聖人たらんことを學ぶの非を論ずれども亦聖人の道を發揮するを以て任となす是れ亦直に蹤を孔子に接せんとするものなり素行といはず仁齋とい

はず、徂徠といはず、古學派の人の眼中にありては、人格として孔子より偉大なるはなし、是を以て均しく復古を期せしなり、然れども今日にありて之れを思へば、偉大なる人格は、獨り孔子に限らず、又釋迦あり、基督あり、ソクラーテス氏あり、其他カントダーウヰン等の諸氏あり、試みに是等の人格を比較考察せば、必ず其長處短處あるを發見せん、故に是等數多の偉大なる人格に就いて其長處を抽象し、打ちて一塊となし、以て理想的の人格となすに若くはなし、史的人格は如何に偉大なるも、必ず何等かの短處あり、然れども史的事實として之れを變更すること能はず、但理想としては此の如き短處を除き思惟し得らるゝ丈圓滿なる人格を構成するを得るなり、孔子の聖人たるは固より否定すべからざるも、其科學思想を有せざるが如き、其權利思想を有せざるが如き、又其自由進歩の念に乏しきが如き、又其論理思想と哲學思想に乏しきが如き、之れを理想的人格に比すれば、皆缺點として算へざるを得ざるなり、若し一向專念、孔子を崇拜し、孔子を以て唯一の理想とし、動作云爲、悉く之れ

に法らんと欲せば、必ず其短處を併せて、之れを模倣し、滔々相率ゐて因襲俗を成し、遂に復た陋習を打破すること能はざるに至るべきなり、儒敎の行はれし結果として、東洋文明が總べて其缺點を實現し來たれること、今は餘りに顯著なる事實となれり、此れに由りて獨り孔子のみを以て今後の理想的人格とするの不可なることを推して知るべきなり、若し古來の史的人格中に就いて之れを論せば、孔子の如く缺點の寡少なるものは、殆んど他に發見すること能はざるべし、然れども之れを抽象して構成せられたる理想的人格に比すれば、亦缺點の指摘すべきもの多々之れあるを見るなり、

抽象的觀念に乏しきものは、具體的の理想を要す、具體的の理想を要する以上は、孔子の如き史的人格を取るより外なきなり、然れども孔子の如き史的人格を以て唯一の理想とする時は、徒に過去を回顧して保守的退歩的となり易し、孔子の如き人格を實現せんとするに當りて、其實現せらるべき情態は理想として尙ほ將來にあれども、其實現せんとす

る理想は、過去の史的人格なり、故に一意其理想とする過去の史的人格に近寄らんとし、其結果は進歩的にあらずして、必然に背進的となるなり、後世にありては、何人も其投ぜられたる境遇時勢等、孔子のそれと同じからざるが故に、孔子の如くなること能はず、唯、僅に孔子に似寄りたる處あれば、理想の幾分をか實現せりとすべきのみ、此の如くなれば、古代に超絶して前進するが如きは思ひも寄らざるなり、支那文明の進寸退尺、月を追ひ、歳を逐ふて、墜落沈淪せしもの、實に此に淵源すといふべきなり、理想は抽象的にして將來にあるべきものなり、是れを理想的の理想となす、抽象的の理想は、過去の史的人格の長處を集め、新に我頭腦中に描出せるものなり、此の如く描出せられたる理想は、固より過去にありしことなし、唯、我頭腦中にあるのみ、故に之れを實現するは、唯、將來にあるのみ、然れども理想は認識と共に進化し、經驗と共に發展するが故に、之れを實現し了はるの時機あることなし、若し之れを實現し了はれりとすれば、進化發展は終結とならん、然れども之れを實現するの時

機あることとなきが故に、進化發展に際限あることとなし、換言すれば、理想は過去にあるにあらずして、未來永遠にあるなり、唯未來永遠にある理想のみ以て最高最大の理想となすべきなり、此れに由りて之れを觀れば古學派の見解の倒逆せることと眞に火を視るよりも明かなり、

然れども尚ほ一の注意すべき點あり、何ぞや、仁齋は四端と四德(即ち仁義禮智)とを分ちて、四端を內部的とし、四德を外部的とし、四端を充養して四德に合一するを得とせり、然るに並河天民は四端と四德とを合一し、四端は即ち四德、四德は即ち四端、分ちて二となすべからざるを論ぜり、天民の見解は孟子の旨意を得たるものにして、仁齋の見解は孟子の旨意を得たるものにあらず、故に孟子の四端四德の說の解釋としては天民是にして仁齋非なり、是れ固より論を俟たざる所なり、然れども若し孟子を離れて之れを論ぜば、仁齋已に稍〻深遠なる倫理上の問題に接觸し來たれるが如し、彼れが內部的とするものはカント氏の所謂格法 Maxime に相當し、彼れが外部的とする者はカント氏の所謂道德的理法

Moralische Gesetze に相當す、而して此兩者は背反 Antinomie にして畢竟合一せざるべからざるものなり、(委くは Kritik der praktischen Vernunft S. 119. を見よ)凡そ道德的行爲を創始する本源に就いて、古來是れを內部的とするものと外部的とするものと二種あり、其內部的とするものは卽ち自律 Autonomie を根柢とし、其外部的とするものは他律 Heteronomie を根柢とす、然るに仁齋は自律と他律とを調和せんとするが如き傾向あり、換言すれば、道德上の背反 Antinomie を除去せんと努力する者の如し、天民は四端と四德とを合一し、論理上の撞着は一掃し得たりと雖も未だ道德上の背反を除去し得たるものにあらず、徂徠は獨り他律のみを認容し、自律他律の關係いかんには、曾て思ひ及ばざるなり、故に道德上の背反 Antinomie に關する問題は、仁齋によりて開始せられたりと雖も未だ解決せられずして殘れり、然るに明治の今日となり、倫理學研究の漸く起らんとするに及んで、自律他律の議論、亦將に騷然として學界を動かし來たらんとす、道德てふ事實は獨り自己のみに關するものに

あらず、又均しく自己以外の同類に關するものなり、自己と自己以外の同類とは現象として差別せらるれども、過境的實在よりして之れを觀れば、本と何等の撞着もあるなし、是故に自己にあるものは、亦同類にもあり、同類にあるものは、亦自己にもあり、主觀的に自己にある道德は客觀的に同類にある道德と合一するを要するなり、其合一する所、卽ち人道の因りて存する所なり、思ふて此に至れば、仁齋の着眼、殆んど燃犀の明ありといふべきなり、

日本古學派之哲學 終

學者は多く學びたるものなり、天才は誰れよりも學びたることなく、人類反りて之れより學ぶものなり、是故に大精神は億兆の人類中、僅に一人を生ずる位稀なるものにて、人類の燈明臺なり、若し是れなしとすれば、人類は恐るべき謬見及び蕃風の無際限海に漂ふべし、

ショッペンハウエル

附錄一

堀川學派系統（其重なるものを記す）

- ∴伊藤仁齋——∴伊藤東涯
  - 伊藤梅宇
  - 伊藤介亭
  - 伊藤竹里——內田頑石
  - 伊藤蘭嵎——立松東蒙
  - 並河天民
  - 中江岷山
  - 北村篤所
  - 小河立所
  - 淺野文安

―荒川蘭室
―林義端
―中島訥所
―瀨尾用拙齋
―香川修庵
―大町敦素
―鳥山見庵
―渡會末茂
―伊藤好節齋
―笠原雲溪
―松崎蘭谷
―並河誠所
―鶴田重定
―陰山東門

- 荒木田霽寰
- 桂川浚泉
- 林景範
- 三重松庵
- 松岡恕庵
  - 小野蘭山
- 大石良雄
- 小野寺秀和
- 中島源造
- 稲若水

- 伊藤東所
  - 伊藤東里
  - 川田東岡
  - 倉成龍渚
- 奥田三角
- 青木昆陽
- 澤村琴所
  - 伊藤東峯
- 山田麟嶼

- 安原霖寰
  - 伊藤韜齋
- 垣內熊岳
- 原雙桂
- 朝枝玖珂
- 谷麋山
- 穗積能改齋
- 陶山南濤
- 廣瀨一峯
- 松波酊齋
- 三谷南川
- 原東岳
- 宮崎筠圃
- 木村鳳梧
- 安藤仕學齋

高養浩

松崎白圭



大事をなさんと欲せば、小さなる事を、怠らず勤むべし、小積りて大となればなり、凡そ小人の常、大なる事を欲して、小さなる事を怠り、出來難き事を憂ひて、出來易き事を勤めず、夫故、終に大なる事をなす事あたはず、夫れ大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり、譬へば百萬石の米と雖も粒の大なるにあらず、萬町の田を耕すも、其業は一鍬づゝの功にあり、千里の道も一歩づゝ歩みて至る、山を作るも一簣の土よりなる事を、明かに辨へて、勵精小なる事を勤めば、大なる事必ずなるべし、小さなる事を忽にする者、大なる事は必ず出來ぬものなり、

二宮尊德

附錄二

蘐園學派系統（其重なるものを記す）

∴物徂徠
- 物金谷
  - 物鳳鳴
  - 東藍田
    - 東鼇岳
- 本多猗蘭子
- 釋萬菴
- 餘熊耳
- 三浦竹溪
- 鷹見爽鳩
- 越智雲夢
- 秋元淡園
- 吉田孤山
- 五味釜川
- 栗原桶川
- 大鹽鼇渚
- 井上東溪
- 關口黄山
- 稲垣白島

- 太宰春臺
- 山井崑崙
- 根本武夷
- 板倉璜溪
- 石川大凡
- 田中蘭陵
- 岡井嵰州
- 山田麟嶼
- 安藤東野
- 柴山鳳來
- 匹田九皐
- 晁玄洲
- 晁南山
- 久津見華山

太宰春臺
- 宮田金峯
- 渡邊蕃菴
- 太宰定保
- 僧無相
- 原尙賢
- 堤有節
- 松崎觀海
- 釋曉山

松崎觀海
- 菊池衡岳
- 金谷玉川 ― 伊藤藍田
- 內田南山
- 熊坂台州
- 大田南畝

- 木下蘭皐
- 辻湖南 ── 熊坂盤谷
- 平野金華 ── 戸崎淡園
- 菅谷甘谷 ── 橋本樂郊
- 入江南冥 ── 熊坂台州
- 伊藤南昌
- 高蘭亭
  - 唐橋君山
  - 横谷藍水
  - 稻垣白巖
- 木村蓬萊
- 土屋藍洲
- 守屋峩眉
- 宇濡水
  - 阪本天山
  - 本田莊藏 ── 伊藤鏡河
- 芳村天仙
- 大野北海
- 小田村鄜山

- 板倉蘭溪
- 板倉龍洲
- 谷元淡
- 田中冠帶
- 宇野士朗
- 篠崎東海
- ●山縣周南
  - 和智東郊
  - 瀧鶴臺
  - 林東溟
    （和智東郊・瀧鶴臺・林東溟）山縣門之三傑
  - 津田東陽
  - 田坂灞山
  - 山根華陽
  - 小田村鄜山
  - 小倉鹿門
  - 仲子岐陽
  - 繩非鶴汀
    （是爲₂長州十才子₁）
  - 增野雲門
  - 三浦清陰
  - 田中相江

- 服部南郭
  - 山縣子祺
  - 滕子彜
  - 秦貞父
  - 永富獨嘯菴——龜井南冥
- 餘熊耳
  - 餘蘭室—大竹麻谷
  - 長坂圓陵
  - 石金瀨濱
  - 岳東海
  - 市川鶴鳴
  - 滕南豐
  - 田中江南
  - 立原翠軒
  - 阪本天山

—根 經世

（以下私淑）

- 松崎白圭
- 釋大湖
- 板倉復軒
- 成島錦江—奥貫友山
- 越智平菴
- 水足屛山
- 水足博泉
- 住江滄浪
- 菅沼東郭—菅沼西陵
- 藤鳳湫
- 孔生駒
- 鈴木澶洲

- 赤松太庾
- 山内琴臺
- 松村梅岡
- 龍草廬
- 齋藤芝山
- 龜井南冥
  - 原古處
  - 龜井昭陽
  - 江上苓洲
- 岡野石城
- 野田石陽
- 藤澤東畡

- 服部多門
- 鵜殿本莊
  - 片山兼山（唱二折衷學一）
- 莊田子謙
- 山本友石
- 石島筑波

- 新井滄洲
- 原田東岳
- 安達淸河
  - 佐維章
  - 滕元充
  - 繩惟直
  - 松芳文
  - 伊藤鏡河
- 齋宮靜齋
- 湯淺常山
- 熊本華山
- 宮瀨龍門
  - 淸水江東
  - 宇野東山
- 源乘富
- 望月三英
- 松村貞吉
  - 高葛波
- 宇井默齋
  - 奥貫友山
- 福島松江
- 葛烏石
  - 石井鶴山
- 姚柳有莘
  - 澤村琴所

- 佐藤周軒
- 秋山玉山（又學二于林鳳岡一）—千葉芸閣
  - 野村東皐
    - 西川國華
    - 松平寒松子
    - 奥山華嶽
  - 種村箕山
- 平賀鳩溪

人を鎔鑄陶冶せんと企圖する前に當りて之れを記憶せよ、自ら其人となり居ることを要す、自らに於て其提出せんとする所の例を發見せざるべからず、

ジアン、ジヤック、ルソー

自然の目的は衆人皆眞理を看破するにあるにあらずして、反りて眞理は或るものによりて看破せられ、而して傳説により て保守せらるゝものと思惟すべきなり、

エルネスト、ルナン

附錄三

古學派生卒年表（西暦による）

	生	卒
山鹿素行	一六二二	一六八五
伊藤仁齋	一六二七	一七〇五
平井東川	一六四二	一七一五
小野寺秀和	一六四三	一七〇三
緒方維文	一六四五	一七二二
北村篤所	一六四六	一七一八
小河立所	一六四九	一六八八
磯野竹巖	一六五四	一七〇八
荒川天散	一六五四	一七三五
中江岷山	一六五五	一七二六

稻生若水……一六五五—一七一五
松岡恕菴……?—?
伊藤好節齋……一六五七—一七二七
笠原雲溪……?—?
中島浮山……一六五八—一七二七
林　義端……?—?
香川修庵……?—?
大町敦素……一六五九—一七二九
大石良雄……一六五九—一七〇三
田中冠帶……一六六二—一七二九
伊藤木庵……一六六三—一七二九
鳥山見庵……一六六四—一七一一
渡邊元安……一六六四—一七二二
板倉復軒……一六六五—一七二八

柱川浚泉	?—?
林景範	?—?
中島源造	?—?
伊藤梅宇	一六八三—一七四五
安藤東野	一六八三—一七一九
伊藤介亭	一六八五—一七七二
越智雲夢	一六八六—一七四六
澤村琴所	一六八六—一七三九
篠崎東海	一六八六—一七三九
山縣周南	一六八七—一七五二
平野金華	一六八八—一七三二
三浦竹溪	一六八九—一七五六
成島錦江	一六八九—一七六〇
菅沼東郭	一六九〇—一七六三

鷹見爽鳩……一六九〇—一七三五
水足屏山……？—？
本多忠統……一六九一—一七五七
住江滄浪……一六九一—一七二八
柴山鳳來……一六九二—一七七一
板倉璜溪……？—？
石川大凡……？—？
伊藤竹里……一六九二—一七五六
服部南郭……一六九三—一七五九
守屋峩眉……一六九三—一七五四
伊藤蘭嵎……一六九四—一七七八
滕鳳湫……一六九六—一七六五
菅谷甘谷……一六九六—一七六四
餘熊耳……一六九七—一七七六

木村鳳梧……一六九七—一七七二
青木昆陽……一六九八—一七六九
根本武夷……一六九九—一七六四
釋大潮……一六七六—一七六八
釋萬菴……?—一七三九
秋元淡園……?—?
吉田孤山……?—?
田中蘭陵……一六九九—一七三四
岡井嵰州……?—?
匹田九皐……一七〇〇—一七三八
晁玄洲……?—?
物金谷……一七〇三—一七七六
奥田三角……一七〇三—一七八三
小田村鄜山……一七〇三—一七六六

小河德所……？——？
龍草廬……一七一四——一七九二
鈴木澶洲……一七一五——一七七六
高養浩……？——？
木村蓬萊……一七一五——一七六五
土屋藍洲……？——？
晁南山……？——？
久津見華岳……？——？
原雙桂……一七一八——一七六七
宇野士朗……？——？
山內琴臺……一七二四——一七四六
松村梅岡……？——？
松崎觀海……一七二五——一七七五
立原東蒙……一七二六——一七八九

原東岳……一七二九―一七八三
伊藤東所……一七三〇―一八〇四
柴山豫章……一七三〇―一七六七
內田頑石……一七三六―一七九六
物青山……？―？
齋藤芝山……一七四三―一八〇八
龜井南冥……一七四三―一八一四
岡野石城……一七四五―一八三〇
倉成龍渚……一七四八―一八一二
物鳳鳴……一七五五―一八〇七
川田東岡……？―？
伊藤東里……一七五七―一八一七
野田石陽……？―？
龜井昭陽……一七七三―一八三六

伊藤東峯……一七九九——一八四五

藤澤東陔……一七九三——一八六四

土井聱牙……一八一七——一八八〇

（以上本書中に見えたる重なる者を擧ぐ）



在㆓朝廷公所㆒、暨於㆓衆會廣坐之中㆒、則雖㆓衆人㆒不㆑能㆑爲㆓放恣㆒、唯在㆓閨門之中㆒、恐自欺欺㆑人之行多、若內行不㆑愼、唯於㆓外邊㆒而謹厚焉者、皆爲㆓虛飾㆒、故君子之道、愼㆓內行㆒爲㆑先、中庸曰、君子之所㆑不㆑可㆑及者、其唯人之所㆑不㆑見乎、

貝原益軒

附錄四

第一　我國古學派の特色

我が日本に於ては古學派が德川時代に三派を成して興つたのである。第一は山鹿素行の學派。是れは武士道學派となつたのである。第二は伊藤仁齋の學派。是れは古義學派と稱せらるゝのである。第三は物徂徠の學派。是れは古文辭學派と稱せらるゝのである。此外考證學派なるものがある。是れも古學派と云へば古學派であるけれども、是れは姑く別派として論ずるのである。

斯樣に古學派に三派がある。此三派は固より共通點を有つて居る。それは何れも宋明の理學に反對して居る。朱子陽明等の學を取らぬのである。さうして原始儒教に立返つて直ちに迹を孔子に接しやうと努力して行く。卽ち何れも復古儒教である。原始儒教を復活しや

うと云ふのである。其大體の態度に於ては三派共一致して居る。其れのみならず、三派を通じて餘程活動主義が勝つて居る。さうして何れも大に實際的の方面がある。

山鹿素行の古學は最も日本化したのである。二千歳不傳の統を嗣ぐと云ふ考で、直ちに迹を孔子に接して興つて來たのであるが、併乍ら其儒教なるものは最早支那の儒教でない。儒教をすつかり日本風に同化して武士道の精神を以て之を運用する立場を取つたのである。さうして國體の考、神道の考、尊王の考、是等が最も重大なる價値を有して居る次第である。物徂徠の古學は最も支那風の色彩を帶びて、素行の其れと大に違つて居る。日本的の色彩は何處にあるかと思はるゝ程である。徂徠は出來得る限り日本的の色彩を避けて、純然たる支那古代の原始儒教を研究し、其精神を傳承する心懸である。此點に於ては徂徠は素行と正反對に立つて居ると謂つても宜いのである。即ちダイヤメトリカリー・オッポーズドの狀態が見えるのである。此間に

立つて仁齋は稍、兩者の中間を占めて居る樣な感がする。仁齋は徂徠ほどに支那風の一方に偏したと云ふ譯でない、大分日本風の處がある、さうして日本の國體を尊ぶ精神もある。詩も作つたけれども、歌も大分作つたやうな次第で、餘程日本的の方面もある。其子の東涯に至つては、日本の制度なども隨分細かに研究することを解らなかつた樣な次第で、大體から言ふと、どうやら素行徂徠の中間に在るやうな有樣が見える、けれどもどちらかと云ふと支那風が勝つて居る。更に學說の上から見ると又斯う云ふこともある。道と云ふことの觀念に於ては素行と仁齋と殆ど一致して居る。素行はやはり仁を重んじたものである。即ち情の方面から道を觀たのである。仁齋も仁義を以て道と爲すと云ふやうな考で、餘程情の方面から道を觀るやうな處があつて素行と同一轍に出て居る。所が徂徠は禮樂を以て道と爲すと云ふのであるからして是れは大分違ふ。それから天地は始無く終無しと、斯う素行は考へたのであるが、此點に於ても仁齋は素行と同じ考を懷

いて居つた。素行と仁齋との間に幾多の共通點を見出すことが出來る樣である。

所が仁齋と徂徠とは又或點に於ては正反對になつて居る。仁齋は經濟なんと云ふことは道德と兩立しないものであるとして、斥けて取らない。徂徠はなか／＼政治經濟の方に考があつて、寧ろ之を重んじた方である。さうして徂徠は功利主義を懷いて居る。所が、山鹿素行がやはり功利主義に傾向して居る。其功利主義と云ふ方面から觀ると素行と徂徠とは自然に一致して來るのである。徂徠は素行の事を知つて居つたのであるから、仁齋に負ふ所がある樣に、素行にも負ふ所があつたのではなからうかと疑はれる位である。又素行は武士道學派であるから、無論兵學などは其主とする所で、新に兵學の一派を開いた位である。所が徂徠も亦兵學を講じた。さうして『鈐錄』と云ふものを著して居る。其處になると素行と徂徠とは亦相似た所のあることを認むるのであるが、併し徂徠の兵學なるものは日本化した點が少い。

素行の樣に武士道の精神を以て兵學を說いて來る樣な所が見えない。それであるから其似た中に又異なる所がある。

素行と徂徠とは孰れも國家的觀念が非常に勝つて居る。此點に於ては仁齋は餘程違ふ。仁齋にまるで國家的觀念が無かつたとは謂ひ難いけれども、併し其主となる所ではなかつた。仁齋の說く所は個人道德に在つたので、法律、經濟、政治と云ふやうな方面から說いて來ることは全然無いと謂つてもよい。全く個人道德を主として說いたのであつて、自から個人本位の觀念が勝つて居る樣に思はれる。所が、素行と徂徠とは團體本位卽ち國家社會の立場から觀る觀念が勝つて居る。而して素行は日本と云ふ此國家社會を土臺として道德を說く。徂徠に在つても國家社會の觀念は其主とする所となつて居るけれども、日本と云ふ此國家社會を主として說いた樣な所は餘り見えない樣である。徂徠はあまりに支那的に總てを說くやうな傾向が勝つて居る。若し徂徠が極く實際の事を說くに當つては幕府を主として說いたの

である。其點に於ては素行が皇室を中心として說いた精神と大に逕庭があると思はれるのである。

要するに、日本に於ける古學の三派はそれ〳〵特色があつて、比較對照すればなか〳〵面白く思はれる。今は其最も顯著なる特色を擧げて之を論ずるに止めて置くのである。

第二　山鹿素行に就いて

今日贈位先哲祝典の大會に際して、山鹿素行先生の事に付て一場の講演を致すことになりましたのは、私の大に光榮とするところであります。山鹿素行先生の事に付ては、是迄或は演說に或は雜誌に何囘も述べたことがありますが、それを一々今日繰返すと云ふ譯には參りませぬ。それに何分時間も限りのあることでありますからして、今日は特に此祝典大會に適切であると思ふ點だけを御話することに致しました。先づ此山鹿素行の祖先の事、それから素行の一代の事に付て極く簡單に要點だけを擧げて御話致しまして、それから更に素行の學問の系統に付て少しく御話を致しませう。さうして最後に素行の日本の學術界及び精神界に於ける地位に付ての所感を述べやうと云ふ考でございます。

山鹿素行は德川時代の多くの學者の中に於て、一種特別の地位を占

めて居る人であります。さうして其性行及び學問等も亦自から一異彩を放ちて居るのであります。それは矢張其祖先の遺傳及び幼少の時の教育等が大に關係して居るやうであります。先づ此祖先の事からザッと御話をして見やうと思ひます。

山鹿家系略圖

藤原藤次
……山鹿秀遠
……某 千助
貞實 千助
─某 市助 彌五助
貞以 六右衛門
─某
─某 惣左衛門
正明 千助 仕淺野侯
─女
─女
─女 三木勘左衛門母
─女
─素行 仕淺野侯 高興又高祐、童名左太郎、又文三郎、稱甚五左衛門
─女 嫁松七郎兵衛妻

義昌 童名猪助、稱四郎左衛門 仕松浦侯

女

女

興信 初高恒、又政實、稱八郎左衛門 實兼松七郎兵衛子

女 名龜、興信妻 …… 高美 五世孫 ― 高補 六世孫、實七世孫 號素水

女 名鶴、嫁津輕 ― 津輕耕道軒

高碁 平十郎 萬助 仕淺野侯 …… 萬助 號嚴泉

此山鹿家系略圖と云ふものは私がザッと拵へましたので、精細に拵へますることは隨分面倒でもありまするし、又今日の演說の爲にはさう精密なものを拵へる必要もないので、是れで大體分るのであります。此系圖は重に『山鹿素行日記』と云ふものに據つて拵へました。是ればかりではありませぬが重に此『山鹿素行日記』に據りましたので、近頃平戸の方から取寄せて大學の史料編纂掛で寫させたのであります。此

日記に據りますと山鹿素行の先祖と云ふものは藤原藤次と云ふ人で、此藤原藤次は天慶年間の人でありまして、彼の平將門を征伐した藤原秀鄕所謂俵藤太秀鄕の弟であります。此藤原藤次と云ふ人は筑前の山鹿と云ふ處に居りました。筑前の山鹿と云ふ處は今に矢張山鹿と稱して居りますが、此處は昔神功皇后が三韓征伐の時に船を繫がれた處と言ひ傳へて居ります。其處に居りましたところからして遂に山鹿氏を稱ふることになりました。此山鹿に居りまして遂に山鹿城を築き、代々筑前守となつて居りました。

ゝそれからして其子孫がずつと續いて居りましたので此藤原藤次から山鹿秀遠と云ふ人迄の間がまだ何代かありますが、それは能く分りませぬ。けれども何代かを經て山鹿秀遠と云ふ人に至りました。此時が丁度壽永年間で、彼の源平二氏の戰がありまして、平氏が戰に負けて段々九州の方に移つて行つたときに、此山鹿秀遠なる者が三千の兵を率ゐて平氏を援けた。是れが九州第一の精兵であつたのでありま

す。殊に安德帝を奉じて一時山鹿の城に據つたと云ふことである。併ながら到頭平氏の方が段々敗北して滅ぼされることになりましたからして此山鹿秀遠なるものも矢張彼方此方で戰ひましたけれども到頭旨く往かないで、子孫は一部分は伊勢の方に殘りまするし、一部分は筑前に歸つたと云ふことであります。秀遠は伊勢で亡くなりまして、子孫は二箇所に分れて、伊勢にも殘つた者がありましたから、今日伊勢に山鹿氏を名乘つて居る者がまだあるかも知れませぬ。他は筑前に行きました。一說には肥後にも行つたと云ふのでありますけれども、肥後の山鹿と云ふのは全く歷史が違つて居るやうであります。肥後に山鹿と云ふ處があるので往々人が混同しまするけれども、あれではない。それは唯一說として此日記にも擧げてあるだけであります。

それで、此山鹿秀遠の子孫で伊勢の方に居つた者が某、通稱だけであります。それから貞實と云ふ者が伊勢に居りました。そこで此秀遠から千助迄の間は直接の系統ではない。其間には何人かあつたもの

と見えますが、それは分りませぬ。某千助から貞實。斯う云ふ工合になります。それで此貞實と云ふ人が矢張ナカ〱尋常ならざる人でありました。此日記に據りますと貞實は天文年間に居つた人でありますが、十五歳の時に自分の父の仇を討つた人でありまして、當時の人が皆其武勇を賞して居つた位であります。それのみならず種々武勇の事蹟があります。壯年の時に及んでは、又瀧川一益と云ふ彼の有名な織田信長の家來、と親密なる交をなして居つた人でありますが、此一益と云ふ人が嘗て貞實の助を得て人を殺したことがあります。其時一益が遠方から窺つて鐵砲で殺さうとして居つた時に、貞實が直ちに刀を拔いて斬つてしまつたと云ふやうなことで、武勇を以て名高い。一益も貞實の武勇に感服したと云ふことであります。其外にも同じやうな事があります。矢張人の爲に豐島某と云ふ者を殺したことなどもありまして、當時の人はひどく貞實の武勇を歎賞して居つたと云ふことであります。此貞實に某某と云ふ二人の子がありまして、一人

の某と云ふ者に市助彌五助と云ふ二人の子があります。此市助の子に六右衛門貞以と云ふ人があります。是れが丁度山鹿素行の親に當るので、此貞以と云ふ人がナカ〳〵尋常ならざる人でありました。矢張此人もどう云ふ譯か同輩を殺したことがあります。理由はどうも分りませぬが、伯耆の國で同輩を殺して會津に逃げて行きまして、會津侯に仕へて居りました。それで山鹿素行先生も生れは會津であります。此貞以と云ふ人は後に種々事情があつて江戸に出て參りまして、修玄庵と稱して醫者を致して居りました。此修玄庵の石碑は宗參寺にあります。其石碑は山鹿素行が書いて居ります。深く親を賞讃した文章が刻してあります。即ち是れが貞以のことであります。處が此貞以の子が八人あります。それで素行と云ふ人には兄弟が八人ありました。一番の兄さんが惣左衛門と云ふ人で、是れは折々素行の事を研究すると出て來る人であります。それから弟に義呂又は義行と云ふ人があります。是れは童名を猪助と名乘りました。此外に通稱

が二つもあります。四郎左衞門、又は三郎左衞門と云ふ名の出て來るのは此人の事と思ひます。此人は松浦侯に仕へた人であります。此人の事は學系の方で御話を致しませう。先づ斯う云ふ家柄で先祖を見るとなか〳〵武勇の人が出て居る。歷史上著名なる人が出て居るので、段々研究すると面白い事が次第に現はれて來るのであります。

そこで此處に兼松七郎兵衞の妻と云ふのがありますが其子が卽ち興信であります。山鹿素行の子供を見ますと四人あります。娘が二人ありまして長女を龜と云ひ、次女を鶴と云ひます。此興信と云ふ人は養子で、實子ではありません。素行の本當の男子と云ふのは此高基と云ふ人一人で、興信と云ふのは兼松七郎兵衞の子であります。素行が之を迎へて養子として長女の龜と云ふ人に配はせたのであります。それで宗參寺の墓を見ると興信と高基の名が石碑の裏に刻してあります。さう云ふ關係になつて居ります。それから素行の弟の義昌と云ふ人も松浦侯に仕へたので、其子孫は矢張平戶の方にあるのであり

ます。此與信と云ふ人が素行の養子になつたのは、實子の高基と云ふ人がまだ小さくして、後繼に容易になれないからそれを迎へて養子にしたのであります。マア概略斯う云ふ系統であります。

それから此處に高美と云ふ人がありますが、是れは素行の五世の孫でありまして、此人にも矢張著述があります。是れは學系の方で説明致しませう。それから其次が高補と云ふ人であります。是れは六世の孫です。實は七世の孫ですけれども、此人は高美の學問を直ちに繼いだと云ふので、自から六世の孫と云うて居るのであります。山鹿素水と云つて江戸に塾を開いて兵學を教授して居つた人であります。素行の長女を龜と云ひ、次女を鶴と云ふので、姉妹に龜鶴と云ふ目出度い名が命けてある。此次女の子に耕道軒と云ふ人が出て居ります。

そこで素行はどう云ふ人であつたか、素行の事は諸君も詳しく御存じであらうと思ひますから、極く簡單に注意すべき要點だけを御話致します。素行は前の系圖に書いてある通り色々な名があります。其

頃は名を度々變へても宜しいのでありましたから、色々名が付けてあります。童名は左太郎又の名は文三郎。通稱は甚五左衛門。淺野侯に仕ふ。此素行は元和八年八月二十六日に會津に生れたのであります。其頃は丁度德川時代の初めの頃で泰平の世でありましたから、學者が大勢出て居ります。木下順庵と僅か一年違ひであります。それから熊澤蕃山に後るゝこと三年、山崎闇齋に後るゝこと四年であります。さうして貞享二年九月二十六日に享年六十四歳にして江戸で病歿されたのであります。さうして牛込の榎町の宗參寺に葬りましたので、今でも彼の寺に墓があります。

此山鹿素行と云ふ人は、どう云ふ教育を受けた人か一寸其事を御話して置きませう。素行は會津に生れた人でありますが父の貞以即ち修玄庵が江戸に出て來た時に、一緒に江戸に附いて來ました。其時が素行の三歳の時であります。江戸に來てからどう云ふ教育を受けたかと調べて見ますと、此人は妙な事があります。榎町の濟松寺と云ふ

寺の祖心尼と云ふ尼さんに養はれたのである。此祖心尼と云ふ人はナカ／＼えらい尼さんで、三代將軍に仕へて善く過せられた人でありますが、元と祖心尼と云ふ人は出も宜うございまするし、ナカ／＼聰明なる女子で學問も可なり有つた人と見えます。彼の春日局と同じ仲間で、德川家に餘程能く用ゐられた人でありました。それらの關係からして終には幕府から矢張俸給を貰ひまして、さうして彼の濟松寺と云ふ寺も、特に祖心尼の爲に建てられたものと見える。素行は幼年の折此濟松寺に居つて祖心尼に養育されたのであります。ナカ／＼聰明なる女子の手に依つて養育を受けたから、其結果は餘程宜しかつたやうに思はれます。それらの事は日記にはどうも見當りませぬけれども、祖心尼の關係は『配所殘筆』の中に大分詳しく見えて居ります。それからして九歳の時には林羅山の門に入りました。林家の學問の系統であります。それから十五歳の時には、小幡勘兵衛及び北條氏長と云ふ當時の有名なる兵學者に就いて兵學を學んだ。それは學系圖を

御覽になると分ります。此學系は後に說明しますが、小幡勘兵衞、北條氏長の二人に就いて學んだ。それから其他神道、歌道、佛法等をそれぞれ當時の有名な先生に就いて學んだのであります。神道は高野山の僧光宥及び廣田坦齋と云ふ者に就いて學んだ。亦歌道も廣田坦齋に就いて學びました。佛法は日本に來ました隱元に會つて問答したなどゝ云ふことがあります。其他種々なる方面に亘つて當時の學問を研究したのであります。さう云ふ次第でありますから、幼少の時に已に學問の素養は餘程あつた譯であります。

それで餘程早く幕府にも知られまして、殊に祖心尼の關係からのやうでありますが、三代將軍家光に用ゐられさうでありました。其精細なる事情は『配所殘筆』の中に見えて居ります。併ながら不幸にして素行が將に幕府に用ゐられやうかと云ふ時に、三代將軍が逝去された爲に、遂に其事が旨く參りませぬ。其後素行は段々學問の方に力を盡して、遂に彼の有名なる『聖教要錄』と云ふ書物を著はしました。それを出

版したのが一生の禍を買ふ原因になりました。
『聖教要録』は御存じでもありませうが、三巻になつて居りまして、瑣々たる小冊子で一寸それ程に思はれませぬけれども、當時にあつては餘程それが周圍に刺激を與へたのであります。それと云ふのは當時幕府の教育主義と云ふものは朱子學となつて來て居りました。殊に此素行は林家の教育を受けた人で朱子學の系統を引いて居ります。それに拘はらず聖教要録を著して朱子學を攻撃した。それと同時に古學を主張し始めたのであります。朱子學は儒教の眞面目を得て居るものではない。孔子の學問の正脈ではない。あれは餘程佛教の這入つて間違つたものになつて居る。それで孔子の教の眞面目に立返らなければならぬ。卽ち原始儒教に立返らなければならぬと云ふので自分の學問の系統を直に孔子に接して起つて來たのであります。それと同時に痛く朱子學を攻撃したのでナカ〳〵鋭い言葉が『聖教要録』に用ゐてあります。是れが大變な刺激を與へた。是れが素行の一生

の禍を買ふ原因になつたのであります。「聖教要錄」と云ふ不屆なる書物を著したと云ふので、到頭赤穗に流されることになつたのであります。さうして其書物は滅版になつてしまひました。其時に一旦版にした書物が稀に遺つて居ります、例へば東京高等師範學校には古い版があります。此山鹿素行が赤穗に流されたのは勿論「聖教要錄」の爲でありますが、其外にも裏面の事情が幾らかあつたものと思はれます。けれども如何に裏面の事情があつても、正面から見れば此「聖教要錄」が赤穗に流さるゝ重なる理由で、又案外此理由が當時に於て强かつたと考へられます。

さうして朱子學と云ふものが幕府の教育主義でありましたが、幕府ばかりではない。當時世の中で最も勢力を有して居つたのは朱子學でありました。藤原惺窩が朱子學を唱へて以來、其門下には林羅山其他有名の學者が輩出しまして、さうして世の中には朱子學が十分勢力を張つて居る時代であります。其時代に於て朱子學を攻擊した爲に、

ナカ〳〵容易ならぬ事となつて來ました。それに朱子學派の人が丁度三代將軍家光の亡くなられた後に幕府に勢力を持つて居りました。それは他ではありませぬ。當時幕府に於て執政の地位に立つて居つた人で保科正之と云ふ人でありますが、此人は深く山崎闇齋を尊崇した人で、山崎闇齋の門弟子と云つて宜い人であります。それで山鹿素行の『聖教要錄』が、ナカ〳〵強く此保科正之の感情に觸れたに相違ない。さうしてどちらも其學問の違つて居ることを能く知つて居つたのであります。『配所殘筆』を見ると山鹿素行が保科正之の學問に付て答へたことが載つてあります。容易に答へなかつたけれども、強ひて問はれて學問の筋が餘程違つて居ると答へた。それで山鹿素行の學問は保科正之のと氷炭相容れざる性質の者であります。それで『聖教要錄』が意外の禍を齎らしたと云ふことは怪むに足らぬのであります。其他にも幾らか裏面の理由があつたと思はれる。彼の由井正雪が亂を企てたのは、素行が『聖教要錄』を世に出した時より十六年前の事であり

まして、彼の由井正雪の亂に對しては幕府も大變に怖れて居つたのでありますが、然るに由井正雪のは大した事が無くして濟みましたけれ共、山鹿素行が其後江戸に於て兵學の教授をした所が、非常な勢力であります。平素其門に往來する弟子が三千人もあつたのに、それに又當時の大名の中に素行の門に入りて、弟子の禮を取る者が少くなかつた。素行の日記を見ると意外に多くの大名其他顯榮の人々が素行の邸宅に往來して居ります。當時の事ですから上下の懸隔が甚しいのに、民間の眇たる匹夫の門に大名が往來して居ります。それで是れは容易ならぬ事であると幕府では見たに違ひない。ナカ〳〵由井正雪どころではない。學問に於ても兵學に於ても其他の點に於ても、由井正雪を怖れる程であれば素行に對しては尚ほ一層怖れなくてはならぬと云ふ樣な有樣であります。それらが裏面に於て彼が迫害を受ける一つの理由であつたらうと考へます。

もう一つの理由は、餘程世間の學者竝に兵法家の嫉みを受けたこと

であらうと考へます。昔からさう云ふ說があります。或は北條安房守が素行に對して餘程嫉妬心を懷いて、遂に斯る迫害を加へたと云ふ說もありますが、さう云ふ說の起るのも偶然ではない。此兵法家と云ふ者は、互に家學を傳へるに當つては決して異說を立てないと云ふ誓もあるので、ナカ〳〵それらの事はやかましいのであるのに、素行は自己の一流を開いて堂々とやり始めたのでありますから、北條安房守も或はそれを心に快しとしなかつたらうかと云ふ疑がある。併しそれは單に疑に止まるので確實な證據が捉まらぬのです。又世間の朱子學者の嫉みがあつたのであらう。殊に『聖敎要錄』を見ては他の朱子學者が何れも憤慨に堪へないやうなことがあつたであらうかと思はれる。此等の事は裏面の理由として幾らか考ふべき事であらうかと思ひます。

そこで『聖敎要錄』を著した結果、北條安房守から呼出された。北條安房守は幕府の命を奉じて曾て自ら兵學を敎へた山鹿素行を呼出した。

素行は其呼出しを受けた時が四十五歳。其呼出狀並に呼出に對して答へた事が『配所殘筆』の中に出て居ります。それは斯う云ふ呼出狀であります。「相尋ぬべき御用の事候間早々私宅迄參らるべく候以上」是れに對する山鹿素行の答が「御手紙なし下され謹で拜見し奉り候御尋ねなさるべき御用の儀御座候間早々貴宅迄參上仕るべきの旨畏り奉存候追付參上仕るべく候以上」此答の寫が今大學にも來て居ります。斯う云ふことでありましたが、素行は其尋常ならざるを覺つた。北條安房守から呼出しを受けたのは簡單であるけれども、ナカ／＼是れは一通りでない。何んだか分らぬけれども此呼出狀は尋常でない。或は死罪になるかも分らぬ。死罪にならぬでも何か罪科を受けて流罪になるか、ナカ／＼一通りの事ではなからうと云ふので、彼の北條安房守の宅へ行くに付いては死を決した。そこで食事をし行水をして了つてチャンと妻子に別れを告げて、さうして宗參寺に參つて先考の墓に別れを告げて、それから出掛けたのであります。出掛ける時に立ち

ながら文章を書いて、それを懐に入れて往きました。それは素行が何事か分らぬけれども、或は此『聖教要錄』の事ではなからうか。『聖教要錄』の事で自分が死罪に處せられることになつたならば、此懐に持つて居る書附を出して死ぬべき筈であつた。其時の文章が『配所殘筆』に載つて居りますが、簡單な文でありますから讀んで見ませう。

蒙當二千歳之今。大明周公孔子之道。猶欲糺吾誤於天下。開板聖教要錄之處。當時俗學腐儒。不修身。不勤忠孝。况天下國家之用。聊不知之。故於吾書。無一句之可論。無一言之可糺。或借權而貪利。或構讒而追蹤。世皆不知之。專任人口而傳虛。不正實否。不詳其書。不究其理。强嘲書罪我。於茲我始安我言之大道無疑。天下無辨之。夫罪我者。罪周公孔子之道也。我可罪而道不可罪。罪聖人之道者。時世之誤也。古今天下之公論不可遁。凡知道之輩。必逢天災。其先蹤尤多。乾坤倒覆。日月失光。只怨生今世而殘時世之誤於末代。是臣之罪也。誠惶頓首。

十月三日　山鹿甚五左衛門

北條安房守殿

斯う云ふ書附を懐に入れて往きました。ところが死罪に處せられる様なことがなかつたのでありますから、此書附は出さずにしまひました。素行は死罪を免れましたけれども、流罪になつて赤穂に謫遷されました。一旦江戸の淺野家に預けられましたけれども、暫くの間に赤穂の方に參らなければならぬことになりました。それに付て北條安房守の方では餘程怖れたものと見えて、山鹿素行は何かやり出しはせぬか、又門人が多いから不穩の擧動がありはせぬかと思つて、山鹿素行が北條安房守の宅に往つた時などは、ナカ〳〵大勢人が居つたと云ふことであります。大勢の人が門前に居つてイザ事があればどうかしやうと云ふ積りで居りましたところが、素行はさう云ふ無法の擧動をする人でないからして、それらの用意は皆無用に歸した譯であります。又江戸を立退く時にも何か事を起しはせぬかと思ふて、大分警戒を加へたと云ふことであります。

それからして素行が赤穂に居りましたのは十年間。十年間ではありますけれども、正確に言へば滿十年にはなりませぬ。呼出になつたのが寛文六年十月三日。それから赦されたのが延寳三年六月十五日のことでありますからして、正確に言ふと九年未滿であります。マア足掛十年間謫遷されて居つたのであります。卽ち四十五歳から五十四歳迄であります。さうして赦されて後十一年間程江戸の淺草に居りましたが、後の十一年間は失意の境遇でありました。どうも赦されたとは云ふものゝ、以前の樣に事が旨く行きませぬので、甚だ面白くない十一年の星霜を送つて、到頭病歿することになりました。却て赤穂に居る際の方が宜かつた。赤穂に謫居して居る際には謫居とは云ふものゝ、却て素行の身に取つては宜かつたのであります。それから尙ほ考へて見れば赤穂に流される樣なことになつたのは、却て素行の一生涯に一つのあやを付けることになりましたので、ナカ〳〵面白いのであります。德川時代の儒者の生活は多くは單純なもので變化が少な

いのでありますが、素行の一生涯は爾く單純でない。ナカ〳〵あやが付いて變化があります。其變化を拵へ出したのは『聖教要錄』を著して、さうして幕府の爲に迫害を受けて赤穗に流されたと云ふことであります。此赤穗に流されたと云ふことは非常な災難のやうに聞えますが、さうでない。赤穗に往つて見ると赤穗の君臣共に大層素行を尊敬したのであります。其時の赤穗の城主は淺野長直と云ふ人で彼の吉良上野介を斬つた長矩の祖父に當ります。長直と云ふ人は餘程寛大なる心を持て居つた人と見えて大層素行を優待した。道を問ふの師となした。又藩侯がさう云ふ有樣でありますからして藩臣は尙更のこと。殊に大石一家と云ふものは大變に素行を優待して、朝夕の野菜を大石の家から送りました。素行は之を辭退したのだけれども、藩侯の命であると言つてどうしても聽かない。矢張り野菜を送つて食物の用に供したのであります。素行の赤穗に往つた際には大石良雄が

七八歳の時であつたから、素行から大した敎を受けると云ふことはなかつたけれども、素行は十年間居つたのでありますから、其間には大石良雄も十七八歳の年になつて居ります。後には無論敎育を受けたものと思はれます。さうして其の感化を受けたこと少くない。其事は後に御話することにして、少し素行の著述に就いて述べませう。

それから素行は赤穗謫居の際に、案外著述が出來て居ります。最も大切な著述が五つ六つ出來て居ります。江戸に居る時には諸大名が訪問したり又數千の門人が往來した爲に、ナカ〳〵繁忙でありましたらうが、赤穗に行きましてからは、さう云ふ一切の紛々たる關係を斷切つて、さうして十年間謫居したが矢張りヂットして居る人でないから却て不朽の事業をなした。著述も立派なものが出來。又門人の筆記も出來て居ります。其赤穗謫居中に出來た書物はどれ程と云ふとは能く分りませぬが、確かに五六種出來て居ると思ひます。其中に素行自筆の『謫居童問』と云ふものがあります。是れは野村子爵が持つて居

られます。去年天覽に供した、實に得難いものであります。我々が彼の宗參寺に於て始めて素行の法要を營みました際に、野村子爵が持つて來て佛前に供へられました。それから、武家事記が五十卷。是れは歷史でありましてナカ〳〵良い本であります。どう云ふ歷史かと云ふと、素行は日本の當時の學者と云ふものは支那の事ばかり研究して日本の事を研究しない――成程日本の事を研究しない儒者が多かつたのであります。そこで素行はさう云ふことばかりではいけないと云ふので、日本の歷史を研究して書き著はしたのが武家事記五十卷。大部の書であります。是れには史料として有益なる古文書が大分輯めてあります。今日に於て古文書研究上から言つても大切な物でありますがそれのみでない。是れは元と武士道の着眼點からして書いた者でありますから、唯日本の歷史と云ふのみでない。武士道の眼孔を以て拵へた日本の歷史であります。さうして當時の多くの儒者に出來ない事をやつて居ります。是れが謫居中の作と思はれるのは序文

の日附が延寶元年とあるからであります。素行の宥されたのは延寶三年でありますが、『武家事記』の序文が延寶元年とありますから、謫居中の作と云ふことは明かであります。それから日本の國體及び國政の要領を書いた『中朝事實』と云ふものがあります。それから「配所殘筆」。是れは勿論謫居時期の終りに拵へた者であります。さう云ふ樣な著述が段々あります。素行は斯樣に謫居中空しく時日を過して居らなかつた。ナカ〱其間には働いて居ります。學者として働いて居ります。教育に學問に素行が十分力を盡して居つたと云ふことは明かであります。素行の一生の事蹟は詳しく御話し申せば餘り長くなりますから、略、是位のことにしまして、是れより學系の事を御話して置きます。

素行の學問に付いてはナカ〱面白い點が多いのでありますから、今日時間の許す限りに於て御話を致したいと思ひますが、今の『中朝事實』と云ふ書物、此中朝と云ふのは即ち日本の事であります。此中朝と云ふ名を付けたのも當時の漢學者と大に趣を異にして居るのであり

ます。其頃の學者は支那を中國中華などと稱へて居ります。支那人が自分の國を中國中華と稱へるのは恕すべしとするも、日本の學者が支那を中國中華と稱へて居るのは甚だ宜しくない。倒逆したる考であると云ふので、素行は日本を中國中華と稱へた。即ち中朝も同じ譯であります　さう云ふ點に於て素行は決して他の儒者に附和雷同しない。大に考が違つて居ります。確乎として自ら信ずる所を貫いて居ります。さう云ふ事が餘程壯快であります。斯う云ふ次第で其學問に大に注意すべき點がありますから、是れから學系に付いて少しく御話を致しませう。

學系略圖

鈴木日向守重辰―山本勘介晴幸―早川彌三左衛門幸豐―小幡勘兵衛景憲―
北條安房守氏長―┬津輕信政
　　　　　　　　└松浦鎮信

- 山鹿素行
  - 山鹿興信―有澤永貞
  - 女……高美―(五世孫)高補―(六世孫)號素水
  - 女―津輕耕道軒
  - 山鹿高基
    - 稲葉源太夫
    - 勝沼惣右衛門
    - 吉田友之允重矩……吉田松陰
  - 淺野長矩
  - 大石良雄
  - 磯谷十介
  - 布施源兵衛―佐久間立齋
  - 高橋十郎左衛門
  - 大道寺友山
  - 味木立軒
  - 佐々木秀矩
  - 伊東重孝
  - 有澤永貞

玆に山鹿學系略圖と云ふものを拵へて來ました。是れも勿論話をする爲に拵へたので甚だ粗末なものでありますが、是れで一通り素行の學問の系統が分る積りであります。それでズツト系統を糺すと古い所は參州寺邊の城主鈴木日向守重辰。それから山本勘介晴幸、早川彌三左衛門幸豐、小幡勘兵衛景憲、北條安房守氏長、それから山鹿甚五左衛門と云ふ系統になつて居ります。是れは素行の直ぐ後の人が書いたものに出て居ります。それは先刻御話をしました。津輕の藩主津輕信政と平戸の藩主松浦鎭信は何れも素行の門人となり、其教を受けて之を實際に應用したのであります。それから彼の素行の養子となつた山鹿興信(又は政實)と云ふ人の著した書物に載つて居ります。是れから後は私が拵へて御話をするのです。是れは兵學の系統であります。此興信(初め高恒)と云ふ人には『武事提要』と云ふ武士道の著述があります。それに山鹿素行迄の系統が出て居つて、興信が山鹿素行の學問の系統を承繼いだと云ふことになつて居ります。山鹿高基と云ふ

人は著述が見當りませぬが、矢張り素行の學問を承繼いでさうして松浦侯に仕へました。詰り親の學問を承繼いだのであります。それから茲に五世の孫高美と云ふ人がある。此人にも武士道の著述があります。是は『美言殘涌』と云ふ者を著はしたので、矢張り祖先の學問を唱へたのであります。そこで此高補と云ふ人が高美の跡を繼いで興つて來ましたから、實は七世の孫であるけれども六世の孫として、高美の直接の系統を承繼いだのであります。此高補(號素水)と云ふ人は武士道の著述が數種あります。練兵説略抔と云ふ兵學に關する著述がありますが、此人が江戸に於て塾を開いて居つた時に吉田松陰が入塾をして學問をしたので、實は吉田松陰は素水の弟子なんであります。それで素水の著はした書物に吉田松陰が跋を書いて居ります。それを見ると松陰は大層素水を尊崇して居られますけれども、素水は松陰程學問は無かつた樣に思はれます。併し松陰は素水は素行の子孫であると云ふので、大に尊崇して跋などを書いて居られます。

此人の最も注意すべき事は始めて山鹿素行の『武教小學』と云ふものを發行しました。是れが山鹿流の大切な本であります。是れは寫本で傳はつて居つて、未だ世に公になつて居らなかつたのを出版したのであります。『武教小學』は武士道の經書の如きものであります。山鹿素行が何故此『武教小學』を著述したかと云ふと、朱子の書に小學と云ふのがある。あの小學では足らぬから、日本の精神を以て此朱子の小學を補はなければいかぬと云ふので『武教小學』を著した。それが世に版本となつて傳つて居らなかつたのは、素行が幕府の迫害を受けたからであります。久しく寫本で彼の家に傳つて居つたのを、素水が始めて出版したのであります。さう云ふ事が素行の學問の系統には大變關係があります。殊に吉田松陰が素水の塾に居つたと云ふことは大に注意すべき點であります。

それから此津輕耕道軒と云ふ人は素行の次女の鶴と云ふ婦人の子供で、卽ち素行の孫に當りますが、此人に『武治提要』と云ふ著述がありま

す。是れは武士道の精神を發揮した著述としては名作であります。此人には尙ほ其外數種の著述があります。

それから此高基と云ふのは是れは素行の一人息子でありますが、是れが松浦侯に仕へて、さうして彼の平戶藩に山鹿流の學問の系統を傳へました。彼處は明治維新の際迄ズット山鹿流で來て居つたのであります。此高基は段々調べて見ますと斯う云ふ事があります。一體山鹿素行が亡くなつた後高基が跡を繼いで、江戶に居つたのでありますが、なか〳〵盛大なことで、當時の諸大名で以て高基の門人になる者が多い。どうも普通の學者の有樣とは違ふ。そこでどうして山鹿父子と云ふものは民間の學者であつて、アンなに盛んであるかと言うて、當時の人が甚だ疑つたと云ふことであります。此高基は家學の極意を三人にほか傳へない。山鹿流では代々三人に極意を傳へることになつて居る。それであるから高基も祖先の學問を稻葉源太夫、勝沼惣右衛門、吉田友之允重矩の此三人に傳へたのであります。此吉田友之

允重矩と云ふのは、卽ち吉田松陰の祖先であります。此吉田松陰の事に付いてはモウ少し言はなければなりませぬが後で述べませう。

それから此處に大石良雄、磯谷十介とありますが、此磯谷十介と云ふ人は素行の學問に忠實な人であつた。此事は津輕耕道軒が山鹿誌の中に書いて居ります。此磯谷十介と云ふ人は素行の爲めに筆記したり編輯したり有らゆることに助力したと云ふことであります。

それから布施源兵衛と云ふ人は素行の弟子でありますけれども、事蹟は能く分りませぬ。其門人に佐久間立齋と云ふ兵學者があつた。それから高橋十郎左衛門の事は配所殘筆に載つて居ります。

それから大道寺友山。此人は何時頃素行に就いたか分りませぬけれども素行の門人と云ふことになつて居ります。さうして此人の著はした『武道初心集』を讀んで見ると、武士道の精神を傳へた功績は打消すことが出來ない。是れは能く出來て居る武士道の著述であります。其次に味木立軒と云ふ人がある。是れは安藝侯に仕へた兵學者であ

るが父儒者でもあつた。其事蹟は先哲叢談後編(卷之四)に出て居る。佐々木秀矩は小幡勘兵衞にも學んだ人で著述もあると云ふことである。義行は卽ち義昌で素行の弟である。伊東重孝は伊達騷動中に出て來る偉傑で、七十郞と稱するのである。それから有澤永貞は加州侯に仕へた有名な兵學者であります。

それから大石良雄は先刻も申上げましたやうに、素行が赤穗に居つた時にはまだ十七八歲位のことでありましたけれども、此の大石一家と云ふものは餘程善く素行を待遇したのであります。良雄の祖父の弟に當る大石賴母と云ふ人は朝夕の野菜を送りて、素行を優遇したのです。それで良雄も幼少ながら素行を尊敬して、素行の感化を受けたのであります。

淺野長矩は弟の大學と共に素行の歿する一年前に素行に入門したのである。大石良雄は彼の素行の武士道の精神を實際に發揮したのであります。あれは當時の儒者も往々さう言うて居ります。物徂徠

であるとか太宰春臺であるとか云ふ人が、大石良雄の復讐と云ふ者は全く山鹿流の兵法の應用であると言うて居りますが、今日から見てもそれに違ひない。大石良雄の復讐と云ふものは尋常の復讐でない。非常に綿密であつて遺算なく計畫された復讐である。さうして復讐を計畫してから愈、實行するまでには、殆ど五ヶ月を經て居るにも拘はらず、少しもそれが漏れないやうにした。幾らか一時疑があつたやうであるけれども、其疑を撲滅するために色々詭計を運らし、手段を講じて、遂に一擧して吉良上野介の邸宅を襲うて復讐を成し遂げた。父復讐を成し遂げた跡始末も總て遺算なくやり遂げた。斯樣に尋常の仇討とは餘程違つて、始めから終りまで思慮分別に於て毫も缺くるところのないやうにやつたのは、素行の兵法の應用で是れが山鹿流の長處と見るべき所であります。復讐と云ふことはどうも一度やり損ふと一生の遺憾となるからして、復讐をやるまでには十分準備をして、少しも遺算の無いやうにやらなければならぬと云ふ教を餘程綿密に說い

て居ります。さう云ふ事を大石良雄が實行したのであります。所が世の中の人は赤穂の義士の復讐と云ふことはよく知つて居るけれども、其教の因つて來たるところを知らない。忠臣藏などゝ言囃して居つて、どうしてアヽ云ふ事が起つたかと云ふことを度外視して居る。けれども、アヽ云ふ事は偶然に起るものでない。ナカ〳〵思慮分別をして而して後行つたのである。それには何か本がなければならぬ。果して本がある。卽ち素行が十年間赤穂に於て敎育をして置いた結果が、彼の赤穂の義士の壯烈なる事蹟となつたのであります。君辱しめられ國亡ぶと云ふ場合にはどう云ふ態度を執るべきか、其決斷を下す本がなければならぬ。其本は素行が作つて置いたので、大石良雄が非常の際に當つてどう云ふ手段を執るか、どう云ふ決心を爲すかと云ふに付いては、チヤント其動機となる丈の本が出來て居つたのであります。固より始めから復讐を圖らうとは思はなかつたのである。始めは成るべく主家の跡の立つやうに、卽ち淺野長矩の弟に長廣(通稱は

大學」と云ふ人があるから、それを跡に立てゝ淺野家の祭の廢らぬやうにしやうと計畫したけれども、それがどうしても出來ない。そこで徒らに死んでしまふと云ふことは愚だから、寧ろ復讐を圖つて長矩の當の敵たる吉良上野介の首を斬つて、さうして泉岳寺の君侯の墓に捧げて死なう。斯う云ふ決心をしたのであります。兎に角大石良雄は赤穗の重臣であつたからして、始めから他の人とは違つて主動者の態度を執つたのであります。大石良雄は少し沈默した風變の人であつたと見える。餘り長矩侯には信任せられなかつたやうでありますけれども、なか〳〵尋常の人でなかつた。そこで其復讐のやり方が非常な目覺ましいことになつて、さうして德川氏三百年の泰平の世に於て、武士道の精神を餘程鼓舞したのであります。さうして其因つて來たるところは素行の敎にある。精神上の事に關しては思想の系統が必ずあるものであります。

是れから吉田松陰の事を少し御話して置きたい。吉田松陰の學問

は素行の系統に屬するのであります。松陰は嘗て江戸に來て山鹿素水の塾に居つたことがあります。又平戸に往つて山鹿氏に入門したのであります。素行の實子山鹿高基、それから素行の弟の義昌、是れが平戸に仕へて居つたので其子孫が平戸にあります。それで松陰が平戸に往つて山鹿氏に入門した。其時の山鹿氏は高基の子孫で山鹿岩泉と云ふ人であります。此人は當時彼の地方では有名な兵學者でえらい構へをして居つたさうであります。それで入門を請ふ者があつてもナカ〳〵容易に許されなかつたさうです。ところが松陰は熱心の結果入門して居ります。玆に願書がありますからそれを讀んで見ませう。此願書の原物が史科編纂掛の所に來て居りますが、それを持つて來ることが出來ませぬから寫を持つて來ました。

山鹿家の支流を汲もの長陽吉田矩方竊に先生を奉歆慕百里門下に來拜仕候旨趣は矩方が遠祖は浪人衆にて和漢流の兵學を唱罷在候處元祖友之允と申ものに至り藩の兵學師に召出され君命にても候

哉東武え上り藤介先生諱高基に從ひ武教全書一部且城築秘事七條侍用武事秘事四條並大星傳三重傳其他附屬の書數部迄傳り歸り藩中にて其傳を廣め候由爾後箕裘の業追々精研仕べく之處不幸にして早世打續き僅々百年の間世次七八をも經報本之禮曠して對續に愧るのみならず流儀授受も書のみ殘り何共無覺束殊に矩方甫六歳にて父を喪ひ父執之行なる流儀に老たる人に便り相學候得とも稟性陋劣不才未得其要領聞聽度あるも徴を取る所無之是に於て執事之門下に遊び大に本源を究度存付候間其任に堪ざるながらも本分の職逃るゝに所なく遠く元祖の業を繼度微志に候間伏祈執事藤介先生之意に體認被爲在下學矩方如きもの忝も其道を親むべからしめ給はゝ矩方感佩如何ぞ哉伏て下情を左右に布く

吉田矩方頓首再拜敬白

山鹿萬介先生

執事

是れは代々萬助と云ひます。高基の先祖は千助と云ひましたが、千助が後に萬助と變りました。そこで吉田松陰が願書を出して入門を許された時の血判をしてある起請文が大學の方に來て居ります。其寫が此處にありますから是れも讀んで見ませう。

起請文前書之事

一山本勘介流兵學並城築繩張一切御相傳之趣他言仕間敷候事

附御傳書以他筆寫候者以誓詞可申付候事

一右之通公用之節於戰場者可爲格別候事

一兵法御相傳相極雖爲御免許以後先師御相傳之趣令違背立自流申間敷候並大事秘事御相傳之儀雖爲相弟子其品御傳授無之方え者申談間敷候事

附及末期候者御傳書等可致進候其段難叶候者燒失可申候事

右之趣於相背者

日本國中大小神祇摩利支尊天八幡宮並自分崇敬之神罰可罷蒙者

也仍而起請文如件

嘉永三庚戌年九月廿二日　　吉田大次郎

矩方（花押）

山鹿萬助殿

斯う云ふ嚴しい誓を立てゝ始めて此平戸に居る高基の子孫山鹿巖泉の家に入門をしました。それで松陰は二重に山鹿流の系統に接して居る次第であります。即ち江戸に於ては素水の塾に入り、平戸に於ては巖泉の塾に入つて居ります。斯樣に東西兩方の系統を引いて居ります。實は此處に系圖を持つて來て居りますけれども、讀む間がありませぬが高基の子孫の系圖は今日迄のがあります。素行から今の山鹿高三氏に至るまで丁度十三代になります。松陰は曾て佐久間象山に學んだことがありますが、素行の關係の方が一層多いやうであります。松陰の書いた本を見ますると佐久間象山のことを吾師と云ひ、素行のことを先師と云ふて居ります。松陰は『武教講錄』と云ふ書物を

著して居りますが、之れを見ると素行の『武教小學』の講義であります。彼の萩の松下村塾には今に素行の書物が色々遺つて居ります。山鹿流の學問を講ずることを許されて松陰が松下村塾で敎へたのが僅に二年半程でありますが、此松下村塾の敎育が明治の文明に、大關係を及ぼすことになつて來たのであります。所が其の學問の因て來たるところを考へて見まするると云ふと素行に淵源して居るのであります。そこで素行の學問の系統は、一方に於ては大石良雄の如き人物を經て、赤穗の義士の事件となつて德川時代の人心に深大なる影響を及ぼし、一方に於ては吉田松陰の如き人物を經て遠く明治の新文明に影響する所があつて、ナカ〳〵其關係の廣く且つ大なるところが見えるのであります。

そこで此素行の學問を研究するに當つて感ずるところは、素行は當時の學者が支那にかぶれて支那を專ら崇拜して居る時に、それだけではいかぬ。日本民族として自主獨立の精神が無くてはならぬと云ふ

ので、それを土臺にして色々書き著はして來ましたが、其著述と云ふものはナカ〳〵澤山あります。私が先年素行の著述の卷數を算へて見ましたが凡そ六百卷程ありました。ところが其後段々平戸の方から出て來る書物が何卷かあるので、實は六百卷以上になるのであります。さうして內容は、隨分多方面に亘つて居ります。或物は純然たる歷史に關係がある。或物は神道、或物は兵學、或物は武士道、或物は經學に關係がある。私は兵學の方は分りませぬから乃木大將などに尋ねて見ましたところが、兵學に於てもナカ〳〵良い所があると云ふことを承りました。武士道の側などに於ては確に良いものがあります。

今日此祭典に當つて感ずるところは、さう云ふ良い物の傳つて居るのを空しくしないで、矢張り研究して西洋の良い物と調和して往つたならば其効果は偉大であらうと思ひます。當時の學問の良い所は矢張り神儒佛の學問の神髓を採りて、打つて一丸となして、出て來たところにある。此武士道と云ふものは矢張り神儒佛に關係があります。

神道を離れては武士道を說くことが出來ない。それから佛教は重に禪です。禪に限らぬけれ共禪に最も關係して居ります。それから儒教の關係が大變あります。武士道は神儒佛に大に關係して居るのであります。中には武士道を說く人に神道を主として說く人がある、又儒教を主として說く人がある。又禪を主として說く人がある。彼の山岡鐵舟翁並に其一派の人などは、禪を主として說いて居ります。色々になつて居りますが、先づ神儒佛の良いところが調和して、武士道の教義の基礎を成して居ります。それに似た事が他方面にもあります。例へば二宮尊德翁の說いた農業の教も、矢張神儒佛の三教が基礎となつて、一種の農業道が出來たのである。ナカ〱棄てられぬ所があります。又此商業道も神儒佛の教を基礎として說いたのが、德川時代の末に行はれた。即ち心學道話であります。武士道の側は矢張其時まで得られるだけ神儒佛の教の粹を採つて出來たのでありますが、其中には日本民族の一貫したる精神があつて、之を基礎として之が營養分

として神儒佛の粹を拔いて來たのであります。日本の根本的精神を無くなせば武士道は無い。一體日本民族の發達上から考へて見れば、其他民族と違ふ點は其處にあるのである。神功皇后の時代には文字と云ふものはまだ無かつた。けれども三韓を征伐するに足る丈の武勇があつてナカ〱盛んであつた。應仁帝の時から支那の文明が入り、欽明帝の時から印度文明が入つて來て、營養分となつて、日本民族の精神的發展を裨補したのであります。然るに維新以後に至つて更に之に加ふるに西洋の思想を以てして、一層大なる營養分を採つて發展して來たのでありますが、其發展すべき土臺は何かと云へば、日本民族の精神であります。縱令ひ外國の色々な文明の利器を利用しても、それを運用する精神は日本民族の精神でなくてはならぬ。如何程立派な器械があつてもそれを支那人に持たせたならば大した事も出來ない。日本民族の偉大なる發展を爲す基礎は、日本民族の貫いて來た數千年來の精神にあるのである。それが偉大なる發展をしやうと云ふ

には有らゆる營養分を採つて來なければならぬ。維新以前には神儒佛の營養分を採つて來たけれども、維新以來は西洋文明の營養分を採つて來た。それを運用するものは我々日本民族の精神である。自主獨立の民族的精神が無ければならぬ。ところが明治以來社會現象の複雜なる、動もすればそれを忘れる傾があります。此時に當つて山鹿素行先生を祭ると云ふことは大に意味の有ることで、又此意味を忘れてはならぬと考へます。（明治四十一年贈位先哲祝典大會講演）

第三　山鹿素行先生と乃木大將

今日は例年の如くに山鹿素行先生の丁度命日に當りますからして、法會を營むことになつて居りまして、實は大抵この二十六日には乃木大將も御見えになりましたのでありますが、本年は斯う云ふことになりまして、暫くの間に甚しき變化を感ずるやうな次第であります。實はさう云ふことでありましたから、素行先生の法會を營むと同時に乃木大將の追悼會を兼ねると云ふことになりまして、今日斯う云ふ會が開かれました。この雨天に拘らず、殊に途の非常に惡いのに拘らず、多人數御出になりましたことは深く感謝を致す所であります。就きましては、此の素行會のことでありますからして、素行會の起つて來たことと竝に乃木大將の素行先生の學問に關係のありました點を少し御話して置くことは無駄でなからうと思ひます。尤も素行會の方々は斯う云ふことはよく御存じでありますけれども、今日初めて御見えに

になつた方も隨分多人數であらうと思ひますから、少しく是れまでの關係を御話して、さうして乃木大將に對する所感を述べるが順序であらうと思ひます。

一體素行先生の法會を營むのは明治三十九年の六月六日が初めであります。どうして其の時法會を營みましたかと云ふと、先刻御見えになつて居りましたが唯今御歸りになりました柳谷謙太郎と云ふ方が、豫て私の著しました「日本古學派之哲學」を讀んで山鹿素行が武士道の發展に多大の貢獻をなしたことを感じて居られましたから、日露戰爭後私の所に斯う云ふことを申込まれました。日露戰爭は非常な大戰爭でありましたけれども、幸にして日本が勝利を得ました。是れには固より色々な原因があることであつて、明治天皇の御稜威竝に出征軍人の目覺ましき働等が直接の原因でありますけれども、德川時代以來傳つて來て居つた武士道の精神と云ふものも此の戰勝には多大の關係が有るであらう。是れは內外人も等しく認むる所であります。

尤も武士道は何も德川時代に始めて起つたものではない、建國以來次第に發展して來たものであります。併ながら德川時代に至つて武士道が始めて敎育的となつた。それを始めて本統に敎育的にして、多く著述などをして世に擴げるやうに基礎を築上げたのは山鹿素行先生であります。柳谷謙太郎さんが、此の武士道の精神の今日まで旺盛であると云ふのは隨分山鹿素行先生の力の與つて居ることであらう。所が山鹿素行先生の墓は宗參寺卽ち此の寺の裏にありますが、どうやら子孫の方々も一向其の墓に御參りにならんやうである。ソコで自ら資を投じて此の宗參寺に於て素行先生の爲に法會を營みたいから贊成して吳れと云ふことであつたから、私もそれは大變善いことであります から無論贊成をします。どうか一つ始めたいものでありますと言つて段々話が進みまして法會を營むことになりましたのであります。就きましては私は豫々野村子爵と乃木大將が山鹿素行先生に對しては尊敬の念を懷いて居られたことを知つて居りましたから、そ

れを兩君にもどうかして知らせたいものである、何とかして知らせたならば此兩君は必ず贊成なさると思ふから知らせることにしたいと申しますと、柳谷さんは直接兩君を知らぬと云ふことでありました。其の後私からでは無かつたのでありますが、他の方面から此の兩君に知らせまして、兩君も大いに贊成されました。それから其の他の素行先生を豫々尊信して居られる方も一緒になりまして明治三十九年六月六日に此の寺に於いて山鹿素行先生の爲に法會を營み、一同墓前に參拜を致したのであります。所が其の時は此處に見えた方々は誰々であつたか、一々記憶しませぬが故子爵野村靖君は確に見えて居りました。それから故稻垣滿次郎君も見えて居りました。それから其の朝早く乃木大將は單騎山鹿素行先生の墓に詣られたと云ふことを聞きました。それで法會の時は見え無かつたのであります。其の他どう云ふ方々が御出であつたか記憶に存しませぬが、何でも數十人此處に集りまして法會を營んで無事に終りました。それから同じ三十九

年の九月二十六日に法會を營みました。それは同じ年でありますけれども、九月二十六日は素行先生の命日に當るから其の日を撰んで、明治三十九年から毎年法會を營むことを始めたのであります。其時も誰々が御見えになつたか、どうもはつきり覺えませぬが、多分乃木大將は御見えになつたであらうと思ひます。乃木大將は公務上か何か餘儀ない御差支でも無ければ、法會を營む際には大抵列席されました。故野村子爵も大抵列席されました。兩君共なか〳〵御熱心でありましたことは素行會の人々の能く御存じのことであります。それから其の翌年に至つて素行先生の著書だとか、遺物だとか云ふものを約十種ばかり天覽に供したことがあります。さうして又其の後素行先生に御贈位の御沙汰がありまして、正四位に御贈位になりました。それから其の後明治四十一年十二月に至つて素行會が愈々組織されまして、松浦伯爵が會長になられました。是れは山鹿素行先生の實子の山鹿藤助を初めとして藤助の子孫が松浦家に仕へました爲に、其の緣故

を以て松浦伯爵に會頭を御願を申して素行會が組織されました次第であります。それから素行會は段々此の素行先生の著書を出版しまして、さうして此の武士道の精神を社會に普及させようと云ふのであります。是れまで出版した書籍の數はまだ僅かでありますけれども、既に『山鹿語類』だの『孫子諺義』などゝ云ふものが出版になつて居ります。『孫子諺義』のことも一寸御話して置いた方が宜からうと思ひます。孫子の註は古來澤山あるのであります。けれども大抵世の儒者の註解でありまして、孫子の文意を了解するにはそれで澤山でありますけれども、孫子は兵法の書でありますから、兵學者が兵學者の眼を以て、之を註解することが必要であります。所が山鹿素行先生は兵學者である。丁度此の孫子の註解をするに適した人であります。所が此の『孫子諺義』なる山鹿素行先生の著書は是れまで寫本で傳つて居りまして、一向世間に知られて居らなかつたのであります。山鹿流の學問をする人には知られて居つたらうが、どうも一般には殆ど埋沒されたやうな事

になつて傳つて來て居ります。それに乃木大將も題字を書かれて出版になつて居ります。尤も吉田松陰も『孫評子註』と云ふのがあります。是れは從來版本があることはあつたけれども、乃木大將が松陰筆蹟の原本を其儘石版にされました。是れも大層珍しい本であります。但し『孫子評註』の方は賣本にはない。『孫子諺義』は素行會にて出版したものであるが今は素行會の許可を得て民友社より再版して廣く販賣して居ります。さう云ふ風に素行會は素行先生の著書を出版することになつて居ります。是れから次第に出版しようと云ふ計畫であります。何分素行先生の著書の數は非常に多うございます。是れまで印刷になつたものは十の一位でありませう。曾て印刷になつたものは德川氏の時に滅版されて仕舞つた。『聖教要錄』などは一旦版にされたが絕版された。『中朝事實』も多分滅版されたのでありませう。是れも多くは寫本で傳つて居つて、立派な版本は傳らぬ。全く傳はらぬことはないが、僅かほか無いものであります。今は乃木大將の版にされた

のもあり、其の外にもあるが、長らく寫本で傳へられた。さう云ふ譯であります。版本が誠に少い。さうして善い著述はまだ外に幾らもありますから、素行會はそれ等を次第に版にしようと云ふ目的を持つて居ります。乃木大將は故野村子爵と同じく、素行會には非常に同情を寄せて居られましたから、毎囘大抵出席されたのであります。それから素行會を離れても乃木大將がどれほど素行先生の學術に對して興味を抱いて居られたかと云ふことは、多少私の知つて居る所でありますから、諸君の御參考までに御話して置かうと思ひます。是れは少しく私の事に涉る嫌ひもありますけれども、御話しませぬと分かりませぬが、抑も始めて私が乃木大將と知合になりましたのは、やはり山鹿素行先生のことからであります。それは明治三十四年の春であつたかと思ひます。月は忘れましたが確に明治三十四年の事であります。乃木大將は突然吉田庫三君と共に私の宅に訪問されました。さうして御禮に上りましたと云ふことを言はれました。所が、御禮に上りま

したと云ふのは何の爲であるか一向分かりませぬから、段々御話をして居りました所が事情が分かりました。それは丁度明治三十四年に中央幼年學校からして、私に武士道のことに付いて一場の講演をして呉れと云ふ御依賴がありました。それからして私は豫て少しく調べて居ることがありましたから承諾を致しまして、中央幼年學校に行つて講演を致しました。所が速記者がそれをすつから速記をして居りまして、後でそれを版にして差支へないかと云ふことでありましたから、一向差支へありませぬと申しましたので兵事雜誌社から『武士道』と題してそれを出版したのであります。どうも乃木大將はそれを御讀みになつたものと察せらるゝのであります。其の『武士道』の講演の中には武士道全體の事が論じてありますけれども、殊に山鹿素行先生のことを大いに力說いたしまして且つ吉田松陰が其の系統の人で、幕末に大いに此の士氣を鼓舞されたことを述べて置きました。ソこで乃木大將が吉田松陰の後繼者となつて居らるゝ吉田庫三君を連れて見

えました。さうして是れが松陰の後繼者である吉田庫三であると言つて紹介された。其の意味を考へて見ると、私が山鹿素行先生のことを紹介し且つ吉田松陰の山鹿素行に關係のあることを申しましたからして其御禮に見えたのであります。一體乃木大將は非常な謙遜な方でありまして、普通の者ならば我々の所に御禮などに見えることは決して無からうと思ふのであります。所が其の山鹿素行先生並に吉田松陰のことを紹介したと云ふことを深く感ぜられたと見えて、態々御禮に見えました。其所で初めて知合ひになりました。乃木大將の御考が平生どう云ふ所にあつたかと云ふことは、私は屢〻大將と學問上の話をしましたから略〻知つて居る積りであります。私より精しい方があるか知らぬが、私は其の機會が特に多かつた。私は乃木大將が學習院長にならるゝ前からして學習院の方に毎週一回程參いることになつて居りました。學習院の男子の方は抑も修身科の設けられて以來今日まで行つて居ります。女學部の方は專修科が設けられて以來

專修科の方に毎週一回講話をする爲に參つて居ります。そこで學習院の方に毎週一回參いりますからして、參いりますれば必ず乃木大將と會ふ。私が講義をしますときは乃木大將は必ず敎場に立つて居られます。二時間講義をした時は二時間始終敎場に立つて居られました。それで其の講義をしまする前と終りには話が始終あります。講義が終りますれば直ぐ女學部の方に參いりますから餘り話することも出來ませぬが、其の前には必ず豫定の時間より十分なり十五分なり早く參いりますから、早ければ早い程其の間何時でも話をして居ります。其の事柄は敎育のことゝか學問のことゝかであります。それで機會が多かつたのでありますから乃木大將の御考が斯云ふ所にあつたと云ふ晩年精神上の傾向に付いては聊か了解して居る積りであります。それに私は折々乃木大將の御參考になるやうな書物を見せました。すると乃木大將は必ず私の所に御自身で書物を返へしに御出でになる。書生も居たやうでありましたが、決してさう云ふ者を御寄越しに

なりませぬ。馬に乘つて副官を連れて御自身で書物を御返へしになる。人力車にて御出でになつたこともありましたけれ共、大抵は騎馬でありました。さうすると又お歸りに何か書物をお貸し申すこともありましたが多くは日本の武士道の書物か、國體の書物か、神道の書物か、さう云ふ書物が御好でありましたから、主にさう云ふ書物を御貸し申した。さう云ふ場合には餘りお氣に入らぬ書物は默つて御返へしになる。餘程面白く感ぜられたのは多少批評を加へて意見を御述べになることがありました。それで乃木大將の考は斯う云ふ所にあつたと云ふことが大分分かるのであります。どうも乃木大將は是れと云ふ纒つた著述は無いやうであります。新聞には國民の元氣精華と云ふものが一部あると云ふことでありますが、どうも本統で無いらしい。又世間で『乃木大將修養訓』と題した書物を發行した者があつて新聞に其廣告が出て居りましたから、あれは貴方の著述でありますかと云つて尋ねた所が、然うでない、實はあれは非常に迷惑して居る。或る

人が自分の話や何か新聞雜誌に現はれたものを集めて來て見て呉れと言つたから、見た所が自分の考でも何でもないものが大分出て居る。さう云ふものは消して返へしてやつた。所があゝ云ふ廣告が出て居る。と云つて大いに迷惑されて居つたのである。それで「乃木大將修養訓」には乃木大將の話が這入つて居るには相違ないが、大將自身に編纂されたものでない。自身で編纂された著述は何もないであらうと思ふ。どうも纏つた著述はないけれども、併し自分の意に適した古人の書物を印刷されました。それが著述に代る。乃木大將は自分で經費を出して、さう云ふ書物を或は活版にしたり、或は石版にしたりして知友に寄贈されました。それが何百部であつたか部數は分りませぬ。是れはもう今日では貴い本で、後世「乃木本」と稱して人が尊重するに相違ない。所が其「乃木本」が已に坊間に賣本になつて居るのであつて、或人がそれを買つて來ました。乃木大將が誰某に進呈すると云ふ字がちやんと書いてある。どうも乃木大將がさう大事に印刷にして贈ら

れたのを古本屋に賣つたと云ふのは宜しくない。名が分かつて居りますけれども申しますまい。其の爲に餘り人を傷付けてはなりませぬが、甚だ宜しくないことである。さう云ふ古本は貴い。「乃木本」として是れから先は餘程人が尊重するに相違ない。中には斯う云ふのがある。乃木大將御自身にすつかり寫してそれを石版にしてある。それは三宅觀瀾の『中興鑑言』である。初め『中興鑑言』を見せたら非常に喜ばれて、又他の方から異本を借りてそれと對照して研究されたところが、私の本には跋がない、外の本には跋があるから、其の跋を添へて自分ですつかり寫して石版にして、其の終りに源希典（マレスケ）手づから寫すと書いてある。希典（キテン）と音で讀むのでない。或る時貴方の御名は何と言ふのですかと聞くと、希典（マレスケ）と仰つた。私は確に聞いて居ります。新聞にはよく「キテン」と書いてあるがあれは直接乃木大將から聞いたのでありますから確かであります。それで御承知でありませうが、乃木大將の書は謹嚴な文字であるから是れは實に貴い本である。『中興鑑言』は國

體を論じた書物であつて、栗山潜鋒の『保建大記』と相竝んで水戸の國體の書として大事な書物でありますが、栗山潜鋒の『保建大記』は既に御存じで其の前に御讀になつたことがある。それで私は見せませぬが『中興鑑言』の方を見せました所がそれが餘程お氣に入りました。私が或る時『中興鑑言』は餘り面白くないと冷評した所が、ナニさうでない、『中興鑑言』は斯う云ふ所が善いと言つて論じて居られました。其外乃木大將が自分で寫して版になされたのは彼の『中朝事實』の跋文附錄でありますか。『中朝事實』は固より誰れも能く知つて居るが、それに跋文附錄と云ふ者のあることを知らなかつた。所が數年前平戸の方から跋文附錄が來たので、始めてさう云ふ本のあることを知りました。乃木大將は手づからそれを寫して、石版刷にして知友に配ばられました。本文の『中朝事實』は立派な活版であります。活版にされて、知友に寄贈されましたが、貰つた人がどうも餘り讀まなかつたやうである。それで此の方は旨く行かぬと云つて居られた。『中朝事實』は漢文で無點で句讀

も何も切つてない。今の人は能う讀切らぬものであるから貰つても置いた切りで讀まない。漢學の素養のある者ならばそれで讀みますけれども、今の人は漢學の素養が乏しいから、折角貰つても讀めないから放つて置く。それでどうも困ると言つて零ぼして居られたのを聞いて居ります。併し是れも大變貴い本であります。元來此の『中朝事實』は山鹿素行先生の著述の中でも大事な書物で、乃木大將の金科玉條であります。それで新聞を讀みますと乃木大將の亡くなられます三日前、卽ち九月十日に皇太子殿下に、自分で版にされた『中朝事實』を獻上されたと云ふことが見えて居ります。是れは我が乃木大將の平素の考を知つて居る者から見れば、さうあるべきであると思ふ。是れは大事な國體及び政治の要領を說いた書物であります。一體『中朝事實』は標題からして當時の他の儒者と考が違つて居る。千萬群儒と大いに見解を異にした標題である。中朝とは日本のことを申します。其の頃の儒者は支那のことを中國、中華、と云ふやうなことを申して居つた。

けれども山鹿素行先生の考ではそれはいかぬ。支那人が支那のことを中國、中華と言ふならば聞えるが、日本人が支那を中國中華と云ふのは聞えない、日本人に取つては日本が中華中國である。その序文にもさう論じてある。中朝は中華中國と云ふのと同じで日本のことを申したのであります。日本の神代からの國體及び國體を基礎とした政治の大要を論じた書物でありまして山鹿素行先生の著述中白眉である。外にも善い著述がありますけれども、文字の整頓し、義理の徹底した點から見れば、立派な著述と言つて差支ない。固より今日になりますれば國法學であるとか、行政學であるとか、社會學であるとか色々新しい學術の立場から國體だの政治のことは講究されるのでありますけれども、當時の書物としてはなか〳〵立派な書物であります。それで乃木大將は『中朝事實』の外『武教小學』と『武教本論』を活版にされました。是れは一緒になつて居ります。嘗て素行自筆の『配所殘筆』が平戸の方から來ました所が乃木大將がそれをスッカリ石版にされました。

夫から其の外吉田松陰の著述の中では『武教講錄』を活版にされました。是れは『武教小學』の講義であります。是れは武士道の研究上なか〳〵大事なものであります。さう云ふやうな本をまだ二三其の外に版にされました。例へば松代藩の長谷川昭道の著はした『九經談總論評說』と云ふのを活版にされました。標題丈けでは何だか經學の事を論じたやうでありますが。實は大いに國體のことを論じてあるから之を活版にして知友に配ばられました。それから紀維貞の『國基』と云ふものを活版にされました。是れは私が見せました。内に版本がありましたから、或る時乃木大將に見せました所が大に氣に入りました。是れは元と京都に學習院の出來たときに紀維貞が漢文で書いたもので、此の本は國體のことを論じたものであります。是れも活版にして知友に配ばられました。且つ『國基題詠集』と云ふものを何處からか探し出された。『國基題詠集』と云ふのは、國基と云ふ著述に付いて色々批評した歌、詩などが澤山あります。それ等を集めて一冊にして『國基題詠

集」と云ふのであります。それを乃木大將が斯う云ふ本があると言つて御見せになつたことがあります。それから又斯う云ふことがあります。乃木大將は一昨年でありましたか耳の病氣を爲されて數ヶ月間赤十字病院に入院されて靜養された。其の後御承知の通り英國の戴冠式に赴かれた。それから御歸朝になりましたけれども、病後は私も餘り色々書見を爲さつてはどうかと思うて書物をお貸し申すことを控目にしました。所が近來は壯健になられたやうでありましたからもう宜からうと思うて安積澹泊の「大日本史論贊」と云ふ本を見せました。私の宅にありましたのは寫本でありましたが、それを見せた所が大變氣に入りました。段々それを研究されて、他の方面から又異本を借りて較べて、幾らか違つた所もあると云ふ御話もありました。それから是れは版にしたいと思ふと云ふ御話でありましたからそれは宜しうございませうと言つて贊成しました。是れは版に爲さる計畫でつたらしい。大分進んで居りましたが、今回の如きことがあつて、そ

れはとう〳〵版にならずして終りましたけれども、今少し存命でありましたならば必ず版に爲されたであらうと思ふ。さう云ふ譯けでありまして、色々山鹿素行、吉田松陰、其他水戸の學者などの著書中で自分の氣に入つたものを、自ら資を投じて版にして知友に配ばられました。是等は著書ではないが、著書に代る。是等の書物を見れば乃木大將の御考がどう云ふ所にあつたかと云ふことが略ゝ解かるのであります。

乃木大將も故野村子爵も熱心なる吉田松陰の崇拜者であつた。野村子爵は松下村塾に居つて直接學んだ人でありましたから松陰崇拜者であるのは言ふまでもない。乃木大將は直接松陰に御學びにはならなかつた。或る新聞には乃木大將が直接松陰に學ばれた樣に書いてあるが、私は乃木大將から聞きました。松陰に御學びになりましたかと聞くと、直接には習らはぬ。玉木文之進から習つたと仰つた。乃木大將の若い時のことは存じませぬが、今度色々新聞に若い時のことが出て居るが、十八歳の時に玉木文之進の所に預けられた。さうして

玉木文之進に就いて御學びになつたと云ふことが見えて居る。直接聞いたことゝ合つて居る。玉木文之進は松陰の伯父であつて、やはり學者であります。さうして山鹿素行を崇拜して居た。今度新聞に精しいことを話して居る人があるが、乃木大將の父に當る方、乃木十郎希次も山鹿素行崇拜であつた、と云ふことが出て居る。果してさうであつたとすれば乃木大將が山鹿素行先生に對する尊信の念を起されたと云ふのは、其の父に當れる方からも來て居るし、先生になられた玉木文之進からも來て居る。又最も尊信された吉田松陰からも來て居る。どうも色々な方面に此の關係がある。それで松下村塾に於いて松陰に直接學ばれなかつたのでありますけれ共、乃木大將は多大に松陰の感化を受けて居られたことは疑はれぬ。總て精神的の方面に於いては、素行先生と吉田松陰の感化が多大である。さうして乃木大將の最後は松陰の最後と稍、髣髴たる所がある。勿論仕方は違ふが、やはり何處やら類似した點が確に見えて居ります。豫て吉田松陰を非常に尊

崇して居られたことは、數年前吉田松陰の五十年祭を東京高等商業學校に於いて營んだことがある。是れは江木千之君から私に眞先に御話がありました。吉田松陰歿後五十年に當るから何とか東京に於いて祭典を營みたいと云ふことでありましたから、私が帝國敎育會長の、辻新次男に帝國敎育會で催ふしたら何うですかと申しました處辻男も承諾されまして到頭彼處で松陰先生の五十年祭を營むことになりました。其時數人代る〳〵松陰のことに付いて演說を致しました。所が斯かる場合でありますから是非乃木大將に一場の演說をなさるゝやうにお願致しましたが、演說は嫌ひである。乃木大將は公開の講演をなされたことは殆ど無からう。非常に嫌ひであつた。併し吉田松陰の五十年祭であるから出席すると云ふことになりまして、演壇に御立ちになつたが松陰の士規七則を朗讀なされて、後で數言附加へられたのみである。一體松陰の士規七則は餘程よく出來て居る。其の頃の人の坐右銘として實に立派な者と思ひますが、乃木大將は五十年

祭の時に斯う云ふことを御話になりました。實は自分は松陰自筆の士規七則を所持して居つたので、平生肌身を離さずそれを持つて居つた。所が惜しいことには、十年の戰爭中に失つた。惜しいことをした。それで其後は自分で寫して今でもそれを大事にして居ると云ふことでありました。それで吉田松陰の一體の教訓並に行動は乃木大將の餘程手本と爲された所でありますが、士規七則の如きは最も大事に爲されて、肌身を離さずお守のやうにして持つて居ると云ふ趣意を其時に述べられた。さう云ふ次第であります。松陰のことに付いては折々話をした事があります。松陰の書物はなか〳〵よく讀んで居られましたやうに思ひます。それから此の吉田松陰を尊信しますれば必ず山鹿素行を尊信する。何故かならば吉田松陰の學問は山鹿素行に淵源して居る。〻松下村塾に行つて見ますと、彼處にちやんと文庫が出來て居りまして、吉田松陰の著書及び手澤本は大抵皆其處に陳列してあるが、山鹿素行の著述もあります。殊に松陰が素行の著書に手を入

れたものが其所に置いてある。吉田松陰と山鹿素行の關係は非常に親密なものである。是れは間接でありますけれども直接素行に就いて學ばれたも同様である。山鹿素行の實子を藤助と申しますが、山鹿藤助の門人に吉田松陰の祖先があつた。一體山鹿流では三重傳と云ふことがあつて兵學の極意は三人以上に傳へることはならぬと云ふことになつて居つた。素行の三重傳に與つた一人は素行の實子の藤助であります。山鹿藤助の三重傳に與つた一人は吉田松陰の祖先、吉田友之允重矩であります。それから段々引續いて吉田松陰まで行つて居る。それで吉田松陰の祖先が山鹿流の學問をした。吉田松陰は始終家學と云ふことを言つて居る。家學と云ふのは山鹿素行の學問のことであります。『武教講錄』などの中に、先師と書いてあるのは山鹿素行のことでまります。時々吾師と云ふこともあります。是れは佐久間象山のことであります。吉田松陰は尙ほ其の時代に於て江戸に來ては山鹿素水の塾に入つて兵學を研究された。又平戸に行きまし

ては山鹿藤助の子孫の山鹿巖泉と云ふ人に就いて兵學を修められました。吉田松陰の家學が啻に山鹿流であつたと云ふに止まらず、東に來ては山鹿素水の塾に入り、西に行つては山鹿巖泉の塾に入り、有らん限りの手段を盡して山鹿流の學問を修められた。それで松陰の學は遡れば必ず山鹿素行の學問となる。それでありますから、乃木大將は吉田松陰崇拜であると同時に素行崇拜でありました。素行會には是非御出にならんければならぬ。素行先生の法會を營むに當つては餘程の差支が無ければ必ず列席された譯であります。さう云ふ譯でありまして、精神上の系統が大事である。精神上の系統を能く見れば分るが、唯結果だけを見たのでは分らぬ。結果は必ず原因があつて起る。其の因て來る所を探ぐらんければならぬ。教育なんと云ふものは結果が直ぐ現はれるものでない。精神上のことでありますから何年か經つと必ず何處かに影響する。素行先生にはなか／＼多勢の門人がありました。其の教育の結果は次第に現はれて來た。赤穂の義士の

働なども段々推して行けば山鹿素行の影響でありますが、是れも直ぐではない。二十八年以上を隔つて起りました。精神上のことは系統があつて何時かは其結果を見る。種を蒔いて置けば何時かは實を結ぶ。是れが精神教育の趣味のある所であります。

ソコで尙ほ乃木大將の精神上のことを申しませう。乃木大將は吉田松陰、山鹿素行の學問をされましたが、是れが乃木大將の精神修養の淵源とも言ふべきであります。それでなか〳〵堅い所がありました。學問上に於いてなか〳〵堅い。山鹿素行や吉田松陰の事なら、なかなか熱心に研究された。其所にちやんと極つた據處があつたのでありませう。無關係の學問に對しては興味を抱いて居られなかつた。又精神に於いて山鹿素行及び吉田松陰の學問と一致するものがある。少くも幾らか似寄つたものがある。例へば水戶の學派の如きものであります。三宅觀瀾、安積澹泊、藤田東湖などの書物を愛讀されました。

それから會澤正志齋の『下學邇言』など云ふ者を愛讀されました。是

れも私が活版の『下學邇言』を持つて居りましたから、初めそれを見せました所が、版本も探し出されまして餘程よく研究されたのであります。水戸學派は精神に於いて山鹿素行、吉田松陰と一致する事が多い。ソコでさう云ふ學派の書物を研究された。其の外では熊澤蕃山に對して景慕の念を抱いて居られました。一昨年でありましたか古河で熊澤蕃山の御祭りをしましたが、其頃乃木大將はわざ〳〵彼處まで行かれまして、さうして蕃山の墓に詣つて來たと云ふことを話して居られました。それからして又『大學或問』『集義和書』『集義外書』は見せたことがありましたが、何等の批評をも爲されなかつたけれども、大分趣味を抱いて居られたことが分るのであります。それから山鹿素行の外には長沼澹齋に對して大分興味を抱かれた。是れは一度乃木大將は山鹿素行の兵學などを爲されるから、長沼澹齋の『兵要錄』を探出して見せました。澹齋は有名な兵學者であります。所が段々之に對して興味を抱かれました。それから福島中將からして、長沼澹齋の遺著の寫本

で傳つて居るものを本箱一杯借りて來て研究された。是れだけあつたと言つてお見せになりましたが、私はそんなに澤山遺著のあることを知らなかつた。長沼澹齋は信州松本の人であります。まあさう云ふ事で一々思出しませぬが、只今思出したのはさう云ふ點であります。其の外人としては楠公を尊崇して居られた。事苟も楠公に關する以上は餘程研究された。楠公の遺著であると云ふやうなものがありますと借りて來て研究して居られました。それから楠公に對しましては乃木大將の善い歌があります。斯う云ふのであります。

根も幹も枝ものこらず朽果てし

楠のかほりの高くもあるかな

斯う云ふ歌でありますから、乃木さんの場合にも當嵌まるかと思ひます。今になつて見ますと楠を野木に變へれば乃木さんに當嵌まるではないか。一家皆斷絕後にかほりだけが遺つて居る。楠公と乃木大將とは餘程似た形跡がある。楠公は純忠の士である。其の點に於て

少しも疑ひはない。乃木大將も純忠に於いては少しも疑ひを挾む餘地がない。實に純忠無二の人であります。餘程楠公に似た所がありま す。楠公を尊崇されて居りましたが、楠公には本統の著述がないから研究しやうとしても何うも致方はない。それで本統に研究されたのは山鹿素行、吉田松陰であつた。儒教に對しては餘り熱心でなかつた。儒教は嫌ひでもないやうであつたけれども、やはり日本が好きであつた。何處迄も日本中心主義、帝室中心主義であつた。どうしても乃木大將には日本と云ふ事が頭にある。西洋の偉いことも言つて居られましたが、やはり何處の爲に盡すかと言へば日本の爲である。又日本の中心たる帝室の爲である。其の考に於ては少しも曇りが無かつたのであります。さうして大變名譽を大事と爲されました。虛名でない、事實に伴ふ名譽であると思ふ。或る時紙切れに書いて斯う云ふ歌を詠んだがどうかと言つて見せられましたが、それは

武士は玉も黄金も何かせん

命にかへて名こそ惜けれ

と云ふのでありました。

デ乃木大將は詩もなか〳〵上手であつた。詩は折々世に傳つて居るが、金州城外の詩だの凱旋の時の作だのなか〳〵旨い。其の外まだ名吟が幾つかあります。又歌にも佳いのがあります。さうして書も謹嚴でなか〳〵立派であります。それから文も書かれました。此所で山鹿素行の御贈位の御沙汰のありました時に大將が祭文を讀まれました。あゝ云ふ風に立派な文章を書かれます。それから先刻乃木大將は演說は嫌ひであつたと申しました。所が演說は上手であつた。私は聽きましたから知つて居りますが、滅多に爲されぬ。諸君の中に乃木大將の公開演說を御聽きになつた方は恐くはなからうと思ふ。謙遜な御方であるから公開演說は滅多に爲されなかつたが、曾て大學で日本學會を催した時に英國少年隊のことを御話になりました。それは約一時間ばかりの講演でありましたが、非常に趣味多き講演であ

りました。其の時は大學の學生も大分來ましたが、乃木大將は英國少年隊の狀況を話し、次いで大陸各處に少年隊のあることを御話になりました。獨逸、露西亞其の他の國々に少年隊のあること及び其少年隊の有益なる事等をお話になりまして大いに學生を感動せしめられたのであります。講演は決して御出來にならぬのではない。なか〳〵巧い。それから本年の五月頃のことであつた、學習院女學部に於て生徒一同に對して御講話をなされたさうでありますが、それは非常に能く出來たと云ふことであります。私は其の時居りませぬでしたが、後で聞きました。講演の筋が大變面白く出來て居る。非常に面白い講演であつた。決して演說が御出來にならぬのではない。やはり一つは謙遜である。それから嫌ひである。多勢の所に出て滔々と話すことは嫌であつた。まあ謙遜の意から來たのであらう。それでなか〳〵詩も文も能くお出來になり、演說も決してお出來にならぬと云ふのではない。上手であつたと云ふことは我々の能く、知つて居る所であり

ます。

それから乃木大將はまあ是れは私が申すまでもないことでありますが、なかなか勤勉な方で、勵精と云ふことに付いては實に誰も感心するやうな方でありました。能く御務めになりました。例へば八時に授業が始まると云ふ時には八時より十分か十五分か前に御出になる。固より軍人でありますから規律が正しい。さう云ふことは非常に嚴格でありました。それから又餘程剛健な所がありました。自分の意志は何處迄も貫徹して行くと云ふやうな餘程強固な所がありました。尋常で無かつた。それからして、又斯う云ふ點があります。乃木大將は非常に勇敢であり大膽であつたが、又非常に仁慈であつた。人に對して同情心が深かつた。それが武士の情けと云ふのでありませう。私かに聞く所では、隨分大勢の人を惠まれたと云ふことであります。又屢、癈兵院などを訪ふて慰められたと云ふことは誰も知つて居るが、日本ばかりでない、獨逸に於いても墺太利に於いても癈兵を訪ふて金

品を贈られた。さう云ふやうに外國護兵までも訪問して慰められたと云ふやうになか〳〵能く行き渡つた所がある。それから交際の上に於いて少しも僞りがない。實に胸襟を開いて談笑なされて、少しも立て隔てがない。潔白な愉快な交際を爲された。併し其中に堅い所がある。谷本博士の批評とは正反對に僞善と云ふやうなことは痕跡だもない。誰が見ても分かる。大將を御存じの方は能く御承知でありませうが、實に此の點に付いては立派な稀なる方であつたと思ふのであります。

それで乃木大將の無くなられましたことは誰も非常に遺憾に思ふ。實に惜しむべきことであります。あの花々しき最後は乃木大將の滿足せられる所であつたらうと思ふ。あゝ云ふ最後でなければ乃木大將たること能はずであります。乃木大將は平生どうも自分は空しく疊の上で死にはしまいかと云ふやうなことを心配して居られた。それは私ばかりでない、他の人も聞いて居ります。男子空しく死すべか

らずと云ふやうな考で居られた。唯、天恩の厚きが爲めに本務を盡すことに鞠躬盡瘁して居られた。其の爲に命を存らへて居られたが、何か適當の場合があれば君國の爲に捧げると云ふ平生の考が、山鹿素行や吉田松陰の考と能く一致して居る。山鹿素行の系統には壯烈なる事蹟を遺した人が隨分ありますが、其の上に今又乃木大將を一人添へたのであります。此の系統の精神敎育には何物か大いに學ぶべきものがある、と云ふことは、此の點から見ても分かるのである。さうして近代の青年などの大いに缺陷として居る所を丁度補ふやうな非常な剛健な精神的のものが存在して居る。此の學脈にさう云ふものゝあると云ふことは私の斷言し得る所であります。

デ乃木大將の自殺殉死を爲されたことに付いては色々說がありますが、又自殺殊に殉死の可否と云ふことに付いては乃木大將と無關係ではないけれども、是れは又別に論じた方が宜い。〔中略〕

世間多くの自殺は極く愚な事から起ります。墮落の結果、失望落膽

して自殺せざるを得ずと云ふやうなことになる。それで世間の多くの自殺は非難すべきものがあるけれども、偉人傑士の能く計畫したる自殺はさうで無い場合がある。却つて客觀的に非常に善い結果を生ずる。乃木大將が生存して居られましたならば、まだなか〳〵社會に有益なることを爲されたに相違ない。が遺言書にあるやうに六十四歳で、もう行先も餘り長くなく、國家の爲に餘り役に立ちさうもないからと云ふので自分で見切りを付けて自殺殉死を爲された結果は實に天地を震撼するの概があつた。さうして非常な感化を社會萬衆に與へられた。其の效果の偉大な所から考へれば、其の自殺は決して否とすることは出來ないのである。毫も乃木大將の人格を傷ふやうな所はない。却つて乃木大將の人格をして一段の光彩を放たしむるの趣がある。尤も一體に自殺は善い、殉死は善いと云ふことは言へませぬけれども、乃木大將の場合に於いては實に立派な最後である。乃木大將が滿足されるやうな花々しき武士の最後である。實は乃木大將の

平常の御考から言へば祝ひたい位である。併し斯う云ふ偉人を失つた所から言へば深く悲しまざるを得ない。私等の考へには此の両方面がある。兎に角乃木大將の自殺殉死は此日本の武士道と云ふものゝ大いに力ある所を實際に示されたのである。今後尙ほ非常な效果を生ずることであらうと思ふ。自殺殉死に付いてはまだ色々論じたいことがありますけれども、今日は其の場所ではない。今日は山鹿素行先生の法會を營み、且つ乃木大將の追悼會を兼ねたのでありますから、山鹿素行先生と乃木大將の思想上の關係を略ぼ明にしまして、且つ乃木大將の人格の高潔でありましたこと、並に其の思想の果して那邊に存して居つたかと云ふこと、それから又乃木大將の自殺殉死の却つて社會風敎上に非常な效果を生じたと云ふ所から見れば、乃木大將の人格も是れが爲に毫も累はさるゝことは無いと云ふことを明かにしましたから是れで御免を蒙ります。（拍手）（大正元年九月二十六日宗參寺講演）

第四　山縣周南

山縣周南は周防の人である。十九歳の時初めて江戸に出て徂徠に會ひ、徂徠の門人となつて三年の間研究したのである。三年の後郷里に歸つて毛利侯に仕へ、屢〻江戸にも出て來た。後に萩の明倫館の祭酒となつて大に彼の地方の文教を振興するに與つて力あつたのである。

一體徂徠の門人にはなか〳〵學才ある者が多人數有つたのである。併し其中で最も優れた者は太宰春臺である。學力識見等に於て春臺に及ぶ者はなかつたのである。殊に春臺は經學を主とした者であるから、何となく其學問に根柢がある。春臺の説は甚しく僻して居ることがあるけれども、學者としてはマア春臺を推さゞるを得ない。併乍ら詩に於ては服部南郭を推さんければならぬ。南郭は兎に角文學の側に於て確に大家であるが、春臺南郭に亞ぐ者は何うしても周南であらうと思はれる。安藤東野、平野金華などは迚も周南に及ばないので

ある。

周南の好い處は、洵に穩健で、僻した處が見えない。どうも人が餘程好かつた樣に見える。南郭も極く圭角のない和平の人であつた樣に思はれるが、周南も、どちらかと云ふと南郭と稍、似た性格の人の樣に思はれる。周南の江戸に在る時斯う云ふことを聞いた。仁齋には帳中の秘書があつて門人等は其れを見ることが出來ない。其帳中の秘書とは何かと云ふと『吉齋漫錄』『甕記』『櫝記』などゝいふ書物である、と。斯う云ふことであつたけれども、周南は其れを信じなかつた。後『吉齋漫錄』を得て讀んで大變面白く感じた。が、仁齋は決して『吉齋漫錄』を讀んで其說を竊んで主張して居るなんといふことは取らないのである。仁齋が若し『吉齋漫錄』を讀んで居つたならば必ず一言其事を言ふに相違ない。一言も其事を言はぬ所を見ると、仁齋は決して『吉齋漫錄』の說に本づいて古學を主張して居るとは考へられない、と。斯う云ふことを周南が云つて居る（周南文集卷之九）。其處から觀ると周南の穩和な又

公平な考の人であることが分る。徂徠學派は仁齋學派と云ふものを餘程敵視したやうな狀態になつて居つた時である。其時に徂徠派の周南が仁齋の事をさう惡く解釋しないと云ふやうな點に於て周南の洵に立派な處が見える。

周南は『爲學初問』と云ふ書物を著して居る。此書物は世間で往々徂徠の著作として傳へられて居るが、それは全く間違ひである。是れは周南の著したものである。讀んで見ると、如何にも初學者のために著したものに相違ない。何か大に學說でも、述べて居るかと思へば、大してさういふ主張も見えない。大體隨筆體の敎訓書と見ればよい。併乍ら書物の內容に依つて考へて見ても、如何にも周南が穩健でさうして度量の大きい樣な處が察し得らるゝのである。時々徂徠派の癖も見えないではないけれども、決して春臺の樣な甚しい僻說ははい。

唯一つ『爲學初問』の中に於て學說の上から注意すべきことは、殆ど唯物論に似た樣なことを主張して居る點である。左の如くに云つて居

る。

聖賢心法の教無し。形に長少あれば、心も連つて長少あり。形病めば心も病む。形盡れば心も盡く。氣血を離れて人に心あるにあらず。心は血氣の精靈なり。

と斯う云つて居る。是れは唯物論者の考である。斯樣に明瞭に唯物論の趣意を言表したものは是れまで稀なる場合である。又『爲學初問』の中に、禮儀と云ふものを以て人と禽獸と異なる所以として居る。人間にも欲はある。欲はあるけれども、其欲を制するのは禮儀である。禮儀で以て欲を制して居る處に人間の禽獸と異なる處があると。斯う云ふ風に觀たので、人間と禽獸とを其本質に於て同じ樣に視てさうして禮儀の極めて人間に取つて重要なことを示したのである。其事に就いてはいろ〳〵『爲學初問』の中に論じてある。

それから『周南文集』が十卷程刊行されて今日まで傳へられて居る。此文集を讀んで見ると、やはり如何にも周南の性格が分かるのである、

又非常に徂徠を尊崇して居つたことも明である。周南は隨分澤山文章も書いたのであるが、固より徂徠の樣に偉い氣魄光燄ある文章ではない、古文辭の僻はあるけれども、大體明瞭なる文章を書いたのである。さうして又時々餘程佳い詩が出來て居る。例へば

一碧瑠璃凝不流。波光始白月盈樓。
笙歌忽入西風起。人住廣寒宮裏秋。

又『關山月』と云ふ題で

秋風俄入玉門關。月色如霜滿四山。
羌女不知征戍恨。吹笳一夜徹雲間。

殆ど唐人の詩を讀むやうである。又『東都送平子和之參州』の詩に云く、

休唱陽關三疊詞。陽關三疊不勝悲。
送君多馬河邊柳。折自南枝至北枝。

周南の門下にはなか／＼人材が大勢出て居る。其中で學者として最も能く知られて居るのは瀧鶴臺と永富獨嘯庵である。獨嘯庵は大

阪に行つて醫を業として居つたのである。けれども決してたゞ醫者ばかりやつて居つた譯ではない。マア儒醫と云つて宜からう。彼は醫者の著述もして居るけれども『嚢語』などゝ云つて大に道を論じた著述もある。彼の有名なる筑前の龜井南冥は曾て獨嘯庵の門に居つたのである。醫者になる積りであつたらう。けれども、獨嘯庵がもともと只の醫者でない。大に儒教の考があつたからして、それが南冥に影響して南冥は古學派の大家となつたのである。南冥の子に昭陽が出て更に大に古學を主張し、江戸に於て漸く古學の衰へるに當つて更に九州の一角より大に古學を主張して來たと云ふ樣なことがあつて、其影響も多大である。此等の淵源を辿れば、周南與つて力ありである。それであるからして周南の學說として別に擧げて論ずる程のこともないけれども、併乍ら古文辭學派の中に於ては周南は決して注意を怠るべきでないのであるからして、茲に其概略を論じて置く次第である。

第五　市川鶴鳴

徂徠の門人に餘熊耳と云ふ者があつて、其餘熊耳の門下に種々なる人が居つたが、其一人は則ち市川鶴鳴である。是れは江戸の人であるが大阪に行つて徂徠の學説を唱へて居つたのである。後又江戸に立歸り、高崎侯に聘せられて儒官となつた。寛政七年七月に五十七歳を以て歿したのである。

鶴鳴は經學に長じて居つたやうであるが、茲に特に鶴鳴に就いて一言せざるを得ないことがある。明治四十五年の春の頃であつたと思ふ。ジャパンデーレーメールに市川鶴鳴の事を長々と書いた人がある。それは日本に於てダーウヰンより先に進化論を主張した人であると云つて論じたのである。其處には確か市川匡麻呂としてあつた樣で、初め見た時に、どうも一向知らぬ人である。吾々がさういふ珍しい人の事を是迄氣付かずに居つたと云ふのは餘程意外であると感じて、

後で少し捜索して見た處がそれは市川鶴鳴の事であつた。鶴鳴は曾て『末賀能比連』と云ふ書物を著して大に本居宣長の説を反駁したことがある。鶴鳴は固い書物ばかり書いて居るけれども、唯〻一つ『末賀能比連』と云ふ假名書の書物で殊に國學者の口吻に眞似て書いたものがある。本居の説が餘程氣障であつたと見えて、なか〳〵鋭い辯駁をして居る。さうして此書物には市川鶴鳴とはない。初めの方に市川匡(タヾシ)麻呂とある。鶴鳴の名が匡と云ふのであるから、假りに匡麻呂など〻として論じたのであらう。此『末賀能比連』を通讀して見ると云ふと如何にも中には尤らしい事もある。本居が漢學の盛な時であるからひどく漢學を排斥して國學を持ち上ぐることを力めた爲めに幾らか議論に無理も出來て居る。さういふ處にちよい〳〵と痛く觸れた樣な點があつて、如何にもと頷かれる節もないではない。併し又隨分間違つた議論をして居る處もある。

但し其等のことを玆で一々論ずる遑はない、此書物の中に進化論め

いたことがあることはあるけれども、別に其れ程のこともない。唯、斯う云ふ事がある。

諸の國の遠つ祖も若し人ならずとせば必ず鳥獸の種なるべし。

と。鶴鳴は、人間の先祖は神樣どころぢやない、鳥獸であつたに相違ない、唯、聖人が出て其れに敎を施して人間となつて鳥獸と區別されて來たのである、と、斯う云ふ樣な考であつた。又それだけのことで、何う云ふ具合にして人間が鳥獸から發達して來たかなどゝ云ふことはない。併し人間が鳥獸から出て來たなんと云ふことを大膽に云つた處は一寸注意すべきである。彼は人嶋と畜生嶋と云ふものを假定して、人間も敎へがなければ畜生嶋に這入る、どちらにでも這入れる樣なものである、唯、聖人の敎を以てそれを實行して行けば人島の方に這入る、元は人島も畜生島もそんなにハッキリした區別はなかつたのである、人間も畜生島に居つたのである、それが聖人の敎を得て人島の方に移つて來たのであると、斯う云ふことを頻に論じて居る。ダーウヰンより前に

進化論を唱へたなんと云ふ程の偉いことはないけれども、併乍らジャパンデーレーメールには仰々敷紹介されたこともあるからして看過する譯にも行かないのである。

もう一つ此書物に於て注意すべきことは、人間の間には貴賤の別はないものであると云ふことを主張して居る。人間ばかりでなく人間以外のものに對しても本來貴賤の區別はないと、斯う云ふのである。彼は斯う云ふことを云つて居る。

凡て萬の物に貴賤の別は無ことなり。皆神の御魂の片破なれば貴賤の別あるべきかは。たとへば一種の米を飯に炊餅に春酒に釀せしにおの〳〵形も味も異なれども、いづれを貴び、いづれを賤まん。もと一種の米なれば別あるべき理なし。人は自貴しと思ふめれと鳥獸は人を敬ふ心しも見えず。況して人と人との上に奈何が貴賤の別あらん。されども道を以ていはゞ位と德との二つこそ眞の貴き物なりけん。更に此二つを較れば位と云ふものも尊かめれど、德

と云ものゝ尊きには及ず。
斯樣に云つて居る。更に進んで位と德とを尚一層較べて

あるは高き位に生るゝ人も其位に合ふ德あらばこそ貴からめ。若し其德なからましかば德を懷る山賤にも劣てまし。況して位は天より與もし奪もしたまふ。身の內の寶は天も奪ふことあたはず、人も取ことあたはず。

と。さうして鶴鳴はやはり蘐園一派の系統を引いて、支那を標準として論ずる風があるからして、何となく、德ある者が位に卽くのが自然である、位に在るものが德なければ其位に留めて置くべきではないと云ふ樣な支那風の考を以て我國を論ぜんとする傾向が見える。其邊に至ると素行一派の樣に日本の國體を明にして出て來ないから議論に餘程弊がある。支那かぶれの蘐園一派の弊害の如何も略、之に依つて知るべきである。又彼は他の處で云ふて居る。

元より人と物との間に自なる貴賤なく又人と人との上にも自なる

貴賤はなけれど人倫の教ありてより人嶋畜生嶋の境明に別たり。と。さういふ樣な考であるからして平等の考が彼れにあつた譯である。平等の考は陽明學派の人にもあつたが、鶴鳴の考には餘程明瞭に其れが表れて居る。兎に角是れは日本の思想の系統を辿るに當つて看過すべからざる點である。

天道福善禍淫。聖人之言。眞實無妄。亙萬世而不爽。如合符節。而世人多疑不信。不知分與時也。

物徂徠

補正の一

一二九頁

素行關係書類中に尙ほ左の書を加ふ、

津輕信政一卷外崎覺著

其他日本弘道叢記第百三十三號乃至第百三十四號に外崎氏の山鹿素行の効驗説と津輕信政と題せる一篇の文あり、亦併せて看るべし、

一六〇頁

哲學者カントガ一生郷里以外に出でざりしことを述べて之れを仁齋に比せり、然るにクーノー、フヒッセル氏カントの生涯を叙して曰く、

Kant ist beinahe achtzig geworden und hat seine Heimath=Provinz niemals, seine Vaterstadt nur nothgedrungen für einige Jahre verlassen. (Geschicht der neueren Philosophie, Bd. III. S. 40.)

此れに由りて之れを觀ればカントは郷州を出でざりしとは言ふべき

も、郷里を出でざりしとは言ふべからざるなり、

二〇九頁

呉蘇原の語として

聖人定之、以中正仁義而主靜、

の句を擧げたれども、此句は周子太極圖說中の語にして、蘇原唯之れを引用せるのみ、

二四四頁

仁齋が愛を論ずるの旨意、頗る哥林多前書第十三章のそれと相似たり、

三一六頁

緒方維文の事、日本敎育史資料卷十二の二六九頁に見ゆ、

三二一頁

仁齋門人として中村嘉種を追加せん、嘉種の事、日本敎育史資料卷十二の二七五頁に見ゆ、

四〇八頁

陶山南濤の事、日本教育史資料卷十二の二七五頁に見ゆ、

四七五頁

論語徵の末書としては尙ほ論語徵擥要五卷「寫本」あり、此書は郡山の古屋永胤の著に係る、首めに永胤の序あり、弘化四年を以て撰ぶ所なり、終りに其子古屋友の跋あり、

四七六頁

徂徠集の末書としては尙ほ龜井昭陽の著二種あり、一は蘐文談二卷にして一は蘐文架談二卷なり、

四八八頁

周易解は白重行の著はす所にして、間〻徂徠の說を引用せるものなり、然れども程朱及び其他諸家の說をも擧げ、且つ自家の見解をも亦處々に挿入せり、重行大泉と號す、深く徂徠を慕ひ、此書を著はし、其遺訓に出づるものとなす、然れども其實蓋し附託に過ぎざるなり、序に云く、

我物夫子起于大東、成復古業、求之辭與事、而徵於古六經、大義始明矣、實

與七十子徒、千歳而比肩、不亦愈快乎、余也從物子遺訓、沈斯文、既三十有餘年矣、

重行の祖父、徂徠に親炙し三世其學を傳ふといふ、果して然らば、其家學の系統は蘐園に出づ、然りと雖も、周易解の如きは、寧ろ折衷の態度を取るものといふべきなり、重行は莊內の人、

五二一二二頁

徂徠が日本の地名を支那風にしたることに就いて、先哲像傳卷一（第十四葉）に原雙桂の說を擧げて云く、

譯文筌蹄の題署などに武陵と書きたり、左樣の事、甚だ非なり、定めて東都は武藏の內にて、武藏の武の字一字同じきによりて、牽合し、借り用ひて、題署せしならん、左あらば武陵の外にも武昌、武清、武平、武進、武宣、武城、武緣、武定、武邑、武鄉、武涉、武安、武功、武隆、武寧、武當、武岡、武康の類、皆唐土の地名なれば、手前物好次第に借り用ひてよろしからんや、面々の物好次第に借り用ひば、江戸に定まれる名はあるべからず、左あ

艮齋閒話(卷之下)に東涯を評して云く、

東崖は家學を守り、朱子の學とは異なれども、朱子集註及朱子文集などは能く讀みし人なり。學問の博洽は本朝儒林の冠冕なるべし。

東涯が如何に艮齋の眼に映せしかを知るべし。

三七八頁

歷代官制沿革圖考一卷の左に左の說明を加ふ。云く、

此書は鍾伯敬の通鑑纂に載する所の王光啓の官制沿革圖を本とし、之に明の官制を續補し、末に文武敎官勳爵の圖を附載す。坊間に行はるゝ所の版本は分ちて二卷となす。

四〇八頁

陶山南濤の事、日本詩史(卷之三)(第二十二左)に見ゆ。參考すべし。

四〇九頁

宮崎筠圃の事、書乘要畧(卷三)に見ゆ。

仝　上

木村鳳梧の事、日本詩史卷之五、(第十五右)に出づ。參考すべし。

四一〇頁

高養浩の號は、未だ詳ならずとせしが、後、其泉溟なることを知れり。

仝　上

篠士明、松本達夫、及び荒川敬元を東涯門人中に加ふ。士明の事は、日本詩史、卷之三、(第二十三右)に見ゆ。參考すべし。達夫の事は、日本詩史卷之五(第十三右)に見ゆ。敬元の事は、仁齋門人の處に詳なり。

四三〇頁

過庭紀談(卷數未詳)とせしが、後、其卷數五卷なることを知れり。

四六七頁

瀧鶴臺が服部南郭に與ふる書に徂徠を評して左の如く言へり。云く、

竊惟本邦文學。自惺窩羅山二老後。運屬昭融。大化日孺。乃有若闇齋仁齋東涯錦里白石諸儒。皆能振起一方。陶鑄晩學。對揚國家隆盛之治。及至吾徂徠先生。崛乎表東海。爭高大於芙蓉。日出之光與千秋白雪。映照寰宇。即

其從遊之士、熾扇風化、羽翼斯道者、乃若先生及東野春臺金華周南諸公、猶之風雲應龍虎、實千歲一會、可謂極其盛矣也、

鶴臺初め周南に學び、後南郭に學ぶ。彼れ蘐園の徒たるを以て徂徠を推尊すること殊に甚しとなす。

四七五頁

論語徵の末書中に尚ほ左の書を加ふ。

論語徵考二十卷 萩野鳩谷著

論語徵約辨解一卷 中根鳳河著

論語徵餘言 戸崎淡園著

論語徵解 森東郭著

四七六頁

徂徠集の末書には尚ほ左の書類あり。

徂徠集々詁若干卷

徂徠文集注十卷 橘壽菴著

補正の一

徂徠集考　大菅圍澤著

四八九頁

徂徠が明律を解釋せるものさして僞書世に行はる。今尚は傳ふる所の明律考寫本五卷の如き、或は其一例ならんか

四九七頁

徂徠の和歌の事に就いて東洋學會雜誌第三編第二號に評論あり。參考すべし。

五二三頁

孔平珉文は荻野鳩谷の事なり。諸家著述目錄を看よ。

五五五頁

仁王經にも亦云く、「唯佛與佛乃知此事」

六六四頁

徂徠關係書類中に尙は左の書を加ふ。

徂徠先生文戒一卷　吉田孤山著

徂徠先生文淵詩源一卷全上

仁齋徂徠得失辨二卷鈴木行義著

物徂徠眞十卷萩野鳩谷著

辨道辨名五卷全上

徂徠先生親類由緒書一卷寫本

百事決定と注意とを肝要とす、如何となれば何事によらず、百事決定と注意とによりて、事はなる物なり、小事たりといへども、決定する事なく、注意する事なければ、百事悉く破る、

二宮尊徳

補正の二

三四頁

津輕耕道亦別に武治提要一卷(上下二篇)を著はし、武士道を論せり。此書久しく寫本にて傳はりしを始めて武士道叢書上卷に收載せり。

三八頁

鈴林巵言卷之十五に素行を論じて左の如く言へり。云く、

山鹿氏韜鈐の盛名、今古其比を見ず。因つて自ら尊大にして、抑損謙讓の風を失せり。一大諸侯もり砂をして招請す。山鹿これを受けて恬然として敢て辭せず。終に公の尤を蒙りて謫せらる。其咎誇大にありて兵にあらず。云云。

素行遂に一見識を立て、世俗に阿諛せず。故に往々這箇の訾を受く亦必ずしも怪むに足らざるなり。

四六頁

武教全書の注解として武教全書抄廿四卷あり。福井中學校之を藏す。

武敎全書解の著者は、未だ詳ならずとせしが、諸家著述目錄を見るに、鈴木鐸の下に武敎全書解とありて卷數を擧げず、蓋し同一の書ならん。

一三〇頁

素行關係書類中に尙ほ左の書を加ふ。

瀨田問答一卷

此書は溫知叢書第六編に收載せり。

武事提要一卷　山鹿高恒編

鈴林巵言（卷之十五）

一三一頁

武士道に關する書類中に尙ほ左の書を加ふ。

竹馬抄一卷　斯波義將著

明君家訓一卷　室鳩巣著

武士訓五卷　井澤蟠龍著

武家須知一卷　蟹養齋著

武治提要一卷　津輕耕道著

武事提要一卷　山鹿高恒著

武學啓蒙一卷　力丸東山著

武教錄一卷　仝上

武經一卷　總生寬著

武士道叢書三卷　井上哲次郎　有馬祐政　共編

武士道家訓集一卷　有馬祐政　秋山悟菴　共編

武士道叢論一卷　秋山悟菴編纂

日本武士道史一卷　蜷川龍夫著

一四五頁

仁齋詩あり。云く、

遊學書生數百輩。隨行逐隊滿京師。衆中元有□豪傑。打破乾坤不可知。

一七四頁

都多嶺は卽ち村上冬嶺の事。詳に近世叢語卷三（第四右）に出づ。

三一一頁

荒川蘭室の事、日本詩史卷之五（第十五右）に出づ。東涯門人とせり。初め仁齋に就いて學び、後、東涯の門人たりしと。

三一三頁

瀬尾維賢の事、日本詩史卷之三（第十八左）に出づ。訪江山人の詩あり。云く、

一路斷橋外。孤村杏靄中。柳垂前夜雨。花落暮春風。白屋經年漏。青山與昔同。浮生須痛飲。淺水月朦朧。

三一七頁

鳩巣、伊東儀の碑銘を作る。後編鳩巣文集卷之十七に見ゆ。

三二四頁

仁齋關係書類中に左の書を加ふ。

蓁蕪辨　鈴木正義著

三六一頁

らば亂名にあらずや、云云、

此言能く徂徠が用語の弊に適中せりといふべし、

六七一頁

釋大潮と、成島錦江との間に僧明月を挿入せん、明月、名は明逸、字は曇寧、周防の人、眞宗の僧にして蘐園の學を喜ぶ、其事蹟は詳に日本教育史資料卷十二の二二八頁に見ゆ、

六七九頁

岡野石城と野田石陽との間に富田大鳳を挿入せん、大鳳、字は伯圖、大淵と稱し、日岳と號す、人となり、慷慨氣節あり、常に王室恢復を以て已れが任とせり、享和三年を以て歿す、享年四十二、著はす所日岳文集十五卷（寫本）あり、小橋某撰ぶ所の富田大鳳傳に言へるあり、云く、

自先世素好物茂卿之學、至大鳳加崇信、然如茂卿昧於王覇、相爲霄壤、極口辯斥之、不敢假也、

此れに由りて以て其人物性行を知るべきなり、其事蹟は肥後先哲事蹟

卷二（一三五頁以下）に詳なり、

孔釋之敎。拯溺救焚。向微二聖人
禽曷分。歐洲哲學。尤推瑣韓。知大
宗師。固道德根。弱肉強食。今尚未
已。卓美之世。何時可待。炳燭餘光。
嗟我老矣。繼往開來。望在俊士。

中村敬宇

補正の三

一六五頁

孟子古義解題の末に下の如き文を加ふ。伊藤東涯、孟子古義(寫本)一卷を作る。

三三三頁

伊藤東所の著述中詩解十八卷、古義堂遺書總目叙釋一卷を加ふ。

三七六頁

伊藤東涯の著書中經說(寫本)一卷を加ふ。

四〇八頁

穗積能改齋は播州の人としたれども、著書には攝江とあり。或は攝津の人にあらざるか、疑を存す。

四七五頁

論語徵解題の末に下の如き文を加ふ。又郡山の古屋永胤、論語徵を以て論語本文の註脚と爲し、論語徵擘要五卷(寫本)を著はせり。序文の末

に「弘化四年丁未秋七月朔」とあり。

四九頁

徂徠著書の末に論語辯に付いて一言辯明するの必要あり。論語辯は古來徂徠の著書とすれども、徂徠に元と此の如き著書なきのみならず、其内容の膚淺なる、一見して其徂徠の作にあらざるを知るに足る。明治年間に至り、文學士祥雲碓悟、校訂して之を刊行す。是れ特に茲に辯明する必要ある所以なり。

六六二頁

徂徠關係書類中に徂徠先生親類並由緒書一卷（家傳史料卷二收載）を加ふ。

六八六頁

春臺著はす所の書類中周易反正十二卷、易道撥亂一卷、詩書古傳三十四卷、老子特解二卷、產語二卷、和讀要領三卷、經濟錄十二卷を加ふ。

六九〇頁

春臺の事に就いては、尙ほ文會雜記〔二ノ六〕を參考せよ。

明治三十五年九月五日印刷
明治三十五年九月八日發行
大正二年二月十八日六版發行
大正四年九月廿五日訂正七版發行
大正七年十月十五日八版發行

日本古學派之哲學奥附

定價金貳圓四拾錢

改正定價金參圓貳拾錢

著述者　井上哲次郎

東京市神田區裏神保町九番地
發行者　合資會社冨山房

合資會社冨山房社長
代表者　坂本嘉治馬

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

發兌元

東京神田
合資會社冨山房
（電話本局一〇三六、四一三〇）
振替口座五〇一番
電報略號ヤマフ

東京 合資會社冨山房出版圖書特約販賣所

[illegible]區　日本橋　京橋區　横濱　小田原　大阪　京都　和歌山　宮津　堺　神戸　西ノ宮　柏原　龍野　姫路　明石　小野　篠山　豐岡　長岡

文會堂　東京堂　中西屋　林平次郎　杉本七百丸　[illegible]原友吉　至誠堂　文星堂　北隆館　東海堂　目黒甚七　弘集堂　第一有隣堂　[illegible]強堂　弘文堂　積善堂　吉岡寶文館　三宅莊藏　盛文館　松村文海堂　松田庄助　若林茂一郎　寶文館　東枝律書房　丸善支店　阪俣榮正堂　南波庄兵衛　鹽川書店　賓文館　篆之房　中井正吉　竹内伊八郎　木村治作　福井宗吉　阪田文盛堂　小山富之助　石田松造　目黒十郎　營張治平　酒井屋書店

水原　新發田　三條　小千谷　長岡　直江津　新潟　糸魚川　村上　蒲原　熊谷　[illegible]　粕壁　川越　大宮　前橋　桐生　富岡　高崎　宮崎　高田　大多喜　千葉　松戸　東金　福岡　木更津　六多喜　佐倉　北條　水戸　水海道　太田　宇都宮　足利　松本　奈良　山田

西村六平　萬松堂　齋藤治吉　野島書店　山本修三　高桑書店　柿村書店　萬松堂支店　北光社　島道書店　中村久四郎　高野幸吉　伊藤儀八郎　松柏堂　紅雲堂　明文堂　宮前藤十郎　僕平堂　竹内藤吉　木田[illegible]三郎　文心堂　中村孫四郎　多田屋支店　阪入書店　多田屋本店　多山屋支店　多田屋支店　惠美須屋　吉田書店　松田屋　寺田支店　明文堂　新々堂　宮田栢七　内田澈吉　煥平堂分店　青木宇一　永山吉造　木原文進堂　古川小三郎

津　四日市　名古屋　岡崎　豐橋　靜岡　沼津　三島　濱松　掛川　甲府　長濱　大津　彦根　岐阜　加納　中村　高山　長野　松本　上諏訪　小諸　飯山　上田　野澤　仙臺　白石　古川　佐沼　福島　郡山

別所書店　伊藤善太郎　川瀬代助　永東書店　三輪伊六　星野松次郎　伊藤小文司　夏目書店　吉見書店　古澤安太郎　村上留次郎　谷島屋　三原屋　挪正堂　徵古堂　吉田文泉堂　文泉堂支店　廣田七次郎　郁文堂　郁文堂支店　堀田幾三郎　平田書店　西澤喜太郎　荻原朝陽館　水琴堂　高美書店　鶴林堂　堀田松造　中屋書店　牧野書店　西澤支店　西澤支店　鈴木英三郎　藤崎書店　觀光堂　佐々木榮之進　日進堂　加藤源右衛門　西澤支店　磐岳堂

郡山　平　二本松　喜多方　中村　盛岡　一關　弘前　青森　八戸　山形　酒田　鶴岡　新庄　米澤　秋田　大館　[illegible]　横手　六郷　大曲　角館　福井　勝山　武生　鯖江　三國　大野　小濱　金澤　富山　高岡　魚津　氷見　石動　鳥取

虎屋書店　關向清光堂　吉井啓次郎　瀨野作右衛門　佐藤與七　佐々木仙助　佐藤[illegible]堂　今泉本店　今泉支店　浦川政吉　五十嵐書店　牧野德太郎　遠藤書店　中村禎吉　日向源吉　大泉善助　市川谿文堂　成見清兵衛　石川信助　藤島常三郎　東海林書店　東海林支店　高山書店　榊田繁治　荒川文華堂　品川書店　中村六三郎　南部平兵衛　坪谷市之助　大谷幸藏　井田書店　谷口伊太郎　下防久吉　宇都宮書店　中田書店　學海堂　舟崎清二　毛利研精堂　堅田伊三郎　平木久松堂

米子　倉吉　松江　[illegible]　[illegible]　岡山　山陽　高梁　笠岡　廣島　尾道　徳山　山口　岩國　長府　萩　下關　柳井津　和歌山　粉河　徳島　丸龜　高松　松山　今治　大洲　高知　博多

尙文館　今井[illegible]文　木村奎三[illegible]　徳岡長[illegible]　有田傳助　川岡淺助　板倉[illegible]郎　安達共榮堂　武内書店　書籍株式會社　田中博英堂　藤井恩正堂　積善館支店　東西堂　中村貫誠堂　北辰社　桑田書店　白銀支店　小原松千代　白銀日新堂　村田梅龍堂　藤川東輔　上山松造　白銀支店　朝本明文堂　宮井宗兵衛　森川喜三郎　黒崎松二　井關久米吉　入江開文舍　宮脇仲次郎　北村彌市　土肥與平　向井藏次郎　近本文泉堂　足立書店　澤本駒吉　濱田早苗　積善館　高田弘陽堂

博多　久留米　臼杵　大分　中津　佐賀　唐津　熊本　長崎　佐世保　宮崎　鹿兒島　那覇　臺北　札幌　函館　小樽　旭川　帶廣　樺太　京城　平壤　營口　奉天　上海　大連　天津　羅府

荻岡博文社　島[illegible]書店　田中幸次郎　佐野長七　甲斐治平　忠文堂　梅津書店　大坪傳信堂　平井下次　河[illegible]莊助　牧川支店　牧川德次郎　長崎次郎　安中虎與號　五郎川書店　修進堂　吉田幸兵衛　久永金光堂　谷村藤吉　小澤博愛堂　新高堂　富貴堂　魁文舍　一二堂　萬隆舍　西堀本店　川南書店　村上書店　久富廣文堂　齋藤支店　日韓書房　眞鶴洋行　濱井松之助　盛京書局　富山房書局　日本堂　商務印書館　大阪屋號　東亞書藥局　錦江堂

井上巽軒著述目錄

巽軒論文初集　一册　定價四十五錢

目次―歷史哲學に關する余が見解―日本民族思潮の傾向―老子の學の淵源―日本文學の過去及び將來―新體詩論―國字改良論―宗敎の將來に關する意見

同二集　一册　定價五十五錢

目次―利己主義と功利主義とを論ず―獨立自尊主義の道德を論ず―武士道を論じ、併せて「瘦我慢說」に及ぶ―認識と實在との關係―小品五篇

巽軒講話第一集　一册　定價七十錢

敎育の方針に就いて―敎育上の宗敎道德問題―我邦德育の前途―武士道と將來の道德―道德主義としての自主獨立―淸國開發意見―十九世紀の哲學―歐洲碩學談―敎育の過去及び將來―女子敎育

談—宗教の本體に就いて—宗教及び之れに對する日本人の位置—青年の宗教に對すべき態度—青年に必要なる信念—公德と私德—道德及び宗教に就いて—教育雜感—佐々木弘綱翁の十年祭に際し、所感を述ぶ—現今の教育問題—日本社會目下の病弊—東西洋倫理思想の異同—教育上に於ける黨派心の弊害—言文一致に就いて—裸體畫論—法律と道德との關係—日本現今の新聞を評す、

增訂勅語衍義第三十二版　一册　定價四十錢

教育と宗教の衝突第四版　一册　定價三十錢

菅公小傳　一册　定價三十五錢

目次—敍論—菅公の祖先—菅公の時代—菅公の事蹟—菅公の夫人及び子孫—菅公の著述—文藻—學問及び技藝—史的評論—菅公關係書類

菅公事蹟　一册　定價十五錢

武士道　一册　定價五十錢

巽軒詩鈔 木版　二册　定價四十錢

釋迦種族論　一册　定價四十錢

日本陽明學派之哲學 九版　一册　定價貳圓四十錢

目次—叙論—第一篇中江藤樹及び藤樹學派—中江藤樹—熊澤蕃山—第二篇、藤樹蕃山以後の陽明學派—北島雪山—三重松菴—三宅石庵—三輪執齋—川田雄琴—中根東里—林子平—佐藤一齋—梁川星巖—第三篇大鹽中齋及び中齋學派—大鹽中齋—宇津木靜區—林良齋—第四篇、中齋以後の陽明學派—吉村秋陽—山田方谷—横井小楠—奥宮慥齋—佐久間象山—春日潜庵—池田草庵—柳澤芝陵—西郷南洲—吉田松陰—東澤瀉—眞木保臣、鍋島閑叟等—結論—附錄一陽明學派系統—附錄二、陽明學派生卒年表

日本古學派之哲學 六版　一册　定價貳圓四十錢

目次—敍論—第一篇、山鹿素行—第二篇、伊藤仁齋及び仁齋學派—伊藤仁齋—中江岷山—伊藤東涯—並河天民—原雙桂—原東岳—第三篇、物徂徠及び徂徠學派—物徂徠—太宰春臺—結論—附錄一、堀河學派系統—附錄二、護園學派系統—附三、古學派生卒年表

合著書類目錄

哲學字彙　一册　定價壹圓

倫理教科書　五册　定價壹圓卅錢

編輯書類目錄

哲學叢書

第一卷第一集

目次—緒言(文學博士井上哲次郎)—倫理法の必然的基礎—(文學士吉田熊次)—實行倫理と宗教(文學士紀平正美)—哲學評論(文學博士

井上哲次郎)―新刊批評(同上)

第一卷第二集

目次―認識と實在との關係(文學博士井上哲次郎)ロッチェの哲學(文學士西晉一郎)哲學評論(文學博士井上哲次郎)―同上(文學士野田義夫)新刊批評(同上)

第一卷第三集

目次―哲學の科學及び宗教に對する關係(文學士虎石惠實)―認識と實踐、實在觀念と理想觀念(文學士森內政昌)二程子の哲學(文學士宇野哲人)―哲學評論(文學博士井上哲次郎)―同上(文學士野田義夫)新刊批評(文學博士井上哲次郎)

日本倫理彙編　　十冊　內六冊既刊

關係書類目錄

井上博士講論集第一編　佐村八郎編纂　　定價二十錢

目次—人種言語及び宗教等の比較に依りて日本人の位置を論ず—東西文化の差異を論ず、

同第二編同上

目次—歐洲哲學の近況—王陽明の學を論ず—大鹽平八郎の哲學を論ず—文學と教育の關係—國民英學會に於て—教育上に於ける迷信の害、

勅語衍義考證　三石寅吉編次　定價三十錢

井上博士と基督教徒　關皐作編輯　一册　定價二十八錢

同續編　一册　定價二十八錢

同收結編　一册　定價三十五錢

巽軒博士宗教論批評集　秋山悟庵編輯　近刊

井上哲次郎著述目錄

哲學と宗教	一册	定價金貳圓四拾錢
增訂國民道德概論	一册	定價金貳圓五拾錢
國民道德新論	近刊	
倫理と教育	一册	定價金壹圓五拾錢
教育と修養	一册	定價金壹圓七拾錢
社會と道德	一册	定價金貳圓八拾錢
人格と修養	一册	定價金壹圓八拾錢
倫理と宗教との關係	一册	定價金四拾錢